

IS ～無限の成層圏に舞う機竜～

ロボ太君G。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪意無き意思に傷ついてきた少年、織斑一夏。

姉が出場する第二回モンド・グロツソ決勝戦の観戦に行った彼は、突然何者かに誘拐される。

しかし監禁場所に突如として異形が現れる。

瞬間、彼の運命は無限の成層圏から機竜の舞う空へと向かう……。

5 / 13

一夏の神装機竜と詠唱譜を変更

目次

プロローグ

プロローグ (1) : 絶望の中で | 1

プロローグ (2) : 異界より来たる獣 | 6

プロローグ (3) : 機竜の舞う空へ | 12

第一章 : 「無限の成層圏」へ

第一章 (1) : 再び開かれた扉 | 19

第一章 (2) : 光の先、故郷という名の任務地 | 29

第一章 (3) : 神殺しの毒牙 | 38

第一章 (4) : 動いた者、蠢く者 | 48

第一章 (5) : 対暗部用暗部 | 57

第一章 (6) : 交渉 (前編) | 66

第一章 (7) : 交渉 (中編) | 74

第一章 (8) : 交渉 (後編) | 83

第一章 (9) : 親善試合、開戦 | 93

第一章 (10) : 『毒蛇の巨竜』対『霧纏の淑女』 | 102

設定資料 : 1 | 114

第二章 : IS学園

第二章 (1) : 入学試験へ向けて | 118

第二章 (2) : 入学実技試験 | 127

第二章 (3) : 初日 | 138

第二章 (4) : 依頼 | 149

第二章 (5) : 開幕、クラス代表決定戦 | 159

第二章 (6) : 『青い雫』対『幻想纏う飛竜』 | 169

第二章 (7) : 真紅の刃 | 180

第二章(8)：紅と青の決着、そして

191

第二章(9)：閉幕の剣舞

201

第二章(10)：それぞれの決着

211

第二章(11)：それぞれの道

224

設定資料：2

234

第三章：来たる者、招かれざる獣

第三章(1)：転校生

236

第三章(2)：強さの意味

245

第三章(3)：『竜』対『龍』

256

第三章(4)：特訓

267

第三章(5)：クラス対抗戦に向けて

278

第三章(6)：クラス対抗戦

287

第三章(7)：蛇竜、露見

297

第三章(8)：蛇竜蹂躞

307

第三章(9)：蠢く悪意

319

第三章(10)：声を上げるために

334

第三章(11)：折れて尚、強く(前編)

346

第三章(12)：折れて尚、強く(後編)

356

第三章(13)：襲撃者達

366

第三章(14)：帰還者達

378

第四章：異形の影

第四章(1)：橙の風、黒い雨

389

第四章(2)：濃緑の銃口

398

第四章(3)：不穏なる風

407

第四章(4)：降る雨、吹き抜ける風

418

第四章 (5) : 重なる不運	427
第四章 (6) : 専用機	438
第四章 (7) : 鳴り響く雨音	449
第四章 (8) : 力の意味	462
第四章 (9) : 風が止んだ日	474
第四章 (10) : 緊急報告	488
第四章 (11) : タツグ決定	502
第四章 (12) : 密会	516
第四章 (13) : タツグトーナメント	528
第四章 (14) : 一人のデビュー、二人のリベンジ	537
第四章 (15) : 決着、不穩	549
第四章 (16) : 黒雨の暴威	565
第四章 (17) : 悪夢の始まり	575
第四章 (18) : 悪イ正夢	594
第四章 (19) : 邪竜纏う偽刀	605
第四章 (20) : 過ちの生まれた場所	625
第四章 (21) : 後始末	642
第四章 (22) : 覚悟の在り処	657
設定資料 : 3	681
第五章 : 異形の巣	
第五章 (1) : 異界より来たる者達	684
第五章 (2) : 異国の空の下	699
第五章 (3) : 『巣』 攻略戦、前編	715
第五章 (4) : 『巣』 攻略戦、中編	730
第五章 (5) : 『巣』 攻略戦、後編	746

第五章(6)：戦い、終えて	767
第五章(7)：蒼い雫	784
第五章(8)：疑惑	802
第五章(9)：新たなる風、潜む暴威	818
第六章：終焉ヨブ神ノ獣	
第六章(1)：買い物	827
第六章(2)：海へ	844
第六章(3)：死線への序曲	859
第六章(4)：そして戦場へ	878
第六章(5)：迫る悪意	892
第六章(6)：導かれた終焉	908
第六章(7)：全力	923
第六章(8)：死力	935
第六章(9)：光と陰と(前編)	951
第六章(10)：光と陰と(後編)	964
設定資料：4	976
第七章：機竜舞う空の下	
第七章(1)：動き出す者達	981
第七章(2)：覚悟の形	994
第七章(3)：波乱の序曲	1007
第七章(4)：限りなく遠く、限りなく近い空	1022
第七章(5)：機竜の舞う空の下	1039
第七章(6)：新王国のとある夜	1052
第七章(7)：小さな決意	1065

プロローグ プロローグ（1）：絶望の中で

S i d e 一夏

「私の弟だからな。これくらい当然だろう」

頭の中にこびりつく、一言。

あの日、いろんなものがどうでもよくなり始めたのは多分この一言からだったと思う。

いや、実際にはその前から似たようなことを何度も言われていた。

この一言が決定打になっただけだった。

「クソツ!! どうして織斑千冬が出場してるのよ!」

「家族想いつて話じゃなかったの!?!」

だからか。この展開も特に驚くことはなかった。

何の事も無い。『本命』のために『付属品』を捨てることもないと、ただそれだけ。

控え目な叫び声でテレビを見ながら誘拐犯たちが混乱しているのを、大した感慨もなくどこか場違いな気持ちを持ってその光景を眺めていた。

「……要求には応じないってこと? ろくに何の交渉も無しに?」

主犯格と思しきISを纏った女性が首をひねりながらつぶやくけど、心底どうでもいい。

「ま、だったらコイツを生かしておく理由もないわね」

主犯格だろう女性が動けない俺の首に向けてナイフを突きつけてくる。

「まあ、姉か政府かは知らないけど。恨むんだったらそつちを恨みなさいね。」

私たちとしても、店子は店主の言うことを断れないわけだし」

銃を使わないのは音によって居場所がばれるのを防ぐためだろうか。あるいは、そもそも銃弾を使うような相手でもないと思われているのか。

「サヨナラ」

口を塞ぎながら、ナイフを首に当ててくる。

(ああ、ここで俺死ぬのか……)

首にあたるナイフの冷たい感触に、死を予感する。

「……嫌に静かね。アナタ」

主犯格と思われる女が不気味がるような、だがどこか警戒するような声で話しかけてくる。幸いなことに日本語なので何を言っているのかはわかるが、生憎とただの一中学生にそんな大それた仕掛けはできない。

「……まあ、いいわ。

アナタを殺して、私たちは早いとここを離ればいいだけだしね」

頭の中に浮かぶのは、それまで出会ってきた友人や大切な人たち。

(箒、鈴、弾、蘭、数馬、巖さん、蓮さん……)

走馬燈を見た気がした。

自分がこんなにもはつきりと経験することになるとは、思わなかった。

最初は親に捨てられた、らしい。

らしい、というのは単に俺が親のことを覚えていないから。それくらい俺が小さい時の話だった。

その次は姉が色々と頑張り始めた。

端的に言って、姉は優秀だった。優秀すぎるほど、優秀だった。

周りからはよく「お姉さんを見習って頑張りなさい」みたいなことを言われた。

最初はそうした。

姉は自分にとっても唯一の家族であり、尊敬もしていたから。

だけど、どれだけ努力しても、どれだけ結果を出しても、最後の言葉はいつも同じだった。

「さすが織斑千冬の弟だ」

言葉の節々は違うけど、意識してしまえば大体そんな内容だった。最初はよかった。姉のことは尊敬していたから。

だが、徐々に徐々に、その期待に応えられなくなるたびに、その言葉は形を変えていった。

「お姉さんを見習って、もっと頑張りなさい」

「あの姉の弟だ。きつとできるだろう」

こんな言葉が増えていった。

だが、この頃はまだよかった。

決定的になったのは、アレが出てきてからだだった。

IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』。

一応、最初は宇宙開発を目指して作られたらしいパスワード・スーツ。今現在では、飛行能力、絶対防御などの能力を有した極めて強力な兵器。

既存の兵器の中で見れば特出して強力だが、『女性しか使えない』というまっとうな技術者か科学者なら『欠陥』としか言いようのない原因不明の難点を抱えた奇妙な機械。

『女尊男卑』という風潮を生み出した元凶と言ってもいいだろう。

そんな風潮の中、『優秀すぎる』姉を持てばどうなるか。

「織斑千冬の弟だ。できて当然だろう」

「このくらい、まさかできないはず無いだろう」

「なんでできないんだ？ 手を抜いてるのか？」

勝手に期待され、期待に応えれば、それが当然と言わんばかりの言葉。応えられなければ、勝手に失望される。下手すると、「女に生まれれば良かったのに」なんて事さえ言われた。

そんな事の繰り返し。

次第に周囲の期待が、鬱陶しくなっていた。

だけど、それでもまだ頑張れた。

たった一人から、たった一言さえ言ってもらえれば。そんな淡い期待だけが、俺を支えていた。

だが間も無く、それさえも無くなることになる。

あれは……確か、剣道の大会で優勝した時だった。

ささやかな期待を持って、珍しく自分から電話をかけて、姉に優勝を報告した。

だけど返ってきた言葉は

「私の弟だからな。これくらい当然だろう」

この瞬間だったと思う。色んな事がどうでもよくなり始めたのは。どんなに頑張ったところで、どれほど結果を出したところで、結局は姉の名誉になるだけ。その癖、出せなかったら自分のせいになる。

さらに言えば、これらを素で言っているぶん余計に嫌になった。悪意ではなく、姉に対する尊敬とそれに伴う期待で言っている。

そして何より、唯一の家族であった姉ですら、それを肯定していた。

もう、努力する意義も理由も目的も見失っていた。

それからはずいぶんと生活が変わっていった。

まず剣道をきっぱりと辞めた。もう、同じことをしている限り、どう頑張ったところで姉の付属品扱いは変えられないだろうと考えたから。

それからは当時の数少ない友人の家でバイトさせてもらっていた。元より決して楽では無かった家計だったし、特にこれと言っておかしなことでもない。

もつとも。最大の目的は独立する準備を早々に始めることだったわけだけだ。

そんな生活になってから少しして姉が「何で剣道やめたんだ」という旨のことを聞いてきたけど、適当なことを言っでごまかしておいた。

その理由を理解してくれたのと言えば、箒や鈴、弾、蘭、数馬達と言った、友達だと心の底から言える間柄だった数名の人と、ごくわずかな大人たちだけだった。箒だけは色々あつてろくに会うことができなかったから電話だけだったけど。

だから、この大会も半ば形式的に来ていた。

ひたすら一撃で相手を屠るだけの試合を、一体どうやって応援しろというのか。

姉のことは尊敬しているし、養ってくれたことには感謝している。でも、それだけだ。

走馬燈の中にいた意識は、首に突きつけられていたナイフの冷たい感触が無くなったことで現実に戻された。

いったいどうしたのかと思ったら、何やら通路の奥から騒ぎ声が聞こえてくる。

「ば、バケモ……!!」

「く、来るなあ……来るなあああ!!」

悲鳴とも絶叫ともとれる叫び声が聞こえた次の瞬間だった。

ISを纏った女性が命からがらと言った様子で通路から出てきた。しかも、その身には決して浅くはない傷を負っている。

ナイフを突きつけてきていた女も、さすがに異常事態だと気づいたらしい。すぐにISを展開し、怪我した女性に近づこうとして——

「ギィエエアッ!!」

——異形の、バケモノの姿を見た。

プロローグ（2）：異界より来たる獣

S i d e 一夏

それは、異形だった。

見るからに硬質そうな体に、一對の羽を生やした異形。手には爪を備えており、同時に血に濡れていた。まるでどこかの神話から飛び出してきた悪魔か何かのような、そんな造形。

だけど、そんな造形よりもより鮮明に明白に、そこには恐怖を掻き立てるものがあつた。

「なんで……」

主犯格の女性が絶望に染まった声で叫んだ。

でも、声が出ただけいいだろう。少なくとも俺は出なかった。

「なんで、絶対防衛が効いてないのよ!!」

そう。バケモノの腕がISを纏った女性の腹部を貫いている光景なんてものを見れば、嫌でも恐怖が掻き立てられる。

「た、助け……」

さらに、逃げていた女性がああな化け物の爪を背後からくらい、そのまま動かなくなった。出血も多いけど、恐らくは気絶だろう。

そうこうしている内に、バケモノがこっちを向いた。あるいは、さっきの叫び声に反応したのかもしれない。

「ん、んの!!」

それに気付いたらしい主犯格の女性がとつさに武器を手にした。

ガガガガガガガ!!

直後に銃声が鳴り響き、二挺のマシンガンによる弾幕がそのままバケモノへと殺到する。

仕止めたと思ったのか、会心の笑みを浮かべつつもさらに銃撃を続ける主犯格の女性。しかし、その笑みも一瞬で凍り付くことになる。

「ギィエエエアツ!!」

咆哮とともに、化け物が翔けた。

二挺のマシンガンが吐き出す弾幕の中を、硬質な体表で弾きながらまるで意に介してないかのように進んでいく。さすがにバケモノも

無傷とはいっておらず、マシンガンの弾丸が当たった場所には傷が付いている。だが、その歩みが止まる事は無い。

弾かれた弾丸が跳弾して、其処ら辺の物に穴を開けまくっている。なのに、バケモノには穴が開かない。『ISは最強』だと信じている人たちにとっては絶望でしかない光景。

そしてついに……主犯格の女性の間近にまで、あのバケモノが迫っていた。

「!!!」

半狂乱になった主犯格の女性が声になつていない叫びをあげながら、マシンガンを放り投げ、何か別な武器を取り出した。

大の大人の身長ほどもある、長い筒状の装備。映画やアニメなんかに出てくるのと同じなら、あれはバズーカかなにかだろう。

だけどバズーカが撃たれることはなかった。バケモノの腕が、その武器を叩き落としたから。

「い……」

その叫びが最後まで紡がれることはなかった。バケモノが再び腕を振るい、主犯格の女性を一撃で倒したから。倒された主犯格の女性はひどい出血もあり、このまま放置すれば出血多量で死ぬのは想像に難くない。

だがそんなことを考えられたのも少しの間の話だった。

バケモノの目が、確かに俺のほうをとらえたから。

「……………ッ!!」

瞬間、俺は声には出なかったものの悲鳴を確かに上げていた。

だがこの時の俺が抱いていたのは、死への恐怖というのとは少し違う。未知の脅威への、少なくとも今この場では理解できないものへの恐怖。

一瞬だけ、空白の時間が流れた。

直後、未知のバケモノが俺のほうに歩みを進めてきた。

S i d e 千冬

「一夏ー！」

どこだ、どこにいる!？」

私は今、誘拐された弟の一夏を探していた。

情報を提供してくれたドイツ軍によると、今搜索している古びた工場跡のどこかにいるみたいだが、一向に見つからない。

そうして、時間だけが過ぎていく。

『M s. ブリュンヒルデ。こちらにはいません。』

そちらは?。」

「こつちにもいない。

真耶!。」

『すいません。見つかっていません!』

ともに搜索してくれているドイツ軍 I S 特殊部隊の部隊員達と、事情を断片的ながら把握し自ら協力を申し出てくれた日本副代表の後輩、山田真耶と連絡を取り合って搜索範囲を広げているが、芳しい結果は出ていなかった。

「クソツ……クソツ!!」

何よりも最悪だったのは、日本政府のバカが誘拐されたことさえ私に伝えず、さらにあるうことか誘拐犯たちと交渉さえ持たなかったということだ。

要約すれば、見捨てた、ということである。

私を、モンド・グロツソで優勝させる。そのためだけに。

何もかもが最悪だった。たった二人の家族一夏のために必死になってきたというのに、結果はそれがかえって一夏を不要な危険に晒す結果になった。時間だけが過ぎていき、一夏が見つからない。

それが余計に私を焦らせる。

ハイパーセンサーをフル稼働させ周囲をくまなく探るが、一夏が見つかるどころかそもそも人の生命反応そのものが見つからない。

そのままいくつかの倉庫を搜索し終えてしまった。相変わらず何の反応もないことに余計に焦りが出てくる。

「先輩、見つかりましたか!？」

「真耶！ そっちはどうした!？」

「こっちはすでに一通り搜索し終えました。

その……結果は、伴いませんでしたが……」

「いや、いい……。」

とにかく、残っている場所を探すぞ」

「はいー」

さらに聞いた話では、真耶は一通り担当場所を搜索し終えたため私に合流して搜索を続行するようにドイツ軍から言われたらしい。同時に、ドイツ軍のほうでも搜索を終えた隊員たちは極端に消耗していない限り、他の隊員たちと合流して搜索を続行しているとの事だった。

確かにドイツ警察とドイツ軍の警備の中を突破して一夏を誘拐している以上、誘拐犯が単独犯である可能性は低く、同時に何らかの後ろ楯があると見た方が自然だろう。加えて、それにカスタマイズしたISを装備している可能性を現状では否定できない。そんな現状である以上、完全に一人で行動するより複数名で行動したほうが見つけた際の行動の幅がより広がるだろう。

だが、次の倉庫の探索中にそんな考えは吹き飛ぶことになる。そこは妙に破壊されており、所々自然に崩壊したとは思えない施設だった。

その中には、より事態を厄介にしかねないものがあつた。

「ん……？ なっ!!」

「こ、これって……こんな事って……!？」

そこにあつたのは、複数の死体。しかも、おおよそ私たちの常識では考えられないものが転がっていた。

「あ、ISを展開したままの……死体!？」

「……まだシールドエネルギーが残っている、だと……？ なら、なぜ……?？」

私としても信じがたい光景であつたが、何よりも横にいる摩耶が酷かった。顔が青ざめている。

だが、責められるものではない。少なくとも直接人の死体を見たこ

とはないだろうし、真耶の性格からしてその手の物に耐性がないのは想像に難くない。

さらに付け加えれば、ISを纏っており、なおかつ十分にエネルギーが残っている状態でのそれだ。ISが解除されている状態ならともかく、不可解に過ぎることが多い。それがかえって恐怖を煽り立てる。

かくいう私も、あまり平気とは言えないのだが。

「せ、先輩……？」

あれ、なんですか……？」

そんな私の思考も、後輩からの問いかけに中断された。

真耶が示した方向を見ると、そこには異様な『何か』がいた。

「な……なんだ、あれは……？」

そこにいたのは、硬質そうな体に、一対の羽を生やし、手に爪を備えていたバケモノ。しかも、近くにISを纏ったまま致命的な傷を負っている女が横たわっており、同時にバケモノの爪は血に濡れていた。

そこにいるバケモノがISを纏った誘拐犯の一員と思われる女たちを倒したという結論に思い至った。

その結論が自分でも信じられない、というのが本音だったが。

「せ、先輩！」

真耶が声を上げた。

言われなくてもわかっている。バケモノの目が確かにこちらを捉えている。

「真耶、後ろに下がれ。」

私が前が出る」

「はい……」

悔むことはできない。相手はISを倒せる可能性の高いバケモノだ。

だが、私が前に出つつ真耶に後ろから援護射撃をしてもらおうというのは、決して間違った選択ではないはずだ。

『ちーちゃん、聞こえる!?!』

「…………束!？」

今は取り込んでいる、後にしろ!!」

バケモノ相手に警戒を強める中、古い付き合いになるISの開発者『篠ノ之束』からの通信が入ってきた。

要件が何にせよ、今は目は前の敵に集中すべきなのだが…………。

『いつくんが誘拐されたんでしょ!』

監禁場所、その倉庫だよ!』

「なん、だと…………」

私の頭に、最悪の可能性が思い浮かんだ。

一緒に捜索していた真耶にも聞こえていたらしい。顔がさらに青ざめている。

『私も今そっちに向かっている。』

とにかくその訳の分かんないのを何とかして!!』

言われるまでもない。

「…………真耶、付き合ってくれるか」

「はい!」

私達は急接近してきたバケモノに対し、各々の得物を構えて迎撃態勢をとった。

プロローグ（3）：機竜の舞う空へ

—千冬達の到着より少し前—

S i d e 一夏

バケモノがこちらに迫ってくる。

手足を、翼を広げ、今にも襲い掛かってきそうな様子だった。

だが、不幸中の幸いなのか、壁が元々古びていた上にさっきの跳弾でかなり穴が開いており、さらに後ろから何かに引つ張られるように転んでいた。

そしてついに壁が限界を迎える。

バキヤアアアア!!

壁が崩壊したが、問題はその先だった。

壁の向こう側は異様な空間と化していた。中空に光球が浮かんでいる。しかも、その光球自体が周りの物を徐々に飲み込むように吸引していつているみたいで、俺もその光球に引き摺られていた。

それはあのバケモノも同じようで、ひたすら踏ん張っているように見える。

一時的だけどバケモノの歩みが止まり、俺との距離が開く。

だが、同時に俺は着実に光球との距離が詰まっていた。それもそのはずで、俺は手足を縛られているため

そして、ついに——

「う、うわああああああああ!!!!」

——俺は光球に飲み込まれた。

「あ……ぐっ……!!」

体が打ち付けられ、そのまま転がる。

そのまましばらく転がることになったが、幸いなことに手足を縛っていた鎖がなぜか切れており、止まった直後にすぐに外すことができ

だが、問題は他にあった。

「な……な……な……」

さつきまで一体だったバケモノが、二体いた。

この時は、控え目に言って死んだかと思った。

「……ノクト、幻神獣^{アピス}の反応があったのはこちらであつてますか？」

「Yes. ですが、少々厄介なことになつてそうですね」

「なにになにー、どういうことー?」

その時、後ろの方から三人分の女性の声が聞こえた。でも、声の位置からしてまだ遠い。仮にこっちに来るとしても、時間がかかる距離に感じられた。

それに加え、そもそもあのバケモノが二体。冷静に考えると本当に助かるのかどうかは怪しく思えてくる。

「私のドレイクで探索したところ、なぜか突然人の反応が出ました。

しかも、幻神獣の至近距離です」

「……は? それってかなりマズイじゃん!」

「ああ。なぜいきなり反応が出たのかはさておき、今まで隠れていたにしろ、他の理由があるにしろ、とにかくできるなら確保しなければな」

三人組、と思われる声がさらに近づいてくる。

バケモノも気付いたらしい。声が聞こえるほうに顔を向けていた。

「……ガーゴイル二体、か。」

「私たちだけだと厳しいな」

「Yes. 早急に確保し、リーズシャルテ様が来るまでの時間稼ぎをすべきかと」

「ルクつちが居てくれたら楽だったんだけどねー」

「No. 病み上がりの人に戦闘を強いるのはいくら何でも止めるべきかと」

「……さて、二人とも。」

もうそろそろ、だ」

さらに近づいてくる声。

同時に、二体のバケモノの内片方が飛んだ。そのまま上昇し、声の

した方に高速で向かっていく。

しかし、そこで俺は半ば信じられない光景を三度目のあたりにすることになる。

「ギエエエアアアア!？」

声のした方からバケモノに向かつて、一筋の光が走った。光はバケモノの一部を呑み込み、その片腕と片羽に確かなダメージを残していた。

さらにそれだけに終わらない。今度は同じ方向からオレンジみたいな色の人型っぽい何かが飛んでくると、それがさつきよりも小さな光弾をバケモノに浴びせた。さすがに倒せてはいないものの、それにダメージは通っているように見えた。

ついさつきISが蹂躪されるのを見た直後だっただけに、この光景は衝撃的だった。

だが、二体のバケモノもやられるままじゃない。軽傷だった片方は飛び立ってさつきのオレンジの何かを追撃し始め、よりダメージが大きいと思われるもう片方は……最悪なことに、俺のほうを向いてきた。

だが、バケモノが俺に襲い掛かる前に、バケモノと俺の間に今度は緑色の何かが浮かび上がっていた。よく見れば、それは四足であること以外は人型の何かであることが窺えた。

「ギ!？」

バケモノが一瞬驚いたように声をあげるが、対して緑色の何かは冷

静に

ハウリンググロア
「機竜咆哮」

緑色の何かが円形の光を出して、バケモノを弾き飛ばした。

そのまま緑色の何かが俺のほうに振り返ったが、そこにいたのは

「無事ですか?」

俺とそこまで大きく年は違わないであろう、女性の姿だった。

「え……あ……」

「大丈夫そうですね。それでは、離脱しますよ」

「え?」

束の間の後、呆けた俺を半ば無視する形で機械の腕で俺を抱き抱えると、そのままバケモノから遠ざけるように走り出した。

だが、速度ではバケモノのほうが上らしい。多少のリードはあったけど、すぐに追いつかれそうになってきた。

だけど、その心配は杞憂に終わる。

再び大きな光弾と小さいが大量の光弾が、バケモノに向かって飛来していた。倒すには至っていないものの、十分にバケモノを足止めできていた。

「す、すごい……」

「Yes. ですが、長くは持ちません。さあ、少し静かにしてください。」

少し飛ばしますよ」

「え、え?」

思わずつぶやいた直後、緑色の機体を操っている人は思いつきり駆け出した。

その後ろでは、相変わらず激戦が続いていたが、その戦局はおそらく大きく動いていた。手負いのほうのバケモノが、なんの前触れもなく飛来した一際大きな赤い光弾に飲み込まれ、それっきりその姿を現すことは無かった。

「……で、なんで私が彼の事情聴取担当なんですか!？」

「ごめんなさい。」

この前の反乱の時の怪我が治りきっていない人が多くてね」

「だからって……はあ。もういいです……」

「まあまあそう言わないで。」

万が一の事態のためにファイルファイにもついてもらうから」

どうにも俺の事情聴取関係でもめているらしく、銀髪の女の子が抗議していた。最終的には銀髪の女の子が諦めたように溜息を吐いていたけど。

その後、緑色の機体に抱えられた俺はそのまま豪華な施設へと連れられていた。その後、責任者らしい人が出てきて緑色の機体に乗っていた人から事情を聞いていたけど、何か都合が悪く銀髪の女の子を呼んだらしい。後、フィルファイという人もこれから来るらしい。で、来た後はとりあえず事情聴取が待っているらしい。

だけど、色々と質問したいのはこっちも同じだった。そもそも、あの光球に飲み込まれた後から何が何だかさっぱりわからないことになっている。さらに、周りにいるのは外国の人ばかりというので自分でもわかるくらい委縮していた。こんな状況の中で唯一幸いなのは、相手の外国の人たちが日本語がわかるという一点に尽きるだろう。

そうこうしているうちに、ピンク色の髪をしたゆつくりとした雰囲気気の女性が入ってきた。この人がフィルファイという人らしい。

「……さて、いろいろと聞きたいことはありますけど。」

とりあえず、名前を聞いてもいいですか？」

「織斑一夏、です」

「織斑さん、ですか……」

銀髪の女の子が無難に名字で呼ぼうとしたけど、この時の俺は色々あって混乱していたんだと思う。

だからか、つまらない意地を張っていた。

「あの……」

「……？　なんですか？」

「よければ……名前のほうで、呼んでももらえませんか？」

その……名字で呼ばれるのは、あまり好きではないので」

銀髪の女の子は少し怪訝そうな表情になったけど、何かを察してくれたらしくすぐに「わかりました」と返事してくれた。

「では、一夏さん。」

私はアイリ・アーカディアです。気軽にアイリでいいですよ」

「アイリ、さん……」

「はい。では、一夏さん。」

まず、なんであんなところに丸腰でいたのか説明してもらえますか？」

「は、はい……」

それから、俺は今回の一連の出来事について話し始めた。

ドイツで行われた第二回モンド・グロッソの観戦に行ったこと。

そこで観戦中に誘拐されたこと。

誘拐されてから、姉か政府かに見捨てられたこと。

そこで現れたバケモノと、それがISを纏った誘拐犯たちを殺した事。

そのすぐ後に出現した謎の光球に飲み込まれた事。

気が付いた時にはあそこにおいて、二体のバケモノがいたこと。

そして、さっきの人たちが来て戦闘になったこと。

戦闘になった後は、さっきの緑色の機体を操っていた人が話していた内容とほぼ同じであること。

一通り話し終えたところ、アイリさんは「信じられない」という気持ちで凄くよく伝わってくる表情をしていた。

と言っても、これについては話している俺自身も信じられないような内容のほうが多いくらいなので仕方がないのかもしれない。

「……とりあえず、一夏さん」

「はい」

気を取り直したようにアイリさんが話を再開した。

「まず……あなたがバケモノと呼んだものが何なのか、わかりますか？」

「わかりません」

「では、あなたがISと呼んでいるものは、世界的に一般的なものですか？」

「細かい部分とはにかく、名前だけでいえば」

「では、そうですね……」。

あなたが緑色の機体と言っていた、あれが何だか。わかりますか？」

「……わかりません」

そこで再びアイリさんが困ったような表情を見せると、そのまま天を仰いだ。対照的に、もう一人のフィルフィさんの表情はほぼ変わらなかった。

しばらくして、固まっていたアイリさんがようやく気を取り直したように再び俺に向き直り、再度話を再開してくれた。

「まず、一夏さん。」

あなたがバケモノと言っていたのは、幻神獣^{アピス}と呼ばれる、詳しいことは不明の敵です」

「はい」

「次に、あなたが緑色の機体と呼んでいた機体。

あれは、装甲機竜^{ドラッグライド}と呼ばれる古代兵器の一機種、ドレイクと呼ばれる機体です」

「……は、はい？」

「そして、最後に。」

あなたが言ったISと呼ばれる物には存在していません」

「……………え？」

今度は俺が固まる番だった。

ただ、単純に信じられなかった。

幻神獣と呼ばれる敵。装甲機竜と言う古代兵器。そして——存在しない、IS。

それは、つまり——

「もし、あなたが言ったことが全て真実だとするなら。」

ここは、あなたにとっては、それこそ異世界とでも呼ぶべき場所なのではないか

——本当に信じがたいけど、俺は異世界に来てしまったらしかつた。

第一章：「無限の成層圏」へ 第一章（1）：再び開かれた扉

アテイスマータ新王国城塞都市^{クロスフィード}、王立士官学校内機竜実技演習場^{アカカデミー}。
やっと暖かい風が吹き始めた時期の、深夜と早朝の間と言つて差し支えない時間。

ゴウツ!!

本来なら使っている人間などまだ誰も居ない時間だが、その日の演習場には機竜を纏い飛行訓練に精を出す者がいた。纏う機竜はワイバーンなどの汎用機竜とは一線を画する造形であることが見てとれる。

だが、何より目を引くのはその白さだろう。鮮烈な白の輝きを放つ機竜だった。

しばらく白い機竜は飛んでいたが、その内に眼下に何かを見つけたらしい。速度を緩めつつ、その場所に降りていった。

S i d e 一夏

「アイリさん、こんな時間にどうしてこんな所に？」

俺―織斑一夏、改め、影内一夏―は、普段行っている訓練を途中で切り上げ、普段のこの時間には、あまり見ない人に話を聞きに降りた。アイリ・アーカディア。俺がこの世界に来てから今に至るまでずっとお世話になっている、恩人の一人。

だけど、アイリは普段はこんなに早く起きることは無いはず。何事かと思つて話を聞くと――

「兄さんからの伝言を伝えに来ました。」

至急、指定した場所まで来て欲しいとの事です」

――との事だった。

「……ルクスさんから、至急？」

何かあったのか？」

「詳しくは私も聞いてませんけど、兄さん自身がわざわざ王都から来るくらいですから、また何かしらの厄介事だと思いますよ。私もなぜか一緒に来るように言われましたし。」

それと、レリイさんには私と兄さんの方からもう話しておきました。準備が終わり次第、すぐに行きますよ」

「ありがとうございます」

さすがはアイリさん。手際がいい。

「このくらい、兄さんの無茶に付き合わされて慣れましたよ」

「は、ハハハ……」

この一言には苦笑いするしかない。そして、なんで一言も言っていないのに言いたいことが分かったんですか。

「最近は少しまともになってきましたけど、結構顔に出ていますよ」

「……そこまで、ですか」

さすがにそこまで分かりやすいとすると少し凹む。

そんなことを考えていたら、不意にアイリが表情を柔らかくした。

「まあ、そんなに気にしなくていいと思いますよ。」

表情に出るのは私や兄さんとかの、一部の人達の前だけですから「それを聞いてほんの少し安心しました」

そんなことを言いつつ、お互いに準備を整えていく。と言っても、何度も遠出をしたことがあるのでそこまでの時間をかけることも無かったけど。

その後はさして時間をかけずにお互いに準備を終え、そのまま用意されていた馬車に向かう。

同時に、挨拶も忘れない。

「お久しぶりです。ルクスさん」

「久しぶり、一夏。」

元気そうで何よりだよ」

この世界に来たばかりのころから、今でもお世話になっているもう一人の人。

こちらの生活の基盤を用意してくれた人でもあり、最初の機竜操作

の師でもある大恩人。

「申し訳ないけど、詳しい説明は現地についてからじゃないと出来ないんだ。」

だから、とにかく今は先を急ごう」

多少不安に思う部分が無いわけでは無いけど、そう言われればそうする他は無い。

そのまま馬車に乗り込み、目的地を目指して出発する。

この後待ち受ける出来事を、俺はまだ知らない。

S i d e アイリ

「まったく……兄さんにも困ったものですね。連絡の一つも寄越さな
いでいきなり来て、すぐに来いなんて。学園長がレレイさんじゃな
かったら絶対に無理でしたよ。手続きの手間という意味で」
「ご、ごめん……」

でもまあ、兄さん自身が無茶な事をするのはいつもの事ですけど、
私達にまで能動的にそれを言うのは最近では稀な事です。何か、本当
に大変な事態になっているのかもしれない。

とは言っても、今はまだ何もできません。できることと言えば、馬
車に揺られつつ到着を待つくらいです。

「しかし……本当に急ですね。」

それに、早急にと言っている割には機竜ではなく馬車ですし。本当
に何があったんですか?」

「私は機竜が使いませんし、馬車なのはわかりますが……。」

でも、戦力を要する問題だけだったら私がついてくる意味はありま
せんし。確かに、気になりますね」

「ざつきも言ったけど、今はまだ言えないんだ。」

着いたらちゃんと説明するよ」

道中、少しばかり今回の呼び出しについて話しましたが、やはり教

えてもらえませんでした。

けれど、だからこそはつきりした事もあります。

この案件は、非常に機密性が高い。

言い換えれば、それだけ重要な案件だということ。

そうこう考えているうちに馬車が止まり、馬車での目的地までは着いたみたいです。

ですが、終点ではありませんでした。どうも、ここからは機竜を使っていくみたいです。私は一夏に連れて行って貰う事になりましたけど。

「一夏、アイリの事お願いできる?」

「お任せ下さい」

「一夏、お願いしますね。」

どうも、私の兄は私を乗せたくないみたいなので「

「アイリ……ちよつとは手加減してよ……」

兄さんが文句を言ってきましたけど、聞きません。

確かに一夏に乗せて行ってもらえるのは少し嬉しいですし、それはほんの少しは感謝しますが、私だって文句が一つもないわけではな
いんですからね。

この割り当ても、万が一機竜での移動中に敵に襲われた時のためでしょう。兄さんの場合はバハムートでもワイバーンでもとにかく相手が自分が接近するとう場合が多いです。言い換えれば攻撃を受けやすいということでもあります。大抵はその後兄さんの反撃が突き刺さるんですけど。反面、一夏は近接特化という意味では兄さんと変わりますが、三種の特殊武装のおかげで多少ではありますが射程は兄さんよりも長く、さらに言えば速度関係はリロード・オン・ファイア暴食での時間加速でもしない限りは上回ってすらいるくらいです。

つまり、兄さんが敵の相手をしている間に私は一夏と一緒に逃げろということでしょう。勿論、私自身が戦えない以上は、この人数のみで行軍するのにこの割り当てが最適なのは理解できます。

ですので、この一言はささやかな仕返しです。私に心配ばかりかける兄さんへの。

S i d e 一夏

それなりに久々に会うにも関わらず、相も変わらぬ兄妹のやり取りに思わず微笑ましい気持ちになる。

少し気分が解れると同時に、機竜でアイリさんを乗せていくと言われた事から今回の案件に関しては少し想像できたことがあった。少なくとも行軍中には幻神獣アピスにでも遭遇するか予想外の襲撃でもない限り、戦闘になる可能性は低いということ。

アイリさんを機竜で連れていくという、実質的に一人が非常に戦いにくくなる手段をとっている時点で、それは確実だと思えた。

「それじゃ、行こうか。」

一夏も召喚して。終わったら、先導するから」

「はい」

ルクスさんがワイバーンの機攻殻剣ソード・デバイスを抜剣し、出発を告げた。

「——来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、《ワイバーン》」

俺も自分の機攻殻剣を抜き、その詠唱符バスコードを唱える。

「——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、《アスデーグ》」

S i d e アイリ

一夏と兄さんが機竜を召喚し、一夏は兄さんに促されるまま私を両手に抱えました。

「それでは一夏。」

改めて、エスコートお願いしますね」

「はい。それでは、失礼します」

間もなく兄さんの先導に従い、私を抱えたまま緩く加速しつつ飛ん

でいきます。恐らくはできるだけ負担にならないようにしてくれての事なのでしょうが、その気持ちは素直に嬉しいです。

移動については、目的地までさほど時間をかけることもなかったです。

そこには、簡易的なテントのようなものがいくつか張られており、機竜の整備も簡単なものならできる程度に整えられていました。

だけどそこを見たのは一瞬のことで、私の視線はその先にあるものに釘付けになりました。

「……え？」

そこにあつたのは、空中に浮かぶ光る球体。

明らかに自然の現象ではないことが見て取れる、異様な光景。

「これは……一体……？」

そう呟いた直後、あることを思い出した。同時に、なんで私と一夏を呼んだのかも分かった気がしました。

そう、私と一夏が初めて会ったあの時に聞いたこと。

「まさか……!?!」

私を抱えたまま見ていた一夏も気付いたようです。いえ、むしろ私の想像が正しければ、当事者である以上、私よりも先に気付くのも当然なのでしょう。

私と一夏の反応を見るのと同時に、兄さんが頷いてから話し始めました。

「二人を呼んだのは、あの光球について聞くためだよ。

……二年前、一夏が来た時についてのことも含めて。そして、これからあれをどうするのかも、話さないといけないしね」

Side 一夏

あの光球を飛んだまま見た後、俺とアイリさんは敷設されていたテントの中の一つの前まで案内され、機竜の接続を解除してから中に入ることになった。

「ああ、二人とも。来てくれたか」

「リーズシャルテ様？」

「リーズシャ様、どうしてここに？」

テントの中には、新王国の現王女であるリーズシャルテ様がいました。今は学園を卒業し、前に話を聞いた時には基本的に王都で政務に精を出す生活と言っていたはずですが。

その人がいるということは――

「久しぶりに会ったところいきなりで悪いが、単刀直入に言わせてもらおう。」

今から話すことは新王国の中でも一部の人間しか知らない、最重要機密事項の一つだ。まずはそれを理解してほしい」

――やはり、機密だった。

「まず、あの光球について。」

あれは、数日前からこの場所に発生しているんだが……実のところ、今回が初めてじゃないんだ」

「初めてじゃない？」

もしかして……二年前の」

「それもだけど、もっと最近の物もだよ」

アイリさんの疑問に対しルクスさんがそう答えると、リーズシャルテ様が一回頷いて続きを話し始めました。

「ルクスの言う通りでな。具体的にはここ一か月くらいの間で大小様々な規模の光球が見つかっている。」

今は、関係者の間で暫定的に『球体』^{スフィア}と呼ぶことになったんだが……この『球体』、最近のになればなるほど持続時間が長くなってきているんだ。

発見された当初のは精々長くて十分くらいだったらしいんだが、今日の前にあるのはもうすでに数日存在し続けている」

「そんなに、長く……」

思わずつぶやいた俺に対し、ルクスさんがさらに続けた。

「さらに言うと、『球体』は別に新王国だけの問題じゃない。クルルシファーさんとメルから、ユミル教国でも確認されているって情報も

入っているんだ」

「そして、発生しているのがこの二国のみだとは考えにくい。

現に、ヴァンハイム公国でも似たようなのが見つかっているらしい」

そこまで話すと、二人は一旦話を切って、今までよりもさらに真剣な表情になった。

「で、ここからが本題なんだが。

あの球体が発生した直後に、新王国の武官が何人か巻き込まれてな……。

ひとまず落ち着いた後に周囲を確認したところ、光球は存在したままだったらしいんだが、その周辺が全然違ったらしくてな。最初は同じように森の中だったんだが、ドレイクで色々調べたところ、明らかに新王国では聞かない言葉がいくつも聞かれたそうさ。

例えば、そう……：IS、とかな」

「……!!」

分かってはいたけど、やはりその単語が出てきたか。

「その後、再度『球体』の中に突入したところ無事新王国に戻れたらしい。怪我也何もなく、これといった問題も起こらなかったとのことだった」

その時の新王国の武官たちが無事だったことに一安心したけど、そうなるとう度は聞き捨てならない単語が出てきたことに対し気が向くことになる。

「……一夏、アイリ。

二人に聞くけど、二年前の一夏に関する調書は何も嘘偽りはなかったんだね？」

「はい」

「勿論です」

ルクスさんからの問いかけに、二人そろって答える。

そこで一回話は途切れ、少しの間沈黙が支配した。

沈黙を破ったのは、リーズシャルテ様だった。

「実は、この前の軍議で向こうの世界に調査隊を派遣しないか、という

話になってしまったんだ。

で、その先遣隊として、一夏に白羽の矢が立ってしまって、な……」
珍しいくらいに歯切れが悪く、リーズシャルテ様が言った。
さらに、補足するようにルクスさんが続ける。

「今日アイリに来てもらったのは一夏の調書についての確認のため。
と言っても、念のためっていう意味合いが強いんだけど。

今回『球体』に関していろいろ調べていくうちに、どうしても一夏の調書について目が行った執政官がいてね。向こうの世界の出身者っていうのもあつて最小限の調査人員として最適じゃないか、なんということまで言い出し始めたんだ。出来れば僕が行くか止めるかしたかったんだけど……。

目的としては幻神獣が向こうの世界にいるかどうかの調査。もう一つとして、機竜が流れていないかどうかの確認。

ラフィ女王からは、行く場合は幻神獣のことを最優先にするように仰せつかっているよ」

最後にリーズシャルテ様が「機竜のこと以外はいつでもいいなんて言い出した執政官については黙らせたがな」と言っていていったん締めくくっていた。

そこで、再びルクスさんが話し始めた。

「一応、この話はまだ正式に決定したわけじゃない。拒否したいならできるし、僕としても一夏に無理強いするようなことはしたくない。それに、今はまだ一緒に行ってくれるメンバーが決まっていないし……」

「ルクスさん」

この話が出た時点で、ルクスさんが躊躇うのは分かっていた。自分が無茶なことをするのはとにかく他の人にそれを求めるのは滅多にないのも、今までのことを考えれば分かることだった。

隣のアイリさんが少し不安そうにしてるけど、何も言わない以上はわかっていろいろだろう。

「俺が影内一夏っていう新しい名前をもらったその時から、こここそ俺の帰る場所であり、守るべき場所です。任務を与えられれば、確

実に遂行し、帰ってきます」

当時、怪しさしかなかったであろう自分を受け入れ、居場所を与えてくれた人たち。

この人たちと出会わなかったら、今の俺は居なかった。

「ですので、何も気にすることはありません。

どうぞ、ご命令を」

少し、ルクスさんは目を閉じて逡巡して。

ややあつて開かれた目は、真っ直ぐ俺を見つめていた。

「一夏、任せたよ」

「お任せください」

第一章（2）：光の先、故郷という名の任務地

S i d e 一夏

「……行ってくれるのか、一夏」

リースシャルテ様に問われるが、迷わず頷く。

「一夏、あれほど言ったんです。

絶対帰ってきてくださいいね？」

「勿論です」

アイリさんが普段と変わらぬ調子で、ただどこか威圧感にも近いものを出しながら話しかけてくる。

でも、心配してもらえていると思うと嬉しかった。

「リースャ様」

「分かっている」

その一方で、ルクスさんとリースシャルテ様が何かを確認するように頷きあった。

「一夏、出発日時やその他諸々についてはこの後細かく決めるぞ。

勿論出来る限り最大限のバックアップはさせてもらう。さすがに同行するメンバーについてはどこまで出来るかわからないが、出来るだけ伯母上にも掛け合ってみよう」

リースシャルテ様はそう力強く宣言してくれた。

さらに、ルクスさんも――

「僕としてもいざという時は出来るだけ駆けつけられるようにするから。」

一夏、あんまり無理しないようにね」

――と、心強い言葉をくれた。

とは言っても、やはり各国の最高戦力である『七竜騎聖』。アティスマータ新王国での最高戦力の一人でもあるルクスさんを、無闇にいつ閉じるかもわからない『球体』^{スライア}の向こう側に行かせる訳にも行かない。となれば、ルクスさんが来る場合は多少の無理を押し通すことになってしまうんだろう。

やはり、出来る限りのことはやれるように俺自身も備えなければ。

そんなことを考えていると――

「一夏。一応私からも言っておくが、お前も今は特級階層エクススクラスの、それも神装機竜を持つ機竜ドラッグナイト使いなんだ。

新王国は今でも優秀な機竜使いが不足している。私たちとしても、お前ほどの機竜使いを邪険にしようとは思わないし、お前が仲間であってくれる限りは全力で助けさせて貰う」

――まるで念を押すかのようにリースシャルテ様は言った後、さらに思い出したように付け加えた。

「ああ、それと。」

一夏、キメラティック・ワイバーンの操作は覚えているか？」

「キメラティック・ワイバーンですか？ 多分今でも操作できると思いますが……」

質問の真意はともかく、確かにあの機竜の操作はリースシャルテ様ほどじゃないにしろ出来るには出来る。

というのも、機竜操作を覚えてまだ間もないころに、色々あってリースシャルテ様のキメラティック・ワイバーンを使うことになった際に教わっていたからだ。

そして質問の返答に満足したのか、リースシャルテ様はわずかに微笑みながら、満足そうにさらに付け足した。

「そうか。」

実は新しい機竜を開発しているんだが、今回の任務にうってつけじゃないかと思つてな。一夏さえ良ければ、持つて行かないかと思つてな」

「……リースシャ様、今度は何を作ったんですか？

物によっては、さすがに今回の任務で使わせるわけには……」

すかさずルクスさんがツッコむけど、リースシャルテ様は自信満々に「大丈夫だ」と言つてそのまま続けた。

「今回のキメラティック・ワイバーンの基礎的な部分を基に、ワイバーンとドレイクを掛け合わせたんだ。ワイバーンの戦闘力も若干強化されたうえ、ドレイクの特装備も扱えるようにした機竜だ。

今回の任務の先遣隊は、おそらく小規模なものになるだろう。そん

な状況下で、できることが多い機竜と言うのはそこまで悪い選択肢ではないと思つてな」

確かに、リーズシャルテ様の言うことにも一理ある。

異世界なんてところにいつ閉じるかもわからない『球体』を通つていく以上、帰れなくなつてしまつたら新王国全体の戦力に関わりかねない大部隊を行かせることは出来ない。だが、幻神獣の総数も分からず、最悪の場合として神装機竜の流出も考えられる以上、それなりの戦力を用意しなければならぬ。

更に言えば、二年前の時点で俺はすでに幻神獣らしき化け物に向こう側で見ている。いるであろうという予想がつく以上、戦闘は避けられないと考えるのが妥当だろう。

となれば、上級階層か特級階層を中心にした少数精鋭化は必然だろうし、さらに向こうの世界のことを多少なりとは言え知っているというの大きい。

改めて自分が選ばれた理由を自覚しつつ、さつきリーズシャルテ様が言った機竜の利点を考える。

確かに、ドレイクのような特装型の機竜の有無は任務の成功率に多大な影響を及ぼす。それは今までの経験から身に染みてわかつていた。だが通常のドレイクは飛べず、向こう側のISは基本的に飛べる。あつた方がいいのは確かだが、そのままでは少々不安に思う部分もある。

そこにドレイクと同等の特殊装備を備えたワイバーンがいればどうか。飛行により高い移動能力を確保しつつ迷彩を使い、探査も行える。確かに偵察役としては適任だろう。

欠点を上げるなら、操作難易度の高さ。前例としてキメラティツク・ワイバーンは機攻殻剣二刀流という前代未聞の操作方法も相まつて正直操りづらかつた。

だが、一応操作できるのであれば十分選択肢になりうるだろう。ここで断る大きな理由は無い。

「後で詳しい仕様を教えてください。それで決めようと思います」
「分かつた。じゃあ、これに関してはいったん保留だな」

「他にも決めなきやいけないことはあるし、そつちを決めちゃおうか」
とりあえず機竜のことはいったん置いておくことにし、他の優先事項を決めておく事になった。出発日時や向こうでの行動、何かしらの組織に目を付けられた時の対応等々。

「じゃあ、決めていくぞ、まずは……………」

諸々の方針を決め、ルクスさんやリーズシャルテ様を含めた関係者皆が準備を済ませた後。

結局、現地である向こうの世界に、常時滞在することになったのは俺一人という、納得出来るような出来ないような結果となった。

理由としては、先遣隊の目的があくまで調査であると言うこと。名目上ではあるが、個人での対処が不可能と判断されるほどの敵と遭遇した場合は素直に増援を要請しろと言う意味である。そのためこの世界の『球体』付近には、周辺からの侵入者対策と言う意味合いも多分に含んでいるが、新王国の上級階層かそれ以上の機竜使いを中心とした部隊が常駐するとの事だった。また、何かしらの交渉ごとになった際もすぐに連絡し、安易に結論を急がないようにとも指示を受けている。

無論、前提として出来る限り向こうの世界の人に被害が及ぶような事態は避けなければならないが。

しかしそれでも不安は残る。何より、竜声を介して通信したとしても来るまでに時間差が発生するのは避けられないし、何らかの手段でそれも妨害されるかもしれない。そもそも、竜声の範囲外に居た場合は通信そのものが出来ない。

やはり新王国の執政官たちは異世界に対し懐疑的な思いを多分に感じているらしい。それでも派遣が行われるのは、ラファイ女王陛下の人柄ゆえだろうか。

出発時刻は今日の深夜。それまでに最終的な準備を済ませつつ、普

段お世話になっている人たちに任務でしばらく離れることを告げる。

以前にもある程度長期の任務を受けることはあったが、やはり今回の任務はそれらの比較にならないほどの長期間に及ぶということもあってそれなりに色々言われることが多かった。

最も、そのほとんどが総じて身を案じてくれるものであったり、激励であったのは嬉しかった。

そして、出発まで後少しの時刻。

完全に日が落ちた深夜。空を見上げれば星空が見える。

結局、向こうには俺のアスディークの他に、リーズシャルテ様が製作したもう一機の機竜も持って行くことになった。

操作は確かに少々難しく感じたけど能力的には悪くなく、特に飛行しつつ索敵も行えるというのは魅力的だった。アスディークは飛翔型の機竜ということもあり、サポート能力を持つ機竜の存在は大きい。しかも、リーズシャルテ様の計らいで武装や性能のバランスをアスディークに近づける形で調整してもらえた。もし仮に突発的な戦闘になっても、それなり以上の対応が可能だろう。

目の前には相変わらず光を放つ『球体』が浮かんでいる。吸引されたりこそしていないが、その存在感は凄まじいものでつい目を向けてしまう。

今からあの中に飛び込み、かつて自分の生まれた世界へと赴き、幻神獣や機竜、そして『球体』に関する調査をする。幻神獣と機竜に関しては場合によって撃破も込み。

言葉にすればこれだけだけど、今から行う任務はこの二つの世界全体に関わる可能性も高い分、重要な任務でもある。反面、事情が事情なだけに戦力に関して慎重にならなければいけない。

そんなことを考えていると、アイリさんが入ってきた。

「二夏、準備は大丈夫ですか？」

「アイリさん。」

はい、問題ありません。出来る範囲の準備は済ませました」

そう答えるとアイリさんは一言「そうですか」と言い、少し間をあ

けて「それはそうと」と続けた。

「くれぐれも、無茶なことはしないでくださいね。」

一夏も兄さんも、もう無茶が当たり前だと言わんばかりのことが何回もあったんですから」

「はい。善処しま……」

「やらないでくださいね。」

「は、はい……」

そうこうと少しの間やり取りをしながら、出発時間を待っていた。そんな中、さらに幾人かの人が入ってきいてきた。

「一夏、調子はどう？」

「一人で赴くとは……中々無茶な任務を受けましたね。」

まあ、あなたなら多少のことは大丈夫かと思いますが、呼ぶべき時には呼んでください」

「くれぐれも主様のお顔に泥を塗るようなことは慎むようになさいね、一夏」

現れたのは、ルクスさんにセリスティアさん、夜架さんの三人。さらに、少し遅れてリーズシャルテ様も入ってきた。

「一夏。お前のアスディイグと渡したユナイテッド・ワイバーンの調整はどうだ？」

現れた直後の第一声がこれだったことに思わずリーズシャルテ様らしさを感じた。

「俺とアスディイグ、ユナイテッド・ワイバーンの調子は良好です。」

実際一人で行くのに不安は残りますし、呼ばなければいけないような事態になったらよろしくお願いします。

ルクスさんの顔に泥を塗るようなことは俺としてもやりたくないもので、気を付けます」

一人一人に応えつつ、さらに何言か注意を受け、それに応える。

出発までの残り少しの時間。恩人でもあり師でもあり、何より命懸けの場所を共に潜り抜けてきた仲間でもある人達の言葉は、これからの任務を完遂するという覚悟と、生きてこの人達の元に帰るといふ決意を改めて与えてくれた。

S i d e アイリ

「一夏君、後数分で出発時刻だ。

機竜を展開し、準備を済ませてくれ」

「はい」

常駐部隊司令官を勤める人が出発時刻を告げました。

それとこの司令官さん。一夏も何度か任務で一緒になったことがあるみたいで、指揮官としても人としても尊敬できる人だと話していました。

「——降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。へユナイテッド・ワイバーン」

リーズシャルテ様から預けられたユナイテッド・ワイバーンを召喚し、接続。

依然変わらず光を放つ『球体』を見据え、背面の推進器を吹かし浮き上がりました。

そのまま飛び込む直前、一夏は私達の方を一回だけ見ました。

「それでは、出撃します」

言い残して、一夏は光球の中へ飛び込みました。

「……ちゃんと、帰ってきてくださいね」

誰にも聞こえることのないように小さく、だけど確実に私は呟いていました。

S i d e 一夏

光が収まり、幾許もしない内に着地した。そこにテントはなく、『球体』があるのみだった。

周囲に誰もいないことを確認し、探知機レイドを起動。通常のドレイクと同程度の探知範囲はそれでも十分に広く、その役目を果たしてくれて

いた。

周辺に目ぼしい敵はいないであろうことを確認し、探知を一回終える。その後、迷彩を起動したうえで推進器を吹かし、飛翔。場所を変えて再度探知を行う。

そんなことを数度行い、探知範囲を徐々に広げていった。やがて、遠目に電車の線路が見えてきた。

改めて戻ってきたんだなと思いつつ、もし仮に電車が通っても見つからない位置を探して再び探知機を起動、索敵を開始する。

事態が悪い方向に向かっているのが発覚したのはその時だった。

「……嘘だろ」

まず、電車がこつちに向かってくる。それはいい。迷彩で隠れればいいだけだ。

問題は電車の進行方向にいる害獣だ。

「幻神獣の反応が九……!?!」

かつてガーゴイルと思しき幻神獣一体を相手にIS三機が蹂躪される光景を見た者としては、この事態を放っておけない。時刻は深夜だが、電車が運行している以上は運転手が乗っているだろうし、もし仮に乗客が乗っていた場合はさらに被害が広がることになる。

距離的にはそこまで遠くないが、電車が幻神獣と遭遇する前に間に合うかどうかは微妙なところだ。

今すぐ現場に急行し、速やかに幻神獣を掃討しなければならない。幻神獣も、アスディীগなら数的にはその大半がディアボロスでもない限りは問題無いレベルだ。

「アスディীগを使うしかない、か」

一瞬だけ悩んだ後すぐにユナイテッド・ワイバーンの接続を解除し、アスディীগの機攻殻剣サウンド・デバイスを抜剣する。

「——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、ヘアスディীগ」

すぐさま召喚し、接続。

背面と脚部の推進器を最大まで吹かし、幻神獣の移動先を予測しながらその位置まで向かう。

方向を定めた直後、すぐさまチャージを終わらせたアスデীগの特殊武装の一つ《フォトンウイング機竜光翼》を使用しさらに加速。

「……間に合えよ！」

焦りを押し殺し、今はとにかく幻神獣を倒すために飛んだ。

第一章（3）：神殺しの毒牙

S i d e
???

ガタン ゴトン ガタン ゴトン

電車に揺られながら、何の気無しに外を見ていた。

今日は私用の専用機に關したデータ取りのために、倉持技研に呼び出された。倉持技研の企業代表を務める友人に相手してもらいデータ取りを終えた後、少し休憩してからその友人に見送られて帰路に着いた。

（……私は、何をしているんだろう）

元々、その友人とは家の仕事の都合で知り合っただけだった。

だけど、その人と関わって、親しくなつて、お互いの事を話したりするようになる内に、その友人の事を好ましく、それこそ憧れるような部分さえあった。

その友人と話したり一緒に訓練したりしている時間は楽しくて、最近の数少なくなった楽しみの一つだったから少し名残惜しかった。

そしてもう一つ。境遇の側面である意味で私と似た部分があった、いや、私よりもひどい部分があった彼女は、だけどそれに負けずに頑張っていた。本人は「妥協しただけ」なんて卑下して、私のことも「十分以上に凄い」と正面から褒めてくれたけど、それでも私には彼女がとても輝いて見えた。

だから、ほんの少しだけ。自己嫌悪を覚えていた。

（……今日も、一人で夕ご飯かな）

家の仕事の関係で、家族が家にいない日も多い。今日もそんな日だった。

父と母は家の仕事の都合で政府に、姉はロシア大使館に代表として呼び出されて行っているらしい。お手伝いさんや警備の人もいるけど、一緒に食事なんて滅多にない。

終電の時間というのも手伝つて、また今日も家に帰ったら一人で夕食をとることになるのだろう。

無意識に、専用機になる予定の待機状態のISを強く握っていた。

今はデータ収集と私自身の自衛用という名目で預けられている。

中身も今はまだ量産型の打鉄だけど、そう遠くない内に打鉄を発展させた私の専用機になる。……はずだ。

(そうなれば……)

そうこう考えながら、ただ目的地である終着駅に着くのを持っていた。

この時は、何時ものように、当たり前のように着くものと思っていた。

窓の外に見えた、異様に巨大な猿を見るまでは。

「……え？」

まっすぐに今私の乗っている電車まで突撃してきたその巨大な猿は、あろうことかIS用の刀剣のように巨大な三本の爪で車輪を狙ってきて――。

Side 一夏

「……チツ!!」

アスディークで出来る限り早く幻神獣アピスのいる場所まで移動しようとしたが、あと少しのところ間で間に合わなかったらしい。

すでに事実上複数体の幻神獣に突っ込むことになった電車は車輪を破壊され、走行不能に陥っていた。

視認できる範囲にいるのは、巨大な猿のような幻神獣であるハイトのみ。それが丸。

さつき探知できた数と同じだったことから考えても、今この場にいる幻神獣は目の前にいるハイトのみだろう。

さらに言えば、ISと思しき機体を纏った年若い女性――多分、俺とそんなに変わらない年の少女――がすでに戦闘していた。左手に持った連射がきく銃をばらまきつつ、右手に持った半壊している日本刀型のブレードを油断なく構えている。与えていたダメージこそほぼ皆

無だったが、幸いなことに、そのISの搭乗者はハイートが飛べない幻神獣であることを利用し、うまく高度をとりつつ回避優先の戦い方をしていたため目立った外傷は一部を除き無かった。

その一部とは右肩部分の装甲で、そこだけほぼ破壊されている。手にしていた日本刀型のブレードも半壊していたところから察するに、飛ぶ前に一撃を受け損なったといったところだろうか。

だが、なぜその状況で逃げずにその場に留まり続けているのか。一瞬だけ疑問に思ったそれは、けれどすぐに解消された。

運転席の中に気を失っている人が見える。察するに運転手。多分車輪を破壊された際に頭を打って気を失ったのだろう。この状況で自分が逃げれば、次に無防備な運転手が狙われるのは想像に難くない。

ハイート九体を総戦力とする幻神獣は決して殲滅不可能な戦力では無いが、状況が状況だけに急がなければならない。

もはや一刻の猶予も無かった。

「タスクブレイド竜毒牙剣、ショットモード」

複数の機能を持つアスディークの主装備、特殊武装《竜毒牙剣》を備え、その機能の一つを準備する。

選択したのは竜牙射剣ショットブレイドと同様の機能を備えるショットモード。

刃にエネルギーが行き渡り、刻まれたラインが暗い青に強く輝く。

「フォトンウイング機竜光翼、再装填」

武装用のエネルギーを推進用に転換できる特種装備《機竜光翼》、そのある意味正しくない使い方をするために使用を一時中断し、エネルギーを最大までチャージする。

この装備は、使用時に推進器と同じ方向に強い光を飛行機雲のように放出する。本来は副次的な現象だが、今回はむしろこの光の放出をメインに使わせてもらう。

翼と脚部に搭載されている通常の推進器を最大限吹かせ、ハイートの只中をちようど突っ切れるよう調整しつつ飛翔する。

まずは、こちらに幻神獣の注意を向けなければならない。

「かまいたち鎌鼬」

すれ違う瞬間、軽くバレルロールしながら竜毒牙剣のショットモードを複数回に分け開放。一撃一撃の威力は下がるが、通常より低い消費で数を打てる。同時に機竜光翼を開放。発生する強い光を用いてショットモードの発射タイミングと射線を一時的に隠す。この時、ISと電車に当たらないよう細心の注意を払う。

自身の作り上げた技である本来の「鎌鼬」とは若干異なるが、今回の目的はあくまで注意をこちらに向けること。少なくとも、このままではジリ貧になる可能性の高いISに任せっぱなしよりは被害を抑えられる可能性が高い。だったら、幻神獣の注意をこちらに引き寄せつつ、その間にあのISに運転手を連れて行ってもらえばいい。

後の不安と言えば、あのISのパイロットが素直に言うことを聞いてくれるかどうかだけだが……そこだけは、その場でうまくやるしかない。

ハイート達にしてみれば突然の襲撃。それも自分たちに十分なダメージを与えうる敵^{機竜}の出現。狙い通りにハイート達は俺の方に注意を向け、同時にあのISへの警戒が大幅に薄れた。

この機を逃すわけにはいかない。

「そのIS、すぐに運転手連れて離れろ！」

「で、でもー」

ISの搭乗者に警告を出したが、叫び声と共に反論されそうになった。ISの搭乗者としては単に倒せないのが気に食わないのか、二人で当たったほうが確実だと思ったのか。表情からして後者だろう。

「万が一増援が来たらあの運転手が一番危険だ！」

犠牲にしたくないんだったら早く連れて行け!!」

本当は周囲に反応が無かったのを事前に確認していたのだが、あくまでそれは探知機^ダで索敵した話だけの話。

例えばドレイクのような迷彩能力を持つ機体だったら探知機から隠れるくらいの事はやってのけるだろうし、幻神獣でも高速飛行が出来るような種類だったら戦闘中に割り込まれる可能性もある。

加えて、悪い言い方をしてしまうが今まで見た所このISの装備では全体的に攻撃力が不足しているように思えてならない。ハイート

も確かに硬質の体毛に覆われているが、それでも十分な攻撃力があれば傷つけるのが不可能ではない幻神獣だ。それにも関わらず、今まであのISが与えたダメージはほぼ皆無である。

俺個人としても多対一の状況はそれなりに経験したことがあるし、九体のハイートを倒しうるだけの能力がアスデীগにはある。

「……ッ!!」

言わんとすることを悟ったのか、あるいは今までの自分の戦績を振り返ったのか。

ISの搭乗者は一瞬悔しそうな表情を見せた後、運転席のほうへと機体の進路を向けた。

だが、いくら注意が向いていなかったとは言えここまで派手に動けばハイートも気づく。加えて、幻神獣は基本的に逃げる者を追う性質がある。

ここで見逃すはずもなかったが――

「神速制御」

——ここで黙って行かせる俺でもない。

右手に持っていた竜毒牙剣をショットモードを解除してから神速を以って振り抜き、追おうとしていたハイートの内一体の腕を切り飛ばす。

さあ、ここからが本番だ。

Side ???

凄まじい。その一言に尽きる光景だった。

最初、幻想的な暗い青の光の尾を引いて飛んできたあの白い大柄な機体は、バケモノ九体を相手に圧倒的な力を見せていた。

白い機体は、電車の車輪や私の打鉄の日本刀型近接ブレード「葵」と右肩の非固定浮遊部位アンロックユニットを纏めて破壊した三本爪の一撃を、重厚長大な二振りの大剣を叩きつけるようにして切り付け逸らしながら隙があれば反撃し、さらに剣のように鋭利な装甲の付いた脚部での踵落とし

や蹴り上げ、回し蹴りと言った体術まで駆使しながら的確に攻めこんですらいる。

そして何よりも、一对九、という数の差を跳ね返しての大立ち回り。通常一対一ないし同数同士での戦闘がほとんどの競技用ISの搭乗者である私から見れば、同等以上の力を備えた存在との数の差をものもしないその光景は、あまりにも現実離れして見えた。

最初は私も一緒に戦った方がまだ有利になるのではないかとも思ったけれど、これだけ実力が開いているのならかえって邪魔になりかねない。

何より、たった三回の攻撃でS Eを二割以上減らすバケモノを相手に、あの白い機体と同じように戦い持ちこたえられる自信なんて、私にはなかった。

だけど私にもできることはある。さつきも言われたけど、今は運転手さんを助けることだ。

運転席まで着いたはいいが出入り口が歪んでいて動かなくなっていたため、やむなく強引に破壊し運転手さんを連れ出す。

後はこのまま離脱するだけとなった時、私はあの白い機体の様子を一回確認しようと少しだけ振り返った。

そこでは、私の思っていた以上に状況が悪くなっているように思えた。

あのバケモノが数の利を生かして白い機体の周囲を取り囲んでいる。さらに、それぞれが姿勢を低くしていた。

(同時に突撃するつもり……!?)

やはり私も加勢した方がよいだろうか。

そう考えて思わずそちらへスラスタを吹かしそうになった時、私の目は白い機体を操っている人の表情を見た。

声も顔も妙に男性っぽいその人が浮かべていたのは、目を若干見開き口元を三日月のように釣り上げた、恐ろしさを感じさせる笑みだった。

「フッ！」

軽く息を吐きながら竜毒牙剣を振り抜き、ハイートの爪を弾く。

後ろから別なハイートが爪で切りかかってきたが――

「ブレードアーマー
機竜刃鱗、展開」

――アスディイグのもう一つの特許武装《機竜刃鱗》を展開、後ろ向きに肘打ちの要領で左肘に追加されたブレードを叩き込む。

これはアスディイグの各部装甲に直接ブレードが接続される装備で、咄嗟の反撃、密着状態での攻撃、手数増加などに使える。

左肘の機竜刃鱗を食らったハイートはそのまま仰け反り動きが鈍ったのでついではかりに回し蹴りも叩き込む。無論、踵にも機竜刃鱗の刃はあるので普通の打撃より深くダメージを残せる。

更に左右両方から二体のハイートが迫ってきたので、再度竜毒牙剣を振り抜き弾き、直後には姿勢を低くして奇襲を狙っていたのである。う別なハイートへと機竜光翼を使い肉薄、やはり機竜刃鱗の刃の付いた膝蹴りを食らわせて切り決りながら仰け反らせた後、振り被った二刀の竜毒牙剣で叩き切る。

ここまでしたところでハイート達はいったん距離をとった。改めて確認すれば半分以上の固体に大きなダメージを残せている。

あのISの方へと視線を向ければ、もうすでに十分な距離が開いている。運転手もしっかりと助け出していることも見て取れた。

(……仕掛けるか)

両手の竜毒牙剣を握り直し、再度その能力を開放するための準備を整える。

ハイート達は俺の周りに展開し始めている。いずれも姿勢は低く、飛び掛かる前の姿勢であることが窺える。

普通に考えれば厄介な状況。だが――

「竜毒牙剣、ロングモード」

――同時に来るのであれば、俺にとってはむしろ一網打尽を狙えるいい機会だ。

そのための準備として竜毒牙剣の機能の一つであるロングモードを起動させ、暗い青に発光する光剣を生成する。

竜毒牙剣の切っ先から何層にも束ねた障壁を派生させ、その中にブレード用のエネルギーを充填した光剣とでも呼ぶべき物を生成し刀身を延長するロングモード。

攻撃範囲は広がるが、その分扱い辛くなる上に障壁とエネルギーを常に使い続けるから意外と消耗する。使うタイミングは見極めなければいけない機能でもある。

今までも機会が無かった訳ではないが、ロングモードに加えアレは消耗が激しい以上そう何度も狙えるものではない。となれば、一撃を以って九体の幻神獣を葬る、というおおよそ通常では考えられない選択肢を採る事になる。

とは言え、以前にも似たような経験がある。これと言って過剰に恐れる必用は無い。

光剣の準備を終え、さらに二刀の片方を前に、もう片方を後ろ向きに構える。

直後、ハイトが一斉に飛び掛ってくる。

三本爪が迫ってくる。

九体のハイトが全て俺の間合いの内側に入って来る直前、アステイグの神装を発動。

「消滅毒」

暗い青だった光剣が見慣れた禍々しい白色に変色、発光する。

「円水斬」

神速制御を以って二刀を水平にその場で回転するように振り抜く。

ロングモードで延長された刀身はわずかな時間差で飛び掛ってきたハイトたちを苦も無く捉え、切り裂いた。

同時にアステイグの神装もその能力を遺憾無く発揮している。

アステイグの《消滅毒》は、武装に注がれるエネルギーを変質させ触れた対象を消滅させる能力を持たせる神装。難点も多いので使いどころが難しいが、まともに当たれば幻神獣と言えどもまず無事で

はすまない。

現に、円水斬の一撃に直撃したハイートの内一体はすでに上半身と下半身が分断され、さらに傷口は未だに白い光が残りハイートの体を徐々に消し去っている。

程無くして光は消えたが、その時には既にハイートの核は無かった。

他のハイートもほぼ同様。両足が掻き消えていたり即死していたりと様々だが、何れも最早戦闘が続行できる状態では無い。

だがその予想に反し、両手を失ったがそれ以外は比較的傷の浅かったハイートが頭から突進してきた。

一見すれば最後の悪足掻き。だが、それでも決して侮れない威力の攻撃を放ってくるのが幻神獣の恐ろしいところだ。

とは言え、この状況下ではそこまで恐れることもない。

「あばよ」

すでにロングモードを解除し、通常の機竜牙剣ブレイドと同じような状態になつていた竜毒牙剣を再度神速を以って振るう。

その一撃は、ハイートの核を捉え即座に勝敗を決していた。

この瞬間、ISの飛ぶこの世界での、初の機竜対幻神獣の戦いは幕を閉じた。

S i d e ???

決着が付いた。

運転手さんを避難させる必要があつたため肉眼では視認出来ないほど距離はあつたけど、その光景はハイパーセンサーを駆使する事でしっかりと見えていた。

最後、鮮やかな、けどどこか不気味さを感じさせる白い光を発していた二振りの大剣が円を描いた後、九体中八体のバケモノを倒し、最後に満身創痕とも取れる状態で突撃したバケモノを一撃で沈め、白

い機体はその戦いを終わらせていた。

控えめに言って凄まじかった。あの白い機体の性能もだけど、それを操るあの搭乗者も。

高性能な機体というのは確かにあった方がいいものだが、それもいい事ばかりと言う訳じゃない。

例えば素晴らしい食材を材料にして料理をしても、料理人が下手だと結局味の悪い料理が出来るのと同じように。高性能な機体には、それに見合った搭乗者が必要になる。

その意味で言えば、今日の前であのバケモノ達を葬った機体とその搭乗者は素晴らしい組み合わせだった。

機体も不可解な部分こそ多く感じられたけど、その性能は私が見てきた機体の中でも群を抜いていると言っても良いほどの機体。特に最後に見せたあの光は恐らく第三世代兵装か単一使用能力なんだろうけど、少なくとも私は今まで見たことも聞いたことも無いほど強力な、それこそ世界最強の「零落白夜」よりも高い攻撃力を秘めているのではないかとさえ感じられた。

その機体をまるで自分の手足と同じように操ったあの搭乗者も、並みの代表候補生など歯牙にもかけないほどの腕前ではないかとさえ確信させるほど。そして何より、あのバケモノ達を相手にまったく引くことなく戦い抜きなおかつ勝利して見せたその覚悟は私には真似出来そうに無いものだった。

程無くしてあの白い機体はどこかへと飛び去った。

一瞬追跡しなければいけないのではないかとも思ったけど、ここで運転手さんを見捨てるわけにも行かない。

命の恩人を見逃す絶好の言い訳を手に入れた私は、ここから一番近い施設が倉持技研であることを確認すると、受け入れてもらうため通信を始めた。

第一章（4）：動いた者、蠢く者

S i d e 一夏

『で、一夏。』

そつちで周辺を確認していたところハイート九体を確認、すでに殲滅したけどそつちのIS搭乗者に見られた可能性が高い、っていう状況なんだね?』

「申し訳、ありません……」

戦闘後、再度周辺の索敵に戻った俺は改めて周辺に敵が居ないことを確認すると、今度は『球体』^{スライテ}付近に戻り『球体』をなるべく目立たなく偽装すると共に簡単な野営地を敷設していた。と言っても、簡単に骨組みを組んだ後周囲に森の色に溶け込めるように緑色の布をかけただけだが。

元々周辺を索敵していたのもそのため、見られたりするのを防ぐためだったが、結果として幻神獣を発見、優先事項であったため速やかに殲滅する事態となった。

『ううん。気にしないでいいよ。』

僕たちとしてもまさかこんなに早く幻神獣と遭遇するとは思ってなかったし、ね。それに、犠牲者が出なかったならそれで十分だから』
竜声による報告を静かに聞き、状況を簡単に纏めたルクスさんは冷静に返答を返してくれていた。

だが、俺としても意気込んできた手前、この結果は冷静になると痛い部分が多い。何より、この世界のIS搭乗者に見られたというのは決して小さい事実ではない。

あの状況では犠牲者を出さないためとは言え、やはり早計だったか。

『一夏、確かに痛手ではあるけど事前の対策が十分じゃなかったって言う意味では君だけの責任じゃないから。とにかく、今後の活動方針について話そう。』

何かあった方がいいものとか無いかな?』

「そう……ですね」

少し逡巡した後、ひとまず優先して回して欲しい物を口にする。

「まずは、何か顔を隠せるものをお願いします。」

それとフード付きのローブのような物も」

やはりこの世界で機竜を使うとなれば、何かしら正体を隠す物は必要だろう。今回の一件で改めて思い知った。

とは言え、先に挙げた二つは元々支給される予定の物で、単にこちらに持つてくる際に諸々の都合で後回しになってたに過ぎない。

それはルクスさんも承知のことだったので、順番を先に回すということでおいてもらえるとのことだった。

『それと、そつちで交渉事になった場合もできるだけこつちに知らせるようにね』

「了解です」

こうして、今回の一件に関する事後処理は終わった。

——と、この時は思っていた。

S i d e
???

戦闘が終わってから通信を入れ、そのまま倉持技研に再度戻っていた。

あの運転手さんも頭を打って気絶していたけれど、こつちにつくまでの間にすでに目を覚ましていました。

事後処理としては、運転手さんはバケモノの事は覚えていなかったため突然の事故として話しておき、運営会社の方にもその方向で話を通しつつ、このことが拡散しないように諸々の方面で手を撃つ方向ですでに纏まっているみたいです。

この対応も、これはこれで間違っていない対応ではないかとも思いました。何より、「ISが通じないバケモノが確認されました」なんてニュースになったら大混乱必須なのは想像に難くない事です。特に恐ろしい事態として、IS登場以後に一部で出現し始めた女尊男卑

団体やそれに近い思想を持つIS搭乗者なんかが認めたがらずに無闇にISで攻撃、周辺に甚大な被害なんて事になったら洒落にならない。

ですが、大きな範囲での事後処理に関しては、私にこれ以上出来ることが無い以上そこまで気にしてはいませんでした。むしろ、この遅い時間に対応に出てくれた人に申し訳ないな、と漠然と考えていたくらいです。

倉持に着くと、私の専用機「打鉄式式」の開発者の一人にして、企業代表を務める友人の機体の設計主任から整備主任まで務める技術者である「如月^{キサラギ} 網太^{アマタ}」さんが迎えてくれました。この人が対応を買って出てくれたみたいです。

「如月さん。この度は対応してくれてありがとうございます」
「いーやいや、更識君は気にしなくていいさ。」

僕としても君が打鉄式を纏って飛ぶその瞬間を是非とも見たいからねえ！」

お礼を言ったところ、一種の異様なハイテンションで飛躍した返答を返してくれました。

……前々から思っていたのですけど、如月さん、いい人だし技術者としての腕も確かで信頼できる人なんだけど、なんていうか……時折、常人では理解し難いテンションになったり一体いつ使えばいいのかもわからない武装を製作したり、挙句の果てにはどう考えても奇行としか取れないような行動をしたりと、よく分からない部分のある人です。友人に至ってはド直球に「変態」呼ばわりしていたほどです。いい人だし腕も確かなんですけど。

「簪、大丈夫だったか!？」

「簪!? なんでISスーツ着てるの!？」

そんな失礼なことを考えていたら、もう一人来ました。

倉持技研の企業代表を務める友人、剣崎^{けんさき}簪^{さき}です。二年ほど前までは名字が違ったらしいですが、今は改名して「剣崎」姓にしたらしいです。

その彼女がISスーツ姿。一般的な基準で見ても真面目で体調管

理を怠らない彼女にしては少し夜更かしに過ぎる時間で、しかもどう考えても寝る前の格好ではありません。

そのことについて私が聞くと——
「お前が正体不明の敵に襲われてるって聞いて、居ても立っても居られなかったんだよ！」

如月さんから最初聞かされた時はどうなるかと思って……」
——との事でした。

箒は本当に私のことを心配してくれていました。ISスーツを着ていたのも、大急ぎで出撃しようとしたけどギリギリ間に合わなかったらしいです。

箒にも迷惑をかけてしまったことに申し訳無さを感じつつも、ひとまず今からの対応についても話してもらえました。

機体は戦闘データの収集や破損部分の修復も込みで預かって貰えるとの事。修理費も倉持技研の方で持つてもらえるみたいです。ひとまず機体周りの事は心配しなくてすみそうです。

ですが、どうやってこれだけの資金を出したのか。そこだけはかなり心配になりました。

「ああ、費用の事は心配無いよ。」

そもそも機体に関しては完全に必要経費、情報操作云々に関しても政府主導でやるとかなんとかだしねえ！」

「なんで私の考えてることが分かったんですか」
「気にするな、簪。」

この人相手だと気にするだけ無駄だ」
如月さんとは私以上に長い付き合いになる箒がそう言ったので私は深く気にするのを止めました。

「ああ、それと。」

簪。宿はどうするんだ？」

「あ……」

迂闊だった。完全に思案の外だった。

どこか空き部屋か倉庫か、とにかく最低屋根が付いている場所を貸してもらえるように交渉しようかな、と考えて——

「決まっていらないなら私の借りている寮の部屋に来ないか？」

一人部屋だから、少々手狭に感じてしまうかもしれないが」

——思わぬ救いの手を差し伸べてもらえました。

「わ、私としては嬉しいけど……箒はいいの？」

「迷惑じゃない？」

「全然。」

如月さん、これで大丈夫でしょうか？」

「No, problem!! むしろ僕から言おうと思っていたくらいさー！」

最後に箒が今回の事後処理担当になってしまった如月さんに確認を取り、少なくとも今ここで私に直接関わる範囲の事後処理が終わりました。

「そう言えば箒。お前を助けたって言う、白い機体についても聞いていいか？」

私も念のために聞いておきたいんだが……」

「うん。私はいいけど……」

「ああ、それも映像見せちゃっていいよ。」

「守秘義務付くけど問題ないよね？」

「はい」

こうして、私は如月さんの許可も貰ったので白い機体について箒に映像付きで話すことになりました。

意外な感想がもらえることも知らずに。

Side ???

「……虚ちゃん、それ本当？」

「はい、お嬢様。倉持技研から映像付きでの情報です、間違いありません。」

……本音、あなたも起きてちゃんと聞きなさい」

「……はあくいいい……」

深夜、ロシア大使館からの呼び出しから辛うじて帰ってこれた私を待っていたのは耳を疑うような報告だった。

倉持技研の付近に出現したISに十分なダメージを与える未確認生物と、それを撃退した異常な高性能を見せたISの出現。

言葉にすればたったこれだけだけど、その意味は計り知れないほど大きい。今現在の情勢では、間違ってもニュースにはいけない内容だとさえ思える。

特に、量産型の打鉄だったとは言え現在単体では最強の軍事力であるISが通じない未確認生物が出現したとなれば、各国の軍がまた再編成なんてことになりかねない。一般に知られば女尊男卑団体が何かしでかすであろう事も容易に予想できる。それだけに止まらず、不当に虐げられてきた男性が一気に過激派化なんていう最悪のシナリオまでもが一瞬頭をよぎった。それらがもたらす混乱による被害は計り知れないものになる事も想像に難くない。

「で、これがその映像、ね……」

そしてその未確認生物を倒しうるISの存在。下手すればこっちの方が重い事実かもしれない。打鉄では傷を付ける事さえままたまならなかった未確認生物を一体九で倒したなんて言う半ば冗談じみた情報が入れば、各国ともその機体を狙うだろう。むしろ、未確認生物という『外敵』ではなく『人間』が乗っている分、各国がどんな手段でその機体を手に入れようとするか、分かった物じゃない。

「……中々強いわね。」

機体もだけど、これは搭乗者も一流かしら」

映像を改めて見直して見れば、その機体と搭乗者の異常性が改めて確認できる。

機体も搭乗者もどちらかと言えば格闘戦向きであることが伺える。だが、目の前のみならず全周囲に気を配り、あまつさえ同等以上の力を持つ複数の敵を迎え撃つというのは言うほど簡単なことではない。どころか、並みのIS搭乗者ではまず出来ない。

そして本当に男性っぽい。本当に男性なんじゃないかと思うくら

い男性っぽい。

さらに挙げるとすれば、機体の形状。

現在主流になっていているISはその多くが体の形状に合わせ装甲が付いている形式とあっていいものばかり。だけど、この機体は一般的なISよりサイズは大きく、腕部にいたっては完全に外部から操作するロボットアームのような形式になっている。

過去にロボットアームのような部位を搭載した事例が無いわけではない。しかし、それも先端は五本指の手のような形状ではなかったはずだし、あんな大剣を自由自在に操れるほどの駆動出力は無かつたはず。新モデルかもと思ったけど、確か開発元であるアメリカはアームその物の数を増やす方針だったはずだから違うはず。

極めつけは最後に見せたあの白い一閃。あれだけ明らかにそれまでの斬撃と威力が違う。

通常の武装とは考えにくい以上、思い当たるのは第三世代兵装かワンオフ・アビリティ単一使用能力。有力なのは単一使用能力の方だけど、それにしたって威力がありすぎる。高威力の単一使用能力と言って思い出すのはビュリオンヒルデ世界最強の称号を持つ「織斑千冬」が使用した第一世代IS「暮桜」の単一使用能力、「零落白夜」れいらくびやくやだけど、あの能力はあくまでIS相手に高火力が望めるといっただけ。そもそもS シールドエネルギーEがあるとは思えないあの未確認生物相手にはあの能力は役に立たない。

一体どこの誰が作ったのか。その謎は深まるばかりだった。
(可能性としてあり得るのは……)

まず浮かんだのはISの生みの親である天才「篠ノ之束」博士。

だけど、もし本当に篠ノ之博士だとしたら手の打ち様が無い。今現在各国が血眼になって探しているにも関わらず見つからない人を相手に、一体私達だけでどうするのか。

他にはどこかの国家が秘密裏に開発した可能性。

だが、それだったらわざわざ日本でその機体を晒す必要が無い。存在を認識させたいのなら大々的に発表すればいいだけだし、隠したいのなら他国にまで持つてくるのは大きなリスクになる。わざわざそんな事をする必要は無い。

さらにあるとすれば、どこかの研究機関。

だけど、果たして一機関の力であそこまでの機体が作れるのか。それについては疑問を禁じえないし、どこかの国家が支援していたならそれは結局国家が秘密裏にやってるのと大差ない。

「……さすがに、今の段階で大本がどこかを特定するのは無理がある、か。」

虚ちゃん。この搭乗者の顔……出来れば全身のアップとかできないかしら?」

「分かりました。」

協力各所に相談してみます」

「それと、あの未確認生物についても出来るだけ情報を集めてみて。」

過去に出現したことが無いとか、他に目撃情報が無いとかか」

「了解しました。」

本音、あなたも手伝ってくれる?」

「分かったよ、おねーちゃん……。」

あ。後、かんちゃん今日はお泊りだつて〜」

その瞬間、私は本音ちゃんのほうに振り向きほぼ反射的に本音ちゃんに確認していました。

「それってどういう事?」

「あ〜つとね〜……さっきの映像、かんちゃんの打鉄で取ったやつなんだつて〜。」

で、かんちゃんが乗ってくる予定だった電車がその前に壊されちゃったから、今日は倉持技研のお友達の部屋に泊まってくるつて〜」

なるほどなるほど、この映像は簪ちゃんが命がけになって撮影した物なのか。

つまり簪ちゃんはあの生物に危害を加えられそうになったということか。

「絶対に許さんぞ未確認生物!」

じわじわと根絶やしにしてくれる!!」

ならば止まる必要は無い。私はあの生物を殺し尽くすだけだ。

「お嬢様落ち着いてください」なんて声がかけられた気がするけど私は至って冷静だ。

それと、あの白い機体の搭乗者がもし私達の敵ではないと確定したならば。

今更かもしれないけど、あの子の姉として、お礼だけは言おう。

第一章(5)：対暗部用暗部

Side 一夏

「く……あ、ああ……」

この世界での初の対幻神獣戦があつた翌日。

ひとまず『球体』^{スライア}を簡単に偽装した場所の付近ではぼ野宿同然に一晚寝た後、支給されていた服に着替えて街の方まで歩き出していた。一応、この世界で活動するにあたり、当たり前障りの無いものを選んだつもりだ。

やはりこの世界に関する知識があるとは言え、それも二年前までの話。

この二年間で何がどう変わったのか。多少なりとでも、情報を集めたかったのが本音だった。

街に出てみれば、かつて俺が過ごした街ではない事が伺えた。

だが、それ自体は些細な事だった。

別に今更家に戻るつもりも無いし、情報収集が出来れば問題は無い。家の付近で気になる事が無いと言えば嘘になるが、優先順位が高いのはあくまで任務。そこを取り違えてはいけない。

加えて言えば、今姉に見つかれば任務に支障が出かねない。その意味で言えば、むしろ幸運ですらあつた。任務というか仕事に反対されるだけだったら無視すればいいだけだが、武力行使されたり某天災にでも連絡されれば任務が滞る事が確定する。

情報収集と言つても、特に変わった事をする訳ではない。街中に飾られている大型テレビや電気屋においてあるテレビから流れてくるニュースの中にそれっぽい情報が無いかを確認したり、本屋で立ち読みできれば関係ありそうな本を漁る等々。少なくとも現時点ではスパイ映画みたいなことをするわけではない。何より、こちら側での資金にかなり限りがある以上はやれる事もおのずと少なくなる。

そうして二、三日過ぎすうちに、分かったことがある。

幻神獣^{アビス}の存在は恐らく一般には伏せられているか、脅威では無いと

されているということ。根拠としては、ニュースには先日の戦闘の一件は一切出てきてなかった事、政治関係の雑誌を覗けばISを根拠とした女権団体の主張がずらずらと書かれてた事、軍事関係の雑誌ではISのことを相変わらず「最強の兵器」と謳っていた事。同時に、自分達が使える最強の兵器を倒せる可能性の高い怪物が現れれば何かしらの大騒ぎになることは確実だろう事から、どこかで情報操作があった事も察することが出来る。

ただ、やはり人の口に戸は立てられないという事か。UMAやUFOなんかを取り扱っている、所謂オカルト雑誌を立ち読みさせてもらった所、何枚かの写真に幻神獣と思しき姿が映っていた。その種類は、鹿に似たハイント、鳥賊に似たクラークン、硬質の体を持つゴレム、合成生物のキマイラまでいる。挙句の果てにはガーゴイルに似た姿が写された写真さえあった。

(冗談はよしてくれよ……)

正直、洒落になっていない。

ただ単に写真を撮りに来て丸腰で幻神獣と接触なんて事になれば、死にたいですと言っているのと大差が無い。それは例えISを纏っているとも言える事だろう。それは先日の一件で薄々感じていた。

だがまあ、一応収穫らしい収穫は確かにあった。

まず一つ目として、幻神獣が脅威としてまだ認識されていないことから、いきなり治安部隊に出くわす可能性は多少は低くなったと考えられ、引いては多少は動きやすいであろうという事。といっても、やはり細心の注意を払うことには変わらないが。

二つ目として、さっきのオカルト雑誌を呼んでいた所いくつかの場所が正式に封鎖されているのが分かった。その多くは廃業して何年も経つ病院やホテルだったり、壁面にビビが入っている山中のトンネルだったり、一見しただけでは怪しさは感じない。だが、その中にただの空き地や公道などがあった。さらに言えば、そこで撮られたと紹介されていた写真にはしっかりと幻神獣と思われる生物が写されている。

(今日の夜、報告してから行くか……)

合成写真の可能性が無い訳ではないが、元より今夜も野宿の予定しかない。だったら、少しでも可能性のあるところへ行き、幻神獣の存在が確認されれば速やかに殲滅すべきだろう。だがそれを見通しのいい昼間に動くにはリスクが大きい。少しでも見つかりにくい夜間にした方が色々と隠しやすい。

それまでに新王国の常駐部隊やルクスさんに報告もすべきだろう。だが、これらの僅かながら確かに前進した幻神獣の調査とは逆に、機竜関連の事は全然調べが進んでいなかった。そもそも流出してなければそれに越したことはないのだが、確定しているわけではない以上焦りが募るのも確かだった。

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。へユナイテッド・ワイバーン」

深夜、町の光の大部分が消えたところを見計らい、ユナイテッド・ワイバーンを召喚し接続。迷彩を起動した上で飛び立った。

目的地は昼間調べた、閉鎖された場所の中で可能性の高い場所。その中でここから近い場所をいくつか回る予定だ。

すでに夕暮れの頃に常駐部隊やルクスさんに連絡し、行動の許可は貰っている。さらに今回はしっかりと仮面とフード付きローブも用意している。前回のようアツサリと顔を晒すような事態は避けられるはずだ。

目的地は特にこれと言って何の変哲も無い、山中の開けた草原。周囲には危険な崖も無く、道もそれなりに整備されているので迷うような場所でもない。

ここで撮られた写真に映っていたのは、一部だけだったが硬質の金属で構成された巨躯の幻神獣、ゴーレム。幻神獣としては比較的大人しい部類で、鈍重という事も手伝い逃げに徹すれば十分逃げられる。ただし防御は固く、その巨躯から繰り出される一撃は冗談抜きで直撃

すれば即死があり得るほど。

手持ちの戦力での殲滅を考えるのであれば、アスディークの最速を以って接近、《消滅毒》^{アナイアレイト・ヴェノム}の一撃で速攻で片付けるのが吉だろう。

だが、アスディークを使うには少々不安が残っていた。

この前は被害を出さないうために速やかな殲滅が必要だった以上、アスディークを使う事に躊躇いは無かった。だが今回、周りに人が居なければ殲滅速度を重視する必要は無い。それに治安部隊が出てきた場合、ユナイテッド・ワイバーンなら探知機^{レイダー}で事前に察知し、時と場合によっては迷彩を用いて逃げることもできる。だが、アスディークでは事前の察知はできず、引いては逃走も難しくなる。

殲滅速度を取るか、対応能力を取るか。

(……ひとまず、索敵してからだな)

どのみち、最初はユナイテッド・ワイバーンで周囲を索敵することには変わらない。だったら、その場の詳しい情報を一度調査してからの方がより良い判断を下せるはずだ。

目的地の山中にはユナイテッド・ワイバーンで一時間と飛ばない内に到着した。

迷彩をかけている状態で周辺を目視し、人が居ないことを確認。

それが終わった後は見つきりにくそうな茂みを見繕って隠れ、迷彩を一旦解除してから探知機^{レイダー}を起動。索敵を開始する。

索敵の結果、今回はすぐに目的のゴーレムが見つかった。

本当は居て欲しくなかったが、居るのであれば倒すだけ。

同時に、周辺に人などの反応がないことも確認した。アスディークを使っても問題ないように思える。

不自然なほど状況が出来上がっているようにも感じたが、それを決定づける証拠もないので都合だと思っておくことにした。

「——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、ヘアスディーク」

すぐさまアスディークを召喚し、飛翔。ゴーレムの腕が届かない上空まで上昇し、竜毒牙剣^{タスクブレイド}の内一刀を両手で逆手に持つ。

「竜毒牙剣、パワードモード」

竜毒牙剣の機能の一つ、障壁牙剣スケイルブレードのように刀身に強化障壁を纏わせ、さらに剣の内部でエネルギーを高圧縮し剣の強度と威力を底上げするパワードモードを起動。

「落鋼刃らくこうじん」

技と言うほど工夫された技巧ではないが威力は折り紙付きの攻撃、落鋼刃の準備を整える。

やる事は簡単。竜毒牙剣を真下に向け、同時に背翼を真上に向けて。後は真下に向かって加速。仕上げに当たった直後に内部のエネルギーを放出するだけ。

当てづらい攻撃だが、アスデীগの全重量を最大限加速させた上で一点集中させるため威力はそれなりに高く、ゴーレムのように堅牢な防御を誇る敵との相性はいい。

「グ、オオオオオオオオオオオオ!!」

ゴーレムも気付いたらしい。

顔などろくになかったが、上を向きその巨大な拳を突き出そうとしている。

だが――

「遅い……っ!」

――竜毒牙剣を突き立てる方が速かった。

ガギャアアアア!!

耳障りな金属質の擦過音が響き、ゴーレムの右肩に竜毒牙剣が深く突き刺さる。

「消え去れ」

瞬間、剣内部のエネルギーを《消滅毒アナイアレイト・ヴェノム》で変質させ解放。

ゴーレムの内部から消滅の毒が侵食していくが、ゴーレムもただやられるだけではなかった。

頭部が開き、宝石のような部分が露出。光が溜め込まれている。

(撃つ気か……!)

タイミングは少々シビアだが、無論、撃たせる気など無い。

竜毒牙剣のもう片方を手に持ち、ショットモードを起動。衝撃波を

放とうとして――

ドガアアア!!

――どこからか飛んできた六発の小型ミサイルが、光弾を放とうとしたゴーレムの頭部に直撃した。

S i d e 簪

「当たった!?!」

前回まったく傷を付けられなかった反省を生かすため、今度は拡張領域にミサイルランチャーを搭載していました。

今まで私が使ったことのある装備の中では最高火力の重火器。これを通じなかったら現時点で私が見える火器がほとんど通じない事になります。どころか、打鉄が装備できる装備の中でも単射では有数の火力を持つこの装備が通じなければ、そもそも通常の打鉄では根幹的に火力が不足している事を露呈することになります。

「……簪ちゃん、まだよ!」

「……簪、もう一発だ!」

しかし、煙が晴れた直後、そこには僅かに黒い跡がついただけの巨人のようなバケモノがいました。

今回の作戦を立案したお姉ちゃんとする理由により同行してくれた簪が確認して叫んだ時、私も二射目を撃とうとして――

「……え?」

――あの巨人のようなバケモノが、倒れました。

よく見れば、あの宝石のような部分の輝きも消失しています。

(もしかして……!)

白い機体の、流星のような最初の一撃。

あの時点で勝敗は決していたのかもしれない。そう考えると、私のやった事は完全に蛇足ではないかと思ひ込みました。

ですが、ここで止まってもいられません。ひとまず事態が収まった事に安堵しつつ、もう一つの目的を果たすために移動し始めました。

S i d e 箒

(…あの、白い機体。)

あの機体が、簪がこの前遭遇した機体……)

最初に映像を見せてもらったとき、目を疑った。

圧倒的な戦闘力を見せつけた、異様な機体。それを駆る操縦技術。

だが、私にとつてそれは二次以下だった。

その顔を見た直後、色々な感情がないまぜになって湧き上がってきた。

冷静の考えれば、ありえないはずの人。だけど、どうしてもその人を連想した。

記憶に残っている姿とはずいぶんと背丈が違い、目付きも違っていたが……どうしても、その人の面影を感じてしまっていた。

(お前は……一夏、なのか?)

そもそも男である以上I Sを扱えるはずは無く、しかも彼は……。

(いや、今はまだ決まったわけじゃない)

今は仮面を付けその素顔を隠している白い機体の搭乗者に疑問を抱きながら、私は同行していた二人と共に移動を開始した。

S i d e 楯無

今回の作戦を立案したのは私だった。

目的もやる事も至ってシンプル。

一つ目の目的は、あの未確認生物に本当にI Sは通じないのかどうかを調べる事。

過程としてはあの未確認生物に高火力の重火器を当て、その反応を

確かめるだけ。そのために簪ちゃんにはわざわざミサイルランチャーを持つてきてもらった。

結果は散々。一応ミサイルが着弾した直後に巨人のような未確認生物が倒れたように見えたけど、それ以前にあの機体が突き立てた一撃が聞いたと考えた方がいいのは分かり切っている。

(となると、ここからが正念場かしら)

そして、二つ目の目的。あの白い機体が私たちの敵か否かを調べること。

今現在の私たちがあの未確認生物に対して圧倒的に戦力と知識、経験が不足している。対して、あの白い機体は圧倒的な戦闘能力を見せて二回の勝利。この部分だけ切り取ってみても、あの白い機体を敵に回したくないと言わしてせしめるには十分。

だけど、今のままではまだ明確に敵かどうか分からない。

(でも……敵には思えないのよねえ)

今回の作戦にあたり、この危険な橋を渡ることにした理由。それは単純に、この白い機体の搭乗者が私達に対して害意を持っているようにはあまり思えなかったから。

もちろん、理由もある。

まず一つ目は、先日の戦闘の時の事。簪ちゃんと運転手さんをわざわざ助けに入り、その後の戦闘を引き受けていた事。この事実を公表しない以上、どう見ても助けるため以外の目的が無い。それ以外の目的で行ったにしてはリスクが大きすぎる。

二つ目はこれまでの行動。あの映像から顔や全身のアップを作製し、先日の戦闘があつた場所の付近を中心に搜索した。結果は大当たりで、意外と早く発見。その後は怪しまれない程度に監視。常に同じ人を付けると気付かれかねないので、そこは人海戦術と監視カメラでカバー。結果的に何を調べていたかがある程度分かったため、来そうな場所をいくつか選定、人払いを済ませてから監視カメラを予め設置、待機していた。その後、見事にその内の一ヶ所に来た。この事から、どちらかと言えば敵対対象があつた未確認生物に向いてるんじゃないかと推測した。

この作戦の決行に当たり不満があるとすれば、私以外に二人がついてきたこと。

本当は、この一連の作戦も私一人でやるつもりだった。けれど、二人が珍しく譲らなかつた。二人には出来れば危険な事をして欲しくなかつた手前、私個人としては参加に乗り気じゃなかつたのだけだ。

幾許もかけないで移動を済ませ、白い機体の周囲を三機で囲む。普通の相手だったら十分勝てる布陣だけど、相手が相手なので油断できない。

「その白い機体の搭乗者さん。

できればすこし動かないで貰えるかしら？」

軽い口調で話しかけ、様子を窺う。

無論、相手も警戒して二刀の大剣を構えた。さらに、各部の装甲にも剣のようなものが追加されている。

さて、ある意味ここからが最大の勝負ね。

第一章(6)：交渉(前編)

S i d e 一夏

(……油断してた、か)

悔っていたつもりは無いし、油断など微塵もしていない……はずだった。

だが、今の自分は周囲を三機のI Sに囲まれている。

内一機の搭乗者の顔は知っていた。先日のハイートとの戦闘の際、電車の運転手を助けていった女の子だ。今回は大型の装備を担いでいる。

もう一機、真紅で染められた似た形状の機体に搭乗しているのは、断定はできないが見覚えのある顔付きだった。ポニーテールを見覚えのあるリボンで結わえた、鋭い目つきの少女。記憶にある姿とは随分と背格好が変わっていたが、面影は十分残っているように見えた。……操っている機体は異様としか言いようがなかったが。とりあえず、両手で握っている機体以上に長大な刀は何なんだ。

そして、最後の一機。搭乗者は電車の運転手を助けた女の子とどことなく顔立ちや髪の色が似ており、血縁関係があることを思わせる。また、この機体だけ他の二機と大きく形状が違う。細身の機体で、武装もランスのような物を装備している。

見た目の年からして自衛隊や治安部隊の類ではないだろうし、向こうからすれば俺はまだ得体の知れない相手のはず。そんな相手の前に投入したのだから、腕は確かな面々なのだろう。そして、この状況下で極少数で動ける立場も持っている。

となれば。

(どこぞの犯罪組織か、あるいは暗部か……)

今の自分ではこれくらいの可能性しか思い浮かばないのが少々悔しいが、それは今考える事じゃない。

大事なのは、この三人が敵かどうかを見極め適した対処を取る事。

ひとまず^{タスクフーレド}竜毒牙剣を再度構え、^{ブレードアーマー}機竜刃鱗も展開。迎撃体制だけは整えておく。

「その白い機体の搭乗者さん。

できればすくし動かないで貰えるかしら？」

リーダー格と思われる女性がなんとも軽い口調で話しかけてくる。だが、その目がひどく真剣であったことは簡単に読み取れた。

今回の事に関しても、ここまでの行動が早かったのかあるいは先読みしていたのか。いずれだとしても侮れない相手であることに変わりはなく、ゆえに迂闊な事は出来ない。

「もう、そんなに警戒しなくてもいいじゃない♪」

「……………」

この状況で警戒を解けるものか。

「……………」どうしても喋ってくれないみたいだし、こっちから話しちゃうわよ？

あなたの目的は何？」

いきなり踏み込んだ質問。

おいそれと答えるわけにも行かない上、相手の立場によっては答える意味合いがまったく違う。

今まではだんまりを決め込んでいたが、このままでも埒が明かない。相手も踏み込んできたし、こちらも少々踏み込むか。

「……………」質問する前に名乗るのが普通じゃないか？」

なるべく低く押し殺した声で問う。

相手もそれまでとあまり表情を変えずに答えた。

「それもそうね、失礼したわ。」

私の名前は更識楯無よりしきたてなし。この国の暗部の一端を担う家の人間よ」

「……………」

まさか、暗部の人間が自ら名乗るとは。

中々信じがたい事だが、裏を取る手段が無い以上はどうしようもない。い。

「さて、私は名乗ったことだし改めて聞くわよ？」

あなたの目的は何？」

さて、どう答えるべきか。

さっきの紹介の真偽がどうであれ、本当の目的を言ったところで信

用されるかどうかは分からない。

だから、警告だけしておくことにした。

「……詳しくは言えない。」

だが、お前達の方が此方の敵にならない限りは、此方もお前達に危害を加えることは無い」

その意味を察したらしい。暗部だと名乗った女性、更識楯無は一瞬険しい表情を見せた。

そう、さつき言った言葉の意味は不干涉である限り危害を加えることは無いが、裏を返せば敵になれば容赦しないという事。その意味を一瞬で理解した彼女はさすが暗部と言うべきか。

だが、更識楯無はすぐに表情を柔らかくした。

「そう、それは良かったわ。」

……二人とも、武器を下ろしてもらえる？」

その言葉が放たれると、他の二人がそれぞれの獲物を収めていた。更識楯無と彼女に似た少女はそれぞれの手にしていた装備を光の粒子のようにして、真紅の機体も手にしていた長大な刀を左腕に盾のように接続していた。

意外といえば意外な行動。だが、装備をそれぞれに構えていたさつきまでとは違い、少なくとも敵意のようなものは感じない。

彼女達の真意は分からないが、敵意が無いのであれば武器を構え続ける必要も無い。竜毒牙剣と機竜刃鱗を仕舞い、様子を見る。もつとも、防御障壁の出力は十分な値を維持し、すぐにでも離脱できるようにフォトンウイング機竜光翼も準備を済ませておくが。

「話す気になってもうええたみたいで何より。」

それじゃあ、先を続けるわね」

更識楯無がそう前置きすると、話を切り出した。

「あなた、私達と組まない？」

「あなた、私達と組まない?」

この一言に、それまで警戒を解いていた白い機体が一瞬で再度戦闘態勢を整える。この手際の良さには驚かされるけど、誤解もされていそうなので早々に説明するとしましよう。

白い機体に反応するように再度武器を構えかけた二人を制しつつ、再度声をかける。

「……」応言っておくけど、私は何も一方的に言うこと聞いてほしいわけじゃなく、ちゃんとあなたにも利益になると思っっているのだけだ」

「……説明してもらってもいいか?」

ひとまず、話は聞いてもらえるみたいなのでそれで良しとしましよう。

「まず、私達があなた達に提供できるものだけ……情報と衣食住、でどうかしら?」

そう、私が明示できる交渉材料の中で最も効果があると踏んだものの、それがこの二つだった。

今までの白い機体の搭乗者の行動を考えると、少なくとも日本国内においては情報源に乏しいであろうことは想像に難くなかった。特に、雑誌の情報源を元に行動した時点でそれは察せる。情報源を誤魔化しやすくはなるけど、情報の確実性が圧倒的に低くなるから。

そして、衣食住。昨日までの行動範囲がほぼ同一であり、来た方向も帰った方向も同じだった。だけど、その方向には宿泊施設どころか民家さえロクに無い。しかも、その数少ない民家の人を調べても特に誰かを泊めているという事はなかった。他に考えられる要素が無いわけではないけど、可能性は低い。

その意味において、私が提示した交渉材料は決して無意味な物じゃないはず。

「……」

白い機体の搭乗者は、少しの間黙っていた。あるいは、私の言った言葉の意味を考えているのかもしれない。

「私達の欲しい物も、言っつていいかしら?」

「……ああ」

短かったけど確かに返事はしていた。

手応えはある。そう感じた私は、話を続ける事にした。

「欲しいのは、単純。戦力が欲しいの。」

あの未確認生物を倒せるだけの戦力がね」

この一言に再度警戒されかけたけど、その前に続きを言う。

「今の私達には、あの未確認生物に対して十分な攻撃ができる機体が少ないか……最悪、存在しない。」

でも、あの生物による被害を抑えるために十分な攻撃ができる機体と、それを十全に操れる搭乗者が必用なのよ」

一度言葉を切り、様子を窺う。

「……」

白い機体の搭乗者は、再度私が言った言葉の意味を考え込むかのようになりに沈黙。

少しの間、その場には静寂が満ちた。

「……今までの言葉に、嘘偽りは無いんだな？」

「ええ。」

その点に関しては保証するわ」

再度の沈黙。

ややあつて帰ってきた答えは、私の予想を少しだけ裏切っていた。

「すまないが、この場では返事できない。」

一度、上司に掛け合ってみよう。それでいいか？」

(……まあ、冷静に考えればそうよね)

確かに、上司がいること自体に不自然さはない。それがどのような組織の上司であるかによるけど。

「分かったわ。」

返事を貰えるのは何時頃になりそうかしら？」

ひとまず糸口を掴めた事に若干の安堵を覚えつつ、もう一点の大事な点を確認させてもらう。

何事も時期を確認するのは大事なことだしね。

「……さすがに確実なこととは言えない。」

だが、返事が来たら確実に伝える。何時何処で伝えればいいか、聞いてもいいか？」

「無難と言えば無難な返事。だけど、気を抜いていい返答ではない。そうねえ……。」

「私達は基本的にどこでもいいけど。あなたはどこがいい？」

ひとまず、こつちも無難な返答で返しておく。

これでどう出るのが気になるところだけど……。」

「……すまないが、この近辺の土地に関してはあまり詳しくない。

いい場所を知っているのであれば、聞きたいのだが」

一見すれば何のおかしさも無いけど、同時にそれは向こうから選ぶ理由をなくしたという事。さらに、私たちにとってもこの選択肢は中々重要なものだった。

あんまり怪しまれるような場所は指定できないし、かと言ってセキユリテイがしっかりとっていないような場所では仕方がない。

「私の知っている場所で、会合によく使っている場所があるわ。そこでどうかしら？」

Side 一夏

まさかと言えばまさかの交渉を持ちかけてきた女性、更識楯無と言葉を交わしながら、様子を見ていた。

最初は無理な条件を押し付けてくるか丸め込もうとでもしているのかと考えたが、内容そのものはそこまで悪いものでは無かった。ちゃんと内容が守られるのであればの話だが。

「私の知っている場所で、会合によく使っている場所があるわ。そこでどうかしら？」

指定された場所は向こうのテリトリーだが、それでいい。

下手に強硬姿勢に出て警戒を強められるよりはマシだ。それに、向こうは妙に俺とアスディイグの戦力を過大評価している傾向がみられる。ルクスさん達のような他の神装機竜を使える人達に比べると

まだまだ全然弱いのだ。とにかく、これはこれで有効に利用させてもらう。

「分かった。そこにしよう」

「明日からそこに人を待たせておくわ。

要件があつたら伝えてちょうだい」

「ああ」

ひとまず、大まかに話は纏まったとみていいだろう。

これから新王国の『球体』^{スライア}を守っている常駐部隊と常駐部隊の通信要員を通じてルクスさん達にこの事を連絡し、判断を仰ごう。

「そろそろお開きでいいか？」

「いい加減報告に行きたいのでな」

「ええ。」

それじゃあ、また会う時を楽しみにしているわ」

気になっていたのは、一切動かなかった他の二人だが……今回は気にしなくてもよかったようだな。

内一人の素性が少し気になるところだったが、今はまだその時じゃない。

『……以上が、今回の報告だね。一夏』

「はい」

その夜。

予定通り常駐部隊とルクスさんたちへの報告をしていた。

あの三人組と別れてしばらく飛んだ後、機竜をユナイテッド・ワイバーンに変えたうえでさらに移動。

『球体』付近の野宿場所まで戻り、そのまま竜声を介して通信した。もうすでに深夜だが、内容が内容だったためにすぐに報告する事になっっていた。

『でも、まさかそっちの暗部が直々に接触してくるなんてね。』

詳しい事を実際に話して詰めた所だけど、そのためには事前に日

程を合わせておかないといけないかな』

「そう……ですね。」

では、その事を向こうに伝えておきましょうか?」

ルクスさんは少し考えると、さっきまでの内容に少し付け加えた。

『いや。そのうえで向こうの日程も聞いてもらえるかな?』

一応僕も仕事の都合として話を通せば、ある程度の調整は効くしね』

確かに『七竜騎聖』の権限ならある程度の調整は出来るだろうけど……むしろ、ルクスさんが直接この世界に来ることの方が問題が大きくないだろうか。

なんせ、各国の国防における表向き最高の戦力。まして、アステイマータ新王国は今だ多くの問題を抱えている。

迂闊に動くべきではないのではないかとも思い、その事を少し聞いた。

『ああ、そこは気にしないで。』

やりようはあると思うし、何も僕が行くことが確定したわけじゃないから』

ルクスさんにはルクスさんの考えがあるらしい。

確かに、俺が浅はかな考えを巡らせたところでルクスさんには及ぶべくもない。この人の判断を信じた方がずっといい。

「分かりました。」

では、向こうが提示した内容をさらに詰めるため話し合いをしたいという事と、そのための日程を聞く、という事でよろしいでしょうか?」

『うん、その方向でお願い。』

後、出来るだけ早い内にお問い合わせできる?』

「はい。お任せください。」

報告と同時に明日やる事も決まった。

目的地までは少し距離があるけど、どの道日中はほとんどやれる事が無い。早速明日にでも向こうに伝えることにしよう。

第一章（7）：交渉（中編）

S i d e 楯無

「……じゃあ、あの白い機体の搭乗者は改めて正式な話し合いをするための場所が欲しいって言ってきたの？」

「は！」

また、そのための都合のいい日時も聞きたいと」

白い機体と交渉した翌日。

私達が返事を待っていたところ、再度の話し合いを申し込んできた。

「分かったわ。」

あなたは一旦休んでいいわよ」

「は」

一旦人を払い、少し思案する。

確かに、先日の話し合いは場当たり的に行われた物という事もあり十分な内容とは言えない。その意味では、何もおかしくは無いんだけど……。

（本腰を入れてきた、と見ていいのかしらね）

話し合いもこの後に行うものが本番ということ。その際、向こうがどんな人を連れてきて何を要求してくるのか。それについてはまだ不透明な部分も多いけど、警戒するに越したことは無い。

とは言え、過剰に此方の人を連れて行ってもある意味で交渉にならない。無意味に向こうの警戒を強める事態に発展し、話し合い自体が潰れてしまつては意味が無い。

この話し合いは、私を含めても極少数で行くべき。それは間違いない。

問題は誰が行くか。私は確定として、他に誰が適任なのか。

まず、虚ちゃんには同席してもらいたい。虚ちゃんがいると何かと助かるし、何より安心感が違う。

さらに呼ぶのであれば、個人で高い戦力を持ちなおかつ信頼のおける人が望ましい。

その条件で考えて思い当たる人は何人かいる。

まずは、私の妹の簪ちゃんとその友人の箒ちゃん。この前の時も一緒にいたし、どういいうわけかは知らないけど二人とも今回の件に関してはかなりやる気を出している。

もつとも、簪ちゃんにとつてはあの白い機体が現実に現れたヒーローの様に見えたからこの前も参加したかったんだと思う。反対に、箒ちゃんは理由は話してくれなかったけど。

正直、二人には頼みにくいし私個人としても二人を巻き込みたくない。だけど、二人とも何時に無くやる気になっていた。

「……話し合い自体は私がするとして、二人にも同席を頼もうかしらね」

他に当たれるような人は……IS学園経由で知り合った人達。だけど、この人達の場合は不安が残る。

まず、守秘義務の問題。箒ちゃんと箒ちゃんはそれぞれの事情である程度慣れているからあまり心配していないけれど、IS学園経由での知り合いの人達は元々完全な一般人だった人達なんかもいる分、少しばかり不安は残る。更識家の方で対策を練るにしても、それはそれで限界があるし。

二つ目に、そもそもこう言った交渉事ができる人がどれだけいるか。単純に場慣れしていなかったり、我が強すぎて交渉そのものに向いていなかったりと、不安要素が大きい人が多い。

更にいるとすれば……家の人か、政府関係者。

家の人は特にこれといった心配は無い。強いてあげるとすればあの機体を展開されたときとかだけど、さすがにそれは無いと信じよう。向こうにとつても、それはリスクが大きい行為のはず。

政府関係者は……人による部分もあるけど、今回は外れてもらおう。なにより、変に欲を出されて交渉自体が潰れるのは避けたい。

時間と場所は後でいくらでも調整がきく。とりあえず、虚ちゃんに空いている日程を聞くとしましょう。

「……後は、そうね」

残る問題は、交渉の内容について。

大まかにはこの前言った通りだけど、細かい部分を決めておいた方が説明を求められたときに円滑に進められる。そのためにも、予め協力各所や家の中で確認できる範囲で最大限根回ししておいたほうがいい。

(やることは決まったわね)

後は、実行に移すだけ。

まずは、諸々の問題解決を手伝ってくれる人を呼びましょう。

「虚ちゃん、ちよつといいかしら?」

「はい、お嬢様。」

「何でしょうか?」

「交渉のための日程と内容の調整に、関係各所と細かい部分を決めたいからアポ取るの手伝ってもらえる?」

「お任せください」

「それと、簪ちゃんと箒ちゃんにも同席してもらいたいから……」

「それは自分でやってください」

……全部言う前に断られてしまった。

「大体、そうやって切っ掛けを掴み損ねてそのままズルズルと引きずったから今のような関係になってしまったんでしょう?」

「こういう言い方は推奨されませんが、いい加減に向き合ったらどうです?」

簪お嬢様も、箒さんの後押しもあって向き合おうと頑張っているらしいやるといふのに……」

「そ、それはそうなんだけど……」

相変わらず頼りになるんだけど、こういうところでは容赦が無いのが虚ちゃんクオリティ。

そんな下らない事を考えていたのがバレたのか、虚ちゃんの目付きが鋭くなった。怖いので止めてください。

「まったく、こういう交渉ごとに対してはすぐに覚悟を決めて行動も迅速だというのに。」

「どうして、身内の問題になるとグダグダになるんですか……」
虚ちゃんの一言に、私はどうしようも無く反論出来なかった。

S i d e 一夏

『で、一夏。』

そつちの人たちは何て?』

「ひとまず了承の返事を頂きました。返事は後々伝えるとの事です」
『分かった。』

一夏、ご苦労様』

「いえ。この程度、どうと言う事ありません」

更識楯無が指定した場所へと赴き此方側が話し合いを希望している事を伝え、その返事を待つ形となっていた。

とりあえず、明日もう一度同じ場所へと行ってから具体的な返答を貰えるとのことだった。ただし、それ以上に待たされるかもしれないという事も合わせて伝えられてはいたが。

「では、今後は向こうからの返答を待つという事でいいのでしょうか?」

『うん、そうだね。』

でも、その間も出来る範囲でいいから色々調べたりしてみて』

「了解です」

今後の方針を確定させ、いったん報告が終わった。

そう思ったら――

『ああ、それと一夏。』

こつちからそつちに行く人も決まったんだけど、それでちよつと頼みたいことがあってね……』

「頼みたいこと、ですか?」

「一体何を?」

――ルクスさんが意外な一言を発した。

ただ、断るような内容ではないので勿論引き受けるが。

『その人の護衛を頼みたいんだ。一人は付けて貰える事になったけどそれでも何が起こるか分からないから。』

一夏も普段から慣れている人だし、引き受けてくれると助かるんだけど……」

「俺も普段から慣れている……まさか!？」

さすがにそれは無いと思ったが、普段から俺が護衛を請け負っている人というと、あの人が思い浮かぶ。

『うん、多分そのまさかだと思う。』

一夏。改めて言うけど、頼まれてもらってもいいかな？

——アイリの、護衛を』

S i d e アイリ

最初、この話が来た時は断ろうかと思いました。

でもそうしてしまった場合、兄さんや補佐を務めるセリス先輩、現在の主であるリーシャさんに迷惑がかかりかねません。最悪の場合、何かしら不利な出来事が降りかからないとも限らない。

そうこうと考えた末、この話を受けることにしました。兄さんは最後まで渋い表情でしたけど。

ですけど、私が選ばれた理由を考えるとそれも納得です。なにせ、最大の理由がアーカディア帝国の元皇族だからと言う理由。しかも、兄さんはすでに王女であるリーシャ様直属の騎士であり七竜騎聖という立場を持っている以上、迂闊なこととはできないと見越しての事でもあるのでしよう。

その中でこの派遣は、つまり仮に『球体』^{スフィア}での行き来が出来なくなったときに戦力を減らさないようにとの意味があるとも考えられます。

しかも、現地に戦力になる人がすでにいるので護衛戦力はその人を頼れという無茶を危うく言われそうになったくらいです。

さすがにそこまで無謀な事は通らず、一人は護衛の人がつけてもらえることになりました。

「アイリ君、準備はいいかな？」

「はい、シヤリスさん。」

「今回はよろしく願います」

今回同行してもらえなくなった護衛、王立士官学園^{アカデミー}では先輩だったシヤリスさんに挨拶して荷物を持ち、そのまま前回と同じ手段で『球体』の場所まで向かいます。

「普段から一夏君と共にいる君にとっては、私では不満かな？」

「いえ。」

今回は事が事ですし、来て頂けるだけでも心強いです」

「そう言って貰えればありがたい。」

本来ならこの手の交渉事はルクス君かセリスの役割だろうし、護衛なら夜架なのだろうけど……ルクス君には立場があるし、セリスと夜架は何か別な案件があるみたいで来れないみたいだしな。

彼や彼女らに比べれば、上級階層^{ハイクラス}の私では些か不足ではないかと思ってしまうてね」

「いえ、そもそも戦えない私としては本当に心強いです」

この言葉は本心だった。機竜が使えない私にとっては、信頼できてなおかつ腕の立つ人が護衛についてくれるというのは本当に心強い事だから。

「しかし……まさか、異世界に足を運ぶ日が来るとは。」

人生何が起こるかわからないものだね」

「それは私も同感ですね。」

ですが、二年前の時点で一夏が異世界から来ていましたから。冷静に考えれば、あの時から予期できたことなのかもしれないですね」

「確かに、そう言われるとその通りだね」

道中、シヤリスさんと『球体』について少し話していました。

「だが、そもそもアレは何なのかな？」

明らかに自然現象ではないだろうし……」

「私もその意見には賛成です。」

ですが、その答えが出るほどの情報が今はありません」

「それもそうだね。」

となれば、今は目の前の任務に集中すべきかな？」

「そうしてもらえると助かります」

他愛も無い会話の中で出た、『球体』の正体について。

原因がどちらにあるかも知れないソレを、今から私たちは通って行く。

行先は、何も分からない異世界。

不安が無いと言えば、嘘になります。

「……アイリ君、どうかしたかな？」

「いえ……なんでもありません」

私が不安に思っている事に気付かれたのか、シヤリスさんが声をかけてくれました。

でも私は、心に巣食う不安を隠すように、今回の交渉について書かれたメモに目を落とそうとしました。

「ああ、もしかして私はお邪魔だったかな？」

アイリ君にとっては一夏君と二人きりでいられるまたとない機会だったのだろうし……」

「それは違いますー！」

思いつきりからかってきたシヤリスさんの言葉をすかさず否定した私でしたが、それでもなおからかってきたので顔が赤くなっているのを自覚しながらさらに否定し続けることになってしまいました。

でも、このやり取りが私から不安を取り除いてくれたことに、終わってから気付く私もいました。

その後、無事に『球体』付近の常駐部隊がいる場所までつきました。

『球体』付近の常駐部隊に挨拶と確認を終え、シヤリスさんのワイパーンで連れて行ってもらい、『球体』へと入ります。

幾許もしない内に『球体』を抜けると、そこに広がったのは似て異なる景色でした。

「ここが……一夏の生まれた世界」

「そうみたいだね。」

さて、ここで待っていれば一夏君が来てくれる手筈になっているはずだが……」

そのままその場で待っていると、間もなくして――

「お二人とも、お疲れ様です」

――一夏が迎えに来ました。

「久しぶりだね、一夏君」

「お久しぶりです、シャリスさん。」

お元気そうで何よりです」

「一夏、今回は色々とお願ひしますね」

「お任せください」

その後は、一夏の案内でこちら側の交渉を担当する人が待つという場所まで行きます。

着いてからが、今回の私の役目です。

Side 楯無

「……来たわね」

交渉日当日。

私達の方で指定した場所に、あの白い機体の搭乗者と見慣れない二人が訪れた。

一人は綺麗な銀髪の小柄な女の子。もう一人は、青っぽい髪の女性。

彼女たちは、白い機体の搭乗者に先導されながらこちらまで来た。

「あなたが、更識楯無さんですか？」

「ええ、そうよ。」

あなたは？」

「私はアイリ・アーカディアと言います。」

今回、この交渉を担当させて頂く事になりました。どうぞ、よろしくお願いいたします」

綺麗な動作で彼女、アイリ・アーカディアは私達へと一礼した。

「そう……。」

よろしくお願いね」

一見しただけでは小柄で可憐な女の子という印象で、とてもこのよ
うな交渉に出てくる人には見えない。

だけど、間近で挨拶してその目を見た時。そんな考えは、無くなっ
た。

(……年不相応、って言えばいいのかしらね)

柔らかい表情の中にあつたその目を見た瞬間、私は彼女を侮る事の
一切を止めることにした。

適切な表現はすぐには見つからなかったけど、その目は本職の交渉
人のそれに比べてもなんら劣っているところは見られない。無論、中
身が伴っているかは別問題だけど、ここでは一切気を抜かない。

それに、考えてみればこの少数でここに来ている以上、交渉か護衛
かにおいて何らかの高い能力を持っていると見た方がいい。

「さて、それじゃあ奥の部屋に行きましょう。」

防音も聞いている部屋だから、外から聞かれる心配もないわ」

「では、そのように」

さて、いよいよこの人たちとの交渉の始まりね。

第一章（8）：交渉（後編）

S i d e アイリ

用意された部屋に通された私達は、進められるままに席に着きました。

私の向かいの席に更識さんが座り、その横に女性が一人控えています。察するに、秘書のような役割の人でしょうか。

さらに、その後ろには2人の女性。立ったままというところを見ると、交渉担当というよりは護衛担当に見えます。

更識さんの方にはご本人を含めて計四人。秘書のように見える人は身のこなしから見てこの状況での戦いはできるようには見えませんでした。確か更識さん本人も戦えるはず。つまり、向こうは三人ほどは戦えるとみていいでしょう。

（……過剰に恐れる必要はありませんね）

対してこちらは二人だけど、一夏もシャリスさんも剣術はできるはずですし、仮に向こうが仕掛けてきても十分に対応はできます。

「さて……まず何から決めましょうか？」

「そうですね……」。

まず、お互いの事を確認したいのですが。よろしいでしょうか？」
ひとまず、お互いの事を知らないのであれば話し合いが始められませんか。

その内容が今回の交渉に深くかわるものであれば、なおさらです。

「それもそうですね。」

それじゃあ、私達から始めていいかしら？」

「ええ。どうぞ」

一呼吸置いた後、彼女は語り始めました。

「もう知っていると思うけど、私の名前は更識楯無。」

この国の暗部、その一翼を担う家の当主よ」

「……」

その手の家の所属とは聞いていましたが、当主とは。

名家や特殊な事情により若くして何らかの経験に秀でている、という人は私も何人か知っています。兄さん然り、今同席している一夏やシヤリスさんもそうであると言っていていいでしょう。

ですが、少なくとも見た目から推察できる年齢では私たちと大きく離れてはいない印象を受けるこの人がその立場にいるという事は、それだけの能力が認められているか特別な事情があるかの二択。

今はまだどちらなのかを判断することはできませんが、気を抜かないことには変わりはありません。

「二応、ロシアの国家代表も務めているわ。

改めて、よろしくね♪」

さらに追加で出てきた彼女の立場は、私達の常識ではある意味考えにくいものでした。

彼女は今いるこの国の暗部の長を務めながら、同時にこの世界では単体では最高戦力であるISの他国の代表者も務めているという事。

二足の草鞋とかそういう以前の問題として、両国の事情が一体どうなっているのかと疑問になります。

日本側に見れば、一国の代表を務められるほど優秀な、しかも個人に依存する以上替えの効きにくい搭乗者を実質他国に流したことになると思います。半面、ロシア側に見れば技術的な意味で日本側に情報が流出しかねず、さらに暗部という立場である以上それ以外の情報も漏れる可能性は大いにあります。そう考えられる以上、それらに対する身辺捜査はしなかったのかとも取れます。

正直何があつたのかがわかりません。

「で、私の横にいる人が……」

「お初にお目にかかります。」

お嬢様の従者を務めさせてもらっています、のほとけうっほ布仏虚と申します。

以後、お見知りおきを」

「よろしく願います、布仏さん」

従者、と言われると友人のノクトを思い出します。

もつとも、彼女と本来の主であるシヤリスさんの関係は、公の場ではとにかく私的な場所では幼馴染のそれですが。

「で、私たちの後ろに居るのが……」

「い、妹の更識簪です……」

「簪の友人の、剣崎箒だ。」

一応護衛の名目で来てはいるが、あまり気にしないでもらえるところか

後ろの二人が軽く自己紹介してくれましたが、そこについては特に驚くことはありませんでした。むしろ、予想通りですらあったくらいです。

「では、今度はこちらの方を」

私の発言に、更識さんが頷いたのを確認してから、改めて始めました。

「まず、私から。」

さつきも言いましたが、名前はアイリ・アーカディア。一応、今回の交渉を担当させて頂くことになっています」

次いで、シャリスさんに目配せして促します。

「シャリス・バルトシフト。」

私は道中の護衛役だから、話すことは特に無いかな」

シャリスさんが簡単な自己紹介をし、次いで、一夏の番になりました。

「……影内一夏。あなたたちが白い機体と呼んでいる機体の搭乗者で、今は護衛として同行しています。」

どうかお気になさらず」

一夏の自己紹介に、黒髪を結った女性——剣崎箒さん、でしたか——が少しだけ反応しましたが、すぐにその表情を今までのと同じに戻してしまいました。

「さて。」

お互いの紹介も終わったし、改めて何から話しましょうか？」

いったん話が区切れたところで再度、更識さんが話しかけてきます。

ですが、この時にまずやることは決まっています。

「まずは、あなたが言っていた『情報』と『衣食住』の内容について。」

確認させてもらってもいいですか?」

「ええ。」

でも、そうね……。私達が欲しいものに関しても、確認させてもらっていいかしら?」

「お応えできる範囲ならば、構いませんよ」

そう、お互いの交渉材料の確認。

もしこれに関する認識が一致しないまま話を進めてしまった場合、思わぬ損失を被る可能性も否定できません。もつと言えば、こちらが一方的に利益を受け取れるような認識の相違があったとしても、それはそれで恐ろしい事態を招きかねません。ゆえに、一番最初にこの認識を一致させておく必要があります。

「まず、どっちの何から説明すればいいかしら?」

更識さんが聞いてきましたが、これは予め優先順位を決めています。

『情報』の『範囲と精度、速度』について、お聞きしても?」

「分かったわ」

そう、まずは何よりも情報について。

今の私たちはこの世界で活動するにあたり、どう頑張っても情報網はそう簡単には手に入れられません。その中で、彼女たちが提供する情報には大きな意味があります。

だからこそ、できるだけ細かく正確に把握しなければなりません。

「まず大前提として言うておくけど、これから私達が話す事は全て関係各所にも確認をとったうえでの事よ。」

これ以上を望むのであれば……」

「相応のリスクが伴う、という事ですか?」

「話が早くて助かるわ」

関係各所に確認をとったという事は、つまり低いリスクで確実な情報を手に入れられる範囲という事。

つまり、これ以上の物を望むのであれば確度か、入手段階でそれなりのリスクがあり、ひいては簡単に提供することはできない、という事になります。

「まず、高い確度の情報が入る範囲は、ここ日本国内の物よ。

この範囲は、精度はほぼ確実、速度も大抵の物なら一日中に手に入るわ」

予想通りと言えば予想通りの答えです。そもそも、この国の暗部である以上自国の情報網が一番拡充しているのは想像に難くありません。

「次に手に入れやすいのが、ロシアかしら。

ちよつとした権利やツテを使うことになるから、高い精度の情報が欲しいならそれなりの時間を貰うことになるわ」

「分かりました。」

その他の諸外国については？」

この問いに対し、更識さんは隣にいた布仏さんに目配せしました。

「これをどうぞ」

そう言つて布仏さんは私に何枚かの書類を渡してきました。

そこに書いてあったのは、この世界の地図が区間ごとにいくつか分けされたものと、そこに対していくつかの情報が書き込まれているものでした。

「まず、お渡しした資料の1ページ目をご覧ください。

これは……」

資料を渡されてからおよそ30分。その間に説明された内容は、この世界の情勢に疎い私たちにとっては高い価値を持つものでした。

同時に説明された彼女たちの情報網についての情報も、確度や精度についておおむね十分なもの。

これらを踏まえた上でこの情報提供についての価値を判断するなら、十分受ける価値があると考えられます。

「情報について、確認したいことはおおむね確認できました。

次に、『衣食住』について確認しても？」

「ええ」

一言返事して頷くと、そのまま説明の続きに入りました。

「まあ、衣食住についてはそのままの意味ね。必用に応じて確実に安全なそれらを提供できるってことよ。」

さらに、必用ならばそれらを調達する際にあなたたちの名義を全く使わずに調達できるわ。それも、痕跡を残さない形でね」

内容の説明は簡素でしたが、中々に魅力的な提案でした。

先にも言った通り、この世界での活動基盤が圧倒的に弱い私達では諸々の行動に対し限界があります。その部分を彼女たちが肩代わりしてくれるのであれば、活動の自由度と確実性も向上することは間違いないありません。

対幻神獣だけを考えるのであれば、十二分な取引条件でしょう。

(後は……)

彼女たちの欲しいと言っていた、『戦力』。

それらについて話し合った時の反応を見て、もう一つの目的^{機竜の調査}について話すかどうか決めましょう。

Side 楯無

(さて、どういった反応が返ってくるのかしらね……)

一応、私たちの提示するものについては理解してもらえたみたいだった。そして、ここからは向こうの交渉担当者、アーカディアさんが話す番。

一見すると私達とそこまで年は違わないように見える彼女だけど、さつきまでの言動の節々からすでに能力的にも十分なものは感じ取れた。

だからこそ、次の一言が何になるのかは気になった。

「あなた達の提供してくれるものについてはよく分かりました。」

では次に、あなたたちが欲しいものについて確認しても?」

当たり前と言われれば当たり前前の対応。

私は迷う事無く頷いた。

「前にも言ったと思うけど、私達が欲しいの物は『戦力』。

具体的には、あのバケモノ相手に戦える機体とその搭乗者よ」

私の言葉に、アーカディアさんは少し思案して、次いで――

「あのバケモノ相手に戦える機体とその搭乗者、と言いますが。」

そのためにどれだけの戦力が欲しいんですか?」

――簡潔に、問いかけてきた。

一瞬、その意味が分からなかった。

「それは、どういう……?」

虚ちゃんの眩きに、アーカディアさんは少し意外そうな顔をした後、一瞬だけ呆れたような表情をしてからすぐにそれまで通りの表情に戻りました。

「当たり前の話ですが。」

一人が戦えるのは、一か所だけです。当然、二か所以上の場所に一度に出現した場合は最低でも二人以上は必要ですし、そうでなくても一か所に大量の敵や極めて強力な一体が出現すれば当たり前のように複数人必要な場合もあります。

そうなれば必然的に、複数の人と機体が必要になります。

そういう意味で、私はどれだけの戦力が欲しいのかを聞いたんです。私達だって、そう無闇に何人も連れてくる事は出来ないんですから」

この一言には、さすがに乾いた笑いが出そうになった。

その言葉の意味を、考えるのであれば。それはつまり。

「そういう事態が、あり得るって事?」

「断定はできませんが。」

ありえないとは言えませぬね」

至極当然といったように、アーカディアさんは淡々と答えた。

言われればその通りなのだけど、現実的な問題を考えると頭が痛くなってくる。

だけど、泣き言ばかりも言っていられない。なにより、そういう事態への対処のためにこの話し合いを設けたのだから。

「……最低でも、それなりに腕の立つ常駐が一人は居て欲しい。つて

「いうのはいいかしら？」

私の問いに、アーカディアさんは後ろにいる影内一夏さんのほうを少し見て、頷いたのを確認してから答えた。

「常駐については、ここに居る一夏を充てる予定ですが。」

「よろしいでしょうか？」

「ええ。むしろ、願ったり叶ったりね」

元々、あの機体の性能と腕前をなんとかして味方にしたかったからこの交渉を計画していたのだから、それ自体は不満なんてあるはずは無い。

「だけど、さっきの話を聞いた以上は一人では不安にもなるというもので。」

「でも、そうね……。」

「もしも、影内さんだけで対処できなくなった時は」

「その時は、さすがに私達の方でも増援を出してもらえるように掛け合いますよ。」

「私たちとしても、一夏を失いたくはないですから」

その言葉に、少し安堵を覚えた私が出た。

「さすがに、ここで出さないといわれた場合どう言えばいいのかはさぐには思いつかばない。」

「ですが……その場合、増援に来た人たちの分の宿などについて。」

「お願いできますか？」

「極端な大人数でもない限り問題ないわ。」

「でも、事前に人数は教えてちょうだい」

「はい、ではそのようにお願いします」

アーカディアさんが追加の要求を示したけど、この程度なら問題ない。むしろ、メリットの方が大きいくらい。

「それと、もう一つ。」

「ある調査をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「内容は何かしら？」

「このタイミングでの追加注文。」

「調査、という言葉に否が応でも反応してしまうものがあつた。」

「私達が使っている機体と、似ている機体が確認され次第私達にも教えてほしい。」

内容はこれだけです」

「……出来れば、理由を教えてくださいませんか？」

この要求の意図が今一つ掴めず、彼女に確認しようとした。

「あまり詳しくは言えませんが、簡単に言うとう機体の情報が流出している可能性が高いからです。」

私達としては、それは容認し難い事態なので」

次いで告げられた内容は、また頭の痛くなる内容だった。

もしこれほどの性能を持つ機体がテロ組織にでも流出すればどうなるか……考えたくない。そして、やりそうなテロ組織にも心当たりがあるのがまた嫌な現実だった。

「分かったわ。」

見つかり次第伝えるとして、物があつた場合はどうしましょうか？」

「……できれば、こちらで引き取らせていただきたいのですが」

「ええ。それじゃあ、その方向で話は進めておくわ」

「ありがとうございます」

正直、オーバースペックとさえ言える機体をこっちで引き取って内輪揉めが発生するくらいなら、いつそ彼女達に機体を引き取ってもらうほうがいい。

ここで一旦会話が途切れ、少しの間沈黙が支配した。

「では、今回の話し合いは以上の内容について合意したと考えてよろしいでしょうか？」

「ええ。よろしくお願い」

傾合いを見計らい、アーカディアさんが終わりの提案をしてくれた。

逆らう理由も無いし、決めておきたかったことも決められたので私達もそれに素直に従うとしましょう。

「さて。」

虚ちゃん、彼女の宿探しだけど……」

「お任せください」

「ここまで私と虚ちゃんが会話したときだった。

「……失礼。少しよろしいでしょうか？」

「何かしら？」

アーカディアさんが割り込んできた。その表情は、心なしか少し引きつっているように見える。

「彼女、というのは……一夏の事でしょうか？」

「？ ええ、そうだけど」

私の言葉に、アーカディアさんは少し驚いたような表情を浮かべた後、天を仰いで。バルトシフトさんは一瞬不思議そうな表情をした後、どこか納得した顔になって。そして、影内さんは頭を抱えた。

少しして気を取り直したアーカディアさんは――

「一夏は、男性ですよ」

――ISに乗れるのは女性だけという、今までの私達の常識を粉々に砕く台詞を言い放った。

第一章（9）：親善試合、開戦

Side 一夏

「本日はよろしくお願いたします」

「こちらこそ。お手柔らかにね」

今、目の前にいるのは専用IS《霧ミステリアス纏・淑レイディ》を纏つた更識楯無。

対して、俺は自身の神装機竜《アスディーグ》を既に召還し、コネク接続していた。

場所は彼女達が用意した倉持技研所有のテスト用アリーナ。なんでも、ちよつとした裏工作をして使えるようにしたらしい。

そして周りには更識家関連の面々が囲っている。中には、先代の党首もいるとか。

なぜこんな事になったのかと言えば。事の発端は数日前、あの交渉の最後の時からだった。

「男性……!?!」

アイリさんの放った一言に、更識楯無達は一瞬で騒然となった。表現は少々大げさかもしれないが、雰囲気を表した言葉としてはあながち間違つてもいないだろう。

「ど………どういう事ですか!?!」

ISに乗れるのは女性だけのはずです!」

「た、確かに男性っぽいとは思ってたけど………」

それよりも、いい加減落ち着いて欲しい。

このままでは予め用意していた言い訳が言えない。

「こんな……事って………」

「………」

そして、妹だと名乗った女性——更識簪という名前だったはず——は静かに驚愕し、黒髪を結った女性——剣崎箒と名乗っていた——は

何とも言い難い表情のまま黙っていた。

「……とりあえず、落ち着いていただけですか？」

アイリさんが静かに、だけどよく通る声で言った。

「……え、ええ。ごめんなさい。取り乱してしまつて。」

ほら、虚ちやんも……」

「……ハッ！ も、申し訳ありません！」

ひとまず彼女たちは正気には戻ったみたいだった。

「とりあえず確認のためにお聞きしますが……あなたたちは今まで一夏の性別を勘違いしていた、という事でいいんですね？」

「そう……なるわね」

更識楯無は少々言い辛そうに返答していた。

此方が少し黙っていると、今度は更識楯無が真剣な顔になり――

「ねえ、少し聞いてもいいかしら？」

――切り出してきた。

「答えられる範囲ならば、どうぞ」

だが、此方としても元々聞かれるだろうと思っていた事だったので特に問題は無い。

「なんで……今まで男性IS操縦者の事を秘匿していたのかしら？」

そもそも使っているのがISではなく機竜なので男性も女性もないんだが……そこは勘違いしてもらおう。そっちのほうが、おそらく話が円滑に進む。

それに、そっちの方が此方側の安全確保にも役立つ。

「一夏自身の身の安全と保障のためです」

「……そういう事ね」

この簡潔な答えから、おおよその内容を推察したらしい。そこはさすがに暗部に関わる人間というべきか。

「はい。」

もうすでにご想像がついているかと思いますが……一夏がこの世界で唯一の男性操縦者となれば、その価値は計り知れないものとなるでしょう。

当然、種々の目的で一夏自身の身の安全が脅かされないとも限りま

せん。研究目的か、女性優位の世の中を崩したくない人間か……。いずれにせよ、どのような手段で来るかが分からない以上、彼の身の安全に最大限の配慮をしたとしても限界があります。

だからこそ、彼自身に十分な腕前を付けてもらうことで、その安全を少しでも保障出来ないかと考えたんです。

さつきも言った通り、私達としては一夏を失いたくないですから。そう、この話題について聞かれた時のために予めルクスさん達と相談して用意していた話がこれだった。

機竜の世界では別に男性の機竜使いなど大して珍しい話ではない。むしろ、王立士官学園アカデミーの環境が特別なだけで、女性の機竜使いの方が全体としては少ないくらいだ。

けれど、ISがあるこの世界ではそうじゃない。そもそもとしてIS自体が女性しか使えない以上、男性がそれを使っていることが確認されれば大混乱は必須。そうになったら幻神獣や機竜の事以上に自分の防衛を考えなければならず、任務どころではなくなってしまう。

かと言って、使っている機体の正体がISでは無く神装機竜であるとバラすのは早計に思われる。何より、ISとは根底から違い男女両方乗れて、しかも戦力として優秀。彼女達が秘密裏にしてくれるならいいのだが、一国の暗部である以上そうなるとは限らない。

更に言えば、彼女達に限った話ではないが、『球体』スフィアの事が露見しそのまま機竜を目的に機竜側の世界に来られるという事態にだけはしたくない。迎撃するだけなら何とかなるだろうが、そこに至るまでのリスクは低くないだろうし、幻神獣アビスを刺激でもされれば場合によっては大被害が出かねない。

そのために今まで機竜や幻神獣という言葉は一切使わず、彼女達にはISであるという誤解をしてもらうことにした。だがそれは、同時に男性がISを使っているという形になることを意味している。

だからこそ、最初から説明を求められたときのためにある程度信憑性がある話を用意しておくことにしていた。その結果がさつきのアイリさんの話である。

「な、なるほど……」

「だけど、それだったら何でわざわざ人前に彼を晒すような事を？」

さっきの説明と噛み合わないような部分があるように私には思えるんだけど」

布仏虚はある程度納得したが、更識楯無はそうでもなかったらしい。さすがに用心深かった。

「ああ。」

あれは半ば事故のようなものでしてね」

「事故？」

アイリさんの言葉に、更識楯無は疑問を抱いたように聞き返してきた。

「ええ。私達としても、今この時点で一夏の存在を公にするつもりもありませんでした。」

ですが、先日あなた達も二度に渡って確認したあのバケモノを相手に被害を増やさないためには、ああするしかなかったというのが我々の見解です」

「被害を広めない……まるであのバケモノたちとの交戦経験があるかのような口ぶりね」

「そこは詳しく言えませんね」

答えはするが、さすがに自分達の素性に感付かれそうな部分は隠しておく。

「じゃあ、もう一ついいかしら？」

「何でしょうか？」

更識楯無が再度、真剣そのものの表情で問うてきた。

「どうして男性である影内君がISを使えるのかしら？」

「分かったら苦勞はしません」

この答えも、あらかじめ用意していたものだった。

元々分らない事の方が多いいと言われていたのがIS。変に独自技術などと言って疑いを持たれるよりは、最初から答えを持っていないとしていた方がまだいい。

「……良ければ説明してもらえますか？」

「最初、所用で一夏が開発中だったISに触れた所、そのISが偶然反

応したんです。それ以後、何度か解析を試みましたが結局今まで何も分かっていない始末です。

更に言えば、今現在使っているIS以外ではもう一つしか反応したことがありません。つまり、たまたまこの二組のみ反応したんです。ですので、これら以外のISで試そうとしても無駄ですよ」

アイリさんの説明に、更識楯無が何事か考え込んだ。が、それも一瞬のことですぐにそれまで通りの表情に戻ると、再度質問してきた。

「一応聞くけど、その機体の情報を公開する予定は？」

「機密の塊をそう簡単に教えると思えます？」

「ま、そりゃそうよね」

最初から分かっていたように更識楯無は嘆息していた。

そのすぐ後、少し言い辛そうに再び話を始めた。

「それで、身内の問題で情けない話なんだけど……」

ちよつとだけ仕上げに協力してもらえないかしら？」

「どうということですか？」

そこで少しばかり困っているような表情になって。

「懐疑的な人達って、どうしてもいるのよ。」

更識家
私の身内にもね」

こういった経緯によってあの交渉の翌々日にあたる今日、更識家関連の面々が見守る中での親善試合（という名の實力証明）が行われる事になった。

と言つても、アスデীগの神装《アナイアレイト・ヴェノム消滅毒》は使用しない。万が一自身の体に直撃したら絶対防御など軽く貫通して大怪我を負わせてしまうか、最悪即死さえ有り得るからだ。そんな事になれば、この前の交渉が無になるところかお尋ね者にさえなりかねない。

さらに、あくまで操縦技術の証明という事で、ある程度の性能比較も試合前に行い基礎性能も同水準に合わせた。

これらは事前に更識楯無にも伝え、了承を得ている。神装の能力を
ワンオフ・アビリティ
単一使用能力として伝えた時、それまで笑みを崩さなかった彼女が顔
を引きつらせていたのが少々印象的だった。

『それでは、更識楯無対影内一夏。』

試合開始!』

審判役を請け負ってくれた剣崎箒が試合開始を告げた。

S i d e 楯無

(さて……初手はどう出てくるのかしら)

試合が始まると同時、影内君の表情が変わった。酷く無表情で、その目は冷徹なまでの光を放っている。

(格闘戦主体なら槍のリーチを生かすか、最悪アレで動きを止めればいいんだけど……)

私も、ミステリアス・レイディのメインウェポン主武装、蒼流旋を構える。

突撃槍にガトリングを内蔵したこの装備は、その特性上、どうしても攻撃時に前を向ける必要がある。

(それだけで勝たせてくれるような相手にも思えないのよねえ……)

相手は格闘戦に秀でていることはすでに知っている。となれば、突撃槍の難点に気付いてもおかしくない。その中で確実にダメージを与えられるとすれば内蔵ガトリングでの不意打ちだけど、それも通じて一度きり。

(なんでこんなに主武装に自信が持てないのかしらねえ……)

勿論、ミステリアス・レイディは格闘戦だけではないけど、どこまで通じるかは不透明。何より、影内君の対人戦における能力が不明すぎる。

そうこう考えている少しの間、動きはなかった。お互いにタイミン

グを凶りかねている感じがする。

それが動いたのは、誰かの喉が鳴った時だった。

ゴツ！

ドツ！

空気の壁を突き破るような音が二ヶ所から響く。一ヶ所は私から、もう一ヶ所は彼から。

ギャギイイイイン！！

次いで金属同士の擦過音。私の蒼流旋と彼の機体の大剣の内片方が高速に乗ってぶつかり合った音。

間髪入れずに蒼流旋を引いて二撃目の突きを入れる。

ギイン！

今度はもう片方の大剣に弾かれる。

ギャギギガギイギャン！

さらに連続での突き。

だけど、これも弾かれ、逸らされる。突きの動作自体はこちらの方が早いけど、影内君の大剣二刀流はそれを凌駕する手数を生み出していた。

ガギャギイイン！

最後に一度大きく突き、その直後に後ろに飛び退く。

(……強い)

ほんの小手調べの程度の応酬だったけど、彼の実力を肌で実感するには十分だった。

もちろんさっきの応報が全てだなんて間違っても思わないけど、だからこそ恐ろしいものも感じてしまう。

彼の動きを警戒し、蒼流旋を再度構えて備える。同時に、別な仕込みも忘れない。

半面、影内君の方は私が後ろに飛び退いてからあまり動いていない。いや、あくまでそう見えるだけなのかもしれない。

(次の一手はどう来るの……影内君?)

暗部、その中でも特殊な部類に当たる対暗部用暗部の党首であると同時に、私は一人の競技用IS搭乗者としてこの勝負に負けたくない。

かった。

Side 簪

「す、すごい……」

「おおく……。何があつたのか分からないね」

「ええ。」

更識盾無さん……あなたのお姉さんでしたか。一国の代表を務められているだけのことはありますね」

私と本音の驚きの言葉に、隣で一緒に見ていたアーカディアさんがお姉ちゃんのことを賞賛しましたけど、むしろそれは国家代表と互角に渡り合える影内君に向けるべきものではないかと思いました。

「む、むしろ国家代表と渡り合える影内君って何者なんですか!?!」

「うんうん」。

楯無お嬢様と互角なんてね。すつごいね」

「それについては詳しく言えませんよ。」

ですがまあ……普段は、私の護衛を勤めてもらっています」

「護衛……?」

確かに一流といつて何も間違いが無くさらに強力な機体を使いこなす彼が護衛に付けば、この上なく心強い事だろう。

けれど、それはそれでどうなのだろうか。彼ほどの腕前ならば十分国家代表だつて狙えるだろうし、モンド・グロツソでの入賞だつて夢じゃないはず。そうなれば、アーカディアさん達の名前だつて売れるはずだし、悪い事ではないはず。

本音も同じ事を思ったのか、不思議そうに首をかしげています。

「不思議ですか?」

そんな私達の考えを見透かしたように、アーカディアさんが聞いてきました。

「えと……はい」

誤魔化しても仕方ないと思つたので、ここは素直に答えることにし

ます。

その私の答えに、アーカディアさんは当然とでも言うかのように頷きました。

「それは……私達の望みではないので」

「そう、なんですか……?」

「ええ」

短い答えだったけど、私にはその中には様々な感情が滲んでいるように感じました。

この話題には、きっと深くは答えてくれない。直感的にそう感じた私は、話題を変えることにしました。

「えっと……この試合、アーカディアさんは、お姉ちゃんと影内さんのどちらが勝つと思いますか?」

「あく。私も気になるな。」

「どっちが勝つと思いますか?」

本音が大分失礼な聞き方をしてしまったことに慌てた私ですが、当のアーカディアさんは気にせず私の質問に答えました。

その顔に微笑と自信を見せながら。

「——負けませんよ、一夏は」

第一章（10）：『毒蛇の巨竜』対『霧纏の淑女』

S i d e 楯無

「ハアッ！」

「ゼアッ！」

再度の格闘戦にもつれこみ、そのまま二刀流の相手をするようになる。

私の槍、蒼流旋は弾かれるが、同時に影内君の大剣も今は届いてない。一動作にかける時間の短さと、影内君の二刀流の手数が拮抗している状態だった。

しかも、機体のサイズ差が思った以上に大きく響いている。

槍のリーチが思ったほど生かせないからだ。本来、得物のリーチの差は十分に扱えるものであれば大きな有利を生み出せるのだけど、そもそも機体のサイズが私より大きいあの機体は手に持つ大剣の大きさも手伝ってその差を消し去ってしまったている。

今のままだと埒が明かず、ともすればどこかで私が一方的に不利になりかねない状況。

（だけど、影内君の方もまだ手札が残っているからねえ……）

思い出すのはあの剣状の装甲か、装甲に付けられた剣みたいなあの装備。十中八九、密着時の反撃用だろう。

近接用の獲物が大きい相手への対処として、距離を取って間合いの外へ出る他にある選択肢。それは、その間合いの内側に入る事。

近接用の長物が持つ共通の欠点と言っても良いのが密着時の不利。獲物が長すぎるとその間合いの内側に入られたとき、咄嗟に振るうのが難しい。私自身、突撃槍を使う以上こう言った場合への対処は学んできた。

だけど、あの装甲に据え付けられた刃はその欠点を十分に補っている。仮に密着されたとしても、あの刃によって反撃されれば高いダメージを貰うことになる。

しかも、それらを扱うための体術も以前の戦闘の映像を見れば十分な技術を持っていることが分かる。

(まったく、定石の通じない機体って言うのは厄介なものね……けど)
私だって、手がないわけじゃない。

(このままだと私が不利そうだし、使わせてもらおうわよ)

ガギンツッ!

「まずはー!」

受け止められた直後に、蒼流旋に内蔵されたガトリングを開放。高圧縮した水弾が連続して放たれ、影内君へと殺到する。

ガガガガガガガガ!

至近距離での不意を突いた攻撃。多少のダメージは期待できず。私のその考えは、直後の影内君の行動で脆くも崩れ去ることになった。

「パワードモード!」

ガギャン!

私の蒼流旋を受け止めていた大剣が発光すると、そのまま蒼流旋が弾かれた。同時に影内君がその機体を翻らせ、最初に放った水弾を避けた。

(対応された……このタイミングで!?)

さらに影内君の攻め手が続く。

ブレードアーマー
「機竜刃鱗!」

警戒していた装備がでてきた。

影内君は再接近してくるとそのまま両手の大剣で切りかかってきた。それ自体はいなせたけど、その直後に肩に展開された剣を使つてのタツクルがくる。咄嗟に身を捻つてかわした私に、今度は大剣の内片方が振るわれる。今度は蒼流旋で受け流したけど、その直後に膝蹴りの要領で剣が飛んでくる。

「ラストイー・ネイル!」

回避も防御も出来ないと思察に判断し、隠し玉の一つだった蛇腹剣『ラストイー・ネイル』を展開してどうにか凌ぐ。

ギヤギイ!

金属質の擦過音を再度鳴り響かせながら、影内君の膝の剣は私の横を掠めた。

さらに、大剣の追撃が来る。

ギャリン！

けれど、これは蒼流線を合わせて振るい、いなせた。

(後ろ、貫ったわよー！)

危ない場面だったけど、さっきの膝蹴りを外して大剣を振るったために背中がから空きになっていた。

背中 of 翼のようなものに邪魔されないように姿勢を低くし、少し斜め上に出るようにして蒼流旋を突き上げる。

(これだったら……！)

だけど、影内君はこれにも反応して見せた。

「ツハアー！」

大剣を振りぬいた勢いを殺さずに僅かに半身を後ろに出すと、肘打ちの要領で打ち込んできた。これがただの肘打ちだったら大した脅威ではないのだけど、この肘打ちには剣が付いている。

ギャン！

蒼流旋と肘の刃がぶつかり合った瞬間、その衝撃を利用して槍を半回転させ石突を突き出す。

それまでよりも短い攻撃間隔に、だけど影内君は対応して見せた。

肘打ちに使ったほうの手に持っていた大剣を盾のように構えて、私の蒼流旋の一撃を受け止めていた。

(これでもダメ!?)

咄嗟に後ろに飛びのき、距離をとる。

影内君は追っては来ないで、その場で二振りの大剣を構えた。

(本格的に仕込んでいた手も使わないとマズいわね……)

攻撃が今までほとんど通じていないこの状況を好転させる一手を考えつつ、私も蒼流旋とラストイー・ネイルを構えなおした。

S i d e 簪

「……」

言葉が出なかった。

目の前で行われている試合は、僅か五分足らずであったにも関わらずそれほどまでに凄まじい応酬だった。

「おお〜……」

隣で見ている本音も、さつきからこの調子で関心しつぱなしだった。

(それにしても……)

横で見ているもう一人の人、アイリ・アーカディアさん。そして、後ろで控えているバルトシフトさん。

影内君と付き合いの長いらしいこの二人は、この応報をただただ静かに見守っていた。

「それにしても……さつき、なんで蒼流旋が……?」

打ち合いの中でお姉ちゃんの蒼流旋が弾かれたときの、不自然さ。

影内君も受け止めていただけで特にそういう動きをしたわけではなさそうだったし、お姉ちゃんがあんなミスをするとも思えない。

私がそう疑問に思っていると――

「何か考え事でも?」

――アーカディアさんから声をかけてきました。

内心少しだけ驚きつつ、「はい」と簡潔に答えます。

「なんで、蒼流旋……姉の使う槍が弾かれたんだらうって」

「ああ、それは多分一夏の持っている剣、タスクブレイド竜毒牙剣の機能の一つですね」

「機能の一つ……?」

「なにになに〜?」

口振りから察するに、姉の蒼流旋と同じようになにかしらの装備が仕込まれているのかとも考えました。

ですが、影内君の剣にはそんな様子は見られませんでした。

「あなたのお姉さんの槍が弾かれる直前、一夏の剣が発光したように見えませんでしたか?」

「……それが、機能の一つなんですか?」

アーカディアさんは黙って頷くと、言葉を続けました。

「あれは竜毒牙剣の機能の一つで、パワーモード。

剣の刀身部分に防御用の力場を生成し、刀身内部にはエネルギーを蓄えて攻撃力を底上げする機能です」

「……？ 防御用？」

「ええ。相手の攻撃を弾く性質があるんですよ」

その言葉が、さつき何があつたのかを教えてくださいました。

「あの剣には、そんな機能が……」

「それだけでもありませんけどね。」

あなたも、いくつかは見ていると思いますが」

言われて思い出したのは、過日のバケモノと影内君が戦闘した時の事。

それらしい攻撃に心当たりのあつた私は、今回使用していない能力の事も含め、その底知れない攻撃性能に思わず寒気を感じました。

Side 一夏

(……さすが、暗部の当主にして一国の代表か)

さして長い時間格闘戦を続けたわけでは無いが、その槍捌きには純粹に驚嘆を覚えさせられた。判断の速さも申し分なく、技の冴えも十分。

加えて言えば、あの鞭のような剣も厄介だった。直截的な攻撃は言うに及ばず、巻きつけて動きを封じる事も十分に可能だろう。

(今までの攻撃ならアスディークの手数で応戦できるが……それだけで終わると思えないしな)

アスディークの特徴であり優位性の一つである接近戦での手数が多さ。今までの攻撃は全てそれで捌きつつ反撃を織り交ぜる事で致命打を防いだが、今から始まる攻防がそれだけで済むとは思えなかった。

再度、二刀の竜毒牙剣を構える。

更識楯無も槍ともう一本の装備を構え直す。

一瞬流れた、空白の時間。

それは、更識楯無が放った一撃で破られた。

ヒュッ!

空気を切る軽い音がしてあの鞭のような剣が振るわれる。

竜毒牙剣で咄嗟に受け止めたが、続けざまに二撃目が振るわれる。

そして二撃目を受け止めようとした時だった。

ガガガガガガガガ!

再度あの槍に内蔵されたガトリングが弾丸を打ち出してきた。

横方向に逃げればあの剣が追いつかり、後ろか上ではあのガトリングの弾幕が来る。

(まあ、どのみち攻撃する方が得意だしな)

完全に避けるには少々厳しく、防御を固めるにもアスデীগはそれが得意ではない。ならば答えは簡単で、こちらからも攻めて攻撃を中断させればいい。

「竜毒牙剣、ショットモード」

横にステップして初撃の分だけ回避すると同時にショットモードを起動。内包されたエネルギーを竜毒牙剣を振るうと同時に開放する。

放たれた青い光は狙い通りに更識楯無へと飛んで行った。が、彼女もやられるままではなくしつかりと身を捻って回避していた。が、その動きによってあの剣が逸れガトリングも射線がずれて追撃は無くなった。

この隙に接近戦に持ち込もうかと考えた時、更識楯無が不敵な笑みを浮かべているのが目に映った。

「これはどうかしら?」

直後、真横から水の塊が鏃のような形状で襲い掛かってきた。

「ツチー!」

咄嗟に竜毒牙剣を振るい、ついでにショットモードでの攻撃もあって、水の塊は砕け散った。

だが、それだけでは終わらない。今度は更識楯無自身が攻撃してくる。あの槍に内蔵されたガトリングが弾幕を作り上げたが、今度はそ

れに追加して周囲に浮いている水も弾丸のように撃ってきた。

「妙な装備を……機竜光翼！」
フォトンウイング

翼の特殊武装を起動し、真横に加速して回避する。

そのまま推進方向を変更し、一気に距離を詰めて斬撃を試みるが――

「妙なだけじゃないのよ」

――今度は水の壁で防がれた。

流体である水の壁は凄まじい抵抗を生み出し、剣の勢いを殺していた。のみならず、その抵抗はすぐにはその場から動けないという不利を生み出した。

「さあ、これはどう防いでくれるのかしら？ 影内君！」

さらに今度は槍に大量の水を纏わせていた。単純にリーチが伸びたうえ纏わせた水は回転しているようで、攻撃力が通常の状態に比べ大きく上がっていることは想像に難くない。

(さすがに、あれは貰いたくないな……)

とはいえ、生半可な手段では回避させてくれないだろう。そうなれば、取る手段は自ずと限られてくる。

「竜毒牙剣、アックスモード」

竜毒牙剣の刀身の片側に障壁を蓄層させ、内部にエネルギーを充填するアックスモード。ロングモードが刀身の延長なら、アックスモードは剣の幅を増すモードである。同時に、竜毒牙剣の形態の中では最も攻撃力が高い。ただし、最も消費する形態でもある。

竜毒牙剣の片方をアックスモードに変更し、水の壁を叩き切る。

「ロングモード」

叩き切った際に修復されるまでの間を縫って竜毒牙剣を水の壁から引き抜き、すぐさまロングモードを起動。刀身を延長し水を纏ったあの槍に合わせて振るう。

バシヤン

水の飛び散る派手な音がなった。更識楯無が振るった槍の水が飛び散った音だった。

同時、彼女は上空へと逃れていた。

「――《清き熱情》！」

クリア・バツシヨン
シールドエネルギー

瞬間、周囲の水が一斉に気化して――。

S i d e 楯無

(さすがにまともなダメージ貰ってくれるんと助かるけど……)

横目でお互いのS Eシールドエネルギーが表示されている掲示板を確認する。

私のほうはあまり減っていない。影内君の方は、そもそも表示されていない。

(事前に聞いた話ではそういう仕様っていう話だったけど……)

色々といレギュラーに過ぎる要素が多すぎる。

だけど、今はこの試合に集中することにした。

いい加減にまともなダメージは入れないと私の方の消耗も激しくなってきた。アクア・クリスタルは十分に残っているけど、他の武装用のエネルギーは軒並み減っており推進用のエネルギーも十分ではあるはずだけど不安を残すレベルになっている。

この状況を鑑みればダメージが入って居て欲しかったけど、やはり彼は一流の乗り手だった。

ゴッ!

「機竜光翼」

どうやってきつきの《清き熱情》クリア・バツシヨンを防いだのかはわからなかったけど、彼の機体は所々に黒い跡がついた程度の無傷で、その翼からデープブルーの光を吹き出しながら飛翔した。

その軌道を、真っ直ぐ私の方へと向けながら。

「ショットモード」

その言葉に、私はついさっきの彼の攻撃の一つを思い出した。

確か、あの大剣から光波のようなものを発射する攻撃だったはず。

(水の壁で防ぐとして、後は……)

幸い、アクア・ナノマシンにはまだ余裕がある。ここで大盤振る舞いしてでも優位を作る以外で勝てる手段が思いつかない。

影内君が放った光波を水の壁で防ぎつつ、それに紛れ込ませて再び周辺へと水を仕込んでおく。

だが防がれていることを全く意に介していないかのように影内君は私の元まで加速してくる。

(これが実戦じゃなくて試合で良かったわね。切実に)

場違いなことを考えながら、私は迎撃を始めた。

S i d e 簪

「い、今どうやって《清き熱情》を防いだんですか……?!」

「お嬢様のアレが直撃しないとこなんて初めて見たよ」

目の前で見た光景が信じられず、私はただ茫然と呟いていました。隣で見ていた本音も声が少し震えています。

「流石にあの攻撃は一夏君でも大変そうだったね」

「ですが、結果は見ての通りです。」

……本当、私の騎士は頼りになりますね」

「なるほど。確かに『アイリ君の騎士』だね」

「そこを強調しないでくれますか？」

対照的にアーカディアさんとバルトシフトさんはそこまで驚いた様子はなく、むしろ安心感さえ持っているように見えました。

ただ、バルトシフトさんの一言にアーカディアさんがほんの僅かに頬を赤く染めているように見えました。

「あ、あの……」

「どうやって防いだか、という事ですか？」

「は、はい」

アーカディアさんが再度私達の方を向くと、簡単に説明してくれました。

「恐らく、ですが……」。

一夏の機体、アスディグには翼の部分に特殊な推進装置が搭載されているんです。それを使ってその場で一回転し、周囲の水を吹き飛ばしたのでしょうか。上の方の爆発はさつきも説明したパワーモードで防いだのでしょうかね」

アーカディアさんの説明に納得を覚えました。同時に驚愕もしました。

確かに姉の《清き熱情》はその性質上、十分な攻撃力を得ようとするなら一定空間内にそれなりの水蒸気が必要になります。その意味では、『吹き飛ばす』という単純な対処もそれが可能な出力があるなら間違いではありません。

ですが、一瞬でその判断を下し実際に実行に移すという事がどれだけ難しい事かは言うまでもないことです。それにも関わらず、影内君はやってみせた。

「それより、もうそろそろ決着が着きそうですよ」

アーカディアさんに言われて視線を戻した先では、熾烈な空中戦が繰り広げられていました。

S i d e 楯無

襲い掛かってくる光波を水の壁で防ぎつつ、同時に水の弾丸と蒼流旋のガトリングの二重弾幕で迎撃を試みるけど、影内君はそれを易々と回避してさらに加速する。

接近前の迎撃は諦め、再度の格闘戦に突入する。けど、さつきまでと違い今は私も手数が増えている。

(そう簡単にはやられるつもりなんて無いけど……)

だけど、それでも必勝を信じる事が出来ない。

それほどに影内君は強かった。

「アックスモード」

再接近してきた影内君は両手の大剣で切りかかってきたけど、水を操って楯にしてそのまま拘束……は出来なかった。

バシユン

今度は二刀とも水の楯を破ってきた。

「ツ！」

驚きはしたけど、それだったらそれで対処するだけ。刃状にした水と蒼流旋での多段攻撃で応戦しようとした。

「パワーモード」

だけど、影内君も二刀流の手数の多さと装甲に付いた刃を用いた体術で攻め込んできた。しかも、地上で格闘戦やっていた時と違い足技も多用してきており、より攻撃の密度が増している。

さらに厄介な事に、槍のリーチも生かせない。それどころか——
「ロングモード」

——この形態にされるとリーチ負けする事態を引き起こしていた。かといって根本的に間合いの外に出ようとしても、あの光波がそれを許してくれない。

ミステリアス・レイディ
私の I S が本来持っているはずの優位性が通じない。冷静にならなければいけない状況なのを理性では分かっているけど、感情の上ではかなりの焦りが出てくる。

(しかも、この距離だと《清き熱情》も……)

もう一つのマズイ点として、《清き熱情》を使うには距離が近すぎる。あの攻撃方法も突き詰めれば爆破攻撃であり、攻撃対象との距離が近すぎれば当然私もダメージを貰う事になる。並みの相手だったらそれをやっても見返り十分な事もあるけど、この状況ではむしろ悪手になりかねない。

残った隠し玉と言えば、ミステリアス・レイディの単一使用能力だけ。だけど、アクア・ナノマシンを大量に消費するあの能力はタイミングを間違えると本当に詰みかねない。

間合いと攻撃力の変化する大剣。近距離戦で優位を作る剣の装甲。相手との距離を作り上げる機動力。それらを十分以上に使いこなす
操縦技能

(本当になんで今まで話にならなかったのかしらね……!?)

下手な代表候補生どころか国家代表になっても何らおかしくは無

いほどの実力者を相手に、ミステリアス・レイディのSEも徐々に削れてきていた。

逆転の手段も思いついていない以上、一方的に私が苦しくなる展開だった。

(こうなったら……)

再度蒼流旋にアクア・ナノマシンを集中させ、一点突破しようとした。

けれど、その準備に使ったその一瞬――

「クイックドロウ神速制御」

――ありえないほどの剣速で一閃された。

しかも私はその一撃で体勢を崩され、さらに影内君の追撃を許す形になってしまっていた。

彼ほどの実力者を相手に、この隙は致命的だった。乱舞と言っても良いほどの嵐のような追撃が私を襲い、SEを削り取っていく。

それから間もなく、私のSEは底を突いた。

設定資料：1

オリジナル機竜設定

名称：アスディーク

使用者：影内一夏（旧姓：織斑一夏）

近接戦闘力：A+

機動力：S

制御力：C—

遠距離火力：B

耐久力：C

出力：A

機攻殻剣：ガラティーン（F a t e）

詠唱譜：『——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、〈アスディーク〉』

特性：飛翔型

基本武装

・機竜爪刃^{ダガー}

・竜尾鋼線^{ワイヤーテイル}

特殊武装

・竜毒牙剣^{タスクブレイド}：大型のブレイドに似た形状の、アスディークに二本搭載されている複数の機能を持った主装備。竜牙射剣^{ショットブレイド}と同様の機能をはじめ、ライフルに似た機能、さらに障壁を応用した光剣を発生させる能力を備え、その光剣の形状もある程度自由に換えられる。

・機竜刃鱗^{ブレイドアーマー}：肩、肘、二の腕、指先（五本）、膝、爪先（一本）、踵に搭載されている肉厚の剣。通常の機竜牙剣と同等の機能を備える。

・機竜光翼^{フォトンウイング}：アスディークの翼にあたる部分。大出力の推進器としての機能に加え、普段は使っていない武装用のエネルギーを蓄え、任意でそのエネルギーを指向性を持たせて開放する機能を備える。この開放によって加速するのが本来の使用方法。

神装

・消滅毒^{アナイレイト・ヴェノム}：武装のエネルギーを変質させ、振れた対象物を消

滅させる能力を持たせる神装。発動すると対象部分が禍々しい白色に発光、光が敵に触れると振れた対象物を消滅させる能力を得る。

非常に高い攻撃能力を誇るが、半面、消滅させる速度や範囲は武装の出力に依存する、持続時間が短い、発動時の燃費が悪い、距離減衰が激しいなど難点も多く、使うタイミングには一工夫が必要な神装でもある。

解説：白色を基調とした機体にダークブルーに光るラインが入っている。サイズ的にはバハムートとほぼ同じ。

単純な速度（神装等での移動を抜く）で言えばトップクラスの機竜で、近接能力が重視されている機体。半面、遠距離火力は低く装甲は薄い。

非常に高い速度と近接攻撃力による奇襲や強襲、一撃離脱戦術を得意とする。

名称：ユナイテッド・ワイバーン

使用者：影内一夏（旧姓：織斑一夏）

近接戦闘力：C

機動力：B+

制御力：C+

遠距離火力：C

耐久力：C+

出力：B+

機攻殻剣：ワイバーンとドレイクの二刀流

詠唱譜：『――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。』

へ「ユナイテッド・ワイバーン」

特性：飛翔型、特装型

基本武装

・機竜牙剣

・竜尾鋼線

- ・機竜爪刃ダガ
- ・機竜息銃プレスガン
- ・機竜息砲キャノン
- ・ライフル

など

特殊武装

- ・光学迷彩
- ・探查装置

解説：一夏がIS世界に行くことになった際、アステイグの予備兼補助戦力として預けられた装甲機竜。リースシャルテ・アティスマータが製作した機竜で、キメラティック・ワイバーンの開発ノウハウを基に、ワイバーンとドレイクを掛け合わせている。

キメラティック・ワイバーンよりも直接的な戦闘能力は低く、出力の上昇幅も二割少々に収まっている。しかし、その分ドレイク用の特殊装備が使えるという利点がある。

一夏用に調整されたこの機竜は、性能や武装をある程度アステイグに近づけてありそれなりには戦うことができる。

登場人物設定

- ・名前：影内一夏（旧姓：織斑一夏）

誘拐事件を期に機竜世界へと渡ってしまった人物。その後、三和音トライアドによって発見された。

IS世界側にいる姉とはある事情から疎遠とも呼べる関係になっており、周囲との関係も数名の友人を除けば良くはなかったため、そのことについては親しかった友人のことを除けば特に後悔していない。

来た当初は諸事情により絶望しかかっていたが、アイリ達との交流を通して立ち直り、機竜使いとしての男性としては異常に高い適正、遅咲きの才能によって特級階層になれるほどの実力を手に入れる。

その後は、アイリの護衛兼ルクス直属の部下兼王立士官学園の自警団員兼雑用係となっていた。

再び機竜世界とIS世界を繋ぐ扉が開かれた際、元々そこの住人であったため先遣隊の一人に選ばれる。

第二章：IS学園

第二章（1）：入学試験へ向けて

S i d e 簪

『試合終了！』

勝者、影内一夏！』

審判役の箒があげた勝ち名乗りを、半ば信じられないような気持ちで聞いていました。

「嘘……」

「おお……本当に楯無お嬢様に勝っちゃうなんてね」

隣の本音も口調こそいつもとあまり変わりませんが、その声音には驚きが多分に含まれているように感じました。

「「……………」」

（周りで見ていた更識家家関係者人も言葉もない様子です。

ですけど、それも無理のない事だと思いました。お姉ちゃんはIS関係の勝負ではほとんど負けたことが無く、その強さの証明として一国家の代表の肩書も持っていたくらいです。

そのお姉ちゃんの、敗北。

誰の目から見てもお姉ちゃんが手を抜いていたわけではない事は明らかだからこそ、その衝撃は大きいものです。これでお姉ちゃんの立場が弱くなるなんてことは無いでしょうけど。

（なんで……あんなに、強いんだろう）

今まで何でも出来ると思っていたお姉ちゃんを倒した人に、私は強い興味を抱いていました。

S i d e 楯無

「いや、負けた負けた。

最後は本当に手が出なかったわね」

あそこまで見事に負けると、いつそ清々しい気分だった。

「……一応お聞きしますが、手を抜いたわけでは」

「したように見える?」

「そう、ですか……」

これでもけつこう悔しいんだけどね、という言葉は飲み込んでおく。

だけど、これで確かめておきたかった事は全て確かめられた。

すでに対バケモノにおいて彼が極めて重要な戦力であることは間違いない。だけど、これから私が提案しようとしている事については彼が持つ対人戦技能を確かめることが必要だと感じていた。

もちろん、この前彼らに言ったこの試合の理由も嘘ではない。だけど、それ自体はその気になれば最悪多少強引にでも纏めることはできたし、そうでなくてもこつちの方で解決することは可能だった。なのになぜわざわざこの試合を組んだかと言えば、影内君の対人戦における能力がどれほどの物かを知りたかったから。別に対人戦になると弱いとか考えていたわけではないけど、やはりバケモノと人を相手した時では勝手が違うだろうと思ったのもある。

結果から言えば、並みのIS搭乗者を寄せ付けないほどには強かったわけだけど。

「それにしても……本当にこれを提案するつもりですか?」

「まあね。」

彼の腕前だったら授業は多少サボったところで問題なさそうだし」

「それを仮にも生徒会長であるお嬢様が言いますか……」

そう言っている割に、虚ちゃんの手は「IS学園入学届」と書かれている書類をしっかりと持っている。

さすがは虚ちゃん、頼りになるわ。

S i d e 一 夏

あの親善試合の翌日。

更識楯無の計らいにより宿を手配してもらった俺たちは、話があるという事で再度呼び出されていた。

呼び出されたといっても送迎付きだったため、特にこれと言って自分たちで移動したわけでもない。強いて言えば、初めて見た車という未知の乗り物にアイリさんとシャリスさんが落ち着きなく座っていたくらいで。

一時間と少々の間、更識家お抱えだという運転手の車に乗って着いたのは見事な門の前だった。運転手の案内に従って門を潜れば、古風とも言えるほど見事な屋敷が建てられていた。庭も整備されており、日本庭園という言葉が似合う場所となっている。

「ようこそ、更識家へ」

そして玄関先で俺たちを出迎えたのは、当主こと更識楯無本人だった。

彼女の案内に従い屋敷の中に入り、屋敷の中を案内に従って進むと、それなりに広い部屋に通された。調度品類も落ち着いたもので揃えられており、初めて来る場所にしては、それなりにくつろげるような雰囲気を感じられた。

ただ、アイリさんとシャリスさんは相変わらず初めて見る物の多さに興味と若干の戸惑いを覚えているようだったが。

「大したおもてなしはできないけど、くつろいでちょうだい」

その言葉の後に、彼女の従者を務めている女性——布仏虚さん、だったと思う——が緑茶を運んできてくれた。

それに口を付けつつ（と言っても方が一を考えて俺一人で口を付けた後に暫く経ってからアイリさんとシャリスさんが口を付けることになったが）、更識楯無の話を待つことにした。

「さて、本題に入るわね」

前置きもそこそこに、更識楯無は本題を切り出した。

「影内君……あなた、IS学園に行く気ない？」

なかなか冗談としか思えない内容ではあったが。

「……一応聞くが、IS学園は女子高だったと思うのだが」

本来なら俺が聞く立場では無いのだが、当事者である以上切実な問

題なので流石に聞く事にした。

横にいるアイリさんが過去の事を思い出して天を仰いでいたというのも理由の一つなのだが。

「認識の相違ね。」

あそこはISの操縦を学ぶところ、つまりはIS搭乗者なら問題はないのよ。

それが今までは女性しか乗れないという事になってたから事実上の女子高扱いされていただけで、別に入学するにあたって性別についての明確な制限はないわ」

(なんて暴論だ)

真剣にこの提案を受けて大丈夫なのだろうかと思っただが、そんな俺の考えなど全く気にせずに変更楯無は言葉が続けた。

「それに、結構メリットもあると思うのだけど」

「……一応、聞いておきます。」

どんなメリットがあるんですか？」

再起動したアイリさんが真剣な表情で聞いた。

「まず一点目。」

元々国立校で寮も完備されているものだから生活設備が充実しているのよ。だから、生活に一切困らない事」

「これが寮の資料になります」

元々提供を約束していた衣食住に関する内容だったが、寮の資料、というよりは普通にIS学園のパンフレットを見た限りでは確かに設備の面では充実しているように思われる。ただ一点、周りが女性ばかりという環境だけが気がかりだが。

(王立士官学校アカデミーの時はルクスさんが居てくれたから完全に一人ではなかったしなあ……)

流石に不安が残ったが、なおも更識楯無の話は続いた。

「二点目。」

IS関連においてのセキュリティがどこよりも充実しているのよ。下手な研究機関よりもよほどね。加えて言えばその中の扱いにもかなり制限がついているわ。技術的に流出する心配もほとんど無いわ

よ」

その点は確かに安心する部分だった。そもそもとしてISではなく機竜なのだが、いずれにしても情報の流出、ましてや機体そのものの流出など厳に防止されてしかるべきなのだから。

「三点目。」

万が一影内君が、あのバケモノを倒せるほどの人だつて知られても、すぐには干渉されにくいってこと。一応言っておくと、IS学園には特記事項って言うのがあって、その中の一つに『本学園における生徒は、その在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』ていうのがあるの」

「このページに書いてある第21項がそれです」

再び虚さんから渡された生徒手帳らしき物に書かれていた一文を読み、確かに確認した。アイリさんとシャリスさんも同様にして確認している。

「四点目。」

仮に影内君を隠し続けた後に男性であることが何処からか漏れたとした時、表向きの事はとにかくとして、一部の人たちが手段を問わずに影内君の身柄を狙ってくる可能性があるわ。

でも、最初から男性であることを公表してついでにそのデータも何かしら理由を付けておけば、文句も言われないしさっきの特記事項を使えば干渉される事も無い」

ISではなく機竜であることを隠したままで行動することを考えれば、たしかに男性であることがバレた時のカバー方法を考えておいた方がいい。その意味では、確かにメリットとも取れる。

だが、だからと言ってデメリットが全くないわけでもない。

「貴女達の言っている事にも一定のメリットがあることは理解しました。」

しかし、いくつかの疑問も残っています」

「何かしらっ？」

この疑問を、まず真つ先にアイリさんが切り出してくれた。

「まず一つ目として、私達は諸般の事情によりあまり名前を出したくはないのですが……」

「ああ、それについては問題ないわ。」

入学手続きや必用書類の作成に関してはこっちでやっておくから。最終的に貴方達にも確認はしてもらおう事になるけど。」

「お望みとあれば貴方達の名前を使う事無く作成できるしね」

「どうやら一つ目の疑問は問題無いようだった。」

「二つ目として、行動の自由度に関してです。」

「貴女達がバケモノと呼ぶあの生物を相手する場合や、私達の目的の一つでもある機体が確認された場合、学園通いでは少々やりづらくはなりませんか？」

「それも大丈夫よ。」

「単に私たちの方で届けておけばいいだけだし、ついでに言っておくとあの学園の理事長とはちよつとしたツテで知り合いだから、緊急でも何とかなるわ」

「二つ目の疑問も問題無し。内容が内容だっただけに重要な事だったが、何とかなるようだ。」

「では、三つ目として貴女達との連絡手段をどうするかというのが気になるのですが」

「どうするも何も、私と虚ちゃんは今現在在学中だし、簪ちゃんと箒ちゃんも来年度には入学するから、特に問題ないと思うけど」

「最後の疑問も問題ではなかったようだった。」

「……聞きたい事は全て聞きました。」

「ですが、返答は後日でよろしいでしょうか？」

「ええ、問題無いわ」

「何やら雲行きが怪しくなってきたが、ひとまず今日は帰った。」

「その後のアイリさんたちとの話し合いの結果、ルクスさん達の元にこの話を持ち帰って話し合う方向で纏まった。」

「三日後、入学が決定してしまった。」

S i d e
???

「……」

IS 学園教員室に届けられた書類を、私は無言で読んでいました。といっても、この書類を読むのは三回目です。なんでこんなに読んでいくかって、ただ単に内容が信じられないんです。

「男性の IS 操縦者の入学試験……」

別に入学試験自体は私を含め数名の教員で行われるものですし、その中で私が選ばれたというだけの話なので試験自体には特に思うところはありません。

ただ、その試験を受けに来る人が色々で大問題なだけなんです。

「男性って……聞いてませんよお……」

女性しか動かせないと言われていた IS を動かせる男性。

過去形になったのはこの書類を呼んだ時の事で、何度も目がおかしくなったのかと思いました。

「名前は……影内一夏君、で……」

一応守秘義務はついていますが、その範囲は一般公開のみで、IS 学園の教員などの一部の人には話してもいいみたいでしたけど、それは今の私にとっては些細な問題なんです。

「しかも……」

書類を読み進めてみれば、専用機まで持っているみたいです。小さな新興企業で製作された IS みたいですが、それもかなり特殊みたいで、待機形態が二本の剣だったり、シールドエネルギー S E の残量が表示されなかったり、プライベートチャンネルが繋がらなかったりと、今までの IS の常識をそっくり投げ捨てているかのごとき仕様です。

ここまで来ると癖が強いかかそういうレベルの問題ではなく、だからこそ根本的に試験方法まで考え直さないといけないかもしれません。特に、実技試験でこの問題は深刻です。

何度目かのため息をつきながら試験項目や方法について考え直すうとしていた時でした。

くく遙かにそつと揺らめく 葛藤の記憶に

「ああ、今出ますよ〜」

携帯の着メロが鳴ったので書類を読むのを中断し、一旦電話に出ます。

「はい、もしもし山田ですが」

『ああ、真耶か』

「千冬さん？」

電話の相手はIS搭乗者としては先輩でありIS学園の教師としては同僚である織斑千冬さんでした。

今日は休みだったはずの彼女が、なにか、妙に疲れているような声音なのがちよつと気になります。

「この時間に一体どうしたんですか？」

何か疲れてるような声ですけど……」

『ああ……今面倒な奴が来ててな』

『ええ〜、それは酷いよち〜ちやあ〜ん』

「……大体わかりました」

電話先から聞こえてきたもう一人の声と口調と千冬さんの呼び方から、誰が来ているのかはすぐにわかりました。

二年前の一件以来の付き合いですが、あの人はもうなんか色々常人とは違うのはよく分かっていました。

「それで、今夜もですか？」

『ああ。いつものバーで頼む』

『ち〜ちやあ〜ん、東さんも一緒にい〜〜』

『駄目に決まっているだろう。いいから貴様は早く例の物を仕上げたらどうだ？』

『アイタイイタイアイアンクローは止めて〜〜！』

やはり飲みの誘いでした。

ですが、今日に限っては私も特に断る気にはなりません。現在進行形で頭を悩ませている今の私は、期日に多少の余裕があった事も手伝って誘いに乗ることを即決していました。

のみならず――

「今日は千冬さんの奢りでいいですか？」

——普段なら絶対に言わない事を口走っていました。

『む……構わんが。』

お前から言い出すなんて、珍しいな』

「今ちよつと大変な事になっていまして……」

『そうか……。』

まあ、今晚は精々吐き出すと良い』

「そうしまゝ……」

そして、私は自分のデスクに書類を仕舞うと、千冬さん行きつけのバーに行くために帰りの準備を始めました。

——この入学試験が、二年前の事件の続きになるとも知らずに。

第二章（2）：入学実技試験

S i d e 一夏

「今日の試験は私、山田真耶が担当します。

よろしく願いますね、影内君」

「はい、本日はよろしく願います」

後日、IS学園の入学試験に俺は本当に来てしまった。

と言つても筆記試験はすでに終え、実技試験に入ろうとしている。その筆記試験のために昨日まで連日徹夜同然の状態です試験勉強をする羽目になったため、少々暇が重いのは難点だが。

（まさか、今頃になってこちら側の試験勉強をする羽目になるとはな……）

事前に更識楯無から受け取っていたIS学園用の教科書や参考書類、ついでにその他の必用書籍も揃えてもらったため特に大きな問題は無いと思うが。

「それでは、今回の実技試験について説明させてもらいますね」

「はい」

試験を担当してもらった山田教諭の声に意識を向け、その説明を聞き逃さないように注意する。

「まず、今回の実技試験のルールですが。

本来の実技試験ではどちらかのISのSシールドエネルギーEが尽きるか、十分間の実技試験時間が終了した時のSEの残量を比較して勝敗判定を行うのですけど……影内君のIS、ユナイテッド・ワイバーンでしたよね？ そのISは、事前に渡してもらった資料によると、原因不明の不具合でSEの残量が表示されないんですよね？」

「はい」

そもそも機竜にSEや絶対防御なんて便利な物はない（自動展開の障壁はあるが）のだが、そこに触れると話が拗れるのであえてそのまま進める。

「ですので、今回に限り影内君の勝利条件を変更しようと思います。

影内君、いいですか？」

「内容を聞かせていただけませんか？」

試験時間終了時のSE残量の比較が出来ない以上、確かに勝敗条件の一部変更が必要なことは理解できるのでそれ自体には特に何も言うつもりは無い。

だが、極端に俺だけが有利になるような条件だったら変えてもらうつもりだった。

「はい、そうですね。」

変えるのは試験時間終了時の判定に関する部分で、試験時間終了時点で双方とも健在だった場合は影内君の勝利とする事にしたいのですが」

「申し訳ありませんが、少々変えていただけませんか？」

一応試験でここに来てはいる以上、俺だけが他の受験者より有利に立っているというのはあまり好ましいものではない。こう言った試験はそもそも一律の基準で計るからこそ本来意味のあるものなのだ。その意味で言えば、使い慣れていないISを使って他の多くの受験者が試験している中で、共通の操縦に関しては十分に慣れている機竜を使っているのだからむしろ不利にするくらいでちょうどだろう。

事前にアイリさんやルクスさん、更識楯無にも了承は貰っている。遠慮することは無い。

それに、ユナイテッド・ワイバーンではまだ本格的な戦闘はした事が無いため、この機竜でどこまで戦えるのかを調べておきたい意図もあった。とは言っても、万が一の事を考えて性能水準はISと同程度まで下げているのだが。

「えつと……どのように変えてほしいんですか？」

「双方が健在のまま時間切れを迎えた場合、自分の負けと。それだけです」

「……負け、ですか？」

「はい。」

一応専用機も使っている身ですし、俺だけ有利な条件で試験するのも少々不公平な気がしますしね」

「そう、ですか……分かりました。」

それでは、そのように変更しますね」

「お願いします」

俺の言い分に一応の納得は得たのか、山田教諭は審判役の人に連絡を取るというて通信を始めた。

(いよいよ実技試験という名の模擬戦の始まり、か……)

気持ちを切り替え、ただ始まりの合図が告げられるのを待っていた。

S i d e 山田

(意外といえば意外、でしたね)

男性初のIS操縦者、影内一夏君。彼のIS学園入学の実技試験官をやるにあたり、事前に貰った資料に書いてあった限りのことは知っていました。但实际上にあった彼は思っていた以上に公平な人物のようでした。

こういった試験で自分が有利な状況を用意してもらっているならそれに預かるのが普通とも言えますが、彼は自分の機体や試験の公平性を考慮し、あえて不利な条件を選びました。

それも、かなり不利な条件です。もし彼が勝とうとするなら、時間内に私のSEを0にする以外の手段が無い。乱暴な言い方をしてしまえば凌ぎ切れればよかつただけの最初の条件とは雲泥の差があると。言っているくらいです。

(でも、手は抜きませんよ)

個人的には彼に好感を持ちましたが、それとこれとは別。試験には一切手を抜きません。それが先生としてやる事です。

審判役を担当してもらう事になっているエドワース・フランシイ先生にも連絡を入れ、ルールの変更を伝えました。驚いていましたが、彼が言った理由を聞いて納得したみたいです。

『それでは二人とも。機体を展開し、準備してください』

エドワース先生が準備を告げ、それに従い私達もそれぞれの機体を

展開します。私は試験用に調整されたラファール・リヴァイヴを。

対して、影内君は二本の剣を綺麗な動作で抜剣して――

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。へユナイテッド・ワイバーン」

――事前の資料にも載っていた、起動用の言葉を言いました。中世の騎士のようなその姿を、ちよつとカッコいいと思ったのは内緒です。

コネクト・オン
「接続開始」

改めて影内君のIS、ユナイテッド・ワイバーンを見れば、その大きさが数値ではなく実感として感じれます。私の知る多くのISよりも大柄で、ともすれば圧倒されそうになります。また、普通の足以外に単純な構造の二本の足がついた四本足だったり、腕部がロボットアームになっていたり、特徴的な部分が多いなども感じました。

『2人とも、準備は大丈夫ですか？』

「私はいいですよ」

「いつでもどうぞ」

私と影内君からの返事を聞いたエドワース先生が高らかに宣言します。

『それでは、IS学園入学実技試験。山田真耶、対、影内一夏。

バトルスタート
「戦闘開始！」

私と影内君の試験試合の開始です。

(さて、初手はどう出てくるんでしょうか?)

初の男性IS操縦者がどう出てくるのか、ほんの少しの楽しみも交えながら私は普段からよく使うサブマシンガンを構えました。

この時の私は油断しているつもりはなく、十分に影内君の動きを注意していたつもりでした。

ですが受験者相手ということもあって、十分であつても万全ではなかったのかもしれませんが。

結論から言えば、影内君の初撃を私は避ける事が出来ませんでした。何故かという、単純に動作が見えなかったからです。分かったこ

とは、途轍も無い速さで何かを投げたという事だけ。

ほぼ反射的に呼び出して構えた盾で防げたのは、幸運でした。

キーン！

金属同士が衝突する甲高い音が鳴り響き、サブマシンガンで反撃しようとした時でした。盾の向こう側から、すでに影内君が接近してきているのが見えたのは。

(速い！)

その速さにも驚きましたが、それだけには終わりません。彼は私が斜めに構えていた盾を足場にして空中で前転すると、いつの間にか両手に握っていた大剣でその勢いのまま切りかかってきました。

咄嗟に前に踏み込めたので、大剣はかすただけに終わりました。振り向きざまにサブマシンガンを打ち込みますが、彼は素晴らしい反応で横にステップして避けるとそのまま私のほうに再度接近してきます。

(でも、近づいてくるだけなら……！)

サブマシンガンで牽制しつつ、盾を持っていたほうの手にハンドグレネードを呼び出します。そして、近づいてくる瞬間を見計らいピンを抜いてその場に設置。私自身はその直後に後退します。

並みの相手なら引つかかってハンドグレネードの爆発に巻き込まれますので、その後に私自身で射撃して追撃という戦術が成り立ちます。また、回避したとしても私との距離は開くことが多いので私の得意な射撃戦に持ち込むことができることが多く、総じて私の有利に運ぶことが出来るといっていいでしょう。

さすがにモンド・グロツソなどの大会に出場する一部の猛者には通じないこともあります。少なくとも入学試験のレベルで通じないという事は無いと思っていました。

ですが、影内君は『一部の猛者』側の人みたいでした。それも、普通は前進を止めてハンドグレネードに近づかない事で対処するのですが、彼はさらに加速して接近するとあろう事か――

カンツ

――グレネードを回し蹴りの要領で蹴り飛ばしたんです。

(そんな方法で……!?)

回避した人は今までにも見たことはありませんでしたが、まさかハンドグレネードを蹴り飛ばすような人が出てくるとは思った事もありませんでした。

蹴り飛ばされたハンドグレネードは少し離れた所で空しく爆発し、影内君の前進を止めるのに全く役立ってない。今までほとんど無かった状況に、一瞬だけ反応が遅れました。

私が作ってしまったその隙に、影内君は再度接近し大剣での攻撃を仕掛けてきています。

ガギャライ!

すぐに我に返り、盾で大剣を受け流しサブマシンガン二挺で反撃しようとしたのですが、剣を受け流された直後に彼が放ったカポエラのよな蹴りが私のサブマシンガンを捉えたため射線が全く合いません。さらに、その回転の勢いを殺さずに再度大剣で切りかかってきます。ですが、今度こそはサブマシンガンが間に合うと思っただけで構えた直後――

ガッ

――肘が飛んできました。

(フエイント!?)

大剣を構えた動作はフエイントで、肘打ちを狙っていたことに気づいた時にはもう手遅れでした。

肘打ちが正確にサブマシンガンの片方を捉え、私の手の中からそれを弾き飛ばしていました。さらに、肘打ちに使ったほうとは別な手が持っていた大剣はそのまま振りぬかれ、対応できなかった私のSEを削り取っていききました。

(強い……!)

もはや最初の受験者相手という気持ちなど一切無く、それこそ現役時代の試合に臨むような気持ちで私はこの状況を好転させるための一手を打ちました。

S i d e 一夏

(さすがに一筋縄じゃいかないか……)

普段から使い慣れているアステイグではなくまだ受け取ったばかりのユナイテッド・ワイバーンという事を差し引いても、山田教諭は強かった。

実のところ、最初の神速制御クイックドロウを用いての機竜爪刃投擲ガーは牽制目的だったのでダメージを与えられるとは思っていなかったからいい。だが、その後にやられたハンドグレネードは焦らされた。あのまま後退して距離をとれば山田教諭の思う壺であることはすぐに分かったためあえて蹴り飛ばしたが、もし少しでも加速を始めるのが遅ければ爆発に巻き込まれていたことだろう。

そして、今しがた山田教諭が行ったのもまた、意外と言えば意外だった。

「ハアッ！」

(……シールドバッシュ!?)

試合前の雰囲気からではあまり考えられない叫び声をあげながら盾を構えての特攻。今までの行動から考えて射撃が得意なんだろうとばかり考えていたため、山田教諭のほうから格闘を仕掛けてくるのは予想外といえれば予想外だった。

機竜牙剣ブレード二振りを振りぬいて迎え撃ったが、それこそが山田教諭の目論見だったらしく当てた直後に後ろへ向けて加速し距離をとった。

(なるほど……嵌められたという訳か)

まんまと山田教諭の目論見通りに動いてしまったことに少しの悔しさを感じつつも、山田教諭の次の一手に対応するため武装を切り替えた。

S i d e 山田

(何とか距離は取れましたね……これで射撃戦が出来ます)

決して得意ではない格闘を仕掛けた事が今回に限り功をそうしたのか、やつと影内君との距離を離すことに成功しました。

ですが、油断は禁物です。さつきまでの彼の動きを見れば、気を抜いた瞬間に接近戦に持ち込むくらいの事はやってのけるでしょう。

(でも、射撃戦なら……)

彼の近接技能が十分高いことは既に分かりましたが、射撃戦なら私も得意ですし、そう簡単には負ける気はありません。

サブマシンガンを一旦収納し、両手にアサルトライフルを展開。取り回しと連射性能こそサブマシンガンより劣りますが、射撃精度や単発の威力においてはこちらのほうが上です。

そして射撃し始めた私ですが、影内君もただやられるだけではなく、その両手にそれぞれ形状の違う銃を握り反撃してきました。

そのまま私達は適度に移動しながらの銃撃戦へと突入していきま

射撃戦に纏れ込んだ私達でしたが、どうやら影内君は射撃はそこま

で得意ではないみたいでした。握っている銃は種別すればマシンピ

ストルとライフルに性能が近いものでしたが、いずれとも数を撃って

自身の射撃精度を誤魔化している印象です。

(それなら、今ここで……！)

どちらとも地表に降りた瞬間を狙い一気に影内君のSEを削るべ

く、私は射撃が途切れないように片方ずつ武器を切り替えました。

右手には大口徑ライフル。左手にはガトリングガン。

いずれも火力に優れ、片方は高精度の単発射撃が、もう片方は弾幕

による面制圧とそれぞれに強みのある二挺です。

それで一気に勝負を付けようと私が目論んだ時、影内君も動きまし

た。

一気に右へと動くと、それまで使っていた銃をしまつて別なものを

出しています。見るからに大口徑の射撃装備で、当たれば手痛い一撃

になるだろう事は想像に難くありません。

ですが、大口径の重火器に切り替えた直後の私では避けるのに少々
厳しいものがあります。

(ちよつと危ない気もしますけど……)

影内君がその重火器のトリガーを引いた瞬間、それまで右手に接続
していた盾で受けます。ですが、ただ受けるだけでは姿勢を崩されか
ねないので角度を付け、さらに着弾した瞬間に盾をパージして衝撃を
逃がします。

再度大口径ライフルとガトリングの照準を付け、影内君も加速して
私へと近づこうとしているその時――

『試合時間終了！』

特別ルールにより、勝者、山田真耶！』

――エドワース先生の、試合終了の宣言が会場に響きました。

Side 一夏

「終わり、か……」

どうやら思っていたよりも長い時間射撃戦を続けていたらしい。

(正直、決着が付くまで続けたかったが……削りきれなかった、俺の未
熟か)

元々この特別ルールやユナイテッド・ワイバーンの使用を決めたの
は俺だったのでそこについては特に不満に思うことは無い。結果的
には負けたが、試合自体は思っていた以上にやりがいのあるものだっ
た。

その意味で言えば、最後まで続けたかったという思いも多少は出て
くるというものだった。ただ、時間内に倒しきれなかったという意味
では俺自身の未熟なので、過ぎた思いなのだろうが。

「凄かったですね、影内君！」

あれだったら絶対に合格間違い無しですよ！」

お互いに纏っていた機体を解除した後、山田教諭が少し興奮気味に

話しかけてきた。

「それでしようか？」

大見得切った挙句に負けた馬鹿者が一人いただけだと思えますが「そんなこと無いですよ！ この年であんなに戦える人なんて、数えるくらいしかいないんですから。」

入学したらよろしくお願いしますね」

少々気が早いのではないかと思う発言と過分な評価があつた気がするが、その言葉自体は素直に受け取ることにした。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

無難に返しつつ、時間も押していたので帰り支度を始めた。

Side 山田

「それでは、本日はありがとうございました」

「はい。」

気をつけて帰ってくださいね」

試験が終わった後、帰っていった影内君をエドワース先生と一緒に見送りました。

「それにしても、彼……影内一夏君、でしたか？

強かったですね」

「はい、本当に。」

あの調子だったら、卒業するころにはモンド・グロツソの部門優勝者とかにもなれそうですね」

「男性に乙女ヴァルキリーって名前もどうかとは思いますがね」

「……それもそうですね」

他愛も無い会話をしながらも、さっきの試合のことが頭から抜けませんでした。

今まで高機動格闘戦で強い搭乗者と言って思いつくのは、やはり千冬さんです。ですが、千冬さんと彼では大まかな基盤的部分で似ているところはあっても、一刀流と二刀流、ほぼ剣術のみと体術交じりの

複合武術、一撃と連撃と、細かい部分では対照的といっても良いほどの違いがあります。

彼がどのような搭乗者として大成するのか、早くも楽しみな自分がいきました。

第二章（3）：初日

S i d e 一夏

「入学おめでとうございます。私は副担任の山田真耶です。皆さん、これから1年間一緒に頑張りますよね！」

I S 学園登校初日。

実技試験の時に試験官を勤めてもらった山田教諭が教師としては眩しいばかりの笑顔で挨拶したが、クラスの反応はあまり良く無いものだった。

「……………」

クラスのほぼ全員からの無視である。山田教諭に限らず、このような対応をされれば誰だって辛い物があるだろう。

「あのお……………」

だが、それでも半泣きになるとは思わなかった。この前の実技試験の時に相対した山田教諭とあまりにも雰囲気の違いすぎて若干の戸惑いさえ覚えるほどだった。

ただ、生徒たちの反応も考え様によっては無理ならぬ事だろう。つい昨日まで、この学園はその目的と学ぶ物の性質により事実上の女子高だったのだ。

その中に、一人だけ男子が入学すればどうなるか。答えは今この瞬間にあり、被害は主に無視された山田教諭に向かっている。

（とは言え、俺も視線を集めたいわけじゃないんだけどな……………）

珍獣よろしく不本意にも視線を集めることになった俺は、色々と思う事はあったがひとまずこの状況をどうにかすることにした。

「よろしくお願いします」

流石にこのままでは何を進めるのにも支障が出るだろうし、俺個人としても実力、人格の揃った人物であろう山田教諭を蔑ろにするような反応は快くは思わない。

だが、だからと言ってここで啖呵を切るのも好ましくは無い事なので軽い対応に済ませておく。

「……………よ、よろしくお願いしますー！」

連れて我に返った他のクラスメイトが挨拶を返し、ようやく
S H Rが進められそうな状態になってきていた。

その状況を逃さず、山田教諭がこの学園で生活するにあたり必要な
注意事項などの説明を始める。

さつきまでとは打って変わり、この説明を聞いていない者はいない。それもそのはずで、この学校はその性質上の問題として普通の学
校よりも色々な面で規則が厳しく、同時に例外無い全寮制でもある。
つまりここでの規則は生活に直結するのである。

「それでは皆さん、出席番号順に自己紹介をお願いします」

そう時間をかけずに説明は終わり、次いで山田教諭の指示のもと自
己紹介が始まる。

順に立ち上がって簡単な自己紹介をしては座っていく状態が続い
た。その中、ついに順番が回ってくる。

「影内一夏。所属している会社で不慮の事故によりISを動かしてし
まったためこちらに来ることになった。

剣術と体術を少々嗜んでいる。趣味は読書。

思うところはあるかもしれないが、気楽に接してくれると助かる」
自己紹介自体は簡単に済ませ、そのまま席に戻ろうとする。正直な
ところを言えば、仕事の都合もあってあまり深くは関わり合いたくは
ない。だが、全寮制の学園で生活することを考えれば人付き合いも重
要なものになってくることは知っている。

寮制の女学校というと王立士官学校が思い浮かぶが、あの学校だつ
て外出自体は自由にできた。対して、この学校は一々外出届を出さな
ければいけない。普段は缶詰と言ってもいい状況は、人付き合いをせ
ざるを得ない状況ともいえるだろう。

(なんだってこんな立地にしたんだ……)

そして立地。東京湾に浮かぶ孤島と化しているこの学園は、一応通
常の橋とモノレールの二つの手段で行き来できるが、それ以外で生徒
や一般職員が行き来する手段はほとんどない。なぜこんな所に建て
たんだ。

そうこうと思考していたが、次の瞬間にそれが全て遮られる事にな

る。と言うのも――

「「きやあああああああああああッ!!」」

――爆音と間違えるレベルの音が女生徒たちから発せられたからだ。

それも、一人や二人ではなくクラスの女生徒の実に八割方。機竜での戦闘で爆音には慣れていているが、なぜこんな場所での例えを出さなければいけないほどの音を聞く羽目になっているんだ。

咄嗟に耳を塞ぎ被害は抑えたが、叫び声が聞こえなくなってくると今度は各々が勝手に騒ぎ出していた。

「イケメン！ イケメンよ！」

「やった！ 入学がこの年でよかった！」

「生まれてきてよかった！ お父さんお母さん有り難う！」

「Y p a a a a a a a a!!」

「私達の満足はこれからよ！」

一向に収まる気配が無い騒ぎに色々と面倒になってきたので、そのまま無視して席に戻ろうとした。

だが、そこで――

ヒュッ

――横合いから何かが振り下ろされた。

もちろん、受ける気などさらさら無いので避けたが。

ひとまず避けれた事を確認し、いきなり殴りかかってきた相手を確認しておく。結論から言えば、見知った顔が出席簿を振り下ろしたようだった。

「……ッ！」

一方、殴ってきた相手はと言えばその顔に若干の驚きを見せていた。が、俺の顔を確認した瞬間に一層驚きの色を濃くした。

が、俺には関係の無い事だったので妙な事にならない内に早々に席に座ることにした。

一方、殴ってきた相手もいい加減に表情を元に戻し、まず山田教諭に挨拶していた。

「山田先生、遅くなって申し訳ない」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

最初半泣きになっていましたよね、という無粋なことは山田教諭の名誉のためもちろん言わない。

軽い挨拶を終えてそのまま自己紹介を始めていた。

「さて、諸君。私が織斑千冬だ。」

私の仕事は諸君らをこの一年でIS操縦者として使い物になるまで鍛え上げることだ。私の言う事はよく聞き、良く理解しろ。分からない事は分かるまで教えてやる。出来なければ出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の指示には『はい』か『YES』で答えろ。いいな?」

正しく暴君の発言。だが、入学前に例年のIS学園の一年について更識楯無から聞いた話を合わせて考えれば先の発言の理由も推察出来ない訳でも無い。

今の今まで戦闘とは無縁のところになっていた人間が、実銃を持つ。それも、モンド・グロツソ等の大会で使われるイメージが強いためか、さながらスポーツ用品のような感覚で。

人を十分以上に殺せる機体を、その自覚なく使う。それがどれだけ危うい事なのかなど、言うまでもない事だろう。

その中で言う事を聞かせようとするのであれば、多少は言い方もキツくなるのかも知れない。

もともと、肝心要の女生徒達には伝わっておらず、さらに騒ぎが大きくなったただけだったが。

「ほ……本物よ！ 本物の千冬様よ!!」

「来た甲斐があつたわ!」

「勝った! 第三部完!」

「もう満足するしかないわ!」

(……………ここまで来ると尊敬と言うより崇拜だな)

かつての姉が自分の手で得た栄誉によって今の事態を引き起こしているのだから、それについてはどうと思う事もない。

この女生徒達の言動にはある種の恐ろしさを覚えたが。

「……………まったく、毎年こども馬鹿者ばかりよくも集めるものだな。そ

れともアレか？ 私のクラスにばかり馬鹿者を集めているのか？」
態度からして本心から言っているのだろうが、所謂有名税と言う奴
だろう。それでかつての姉がどうなるうが今更知った事ではない。
相対して思ったことなど精々、仕事の邪魔にならなければいいか、
という程度だった。

「ええい、静かにしろ！」

早く自己紹介の続きをしないか!!」

いい加減に織斑千冬が声を張り上げ、自己紹介の続きを促した。

その声を合図によりやく自己紹介が再開される。その後は、多少急
ぎ足な印象はあったが、なんとか全員分の自己紹介が終わり、ちよう
どタイミングを計ったかのようにSHRの終了を告げる鐘がなった。

「SHRは終わりだ。諸君にはISの基礎知識を半月で、その後の半
月の実習で基本動作を覚えてもらう。いいな？」

装甲機竜ドラッグライドを扱っている身としては半ば関係がないが、この世界で活
動するにあたり知識を得る分にはむしろ有利に働くだろうし、座学は
頑張ることにしよう。実技は内容による。

それだけ考えたところで、自分の席に影が差したことに気が付い
た。

「影内、少しいいか？」

話しかけてきたのは剣崎箒。思う所のある人だが、今は聞く事では
ないと思っただけそのまま話を続けることにする。

「ああ、どうかしたか？」

「いや、大した用じゃない。全く知らない仲間でもない事だし、同じクラ
スになった者同士挨拶くらいはしておこうかと思っただけ」

「そうか。一年よろしくな、剣崎」

「ああ、よろしく頼む」

お互いに簡単な挨拶を済ませ、そのまま席に戻ろうとする。

が、そんな中で早速食いついてきたクラスメイトがいた。

「え？ 影内君って剣崎さんの知り合いなの!？」

「何か凄い繋がりを見た気がするんだけど！」

「お二人はどんな関係なんですか!？」

食いつきっぷりが半端無い。それに、話しぶりを聞くにどうも剣崎も目的らしいが。

「……剣崎、これは一体?」

「ああ……多分、あの時の記事が原因だな。」

大袈裟な記事にするものだから」

「何があつたんだ?」

「え!? 影内君知らないの!」

「どうやら随分と有名人らしい。」

「こんな反応が出てくるくらいだし、よっぽどのだろう。」

「暫く前から自分の事で忙しくてな。」

「良ければ教えてもらってもいいか?」

「食いついてきたクラスメイトの一人が「いいよー」と言いながら一冊の雑誌を取り出した。」

「インフィニット・ストライプス」と銘打たれたその雑誌は、真紅の装甲を纏いあの長大な刀を今にも振りぬこうとしている剣崎が表紙を飾っていた。」

「剣崎さんはIS適性Cでありながら日本のIS開発の総本山でもある倉持技研の企業代表に上り詰め、さらに代表候補生撃破の実績も持つ実力者!」

「適性主義なんて言われるIS業界に現れた、立志伝中の人だよ!」

「これを皮切りに随分と熱く語ってくれたところから察するに、よほど人気らしい。ただ、熱く語るクラスメイトとは反対に、剣崎は「やめてくれ……」と言いながら顔を赤くしていたが。」

「やがて騒ぎが収まり剣崎やほかのクラスメイトが各々の席に戻ったところ、また誰かが席に近づいてきた。」

「少しよろしくて?」

「現れたのは金髪をロールにし、青い瞳を携えた少女。どことなく貴族のような印象を持たせる雰囲気を感じていた。」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットか」

「あら、私の自己紹介をちゃんと覚えていたのですね?」

「まあ、な」

何処が気に障ったのか、オルコットは少し眉を吊り上げながら高圧的な態度をとってきた。

「まったく……そのやる気のない態度は何なんですか？　せつかく代表候補生たる私が話しかけてあげたというのに」

(……面倒だな)

確かに一国の代表の候補に選ばれている時点でエリートである事には違いないが、言葉の節々に他者を見下しているような部分が見受けられる。

相手をしていて気持ちのいい相手ではないが、問題を起こすのも面倒になりそうなので、どうしたものかと考え、いい切り上げ方を思いついた。

「それより、いつまでもここにいていいのか？」

「まあ、まるで話す気がないかのような……」

「そうじゃなくて、次の授業までもう一分切ってるのだが……」

時計を見ればもう間もなく次の授業が始まることを暗に告げている。このままここで話せば、元々座っている俺はともかくオルコットは間違いなく間に合わないだろう。

「……ちゆ、忠告感謝しますわね！　それではまた！」

現実を確認したオルコットはすぐさま席へと戻っていった。

(……次の休み時間は外にでも行くか)

面倒事の回避方法を考えながら、二限目から本格的に始まる授業の準備を始めた。

Side 箒

(……特に反応は無い、か)

私は自分の席に戻り、さっきの影内の反応を思い出していた。

特にこれと言って特筆することはない、ごく普通のありふれた対応。

だからこそ、私の想像が外れているだろう事を思わせた。

(もし、影内が織斑一夏なのだとしたら、織斑千冬に会った時点で何かしら感情の起伏があると思っただけが……)

助けられなかったことを憎んでいるにしろ、未だに家族として愛情を持っているにしろ、何かしらの反応があるはずだと思った。

だが、今話した限りでは特にこれと言って何かを思っている様子はなかった。強いて言えば、無関心と言ったところだろうか。

(やはり、影内は影内か)

別に外れていたからと言っても、影内の事を好意的に思っていることには変わりはない。在学中くらいは学友としていい関係を築ければいいと思っっている。

(それに、仮に一夏なのだとしても、何も言わないのではな……)

もし仮に彼が一夏なのだとしても、名前を変えた事に対して、特に何も言わない。当然ながら私にも一夏のこと全てが全てわかるというわけではないが、それでも並々ならない何かがあったらどう事は想像に難くない事だった。

それに私も一度「篠ノ之」姓を捨てた身だ。誰かと家族でいることを放棄したという意味では、私も偉そうなことを言えた義理ではない。

だから、無理に聞くような事はしない。

今の私にできることなど、それくらいしか無いのだから。

Side 一夏

自己紹介とその後の休み時間に一悶着あったものの、その後の二限目と休み時間はつつがなく進んだ。

そして三限目。二限目と違い教壇には山田教諭ではなく織斑教諭が立っていた。内容は武装の特性についての説明で、よほど大事なのか山田教諭までメモを取る準備をしている。

「ああ、その前にクラス代表を決めねばならんな」

唐突に織斑教諭が言い放った。

「先生、クラス代表って何ですか？」

クラスメイトの一人の質問に、織斑教諭が説明を始めた。

「クラス代表とは生徒会の開く会議や委員会に出席などする、有り体に言えばクラス長のようなものだ。それと、クラス対抗戦にも参加する。」

ついでだが、クラス対抗戦とは入学時点からの各クラスの実力推移を測るために一定期間ごとに行われる大会形式の模擬戦だ。

代表は一度決まれば一年間変更は無い。くれぐれも慎重に選べよ」果てしなく面倒臭い上に仕事の方に支障が出かねない。

推薦されても早々に辞退しようかと考えて――

「自他推薦は問わん。ただし、推薦された者に拒否権は無い」

――とんでもない発言を投下した。

文句しかない状況だったが、その言葉を聞いてクラスメイト達が騒ぎ出したため文句を言うことができない。

「はい！ 影内君を推薦します！」

「イケメンだしね！」

「剣術体術やってるって言ってたし！」

早速面倒事が転がり込んできた。どうやって断ろうかと考えていたが、どうにも推薦されたのは俺だけじゃないようで――

「私は剣崎さんを推薦します！」

「やっぱり強いし、実績もあるしね！」

―― 剣崎も推薦されているようだった。当の本人は微妙な顔をしていたが。

だが、これだけには終わらず。

「納得がいきませんわ!!」

私は自薦します！」

今度はオルコットが手を挙げていた。ただし、俺や剣崎とは違い自薦だった。

普通だったらこの時点で自薦したオルコットだったのだろうが、生憎とそう上手く事は運ばないようだ。

「二応の実績がある剣崎さんだったらまだ分からない事ありません

が、男性が代表など恥晒しもいいところですよ！ それもただ物珍しいからなどと……無能を喧伝しているような物でしょう!!

いいです事？ クラス代表は、入試主席だった私がなつてしかるべきなのです！

それをわざわざ適性Cや、何処の誰とも知れない男などにやらせるなど……」

最初の自薦の宣言だけで止まっておけばいいものを、余計なことを言い出した。しかも、節々に明らかかな問題発言も含まれており、国の顔になるかもしれないエリートである代表候補生としては褒められたものではない。

この先も続きそうだが、声が大きいという事もあって、他のクラスへの迷惑になり、授業の進行にも支障が出かねない。止めに入って適当にクラス代表をやってもらおうか、と考えたが。

「そこまでにしておけ」

意外といえば意外な事に、織斑教諭が止めに入った。

「そんなに納得できないなら、文字通り実力で決着を付けたらどうだ？」

方法は恨みたくなかったが。

「……俺はクラス代表なんて一切やるつもりは無いんだが」

「私も自薦した人が居れば譲るつもりでしたが」

俺と剣崎が揃って辞退する旨を述べたが、どうやら聞く気はないようで——

「推薦された者に拒否権は無い」

——この一点張りだった。話すという事を知らないのだろうか。

「……俺は面倒が嫌いなんだ」

思わず愚痴が漏れたが、誰にも聞こえていないようで無視された。

「フフ……いいでしょう」

私、セシリア・オルコットはあなた方お二人に決闘を申し込みますわ！」

唯一乗り気だったオルコットが宣言してしまったことにより、ついに決定してしまった。

「では一週間後に三連戦の形でクラス代表決定戦を執り行う。場所は決まり次第伝える。」

影内、剣崎、オルコットの三人は各自準備しておくように」

こうして、早くもIS学園で面倒事に巻き込まれる羽目になった。

第二章（4）：依頼

S i d e 一夏

（面倒な事になったな）

三限目の決闘騒ぎ以降は特に問題も無く授業が進み、そのまま放課後になっていた。

一年生にとっては登校初日という事で部活動の見学や寮の部屋での荷解きなどやる事は多いためか、多くの生徒達は教室から足早に去っていく。その中に紛れて自分も早々に立ち去ろうとした時だった。

「影内、お前は少し残れ」

立ち去ろうとした所に織斑教諭に呼び止められた。

三限での事もあったためあまり付き合いたくは無かったが、無視して立ち去っても後で呼び出されそうだったので結局残ることにする。

そして教室に残っている人が俺と織斑教諭だけになってから話し出した。

「影内、お前がクラス代表の決定戦に使うI Sだが、予備機が無い。ここで学園、引いては政府からお前に専用機が支給されることになった。」

詳しい日時はまだ決まっていな、学園に届き次第受けと……
「不要です」

学園だけだったらまだしも政府という時点で薄々支給の真意も察せた。

世界に467機しかI Sのコアは存在しない。そして、唯一I Sのコアを製造できる篠ノ之束はすでに製造をしていないと言われている。現存するI Sのコアもアラスカ条約の取り決めの下、厳しく管理されていると言われている。

用は数が少なく実用上の問題としても貴重なものがI Sコアであり、そんな貴重な物を預けられるのは本来代表候補生などの実力者か研究機関に所属する人間くらいな物なのだ。

それを何処の馬の骨とも分からない人間に預けるといふのだから、

どうせ、表向き世界に唯一の男性IS操縦者のデータ採集が目的だろう。

だが、そんな事は俺には関係無い。そもそもとして扱っているのが装甲機竜ドラッグライドライトなので、本当はISは扱えそうに無いというのもあるが。

「専用機の事は既に決定事項だ。拒否権は無い。」

それに、機体も無しにどうやってクラス代表の決定戦を戦う気だ？」

元々クラス代表の決定戦は貴女が無理矢理決めたことだろうに、という言葉は飲み込んでおく。仮にも教師に対する言葉でない事位はさすがに理解していた。

「入学時の書類にも書いたと思うのですが、既に専用機は持っていません。」

それに、今から新しい機体に取り換えたところで機種転換にかける時間も短いですから、いい結果も残せないでしょう」

だから、個人の文句では無く事実だけを述べることにした。

機種転換のことにしても実際に一度経験したからこそだった。かつて通常の《ワイバーン》から手に入れたばかりの《アスディーク》に機竜を変えようとした時、性能差や武装の特性の違いに戸惑い、慣れるのに少し時間が必要だった思い出がある。

(今となつては懐かしいか)

第三遺跡ルイン・方舟アークで出会い、今ではどの機竜よりも馴染むほどになった神装機竜《アスディーク》。

まだ自分が使う事になったばかりのころを思い出していたが、すぐに思考を切り替え今話すべきことを話しておく。

「……とにかく、専用機は受け取れ。」

これは命令だ」

「この学園では、一教師に専用機の乗り換えを命令する権限があるものなのですか？」

これ以上は無駄そうなので、どこかでボロが出る前に早々に退散することにしました。

「おい、影内……」

「もし本当に乗り換えさせたいんですしたら、是非自分の会社の上司に掛け合ってください。」

受理されるのであれば、そちらの方がよほど現実でしょう」

もつとも、実際にはその会社も入学前に更識楯無に手を回して貰いでつち上げた架空企業なので、実態などありはしないのだが。

だが、これからこの一件に関して協力してもらおう事を考えると今から気が重かった。

「一応言っておくが、支給される機体の性能は折り紙付きだ。

最初から単一使用能力ワンオフ・アピリテイの零落白夜も使える……」

「最初に不要と言ったはずですが」

いい加減にしてほしいと思いつながら、席を立ち早々に更識楯無の元にこの件の処理を頼み込むため向かおうとした。

だが、そこにさらに第三者が現れた。

「あ、影内君！」

「ここに居ましたか」

現れたのは山田教諭。その手に大事そうに何かを持っていた。

「山田教諭。」

俺に何か御用ですか？」

「ええつとですね……まずはこれをどうぞ」

差し出されたのは鍵だった。繋がれたタグに四桁の番号が彫つてある事と今この場で渡された事から察するに、IS学園の寮の鍵だろう。

「影内君の寮の部屋の鍵です。」

今日からはそこで生活してください」

それはいいのだが、事前に聞いていた話と違う。確か、男性操縦者という事で部屋を決めかねているという話だったはずだが。

「確か、一週間は自宅からの通学だったと思うのですが」

「そうなんですけど、今回一人部屋だった人が同室を了承してくれたので一時的な措置としてその部屋に入って貰う事になったんです」

「そつちの方が色々安全ですしね」と山田教諭がのんびりとした口調で締めた。事情が事情なため突然であるのも仕方がないと思い、

素直に鍵を受け取ってその場を後にする。

織斑教諭が何か言おうとしたみたいだが、気付かないフリをして早々に立ち去った。

「いっちゅ。ちよつといいかな〜?」

鍵に付いているタグに彫られている番号と掲示板を頼りに廊下を歩いていたところ、妙に間延びした声に呼び止められた。

「……その『いっちゅ』ってのは俺の事か?」

「そうだよ。一夏だからいっちゅ」

呼ばれ方には特にこれと言って拘ってはいないので自分の事だとわかればいい。それにしても独特だとは思ったが。

「それで、俺に何か用か? えつと……」

「布のほとけほんね仏本音だよ。」

楯無お嬢様たちが呼んでいるから、生徒会室にご案内しま〜す」

苗字と要件からして、やはりそつち側か。

(まあ、ちよつどいいか。

俺も用があつたし)

向こうの用件も聞かなければならないし、ついでに俺の用件も聞いてもらおうと思ってそのまま彼女について行った。

Side 楯無

「いっちゅ〜連れてきました〜」

生徒会室の扉が妙にゆっくり開くと、その先から本音ちゃんと本音ちゃんに連れられた影内君が入ってきた。

「生徒会室にようこそ」

私の言葉を聞くと同時に虚ちゃんが開いていた椅子に座るように勧め、間もなく全員が席に着いた。

今生徒会室にいるのは私に虚ちゃん、簪ちゃんと本音ちゃんに籌ちゃん。そして、影内君ともう一人。その人たちがテーブルを囲むようにして座っている。

「さて、まずは今日影内君に来てもらった目的だけ……」

「ちゃんとした挨拶は初めてになるね、影内一夏君。」

私はくつわぎじゆうぞう轡木十蔵。一応、この学園の理事長をやらせてもらっている」

「表向きは妻にやってもらっているがね」と冗談めかした口調で簡単な自己紹介を終えた初老の男性。普段はこの学園の用務員という立場に甘んじているけど、その実この学園の実務をほぼ全て取り仕切っている人。

簡単に言えば、この学園内でこの人に逆らえる人はいない。もつとも、手腕と良心が備わっている人でもあるので逆らおうとする人自体がほとんどいないのだけど。

「ご丁寧ありがとうございます。」

「しかし、何故一生徒に過ぎない自分に対してわざわざ……」

「ああ、そういうのはいいよ。」

私も更識君たちの側の人なのだしね」

その一言で影内君は察したらしい。「そうですか」と一言返事を返し、影内君はそれ以上言わなかった。

そう、今日影内君に来てもらった最大の理由は彼と轡木さんを引き合わせる事。本来なら入学前にやっておくべき事だったんだけど、日程の都合で今日までずれ込んだ。

元々轡木さんとは協力の約束を取り付けているけど、諸々の刷り合わせのために実際に会ってもらった。

「さて、まず学園内での君の扱いについてだが。」

普段は一般の学生と同じように、教師部隊で対処可能な非常事態が起こった時に裏口で対応してもらいたいのだがね……」

「非常事態、というのは……バケモノ、の事でいいのでしょうか？」

ただの確認なのか、影内君は特にこれといって表情を変えないまま。轡木さんも想定範囲内なんでしょう、微笑さえ浮かべながら頷いている。

「有体に言えばそうだね。」

私も、更識君たちから映像を見せてもらった以上はさすがに無視できなないのでね」

「ついでに、見せたのはコレね」

そう言つて立体ディスプレイに映像を再生する。映し出されたのは、あの猿のような九体のバケモノを影内君が駆る《アスディーク》が駆逐するところ。

「いくら量産型とはいえ、教師部隊の使う主力ISの一角である打鉄がこうも一方的にやられるような相手ではさすがに対抗策が欲しくなるものでね。さらに言つてしまうと、もう一角のラファール・リヴァイヴも一部の武装の攻撃力で勝つているとはいえ、そう大差があるわけじゃない。」

その意味でいえば、君と言う存在の重要性は言うまでもないだろう。

学園内での事に関しては私も一枚噛もう。君が動きやすくなるようにね」

その言葉に、影内君は満足を覚えているようにも見えた。

「元よりそれが条件ですし、異存はありません」

影内君のその一言に、轡木さんが頷きを返した。

これで轡木さんの話はお終い。次は、私の話す番になる。

「轡木さん、もうそろそろよろしいでしょうか？」

「ああ。」

更識君、頼むよ」

了承を貰い、影内君の方に向き直る。

「さて、影内君。」

まず影内君の専用機の事なんだけど、《ユニテッド・ワイバーン》の方でいいのよね」

「ええ。その方が隠しやすいでしょうし」

「私達としてもそっちの方が助かるわ。」

で、ここからが本題なんだけど……《アスディーク》を使う時は私達にも知らせてちょうだい。そっちの方が、何かと動きやすいわ」

「分かりました。その時はよろしくお願いします」

想定範囲内なのか、影内君は常と変わらない表情のまま応じてくれた。でも、直後に何かに気付いたらしく表情を険しくしていた。

「しかし、知らせるとは言ってもここに居る誰かと常に一緒にいるとは限りませんし、その時はどのようなようにすれば？」

そう、彼の機体は二機とも通信系の機能に異常があり、プライベートチャンネルが通じない。

けれど、その事にはもう対抗策を用意してある。

「箒ちゃん、如月さんに頼んでいた物は？」

「この前整備してもらいに行つたときに受け取りました。

これになります」

箒ちゃんが持つていたスーツケースから取り出したのは、腕時計型通信機と言うどこかの特撮で見たような代物に顔全体を覆えるマスクのようなもの。

「ひとまず、腕時計っぽいのは通信用ね。で、マスクのほうは」

「使つた時に正体が割れにくくするためのもの、ですか？」

相変わらず話が早くて助かる。

「その通りよ。」

ついでに、余裕があるようだったら体型の誤魔化せるものも着てもらうつもりだけ。いいかしら？」

「はい」

ひとまず実際に動いてもらう事になった時の事については、心配なさそうだった。

「それと、寮の部屋の事んだけど……もう聞いたかしら？」

「一人部屋だった人が同室を了承したから、一時的にその部屋に行く事になったと聞いていますが」

要点だけは聞いているらしい事は分かった。

でも、肝心な部分が伝わっていない。

「その同居人なんだけど……」

「わ、私です……」

私の一言に、箒ちゃんが手を挙げた。

(……本当は、あんまり巻き込みたくないんだけどねえ)

Side 一夏

「確か……更識簪さんだったな」

「うん……よろしく」

「ああ、よろしく頼む」

彼女が同室と言われた時点で目的は察せた。同室ならお互いに何かしら伝える時に怪しまれずに済む。

「もう少し話しておきたい事はあるけど、必要最低限の部分は話せたい一旦ここまでにしましょうかね」

更識楯無がそう締めくくろうとしたが、俺のほうですでに頼みたいことができていたので解散前に声をかけさせてもらおう事にした。

「その前に、少しいいか？」

申し訳ないんだが、もうすでに頼みたいことがあるのだが……」

「初日で？ いったい何かしら？」

「ついさつき、教室で織斑教諭から『政府から支給された専用機』を使うように言われた。」

だが、俺としては諸々の事情により《ユニテッド・ワイバーン》を使いたいのだが……」

俺の言葉に、更識楯無と轡木学園長が揃って頭を抱えていた。

さすがに無理か、と思ったがどうもそうではないようで。

「……いくらなんでも無茶苦茶すぎるわね」

「目的は明白だが……ちゃんと責任者に確認はとったのかね」

二人揃って何かつぶやいた後、何言か話し合った後こちらへと向き直った。

「影内君、ひとまずその話は無視してくれて構わない。」

無理に言ってくるようだったら、私の方から注意しよう」

『会社』の方に直接言ってきたら、断る旨の返事しておくわ。

心配しないで」

ひとまず対処はしてもらえみたいなので、一安心した。だが、どうもそれだけには終わってくれないみたいで。

「そく言えば、いっちょく。」

クラス代表の事の方はいいの〜？」

布仏本音が今日のクラス代表の事を話し出した。

「何かあったの？」

更識楯無が聞いてきたので、説明しようとしたところ――

「今日の三限でクラス代表を決めるために話し合いが持たれたのですが、その時に影内と私が他薦、自薦が一人いたんです。

ですが、織斑先生により強制的に試合で決着を付ける事になったんです」

―― 剣崎が素早く簡単に纏めていた。

「そう……二人とも、一応聞いておくけどクラス代表をやる気は？」

「俺はありません」

「成り行きですが、私は結果次第という事で」

俺と剣崎の答えを聞き、更識楯無は何かしらを考え込むような仕事を少し見せた後に返事した。

「箒ちゃんは好きにやっていいけど、影内君は結果によっては対策仕込むから明日も来てちょうだい。」

……どうせ必要になるでしょうしね」

どこか面倒そうな表情をしていたが、俺も内面では面倒に思っているのも何も言わない。

「それじゃあ、改めて今日はここまでにしましょうか。」

轡木さん、今日はご足労有り難うございました」

「何、私も一度直に彼と会ってみたかったしね。気にしないでくれ」

更識楯無が改めて解散を宣言し、その日は終わった。

S i d e 簪

「私と本音は2015号室だから、ここでいったん分かれることにな

るな。

影内、簪。また明日な」

「またね〜」

私、影内君、箒、本音の四人で一年生寮の方に向かって階段のところで分かれた。ここからは、私と影内君だけになります。

少しどころではなく緊張したけど、影内君は過去に似たような状況でも経験していたのか慣れているような感じでした。

そう時間をかけないで私達の部屋になる1025号室に着きました。

「それじゃあ、改めて今日からよろしくね。影内君」

「ああ、よろしく頼む」

その後、私たちは同じ部屋で過ごすにあたっての必要なルールを決めていきました。

やはりこう言った状況に慣れているのでしょうか、影内君の特に気負う事もなく的確に決めていく姿は今まで一体何を経験してきたのかと思わずにはいられませんでした。

この人と一緒に居れば私の知りたいことが分かるかもしれない。そんな根拠のない期待を抱いた初日でした。

第二章（5）：開幕、クラス代表決定戦

S i d e 一夏

「……」

クラス代表決定戦の当日。試合順は俺とオルコットが最初、次にオルコットと剣崎、最後に俺と剣崎となった。

経緯が経緯なだけに不本意な部分が多分にあるが、やる事になってしまった以上は手を抜く気はない。

そんなことを考えながら《ユニテッド・ワイバーン》の調律をし、山田教諭の時の経験を反映させていく。クラス代表決定戦が決まって以来行っていた作業だが、今はその最終調整だった。

「一夏、調子はどうですか？」

その調律をしていたところに、意外な人が来た。

「アイリさん？」

今日はどうして……」

「一夏の上司という事で更識さんに話を通したら来ることができました」

いつも通りの涼しい顔で言い切るアイリさんがそこにいた。

常と変わらぬその様子に安心感を覚えつつ、次の言葉を持った。

「クラス代表の決定戦、でしたか？」

「はい。」

不本意ではあるんですけどね」

少しの諦めを含んだ声でいうと、アイリさんも若干の呆れを含んだ声でそれに返してくれた。

「その経緯もすでに聞き及んでいますよ。」

ですが、負ける気なんてないんでしょう？」

「ええ、もちろん」

俺の即答に、アイリさんはため息をつきながら少しジト目気味になって念を押すように話した。

心なしか、からかっているような部分も見え隠れしている気がする。

「だと思いましたが……本来の目的は忘れていませんよね？」
「もちろんです」

むしろ、それを忘れてしまったらここに居る意味が無い。それはありえない。

「ならば、いいです。私は観客席の方で観戦していますね」

「はい。わかりました」

そのままアイリさんが去ろうとしたところ、アイリさんが出ていくその直前に人が来てそのまま鉢合わせた。

それも、非常に面倒そうな人と。

「影内、お前の……貴様は誰だ？　ここは関係者以外立ち入り禁止の
はずだが」

（初対面の人に向かって貴様はないだろう……）

傲岸不遜な物言いいきなりアイリさんに食って掛かったのは織斑教諭だった。

その物言いに不快感を覚えた俺とは違い、アイリさんはいつも通りの涼しい顔で答えてた。あるいは、慣れている部分もあるのかもしれないが。

「二応、私は一夏の上司ですよ。」

むしろ、貴女もなぜここにいるんですか？　教師である貴女が試合直前の今になって一夏に何の用があるのでしょうか？」

「専用機の事についてだ」

その一言に、本当に辟易した。すでに一度断っているはずなのだが。

「政府から支給されたISが今になって……」

「前にも言いましたよね？」

俺はそのISは使いませんよ」

やむを得ない理由があるならとにかく、特に問題も無いのに試合直前になって機体を変えるなどと言う愚行をするつもりもない。

その事を知ってか知らずか、織斑教諭は意に介していないかのよう
に言葉を続けた。

「何度も言うが、お前に拒否権は無い。」

それに、貴様が今調整しているISは多量の不具合があるのだろうか？ それも、試合に関わるようなものもあつたはずだ。だったら……」

相も変わらず押し付けてくるその言葉を、どうにかして追い返せないものかと考えたところだった。

「一応言っておきますが、私達の会社の方としてはその要請は受理しかねますので。」

それに、確かこの学園の特記事項でしたか。その第21項に『学生の同意がない限りは原則として政府等の介入を受けない』という旨の物があつたはずです。

それに則るのであれば、政府からの指示も一夏が同意しない限り適用されるものではないでしょう」

アイリさんが助け舟を出してくれた。

「一企業の人間が、政府に逆らうと……」

「あら、別に私たちは一夏を今すぐに退学させた上でデータを全て秘匿してもいいんですよ？」

「……何？」

一瞬、織斑教諭が泡を食ったような表情になった。その隙を見逃さず、アイリさんは言葉を続ける。

「分かりませんか？」

はつきり言わせてもらいますが、私たちが一夏をこの学園に通わせているのはこの学園に通わせるにあたり、デメリットよりメリットが大きいと考えているためです。

ですが、もしその前提が崩れるようであれば私達は一夏を退学させることに躊躇いを持ちませんし、一夏のISのデータは我が社の機密の詰まった機体のデータでもありますから、企業機密を守るという意味で公表しないという選択肢もあるんですよ。

そもそも、一教師に過ぎないあなたが拒否権を剥奪するというのも不可思議な話ですしね」

アイリさんの言葉に、織斑教諭が不愉快そうな表情をした。が、俺の気にすることではないので《ユニテッド・ワイバーン》の調律に

戻る。もし手を出そうとしたらその限りではないが。

そう時間を置かない内に、不愉快そうな表情のまま織斑教諭は戻っていった。

その様子を見て、俺とアイリさんは小さく息を吐いていた。

「……行きましたか。」

一夏、今の人があなたの」

「一応、嘗ての家族ですね。」

今となつては特に思う事もない……いえ、邪魔にならなければいいですけど」

俺の言葉にアイリさんが何とも言えないような表情を浮かべたが、直後に溜息を一つ吐くといつも涼しげな表情に戻っていた。

「兄さんの前では絶対に言いませんけど。」

私は、兄さんが兄さんでよかったですね」

「心から同意します」

アイリさんの呟きに冗談抜きで心から同意しつつ、調整を続ける。

そんな俺の方を少し見た後、アイリさんは立ち上がって――

「さて、私はもうそろそろ観客席の方に行っています。」

……今日の試合、期待していますね」

――最後、それまでの涼しげな表情ではなく微笑を伴って言った。た。

その後は振り返ること無く、観客席の方に歩き去った。

(さて……)

《ユニテッド・ワイバーン》の調整に戻る。さつきよりも、より入念に。

(負けられなくなったな)

Side 簪

「あ……アーカディアさん」

「更識さん、今日はお世話になります」

影内君の上司ということで許可をもらってきたアーカディアさんと合流し、本音が確保していた観客席のほうに案内しました。

「今日は確か全部で三戦でしたっけ？」

「あ、はい。」

「予定だと、影内君は最初と最後みたいですが」

「そうですね」

アーカディアさんが今日の試合について確認し、私もそれに答えました。

ですが、それ以上何を話したらいいかが分かりませんでした。

「そういえば、今日の対戦相手は……代表候補生、なんでしたっけ？」

「あ、はい。」

確か、イギリスの代表候補生でしたね」

アーカディアさんが再度話しかけてくれたことで、私も話せましたがやはりこれ以上は言葉が出てきませんでした。

アーカディアさんは私のそんな様子を見て、少し笑っていました。なんかすごく恥ずかしいです。

「そんなに緊張しないでください。」

私も、そういう所はそんなに気にしませんから」

「そう、ですか？」

私が繰り返した問いに、アーカディアさんは柔らかい笑顔で「はい」と答えてくれました。

今までは涼しい表情しか見てこなかったので、素直にその笑顔を素敵だなと思いました。

「ああ、それと呼ぶ時も名前の方でいいですよ。」

実のところ、名字はあまり好きではないので」

少し困ったような笑顔で、アーカディアさん、いえ、アイリさんは私に言ってくれました。

戸惑いを覚え無かった訳ではありませんが、今のままでも緊張

「えっと、それじゃ……アイリさん、でいいですか？」

「ええ。」

改めてよろしくお願ひしますね、簪さん」

「……は、はい！」

アイリさんにとっては何気ないであろうその一言に、私は堪らない嬉しさを感じていました。

Side 一夏

アリーナに現れた俺を見て、早速オルコットが嘲るような表情を浮かべて話しかけてきた。

「あら、お逃げにならなかつたのですわね」

「強制参加だったのでな」

実際、強制参加だったので逃げるわけにも行かない。逃げたら逃げたで面倒な事になりそうでもあるし。

「でしたら、今すぐに棄権したらいかがですか？」

それでしたら、すぐに決着が着きますわよ」

相も変わらぬ見下した言動だが、試合前の挑発にしては安い文句だと思った。機竜の世界でもっと酷いものを見てきた身としては、特に。

「それに、ISを展開しないまま来たという事はつまりそういう事ではなくて？」

「早合点だな。」

まあ、少し待て」

俺にとっては何時もの通り、機攻殻剣ソード・デバイスを引き抜く。と言つても、《アスディーク》の機攻殻剣ではなく《ユナイテッド・ワイバーン》の機攻殻剣の二刀ではあるが。

その光景が、オルコットには奇妙に映つたらしい。訝しむような目を向けてきたが、関係ないのでそのまま詠唱譜パスコードを口にする。

「——降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。ヘユナイテッド・ワイバーン」

背後に機体が召喚される。

「接続開始」

召喚された《ユナイテッド・ワイバーン》の装甲が開き、俺の体を覆う。

オルコットが何か驚いた顔をしているが、気にせずに背中の中翼に内蔵された推進器を吹かし、飛翔。

「待たせたな。」

「これで問題ないだろう、オルコット？」

「……」

妙に驚いているらしいオルコットは、呆けたように固まっていた。

だが、それも一瞬の事ですぐに調子を取り戻したオルコットは再度嘲るような口調で話しかけてきた。

「ず、随分と大きくて鈍重そうなISですわね。」

私の《ブルー・ティアーズ》のいい的マドになりそうですわ」

「《ブルー・ティアーズ》……青い雫、か。」

綺麗な名前の機体のわりに、その搭乗者は随分と他者を見下すのが好きなようだな」

「……なんですって？」

わざとらしく呟くと、その声が聞こえたのかオルコットが食いついてきた。狙い通りに行つたことに内心安堵しつつ、そのまま言葉を続ける。

「ああ、すまないな。」

言うつもりは無かつたんだが、つい本音が漏れた」

「あ、貴方ねえ！」

オルコットが顔を怒りで真っ赤にしながら怒鳴り声を上げてきた。

（……射撃を主力にしているんだろうが、だったら冷静になることを覚えてたらどうだ）

すでにオルコットは右手に長大な銃を下げている。おそらくはライフルのようなものであり、オルコットのISの主力なのだろう。

だが、その装備を冷静さを欠いた状態で十分に扱えるかどうかは疑問が残る。例えば、今のオルコットのように。

「そ、それに、なぜSEの残量表示がないのですか!？」

これでは試合が始められないでしょう！ それとも、負けた時に不

具合を言い訳にでもする気……」

『それでは、今回の特別ルールを説明します』

オルコットが言葉を続けようとした時、ちょうどよく放送が入った。

放送元は今回審判役を引き受けてくれている山田先生。

『今回、影内君のI Sは仕様上の問題によりS Eの残量が表示されな
いたため、試合時間終了時のS E残量の比較ができません。』

ですので、試合時間終了時に双方のS Eが共に0にならなかった場
合、オルコットさんの勝利とします』

「……という事だ。」

安心しろ、言い訳をする気は無い」

山田先生の放送を聞いたオルコットは一瞬呆けたような表情を見
せ、次いで怒りに顔を歪めていた。

「もう泣いて土下座して謝ったって許しませんわ！」

精々私の《ブルー・ティアーズ》に無様に撃ち抜かれなさい!!」

荒れ狂っているだろう感情を御しようとも隠そうともせず、その手
に持つライフルを向けてくる。

ブー!!

試合開始を告げるブザーが高らかに鳴り渡った。

S i d e アイリ

「二国の代表を担うかもしれない人材と聞いていましたが……これ
は」

さすがに苦笑いが出てきました。

見るからに射撃寄りの機体を扱っているにも関わらず、試合前の一
夏とのやり取りで大分冷静さを欠いています。

この状態で正確な射撃を行えるかは甚だ疑問です。

そもそもあのようなライフルを使う精密射撃は、狙った位置に撃つ
正確さと、相手の動きを読む先読みの技術は不可欠と言ってもいいで

しよう。

私の知る限りその二点において優れている人と言えば、今現在ではユミル教国で『七竜騎聖』補佐官を務めているクルルシファー・エインフォルクさんでしょう。『財禍の叡智』ワイズ・ブラッドによる先読みと、予測した位置に正確に当てる射撃技術はわざわざ言うに及ばないほどなのですから。

ですが、今日の前で一夏と戦おうとしている彼女はクルルシファーさんと違い『財禍の叡智』など持つてはいないでしょうし、冷静さを欠いた射撃が正確なものになるとは、個人的には思えませんでした。さらに言えば、そもそも自分の圧倒的な勝利を疑っていないその姿勢は、曲がりなりにも決闘に挑む姿勢としては褒められた物ではないでしょう。

とはいっても、私たちの世界にはある意味もつと酷い人も居たのでそう気にはならないのかもしれませんが。

不安要素があるとすれば、『第三世代兵装』というものでしょうか。各国が威信をかけて開発しているという話ですし、この前一夏が戦った更識さんも『水を操る』という特殊な装備を持っていました。

果たして彼女の操るISが持つ第三世代兵装とはいかなる装備か。

「簪さん。確か、今回の相手は第三世代兵装を積んでいるのですよね」「あ、はい。

確か、欧州の次世代機選定計画イグニッション・プランで開発されたイギリスの第三世代兵装ですね」

「積んでいる装備はさすがに非公開ですか」

「さすがに、それは……」

国家規模の計画でもあるし、自国の戦力を公開したがるानीのは当然と言えば当然の話なのでそこはあまり気になりませんでした。

そうこうと簪さんと話していましたが、そう間を置かない内に試合開始を告げるブザーが鳴りました。

「あ、アイリさん。始まるみたいですよ」

「そうみたいですな」

簪さんの言葉に返事を返し、アリーナで対峙する二人へ再度視線を

向けます。

(まあ、一夏が勝つのは揺らぎませんね)

内心で一夏の勝利を確信しながらも、私は一回思考を切り改めて試合を見始めました。

第二章（6）：『青い雫』対『幻想纏う飛竜』

Side 一夏

「もう泣いて土下座して謝ったって許しませんわ！」

精々私の《ブルー・ティアーズ》に無様に撃ち抜かれなさい!!」
ブザーが鳴ると同時にオルコットが予め狙いをつけていたライフルを撃ってくる。

だが、試合開始前から狙いをつけていたその射撃はかえって射線の予想がしやすく、開幕のブザーがなったと同時に半身を下げればそれほど苦も無く避けられる。

「よ、避けた……ですって……」

オルコットはよほど射撃に自信があったのか、一射目を避けられた事に驚愕したらしく一瞬動きを止めていた。

だが、それは隙にしかならない。

「何処を見ている」

右手に持った機竜息銃プレスガンを使いある程度牽制しながら翼にエネルギーを回し、加速。

さすがにオルコットも正気に戻ったのか、咄嗟に回避行動をとっていた。が、回避しきれず数発被弾。

（回避はそう得意ではなさそうだな）

反応が遅れたといっても、牽制目的で撃った機竜息銃がそれなりに当たっている。となれば、回避は不得手だと考えるべきだろう。

そうなれば、遠慮する必要も無い。左手に機竜牙剣ブレードを持ち、さらに加速して近づく。

オルコットはその状況を見てさらに苛立ちながらライフルの狙いを再度つけ、撃ってくる。だが、冷静さを欠いたその射撃は正確でこそあったが避けやすいタイミングだった。

この状況であれば、剣の間合いに入るのにもそう苦労はしない。

ザギンツ!!

肉薄した直後に左手の剣で切り裂き、SEをいくらか奪う。さらに、右手の武装も機竜牙剣に切り替え間髪入れずに追撃。

ついでとばかりに回し蹴りも叩き込み、一旦距離を離す。

ガンッ！ ゴッ！

地面に叩き付けられたオルコットを中心に砂煙が拳がる。

そのまま追撃を仕掛けようとしたとき、その砂煙から何か飛び出てきたのが見えた。その数、四。

「何……？」

「お行きなさい、《ブルー・ティアーズ》！」

オルコットの叫びと共に四機の何かが俺の周囲へと移動し、その先を向けた。

(なるほど……ブルー・ティアーズの第三世代兵装か！)

気づいた瞬間、その四機とオルコット本人による五方向からの射撃が放たれた。

S i d e アイリ

「なるほど……アレが、イギリスの第三世代兵装ですか」

見たところ、遠隔操作の射撃装備といったところでしょうか。

(何か……既視感を感じますね)

あのISの本来の運用法は、おそらくはあの四機の子機で牽制をしつつ手に持つライフルでダメージを与えていくというものでしょう。

感じた既視感の正体はすぐに分かりました。『朱の戦姫』とも呼ばれた機竜^{ドラグナイト}使いであるリーシャ様とその神装機竜《ティアマト》の事です。

本体の主砲と遠隔操作の子機。色や細かい部分では大きく違いますが、似ている部分も少なくありません。

「あの……アイリさん？」

「なんですか？」

隣で見ていた簪さんが私へと声をかけてきました。心なしか、その表情は訝しむような顔になっています。

「えつと……その。」

随分、落ち着いてみているなって思ってる」

「まあ、理由はいくつかありますよ。」

まず一つ目は、一夏はある程度の数の差がある状況には慣れている、という事ですね」

そう。一夏は複数の敵を一人で相手取ったような経験が少なくありません。その相手も、機竜であつたり幻神獣アピスであつたりと様々でしたが。

五対一など、それこそ一夏にとっては慣れた数でしょう。

「それって……」

「思い当たる節はありますか」

此方の世界に來ての初陣も、確か九体のハイトだったはずですし、その時の事は簪さんも見ていたという話だったので簪さんも心当たりがあるのでしょうか。

「二つ目は、使用時の隙ですね。」

あの子機を使用し始めてから一切動いていませんし、多分使用負荷の関係で動けないのではないのでしょうかね。それを見逃す一夏ではありませんし、そのうち捕らえることでしょう」

「あ……確かに、動いてない……」

ただでさえ一対他の状況の経験がある一夏が、あれだけの致命的な隙を見逃すはずがありません。周囲の子機に気を配りつつ、既に相手への接近のタイミングを凶っているようにも見えますし。

「そして最後ですが、実のところ一夏は似たような構成のもっと強い機体と模擬戦をした経験が結構あるんですよ」

「……えっ？」

「その人を相手にした時の勝率は五割を切っていますけど、その機体とあの機体では子機の数に差がありますしね。さらに言えば、勝率の悪い要因ははつきり言つて子機ではなく別なところにありますし」

そう、リーシャ様と一夏が模擬戦をした時に一夏の勝率が悪い最大の要因は《ティアマト》の神装《天スプレッシャー声》に捕らえられて動きを拘束された事ですし。

私が言つた事に簪さんが驚いたような表情をしていましたが、事実

なので特に何も言いません。

「……えっと、それじゃ今回の相手って」

「一見優位そうに見えますけど、その実一夏の得意な部類の相手ですね」

S i d e セシリア

(なんで……なんで、こんなに苦戦していますの!?)

スターライトMk-IIIの最初の一撃が外れた時、マグレだと、偶然だと思いましたわ。

ですが、その後一発も当てられないまま距離を詰められ、斬撃を貰い蹴りを食らった時点で、私自身の思い違いを悟りましたわ。

彼は決して弱くない。むしろ、強いと。

(……認めませんわ)

そう、認められない。

こんな所で、代表候補生たる自分が負けるなど、あつてはならない。

「お行きなさい、《ブルー・ティアーズ》！」

イギリスがその威信をかけて開発した第三世代兵装《ブルー・ティアーズ》。遠隔操作される四機のビットは一对一の状況で圧倒的な優位を約束してくれる素晴らしい装備ですわ。

そして、私もBT適性においてイギリス国内で最高の数値を出したのです。私がこの武装を一番上手く使えるのです。

「これで、撃ち抜いて差上げますわ！」

ビットたちは私の意図を正確に反映し、あの機体の周囲へとすぐさま移動しましたわ。

そのまま私自身の射撃も含めての五方向からの一斉射撃。実技試験の際にも教員相手に常に優位に立ち続け、ついにSE残量で上回って勝った実績もある戦術なのです。これで撃ち抜けない相手なんて精々国家代表くらいなもの。

あのISは、その大柄な機体が災いして避けられずに撃ち抜かれ

る。疑いようの無い結末に向け、引き金を引きましたわ。

ビシユシユシユシユン！

狙い通りに五発のレーザーがああISへと向けて放たれましたわ。

このまま着弾し、そのまま追撃を仕掛けて近寄せないまま撃ち抜いて終わらせる……私のその思惑は、次の瞬間に脆くも崩れ去りましたの。

「……なっー」

五方向からの射撃と言う普通のIS搭乗者は経験しないはずの攻撃を、彼は特に焦った様子もなく包囲の穴を見つけると一切の躊躇無くそこへと滑り込んだのです。

(初見で、避けたですって……!?)

結果的には、五方向からの斉射はかすりもしませんでしたわ。

今までそんな事、一度もありませんでしたのに。

(そんな、そんな事……!)

認めたくない事でしたが、直接の撃墜は極めて難しい。

そう判断した私は、それぞれのビットを撃つタイミングを少しずつずらしてから、それぞれを最大の連射間隔でひたすら弾幕を張りましたわ。

今回の対戦のルールでは、最悪最後まで私のSEが尽きなければ勝てるのですから。

(もう……この際、プライドは抜きですわ！)

あの男に勝てれば、それで十分なのです!!)

確かに予想外の力量を見せつけられてはいますが、最終的に勝てばそれでよいのです。それが、免罪符になるのですから。

Side 一夏

(良くも悪くも、優等生の射撃だな)

オルコットの射撃は確かに中心を正確に狙ってきており、その意味では確かに高い射撃の腕前を持っている事が分かる。直線での移動

予測も中々だった。

だが、それが返ってオルコットの射撃のタイミングと狙いを読みやすくしていた。中心を正確に狙っている分一箇所に集中しやすく、タイミングは発射間隔ギリギリで撃っているのかほぼ一定だった。

数を撃つての牽制目的なのかもしれないが、『空挺要塞』の十六機に慣れている身としてはそこまで強い圧力は感じない。むしろ、オルコット自身とビットの動きの観察すら出来る。

(……オルコットは相変わらず動いていない。

この状況で動かないとなると、動けない、ということか)

相手に圧力をかけているにも関わらず自分の優位な距離まで移動しない。わざわざ自分の優位を取らない理由は無い以上、出来ないと考えた方が自然だろう。

そして、本人が移動していない以上必然的にその動きにも制限が出る。

「フッー」

その隙を見逃す理由はない。

手に持つ武装を一旦機竜爪刃ダガーに切り替え、神速制御クイックドロウを使い投擲。狙いは、オルコットのライフルの引き金部分。ビットの制御に注力している今のオルコットでは、咄嗟に反応するのは難しいだろう。

ザガッ！

「……え？」

狙い通りに機竜爪刃はオルコットのライフルに突き刺さり、その引き金を切り裂いていた。

これでオルコットは一発分の火力を失ったことになる。総数五発の内一発なのだから、火力の低下は避けられないだろう。

予備の武装を持っていれば取り出すのが定石といえる状況だが、取り出さないとところを見るに無いのだろうか。

もし無いのならば、正面が開く。正面を補おうとすれば包囲に穴が開く。

オルコットは一瞬何が起こったのか分からないとでも言いたげな表情を浮かべたが、それも一瞬の事だった。予備の武装を出すでもな

く、子機のうち一機を自分の正面に持つてくるだけだったが。
(……予備の武装はなし、あの子機を使っている間は動けない)
これだけ条件が整っていれば、こちらの距離まで詰めることは容易い。

ゴツ!

オルコットの射撃を回避した直後、翼に出力を回して一気に加速。両手に二刀の機竜牙剣を握り、オルコットとの距離を詰める。

「ぐ……このっ!」

慌てて射撃を仕掛けてきたが、射線が分かりやすく簡単に避けられる。横からも何発か飛んできたが、加速しつつ前進しているこの状態なら緩急をつけて多少左右に振ればある程度避けられる。

間も無く、オルコットを剣の間合いに捕らえた。

「ツゼア!」

二刀と蹴りによる連撃で一気にSEを削りにかかる。オルコットはやはり格闘戦は苦手なのか、反撃どころかろくに防御さえ出来ておらず見る間にSEが削れていく。強いて言えば、引き金が斬られたことよって射撃装備としての機能を失ったライフルを翳して楯代わりになっているくらいだが、当然そんな事は慰めにもならない。

このまま押し切るか。そう考えたとき、不意にオルコットの顔が見えた。

この状況にはあまり似つかわしくない、不敵な笑みを。

「お返し、ですわ!」

直後、オルコットの腰付近の装甲が前を向いた。

「ブルー・ティアーズは、六機ありましてよ!」

Side セシリア

会心の一撃でしたわ。至近距離、それも格闘戦の最中でこの不意打ちには避けられるはずがありませんもの。

「ハアッ!」

なのに、目の前で起こった事は軽く私の想像を超えてきましたわ。発射までの一瞬の間に、叫び声を上げた彼は四足全てで地面を蹴りつけると同時にその翼を真横に向け思いつきり吹かしましたの。

その動作によって、一瞬でほとんど直角に移動した彼の横を、私の放ったミサイルは空しく素通りしましたわ。

(そんな……あの距離で外すなんて。ありえませんか！)

SEへの多少のダメージを覚悟した上での、超至近距離でのミサイル型のビットの発射。それさえ避けられ、私の中に動揺が広がらなかつたとは言えません。

さらに悪い事に、この反撃が外れた以上、至近距離に格闘戦を得意とする相手が反撃手段をほとんど持たない私の目の前にいるという最悪の状況を生み出してしまっていたのです。

ほとんど反射的な判断で、わたくしは四機のビットを一齐に彼に向けて撃ちましたわ。直後に、二機のミサイルも可能な限りの最小半径で旋回させ彼に向かわせます。

ですが、着弾する頃にはすでに、彼は真上へと飛んでいましたわ。そのまま再度私の方へと接近してきましたが、ビット全てを撃つた直後では発射間隔の問題で迎撃が出来ません。

「い、インターセプター！」

「甘……」

咄嗟に手に握ったナイフ形の武装『インターセプター』も、彼の大剣の一振りの前に呆気なく手の中から弾かれましたわ。

さらにもう一振りの大剣による追撃が襲い掛かってきます。今の私にそれを迎撃する手段はありません。

一度放ったミサイルを呼び戻して当てようにも、ビットを操作して射撃しようにも、先ほどよりさらに密度を増した全身を使つての連撃は私の集中を妨げ、ろくに操作ができません。

しかも、今までの攻撃がことごとく避けられているという現実が私にさらなる精神的な追い打ちをかけていました。

その中で不意に連撃が途絶えたその一瞬。ミサイルの軌道を再度修正し、ビットの射線も合わせましたわ。ですが、それさえも彼の前

には通じませんでした。

ビットを撃つ前に彼の回し蹴りが私を捕らえましたの。一見大ぶりの動作で、隙だらけのように見えますがそんなことはありませんでしたわ。横合いから放ったビットによる射撃を、その大剣を盾のように扱って防ぐという私の常識ではありえない動作をやつてのけたのですから。

さらに、放たれたその回し蹴りは今までの物と違い、直截の打撃を狙ったものではありませんでした。その特徴的な四本足のうち二本を器用に操ると、さながら巨大な鋏のように扱い私の事を捕縛したのです。

ゴツ!!

捕縛した直後、背面の翼から豪快な音を出し、彼はその場で回転し始めました。当然、私もそのまま振り回される形になります。しかも、直接体感したその推力は暴力的とでも言うべき代物で、高速飛行訓練以外では感じた事のない加速Gを体験させられましたわ。

そして、仕上げとばかりに私の拘束を回転中に解いて放り投げたその先には——
「し、しまっ」

——私の放ったミサイルが、ありましたわ。

体勢を立て直す事さえままならなかった私は、自分の放ったミサイルに直撃しました。

ブー!!

『試合終了!』

勝者、影内一夏!』

その一撃に私のSEが底を着くと同時、試合終了のブザーと彼の勝利を告げるアナウンスが響きましたわ。

S i d e 一夏

「終わった、か……」

途中途中に何度か危ない場面こそあったものの、無事に勝利することはできた。

だが、SEが底を着いたオルコットが、絶対防御の恩恵もあつて傷付いてこそいないものの、空中に投げ出される事態になっていた。

「よ、っと」

このまま地面に打ち付けられるのを見るままにしておく気もないので、すぐに飛翔し生身の方の両手で受け取る。機竜の腕で受けとめて万が一の事態になることは避けたかったからだ。

「オルコット、大丈夫か？」

「影内、さん……？」

一応確認を取ったが、当のオルコットは少し呆けたような様子だった。

「……私を、嗤わないんですの？」

あれだけ言っておきながら、負けた私を」

敗北によつて思考が自虐的になっているのか、オルコットはそんな事を言ってきた。

正直なところ、そんな事をする気はない。強いて言えば、不満こそ残る内容であつただけだ。

「……そんなことをする気はない。しても無駄なだけだしな。」

それに、今回は俺が勝たせてらつたが、本音を言えば、褒められた勝ちじゃないと思つているくらいだしな」

「……褒められた勝利では、無い？」

オルコットが訝しむような顔になり、説明を求めるような雰囲気を出してきた。

断ることもないので、そのまま説明する。

「お前は最初、本気じゃなかっただろ？」

今回のような、命を懸ける必要も無く致命的な何かを失う訳でも無い純粋な力量の競い合いの場で、本気じゃない人に勝つたつて言つたところでそれは褒められたものなのか？」

もつとも、俺自身も本来の機竜ではないのだがその部分は柵に上げた。言つてしまえば、《ユナイテッド・ワイバーン》で出せる限りの全

力ではあったのだし。

「俺は、最初から全力で勝負に来るお前に勝ちたかったよ」

その一言に、オルコットは驚いたような顔になった後、何がおかしいのか小さく笑い出した。

「そう、でしたのね。だから……」

ただし、その笑顔の中には明確な闘志の炎を燃やす瞳があったが。

それを確認するとほとんど同時に、地面に着いていた。オルコットの体への負担を考えゆっくりと降りて行っていたが、それも終わりだった。

「ピットまで歩けるか？」

「問題ありませんわ。体の方にはほとんど傷はありませんしね」

「そうか」

それだけ言うってから《ユナイテッド・ワイバーン》を解除し、自分のピットへ向かおうとした。

「一夏さん」

だが、直前にオルコットに呼び止められ、振り返った。

「もし、再戦を許していただけのなら、次こそは、私と《ブルー・テイアーズ》の全力でお相手して差し上げますわ」

浮かべていた非常に好戦的な笑みに、俺も思わず連られて笑っていた。

「ああ。叶うなら、俺も再戦したいな。

やるとしても勝たせては貰うけどな」

「今はその言葉が恐ろしいですわね……恐ろしいばかりで終わらせる気もありませんが。」

次こそは、撃ち抜かせていただきますわよ」

「それくらいの方がやりがいがある」

その言葉を皮切りに、どちらからともなく互いのピットへと向けて歩き出していた。

次の試合を、全力でこなすために。

第二章（7）：真紅の刃

S i d e 一夏

オルコットとの一戦目を終え、歩いてピットに帰ってきた時だった。

「一夏、勝ちましたね」

「影内君、今の試合凄かったよー!」

二人分の声が聞こえた。アイリさんと、簪の声。

「とりあえず、初戦は勝ちました。」

とは言え、内容は多少不満が残るものになってしまいましたかね」

「い、一撃も貰わずに勝ったのに!？」

「だと思いましたが……」

俺の言った事に簪は驚き、アイリさんは苦笑を返していた。

「大方、最初は相手の方が本気じゃなかったからでしょう」

「その通りです」

「影内君……やっぱり強いんだね」

アイリさんが呆れた口調で、簪が妙に感心したような口調でそれぞれに言ってきた。もつとも、簪の台詞には少々同意しかねる部分があるが。

「俺が強い、か……。」

あまりそうは思えないんだが」

「え?」

呟いたこの一言に、簪が面食らっていた。

「強いつて思えないって……なんで!？」

「落ち着いてください、簪さん。」

一夏、それはあなたが師と呼んだ人たちと比較しての事ですか？」

「はい」

俺の返答に、アイリさんは呆れた顔で溜息をついていた。その隣で、簪は疑問符でも浮かべそうな表情をしている。

「それはもう比べる相手がおかしいんですよ。」

一夏はもう少し自己評価を高く持って下さい」

そうは言われるが、強い使い手、と言われて真っ先に思い浮かぶ人達があの人達なのだから仕方がない。

「影内君は凄く強いと思うけど……」

簪はストレートな言葉で賞賛してくれたが、目指す場所が遥か高みにあるためか今一つ自信が持てないというのが本音だった。

「さて、簪さん。一夏も整備したいでしょうし、もうそろそろ行きましようか。」

一夏、次の試合も期待していますね」

「あ、はい。」

影内君、またね」

「次の試合も最善を尽くします。」

簪も、またね」

二人を見送り、機体の確認と調整に入る。

次の試合までには整備の時間を込みで三十分。さらにそこから一試合を挟み、三十分の時間を挟んで最後の試合になる。

つまり、次の俺の試合まで調整などを考えても十分な時間的余裕がある。

ゆっくり確実に、調律を始めた。

S i d e 簪

一夏と一回別れ、歩き始めた時でした。

「あの、少し筈のところにも行っていないですか？」

「ええ、私は構いませんよ」

友人の様子を見に行きたかった私の提案に、アイリさんは応じてくれました。

ですが、そのすぐ後に言葉を続けていました。

「そういえば簪さん。私は筈さんの機体や戦い方についてあまり知らないんですが、どういった戦術を採る人なんですか？」

見たところ、近接戦を重視しているような構成に見えますが……」

「近づいて一刀両断、ですね」

アイリさんの問いに対する私の答えは簡潔でした。と言うより、本当にそれ以外の言葉が見つからないような戦い方をするのが彼女であり、それでなお実力者と呼んで何も間違いじゃないのもまた彼女の偽らざる事実なので、他に言いようがありません。

「そう……ですか。」

何と言うか、あの刀を見た後ではその通りだとは思いますが」

「詳しい事は、実際に見てもらった方が早いと思いますよ」

私の言葉に、アイリさんは微笑みながら「その通りですね」と返事を返してくれました。

Side 箒

「……うん、これで大丈夫だな。」

本音、助力感謝する」

試合前に本音に手伝ってもらい、機体の最終調整をしていた。

軽く右手を動かし、調子確かめる。本音の腕は確かで、私が知り得る限りでは、機体整備においては如月さんに次いで確かな腕を持っている。今回もそれを遺憾無く発揮してくれていた。

「これくらいの整備はお手の物。」

ほーちゃんも、これでしっかり試合できる？」

「ああ、問題ない」

相も変わらぬ独特のゆっくりとした口調だったが、今はそれが頼もしく感じる。

「さて、もうそろそろ出てくる。」

本音、お前も簪のところに行かなくていいのか？」

「うーん、じゃあ、かんちゃんの所に行ってるね。」

「もう来てるよ」

噂をすれば影。簪のことを話したらちようど本人が来た。

「もう調整は終わったの？」

「ああ。」

ほとんど本音の世話になってしまったがな」

「そっか。調子はどう？」

「十全だ。思う存分、振るえる」

自信をもつて答えた。本音の整備は素晴らしく、私には過ぎたほどの出来だったのだから、それも当然だろう。

「そっか。本音、もうそろそろ行こう。」

箒。今日の試合、応援してるね」

「ほーちゃん、頑張つてね〜」

箒と本音の言葉に、思わず笑みが浮かんだ。如月さんや更識会長もそうだが、箒や本音にも随分と世話になっているのに、さらに良くしてもらっている。

私の過去を、知っているのにだ。

「最善を尽くすさ。それしか出来ないからな」

だからか、応えなくなってしまう。

だが、元より才能になど恵まれなかった身だ。その私が、おそらくは才能に満ち溢れているだろう国家代表候補生オルコットとマトモに戦おうとするなら、全力を出す他は無い。

ゆえに、全力を尽くすことは大前提とも言える。後は、その上でいかにして勝つかを足らない頭で模索するだけだ。

「剣崎箒、出撃する」

「頑張つてきてね、箒！」

「ほーちゃん行つてらっしゃい」

箒と本音に見送られて、私は試合へと赴いた。

「すまないな。少し遅れたか」

「長くは待っていませんわ。私も機体の修復に手間取りましたしね」

私が出た時にはすでに対戦相手のオルコットが待機していた。

心なしか、口調が幾許か柔らかくなり、見下したような部分が抜け

ているような気がする。

「……どうしたんですの？」

少々驚かれているように見えますが」

「いや……雰囲気少し変わったか、と思ってな」

私の言葉に、オルコットは苦笑を返した。少しばかり自嘲の色が混じっているのは、多分見間違いないだろう。

「先の試合で、色々気付かされることがありました。

……いえ、違いますわね。それまでの私が当たり前前にことに気付いていなかっただけですわ」

「……そう、か」

清々しきすら感じさせる顔で言われた。

(しかし、さっきの台詞は……)

どこことなく昔の自分を思い出してしまいそうになる台詞だった。意味合いは全然違うのだろうか。

「それと、この前の時は申し訳ありませんでした。

適性などの事で暴言を吐いてしまい……」

「ん、ああ。気にするな。

言われ慣れている」

事実、そこらへんの事については代表になる前くらいの時には言われない日の方が少なかったくらいだし、適性C自体は本当の事なので気にも留めていない。それこそ、オルコットのような代表候補生を相手にしてしまえば、少しばかり刀が振れるだけの凡骨であることには変わりないのだろうし。

「だがまあ、そこまで言ってくれる以上は全力で相手してくれるんだろう？」

「ええ。」

敬意を払い、全力を以って撃ち抜かせていただきますわ」

その答えは、どうしようもなく私を滾らせた。

「……先の試合、私は一夏さんに敗北しましたわ」

独白のようにオルコットが言葉を紡いだ。

「その強さと、試合に挑む姿勢は、私にとって多くを学べるものがあり

ましたわ」

一瞬、言葉を切ったオルコットは、私に挑むような視線を向けてきた。

「貴女は、いかなる試合を見せていただけなのですか？」

分かり易い挑発だったが、むしろ余計に滾らせられる。

左手にマウントしていた私の刀、日本刀型大型ブレード「叢」ムラクモを右手に握り、オルコットに向けた上で宣言する。

「全霊を以って、切り裂く。」

非才と未熟のこの身に出来る事など、それしかないからな」

私の宣言に、オルコットが非常に好戦的な表情になった。

そして、私が右手を下した時だった。

『それでは、劍崎箒、対、セシリア・オルコット。』

バトルスター
戦闘開始！』

山田先生が試合開始を告げてくれた。

直後、オルコットがその右手に握ったライフルを向けてきた。その銃口に、光を蓄えながら。

私も直撃を貰うつもりなど無い。左手の小型増設装甲で受け止める。本来の用途とは違うが、耐衝撃性と耐熱性に優れているため普通にシールドとしても使える。

防御した後、すぐに両手で刀を握り直し腰の可動式追加スラスタ―を後ろへ向け、全力で吹かす。

ここからが、私の戦いだ。

Side 簪

箒が両手で刀を握り、スラスタ―を吹かせ始めました。

結果、イグニッション・ブースト 瞬間 加速ほどとは言わないにしろ、並みの機体よりも遙かに高い加速が箒の専用IS《陽炎》カゲロウに与えられます。

「箒さん、中々高い判断能力ですね。」

回避すべき攻撃と防御すべき攻撃をよく見極めているように見え

ます」

隣で見ているアイリさんも箒の事を評価しているようです。それも、中々いい方向に。

でも実際に、アイリさんの評価の通りだと、私も思います。

「でも、まだこれからでしょうね。」

一夏はあの遠隔操作される特殊装備を個人的な経験で補っていたが、箒さんはその手の経験は？」

「……強いて言えば、連装ミサイル相手の経験でしょうか。」

それ以外だと、試作の分裂ミサイル、かな？」

自分で言っておいて言うのもなんですが、あまり適切とは言えないなど思いました。あの子機とはあまりにも性格と運用理論に違いのある装備です。

「それだと、箒さんは本当にあの子機相手には苦戦しかねないのでは？」

「そう、ですね……」

アイリさんの指摘に、私は頷くしかありませんでした。

彼女とは何度も模擬戦をした経験がありますが、だからこそ彼女があの手構成の機体を不得意としている事も知っているからです。

「でも、箒にも切り札と呼べるものはあるんですよ」

「切り札……箒さんの機体も、第三世代兵装が？」

アイリさんは箒の機体についてそう言いましたが、現実の違いは違います。

むしろ、箒の機体は——

「いえ、違います。箒のISは第二世代に分類される機体で、第三世代兵装は持っていません。」

むしろ、箒自身が「私には第三世代兵装など使えそうもない」って言っていたことがありますし……」

——第二世代機なんですよね。

それも箒自身の適性も考慮しての結果で、現在倉持技研の方で製作されている第三世代兵装とは相性が致命的に悪い事がすでに発覚しており、彼女自身もそれを自覚しているための事です。

「では、切り札とは——」

アイリさんがちょうどそのことを言おうとした時、オルコットさんがあの子機を出撃させました。すぐに接近中の箒を取り囲んだ子機は、そのまま射撃を行いました。

正確に中心を狙った射撃。ですが、箒は撃たれる直前に瞬時加速を使用し、その射線からギリギリのところまで回避に成功しました。

ですが、オルコットさんもそれだけで終わらせていません。箒の軌道を予測し、再度の射撃を試みていました。

ですが、恐らく多くの人にとって予想外な軌道を箒は描きました。

一瞬だけ加速が緩み、直後に同じ速度で旋回してみせたのです。結果、軌道予測は大きく外れ、ありえないほど鋭角な軌道を速度を維持したまま描いた箒は再度接近しています。

「……今の軌道、何をやっただんですか？」

アイリさんはすぐに気が付いたみたいです。

「イグニッション・ターン瞬時旋回って呼ばれている、箒が生み出した高速旋回技術です。

瞬時加速と同様の操作を、旋回軌道で行う……言うのは簡単なんですけど、私は彼女以外がこの軌道を描いたのを見たことがありません。

速度を維持したまま自由に鋭角な軌道を描ける、出来れば強力な技術です」

私の説明に、アイリさんは何か納得を得たような顔になっていました。

「なるほど……この操縦技術そのものが、彼女の切り札ですか」

「はい、そうです」

私達が話している中でも、試合は進んでいます。

その中で、局面がさらに動いていました。

S i d e セシリア

（一夏さんに続き箒さんまで……なんでこう、今日の対戦相手の方た

ちは避けるのが上手なんですの！)

今まで自分の優位を約束し続けた装備が、今日は全くとは言わないまでもそれほど高い優位をとれずにいる事に焦りを感じましたわ。

(話には聞いていましたが、実際に目の当たりにするとやはり違うものですわね。

アレが、瞬時旋回……)

噂には聞いていました。彼女が倉持技研代表になれた原動力とさえ言われる操縦技術。

先の試合同様に、いまだ有効打とまらないビットとライフルの射撃が私の焦りをさらに加速させてきます。

(ですが、それに身を任せては無様な結果を晒すだけ……)

先の試合で嫌と言うほど学ばされた教訓を生かし、出来る限り冷静に狙うように努めます。

(今度こそ、勝たせてもらいますわ!)

オルコット家を守る
私の目的のために、これ以上敗北を重ねることなど許されないのですから。

S i d e 箒

(厄介だな、あの遠隔装備!)

オルコットのISの第三代兵装なのだろうその装備は、私にとって厄介極まりなかった。

一応、瞬時加速と瞬時旋回を用いて被害を最小限に抑えることには成功しているが、彼女の軌道予測は高いレベルだと思った。このまま普通に戦っていても、やがてその銃口が私を捕らえるだろう。

(このままだと、ジリ貧か……さて、どうするか)

何とかして攻略法を見出そうとしたが、中々見つからない。

(……やめだな。やはり、頭が足りない)

結果、いつも通りにしかできない自分がいた。

幸いなことに、オルコットはあの装備を使い始めてから動いていな

い。あるいは、動けないのかもしれない。

(攻めさせてもらうぞ、オルコット！)

ライフルの射撃を回避した直後、進路をオルコットの方へと真っ直ぐ向ける。そして瞬時加速を発動。

「ッ！　このー！」

オルコットも当然迎撃してきており、私のSEが削れていく。だが、この程度なら関係無い。

「オオー！」

私のIS 陽炎には、多少のダメージを引つ繰り返せる一撃がある。

剣の間合いに入った直後に瞬時加速を切り、腰のスターを左右で逆向きにする。そのまま、瞬時旋回を一瞬だけ起動。その加速のほぼ全てを専用の日本刀型ブレード「叢」ムラクモに乗せて振り抜く。

ガギャン！

金属同士がぶつかり合う音が鳴り響き、オルコットが吹っ飛んだ。オルコットは咄嗟に左肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットと左腕を構えたみたいで、その二つに甚大な被害が出ていた。

追撃を仕掛けようとしたが、それはオルコットの子機に阻まれた。

「単純ですが……それゆえに、恐ろしいですわね」

そう、この攻撃方法の理屈は単純だ。

私の「叢」は並みのISを超えるほどの大型ブレードだ。当然、大きさに比例して重量もある。その質量を、瞬時加速と瞬時旋回で得た加速を乗せてぶつける。刀としても十分に優れているが、それと同時にその大質量もまた「叢」の武器だ。破壊力も相応の物になる。加えて、この刀は通常のブレードが比較にならないほど頑強にできており、このような滅茶苦茶な振り方をしたところで刃毀れ一つない。単純どころか原始的ですらある。だが、だからこそ多少のSEの差など簡単に引つ繰り返せる一撃になりうるのだ。

「まさか……《ブルー・ティアーズ》のSEが、一撃で四割持つていかれるなんて……」

現に、私のSEが今の時点で二割強ほど減っているのに対し、オルコットは四割。しっかりと形勢は逆転出来た。後は、また当てるだ

け。

「ですが、二度も許す私ではなくてよ！」

オルコットが無事だったライフルとビットで総攻撃を仕掛けてくる。その弾幕と多角性は、一対一の経験しか持たない者にとつては依然脅威だった。

再度移動し、回避に専念する。先程より密度の増した弾幕は、中々に突撃を躊躇わせる代物になっていた。

(だが、このまま手を拱いていてもな……)

取りあえず左手に改造型アサルトライフル「飛天」^{ヒテン}を握り、弾丸をバラ撒く。通常の仕様である「焰火」よりも意図的に集弾率を下げてあるこの銃の役割りは、完全に牽制用である。

オルコットは多少被弾しても気にせず弾幕を維持していた。そのまま攻撃してもダメージ効率で負けるだろうし、何とかして突撃を試みる。

だが、近づこうとしていた私の目に映ったのは、オルコットが腰付近のアーマーを私の方に向けてきている姿だった。

「お行きなさい！」

派手な発射音とともに、ミサイルが私に向かって飛んできた。

第二章（8）：紅と青の決着、そして

S i d e セシリア

（この射線なら、外しません……貫きましたわよ！）

箒さんが直進に転じた瞬間を狙ったの、ミサイルビットの発射。軌道と射線が一点ではなく線で交わるのであれば、いかに高い回避能力があっても直撃は避け得ず、仮に回避軌道をとってもその範囲は限られているはず。《ブルー・ティアーズ》のシステムを応用した高い誘導性能を持つこのミサイルビットなら、そのくらいなら当てられるでしょう。

そして、爆発の反動で動けなくなったところを集中砲火で一気に勝負を決めます。

（先の試合では私自身への止めに使われてしまいました……二度も、無様を晒すつもりなどありませんわ！）

ある意味で非常に無様な負け方でしょう。威信をかけて開発された自慢の装備が自分に返ってくるという精神的にダメージが非常に大きい負け方でした。

ですが、ここで二度も同じ過ちを繰り返すようなことはしません。必ず、反撃の機運にしてみせます。

「ツアア！」

なのに、目論見が崩されましたわ。

彼女はその一太刀で、直撃する寸前のミサイルを切って見せたのです。さすがに爆発の煽りを受けて多少はダメージと衝撃を受けていたようですが、大した事にはならずすぐに体勢を立て直していましたわ。

「そ、そんな……ありえませんか……」

さすがに切って迎撃する人は今まで相対した事が無かったため、一瞬だけ反応が遅れました。

その一瞬に、箒さんは瞬間^{イグニッションブースト}加速を使用。一気に距離を詰め、その長大な刀で切りかかってきましたわ。

「ッー！」

咄嗟に後退し、さつきと同じように直撃だけは避けます。しかし、今度はそれだけで攻撃が終わらず、一夏さんほど激しくはありませんでしたが連撃を仕掛けてきたのです。

《ブルー・ティアーズ》のSEがさらに削られ、五割を割り込みました。危ない状況です。

このままやられるばかりでは、先ほどの試合の二の舞にしかならない。そう判断した私は、賭けに出ることにしましたわ。

「ご……のー」

「何……」

至近距離で再度ミサイルビットを使用し、多少のSEへのダメージと引き換えに強引に引き剥がします。さらに続けて通常のビットとライフルから射撃し追撃。

私自身も無事とは言えませんが、それ以上に箒さんを削らせていただきますわ。

「このまま、最後まで削り取れば……!!」

S i d e 箒

(苛烈だな……これでは近づくことも……)

至近距離からのミサイルという手痛い反撃を貰ってから、さらに続けざまの射撃。

個人的にも射撃戦は苦手である以上、このままではいずれ削り取れるだろう。となれば、どうするか。

(一撃入れられれば、それだけでも十分なんだが……)

今の弾幕をそのままで突っ切るのはさすがに無謀だし、避けながらだとそもそも中々近づけない。

今はまだ瞬時加速と瞬時イグニッション・ターン旋回の併用で回避できているが、長くは続かないだろう。オルコットの射撃が、徐々に精度を増している。捕らえられるその瞬間が、現実味を帯びてきた。

(まったく……多少SEに差はあるが、うかうかしてられないな！)

すぐに「叢」を左手に再度マウントし、両手それぞれに短刀型のブレード「風神」を構える。直後、瞬時加速を使用。ただし、進路はオルコットへではなくオルコットの操るビットの一機に向けてである。当然ビットからの射撃が目の前から襲ってきたが、それは左手の装甲とマウントした刀を盾代わりにする事で防いだ。非常に邪道染みているが、取れる選択肢が多くない以上は贅沢を言っていられない。「ハッ！」

そのままビットを一機切り裂き、次いで瞬時旋回ですぐさま向きを調整し二機目へと向かう。

再度瞬時加速で接近。二機目も切り裂く。

だが、ここでオルコットの反撃が私に刺さった。

「……………そこですわー！」

私の手の部分を狙ったの集中砲火を仕掛けてきたのだ。

結果、ブレードを握っていた手の先が耐え切れずに破壊された。

(狙ったか、オルコット！)

私の戦い方は基本的に刀を用いた接近戦であり、当然刀とは手で握る武器である。その握るための手を破壊されては使えない。

どころか、私のISである《陽炎》^{カゲロウ}の装備はそのほぼ全てが手で持つ装備だ。つまり、ほとんどの装備を封じられたといっても良いだろう。

普通に考えれば、詰み、と言ってもいい。

(だがな……………奥の手があるのは、私もなんだよ！)

普通の機体なら詰みだが、変態じみた思考を持つ如月網太主任が設計したこのISがこの程度の状況で終わるはずが無い。

格納領域に予備として搭載されていたもう一本の「叢」を取り出し、右手の小型追加装甲へと接続しマウント。これで、両手に「叢」をマウントした事になる。

そしてこのマウントした形態。特に鞘などには収めずにあくまで固定しているだけであるため、実際には二の腕から肘の外に向かうようにして剥き出しの刀身が伸びているような感じになる。

「ツアアアアアア!!」

後はやることなど簡単だ。左を前に構えて盾代わりにしつつ、瞬時加速を使ってオルコットの懐にまで潜り込む。

この間勿論迎撃を食らったが、やられない限りは大した問題じゃない。

次の一撃で、決着を付ける。だから、やられない限りは問題にならない。

「――間に合わ」

オルコットの懐に潜り込み、最初の一撃と同じように瞬時加速の勢いを殺さないまま瞬時旋回の加速を重ね、右肘から外に伸びた「叢」の剣先を叩き付けるようにして切り付ける。今度は大質量の「叢」二刀分に加え、体当たりに近い姿勢での切り付けは機体そのものの重量も加えられる。

さらに、それだけに終わらせない。切り付けている途中に身を寄せ、そのまま瞬時加速を起動。最終的に肘鉄のような姿勢で押し出し、そのままアリーナの壁面へと叩き付ける。

サガンツ！ ゴツ！

派手な衝突音が鳴り渡る。

ブー！

『試合終了！』

勝者、剣崎箒！』

試合終了を告げるブザーが鳴り、私の勝利を告げるアナウンスが響いた。

Side セシリア

(また……負けてしまいましたのね)

試合終了のブザーと箒さんの勝利を告げるアナウンスが響いたことで、私の二敗が確定しました。

(この結果では……代表候補生の地位も……)

恐らくは危うい物でしょう。あれだけ啖呵を切っておきながら、そ

の結果は無残にも二敗。

イギリス政府の判断に委ねることになりますが、この結果では最悪解任もありえるでしょう。

(そうなれば……オルコット家は……)

元々、代表候補生になる際にオルコット家を守るために役に立つ条件を多々付けてもらっていました。それが無くなってしまえば、オルコット家を守る事は非常に困難になるでしょう。

「無事か、オルコット？」

この先の事に思考が行っていた所、目の前の現実に取り戻すように箒さんが声をかけてくれました。

「ええ、問題ありませんわ」

箒さんの質問に答えつつ、立ち上がろうとします。ですが、さすがに最後の衝撃は殺しきれなかったのでしょうか、少々足が震えてしまいました。

そんな私を見て、ISを解除した箒さんは無言で手を差し伸べてくれました。

「あ、ありがとうございます」

その好意に甘えて、手を取らせて頂きました。箒さんはそのまま、やはり無言で私の手を引いて立たせてもらいました。

その手は、辛うじて女性らしさが残っているものの、どれだけ訓練を積みばこうなるのか分からないほどしっかりとっていました。

「……私は、お前といい試合ができたと思っている。」

ありがとうございます、オルコット」

箒さんは、微笑みながら今の試合をそう評してくれました。今の私にとって、その評価は心に染みる物があります。

「……私です。」

ありがとうございます、箒さん」

私の答えに、箒さんも満足したように笑顔を浮かべてくれました。そのまま、私たちは互いのピットへと向けて歩き始めました。

S i d e 箒

「すまないな、本音。」

また、世話になる」

「もくまんたいく♪」

自分用に割り振られたピットに戻ってきた後、待機していた本音がそのまま整備を始めたためお世話になっていた。

今回の損傷は中々酷い。一部の装甲が剥けているのはまだしも、手の部分が全面的に壊れているためそこは予備と全取り換えにせざるをえないらしい。

「箒、試合お疲れさま。」

整備、手伝う?」

「頼む、箒」

少し遅れて、箒も来てくれた。彼女もメカニックとしては優秀で、本音とともに私の機体を修復してくれていた。本当に、この二人には世話になりっぱなしである。

次の試合までには三十分の猶予が与えられている。私一人では絶望的だが、心強い二人のおかげで間に合いそうだった。

「……次の試合、影内君とだね」

「そうなるな」

ある意味、その一戦は私にとっては大きな意味を持つ一戦だった。

「楽しみ?」

「ああ」

だがそれとは別に、本来の機体アスディレグでないとはいえ、あれほどの実力者と一戦を交える事ができるというのはそれだけでも滾らせられる物がある。

「じゃ、ほーちゃんが全力で試合できるように、しっかり整備しないとね。かんちゃん」

「その呼び方は止めてって言うてるでしょ……その通りだけど」

「……すまないな、二人とも」

この二人には、本当に世話になる。

「影内、オルコットとのあの試合は何だ？」

「普通に試合をしただけです」

ピットに来るなり不機嫌そうな声を隠そうともせず聞いてきたのは織斑教諭だった。

(いい加減にしてくれ……)

不幸中の幸いだったことは、調律がすでに終わっているため古代文字など不信に思われそうな物を見られなくて済んだことだけだった。

今回は来ないかと思ったら、どうやらそんな事は無かったらしい。すぐに来なかったのは単に二戦目の準備のためで、時間ができた今になって来たという事だった。目的は言わずもがな。

「どこが普通だ。」

まず特別ルールを使っている時点で普通じゃないだろう」

「言われるほどの事でもないと思いますけどね。」

一応、こちらが不利になるように設定していますし」
「抜かせ」

至極不機嫌そうな顔で言ってくるが、関係は無い。この形式での試合許可は事前に山田教諭からとっていたし、文句を言われる筋合いはない。

「それに、何なんだあの機体は？」

武器の形をした待機形態に、四足、完全に独立稼働する腕部、機体に直接取り付けられた翼。あれではまるで……」

何を言いたいかは大体察せたので、先回りしておく。生憎と、それに付き合うつもりは無い。

「試作じみた機体であることは否定しませんよ。ですが、今の俺にとってはこの機体が専用機ですから。」

それよりも、いい加減出て行ってくれませんか？ 整備が出来ませんで」

「フン……そんな欠陥だらけの機体なんぞより、支給された機体を使ったらどうだ？」

「試合前に言われた事をもう忘れたんですか？」

もう相手をするのも面倒に感じたが、さりとていい手段が思い浮かんでいるわけでもない。とりあえず適当に言い訳を言いつつ、手段を模索することにした。

溜息を一つ吐いて少しの間をあげ、多少の苛立ちも交えて言葉を紡いだ。

「この機体、本当はまだ使うつもりも無かったんですよ。どこかの誰かが強制的に今回の試合に参加させたおかげで使う羽目になりましたが」

「欠陥機を支給した連中に言ったらどうだ？」

若干の皮肉も交えたつもりだったが、どうやら全く効いていないようだった。

そうして溜息を吐いて、次の言葉を考えていた時だった。

「第一、何なんだこの……」

非常に無遠慮なことに、織斑教諭が《ユナイテッド・ワイバーン》の機攻殻剣のうち《ワイバーン》側のそれに手を伸ばしてきた。

さすがに許容し難く、その手首を握り潰す勢いで掴んで止める。

「いい加減にしてくれませんか？」

俺はちゃんと学院側から許可をとってこれを携帯し使用しているんですから。一教師にすぎない貴女にそれをとやかく言われる筋合いは無いのですが」

抑えきれず、声が低く押し殺したようなそれになる。

織斑教諭もいい加減にしたのか、そのまま何も言わずに引くと非常に不機嫌そうな顔でピットから出て行った。

だがこの時、俺は気付いていなかった。

織斑千冬がピットから出る瞬間、俺が掴んだ袖を見てほんの僅かに笑っていた事に。

「そんな事が、あつたんですか……」

「はい」

織斑教諭が出て行つてからほどなくして、アイリさんが立ち寄つてくれた。

俺のピットから織斑教諭が出てくるところを見たらしく、それについて聞かれたため何があつたのかを答えているところである。

「懲りない人ですね……私が言つてから一時間と経つていませんよ」

「さすがにこのままだと支障が出かねませんし、更識さんと学園長に協力を仰いで正式な書類を用意してもらえるように掛け合おうかと思つていますが」

俺の考えに、アイリさんは頷くと同意してくれた。

「現状ではそれが確実でしょうかね……」

まったく。何処かの副隊長じゃないんですから、暴論をさも当然のように振り翳さないで欲しいんですけどね……」

「心の底から同意します」

その声音がどこか疲れたものだったのは、多分間違いないだろう。

「さて、一夏。

私ももうそろそろ観客席に戻つていきますね」

「はい」

その後、アイリさんは観客席へと戻つていった。

ピットから歩いて出て来た時には、既に剣崎が待機していた。前にも見た、異様に大きな刀を備えた真紅のISを纏つて。

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。ヘユナイテツド・ワイバーン」

あまり長く待たせる気もなかったので、早々に詠唱譜パスコードを口にする。

そして、背後には一試合目と同様《ユニテッド・ワイバーン》が
召喚される。

コネクト・オン
「接続開始」

これも一試合目と同様、《ユニテッド・ワイバーン》の装甲が開き
俺の体を覆った。準備は完了したので、飛翔し剣崎と同じ高さまで上
がる。

その時、面と面で向き合う形になって、ほんの少しの懐かしさを感じ
る自分がいた。

「いよいよ、だな」

「そうだな」

剣崎の言葉に、短く返す。

「どうか、いい試合を頼む」

「勿論、全力で当たらせてもらうさ」

俺の返答に、剣崎は満足そうな、それでいて好戦的な笑顔を浮かべ
た。

『特別ルールを発表します』

その時、山田先生からのアナウンスが入った。内容は一試合目と同
じ、特別ルールに関するもの。

この放送を聞いても、特に剣崎に変化はなかった。その様子は、た
だ静かに闘志を燃やしているようにしか見えない。

『それでは、影内一夏、対、剣崎箒。

バトルスタート
戦闘開始！』

山田先生が高らかに試合開始を宣言すると同時、お互いに様子見な
ど不要と言わんばかりに接近した。

これが、クラス代表決定戦最後の試合の開幕だった。

第二章（9）：閉幕の剣舞

S i d e 一夏

「ハアアッ！」

「オオッ！」

互いに叫びを上げながら互いの得物を手に取り、斬り合いにもつれ込んだ。

まず剣崎があゝの異常に大きな刀を異様な加速で旋回しながら振り抜いてきた。異常な大きさも相まって大迫力だが、それ以上に剣速が問題だった。その剣速は異常に速く、普通に振り抜いただけでは間に合うかどうか怪しい。

ゆえに、こちらも神速の一閃を以って迎撃する。

「ゼアッ！」

ガギャン！

剣崎の一撃を、クイックドロウ神速制御の一閃で跳ね上げる。

非常に重い一撃ではあったものの、無事に弾き飛ばせた。が、剣崎はその勢いを利用して一回転すると振り上げるようにして再度切り付けてくる。一撃目よりはまだ余裕があったため、神速制御に使ったほうとは別の機竜牙剣ブレードで切り付ける。

ギヤリン！

刀と剣がぶつかり合う金属質な音が響き、火花が散った。

二刀とも使った俺は即座に蹴りを放つが、今度は剣崎が腕の装甲を利用して受け流してきた。続けざまに放ったもう一発の蹴りに関しても同様。

ゴガゴン！

機体を捻るようにして回転させながら、二刀の機竜牙剣で二連撃を仕掛ける。

ギヤギギン！

剣崎はあゝの異様に巨大な刀を真横に構えて受け止めると、その直後に反撃に転じてきた。横一文字の一閃。機竜牙剣の内一刀で受け止めつつ、もう片方の機竜牙剣を突き出す。

ギイン！

だが、その一撃を劍崎は身を捻ってかわすとその体勢を元に戻し動きのまま、いつの間にか取り出していた小刀のようなブレードを突き出してきた。

カキン！

機竜牙剣の内一刀を盾のように構えて弾き、もう一刀で反撃を試みる。

だが、劍崎はあの小刀が外れたことを悟るとすぐに収納し、再度あの長大な刀を両手で握り振りぬいてきた。

ギャギン！

派手な音が響き、互いの距離が少しだけ離れた。すぐに背翼の推進器を使い加速すると二刀の機竜牙剣をタイミングを合わせて切りかかる。

劍崎は右手にあの刀をマウントすると、肩部分のアーマーも使って支えつつ俺の二刀を受け止めていた。

ガギイイン！

「ツアアアアア！」

そのまま叫ぶと、劍崎は異常な加速で突っ込んでくる。さつきマウントした刀はその状態のまま肘打ちのような姿勢に構えていた。肘の外側に切先が伸びているところを見るに、多分肘を振り下ろすような形での斬撃だろう。

動きは読めるが、速度が凄まじく普通に振るのでは間に合わない。だから、再び神速の一閃に頼ることにした。

「神速制御……！」

ギャガン！

重い一撃だったが、神速の一閃で再び弾き直撃を避ける。だが、弾かれた勢いを利用して回転すると今度は肘鉄の要領でその切先を突き立てようとしてきた。

当然、そのまま当たるような事はしない。突き出された刀を、機竜牙剣で振られる方向に逆らわないように弾いて強引に加速させ回転させる。

ガギン！

結果、無防備な正面を晒した剣崎に対しタイミングをずらした蹴り上げを放つ。が、剣崎は腰のスラスタを素早く動かして後退し、こちらの蹴りは空振りに終わった。

その隙を見逃す剣崎ではなく、再接近して自身の刀の範囲に俺を捉えるとすぐにその刀を振り抜いてくる。回避してから振り抜くまで、何秒とかかかっていないほどの早業。

機体の上下がまだ戻り切らない内から背翼を吹かせ回転し、その勢いを以って二刀を振り抜く。

ギャギン！

互いに弾かれるようにして動き、少し距離が空く。その間の、僅かな睨み合い。

剣崎も俺も、すぐに構え直していた。そこには、一切の隙が見当たらない。

ここまでの極短時間の、圧倒的な密度の剣戟と格闘の応報。そこで感じた、以前戦った更識楯無や山田教諭とは違った、刀によつて成り立っている圧倒的な強さ。

(まったく、やりがいのある……！)

だからだろうか。俺は、ただただこの一戦に対し全力になり、ただこの強敵友人に勝つことだけを考えていた。

Side 箒

(強い……ここまでとは、な)

まだそこまで長い時間戦ったわけではないが、影内の強さを実感するには余りにも十分すぎた。これで本来アスデイングの機体ではないと言うのだから、その強さは底が知れない。

(今はまだ何とか均衡がとれてるが……)

格闘戦で今はまだ何とか持ちこたえてはいるものの、正直言ってかなり苦しい立ち回りだった。それで何とか均衡が取れているという

状況なのだから、もしこの均衡がどこかで崩れでもすればそこから彼の連撃に飲まれ、為す術も無くとまでは言わないが敗北は避けられないだろう。

(それにしても……なんだか、なあ……)

彼と対峙していると、どうしても昔を思い出してしまっていた。私
がまだ名前を変える前の、幼かった頃の事。

(……いや、それは今考える事じゃない)

思考を切り替えて、目の前の試合に集中する。

今現在におけるこの均衡は簡単には崩せないが、かと言って手を拱
いていても勝利は遠退くばかりだろう事は分かり切っている。だが、
逸って下手な事をすれば即敗北に繋がりがねない。

油断を許さない、強い緊張を伴う状況。だが、同時にここまでの使
い手と戦えたことに対する喜びと、負けたくないという意地のよう
なものも強く感じている。

(さて、どう攻めるか……)

影内も私も、一度離れてからは構えたまま動いていない。お互いに
呼吸が乱れているというわけではない。ただ、仕掛けるタイミングを
計っているだけだ。

最初は余りにも滾りすぎて待ちきれなかったのとある種のなつか
しさに突き動かされてしまったが、今度はそういうわけにも行かな
い。

「叢」をよりきつく握りながら、影内の一挙手一投足を見逃さないよ
うに、つぶさに観察する。

「ツアアアアア!!」

「オオオオオオツ!!」

だが、それも長くは続かなかった。何が合図になったかなんてわか
らなかつたが、本能的に腰の可動式スラスタを吹かせていた。

互いに吠えながらの、ほとんど同時の接近。だけど、素の加速では
私が押し負けそうなので重ねて瞬間^{イグニッション・ブースト}加速を使用。当たり負けしな
いだけの加速は得られたが、それだけで押し切れるほど甘い相手でも
ない。

影内は再度、あの異常な速度の剣戟を放ってきた。一動作のみの、超絶的な速度を持つ剣劇。速度と質量を破壊力にしている私にとつて、大質量の大剣を超絶的な速度で振れるなど、厄介な事極まりなかった。

(何とかして、この剣を攻略しないと、な……!!)

再度、あの嵐のような連撃との打ち合いにもつれ込みながら、私は影内に勝つための一手を模索していた。

S i d e 簪

攻め手と守り手が二転三転する、密度の濃い格闘戦。

僅かな時間で繰り広げられるそれを、私はただただ言葉もなく見つめていた。

ややあつて、彼と彼女の距離が少しだけ離れた。そして二人とも構え直し、少しの間だけ睨み合う。

「ツアアアアア!!」

「オオオオオオツ!!」

だけど、その均衡は長く続かない。再度二人はどちらからともなく接近した。箒に至っては瞬時加速まで使っている。

「……凄い」

再び始まった圧倒的な技量と技量がぶつかり合う格闘戦を、それだけ眩くと後はただただ黙って見ていました。ですが、黙っていたのは私だけではありません。観客席で見ているほとんどの生徒が、黙って見ていました。

(凄い……凄い。凄い、凄い!!)

いえ。正確に表現するならば、魅入っていた、と言うべきでしょう。圧倒的な密度の、全力の格闘戦にはそれだけの魅力がありました。

私個人としては、かつて一度、彼と姉が対峙した時の試合も見ています。ですが、この試合にはそれとは別種の凄さがあった。互いの持つ近接用の得物のみでここまでの試合を展開するなんて、近年の大会

でも滅多に無いから。

絶えず鳴り止まない剣と刀がぶつかり合う金属質の音。その中に混じる二人の叫び声。

他の音が何一つといてもいいほど聞こえてこないように感じた。それほどに、誰もが魅入っていた。

Side 一夏

剣崎に再接近し、再び剣と刀をぶつけ合い斬り合う。

異常に大きな刀をあの異常な加速の旋回も使って振っているにも関わらず、その剣技は相変わらず凄まじく冴えわたっている。

(本当に、凄まじいな！)

此方も二刀に加え蹴りも交えながら格闘戦を繰り広げる。

手数では此方が勝っているものの、剣崎の一撃の威力は侮れない。もしあの異常な加速を乗せた一撃を受け損なえば、痛手になることは間違いない。

(気も抜けない……！)

心地よい緊張感を感じながらも、同時に勝つための一手を仕掛けるタイミングを模索する。

だが、最初の打ち合いよりもよりの確な一撃を剣崎は放ってきており、心なしかより集中しているようにも見える。このままでは、どこかで此方が斬られかねない。

だからと言ってそればかりに気を配ってもいられない。所々で混ぜられる小刀も的確な攻め手となっており、そちらにも注意しなければならぬからだ。

(特性の違う二種類の得物……か)

俺自身も剣の間合いが突然変化することがどれだけ厄介な事かは、使う側としてよく知っている。だからこそ、両方へ気を配ることが重要な事も理解している。

だが、これらすべての要素に対する注意と集中力がどこまで持続す

るかは分からない。

一度目と二度目の斬り合いで、互いに消耗していた。数値として出ているのは剣崎の方だけだが、こちらも細かくダメージを受けている事に変わりは無い。

その状況下でさらに剣崎との斬り合いを続けることになったが、やがて再び距離が離れる瞬間が来た。

互いに得物を構える。二度目の斬り合いを始める前の時よりも、より深く。

(ここで、仕掛けるか……！)

剣崎はこの攻防で決着を付けるつもりなんだろう。両手で構えるのみならず、右手にもあの長大な刀をマウントしている。

だが、決着を付けようとするのは此方も同じだ。そのための一手を準備するため、ソード・デバイス機攻殻剣を握り調律の画面を開いた。

S i d e アイリ

「一夏、ここで決着を付けるつもりですね」

「……そ、そうなんですか!?!」

私の眩きに、それまでひたすら試合の観戦に集中していた簪さんが驚いたように声をあげました。

彼女の問いに頷きを返して、その理由を少し説明しておきます。

「今、一夏が何か画面のようなのを開いたのが見えませんでしたか?」「見えましたけど……」

調律の画面を開いたのは一瞬だったのに、簪さんはよく見えています。

「あれは、あの機体の各部への出力を調整するための画面です。一夏は、《ユニテッド・ワイバーン》の出力バランスを一部変更して、次の一手を準備したのでしよう。」

ですが、理由は伏せさせていただきますが、それは危険性の高い行為なんです。特に、今の一夏にとってはここ一番の場面でしか使わな

いほどに」

そして、一夏が何を狙っているかなど簡単に分かります。兄さんほどではありませんが、伊達に行動を共にする時間が長かったわけではありません。

大方、障壁へ回すエネルギーを減らして機竜牙剣に回したのでしよう。完全に切ったという事は無いと思いたいですが。

「じゃあ、次の一撃でこの試合は」

「決まるでしょうね」

簪さんが再び対峙する二人へと視線を戻しました。未だ動かず、だけど確かな緊張感が伝わってくる其処へと。

Side 箒

(何かしたが……何をしたんだ、アレは?)

影内が画面のように見える何かを表示して何かをしたが、詳しい事が分からない。

だが、影内の持つ二刀の大剣が僅かに輝きを増した気がした。若干不気味さがあつたが、この一撃で勝負を決めてくる気だろうことは読み取れた。

だが、それに対し私ができることはない。ただ、勝負を決めるために次の一撃を確実に直撃させる事だけだ。

「ツハアアアアアア!!」

瞬時加速を使って踏み込み、一気に「叢」の間合いにまで詰める。

「オオオオオオオオ!!」

影内もかなりの速度で踏み込んでくる。

互いの距離は一瞬で詰まり、互いの得物が避けられないほどになる。

その瞬間に瞬時旋回イグニッション・ターンを一瞬だけ使って旋回しその勢いを「叢」に乗せて振り抜く。それまでと違い、「叢」二振り分と《陽炎カゲロウ》自体の重量を加えた一撃は、まず間違い無く必勝の一撃になる。と言うより

は、ならなければ今現在のこの機体の最大火力が通じない事になる。

影内も私の一撃に合わせて、あの超速の一閃を放ってくる。

だが、さつきよりも強力になった一撃ならあるいは。そう思っていた私を、影内は超えてきた。

(……なっ！)

輝きを増していたその大剣の横薙ぎは私の一撃を弾き飛ばした。のみならず、私のSEまでその余波で削ってくる。

だが、それだけに終わらない。

「――円水斬！」

機体を捻るようにして回転しながら、もう一刀も振り抜いてくる。姿勢を崩されていた私は同じく超速で放たれたその一閃をもろに受けた。

さらに、もう一度同じ動作で攻撃してくる。回転と言う単純と言えば単純な動作を基軸にした攻撃は、私を一撃目と同じく捉えた。

直撃だけで三撃。その威力は凄まじく、それだけで私の残りのSEを奪い去って行った。

最後、衝撃を受けきれずに吹っ飛ばされた私はアリーナの地面に叩き落とされ、気が付いた時には《陽炎》が解除されていた。

ブー!!

『試合終了！』

勝者、影内一夏！』

試合の終わりを告げるブザーが、影内の勝利を告げるアナウンスが響き渡る。

(……ああ、負けたのか)

それを聞いた時に、ようやく実感が湧いてきた。

負けたこと自体は悔しいが、試合そのものには悔いはない。それほどまでに、いい試合だったと思った。

「……剣崎、怪我は？」

「無事だ。中々凄まじかったがな」

影内が地面まで降りてきて機体を解除した後、そう聞いてきた。だが、私もそう柔な鍛え方はしていないと自負している。

「……私の敗北だったが、良い試合だったと思っている」

「それは俺もだ。ありがとう」

私の言葉に、影内は笑顔で答えてくれた。

その後は特に言葉を交わすこともなく、互いのピットへと戻っていった。今はそれだけで十分だった。

観客席からはもう何を言ってるのかわからないほどの歓声が響いている。一昔前の自分からは想像も出来ないような状況に、未だに戸惑いが浮かぶ。

(だが……悪くない、な)

自分自身への照れ隠しのようなことを考えながら、ピットの中へ入りアリーナを後にした。

これが、クラス代表決定戦最後の試合の終幕だった。

第二章（10）：それぞれの決着

S i d e 一夏

クラス代表決定戦を終えた後、俺は簪と一緒にアイリさんを見送っていた。外出届を出していないため、普段はやっている護衛の任がでない事が不覚だった。

「それでは、簪さん。今日はお世話になりました」

「い、いえ！」

私も、色々な話を聞いて良かったです」

「そう言って貰えるのであれば私としても嬉しいです。」

一夏。こちらの事は基本的に任せますが、必要があればちゃんと呼んでくださいね」

「委細了解しました」

別れる間際、僅かな時間で会話を交わしていた。

常と変わらない様子に安堵を覚えるが、それも僅かな間で間も無く更識家の関係者の下去っていった。

やがてその姿が見えなくなったところ、簪が徐に口を開いた。

「もうそろそろ部屋に戻らない？」

「……そうだな。」

いや、少し待ってくれ。《ユナイテッド・ワイバーン》に必要最低限の整備はしておきたい」

「ん、分かった。」

「じゃあ、少し待ってるね」

「すまない」

簪の言葉に頷きかけたが、冷静に考えれば最後の試合のダメージがまだ残っている。これをそのままにしておく訳にはいかない。

道中は簪と話しつつ、《ユナイテッド・ワイバーン》の整備をするため整備室へと向かっていった。

S i d e セシリア

「オルコットさん……貴女は自分がどんな立場か、分かっている今回のような事をやったんですか!」

「も、申し訳ありません!」

……ウエルキン先輩」

クラス代表決定戦を終えた夜。

私は、IS学園在籍の2年生でありイギリスの代表候補生の先輩にあたるサラ・ウエルキン先輩から自室に来るように呼び出されました。ルームメイトの方は別の部屋に行つて貰っているそうです。

なぜ呼び出されたのかなどは、言うまでもないでしょう。今回のクラス代表決定戦に関する経緯についてです。

「男性操縦者と倉持技研の代表への暴言に始まり、提案者は別とは言言葉で片付けることなく決闘と言う形での武力による解決。しかもそこで連戦連敗……」

ウエルキン先輩は報告書と指示書が一緒になった束を見ながら一回深く溜息を吐くと、私の方へと向き直りました。

「ハッキリ言つて、代表候補生を解任されてもおかしくないほどの問題行動です。分かっていますね?」

「はい……」

さすがにこれは言い訳ができません。甘んじて受ける以外は無いです。

その先に、何が待っていたとしても。

「さて、オルコットさん……あなたの処分に関してですが。

本来なら本国から直接伝えられるべきなのですが、日程の都合もあり私が代理として伝えることになりました。そのつもりで聞いてくださいいね?」

「……はい」

覚悟していた事とは言え、恐怖が無いとは言えません。

震えそうになるのを何とか抑えながら、ただ黙つて次の言葉を待ちました。

「結論から言わせてもらいますが……嚴重注意、並びに一定期間の報

告義務の強化、になりました。

いいですね？」

「……え？」

一瞬、聞き間違いかと思いました。

(……か、軽すぎますわ)

「……意外そうな顔ですね。

では、オルコットさん。確かに今回の行動は問題を避け得ない、悪い言い方をしてしまえば愚かな行動です。それがなぜ、この程度で済まされたのか。分かりますか？」

そう言われて思い当たることは、一つしかありませんでした。

「……BT適性」

「正解です。本国としては次世代機選定計画イグニッション・プランのためにも早急にBT兵器の運用データをとり、開発を進めたい意向です。

そのためには、少しでも高い適性を持つ搭乗者が欲しい。そして、貴女はイギリス国内で今現在最高のBT適性を持っています。

後は、言わなくてもわかりますね？」

「……はい」

言われた言葉の意味はすぐに理解できました。

BT適性の高さによって容認してもらえるところですが、言い換えればBT兵器が完成すれば、あるいはその目的が立てばこのような事は無いという事です。

「ついでに言っておきますが、今回の一件は学生同士の揉め事……つまりは喧嘩として処理することになっています。ですが、こんな事はそう何回もできません。

わかりましたね？」

「は、はい……」

次は無いと、釘を打たれました。

「今後、このような行動は厳に慎むように」

「はい……」

そこまで話すと、ウエルキン先輩は手に持っていた紙の束をおいて、私の方に向き直りました。

「……さて。これで、本国の代理として貴女に話す事はお終いです。次に、代表候補生の先輩として貴女に言いたいことがいくつありますか」

「ここで少し言葉を切ると、ウエルキン先輩は私の方を見ながら真剣な顔で言いました。

「私はあなたよりも少しばかり長い間、代表候補生をやっています。その上で言わせてもらいます。

前にも言った事があると思いますが、確かに代表候補生は一般の人に比べれば優遇されていますし、それなり以上の権力も保証されています。

ですが、あくまで候補でしかないんです。候補とはつまり代表を選ぶためにその人が適当かどうかを見る前段階であり、あまりにも不適切だった場合は当然その地位は剥奪されます。

ましてや、事は国家全体に関わる事です。それ相応の実力はもちろんですが、同時に品位ある行動が求められます」

ウエルキン先輩の話を、私はただ黙って聞いていました。いえ、何も反論することができなかつただけです。

「今回、貴女はその類稀な適性を見込まれました。

ですが、貴女が起こしたことが褒められたことでない事には変わりはありません。また、問題にならないようにするための後始末と根回しに労力が割かれたのも事実です。

言っておきますが、私個人としても好ましくは思いません」

「はい……」

そこまで言うと、ウエルキン先輩はフツと表情を和らげました。

「さて、以上で代表候補生の先輩として貴女に言いたかったことは全てです。

最後に、私から個人的な頼みです」

「……頼み、ですか？

何でしょうか？」

それまでの話の流れを切るように、柔らかな口調で言われました。「オルコットさんを倒したという二人との試合を、見れないものかと

思いましてね。貴女とは本国にいたころに何度か試合もしましたが、さすがに二連敗するような事になるとは思えませんしね。

記録されている映像データを見せてもらっても？」

「そ、そういう事でしたら……」

意外と言えば意外でしたが、断る理由もありません。

ウエルキン先輩に今日の試合の映像を見せるため、私は準備を始めましたわ。

S i d e 簪

1年1組のクラス代表決定戦が終わり、影内君が《ユナイテッド・ワイバーン》の整備も終えて私達の部屋に戻ってきた後。

「ねえ、影内君」

「なんだ？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ああ、答えられる事ならいいけど」

私は、ずつと聞きたかったことを聞くことにしました。

「なんで、影内君はそんなに強いのか？」

ずつと、ずつと疑問に思ってた事。彼がなぜこんなにも強いのか。

企業代表 代表候補生 箒も、オルコットさんも、果てにはお姉ちゃん 国家代表 でさえ下せるほどの、圧倒的な強さ。

どうやったたら、その強さを手に入れられるのか。彼 助けてもらった を最初に見た時から、ずつと知りたかった。

私の言葉に、影内君は少し考え込んだ後、困ったような笑顔を浮かべながら話し始めてくれました。

「……正直なところ、俺自身はあんまり強いって思えないんだ。

俺に戦い方を、あの機体の使い方を教えてくれた人たちは、俺よりも遙か高みにいるから」

「影内君よりも、強い人たち……」

そう言えば試合の合間にアイリさんも言っていたっけ、と思いまし

た。

影内君が師と仰ぐ人と比べて弱いと言って、比べる相手がおかしいって。

「俺が強くなれたのだとしたら、それはあの人たちって言う最高の師に教えを乞う事が出来たからだ。」

強くなるうとした理由はまた別にあるけど」

影内君はそこで、一回言葉を切りました。

でも、聞きたいという思いが止まらなかった私は、すぐに次の質問をしていました。

「え、えつと！」

その人たちの事を、教えて！」

私の新しい質問に、影内君はまた少し考え込むと、何かを思い付いたように話し始めました。

「……そう、だな。」

あの人たちの話も全てするわけにはいかないけど。でも、あの人たちの事を話すんだったら絶対に外したらいけない事がある」

「……どんな事？」

私が少し身を乗り出し始めた様子を見て、影内君は楽しそうな顔で言いました。

「俺にとって最初の師である人には、二つ名があるんだ。」

どんな二つ名だと思う？」

「……最強、とか？」

影内君はその答えを聞いて、悪戯が成功した子供のような顔で笑いしました。

何か凄く恥ずかしかったけど、でも影内君もこんな顔をするんだと不思議な新鮮さもありました。

「ハズレだ。正解は……」

——ここから紡がれた言葉は、私にとって思いもかけないものでした。

クラス代表決定戦を終えた翌日。

「では、クラス代表が決定しましたので発表します」

一限目が始まる前のSHRの時に山田教諭が告げた。内容はクラス代表についての事。

と言つても、もう俺には関係無いのだが。

「1年1組のクラス代表は、剣崎箒さんに決定しました」

山田教諭からその名前が出た時、クラスメイトの反応は、その多くが戸惑いに彩られていた。

まあ、しょうがないだろう。

「先生、なんで二勝した影内君じゃないんですか？」

クラスメイトの一人が山田教諭に質問し、それを皮切りに他のクラスメイト達も口々に質問し始めた。

「静かにしろー!」

「ええと……影内君は確か、生徒会へ誘われたんですよね？」

織斑教諭が怒鳴り声で黙らせ、山田教諭が確認してきた。同時に、クラスメイト達の視線が俺に集まる。

「はい。生徒会に知り合いがいます、その人から入ってほしいと頼まれました。」

俺としても断る理由はありませんでしたし入ることにしたのですが、その場合現実の仕事量を考えればクラス代表は辞退すべきかと思えます。

本社からも、やるにしてもどちらか片方のみと釘を刺されましたし」

俺の言葉に、クラスの多くから溜息や机に突っ伏したような音が聞こえた。が、決まったものは変えようが無いのでそこは諦めて貰おう。

それに、剣崎だって別に悪い腕ではないのだし。

「ええと……剣崎さん、いいですか？」

「はい。全力を持って当たります」

劍崎が返事を返し、クラス代表が正式に決まった。

と言っても実のところ、この人事にも此方側の都合が無いわけでもない。仮にクラス内でイベント等で面倒なことを任せられそうになった際、劍崎にそれとなく止めて貰おうという思惑である。

「先生方、少々お時間貰ってもよろしいでしょうか？」

そのまま一時間目が始まるかどうかという時、オルコットの声がそれを遮っていた。

自然と、オルコットに視線が集まる。

「なんだ、オルコット？」

「この前の不適切な発言について、謝罪をさせて頂きたく思っています」「そういう事か。いいぞ」

織斑教諭の返事に、オルコットは「ありがとうございます」とだけ言ってから教壇に立った。

「先日はクラスの皆さんを不快にさせるような発言をしてしまい申し訳ありませんでした。遅ればせながら、この場をお借りして謝罪させて頂きます。」

本当に、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げると共に言われた謝罪の言葉は、未だ一部では戸惑いもあるものの概ね受け入れられていた。

あるいは、オルコットの態度から見下したような部分が抜けているように見えたのも大きかったのかもしれない。

「それと、影内さんと劍崎さんも。」

過日の不用意な発言について、改めて深くお詫び申し上げますわ」「別に気にはしていない。」

試合前は俺もずいぶん言ってしまった事だしな。それについては、むしろ此方がすまなかった」

「私も慣れている内容ばかりだったからな。」

気にしないでくれ」

俺と劍崎の返事に、オルコットは「ありがとうございます」とだけ言い再び頭を下げると、席へと戻っていった。

その時のクラスの雰囲気は、心なしか少し温かいものを感じた。

「影内、少し残れ」

授業の終わった放課後、いつかの放課後と同じように織斑教諭が呼び止めてきていた。

ハッキリ言って残りたくない。だが、今までの行動から考えても無視すれば物理で押しとどめられる可能性もある。

結局、残ることにした。

「それで、何用でしょうか？」

「貴様の機体についてだ」

本当にいい加減にしろ、そう思った俺はきつと悪くない。

「それについては何度も断ったはずですが」

「そういう訳にも行かん。

取りあえず貴様のISをこっちに渡せ。その代わりに政府から支給……」

(……前よりも酷くなっていないか?)

言うに事欠いて今現在の機体を渡せとまで来ている。さすがにそんな事を聞く気はないが、上手い事言っこの場から離れなければならぬというのが少し面倒だった。

「あ、織斑先生。

「少しいいですか？」

だが、俺のそんな考えも杞憂に終わった。

山田教諭が何か焦ったような様子で戻ってくると、そのまま織斑教諭に話しかけていた。

「山田先生、要件は？」

「それが……学園長が、至急学園長室に来るように、と」

その言葉を聞いた瞬間、織斑教諭が露骨に不愉快そうな顔をした。だが、それだけに終わらず。

「あ、影内君。

「ちよつといいかな？」

今度は簪が来た。

「簪？ 何用だ？」

「えっと、生徒会の人たちが出来ればすぐに来てほしいって……」

「分かった」

渡りに船、とはこのことだろう。

「織斑教諭。お互いに用事ができたみたいですし、俺はこれで失礼しますね」

ひとまずもう相手をしなくてもよくなった俺は、簪とともに早々にその場を去っていった。

Side 千冬

(……まったく、こんな時に余計な事を！)

内心悪態をついていたが、表に出してもしようがないので努めて冷静に振る舞う事にする。

コンコン

「織斑です」

「ああ、入ってください」

学園長室の中から聞こえてきたのは、男性の声。その時点で、重要な話であることは知れた。

「失礼します」

中へと入り、轡木学園長の座っている机の前に出る。

そのデスクにはそれなりの量の書類が置かれていた。

「織斑先生、なぜ呼ばれたか分かりますか？」

「……いえ」

私の答えに、学園長は深く溜息をついていた。

だがそれも僅かな間のことで、学園長は改めて私のほうに向き直ると確認するように口を開いた。

「最近、影内一夏君に彼の登録している専用機とは別の専用機を渡そうとしたそうですね」

「はい」

日本政府からの指示だったのだし、所属企業と学園長には後日改め
て通達すると言われていたのもあって特に気にはしていなかったが。
「その件です。今後一切、彼に対し専用機関連で干渉する行為は禁止
します。破った場合は厳罰があるものと考えておいてください」

「……!?!」

(待て、それでは話が違うぞ!)

戸惑いを覚えた私をよそに、学園長は話を進めていた。

「まず、政府からの指示ということですがこの時点で正確な表現では
ありません。厳密には、政府の一部の人間が強行した結果であり、正
式な決定ではないとの事です」

未だ固まっているままの私に対し、轡木学園長は書類を何枚かめく
りとおるページを私に見せてきた。

「そして、これが日本政府の正式な決定です。

要約すれば、それまでの一部のみが断行した行為に関しては謝罪す
るとともに、今後再発防止に努めるとの事です」

そのまま書類を机の上に置くと、轡木学園長は再度私の方に向き
直った。

「当然、それは貴女に対しても同じです。

「いいですね?」

「し、しかし……」

「いいですね?」

有無を言わさぬ口調。ここで何を言ったとしても、この男は引き下
がらないだろう。

(面倒な事を……!)

内心忌々しく思ったが、この場では何を言ったところで変わらない
だろう。

それこそ、決定的な何かを持ってこない限りは。

「……分かりました。

それでは、失礼します」

出来るだけ平静を装いつつ、私は学園長室を後にした。

「……余計な事を！」

教師用に割り当てられた個室である自室に戻ってきたが、苛立ちを
抜けなかった。

(これでは……調べられん！ クソッ！)

暫く荒れていたが、やがてそこに第三者が現れた。

「千冬様、少々よろしいでしょうか？」

「……クロエ、か。」

「どうした？」

来たのは東の子飼いであるクロエ・クロニクル。こいつが来るとき
は、大体束絡みの時だ。

「はい、東様からの伝言を承っています」

「内容は？」

「まずは先日の指紋について。合致しました。彼、影内一夏様は、織斑
一夏様で間違いないと東様は仰っています。また、あわせて詳しい状
態を探るため早急に《白式》を使わせてほしいと」

「……ッ!! そうか……そうか!!」

この時、私の中に駆け巡った喜びを言い表すのに相応しい言葉は見
つからなかった。それほどの喜びだった。

だが、完全に安心はできない。姉である私に対してあの反応だ。記
憶喪失か何かになっている可能性も否定できない。

だからこそ、政府の連中が渡そうとした時に東が手を加えた《白式》
を使って正確な状態を知る必要がある。

「それと、例の機体について。」

《紅》はもう少々あれば完成するとのことですが、《桜》と《騎
士》はまだ暫く時間がかかると。また、これらを完成させるために《白
式》の稼働データが欲しいとのことですよ

「……分かったと、東に伝えておけ」

「了解いたしました」

それだけ返事を返すと、クロエは東の下へと戻っていった。

(……あの時、死んだのかと思っただが、生きていて、くれたのか)

誰もいなくなった自室で、一人考えた。

(なのに、何故戻ってこない？ 家族は一緒にいる物だろうか?)

……いや、あれはきつと何か理由があつての事なのだろう。だが、それを知るためには色々邪魔な物が多い。

あの出来損ないや、それを与えた連中の一人だろう銀髪の小娘。今は学園長と生徒会の連中もだ。

(あるいは……あの日の事、か)

日本政府の連中が私に一夏が誘拐された事を伝えなかった、あの日。あの日の事を、恨んでいるのかもしれない。

だが、あの化け物どもを屠れる力を示し、真実を伝え、二度と繰り返さないという決意を伝えれば、きつと戻ってきてくれるはずだ。

(……そうだ。そもそも一緒に居ないことが間違いなんだ)

ならば、間違いは正さなければならぬ。

(弟は姉の物だろうか？ なあ……一夏)

再び家族一緒に過ごしたあの日々に戻るため、私は決意を新たにした。

第二章（11）：それぞれの道

S i d e 一夏

「いや、ご足労頂いちゃって悪いわね」

「お気になさらず、更識会長」

生徒会室に呼ばれた俺は、入ってすぐに更識会長からの軽い挨拶に出迎えられていた。

一応、正式に生徒会に入ったので呼び方もそれに相応しいものに変えている。

「さて、早速で悪いけど本題に入るわね」

そういうと、更識楯無は分厚い紙束を取り出した。

それをめくりながら、そして妙に苦々しい顔をしながら話し始めた。

「政府があなたに使わせようとしてたI Sについてなんだけど。現状維持、つまり今あなたが使っている《ユニイテッド・ワイバーン》をそのまま使っていてももう方針で正式に決定したわ。勿論、学園側でもそれは同じよ」

そこまで言うと、更識会長は一回こちらへと向き直ってから再度話し始めた。

「ひとまず解決が遅くなって申し訳ないわ。

でも、これでもう政府からの介入はないと思うわよ。後、学園長からの正式な書類も貰ってきておいたから受け取ってね」

そう言って手に持っている紙束とは別に何かの書類を取り出すと、それを俺の方へと渡してきた。内容を見れば、確かに学園長からの書類であることが窺える。

「確かに受け取りました。

それにしても、早い対応ですね」

俺の言葉に、更識会長は苦笑いで返していた。

「ほぼ完全に日本政府の恥なのが辛いところなんだけどね。

今回やった対応も、言っちゃえば密告と大差無いし」

「密告、ですか？」

更識会長は頷くと、話を続けた。

「ええ、そうよ。」

今回あなたに専用機を渡そうとした人たちは、正式な手続きを踏まずに担任である織斑先生に一足飛びに連絡していたのよ。言い換えれば、一部の人たちの暴走ね。当然こんな事をすれば大問題になるから、立場上の上官にあたる人や対立している派閥の人たちにこの事を裏付け付きで教えたのよ。

後は勝手にその人たちで暴走した人たちを何とかしてくれたってわけね」

言うのは簡単だが、この短期間で裏付け付きというのはそう出来る物でもないだろう。彼女や彼女の家の関係者たちの手腕の一端を見た気がした。

「その結果がその量の報告書類ですか」

「まあ、報告書類以外にもあったりするんだけね。」

コレとか」

そう言つて紙束を何枚かめくると、俺にそのページをみせてきた。

「政府の人間があなたに渡そうとしていたISのスペックよ。」

まあ……内容は若干呆れる物だったけどね」

「試しに読んでみる？」と言われたので試しに読んでみた。

それから数分。内容は確かに呆れる他なかった。

《白式》と銘打たれたその機体は、基礎的な性能の面においては高機動系のそれに分類されるもので、操作をある程度習熟していれば悪くはない物だった。だが、最初にこれを渡されそうになった時は実技試験の時だったはず。最初から完成している機竜ならいざ知らず、そこまで用意したとすれば短すぎるように思われる。

だが、本番はここからだった。

「装備が純近接用ブレード 《雪片式型》のみ……」

笑えない冗談にしか思えなかったが、どうやら本気らしい。

さらに読み進めていくと、その原因も書いてあった。

「《零落白夜》……」

自分のSEを犠牲に、相手のSEへと大ダメージを与える一撃必殺

の能力。

だが、過剰な攻撃力は相手の絶対防御すら貫通し、相手を即死させかねない代物と化している。

「確認してみた感想はどう？」

更識会長が聞いてきた。感想はおおよそ予想で来ているとでも言いたげだったが。

「……本当にこれが専用機ですか？」

「政府の人間にとってはそうみたいね」

呆れを感じさせる声音を隠そうともしていないが、俺もそこは同じように感じていたので何も言わない。

「明らかに競技で使うような機体じゃないと思うんですがね……」

「実践でもそこまで役に立つとは思えませんし」

「言うわねえ……ついでに、こういった理由でそう思ったのか聞かせてもらっても？」

実に楽しそうな顔で更識会長が聞いてきた。

「まず、競技で使うには火力が高すぎますね。」

アナイアレイト・ヴェノム
《消滅毒》での経験があるので言わせてもらいますが、確かに一

撃必殺の能力は自分の優位を約束し相手に対して多大な威嚇効果を生みます。

最初から命を懸ける覚悟ができていたのであれば特に動きが鈍ったりはしませんが、多くの場合は絶対防御によって命が保証がされているのがISの試合でしょう。そこに、その前提を覆す物を1人だけ持つて行つては、他の参加者の自覚の有る無しに関わらず焦りや恐怖を生み、通常ならできていた判断が遅れたり誤ったりする可能性を否定できません」

俺の考えを、更識会長は満足そうな表情で聞いていた。
「なるほどね。」

「じゃあ、実戦で役に立たないって言った理由は？」

「刀が届かない範囲で複数機を展開、包囲されれば袋叩き確定でしょう。それを抜きにしたところでこのブレードだけが唯一の装備である以上、それが破壊されれば攻撃手段がありませんしね。そのブレード

ドにしたって、範囲が狭いですし。ブレードの刀身以上の厚みを持つ物理装甲で全身を覆った相手とかが現れたら手の打ちようがないんじゃないですか？

それに何より、使った時点で自分の稼働時間を減らしていく以上、数を相手にするとどうしようもないでしょう」

更識会長が今度は感心したような表情になった。

「私も同じ考えよ。」

それにしても、直ぐにここまで思いつくとは思わなかったけど」

「一応、《アステイグ》での経験もあつての事ですけどね」

さらに、ここでは言っていないが、実戦においては複数の敵機を相手にすることを前提に考えてしまうと、どう考えたところで選択できる武装の少なさが不利に繋がる。

ルクスさんの神装機竜《バハムート》も、決して豊富な武装を持っているとは言い難かった。だが、それでも高い応用性を持つ神装があつた。無論、本人の技量にもよる部分も多分にあるが。

だが、この機体にあるのは至近距離での一撃必殺のみ。取れる戦術そのものが限定されすぎていて、応用性も何もあつたものではない。その時点で、対策のされやすさも違うだろう。

「全く……似たような構成で世界最強ブリュンヒルデになつた人がいるからって、それを他の人ができるわけでもないのに」

苦笑しながら、更識会長は《白式》をそう評価した。俺も似たり寄つたりな評価ではあつたが。

そして同時に、その名前を聞いてあることを思い出した。

「そういえば、織斑教諭はどうなつたのでしょうか？」

「一応、嚴重注意よ」

やったことの割には軽いなと思いつつ、これから文句を言われないのならそれでもいいかと思つた。

そもそもなぜここで働いてるのかと思つたが。

「なんで教師やれてるのかって思つてる？」

「まあ……否定はできませんね」

初日の事を考えれば、どう見ても向いているとは思えなかつた。そ

んな俺の返答を聞いて、更識会長は再度話し始めてくれた。

「あの人がこの教師になったのは、実のところ各国共通の思惑があつての事なのよ」

「各国共通の思惑……？」

俺の言葉に、更識会長は困つたような表情で頷いていた。

「平たく言うと、I S コアを持つ国同士でのパワーバランスの維持よ」

その一言で、大体は察せた。

「まあ、大体は想像がついていると思うけど、一国だけが最強の操縦者を要している、他の国から目の敵にされたりする可能性も否定できないのよ。」

さらに言えば、二機以上のI S を要していれば一カ所では確実に勝つてももう一カ所で蹂躪される可能性も否定できないしね」

機竜側で例えれば、少数の代わりに『七竜騎聖』レベルの人がいるのが一国のみで、他の国にいる機竜使いが全員中級階層ミドルクラスの代わりに大多数いる、と言つたところだろうか。実際にそこまでではないだろうけども。

「だから、一国だけが特出せずどの国でも利益を得られるように中立であるここに勤務してもらつてるのよ。」

さらに言うと、どうにも前回のモンド・グロツソの後の一時期にドイツ軍で教官を務めていたみたいだね」

「ドイツ軍で教官？」

あの元姉、そんな事をしていたのか。

どう考えても何かを教えられるようには思えないのだが。

「そうよ。そこで教えた子たちが結果をしっかりと出したみたいだね。それで実技教員としてはやれるんじゃないかって話が上がつて、今に至るって事よ」

「ドイツ軍の教え子が結果を出した、ですか……」

実際問題として教え子本人と会うことは無さそうだが、あの指導でよく結果が出せたものだなと感心していた。

「まあ、世界最強が指導した優秀なI S 搭乗者を各国で分けたいのが本音ね」

その話を聞いてある程度の納得を覚えたが、同時に新たな疑問が出てきた。

「……それだったら、なんで一年の指導に？」

基礎的な部分の指導は内容があまり変わりませんし、二年か三年の指導になるかと思うのですが」

「……それが現実よ」

更識会長は完全に苦笑이었다。その表情を見て、俺はこれ以上聞くのを止めた。

「さて、少し長話しちゃったわね。」

話したいことは最初に終わってるし、もういいわよ」

「そうですね。」

それでは、失礼します」

それなりに実りのあつた話を終え、俺は自室へと向かった。

S i d e 箒

「影内、少しいいか？」

生徒会室から出てきた影内を見て、声をかけた。

「剣崎？ 何用だ？」

「いや、クラスの皆が呼んでいてな。今夜、食堂に来てほしいと」

「食堂に？」

その後、私は必要な事を影内に伝えるとそのまま別れた。

(……剣筋はもはや似ても似つかわなかったが。こう話してみるとどうしても、な)

この胸の内の思いを、悟られないように。

S i d e 一夏

「剣崎さん、クラス代表就任おめでとう!!」

パン！ パパン！

その日、利用時間が終わった食堂にて。

祝福の言葉とともにクラツカーの音が鳴り響き、剣崎のクラス代表就任パーティーが開かれていた。

当の剣崎本人はと言えば、このような状況に慣れていないのか驚くやらお礼を言うやら顔を赤くするやらで大変そうにしていたが。

そうして暫くは和気藹々と進んでいた。

「はいはい！ 新聞部です！

まゆずみかおるこ

私は新聞部副部長の黛まゆずみかおるこ薫子。絶賛話題の影内一夏君と剣崎箒さんの取材に来ました〜！」

その中で突如として現れた人影。

新聞部副部長だというその人は、現れるなりまず剣崎のほうへと突撃していた。

「まずは剣崎さん！ クラス代表になった感想をどうぞ〜！」

「ええと……クラス代表として、企業代表として、恥じることがないよう精進していきます」

「う〜ん……無難と言えば無難、かな？」

それじゃ次、影内君！ズバリ先日のクラス代表決定戦の感想とその強さの秘密をどうぞ〜！」

剣崎にわざわざ質問しておきながら不満を漏らすその態度は中々感心を覚えるが、今は自分に降りかかってきたのをどうにかするのが優先そうだった。

「そう、ですね……。」

クラス代表決定戦に関しては、二人とも強かったですし戦い甲斐がありました。強いて不満を上げるとすれば、最初から全力のオルコツトを相手してみたかったですね。後になって記録映像で確認しましたが、ぜひ勝負してみたいです。

強さの秘密なんてありませんよ。日頃の訓練と、師と呼べる人たちの教えを守っているくらいです。あと、個人的に強くなりたい理由があるくらいです」

俺にとつては極々当然の反応。だが、どうも妙に食いつかれてし

まっただらしい。

「ほうほう……師の教え、とは？ 後、強くなりたい理由も」

ここで機竜側の人たちのことを話すわけにもいかず、これ以上食いつかれても困る。

そう判断し、ひとまず無難な形で終わらせることにした。

「さすがにそこまででは話す気ありませんよ。」

長い話になりますしね」

「ほうほう……じゃあ、後からならいいのね？」

「止めておくことをお勧めしますよ。」

俺の会社の上司のプライベートにも関わりますしね」

そこまで言うとは部長は露骨に残念そうな顔をしていた。

ひとまずこれ以上は聞かれなくて済みそうなことに安堵しつつ、それ以降は壁の花を決め込む。

それからはこれという事もなく、パーティーは平和に終わっていった。

Side 簪

影内君がなにかクラスの人達に呼ばれている間。

自室に1人の時に、自室のベットに横になりながら考えていた。

「……」

昨日、影内君から聞いた話の事を考えていた。

『『最弱』を含む二つ名……』

影内君が言っていた、彼の師匠の話。

全部は話してもらえなかったけど、それでも話してもらえた部分にあったその言葉は、どうしても影内君の師という印象とは繋がらないものだった。

そのことを聞いたら、影内君は真剣に語ってくれた。

『確かにその人は最弱を含んだ二つ名を持っている。』

けど、そこに不名誉な事なんて何一つない。あの人は、大切な人を

守るために、そして理想を貫くためにその剣を握っている。それは、誰にでもできる事じゃない。

もしあの人がそんな人じゃなかったとしたら、俺もここまで来れなかっただろうしな』

凄く意外だった。ここまで強い影内君なのだし、自力でも強くなれたんじゃないかとも思ったから。

『それは無いな。』

強くなれたのも、なろうとしたのも、その人達が居てこそなんだ』私も、影内君のように強くなれるだろうか。そう聞いたら、影内君はそれを否定した。

自分のようになる必要なんてない、と。

「私自身の、強さ……」

自分の強さを追求すればいいと。

『そう、自分自身の強さ。』

そのために誰かに教えを乞う事はあるし、俺もそうだった。けど、結局行きついた戦い方はその人たちとはずいぶん違うものになった』私にもそれが見つけられるだろうか、それを聞くと影内君の方が今度は聞いてきた。

『どうして、そこまでして強くなりたいんだ？』

私は、答えに詰まって咄嗟に言えなかった。

『俺が知っている強い人達は、皆それぞれに強くなろうとした理由があった。』

お前は、どうだ？』

影内君の問いに、私は答えられなかった。

答えがなかったんじゃない。ただ、詰まってしまっただけ。

「……お姉ちゃんに、追いつきたい」

1人だったら言えるこの理由を、なんで影内君の前で言えなかったのか。

「追いついて……どうなりたいんだっけ……」

きつと、この部分が欠けているから。

前にも箒から言われたことがあった。追いついて、そこからどうし

たいのかって。

私はそれに、いまだ答えを見つけられていなかった。

Side 束

「フンフンフン♪」

順調に組み上がっている《アカツバキ紅椿》を見ながら、私は非常に上機嫌だった。

大事な大事な妹への、誕生日プレゼント。

今、箒ちゃんが使っているあの鉄屑ISよりも遥かに高い性能を持つ、この大・天・才の私が丹精込めて製作した最新最高性能のIS。

「喜んでくれるかな？ 喜んでくれるよね♪」

この前なんか有象無象と戦って妙にダメージ食らっちゃったらしいけど、この機体ならそんなことは方に一つも無いだろう。

「そ・れ・に♪」

あの化け物共に会ったとしても、この《紅椿》なら早々に死ぬようなことはないだろう。なんせ、それ専用の対策も積み込んだのだ。

仮にあの羽生やした黒い奴に会っても、すぐにはやられないだろう。

「うんうん、こっちはこれでつと♪」

あつとはく……」

反対側、《紅椿》よりさらに未完成の二機のISに目を向ける。

桜色の装甲を纏う武士のような意匠を持つISと、白色の装甲に覆われた騎士のような意匠のIS。

「この二機ならば、あの黒い化け物なんてイチコロだね……♪」

設定資料：2

オリジナルIS設定

名称：陽炎カゲロウ（正式名称：打鉄近接戦仕様改修型）

搭乗者：剣崎箒（旧姓：篠ノ之箒）

世代：第二世代

待機形態：指輪（黒い輪に紅いクリスタル）

武装

・近接専用日本刀型大型ブレード「叢」×2（内一本は粒子化して格納）

・腕部「叢」マウント用追加装甲×2

・短刀型ブレード「風神」×2

・改良型アサルトライフル「飛天」×2

・腰部可動式追加スラスタ

・その他後付け装備

解説：倉持技研代表になった箒の専用機。基本的な部分は第二世代機である打鉄をベースにしており、基礎的な構造に大きな差は無い。しかし、近接専用のチューンや改修を受けており、接近戦での能力は並みの第三世代機を凌ぐほど高い。

ベースになった打鉄が防御重視であるのに対し、この機体は機動性が重視されているのが特徴。それに伴い装甲も一部に変更が見られ、搭乗者の動きをほぼ阻害しないように調製されている。

特に特徴的なのは腰部の横に搭載されている追加のスラスタで、これを稼働させながら移動することで効率よく高い推進力を獲得している。また、駆動部も運動性、耐久性を中心に大幅なチューンアップが施されている。

登場人物設定

・名前：剣崎箒（旧姓：篠ノ之箒）

自身に降りかかったとある事件と一夏がドイツで行方不明（実質死亡扱い）になった事とその後に近い人の対応を見たことを機にそれまでの自分に嫌気がさし、その後、紆余曲折を経て倉持の企業代表になった。それから少しの後『篠ノ之』姓も捨てている。家族全員が束との連絡手段を持っていないこともあつてすでに重要人物保護プログラムは監視と護衛（更識家）付きの条件の元解除されている。中学二年のころからは倉持の社員寮に住んでいる。

代表としての実力は代表候補生達と比較して「そこそこ」「中の上」。ただし、IS適性がCと高くないことを考えるとむしろ操縦技術は高い。専用機が支給されていたりするなど一年内では屈指の実力者の一人に数えられている。

・名前：如月キサラキ 網太アミタ

箒の専用機の担当主任。

箒がISに関する知識や操縦技術を学ぶ際の実質的な教師役だった人物で、倉持技研の企業代表になれたのもこの人の尽力によるところが少なくない。

開発者としても有数の有能さと人格を両方備えた人物だが、半面その場の思い付きを基とした異様な装備を製作することがあり、大抵は箒がテストしてはお蔵入りになる事態を起こしている。だが、中には意外な実用性を持ったものを生み出すこともある。

『打鉄式式』の開発にも携わっており、開発凍結に大きな不満を抱いている。

第三章：来たる者、招かれざる獣

第三章（1）：転校生

Side 一夏

「ねえねえいつちく、聞いたく？」

「何をだ」

朝から主語の抜けた会話を繰り出してきたのは布仏本音ことのはほんさん。クラスでそのあだ名がいつの間にか付き、そのまま定着していた。本人も気に入っていたため俺もそう呼んでいる。

「今日ねく、二組に転校生が来るんだってく」

「転校生？」

「この時期にか？」

俺が疑問の声を上げた時、近くにいた剣崎も同じように疑問の声を上げていた。

「いつちくにく、ほーちゃんも気になるのく？」

本音の問いに、俺たちは揃って頷いて答えていた。

「中国から来るんだってく」

「中国から？」

国外からわざわざこの時期に来るとなると、理由はそう多くない。

「代表候補生か何か、か……？」

「そうだろうな。」

じゃないと、わざわざこの中途半端な時期に編入させる理由がない。いくら留学生でも、普通にやれば入学に間に合うだろうし」

剣崎の言葉に、俺も納得を覚えた。

確かに、そうでもなければこの時期にずれ込ませてまで編入させるメリットは少ないだろう。

「お二人の予想通りく、中国の代表候補生なんだってく」

「二分かってたんなら先に言ってくれ」

俺と剣崎が揃って言ったが、当ののほんさんは相変わらずだつた。

「まあでも、2組の話だし関係があるのは剣崎さんくらいかな？」

「でも、専用機持つてるのって確か1組と4組だけだし、剣崎さんなら余裕だよね！」

話を聞きつけたクラスメイト達が言ってきた。

確かに他のクラスの話が直接関係があるのはクラス代表として対抗戦に参加する剣崎だけだろうが、いささか無責任過ぎやしないだろうか。そんなことを取り止めもなく考えていた。

だが、そんな考えを遮るかのように声が響いた。

「その情報、もう古いよ」

突如として教室の入口付近から聞こえてきた声に、皆が敏感に反応する。

自然と、視線が声のした方である扉の方へと向いた。

「2組も専用機持ちである中国代表候補生のこのファンリンイン凰鈴音が代表になったの。そう簡単に勝たせる気なんてないから」

視線の先にいたのは、仁王立ちしている小柄な女の子だった。その顔には勝気そうな笑顔を浮かべ、ツインテールの髪が目を引く。

その姿には見覚えがあった。機竜の世界に行つて名前を変える前からいた、数少ない心の底から友人と呼べた人と、いくらか伸びた背丈を除けばよく似ていた。

「ところで、1組のクラス代表つて誰よ」

「私だ。久しいな、凰」

剣崎が名乗りを上げると、そのまま鈴音の目の前に立った。

互いが互いの瞳を見つめ、笑顔を浮かべている。だが、その視線は交わった場所から火花でも出ているような雰囲気だった。

「三ヶ月前の日中合同演習以来か」

「ええ、そうね。二勝二敗の決着、今度こそ付けてあげる」

「ああ、楽しみにしている。勝たせては貰うがな」

「その言葉、忘れるんじゃないわよ」

宣戦布告とも取れる発言を互いに交わしてから、ふと鈴音が何かに気づいたように聞いてきた。

「そういえば、噂の男性操縦者つてこのクラスでしょ？」

どこにいるか知ってる？」

その一言に、態度には出さずに済んだが思わず身構えそうになった。まさか、この学園で機竜の世界に行く以前の友人に再会することになるとは思っていなかったのもあるが。

「そこにいるぞ」

剣崎がそれだけ言うと、鈴音は簡単に礼を言ってこっちに来た。

直後、驚愕に顔を歪めながら。

「一、夏……!?!」

驚愕しながら紡がれた言葉は、確かに俺の名前を呼んでいた。

未だに覚えていてくれたことに嬉しさを感じたが、名乗るわけには行かない。剣崎の時と同じように、俺は今の名前で名乗ることにした。

「確かに一夏だが、多分想像している人とは違うぞ」

「え……?」

鈴音が虚を突かれたような表情になったが、あくまでそのまま続ける。

「俺は影内一夏。」

よろしくな、凰さん」

「そ、そうなんだ……ごめんなさい、変なところ見せちゃって。」

さつきも言ったから知ってると思うけど、私は凰鈴音。後、さん付けなんて無くていいわよ。堅っ苦しいのは苦手だしね。その代わりに、私も影内って呼ばせてもらうけど。

とにかく、これからよろしく!」

差し出された手に握手を返し、その後は俺と剣崎に軽い挨拶を返して鈴音、いや凰は2組に帰ろうとした。

だが、そこで余計な一手が加わった。

ヒュッ

突然、後ろから何かが振り下ろされる。咄嗟だったが、そのまま見逃すはずも無い。その何かを止めようとして――

ガガガシッ

――俺がその何かを、凰が何かを持っていた手首を、剣崎が振り下

ろしていた腕をつかんで止める形になっていた。さすがに三人分の力で受ければ動きも止まる。

なお、確認すると振り下ろされたのは出席簿だった。これを持つ人間など一人しかいない。

そして、当の本人は三人にも反応されて驚愕している様子だった。「織斑教諭、最初に注意もしないでいきなり殴りかかるのは如何かと思えますが？」

俺の言葉に、織斑教諭はやっと常の状態に戻った。

「……風、もうSHRの時間だ。早く2組の教室に戻れ」「言われずとも戻ります。大変失礼しました、織斑先生」

織斑教諭の命令口調に、皮肉がたつぷりと乗った口調で風が返し、そのまま一組の教室を後にする。

後にはほんの少し不穏な空気が残ったが、それを全くと言ってもいいほど無視して織斑教諭が告げた。

「全員席に着け。只今よりSHRを始める」

さつき会った嘗ての親友に、懐かしさと、覚えていてくれたことに対する嬉しさと、そしてそれらを隠していることに彼女を騙しているような罪悪感を同時に感じ、何とも言えない気分を味わっていた。

S i d e 鈴音

SHRも終わり、一時間目が始まったばかりの時。

(……似ていたわね)

私は、授業でやっている内容がもう嫌と言うほど勉強した部分だったこともあって、さつき会ったばかりの影内一夏の事を思い浮かべていた。

別に一目惚れとかそういう事ではなく、私が嘗て親友と呼んだ人に似ていたから。それこそ、今も生きていればあんな感じになったんだろうなと思えるくらいには似ていた。

(一夏……)

その事を契機に、私の頭の中には彼の事が浮かんだ。姉と呼んだ人の応援のためにドイツに行き、ついに帰って来なかった、大事な親友。

結局、あの時の私達は彼に対して何もできなかった。

(だけど、今は……)

残った親友達と、約束した事。

一緒に泣き明かした子と、誓い合った事。声を上げる。上げられるようになる。

その決意は、例え何があっても揺るがない。

Side 一夏

朝に嘗ての親友との名乗りを上げない再会があったものの、その後は特に何事もなく午前中の授業が終わった。

そのまま昼食を食べに食堂まで行こうとした時。

「おおい、かんちゃん〜」

「だから、その呼び方は止めてって言うてるでしょ……」

のほほんさんが目眩く四組の教室から出てきた簪を見つけ、そのまま合流。結果的に俺、剣崎、簪、のほほんさんの四名で向かうことになっていた。

雑談を交えながら少し歩き、食堂に着いた時だった。

食券機の横で凰が待機していた。やがてこちらと目が合うと、そのまま歩み寄ってきた。

「ちよつといいい?」

「何か用か?」

「別に用ってほどじゃないけどね。朝の事でお礼言つところかなって思っただけよ」

朝の事、と言うと織斑教諭の事だろうか。いずれにせよ、礼を言われるほどのことをした覚えはないのだが。

「別に気にしなくてもいいんだが」

「私もだ」

「アンタ達が気にしなくても、私が気にすんのだよ」

俺と剣崎が同じことを思ったのか、凰に同じような返事を返したが、それでも礼を言ってくる凰だった。

言われて悪い気はしないが、少々気恥ずかしいのも本音だった。

「つと、簪も一緒ね。」

「アンタもクラス代表？」

「う、うん……久しぶり、だね」

「そうね。これからよろしく」

言いたいことを言っただけで俺と剣崎相手には満足したのか、凰は今度は簪相手に話し始めていた。

内容を聞くに、ある程度の知り合いらしい。考えてもみれば剣崎が凰相手に「日中合同演習」という言葉を使っていた。

簪も前から機体を持っていたのだし、それなりの立場があるのだろう。となれば、別にその場にいってもおかしくはない。

「久しぶりに会ったことだし、相席いい？」

「結構食堂混んでるし」

「私はいいけど……」

簪との会話の中で相席が提案されていたが、この場に居合わせているメンバーの中でその提案を無下にする理由がある者も居ない。そのまま相席することになった。

それぞれが思い思いのメニューを注文し、空いていたテーブルを見つけるとそこに座った後の事。

「あの……相席してもよろしいでしょうか？」

空いている席が見つからなかったらしいオルコットも来た。今のオルコットならば特に断る理由もなく、全員が了承を返した。

全員が席に着いたら、あとは「いただきます」だけ言った後に食べ始めていた。

最初は時間の制約も手伝ってそれぞれが無心に頬張っていたが、やがて余裕ができると雑談に花が咲き始めた。あるいは、十代女子の姦しきなのかもしれない。

その中にいる俺はと言えば、基本的に声を掛けられたら返す程度で、後は普通に食事をしていた。

「そういえば、嵐さん。さつき言っていた方とは仲がよろしかったのですか?」

「うん? さつき言っていた人って……一夏の事?」

その会話の中で、オルコットが言った1つの質問。

「ええ。」

随分と驚いているように見えましたので

「まあ、ね。仲は良かったわよ。」

親友だった。そう思っているわ……」

何気無く放たれたのかもしれないその質問に、嵐はどこか遠くを見ながら答えた。だが、その瞳には異様にギラついた何かも見えてくる。

(……親友。それだけでも、最高の手向けだよ)

親友だと、そう思っていてくれただけでも俺にとっては十分過ぎる。

一方、俺以外のメンバーはこの話題に触れるべきではないと判断したのか、早々に話題を変えていた。

昼食の時に気まづくくなる一幕があったものの、それ以外は特に問題も無く嵐とはやれていた。個人的には未だに罪悪感があるが。

そうして昼食も終わり、午後の授業に入る。内容的にはまだそこまで難しいものではなく、特に苦勞することも無く内容には付いて行っていた。

そして午後の授業も終わった放課後。

各人が部活に行ったり、それ以外の用事に行ったりと様々だが、その中で俺はといえば少々手持ち無沙汰にしていた。

王立士官学校にいた頃は騎士団所属シヴァレスだった事もあつて基本的には自主訓練、声をかけられたりすれば連携などの複数人で行う訓練など

を中心としていた。

だが、当然の事ながらIS学園に騎士団は無いし、実機を使つての訓練が出来る場所はアリーナ内部に限られている。そして、アリーナを使うには申請が必要であり、基本的に出してはいるもののまだ申請は通つていない。

つまり、実機を使つての自主訓練が出来ない状況なのである。

(……まあ、それだけが訓練でもないが)

現状を考えれば、普通に基礎体力などを鍛える訓練をすべきだろう。そもそも、機竜を扱うに当たり基礎体力も外せない要素ではあるのだし。

そうと決まれば後は実行に移すだけ。そう考え、急造された男子更衣室でトレーニングウェアに着替えると、外に出て他の生徒の迷惑にならなそうなコースを選定、そのまま走り出した。

それからいつも通りの鍛錬メニューをこなしていく。今まではクラス代表決定戦までに行わなければならなかった機竜の調整や、更識会長との諸々の取り決めに関する話し合いなども相まってやる時間が減っていたが、今日は久々に全てのメニューをこなせる時間があつた。

このメニューセリヌテイアラルグリスを考えてくれた人にはまだまだ及ぶものは無いが、それでもやらない事には向上など望めないのでキツチリとこなしていく。

そうして半分ほどのメニューを終えた後、意外な人影が見えた。

「影内、ちよつと待ちなさい！」

大声で呼びつけたのは凰だった。

心なしか、勝気そうな表情がいつもよりさらに強気になっているように見える。

「同室になったティナつて子に聞いたんだけど。アンタ、私が転校して来る前に剣崎と試合して勝ったんですって？」

「……クラス代表決定戦のことか？」

あの時は確かに勝たせてもらったが

質問の真意はまだ分からないが、俺の返答を聞いた瞬間に凰が笑み

を浮かべた。笑顔とは本来威嚇のためにあるんだと言わんばかりの
寧猛な笑顔を。

「そう。実のところ、私は劍崎とは三ヶ月くらい前に四連戦しててね。
その時は二勝二敗だったの。」

その劍崎を余裕で下したって言うから、勝負したくなっちゃって
ね。受けてくれない?」

「……言うほど余裕だったわけでは無いんだが」

あの時は確かに勝ったが、もしどこかで劍崎の一撃が当たってたら
分からない部分もあった。その意味では凰がさつき言った評価は適
切ではない。

勝負を受けること自体は全く異存は無いが。

「だが、試合は受けるよ。」

そのためには一回アリーナ使用の申請をしないとな」

「そのあたりは抜かりないわ。もうしてきたわよ」

凰の手には確かに申請書類があり、使用が認められた事を示してい
る。

「随分と手際がいいな」

「山田先生に審判役を頼むついでに織斑先生に渡してもらおうように頼
んだら、山田先生のほうで許可を出してくれたのよ。ちようど、申請
した時間に誰も使用申し込みが無いアリーナがあったみたいだから」
そういう理由なら納得も行く。少々腑に落ちない部分もあったが。
「分かった。」

で、時間と場所は……明日の放課後、第三アリーナか」

「そういう事で、明日は試合よろしく。」

まあ、負ける気なんてサラッサラ無いけど」

「それは俺のセリフなんだがな」

互いに軽い挑発を交えながら、その場は別れた。

明日の試合が楽しみだった。

第三章（2）：強さの意味

S i d e 簪

「明日、鈴と試合することになったの？」

「そうだったな」

鈴と三ヶ月ぶりに再開した日の夜。

私は自室で影内君から明日、鈴と試合をすることになったということを知っていた。それを聞いていた。

「そっか……でも、影内君だったら大丈夫そうな気がするけど」

これは私自身の本音だった。

別に鈴が弱いと言っているわけじゃない。むしろ、私が知っている代表候補生の中では強いほうの人だ。ただ、影内君が強すぎるだけ。

「さすがにそれはな……試合する以上は負ける気なんて無いが、それとこれとは別だ」

しかも、ここまで強いにも関わらず驕っていないような様子も無い。師匠と呼んでいる人よりも弱いからと言っていたけど、それでも影内君が強いことに変わりはないのではと思った。

「それに、俺にとって目指す場所はまだまだ遥か高みにあるんだ。

油断なんてしてられないさ」

その言葉を聞いて、思い出しました。

彼の師だという、最弱を含む二つ名を持つ人のこと。

「……そういえば、この前も言ってたよね。

その人と比べて自分はまだまだ弱いから、強くなったって思えないって」

「ああ」

影内君が即答したのを聞いて、やはり間違いなんかじゃなかったと思うと同時に、やはり不思議に思う気持ちも鎌首をもたげてきました。

「その人は、大事な人と、理想のために戦ってるんだ……よね」

「ああ」

だからこそ、聞きたかった。

「どうして……その人は、そんな事ができるの？」

「やっぱり、その……1人で何でもできるくらい、強いから？」

影内君がその人と比して自分の事を弱いつて言っているくらいだし、それくらいには強いのだろうと。私はそう思いました。

けれど、その言葉を聞いて影内君は私の方に向き直ると真剣な表情で語り始めた。

「確かに、あの人は強いよ。けど、その人の周りには信頼できる人が……命を預け合えるほどの仲間がいるんだ。

あの人は決して一人じゃない。信頼し合える誰かと共に戦える……そういう、最弱なんだよ」

「誰かと共に戦う、最弱……」

影内君はその瞳でどこか遠くを見つめながら、本当に大事そうにその話をしてくれました。

でも、不意に少し表情を緩めると――

「俺も聞いて言いか？」

――私のほうを真つ直ぐに見ながら聞いてきました。

緊張しましたが、私は領きます。

「昨日も聞いたが。」

どうして、そこまでして強くなりたんだ？」

再び聞かれたその質問に、私は再度言葉を詰まらせました。

でも、この人なら。淡い期待を抱きながら、意を決して口にしました。

「……お姉ちゃんに、追いつきたい」

「お姉ちゃんって……更識会長のことか？」

「うん……」

尻すぼみになっていった私の言葉を、けれど影内君は真剣に聞いてくれた。

「確かに国家代表ともなればそう簡単な事じゃないかもしれないが……だけど、簪だってそれなり以上には立場と実力もあるんだろう？」

「……どうして、そう思うの？」

考えてみれば、私が日本の国家代表候補生だということを話した覚えはありません。本音あたりが話したのかなとも思いましたが、それだったら直接的に言ってきたもいいはず。

「先日の鳳との会話の中で日中合同演習……だったか。それに参加してたって旨のことを言ってただろ。」

名前からして国家事業だろうし、企業代表剣崎や代表候補生鳳が参加している中でそう何も無いのを参加させるものなのかと思ってな。

それに、電車の時にISを使っていたが、あの時はもう遅い時間だったはずだ。貸し出されているだけの機体だったら戻されてるだろうから、あれは簪に支給された機体と考えた方が自然だ。

そして、これらの推測が正しいならそれなりに立場ある人、例えば代表候補生とかじゃないかと思ってるな」

たったあれだけの会話とそれだけの事からこれだけのことを推測しているのには、素直に驚きました。

「えっと……一応、日本の代表候補生だけど……」

私がそう答えると、影内君は少し驚いたような顔になりました。

正直なところ、私にとっては影内君がやっている事のほうで驚く事が多いので色々複雑ですが。

「それだけの立場が得られるほどの実力はあるんだろう？ 弱いわけでは無いだろうに」

「……でも、それじゃ足りない。お姉ちゃんに追いつけない。」

それに……さつき影内君が言った電車の時だって、私は結局何も……」

私が言ったことに、むしろ影内君は意外そうな顔をして、次いで言い聞かせるように話しました。

「お前が言ったその電車の時。俺は、お前が結構いい判断を下していたと思うが」

「え……？」

意外だった。あの時は完全に影内君に助けられていたから。

「だってそうだろう。」

あの時、俺がああ場に行くまではお前が戦っていたわけだが、その

おかげであの化け物たちはその場に止まった。気を失った運転手さんの方に行く事も無く、他のどこか、例えば都市部なんかの人口密集地帯に逃れることも無くな。

つまり、お前は被害を広げないっていう重要な事を成し遂げているわけだ」

だけど、あの状態から仮に私だけで戦ったとしても勝てたかどうかは怪しい……どころか、多分やられていたと思う。そうなれば、被害は広がっていたことは確かだった。

なのに、影内君はそんな私に意外なほどの評価を持っていました。「それに、戦闘面でも結構良かったと思うぞ。

確かに倒せてはいなかったし倒せるほどの火力があったかどうかは不安が残る面もあるが、お前はあの時、常に高度優勢は取っていただろ？」

「う、うん……」

「それは、あの化け物が飛べないと踏んだから。違うか？」

「そう、だけど……」

でも、それは誰もが当たり前のように考えることではないのだろうか。あの化け物たちは飛べそうに無かったし、遠距離攻撃も持っているとは考えにくかった。私のその考えは、影内君の次の一言に否定されました。

「冷静になれば当たり前に思えることかもしれないけど、そもそも冷静に考えるって事が中々できることじゃないんだ。

ましてや、自分の機体に大きなダメージを追わされたりした直後ならなおさら、な」

意外なほど褒められて、私は嬉しさと驚きの二点で固まっていた。なのに、影内君はまだ続けるみたいで。

「そして、お前が引き付けていたおかげで助けが間に合った。あの時は結果的に俺だったが、他の人が来るにしても最低限持たせる必要はあったことに変わりはない」

本当に、影内君は私にとっては望外なほど、あの時の行動を評価してくれていた。

「えつと……その……ありがとう」

「別に礼を言われるようなことじゃないだろ」

影内君はそう言って笑っていたけど、こうも手放しに誉めてもらえたのなんて随分久しぶりの事だったから、本当に嬉しかった。

私が日本代表候補生に選ばれた時も、お姉ちゃんがロシアの国家代表に選ばれたのと重なったために結局そっちに全部持っていかれることになった。別にその事を恨んでいたりとかは無いけど、寂しさと虚無感を感じたのは確かだった。

だから、ほんの少しの懐かしさと一緒に心の底から嬉しく思っていた。

(……あれ?)

そういえば、何で懐かしさを覚えたんだろう。そう思っただけを手繰って――

『簪ちゃん、編み物上手ね』

――随分前に、お姉ちゃんに編み物を褒められた時の事が思い当たった。

(そう言えば、あの時以来褒めてもらった覚えがないな……)

その事を思い出して、ようやく追いつきたい理由が分かった気がした。

(……ああ、そっか。

私がお姉ちゃんに追い付きたかったのって)

きつと、もう一度あの時のように褒めて欲しかったから。

対暗部用暗部とか、国家代表と代表候補生とか、そういうんじゃないか。

(きつと、もう一度。ただの姉妹のように、なりたかったんだ……)

自分勝手な我儘なのかもしれないけど。それでも――。

「……ざし。簪。

聞いてるか?」

思考の中に入り浸っていた私を、影内君の呼びかけが現実に戻してくれた。

「影内君、その……お願いがあるんだけど、いいかな?」

「内容は？」

影内君がどこか楽しそうな表情で返してくれた。

その顔を見ながら、私は影内君に一つだけ確認した

「自分の強さを見つげるために、誰かに教えを乞う事もあるって、前に行ってたよね」

「ああ、俺もそうだったよ」

その一言を聞いて、意を決すると口を開いた。

「私に、戦い方を教えてください」

私の言葉に、影内君は少し考えると返事を返してくれました。

「じゃあ、こうしないか？」

Side 一夏

コンコン

簪との話が一段落すると、部屋のドアがノックされた。

断りを入れて応対に出ると、そこには意外な人物がいた。

「山田教諭、こんな時間に何か御用でしょうか？」

完全消灯には少し早いですが、それでも教師が来るような時間ではないのは確かだろう。それこそ、問題行動でも起こしていない限りは。

あるいは、心当たりが無いだけで気づかないうちに何か問題でも起こしてしまったのだろうか。そうであるなら甘んじて注意を受けるだけだが。

だが、俺のそんな考えとは全く違う用件を話し始めた。

「え〜とですね……織斑先生がすぐに教員室に来るように、と」

「俺に、すぐにですか？」

念のために確認すると、山田教諭は肯定した。

正直なところ、名前を聞いた時点で面倒な事になりそうだなとは思ったが、用件の内容が分からない以上は断るための言い訳があるわけでもなく。結局、行くことにした。

同室の簪にも呼び出されたことを伝え、部屋を後にする。

(まったく……こんな時間に何の用だ)

一年生寮の寮長室だと伝えられていたのでそこまで行くだけなら
そう時間もかからず、間も無く目的寮長室地に着いた。

コンコン

「影内です」

「入れ」

中から織斑教諭の返事が聞こえ、入るように促される。

そのまま中へ入ると、こちらが口を開く前に織斑教諭が口を開いて
いた。

「明日、二組の嵐と試合をするそうだな」

「はい。そうですが何か問題でも」

その話題を持ち出した真意はとにかく、事実ではあるので肯定して
おく。

まさか、前回の試合前の二の舞になるとは思いたくないが――

「試しに白式を使ってみる気は無いか？」

――その考えは砕け散った。

「お前ほどの操縦技能ならば十分使いこなせるだろうし、性能的にも
十分なものがある。加えて、製造元も信頼できるところだぞ」

「……前にも言いませんでしたか？」

俺にその機体を使う気はありませんよ。上の意向もありますしね」

「その上の意向も、ここにいる限りは絶対のものじゃない。」

お前が使うと言えばそれで済む話だ」

おそらく特記事項の事を言っているのだろうが、それはここに在籍
している間だけの話だ。

「卒業後が大変な事になりそうですね」

「何、白式の製造元にでも雇って貰えばいい」

恐ろしく不確実な事を言い出している。そして、俺にとってメリッ
トが何一つといっても言いほど存在しない。

引く気が無いのは前回までと同様だが、今回は前回までと違って助
けが入りそうにない。完全に時間の無駄になり始めたので、そろそろ

消灯になることを言い訳にして早々に退散しようか、そう考えた時だった。

「そう嫌がる事も無いだろう。お前なら使いこなせる。」

なあ、一夏」

確かにアスディークで蓄えた高速戦闘と《消滅毒》アナイアレイト・ヴェノムでの経験も

込みにし、得意な二刀と蹴りを多用した連撃ではなく一撃必殺を中心とした戦い方に無理矢理変えれば、使うだけなら問題はないかもしれない。多大な労力と時間を割いてまでそうする理由もメリットもないが。さらに言えば、織斑教諭はアスディークの事を知らないはず。ハッキリ言って根拠が無さすぎる。

だが、さっきの発言の中での最大の問題点はそこじゃない。

教師と生徒の間柄にしては随分と親しみのこもった、言い換えれば馴れ馴れしさすら感じるほどの口調と呼び名。

まさかとは思ったが、それ以外に可能性も見つからない。

「……いきなり名前呼びになりましたが、誰かと勘違いしていませんか？」

「そう隠す事もないだろう。」

それとも……やはり、あの時の事を恨んでいるのか？　なあ、一夏」

酷く真剣な表情で紡がれたその一言に、確信した。

(……バレる、バレている。)

これは、面倒なことになった)

正直なところ、バレるとは思わなかった。そこまでこの姉が関心を持っているとも思っていなかった。だが、蓋を開けてみればこれだ。つくづく、自分の迂闊さを呪いたくなる。

「失礼。俺は影内一夏という名前で、織斑という苗字ではないのです
が」

「とぼけるな。お前が一夏だという事はもう確認している」

適当に鎌をかけて確認してみたが、どうやら何かしらの確信があるらしい。言い逃れはできそうにない。

「……で、俺をこの時間に呼びつけたのはその確認のためか？」

「……ああ、そうだ。」

それ以外にも、いくつかわなければならぬことがあるが……」
さて、何を言い出すのかと思つて一応は聞くことにした。

「まず……二年前の、モンド・グロツソの時のことは、すまなかつた。
あの時、日本政府は自分達のイメージを守るために、私にお前が誘
拐された事を伝えなかつたんだ」

まあ、薄々予想はできていた顛末だつた。あの時の犯人たちが言っ
ていた事が俺の記憶の通りならば特に。

「本当に、すまなかつた……」。

だが、もう二度とあんな事にはしない。もう二度と、お前を危険な
目などに合わせはしない。この最強の力の全てを使つてでも、守つて
みせる。

だから……!」

その先に、何を言いたいのかは文脈を考えればわかつた。

だが、特に心の中で動くものがあつたわけでもない。

「その言葉を聞いて、俺が言うべきことは今から言う事だけだ」

俺の一言に織斑教諭が顔を上げる。その顔には、僅かな希望が滲ん
でいるように見えた。

「別に恨んではいないし、一時期まで養つてくれた事には感謝してい
る。

だが、それだけだ。これ以上、仕事の邪魔はしないでいただきたい。
織斑教諭」

なるべく刺激しないように言つたが、それが何か余計に刺激してし
まつたらしい。

「……なぜだ。なぜなんだ、一夏!」

半狂乱とまでは言わないが、それに近いのではないかとさえ思わせ
る形相で織斑教諭が両肩を掴もうとしながら問い詰めてきた。

その手をバックステップして避けつつ、短く答える。

「まず、貴女が根本的に勘違いしているのでそこから。

別に俺は強制されているわけでも嫌々やらされているわけでも無
く、自分の意志で熟慮した上で今の立場にいます」

そんな馬鹿な、とでも言いたげな目だつたが気にすることも無い。

「ついでに、貴女は最強の力で守るなどと言っていましたか？」

それは、俺に手を出そうとする者がいたらその力で直接叩き潰すという意味ですか？ あなたが一人で」

「そうだ」

もうこの時点でマズイなと思った。孤高でいる事を是としているだけならとにかく、敵を作ることには躊躇していない。

それに気づいているかどうかも怪しいが。

「次に、貴女がこれまで言ってきた事について。

なぜに《白式》を使わせることにこだわったのですか？」

「……あれは、私が嘗て使ったIS《暮桜》のコンセプトを受け継いでいる機体だ。

お前が使うISとして《白式》以上の機体は無いと。私はそう確信している」

しかも嘗ての自分が何を思っていたのかにも気付いていない様子だ。

「試合で使うには強すぎて、けれど実戦で使うには脆すぎる。

そんな機体を、誰が好き好んで使うとでも？」

「……!？」

ここまで来るとここで何かを言っても効果が見込めない。だから、少し手を変える。

もう今更だが、この名前に関する事でいいだろう。

「では最後に、俺から一つ問題でも。」

今の俺の名前。影内。なんでそんな名前にしたんだと思います？」

「……何？」

「それが解けたら、話の続きにしましょう。」

大方、解けないとは思いますがね」

それだけ言い、その部屋をあとにする。

(まあ、本当の字は『影打ち』なんだが)

さっきの質問の答えは、実のところただの言葉遊びに過ぎなかったりする。それなりの意味もあるにはあるが。

(……嘗ての姉に会っても、特に何も感じないか。

俺も、大概におかしい人間なのかもな)
心の中で呟きながら、現在は簪と同室となっている部屋まで歩き始
めた。

第三章（3）：『竜』対『龍』

S i d e 一夏

凰との試合当日。

自分に割り振られたピットの中で《ユナイテッド・ワイバーン》の調律をしながら、静かにその時を待っていた。

そう間を置かない内に、時間になる。その時にはもうすでに十分な調律を終えており、十全に試合に臨めるまでに仕上げられていた。

「……さて、行くか」

二振りの機攻殻剣ソード・デバイスを携え、アリーナまで赴く。

高まっていく戦意とともに、嘗て親友と呼んだ少女がどこまで強くなったのか、楽しみでもあった。

S i d e 鈴音

「さて、行きましようか」

試合開始まで数分となくなり、自身に支給された専用機《甲龍》を展開し、カタパルトに固定する。

「……箒と、確か……イギリスの代表候補生を撃破、だったわね」

事前に軽く調べたら出てきた情報。

一組の子にそれとなく聞いてみたら、危なげだったとかギリギリそうに見えたという事もなく二戦二勝したみたいだった。

しかも、内一人は嘗て私自身も苦戦したほどの格闘戦特化の搭乗者である箒と来ている。

（どんな相手なのかしらね、影内一夏）

それほどの相手を前に、どこか試合を楽しみにしている自分もある。

（まあ、どんな相手でもいいけど。

私と甲龍の力で叩き潰すだけだし）

中国製の第三世代IS《甲龍》の特徴は燃費と安定性だけど、性能

面においては他にもパワーが高い事があげられる。

「凰鈴音、甲龍。」

「^出撃するわよ！」

Side 一夏

俺がアリーナ内部に出たのとほぼ同じくらいに、凰はカタパルトから出てきていた。

その身には、濃紫の装甲を纏うISを身に着けている。その肩に佇む非固定浮遊部位にある攻撃的なスパイクが目を引いていた。

「つて、なんでIS展開してないのよー！」

俺を見つけた凰が開口一番に言ってくる。

さすがに二度目ともなると慣れるもので、少し待つように伝えそのまま二振りの機攻殻剣を構え召喚符を唱える。

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。へユナイテッド・ワイバーン」

後ろに現れた《ユナイテッド・ワイバーン》を確認し、さらに接続。
「^{コネクト・オン}接続開始」

《ユナイテッド・ワイバーン》の装甲が緩み俺の体を覆う。

これで此方の準備は終わったので、凰の方へと向き直る。そこには、興味深そうな顔色を隠そうともしていない凰がいた。

「随分面白い形式で展開するISね。」

で、性能のほうはどうなの？」

「それは今から確認すればいいだろう？」

俺の軽口に、凰が「確かに」と言って笑っていた。そして表情を少し引き締め、こちらを真っ直ぐに見据えてきた。

「で、準備はいいのね？」

「ああ」

俺の短い返答に、実に楽しそうな声音で凰は告げた。

「オツケー。」

それじゃ、山田先生お願いします！」

そして、審判役を引き受けてくれた山田先生の声が響く。

『はい。それでは、影内一夏、対、風鈴音。』

バトルスタート
戦闘開始！』

さて、嘗ての親友との試合の開幕だ。

S i d e 鈴音

(さて。まずは軽く行かせてもらおうよ。影内一夏！)

心の中で叫びながら《甲龍》の主兵装、互い違いの向きに柄を繋ぎ合わせたような形の大型の青龍刀《双天牙月》そくてんがげつを呼び出し、回転させながら斬りかかる。

対して影内は二振りの大型実体剣を取り出すと、それを同時に振り抜いて真正面から迎撃してきた。

「いいわね、そういうの！」

正面からの格闘戦は嫌いじゃない。というか好みだった。

だから迎撃される事が分かっているにもあえて止まらない。そのまま切り合いに持ち込む。

ガギャギンツッ！

鋭利な金属塊同士がぶつかり合う音が響き、青龍刀と大剣が打ち合わされる。《甲龍》の双天牙月を相手に、影内の機体が振った二刀はまったく劣る事無く拮抗してみせた。どころか、気を抜くと私の方が弾き飛ばされかねないほど重い。

「……ッ！ やるわね！」

軽く毒づきつつ、体を捻って双天牙月を引きながら同時に捻った勢いそのまま足突き出し、蹴りを放つ。

だけど、影内も特徴的な四脚を器用に操ると豪快な回し蹴りを放ってくる。

ゴガンツッ！

重い金属塊同士が衝突した音が響く。

互いに攻撃しきれずに弾かれるように離れ、再接近しあい再度斬り合う。私は双天牙月を回転させて遠心力を乗せ破壊力と連続性を両立させた上で蹴りも混ぜて。影内は二刀の大剣を主軸にして蹴りを始めとした体術を混ぜながら。

互いに似ている戦術だと思っただが、だからこそ感じた。

(このままだと、マズイかもね……)

純粋な格闘戦技能では多分私よりも影内の方に分がある。

(剣崎を下したっていうのも、納得ね)

さすがにかつて勝敗率が同率になった相手を下しているという事もあり、侮っていたつもりは無かったけど苦戦は必須みたいだった。(けど、こっちにも隠し玉つてもものがあってね……)

そして、影内が再度剣の間合いという至近距離に入った直後――

「かかったわね！」

――虎の子の衝撃砲を撃ち放った。

S i d e 一夏

凰が叫んだ直後、その両肩の球体にスパイクがついたようなあの非固定浮遊部位の装甲が一部開き、その内部に光を蓄えた――

ガゴンツッ！

――直後、《ユナイテッド・ワイバーン》に強烈な衝撃を感じた。

「何――ッ！」

自動展開の障壁がその機能を発揮し、大した事こそ無いものの姿勢を崩してしまった。

格闘を得意とする凰を相手に、この隙を晒したのは痛い。先程の不可思議な攻撃とともに距離を詰めると再度、一撃一撃の威力がある連撃が襲い掛かってくる。

それ自体は問題ないのだが、やはり今はあの攻撃が加わっている事が厄介だった。此方も格闘戦で応戦しようにも体勢を崩すには十分な威力のあるそれが邪魔をしてくる。

(格闘だけで付き合うには少々厄介だな……)

少なくとも正面に捕らえられている限りは避けきることは難しい。そう思ってから回りに回りこんだ上で攻撃を仕掛けようとしたが――

ゴンツ!

――再度、機体に衝撃を感じる。

念のために障壁と推進器に出力を回していたためダメージも無く体勢もすぐに治せたが、風のこの一手のおかげでそれ以上に重要な事が分かった。あの攻撃は砲身を必要とせず、全方位に放てる可能性が高いという事。

(回り込みも意味は無いか……)

常に動きを止めないようにしながら一回距離を離し、探知機^{リーダー}を起動。《ドレイク》としての機能を使って何か情報を得られないものかと試みる。

勿論、探知機を使っている間は攻撃などの戦術的な行動は取りづらくなるため行わず、探知機に回している以外の出力は障壁と推進器に多めに回している。

その結果は、存外多くの成果を得られていた。

(何も無いところにエネルギーが集中している……)

何も無い空間に集まったエネルギーの集まり、それが一気に減ってから数秒の後にあの衝撃が来ている。

察するに、衝撃波か空気砲のような何か。それらだったら見えないことにも納得がいく。

(ここまで分かれば、後は……)

対策戦術はいくつか心当たりのあるものがあるが、今の風に対して一番簡単そうなのはやはりその射線を読む事だろう。幸い、発射されるタイミングと風が此方へと視線を向けてくるタイミングに重なる部分がある。これを基にすれば避けられるだろう。

そう思い、探知機を一回切ると再度武装へとエネルギーを回す。ただし、今回は機竜^{ブレス}牙剣^{ソード}ではなくブレスガンとライフルだが。

その後は射撃戦になり始めていた。だが、俺は元々射撃はそこまで得意ではない事に加えどちらかといえれば避けるほうに注力している

ため命中率は悪く、凰のあの攻撃もある程度射線が読めるようになってきてからは命中率が悪くなってきた。

「……よく避けるじゃない。」

《龍砲》は見えないことが特徴であり強みなんだけどね」

最初は当たりまくったがな、というセリフは飲み込んでおく。

だが、自身の攻撃の命中率の低下を意に介していないかのように、凰は不敵な笑みを浮かべていた。

「けど、その方法は前にも使われたのよ……っ！」

直後、凰の視線の先とはまた別の位置に衝撃が放たれた。

Side 鈴音

中国の第三世代兵装 《龍砲》。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、その余剰で生じる衝撃自体を砲弾として打ち出すこの装備はその性質上、砲身も砲弾も全く見えない。衝撃砲とも呼ばれたりする。だからこそ正確な弾道を予測することは難しいし、避けることもままならない装備だと……あの時までは、そう思っていた。

(しっかし、剣崎と簪に披露する前に使うことになるなんて……ね)

三ヶ月前の日中合同演習の時の事。私はあの二人とも対戦をした。最終的には剣崎と二勝二敗。簪には全勝したけど、簪は量産型の武装を調節しただけの機体でチューンアップさえ碌にできなかった機体だから私の中ではノーカン。本番は、簪の専用機が届いて同じ土俵に立ってからだと思ってる。

その二人との対戦の中で、私は初めて龍砲を避けられた。それも、向けた視線の先から逃れるというだけの方法で。

武装そのものの欠点ならばともかく、これは完全に使う側の、つまりは私自身の問題。

虎の子が虎の子足りえるのは、その性能を十分に引き出せているときだけ。私はそれができていなかったことを悟り、それからはひたすら訓練した。

ここで止まるようだと、決意を貫くにはあまりにも力不足だと思っ
たから。

その結果は今ここにある。視線でフェイントを挟みながら微妙に、
時には影内の軌道を予測してその位置に放つ。

精度はガタ落ちするが、ある程度狙えればそれだけでも戦術の幅が
違う。

「まだまだー」

さらに龍砲で追撃を仕掛ける。同時に、回転させた双天牙月をブー
メランのように投げてさらに攻撃。

双天牙月が派手なのでそつちに目が行きがちだけど、そればかりに
注意していると龍砲の衝撃波が襲い掛かる。

(さて、どうでるの？ 影内!?)

Side 一夏

(悔っていたつもりは無かったが……ここまでか)

格闘戦の技術もそうだが、衝撃波の使い方も上手かった。視線で射
線を読むだけで対策を取ろうとしたのは早計だったと言わざるを得
ないだろう。

そして今度はあの巨大な青龍刀を投げてきた。さながらブーメラ
ンのように回転しており、見るからに大迫力。その軌道が緩く湾曲
しており、弧を描いてこちらに襲い掛かってきている。

当たる直前にライフルを機竜牙剣に持ち替えて弾き、機竜息銃プレスガンで反
撃を試みる。確かにあの青龍刀は恐ろしい迫力だが、あの軌道ではす
ぐには手に戻せないと踏んでの事だった。

が、俺の後ろで金属が何かに弾かれる音がした。ほぼ直感で後ろへ
と剣を振り抜く。

ガギンツ!

予想より遥かに速い速度で戻ってきた青龍刀が、後ろから襲い掛
かってきていた。

(あの衝撃波か……!?)

おそらくはあの衝撃波を青龍刀に当てる事で軌道を調節したのだろうが、この状況でそこまで器用なことをしたのは素直に驚かされる。

そして、そのタイミングで鳳本人からの衝撃波が放たれる。咄嗟に剣を構え盾代わりにして凌いだ。

「人力で二方向からの同時攻撃を一人でやるなよ……」

そして、この攻撃を見てある人を思い出していた。方法こそ全く違うが、一人で多方向からの同時攻撃を行うというのはセリスティアさんの《重撃》を思い起こさせるものがある。

(だが……あの人のように、本人が瞬間移動するわけでもない。

そろそろ、反撃させてもらおうか!)

この間の攻撃で気付いた、ある一点。

ようやく見つけたそれを突き崩すため、俺は準備を始めた。

S i d e 鈴音

(……何か、企んでいるわね)

何か妙な画面のようなものを出したけど、それが何なのかはわからない。分かり易い変化と言えば、剣の輝きが増した事だけ。

だけど、手を抜く理由はない。そのまま攻撃しようとして――

「戦陣・劫火」
センジン コウカ

――再度仕掛けようとした双天牙月のブーメランが影内に弾かれた。しかも、私の方に向かってさつきよりも遥かに速く。

「ちよ、早っ――!」

咄嗟に衝撃砲を二門とも使い速度を緩め、双天牙月をなんとかキャッチした。

けど、その時には既に影内の接近を許していた。

(そういえば、本人も速いんだったわね!)

心の中で毒づきながら、双天牙月をその手で振るい影内の大剣と競

り合う。だけど、最初の打ち合いの時よりも威力を増しており、あっさりとして打ち負けた。

そのまま終わらせる気もなく龍砲を起動して何とか仕切り直そうとして――

クイックドロウ
「神速制御」

――とんでもない速さの一閃が振り抜かれた。

さすがに反応が間に合わず、追撃を貰った。そして、そのまま蹴りが続く。このままやられるままになるわけにも行かないから、体勢を立て直して龍砲を撃つ。

けど、今度はそれが避けられた。

（――なんでっ!?!）

さらに数発の龍砲を叩き込むけど、影内は一瞬あのバイザーみたいなのを降ろして何かを確認するとすぐに上げ、その直後に回避していた。

「一体、どんな手品よ……っ!」

何をしているかはわからないが、当たらない以上は意味はない。

双天牙月を二刀に分割し、龍砲は一応準備しつつも再度の格闘戦へと移行した。

Side 一夏

（半ば賭けだったが……上手くいったみたいだな）

あの装備について確認できたこと。それは同時発射数で、最大で二発だった。おそらくは、あの装備一機で一発撃つのが限界なのだろう。そして、連射効率もそこまでではない様子。

その中で有効打を撃とうとすれば、必然的に狙う位置は限られる。とくに、至近距離で格闘しているのであればなおさらに。

だから、まずは接近して狙う位置を絞らせる。そして、エネルギーがたまり発射するタイミングを見計らって急加速して移動。

移動パターンが見切られてしまえば通じなくなるが、今回に限り上

手く行ったようだった。

「ハアアアツ!!」

「オオオオツ!!」

そして、凰を迎え撃つ形で再度始まった互いに叫び声をあげながらの格闘戦。

機竜牙剣の二刀で斬りかかれば、凰も分割した青龍刀の二振りで斬りかかってくる。

凰がその二振りを時間差で振るえば、俺もそれを迎え撃つ形で機竜牙剣を振るう。

此方が蹴りを入れれば、凰も豪快な蹴りで迎え撃ってくる。

剣崎の時とは違う、互いに連撃を主体とした格闘戦。だけど何処か似通った部分も感じていた。

そうして互いが互いを削り合っていたが、それももうそろそろ終わりを迎えようとしていた。

表示を見れば《甲龍》のSEがかなり削られていることが見て取れる。かく言う俺の《ユナイテッド・ワイバーン》の稼働時間もそこまで長くない。

互いに最後の駆け引き。

「行くわよ、影内……!」

「上等……!」

再度連結されたあの二振りの青龍刀が弧を描きながら襲ってくる。「ハアアアアアアアアア!!」

裂帛の気合が込められた一撃が叫び声とともに叩き付けられる、その直前――

「戦陣・劫火!」

――再度戦陣を使用。正面から切り伏せる。

直後に、もう一刀を振るう。

「神速制御!」

回避しようのない間合いでの、神速の一閃。

凰に直撃したそれは、《甲龍》のSEを最後まで削り取った。

『《甲龍》、SE残量0!』

勝者は影内一夏君です！』
管制室で山田先生が俺の勝利を告げてくれた。

第三章（4）：特訓

S i d e 鈴音

「負けたかあ……」

前評判に違わず、影内はその実力の程をまざまざと見せ付けてくれた。

圧倒的な格闘戦技能と判断力。一体どうすればあそこまでの物が培われるのだろうかと考えずには居られなかった。

私だって、代表候補生になるために積んできた時間は決して軽い物じゃないと自負している。けど、それを上回る影内に強い興味を抱いたのも事実だった。

「……聞きに行くか」

教えてもらえるかどうかはともかく、まずは聞きに行くことにした。教えてもらえるんだったらそれでいいし、駄目だったら駄目で自分でまた訓練すればいい。

そもそも、私はどちらかというと考えるより先に体が動く側の人なのだし。それで何も問題ないでしょう。

そんな事を考えていたら、入り口のほうから足音が聞こえてきた。

「いい試合だったな、凰」

「それ、負けたほうに言う言葉じゃないわよ？」

剣崎」

入って来たのは嘗て二勝二敗の痛み分けに終わらせられた倉持技研の企業代表、剣崎箒だった。

受け取り様によっては皮肉にも聞こえるかもしれない言葉だったが、剣崎に限ってそれは無いだろうと素直に思った。良くも悪くも気質が真っ直ぐな彼女の事、悪意など無いただの賞賛で言ったんでしょう。

「まあ、別にいいけど。」

で、何か用？」

「いや、私も改めて言いたい事があってな。」

後日のクラス対抗戦でのお前との試合、楽しみにしている」

挑むような、鋭い目付きで言われた宣言。

(つまり、宣戦布告を改めてしに来たって言う事ね)

言われた言葉の意味を理解して、思わず私も笑みが浮かんだ。

「ええ、精々楽しみにしてなさい。」

今回色々見せちゃったけど、そんなの関係無い。私と《甲龍》でしっかり叩き潰してあげるわ」

「それでこそ、だな」

そこで一旦会話が途切れ、互いに少しばかり無言になった。けど、それは悪い居心地じゃない。

「だけど、ふいにある事に気づいた私は得に深くは考えないでそれを聞いていた」

「そういえば、一緒に居た簪はどうしたのよ？」

そこに本音はいるのに」

そう、いつもは一緒に居る事の多い簪が今は居ない。彼女の従者だという(とてもそうは見えないが) 本音は居るのになだ。

「ああ。簪は今は影内のところに行っているよ」

「影内のところか？」

私が見た時は確かに仲は良さそうにしてたし、それはそれでおかしい事ではないのかもしれない。

けど、だったら剣崎と本音は何故わざわざ私のほうに来たのか。それを聞くと、二人は一瞬顔を見合わせて笑いあってから、こう言った。

「一つは私がお前に言いたい事があったから。で……」

「もう一つは、かんちゃんのおん援のためなんです」

「おん援？」

その言葉を聴いて少し怪訝な思いを抱いた私の心情を読み取ったのか、剣崎と本音の二人はさらに説明を続けた。

「ああ。簪にとつて、影内は最初会った時の事もあってある種のヒーローのように思っている部分があつてな」

「そんな人との一時を、お邪魔虫が邪魔しちやだめだよね」

「へえ……」

中々興味を引く話だった。

とはいえ、私がそこまで踏み込む訳にもいかない。適当な頃合いを見計らって影内のところへは行くとしましよう。

「そういえば、凰。」

整備は当然としても、この後は何か予定はあるのか？」

「そうね……私も影内のところに行こうかと思ってたけど、今の話を聞いたらちよつと迷うわね」

「なんで行こうと思ったの〜？」

「別に。ただ、あいつが一回トレーニングしてるの見だし、どんな内容なのか気になったのよ。」

今回もの見事に下されたわけだし、どうやったらああも動けるようになるのかはちよつと気になるじゃない」

私の言葉に、二人は「確かに」とでも言いたげな感じで頷き、その直後に本音が口を開いた。

「じゃ〜、ちよつと時間を置いて〜、その後に行こつか〜」

それでいいのかも思ってたけど、結局影内がどういったトレーニングをしているのか知りたいという誘惑に勝てなかった私と剣崎は時間を置いてから影内の方に行こうかと頷いていた。

S i d e 一夏

「影内君、今度も勝ったね！」

ピットに返ってきた時、ちようど簪が入ってきた。心なしか、少し興奮気味のように見える。

「凰もかなり強かったけどな」

軽く返しながら、調律を終了する。今回はダメージを確認するに止め、後に使う生徒のために場所を開けることを優先し本格的な整備は後にしていった。今日はあくまで場所を借りての模擬戦で、この後は別な生徒が練習に使うために届け出を出しているみたいだし。

「えつと、それで……今からいいかな？」

「昨日の約束の事か？ 俺はいいが」

「うん、じゃあお願いします」

この後やることは事前に簪との約束という形で決まっていたし、それ自体は俺も普段からやっている事なので何も問題はない。

そう、ただ単に一緒に鍛錬をして欲しいというただそれだけの内容だ。今日はもうアリーナが使えないので普通に鍛える他ないし、俺としてもそのくらいだったら特に文句を言う必要もない。

互いに鍛錬用の服に着替えそのまま鍛錬に行こうかとしていた時だった。

「影内、ちよつといいかしら?」

声をかけてきたのはつい先ほど試合をした凰だった。さらに、一緒に剣崎と本音もいる。

そして、本音以外の二名はトレーニングウェアのような衣服を着ていた。

「どうかしたか?」

ひとまず要件を確認するため答えたところ、凰はその服装からある程度予想出来る答えを言い放っていた。

「ちよつとアンタのトレーニングに付き合わせてもらってもいい?」

いきなりだったが、俺としては断る理由も無い。

「俺としてはいいが……」

「私もいいけど」

簪の方も、特に気負うことなく答えたところを見ると問題は無いようだった。

「サンキュ。」

で、今からやるの?」

「その予定だが」

その返答を聞いて、凰は俄然やる気になっていた。

「つし、じゃあ一丁やってやりますか!」

「私も少し突き合わせてもらってもいいか?」

剣崎も聞いてきたが、彼女だけを断る理由は無。簪も同様の考えらしく、笑顔で頷いていた。

「ああ、もちろん」

「私は見学だから気にしないでね」

最後に本音が不参加を宣言したが、そこは予想通りだったので特に何も言うつもりは無い。

「じゃあ、始めるか」

こうして、参加者三名と見学者一名を迎えて俺の鍛錬は少しだけ賑やかになった。

最も、基本的なメニューに関してはあのセリステイアさん製作のそれであるため、彼女たちが嘗ての俺の様に倒れないようある程度の手加減はしながらやることは心の中で決めていた。

その後、暫く鍛錬（主に体力方面）をしていて分かったが、やはり企業代表か国家代表候補生になっているだけの事はあり皆それぞれにかなり鍛えこんでいるようだった。

最も、その彼女たちも今は肩で息をして座り込んでいた。やはり最初からセリステイアさんのメニューを全てこなすのは無理なようだったので、そこはおよそ三分の一程度で一回止めたが。

「……私も、結構、鍛えてるつもり、だったが。

まだまだ、だったか……」

「私が、中国の、代表候補生に、なるまで、やった訓練は、何だったのよ……」

「……こんなトレーニングを、毎日……やつぱり、凄いなあ……」
三者三様の感想を漏らしながら、肩で息をして休んでいる。その中で本音が「どうぞ」と言いながら冷えたスポーツドリンクを配っており、三人とも飲んでいた。

俺も受け取ったスポーツドリンクを飲むのもそこそこに、その様子を見てこの後の事を考えていた。

「ってか、何なのよ。」

このメニュー、私が中国でやってたメニューの倍くらいは平気でありそうんだけど……」

「少なくとも、企業代表として私がやっていた訓練よりはよほどだな。あれだけ動けたのも、普段これだけやっているからこそか」

「これだけやってるから、あれだけの動きができるんだ……。」

私も頑張らなきゃ……」

「このメニュー考えた人、絶対普通じゃないよね」

四人とも好き勝手に言っているが俺としてはむしろやっている三人の事を賞賛したいくらいの気分だった。少なくとも俺がこのメニューをやり始めた当初は今の彼女たちほども持たずに倒れている。

そして本音、これを考えた人についてはある意味で当たっている。王立士官学校最強なんて呼ばれた人なのだし。

「むしろ、俺としては驚いてるよ。」

俺がこのメニューをやり始めたばかりの頃は、倒れてばかりだったからな」

「……は？ 冗談でしょ？」

そして、その事を伝えたら風からこの反応である。他の三人も、言葉にしていなくても内心は似たようなものだろう。

「いや、本当だ。」

俺がこのメニューをやり始めた当初は、今くらいやると倒れていたと思う」

「だったら何で今は『いい運動したなあ』レベルで済んでんのよ……」

「このメニューで鍛え始めてもう何年かになるのでな。」

さすがに、ある程度は慣れもする」

というか、これ位は熟せないと《アスディグ》で戦うのに差し障るのだ。

なにせ、ルクスさんやセリスティアさんをして「燃費がひどい」と言わせてせしめた機竜である。通常時は二人の機竜と同等の悪さなのだが、神装が上乘せの形であるため自分で使う場合は通常時の消耗に加えて神装の消耗になるのが最大の原因である。それも、神装そのものも高負荷であるにもかかわらずだ。

そのような事情がある以上、《アスディグ》自体を調整するのは当然として、俺自身も鍛えなければいけなかったという事である。

だが、この三人がそんな事情を知るはずは無いし言う事もないのだが。

「こともなげに言ってるんじゃないわよ……」

「だが、それの方がやり甲斐があるというものだ」

「そうだね……私は自分から言い出したんだし、頑張らなきゃ」

三人とも気合を入れ直しているのはいいのだが、もうそろそろ日没になる。区切りもいいし、嵐に至っては試合の疲労もあるはずだ。こちら辺で今日は止めておくべきだろう。

そう考え、三人にもうそろそろ止めようと思つていふという事を理由と一緒に言うと、納得したようで一年生寮の方へと四人揃つて戻る事になった。

S i d e 簪

ひとまず影内君が普段やつている訓練と一緒にやらせてもらい、その激烈なメニューに疲労困憊になりながらそれぞれの部屋へと戻つて言つていく途中の事だった。

「一体、あんなメニューだれが考えたのよ……」

絶対まともな練習量じゃないって」

「一応、あれでも三分の一くらいだが」

「……え？」「」

歩きながらしていた雑談の中で出た影内君のこの言葉に、私を含めた四人全員が間抜けな声を上げることになりました。

何か恐ろしい事を聞いた気がします。

「……何と言うか。その、凄まじいな」

箒が何とも言い難い表情で感想を言いましたが、本当に驚くのはその次の台詞でした。

「まあ、考えた人はもっと凄いメニューを自分でこなしてるしなあ……」

「ここで音を上げてると、あの人達と一緒になんて戦えないし」

もう、この台詞は悪い冗談にしか思えませんでした。

余談ですが。この時、影内君以外の四人が揃って思い浮べたのは筋骨隆々とした人でした。

「まあ、それはいいだろう。」

さつきも言ったけど、俺も最初は倒れまくったけど今はそれなりに熟せるようにはなった事だし。」

影内君が纏め、その通りだと自分に言い聞かせながら、私たちがそれぞれの部屋への分岐に差し掛かる少し前でした。

私達は分かりませんでした。影内君が何かを見付けると一回私たちに断りを入れてそこへ嫌々と言った感じで歩いていきました。

「いつちく、何があつたのかな？」

「分からなかったが……嫌々そうだったな」

「さあ。ま、気にしても仕方がないでしょ。」

つと、そう言えば、簪。アンタの専用機は今どうなってんのよ？」

影内君の動向が気になりましたが、それ以上に鈴が聞いてきたことに私は暗鬱とした気持ちを覚えてしまいました。

「じ、実は……開発が一時凍結になって……」

「……ハア!？」

専用機が開発凍結ってどういう事よ!？」

正直に白状したら、鈴が素っ頓狂な声をあげました。ですが、それも当然と言えば当然です。

「えっと……開発を担当している倉持技研の方に、国の方から無理矢理、新しい専用ISを早急に開発の指示が入ったらしくて……」

「でも、さすがに二機同時には開発できなくって」

「で、そっちが優先される事になって多大な人員を持っていかれてしまい、簪の専用機の開発が一時凍結になったんだ。」

この前整備のために倉持技研に行った時に、如月さんが盛大に文句を言っていたよ」

この話を聞いて、鈴は驚きと呆れで怒りが入り混じったような表情になりましたが、それも少しして収まりました。

「……日本政府には本当に呆れたわ。」

ま、二年前から層がいることくらいは知ってたけどさ」
その一言に、私と箒は何とも言えない気持ちになりました。
その後はここでこれ以上話しても仕方がないとなってそれぞれの部屋へ行くことになりました。

「……そういえば、影内君はどこにいったんだろう?」

さっきの話の事もあつて気分を変えたかったのも手伝つて、私はそのまま部屋へと戻らずに影内君が歩いて行った方へと歩を進めました。

これが、大変な事になるとも知らずに。

S i d e 一夏

「……で、何かご用ですか?」

織斑教諭」

「今日の試合、さすがの試合内容だったな。一夏」

「質問に答えていただけませんか?」

物陰から他の四人に気付かれないように呼び出された

「まあ、そう言うな。」

それに、こうして来てくれたという事は……」

「どうせ、あそこで無視しても後で呼び出されると思いましたので。」

で、何用でしょうか?」

口振りから見ると今の苗字の意味が分かったとは考えにくい。分かった上でこの態度なら底無しの能天気と言わざるを得ないが。

「そう焦るな。良い試合だったが、何度か攻撃を貰っていたな」

「格闘戦で打ち合った事ですし、凰も十分以上の腕前がありましたしね。」

当然の事でしょう」

「一撃で勝負を決めれば良かったのではないか?」

言わんとする事が分かったので進む方向を180。変えて再度自室へと向かう。もはや何も言うまい。

「待て。」

私の弟なら……」

「それを話すのは、今の俺の名前の意味が分かってからと言ったはずですが」

それ以上に話す気は無かったので早々に退散した。織斑教諭が何か言おうとしたのは完全に無視した。

だがこの時、俺はある重要な見落としをしてしまっていた。

織斑教諭と話したのは寮の隅とも呼べる場所で、普段は滅多に人が来るような場所ではない。何も無く何処にも繋がっていないため来る理由が無いからだ。寮長室よりは近かったため、織斑教諭はあそこに連れて行きそこで話し始めた。

もし誰かが来るとすれば、それこそ誰かを探している時くらいなもの。

だからこそ、この時の会話が聞かれていたなど、俺は思いもしていなかった。

S i d e 簪

(……どういう事?!)

特に深い考えがあったわけではなく、ただ影内君が何処に行ったのか気になっただけだった。

だけど、その結果とてつもない話を聞いてしまった。

その後、混乱し始めた私とはかく気づかれないように部屋に戻った。

(織斑先生、私の弟って……影内君も、鬱陶しそうだったけど否定はしていないかった……でも)

なぜ更識家の元に居て、織斑先生の元に行かないのか。

苗字の意味とは。

分からない事が多すぎて、考えが全く纏まらない。

とにかく、今は気持ちを落ち着ける事に注力した。そうじゃない

と、影内君が帰って来た時に何か取り返しの付かない事を聞いてしま
いそうだったから。

やがて影内君が帰って来た。

影内君の方はすでに落ち着いているのか、常日頃の様子と変わらな
い。そのまま、それまで通りに普通に過ごした。

けど、どうしても頭からあの事が離れない。

そのまま、私は中々寝付けない夜を過ごすことになった。もしあの
激烈な訓練の疲労が無かったら、もしかしたら一晩中寝られなかった
かもしれない。

第三章（5）：クラス対抗戦に向けて

S i d e 一夏

皆と鍛錬をした翌日。

その日は特に何事もなく始まり、普通に朝練をしてから授業に行った。簪が朝練をした事自体に驚いていたが、そこはすぐに「影内君だしね」と妙な納得を覚えていた。解せぬ。

そして、すかさずに翌日から朝練にも付き合わせてほしいと頼まれ、放課後の鍛錬に慣れてきたらと返答した。それもそうかと簪も納得してくれたのでその話はそこで一旦終わらせる。

その後は特に何事も無く互いに準備を済ませて朝食。道中で剣崎と本音が合流し、さらに食堂前で凰とオルコットが合流していつものメンバーが構成された。

朝食後は教室に行き授業。いつも通りといえばいつも通りで、特におかしい事は無い。

ただ一点、気になる事はあった。

(……気のせいだといいが)

簪の様子が少しだけおかしく感じた。それも、昨日の夜あたりからずっと。

一見いつも通りに見えるが、何か考え事をしているように感じる。何も言わないという事は言いにくい事なのか言いたくない事なのか。今は判別が付かないが、余人がそう易々と踏み入る事は憚られる事というのも十分に考えられるのでそう迂闊に聞くのもどうかと思う部分があった。

(……本人が話すのを待つしかないか)

今現在の関係に罅を入れるのも好ましくは無いし、今は少しだけ様子を見る事にした。

本当に、ただの思い過ごしだといいいのだが。

(……まさか、な)

昨日の事と言えば、俺としても本来嚴重に秘密にしなければならぬ事がある。

まさかあんな所に付いて来る人が居るとは思えないが、かと言ってその可能性が0とは言えない。

(もしそうだったとしたら……)

もし本名と来歴が割れた場合、俺が日本政府にとって不利益な人間と判断されてもおかしな事ではない。そして、彼女達は一国の暗部に類する人間。

あまり気は進まないが、そうなった時の非常手段もいくつか視野には入れておくことにした。最悪、機竜側に逃げ込む事も考えておかないといけないかもしれない。

(思い過ぎしか、彼女たちがそれを無視してくれるのであればいいのだが……)

一抹の不安を覚えつつも、その時はいつも通りに過ごしていた。

S i d e 簪

朝起きたときからずっと、やはりどうしても昨日の事が気になっていた。

(どうして……どういうこと……?)

努めて平静を装い、いつも通りを心がけて過ごして過ごした。

でも、頭の中で考えていたのは昨日の影内君と織斑先生の会話の事。そこから更に考えられる、いくつかの疑問。

でも、それらに対しいくら考えても答えが出てこない。何より、私は圧倒的に影内君の事を知らなさすぎる。

かと言って、本人に直接聞くのもどうかと思う。それが本人に触れられたくない事だったら、尚更に。

影内君との関係は、今のところは悪くないと思ってる。だからこそ、今の関係に罅を入れるような事は避けたかった。あのバケモノ相手の戦力という意味でもそうだし、個人的にも影内君から聞きたい事や教わりたい事が沢山あるというのもある。

(……そう言えば)

影内君の苗字を織斑先生と同じにすると、織斑一夏になる。

この名前には聞き覚えがあった。

(確か、箒が幼馴染だっけって聞いた人と名前が同じ……)

随分前に少しだけ聞いただけで、詳しい事は知らないしもしかしたら違う人かもしれないけど、聞く価値はあるかもしれない。

だけど、それもそれで憚られる事だった。何より、箒自身も今でこそ落ち着いてるけど、一時期は本当に大変な思いをしていた。そんな彼女に、あまり昔の事を思い出させたくないというのもあったから。

(後は、鈴も同じ名前の人を知っているようだったな……)

いつかの昼食時に聞いた、一夏という名前の人との関係。親友だといっていたし、同じ人の事を言っているのならもしかしたら何か重要な事を知っているかもしれない。

だけど、それにも少し迷いがあった。あの昼食のとき、鈴はその人の事を遠い目と異様にギラついた何かを混在させながら思い出していたから。

(更識家のほう……は、マズイかな)

更識家の情報網で調べられないかなとも思ったけど、それだと必然的にお姉ちゃんに相談する事になる。

今現在の私とお姉ちゃんの関係は、正直な所少し微妙な距離感がある。一時期よりは箒の後押しもあって改善しているけど、それでも我儘を遠慮無く言えるような関係とは言い難い物がある。

更に言うと、そもそも影内君自身がどういった経緯を持つかでこの場合は大きく変わってきてしまう事も考えられた。無いとは思いたいけど、万が一を考えれば最終手段にせざるを得ない。

(……織斑先生は、ダメだよな)

さすがに当事者と思しき人は論外とした。何より、どんな対応をされるかが全く予想つかない。最悪、それに関して色々と言われて影内君やお姉ちゃんに迷惑がかかるという展開だけは避けなければならぬ。

その後も色々と考えはしたけど、結局答えは見つからなかった。

Side 箒

(さて、どう声をかけたものか)

普段と変わらないように始まった一日だったが、少しだけいつもと様子が違う友人がいた。

最初に気付いたのは朝食で同席になった時。何時もと変わらないように振る舞っていたが、どこか落ち着きなく見える。

「ほーちゃん、ちよつといい〜?」

「本音、どうした?」

「えつと〜、かんちゃんの様子がちよつとおかしいかなって思うんだけど〜」

本音も似たような思いを抱いたらしい。私とは比較にならないほど簪との付き合いが長い彼女の事だし、何もおかしな事などないのだが。

「本音もそう思うか」

「ほーちゃんも〜?」

「ああ」

とりあえず本音と意見が一致していたため強ち間違いではなかったのかと思いつつ、そこからどうしようかと少し思い悩んだ。

彼女が何を思い悩んでいるのかは知らないが、今までにも随分と世話になっているのだし出来るのなら何か力になりたいと思う。

が、内容そのものが他者に話しづらいものだった場合はそうも言うてられない。

(さて、どうしたものか……)

解決策らしい解決策は思い浮かばず、少々と頭を悩ませる事になった。

「かんちゃん、大丈夫かな〜……?」

「……今までも何だかんだとは言いつつ簪はやれていたし、早々に大丈夫じゃなくなるとは思わないが。」

だが、そうだな。折を見て、それとなく聞いておくか?」

「いいの〜?」

本音が簪に向けるそれとは別に私も心配してくれた。その心遣いは有り難いものだが、今は簪の事が優先だろう。

「私も、簪や本音には随分と世話になっているしな。」

上手い事が言えるかどうかは分からないのが辛いところだがな」

「……ほーちゃん、ありがとね〜」

「気にしないでくれ。」

お前たちがしてくれた事に比べれば、なんと言う事も無い」

本音の言葉に軽く返し、その後はまたいつも通りに過ごした。

その時は、まさかあんな事を聞かれるとは思っていなかった。

S i d e 鈴音

「さあて、影内！」

「今日も特訓よろしく！」

「元気だな、凰……」

ほぼ知っている内容ばかりを復習する事になった授業を終えた放課後。

私はさつさとトレーニングウェアに着替えて影内たちと約束していた特訓に顔を出していた。すでに簪は顔を出しており、少し遅れて剣崎と本音が合流してひとまず全員が揃った。

と思ったところ、さらに少し意外な人物がこちらに合流した。

「あの……少々よろしいでしょうか?」

現れたのは一組のセシリアだった。

「オルコット、何か用か?」

「えっと、そのですね……よろしければ、私もトレーニングに参加させてはもらえないかと思ひまして……」

「俺はいいが」

セシリアの意外と言えば意外な問いに、影内は迷う事無く頷いていた。その後には一回他の面々も見渡してたけど、わざわざセシリアの申

し出を断る理由のある人も居なかったため全員が了承し、そのままセシリアも参加した。

それからしばらくの間、主に昨日と同じ体力方面の特訓が行われた。

昨日よりも更に少しだけ賑やかになった特訓だったが、さすがに休憩が挟まれる頃には静かになっていた。最低でも肩で呼吸をしていて、セシリアに至っては完全に沈黙している。

(まあ、でも……無理は無いわね)

それだけキツイメニューなのだ。そして、これより更に厳しいメニューをこなしている人も居るといふのだから、影内の周りのレベルはおかしいと言わざるを得ない。

そんな愚も付かない事を考えてたら、本音がさながらマネージャーのような感じでスポドリを配り始めた。手際によさに感心しつつ、私も受け取ってしっかり水分補給しておく。同時に体も出来る限り休めて体力を回復させておく。

なにより、今日はこの後が本番なのだから。

Side 一夏

「さて、今日はアリーナの使用許可が取れたし実機使って訓練するか」俺が確認程度で言った言葉に、本音以外の全員が表情を引き締めた。

その後は、軽く人数分けを行う。メンバーは、剣崎と簪、鳳とセシリアの組み合わせを基本として、俺は前半と後半でそれぞれに入る事になった。剣崎と鳳を一緒にしてひたすら格闘戦なんてのも考えたが、冷静に考えるとこの二人は後にクラス対抗戦で試合する事が既に決定している。直接対決はそのときまでお預けのほうがいいだろう。その上でこの組み合わせにしたのは、それなりに理由がある。

剣崎は基本的に射撃や特殊な装備の扱いを苦手としており、その上で格闘戦を仕掛けるなら避けるか被弾覚悟で近づくしかない。だが、

それで有効になるのは相手が對抗策を持っていないときだ。その点、簪は射撃と格闘が両方出来るという話だし、対応能力を鍛えるには最適だろう。何度もあの組み合わせで訓練してるらしいし、剣崎と試合して見つけた部分を伝えれば十分だろう。

凰とオルコットについてはそれぞれに目的がある。オルコットは射撃こそ正確だが移動しながらのそれはできないため、回避に難がある。機体の装甲も厚くはないので、せめて射撃と回避の切り替えを出来るようにならないと今後の苦戦が予想される。凰は全体的に射程が短いため、あの衝撃砲をより上手く取り扱うしかないだろう。その意味で、オルコットのビットを相手にするのは良い訓練になるだろう。

と、これが未だ教えられるほどの能力はない俺が考えた案であり、その後いくらかの話し合いを挟んで少し修正した後基本的なメニューが決まった。

「それじゃあ、始めるか」

簡単に号令をかけ、それぞれに訓練を始めた。

Side 簪

暫く訓練を続けて、丁度アリーナの使用時間の半分が過ぎようかといったところで休憩が入った。

その頃にはほとんどの人が息を上げていた。主な原因は影内君が参加した時の凄まじいまでの運動量によるもので、試合をした時は時間制限があったからそこまで気にはならなかったんだけど、時間制限が試合よりも遥かに長い時間ほとんど衰える様子無く動く影内君を相手に、私達も最初は良かったけど後半は本当にバテていた。しかも、二対一でもほとんど有利になれなかったのもある。

そんな中で、それまでと同様に本音が飲み物を配りつつ影内君と何かを話していた。

「いっちょ、IS学園にはこんな設備があつてね〜……」

「……それは使えそうだな。

後でもう少し詳しく……」

学園にあるトレーニング用の設備について話しているらしい。今後の特訓は一体どうなるのだろうか。

「簪、大丈夫か……?」

「簪……大分、疲れたかな」

「そうか……私もだ」

疲れて座り込んでいる私のそばで、同じく座り込んで簪も休んでいた。

そんな中で、特に何の気無しに雑談を交わしていた。

「そういえば、簪」

「ん、何?」

「……何か、あつたのか?」

その中で問われた、一つの問い。それに、私は酷く動揺していた。

「な、何も無いよ!」

聞きたい事があつたらちゃんと聞くし……」

「聞きたい事があるんだな」

その中で冷静に返された一言に、私は見抜かれていることを悟るとそのまま頷きました。

「そうか。」

何を、誰に聞きたいんだ?」

「それは、その……」

口ごもる私に、簪は急かそうとはしませんでした。

「言いにくい事だつたら別にいいが。」

だけど、一応言っておく。私に対するそれだつたら遠慮はしなくていいからな」

簪は最後にそれだけ言うと、丁度休息が終わったのもあつて特訓に戻っていききました。

(……覚悟を決めた方がいいのかな)

簪もあれだけ言ってくれたのだし、『織斑一夏』という人について聞くとすれば近いうちの方がいいのかもしれない。

そのためにも、一步を踏み出さないといけない。それだけを決めると、私も特訓に戻っていききました。

Side 束

「うくん……篝ちゃん、いつまで陽炎^{あんな}のを使う気なのかなあ」

《紅椿》の方も大方仕上がってきてるし、後は細かい部分や第四世代の象徴《展開装甲》も後は可動データをとって調製するだけになっている。

やろうと思えばなればすぐにも渡せるし、その気になればちーちゃん経由で私の方には連絡できると思うんだけどな。

「ああ、そう言えば……いっくんも、白式使ってくれないね」

いっくんも、あの奇妙な四つ足ばかりで、白式を全然使ってくれない。

あんな大きいばかりの機体より、白式の方がいいと思うんだけどなあ……。

「一回ちーちゃんに連絡とって色々聞かないといけないかな……」

そうと決まれば話は早い。

「とうっ」

適当に携帯電話をとるとちーちゃんの番号を押した。

第三章（6）：クラス対抗戦

S i d e 簞

「それで、簞。」

聞きたい事とは？」

「えっと……」

あの訓練の後、私と簞は屋上にいた。それぞれの同居人である影内君と本音には事前に寄り道していくことを伝えてあり、特に怪しまれるという事はない……と、思う。

そこで、私は「織斑一夏」という人の事を聞こうとした。

でも、やはり彼女の過去に触れる内容であるのもあって、聞いていいのかどうかには未だ少しの迷いもあった。

（どうしよう、かな……？）

私のそんな考えを読み取ったのか、簞は微笑みながら促してくれました。

「何度も言うようだが。聞きにくい事だったらとにかく、私に対する遠慮だったら気にしないでいいからな。」

クラス対抗戦もあることだし、気になる事は早めに片付けておいた方がいいのではないか？」

その一言に、私はハツとした。

（そうだ。確かにクラス対抗戦があったんだ！）

前日から色々はこの事で混乱していたためすっかり抜け落ちていたけど、考えてみればクラス対抗戦がもう間近に控えている。

専用機の完成していない私とはにかく、簞が今の立場に居られるのは実力の証左があるからというのは否めない。その彼女に、心理的な不安要因を残すわけにはいかない。

（と、なれば……）

罪悪感が無いわけではないけど、今だけは言い訳させてもらう事にした。

「えっと、その……簞」

「何だ？」

「その……来てもらって悪いんだけど、クラス対抗戦が終わった後にしてもらっても、いいかな？」

多分だけど……その方がいいと思うし」

箒は私の言葉に、少し訝しむような表情になったけど「分かった」の一言で了承してくれた。

少しの罪悪感を覚えつつ、その日は互いの部屋へと戻っていった。

Side 箒

(……クラス対抗戦が終わった後に、か)

それが私を気遣ったの台詞だろう事は、簡単にわかった。

気遣ってくれた事を嬉しく思う反面、気遣われた事に少々の不甲斐無さも感じる。

(遠慮はしなくて良いといったんだが……)

まあ、そこが彼女の美德とも言える点なので何も言うつもりは無いが。

(……あるいは、ただ単に頼りなく思われてるのか)

それはそれで仕方ないとは分かってる。なにせ、そもそも最初に会った時からしてそのような印象を持たれても仕方がないのだから。

(とは言え、今はその好意に甘えるしかないか)

「ほーちゃん、かんちゃんどうだった？」

「取りあえず、クラス対抗戦が終わった後に話すと聞いていた」

「そっか……」

自室に着いた後、同室の本音が心配した声で聴いてきていた。

ひとまず言われた事をそのまま言うと、本音はやはり元気をなくしたような表情になっていた。

「すまん、役立たずだった」

「そ、そんな事無いよ……」

本音はそういつてくれたが、気遣われた事は事実だ。今現在では何の役にも立っていない。

「とにかく、今はクラス対抗戦だな。

配慮して貰った以上は、しっかりとした結果を出さないといけないな」

「整備が必要だったら言っておくよ」

クラス対抗戦が終わらない事には何も進まないと思っただけで言っただけで、本音が頼もしい事を言ってくれた。

終わった後にどんな話をされるのかは少し気になったが、状況が状況だった事もあり今は目の前のことに集中する事にした。

S i d e 鈴音

「いよいよね」

影内と試合をしてそれから一緒に特訓をするようになってから早数日。

今日はクラス対抗戦の当日だった。アリーナの席にはIS学園の学生その他に、各国の要人や研究機関の人物と思われる人が一面に見える。

参加者にとっては無様な戦いは見せられない一日だった。

「まあ、私だって色々用意はしてきたけどね」

私自身については言わずもがな、影内達との特訓の事である。特化型からオールラウンダーまで色々なタイプの使い手を連日の模擬戦の相手にできたのは私自身の強化に凄まじく役立った。だけど、それは剣崎も同じ。その点だけでは十分とは言えない。

《甲龍》にも十分な調整を施したけど、それは向こうも当然のようにやっているのだろう。

「まあ、考えようによっては公平イーブンって事かしら。

むしろ、ちょうどいいわ」

後腐れなく遠慮なく、試合できるのだから。

「一夏、今日はよろしくお願いしますね」

「それは良いのですけど……」

試合が始まる少し前の時間、俺はアイリさんと合流していた。

「今日は実際のI S 同士の試合の報告と、あなたに直接伝えるべき事ができたので私に来る事になりました」

「伝える事、ですか？」

俺の返しに、アイリさんは頷くと真剣な声音と表情で再度言った。

「はい、極めて重要な事です。」

後で、内々に」

酷く真剣なその表情は、ただならぬ内容である事を容易に伝えてくれた。おそらくは、後者の用件がほとんどで前者の用件はこっちに來るための口実みたいなものだろう。

頷きを返して、その後は何事も無かったかのように二人でアリーナの席まで進んだ。内々にという事なので公になりかねない場所で話すわけにも行かず、かと言って今から二人のみで話せる場所の確保もままならない。

結果的に、ひとまずもう片方の目的であるI S の戦力調査という事でクラス対抗戦の観戦をする事にした。

「一夏。今日対戦する二人は、確かあなたもよく知っている人ではないかね？」

「ええ、はい。」

確か、剣崎はアイリさんも知っていますよね。凰とは初めてでしたね。二人とも格闘を得意としています」

「そう、ですか……」

そこで、不意にアイリさんは言葉を詰まらせた。

「会って見た感想はどうでしたか？」

言葉通りに受け止めるのであれば、其処に深い意味は無い。国家代表候補生と言う、同年代の立場ある人に会ってみてどう思ったのかというだけだろう

だけど、その相手が凰となれば少しばかり話は違ってくる。

「会えてよかったと思いますよ」

答えはこの一言に止めた。アイリさんは俺と凰の事を知っている。その時点で、多くの言葉を語る必要もないと思ったからだ。

「そうですか……」

無理はしないで下さいね」

「……はい」

アイリさんの一言に、俺は頷く他無かった。それが、氣遣つての言葉だと分かったから。

S i d e 鈴音

「ふ……出てきたわね」

「ああ」

私が自分に割り当てられたピットから出撃して間もなく、豪快な音を立てながら剣崎が飛び出してくる。

打鉄に似た形状の真紅の装甲に異様に長大な刀を備えた《陽炎》の姿を試合で見るのはもう二度目だけど、相変わらずのアンバランスさに目を引かれる。

私と《甲龍》も言えた義理ではないけど。

「さて、わざわざ前置きも必要ないでしょうし。

始めましょうか」

「そうしてもらえると助かる。

私も打ち合いたくて仕方なくてな」

事前のやり取りはそれだけだった。その後は、互いの得物をその手にするのみだった。

試合の審判を務めている山田先生に、二人とも準備ができたことを伝える。

『それでは、クラス対抗戦第一戦目。一組代表剣崎^{けんぎほうき}、対、二組代表^{ふあんりんいん}凰^{ほう}鈴音。』

バトルスタート
戦闘開始！』

ブー！

試合開始の宣言とブザーが鳴り、始まる。

直後、私と剣崎は何の工夫もなく、いや、工夫する時間さえ惜しいとばかりに全力で接近すると互いの獲物を打ち付け合っていた。

ガギャギギギャギギ!!

鋭利な金属同士が擦れ合う異音が鳴り響き、火花が散る。

「真正面から来てくれるなんてね……上等じゃない！」

「それは、お前もだろう。鳳！」

ゴガギン！

至近距離で挑発し合い、互いに互いの獲物を弾く。そして、そのまま互いに一回転して再度の斬り合いに突入。

そこからはひたすらに互いに斬り合った。

ゴギャガギャガギャリリギギャリイン!!

剣崎が瞬間^{イケンニツシヨウ・ターン}旋回で主力の大型ブレード《叢》を振り抜いてくる。直撃すれば《甲龍》でも大被害は免れない。回転の勢いを殺さぬまま咄嗟に全力で振り抜き、必要最低限受け流す。

体勢が崩れかけたけど、《双天牙月》を二振りに分割してその切っ先に衝撃砲を当てて無理やり力の方向を変えて振り下ろす。

「ハアッ！」

剣崎は剣崎で格納していたもう一刀の方を左腕の装甲に接続、それで受け止めてくる。

「その程度！」

さらに、そのまま押してくると一瞬だけ速度を緩めて間合いを作り振り抜いてくる。

身を屈め高度を下げギリギリ回避し、再度連結した《双天牙月》を懐に潜り込みながら叩き付けるようにして斬り付ける。

剣崎も瞬間^{イケンニツシヨウ・ブースト}加速で後退して回避するけど、私もそのまま逃すつもりは無く《双天牙月》を投げつけて追撃。投げた後も《龍砲》で剣崎を牽制しつつもう片方を当てて加速させる事も忘れない。

剣崎もされるがままではなく、投げた《双天牙月》を《叢》で弾き

飛ばすとそのまま回避行動に移っている。瞬時加速と瞬時旋回を巧みに使うその軌道は、例え直線的であっても狙うのはなかなか難しい。

一瞬の隙間ができたその時、剣崎が一気に踏み込んでくる。だけど、私もその後ろに《双天牙月》が来るように予め誘導してある。

「そこっ！」

「——ッ！」

一瞬の出来事に、けれど剣崎は対応してきた。瞬時旋回の動きを寸分違わずに合わせてくると、そのまま《叢》で弾き飛ばし、その動きのまま私にも攻撃を仕掛けてきた。

そのままだと直撃を貰いかねない。だけど、《双天牙月》を投げた後だと手持ちの格闘装備がないため、咄嗟の判断で足を振り上げ蹴りを入れる。

多少のダメージは貰ったけど、それだけ。戦闘続行には何の支障もない。

そのまま体を捻り蹴りを連続して放ち、同時に衝撃砲で直接狙う。さらに、影内との時の経験も踏まえて何発かは直接ではなく回避軌道が予測される位置に放つ。

ゴガンッ！

けれど、その中で当たったのは一発だけ。

出鱈目とすら言える回避技能を相手に、攻めあぐねる形になっていた。

(けど、確かにダメージは与えているし私もそこまで貰っているわけじゃない。)

このまま押し込ませてもらうわよ、剣崎！)

Side アイリ

「あれが、中国の第三世代兵装ですか……」

「はい。なんでも衝撃波を砲弾として打ち出す装備だとか」

一夏の解説を受けながら、私は剣崎さんと凰さんの試合を観戦していました。

その説明の内容に、イメージ的には《機龍咆哮》ハウリンググロアの射程が伸びたような装備かと理解していました。

けれど、その一つの装備に多種多様な使い方を見出している彼女は素直に称賛できる使い手でもあると感じました。使い手のレベルの差はありますが、やろうとしている事にはユミル教国の『七竜騎聖』であるメル・ギザルトさんを思い出します。単純な攻撃手段ではなく、その中から他の攻撃の補助にまで発展させているといった点に関してです。

さらに、戦術方面では単機による多数方向からの同時攻撃をこなすなど、セリスさんを思い起こさせる事までしています。

（機体の性能差でこちらが戦力的優位には立っていますが……あまり、迂闊にはやれませんか）

機体の基本的な性能の差によって実戦においてははまだ私たちが優位に立っています。裏を返せばそれがない場合において彼女たちの技能は決して侮ってかかれるものではないことを示しています。

（機竜の調査は……急いだ方がいいかもしれませんね）

私が報告の内容にまで思考を回し始めた時、アリーナに異変が起きました。

S i d e 千冬

ピルルルル ピルルルル

「むっ？」

アリーナのモニター席で山田先生と共に二人の試合の審判をしていたところ、無遠慮に携帯が鳴った。だが、一応職務としてここに居る以上は普段からマナーモードにしているので鳴るはずが無い。

そこまで考え、大体相手が誰だかを察する。隣の山田先生に一言断りを入れて、出る事にした。

『ちーちゃんちーちゃん、大変だよ！』

「五月蠅いぞ、束。

で、何だ？」

『大変なんだよ！』

例の化け物がそつちに!!』

「……ッ！ 何だと！」

束からの電話で異変を知った、その時。

目の前に異形が映し出されたのは、その時だった。

S i d e 箒

それは、突然の事だった。

私と凰が試合で戦っている最中、突如として起きた爆発。

不幸中の幸いか、それはアリーナの地面の上での爆発だった。だが、アリーナの地面の所々に赤熱した跡が見られる辺り威力は相当のものだろう。しかも、それが降ってきたのは真上から。そこに至るまではない、アリーナのシールドバリアがある。

つまり、その閃光の一撃はシールドバリアを貫通してなおそれだけの威力があるという事である。

何がくるのか身構えるのは、当然だろう。私も凰も、目配せだけすると即時試合を中断して爆発の中心を見据えた。

だが、事態は私達の予想を軽く上回る。

——アアアアアアアアアアアア!!

遠吠えのような、だが遠吠えと言うには異様な音色の声。それが聞こえると同時、何かが恐るべき速度で墜落してきた。

最初に見えたそれは黒を基調としたISの様な物、だった。

様な物、と言うのはそれが既に半壊に近い状態であり、尚且つそんな物が半ばどうでもよくなるほどの衝撃に満ちた何かに組み付かれていたためである。それがさらに数組。

続いて、組み付いている何かと同様の姿を持った何か群れとなっ

て降りてくる。その数は、確認できただけでも四十以上は居るだろう。

群れとなり機械を食らったそれは異形だった。

その下半身は獅子だった。その上半身は鷲だった。それには巨大な翼があった。その胴は明るい茶色の体毛に覆われていた。その頭だけは白い体毛に覆われていた。その眼は鋭く猛禽の眼光を放っていた。

「——グアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

咆哮を上げるそれは、神話に出てくる化け物の姿だった。

第三章（7）：蛇竜、露見

S i d e 一夏

「な……い！」

「ッ！」

今現在目の前のアリーナ内部で起こった光景に、俺と隣で一緒に観戦していたアイリさんは言葉を失っていた。

（グリプスの群れ……マズい！）

単独での能力でもI Sを上回る敵が群れてきている。少数を相手にするのみならまだ可能性はあったが、あの数を相手にしては勝ち目が無い。

今すぐにも《アスディーク》で出撃したいところだが、ある意味でさらに状況を悪化させる事態が目の前で起こっていた。

「ちよ、ちよつとなんなのよアレは！」

「は、早くどきなさいよ！」

「お願い逃げさせて!!」

まず、観客席にいた生徒たちが突然出現したグリプスがI Sと思しき物を破壊していることに気づき、パニックに陥り始めている。その状態で出入り口に殺到しているのだが、当然あちこちで人の流れが滞りさらなるパニックを誘発する事態に陥る悪循環になっていた。

さらに、悪い事が重なる。

「は、早く避難させたまえ！」

私は……」

「いや、私の方が先だ！」

要人の一部たちが優先して避難させると騒ぎ出した。

ここまで分かり易く威厳も何もないとむしろ清々しいほどだが、今はそんな事を言っている場合ではない。

『……影内……ええっ？』

影内君、聞こえる!?』

「……！ 更識会長!?」

その時、通信用に持っていたあの腕輪から聞こえたのは更識会長の

声だった。

「更識さん、今避難状況はどうなっていますか？」

その声に答えたのは俺ではなくアイリさんだった。だが、今はそんなことはどうでもよく、そのまま話が進む。

『なぜかは分からないけど、今アリーナの扉に取り付けられた緊急用の隔壁が下りて出られない状態なの。同じ理由で教師部隊の突入も遅れてるわ。』

今、外でハッキング部隊の面々を揃えて隔壁を開放するから、それまで何とかパニックを……』

「二夏、やってしまいなさい」

更識会長の話を遮り、アイリさんは隔壁の方を目で示しながら言った。かく言う俺も、既に《ユニテッド・ワイバーン》の機攻殻剣二ソード・デバイス振り抜いている時点で人の事は言えないが。

「委細了解」

返す返事は一言。今は時間が惜しい。

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。ヘユニテッド・ワイバーン」

すぐに召喚し、接続。

「接続開始」

短く瞬間的に飛翔し、向かう先は隔壁の降りている出入口。

「どけー」

俺の叫びに、隔壁の前で右往左往していた一部の生徒たちが蜘蛛の子を散らすようにして場所を開けた。

構わず空いた場所へと飛び込み、機竜牙剣ブレードを構える。同時に、調律を用い今現在には不要な出力を機竜牙剣へと回す。

「――戦陣・劫火！」

バゴギン！

金属同士がぶつかり合う異音と無理やり曲げられる音と破碎音が一緒に響き、隔壁がクワンクワンと間抜けな音を出して放り出される。

さすがにパニックへと陥っていた生徒や要人達も、呆気に取られて

言葉を失っていた。だが、それも一瞬の事でグリップスの咆哮が再度聞こえると再びパニックへと陥りかける。

「落ち着きなさい！」

その状況を再度落ち着かせたのは、アイリさんの叫びだった。

S i d e アイリ

「更識会長、学園長の方につないでもらってもよろしいでしょうか？」

『アーカディアさん、あなた一体何を!?!』

私が一夏に言った事に、更識さんが慌てて聞き返してきました。ですが、この状況でやることなど決まっています。

更識さんたちから借り受けた腕輪型の通信機に向かい、私も答えま

す。
「一夏に隔壁を破壊させて避難経路を作ります。経路上の隔壁はあの一枚だけですか？」

『か、隔壁はアレ以外にも何枚かあるけど、それはもう開けてあるから問題ないわ……でも、破壊って……』

更識会長が一瞬言葉に詰まっていたが、構いません。

王立士官学校^{アカデミー}の一年生以上に慣れていない事が容易に分かる生徒たちに、落ち着きや指導者の威厳など欠片も無い各国の要人たちを抱えていては、いくら何でも被害を避け得ないでしょう。

その意味で、一刻も早い避難経路の確保は必須です。

「人命優先です。それに、あれだけの数ですから、何時こちら側に興味をもつかも分かりません。それに、早く迎撃もしなければいけません。その時に終わっていないと色々やりづらいでしょうし」

『た、確かに……』

『アーカディアさん、費用や後始末の事は心配しないでやってくださいねか?..』

『が、学園長!?!』

向こうで何があったかは分かりませんが、どうやら学園長さんが来

てくれたみたいです。そして、話が早くて助かります。

「ありがとうございます」

簡単に伝えた時に、轟音が響きました。丁度、一夏が隔壁を破壊してくれたみたいです。

ですが、グリップスの咆哮が聞こえると同時に再度のパニックに陥りかけています。

「落ち着きなさいー!」

その状況を再度落ち着かせるため、不本意ではありますが少しばかり声を張り上げます。

「全員、素早く落ち着いて避難して下さい。」

その幅だと同時に行けるのは二人が限界でしょうから、前にいる人たちから二人ずつ落ち着いて素早く避難するように。

専用機持ちの方々、扉の前に待機して避難誘導と万が一の事態への備えをお願いできるでしょうか?」

私の言葉に、近くにいた簪さんとオルコットさんは一瞬言葉に詰まりましたが――

「任せてください!」

「勿論ですわ」

――二人とも、頷いてくれました。

同時に、一夏も行動に移っています。私の方に視線が集中した時に、扉の外へと出ると避難経路とは別の道へと入っていききました。

(頼みましたよ。私の騎士)

S i d e 箒

(クツ……まさか試合中に来られるとはな!)

内心で毒づきながら、必死に時間稼ぎをしていた。

そもそもとしてこういう事態への対処のために影内に来てもらっているが、今の状況では影内が出ずらいだろうことは想像に難くない。なにより、観客席がああ状況ではすぐに増援が来るとは思えな

かった。

「ああもう、何なのよコイツら!」

凰が苛立たし気に衝撃砲を放つが、一体が多少姿勢を崩した程度でさらに他のバケモノが殺到する事態へと陥っている。

一体一体の能力だけでも厄介なのに、これだけの数だ。覆しがたい戦力差を相手に、私たちは早々に迎撃を諦め時間稼ぎという名の消耗戦を強いられる結果になっていた。

『劍崎、凰! 聞こえるか!?』

「……織斑先生!?!」

その最中に聞こえてきたのは、今はモニター席に居る織斑先生の声だった

『今教師部隊が突入の準備をしている。』

突入まで何とか持たせろ!』

「観客席の避難は!?!」

私が聞くよりなお早く、凰が聞き返していた。

その問いに、織斑先生はある種驚きの返事を返してきた。

『……上級生でハッキングをかけて閉鎖された隔壁を空けようとしたところ、影内が内側から強引に破って避難経路を確保した。』

今現在は避難中だが、じきに終わる』

その言葉に、一応は最悪の事態を免れている事は分かった。

だが、私達のほうとしては未だ予断を許さない。私は瞬間加速イゲニツション・ターンと瞬間旋回イゲニツション・ターンを使って何とか回避しつつ、時にやむを得ず組み合いに近い形に陥りかけては《叢》を強引にでも振るい何とかいなしていく。凰は衝撃砲で、距離を詰めてきた化け物の姿勢を崩して足止めしつつ、《双天牙月》を回しながら振るうことで何とか一撃の威力を逃がしていた。

私は最初から映像で見た事があつたから知っていたし、凰も最初に撃墜されていたあの残骸からある程度その威力を察しているらしく、自分から仕掛けるような事はせずひたすら消耗を抑える方向で戦っている。

だが、正直言つて長くは持たない。なにより、圧倒的な物量差が私

達の集中力を時間の経過と共に確実に着実に削り取っていつている。

だが、一向に教師部隊が来る気配が無い。どういう訳かは知らないが、思っていた以上に時間がかかっているらしい。

「更識会長、聞こえますか？」

『箒ちゃん!? そつちは大丈夫!?!』

通信の相手を更識会長にして、今どのような状態なのかを確認する事にした。慌てている声に対して、苦しい声しか返せないのが不甲斐無い事この上ないが。

「正直、キツイです……それより、影内は今どのような？」

『今、虚ちゃんの案内で準備しているわ。もうすぐよ。』

私も今アリーナで避難誘導の手伝いをしているけど、もうすぐ終わる。お願い、影内君がそこに行くまで持ちこたえて!』

その一言に、背中を押される。現金な事に、私はもう一踏ん張りだと分かるとすこし活力を取り戻したような気になっていた。

「嵐、大丈夫か!?!」

「結構キツイけど……まだやれるわよ!」

嵐が叫び声と共に何とかあのバケモノの攻撃を受け流した、その直後の事だった。

「グアアアアアアア!」

その真後ろから、あのバケモノが飛来した。

Side 鈴音

「グアアアアアアア!」

真後ろから来たバケモノを相手に、咄嗟に衝撃砲を撃ってなんとか直撃を免れた。

けれど、その直前に攻撃を受けたらしく背中側にあったメインスタターがやられていた。

(マズイ!)

叫ぶ暇も無く、次のバケモノが来る。

「グアアアアアアア！」

衝撃砲で姿勢は崩せるけど、決定打になら無い以上は引き剥がすしかない。にもかかわらず、引き剥がすための足がやられた今はそれができない。

徐々に数が増えていく化け物の群れに、私は飲み込まれそうになっていた。

「鳳ー」

劍崎がこつちへ来ようとしたみたいだけど、私と同じように物量に阻まれて身動きが取れていない。どころか、何か爆発音までしている。

察するに、私と同じようにスラスタをやられたか。

(万事休す……か)

何とか抵抗こそ試みているけど、そのどれもが効果的とは言えず進行を食い止めるには至っていない。

そしてついに、私の目の前といえる距離にまでバケモノが近づいてきた。

最後を覚悟し、思わず目を瞑りそうになった——その瞬間。

ズドンッ！

深い青の光を従えながら、何かが異様な速度で降ってきた。それは、私の目の前のバケモノの上に降り注ぐと、その体躯を中心から二つに切り裂いた。

さながら白い流星。だけど、それは着地しながら敵を切り裂いていた。

一瞬何が起こったのかわからなかったけど、それが立ち上がり、続く化け物を切り伏せた時によく思考が動き出した。

異様に巨大な剣を二振り握り、それ以外にも全身に剣を備えた、暗く深い青に光るラインが入ったどこか禍々しさを感じさせる白い装甲に覆われた巨大なISのようにも見える機体。私の方に向けている背には、翼を模したのではないかと思える巨大な推進装置が備えられている。その中心には、機体と同じような白と青のフルフェイスヘルメットのような物を被り白く緩い服を着ている。

「味方、なの……?」

S i d e 一夏

「影内さん、こちらです!」

隔壁を破壊して周囲の人たちの目から逃れた上で適当な場所を探そうとしたところに案内として来てくれたのは布仏虚さんだった。反対に、更識会長は現場で避難誘導の手伝いに入ったらしい。

その先導で《アステイグ》を展開できる場所まで案内されると、すぐに準備を済ませ《アステイグ》の機攻殻剣ソルト・デバイスを抜いた。

「——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、へアスデイグ」

パスコード
コネクト・オン 召喚符を迷いなく唱え、機体を召喚。

「接続開始」

すぐに接続し、翼の推進器を叩き起こすと同時に《機竜光翼》フォトンウイングのチャージも行う。

「影内さん、どうかよろしくお願いします」

「委細お任せください」

虚さんの言葉に答えつつ、飛翔。適度な高度まで上昇し、風の直近にいたグリップスに狙いをつけて《竜毒牙剣》タスクブレイドの内一振りをパワーモードで真下に構える。

「——落鋼刃」

直後、全力で加速しながら降下し、グリップスの一体を切り裂く。派手な着地音がしたが、俺にも《アステイグ》にも支障はない。

接近してその爪で攻撃しようとしてきた別なグリップスをパワーモードのままの《竜毒牙剣》で切り伏せる。倒すまでには至らなかったが、それでも十分な傷跡を残している。

「味方、なの……?」

そこまで至ったところで、後ろにいた凰が驚いたような、あるいは戸惑っているような声を上げた、

だが、今は答えるよりも先にやることがある。

「ショットモード」

《竜毒牙剣》をショットモードに切り替え、二振りをほぼ同時に振るう。狙う先に居るのは、剣崎の方へと向かっているグリプスの群れの最後尾。

「グアアアアアアアアアア！」

耳障りな叫びをあげ、グリプスの一体の両翼がもがれる。

その叫びに呼応したのか、他のグリプスも此方を向く。結果的に剣崎への注意は逸らせた。

『信用はできないかもしれないが、安心しろ』

「……え？」

仮面に付いている変声機付きのスピーカを使い、鳳へと伝える。

『俺の敵は、あの化け物共だ。』

お前たちじゃない』

それだけ言うと、改めて周囲のグリプスを見渡す。最初から分かっていたがかなりの数のグリプスがいる。

だが、一部のグリプスは元々二人へとそれぞれに近づいていたためか何体か固まっている。

「竜毒牙剣、ロングモード」

この機を逃す手は無い。広範囲へと攻撃できるロングモードへと二振りとも変更。

「消滅毒」

二集団の間へとすぐさま移動し、《アスディグ》の神装を起動。青い光で延長された刀身が禍々しい白に変色していく。

「円水斬」

クイックドロウ
神速制御を用いて二振りの《竜毒牙剣》を振り抜き、二集団へと同時に攻撃。消滅の毒が遺憾無くその威力を発揮し、何体かのグリプスの体を削り取っていく。

——グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

グリプスの断末魔が木霊し、何体かを核まで消滅させたことを示した。

同時に、他のグリップスも完全に此方へと注意を向けている。もはや、逃げる事は叶わないだろう。

「さあ、来いよ」

だが、元より逃げるつもりなど無い。

来るといふのならその悉くを消滅させるだけだ。

第三章（8）：蛇竜蹂躪

Side 一夏

一体のグリップスが特出してくる。それを皮切に、その後は何体ものグリップスが数を数えるのも馬鹿らしくなるほどには続いている。

だが、一度に全てを相手にする必要もない。ひとまずは目の前にまで迫っている一体を処理する。

「タスクブレード竜毒牙剣、アックスモード」

竜毒牙剣の形態の中で最高火力のアックスモード。グリップスは確かに強力な幻神獣だが、そこまで防御力に秀でているわけではなく、この形態なら十分に通じる。

一振り目で突き出されていたグリップスの腕ごと上半身を切り裂き、二振り目でその核を捉える。

「——グアアアアアアア!!」

これで一体は倒せた。

だが、後続も迫っている。このまま相手をしようにもさすがに数が多く、そのままで捌き切るのは難しい。フォトンウイング機竜光翼を準備しつつ、まずは通常の推進器でいったん下がり距離をとる。

距離を取った先、僅かに作った時間で素早く調律を行い竜毒牙剣にエネルギーを回す。

推進器に回しているエネルギーも一時的に切れるが、そこは予めエネルギーを溜め込んでおいた機竜光翼のみで推力を得る。

「シヨットブレード竜毒牙剣、シヨットモード」

シヨットモードは本来、シヨットブレード竜牙射剣と同様の機能を持つ形態だがその分撃つ数には限りがある部分もある。その上で数を撃とうとするのなら、一撃一撃にかける威力を下げるか供給するエネルギーを強引に引き上げるか。

嘗てハイート九体を相手にした時はあくまで注意を引くことが目的だったため威力を下げた代わりに複数回に分けたが、本来、この技はエネルギーの供給を戦陣・センジン劫火の応用で引上げ、通常の威力の攻撃を連射しつつ、機竜光翼で移動を行うという技だ。

「――鎌鼬」

最も、機竜光翼は本来加速用なのでそれのみで飛び続けられる時間は短く、また制御も難しい。

ゴッ！

だが、不可能ではない。現にハイトの隙間を縫うようにして飛べるくらいの事は出来ている。

そして擦れ違いざま、ショットモードで斬撃を撃ち出し攻撃。

「グアアアアアアア!!」

狙うのはグリップスの翼。最低限浮く能力を奪えば地上と空中で敵の数を分けられ、一度に相手する数を減らすことができる。

そして狙い通りにショットモードの刃で合計十数体のグリップスの両翼か肩翼かを奪う事には成功した。これで一度に相手する数は減らせる。

そして攻撃が終わると同時に機竜光翼に蓄えていたエネルギーが尽きかけるので再度調律を行い通常状態に戻し、推進器を吹かせて機体を安定化させる。

「竜毒牙剣、パワーモード」

最後にパワーモードにした時には既に後ろからグリップスが迫ってきていたが、特に問題無い。

「神速制御」

振り向きざまに神速制御を用い、一気に切り裂く。

だが、その直後に再度別なグリップスが突撃してくる。切り裂いたグリップスの死体が邪魔になって反応が遅れすでに間近に迫られたが、十分反撃できる。

「機竜刃鱗」

膝に展開された刃を真上に思い切り突き立て、グリップスの頭を串刺しにする。次いで足を延ばしながら、爪先の機竜刃鱗にエネルギーを回し十分な攻撃力を持たせたうえで蹴り上げる。

狙い通りに切り裂いた瞬間、頭の中で警告音が響いたような気がした。次いで、後ろから二体のグリップスが迫りくる。本来、飛翔型にとって背面は弱点であり、最も警戒しなければならぬ場所である。

「《消滅毒》、機竜光翼」

だが、来ることが分かっているなら俺とアス・デイ・グにとつては弱点足り得ない。背翼をそちらへと向け、機竜光翼を使用。同時に、消滅毒によって変質させることも忘れない。

機竜光翼は武装用のエネルギーを推進力に変換するための特種装備であり、《消滅毒》は武装用のエネルギーを変質させる神装。組み合わせれば、極至近距離に限り背面への簡易的な攻撃武装となる。

狙い通りにグリップスは吹き付けられた消滅毒の只中へと二体とも飛び込む形となり、その表層から浸食される事態になっている。大した出力ではないのでそこまで深いダメージではないが、反撃への布石にするには十分。そのまま回し蹴りの要領で踵の機竜刃鱗を突き立て、消滅の毒も重ねて止めを刺す。

「竜毒牙剣、ロングモード」

さらに上下左右から数体ほど群がってくるが、回転の勢いを殺さないまま刃を延長して構える。

「――円水斬」

そのまま一回転してまず横軸上にいた敵を一掃。この時も消滅毒が効果を発揮し、敵を消し去っていく。さらに回転の方向を90度変えて今度は縦軸上の敵を切り裂く。軸を変えた時に減速した分は神速制御を用いることで補う。これでほんの一瞬だけ周囲の敵を殲滅し、刹那の時間ができる。

さすがに《消滅毒》をこの調子で連続使用し続ければ、消耗の面で今後の展開が厳しくなってくる。ゆえに一瞬だけできた空白の時間に、今度はこちらから仕掛けるべく《消滅毒》の使用を一時中止し再装填した機竜光翼を吹かせて加速する。

「竜毒牙剣、アックスモード」

グリップスの内一体と肉薄した瞬間に、肩の機竜刃鱗を喉に突き立ててから竜毒牙剣の内一刀を振りあげるようにして叩き切り、核を切り裂く。その次の瞬間には移動して次の一体を標的とし、アックスモードの二連撃で切り捨てる。

その瞬間、再度頭の中で警告音なる。今度は後ろと左右から計三

体。少し遅れて上下からも数体。

「次から次へと……ロングモード！」

思わず悪態をつきながら、それでも攻撃の手は緩めない。ロングモードの竜毒牙剣で左右のグリップスを突き刺し、其処を軸に機竜光翼で加速しながら回転。両踵の機竜刃鱗で上下と後ろに居たグリップスを切り裂く。

倒すには至らなかったが、それでも傷跡は十分。いったん離れ、体勢を立て直す。

「ショットモード」

離れたところでダメージを与えた数体の翼を狙ってショットモードで攻撃。翼を切り裂き地上へと叩き落す。

同時、さらに右後ろから一体。今度は肘鉄の要領で機竜刃鱗を突き立て、一瞬動きが鈍った瞬間にショットモードからアックスモードへと変更した竜毒牙剣で叩き切る。

一体を倒したところで、さらに複数方向からのグリップス。

「本当に、数だけはいるな……！」

再度、竜毒牙剣を構えて俺は再び迫り来るグリップスを迎え撃った。

Side 簪

目の前で起きている戦いは、一度目の前で見ていて尚凄まじい光景に思えました。

完全に乱戦と化している戦いの中で、本来数の上で有利なはずのバケモノたちを相手に引くことなく戦い続け、あまつさえ何体も倒しているその姿はとてつもない年の人には見えませんでした。

勿論、機体の性能差というのも加味しなければいけないのでしょうけど、それを抜きにしても尚彼の格闘戦技能は群を抜いていると言わざるを得ません。

そして、此方も此方で状況が落ち着いてきています。もう少しで避難誘導が終わりそうだからです。

ですが、悪夢はその時に起きました。

「……!!」

お姉ちゃん、オルコットさん、こっちへ来る!」

「クツ……お行きなさい、ブルー・ティアーズ!」

〔クリア・パッション〕
「《清き熱情》!」

影内君とアスディードの方ではなく、私達の方へと一体のバケモノが襲い掛かってきました。

咄嗟にミサイルランチャーを構え、迎撃します。オルコットさんもビットとライフルの一斉射撃で、お姉ちゃんも《清き熱情》で爆破してなんとか足止めを試みます。

ですが、それでも徐々に徐々に距離を詰められていく。私達にも焦りが募りますが。もっと悪い事に一部で徐々に避難の足が滞り始めていました。

理由は明白です。IS三機がかりで止めきれない生物を前に、恐怖感で足がすくんでいるんです。

(何とか……何とかしなくちゃ!)

予備で持っていたもう一つのミサイルランチャーを取り出し、二つ同時に撃ちます。

爆発の反動で何とか止められれば、そんな考えを抱きながら。

S i d e セシリア

「間に合わない……!?!」

絶望的な気持ちで思わず呟いた、その時でした。

『……セシリア・オルコット。聞こえるか?』

ブルー・ティアーズの通信に割り込んできた、機械で合成した事がすぐに分かる声。一体この状況で何を、と問う前にその声が続きを言いました。

『お前の機体に、そのバケモノを倒せるだけの攻撃力を付与する事ができる。』

やるか?』

そんなバカな、と思わず声が出そうになりました。

私の攻撃が通じないのは既に数発撃って知っています。それを、出来るはずが無いと頭ごなしに考えるのは簡単な事でした。

ですが、目の前の脅威を如何にして退けるかを最も重要視しなければいけないこの状況下において、可能性があるのなら。私は、それに一縷の望みを抱きました。

「いったいどうやって、そんな馬鹿げた事を……」

『今、アリーナで戦っている機体は見えるな?』

「はい」

私の答えに、その機械音声は驚きの答えを返しました。

『その機体は、ある能力の応用によりエネルギー装備を使っている者にのみ同等の攻撃力を与える事ができる。』

だが、万が一味方に誤射すれば……』

その先は言いませんでしたが、さすがに分かります。

命は無い、と。そういう事でしょう。

(使う選択をすれば要求されるのは必中、と)

同時に、彼の言葉から私が選ばれたのはあくまで《ブルー・ティアーズ》に装備されているエネルギー装備が目当て。私自身の腕前を見込んでという事ではないでしょう。

(ですが……この状況では、選択肢は他にありませんわね)

「……お行きなさい」

ビットを四機ともあの白い機体の元へと飛ばします。幸い、更識生徒会長と簪さんが爆発性の攻撃を仕掛けていて下さるおかげで僅かながら時間はあります。

ほぼ一瞬であの機体へと到達したその時、あの機体が一瞬剣を仕舞うとその両腕でビットへと触れました。

瞬間、ビットから異変を知らせる莫大な量の警告が届きました。

その詳細を読み取ったとき、私は戦慄しました。

(弾丸とするためのエネルギーが変質……データは、測定不能!?)

ブルー・ティアーズは元々実戦データの収集という目的もあり多数

の計測装置が搭載されています。にも関わらず、その一切が効かない。

正体不明の、干渉。

(ですが、コレで倒せるのなら……ッ！)

私はその警告のほぼ全てを無視し、再度ビットを此方へと引き寄せるように操作します。

『出来るだけ至近距離で撃つといい。その方がより効果を見込める。』

それと、効果はその一撃だけだ』

「つまり、照射しろという事ですわね……」

合成音声からの最後の忠告を受け、私はビットの操作へと注力します。失敗は許されないのですから。

「グアアアアア！」

そして、手元にまで戻した瞬間。あのバケモノが、遂に爆発の拘束を破り特出しようとしてきました。その体表は焼け焦げてこそいますが却ってそれが刺激しより獰猛になっているように見えます。

私はその化け物目がけて、ビットを可能な限り接近させました。

「……そこですわ！」

触れて折られる直前、引き金を引きました。

その時ビットから放たれたのは、私が見慣れた青い光ではなく、禍々しいほどに白い光でした。放たれたそれは、あのバケモノの体を貫通するばかりか当たった場所からさらに崩壊させているように見えます。

「こ、これは……」

異常なまでの攻撃能力の一端を垣間見た気がして思わず寒気を感じましたが、ひとまず危機は脱しました。

S i d e アイリ

(一夏、賭けましたね……)

結果的には上手く行ったみたいですが)

一夏がとつた行動を横目で見つつ、半ば済し崩し的に手伝うことになつた避難誘導の方の状況も確認します。

避難誘導の方はさすがに終わり始めています。時折危ない場面はありませんが、もう少して全員避難し終える事でしょう。

(やはり、知りえる限りの最高戦力に対する信頼というのは大きいみたいですね……)

先程、オルコットさんがグリップスを倒した時に目撃した幾人かの人があからさまに安堵の表情を見せていたくらいです。実情はとにかく、信頼は厚いのでしょうか。

『あ、あの……アイリさん？』

さつき、何をどうやってピットの攻撃力を……』

「……《消滅毒》の事は知っていますね」

付近で誰も聞いていない事を確認してから、私は通信機に向かって話し始めました。

『はい、一応は……』

「あれは、なにも自分の武装のエネルギーしか変質させられないわけではありません。つまりはそういう事です」

少し離れたところで簪さんが息を飲んだような様子が見受けられましたが、それはいいでしょう。幸い、下のピットが開き始めてISの部隊と思しき人たちが入り始めてもいます。

(確か、教師部隊というのもいたんでしたね……ようやくですか)

些か遅い対応のようにも思えますが、まあ、出てきただけマシでしょう。不幸中の幸いな事に、まだ人的被害も出ていない事ですし。

(一夏の方は……大丈夫そうですね)

アリーナの方には、中央付近で多数のグリップスを相手に大立ち回りしている一夏の姿が見えます。教師部隊が突入したために動けなくなっている剣崎さんと凰さんが退避する目途が立ったためというのもあるでしょう。

(戦況は概ね大丈夫そうですが……このままで終わってほしいものですね)

ささやかな望みを抱きながら、私もいい加減避難するために歩き出

しました。

Side 箒

(前にも一度は映像で見たが……凄まじいばかりだな)

片側のスラスターをやられ動けなくなった私は、凰とともにどうにかアリーナの隅まで退避するとそこで一回待機していた。

そこで見たのは、アステイグの戦いぶり。前ときは映像で見ただけだったが、この目で見ればその凄まじさがより伝わってくる。

《アステイグ》の圧倒的な性能に目が行きがちになるが、同時に癖の強い機体であることが簡単に読み取れるそれを手足のように思う存分操る。そればかりか、あの化け物を常に複数相手取つての圧倒。

(この場合は、任せる他ないか)

何もできない自分への苛立ちを覚えるが、ここで無謀なことをしてもかえって彼の邪魔になるだけだ。

だったら、むしろ動かずにいた方がいいだろう。

「二人とも、大丈夫ですか!？」

そうして隅で大人しくしていたところ、ようやく教師部隊が到着していた。それぞれに取り回しなど投げ捨てたかのような大型の射撃武器とひたすら重厚な盾を装備している。

「山田先生ー」

凰が驚いたように叫ぶが、当の山田先生は落ち着いて私達を退避させるように他の教師部隊の人に指示を出すと構え始めた。

重厚な、壁を持ち歩いているといっても差し支えないほどのそれを自分の前に構えるとそこから少なくとも私は見たことがないほど巨大なライフルを構えた。さらに、続いて数人が同じように構える。

「攻撃開始ー」

教師部隊が攻撃を開始した。その狙いは、主に脚や翼などの移動に深くかかわる部分。

移動力を潰し、その後で交代交代に大火力を叩き込む算段なのだろう。

(……とはいえ、基本は地上の敵相手になるだろうが)

今現在、上空の方では影内と《アステイীগ》が暴れまくっている。そこに変に横槍を入れるより、翼を切られるなどで地上に落とされた化け物たちの方がまだ相手するにはいいだろう。空中を移動されるよりは接近までの猶予もある。

そこまで確認したところで、退避が終わり私達の視界でアリーナの中を確認はできなくなっていた。

Side 一夏

アリーナに多数のグリップスが現れてから、最初はかなり厄介な状況になったが何とか落ち着き始めていた。

いまだ空を飛んでいるグリップスは既に片手で数えられるほどになつており、残りは地上に叩き落とした分だけになっている。

その地上のグリップスも、重役出勤してきた教師部隊によって削られていた。足を中心に狙ったためか、ある一定の効果は上げているみたいだった。もつとも、あれだけの数でかかって撃破が一つも無いというのは不安要素ではないが。

(機竜だったら汎用機竜でも何体か倒せているだろうに……)

だが、それは今はいい。

「グアアアアアア!!」

空中に飛んでいた最後のグリップスを倒し、残るは眼下に残るグリップスのみとなる。

教師部隊の攻撃が相も変わらず繰り返されているその只中へとは、さすがに飛び込む気にはならない。

「竜毒牙剣、ライフルモード」

機竜息銃とライフルを足して二で割ったような性能を持つ形態で、その切っ先から光弾を射出する。

簡単な弾幕を作って教師部隊とは別方向から光弾を撃ち込み、それでさらに数を削っていく。

「ショットモード」

ライフルモードで倒せそうにないグリップスにはショットモードを撃ち込み、ダメージを与えていく。

少しの間それをつづけた後に残ったのは、片手で数えられそうなくらいのグリップスだけだった。

「……終わらせるか。」

《消滅毒》、ロングモード」

竜毒牙剣の形態を変化させ、《消滅毒》も起動。準備が整ったと同時に、機竜光翼も使って加速しながら降下。

その瞬間に、まだ残っていたグリップスの一体が教師部隊の方へと突撃するように動いた。

(最初はアイツか)

狙いを定め、一息に近づいていく。

「ヒッ！」

教師部隊の一人が悲鳴を上げる。そのまま手にしている大口径のライフルと思われる物を撃っていくが、野生のカンなのか、グリップスはそれを避けて肉薄した。

教師部隊の一人が、迫りくる爪を前に盾の中へと身を隠す。が、グリップスの筋力ならその盾ごと踏み潰す事だろう。

だが、その爪が教師部隊を襲う事はない。

「やらせるものか」

その後ろから斬りかかる。さらに振り返って後続のグリップスを延長された刀身で一気に数体纏めて叩き切る。《消滅毒》も付与しているその一撃は、問題無くグリップス達へと止めを刺した。

S i d e 千冬

目の前で突如として起きた、謎の生物の襲撃。

その原因を一部でも知っていそうな天災バカがいるのでそいつを締め上げてでも聞くのは当然として、今は目の前の事を処理する事が先決だ。

「……その白い機体の搭乗者、まずは化け物への対処の助力感謝する」

私がモニター席からスピーカーを介して放った言葉に、あの白い機体はモニター席を見上げるようにその仮面に覆われた顔をこちらへと向けた。

圧倒的な性能を持つ、その機体の動きに教師部隊のみならず私にも緊張が走る。

「だが……出来れば、投降してもらいたい。」

私達としても手荒な真似はしたくはないが、それ以上に所属不明の機体をそのままにもできない」

白い機体は私の呼びかけに、その仮面の一部を何か操作しながら答えた。

『それはできない』

短く、だがハッキリとした拒絶の言葉。その一言に、教師部隊の面々にも困惑が広がっていく。

そして私が次の言葉を紡ぐより早く、あの機体は動いていた。その両腕に持った大剣を振りあげ――

『それでは、これまでだ』

――次の瞬間には、地面に叩きつけていた。

舞上がる土埃に、一瞬視界が奪われる。その次に視界にあの機体を捉えた時には、既に飛び立っていた。

「各員、攻撃してでも確保しろ！」

止むを得ず出した指示に、教師部隊の面々がそれぞれに獲物に向けて確保を試みる。

だが、その全てが当たらない。白い機体は空中を圧倒的な速さで軽やかに舞うと、すぐさま視界からフェードアウトしていく。

それが、この事件の幕引きだった。

第三章（9）：蠢く悪意

S i d e 一夏

「一夏。お疲れ様です」

戦闘終了後、大回りした後に行ったん《アスディーク》の接続を解除し、《ユナイテッド・ワイバーン》に切り替えてから迷彩を使用して学園に帰って来た俺を迎えてくれたのは、アイリさんだった。

「ありがとうございます」

《ユナイテッド・ワイバーン》の接続を改めて解除しながら、短く答えた。

「さて、一夏。終わってすぐで悪いのですが……後始末のために、学園長が呼んでいます。案内しますので、一緒に来てくれませんか？

生徒会や他の方々も同様に呼ばれ、すでに向かっています」

「委細了解しました」

頷き、案内に従って歩を進めていく。疲労による少々の眠気は何とかこらえた。

案内されたのは、前に轡木学園長に会った生徒会室ではなく地下にある部屋だった。無闇矢鱈と嚴重なところから考えるに、表沙汰にできないような話をする時にでも使うのだろう。

中は会議室のような作りになっており、既に轡木学園長や生徒会のメンバー、その場で対処にあたっていた専用機持ちの面々に、山田教諭を筆頭とした教師部隊、現場で指示を出していた織斑教諭もいる。

「さて、揃いましたね」

アイリさんと俺が最後に来たのを確認して、轡木学園長が切り出した。

「ではまず今回の事件の経緯について。

織斑先生、お願いできますか？」

「はい」

織斑教諭が立ち上がると、そのまま説明を始めた。

「まず、今日の事件はクラス対抗戦の第二試合、1組対2組の試合の最中にアリーナのシールドを破り、正体不明の生物が襲撃してきたこと

です」

その説明と同時に、背面のスクリーンに大量のグリップスが襲来したあの瞬間からの映像が映る。

「その後、試合の最中だった剣崎と凰が襲われる事態に発展、観客席の方では隔壁に異常があったためパニックが起こりかけましたが無事に避難はできました」

いくつか突っ込みたい部分があったが、それは後でよさそうなので今は無視して何も言わなかった。

「その後、謎の機体が乱入」

そこには、派手な着地音とともにグリップスの只中へ特攻した仮面等を付けた俺と《アスデীগ》が映し出されていた。

こうして見ると中々派手だなとまるで他人事のように思いながら俺はその映像を見て、アイリさんは見慣れているとばかりに無反応。轡木学園長に生徒会メンバーと剣崎と簪はやや複雑そうな表情で、凰とオルコツトは戸惑いを含みながら、教師部隊の大半はその動きの一つ一つを観察するように、教師部隊の残りとは織斑教諭は親の仇でも見るような目でその映像を見ていた。

「謎の機体はこちら側へと攻撃すること無く、正体不明の生物へと攻撃を開始。」

以後、直接的な攻撃は一切してきませんでした」

そこで一回言葉を切った織斑教諭は、その後に「ただし」と続けた。「こちら側の呼びかけも無視し最終的には逃走したため、目的等は一切不明です」

そこで改めて一回話を切り、その時の映像をみせた。俺が無視して逃走した時のである。

「教師部隊は少々時間がかかりましたが、ハッキングによってアリーナ側の扉を開けて突入。未知の生物への対策という事もあり、遠距離から高火力攻撃を行うための装備へと変更したうえで突入しました」

そこまで説明し、最後に「以上です」とだけ言って締めくくった。

「さて、ここまでで何か質問等ある人はいますか？」

学園長が発言と同時に一度確認するように見まわした。

「質問、よろしいでしょうか？」

横にいるアイリさんに目配せして確認を取り、その後質問のために手を挙げる。轡木学園長は「どうぞ」と一声だけ返事すると、促すようにこちらを見据えてきた。

「あの未確認生物が来た時の映像をもう一度見せてもらってもいいでしょうか？」

「ええ」

そのすぐ後に、轡木学園長の指示で山田教諭が映像を巻き戻してくれた。

改めてその時の映像を見れば、そこにグリップスとは別の何かが見て取れる。

「この時に、未確認生物の何体かと組み合っている黒い物体が見えますが……これらが何であるのか、確認はしたのかどうかについてお聞きしても？」

「それは今現在調査中だ」

俺の質問に、織斑教諭が間髪を入れずに答えていた。横目で轡木学園長の方を見れば、軽く頷いていたのでこの話はそこまでしておく。

「学園長、私からもご質問よろしいでしょうか」

その次の質問はアイリさんだった。

「どうぞ」

「では、失礼して。」

教師部隊が突入するまで随分と時間がかかっていましたが、その原因となった隔壁についてどこまで判明したのかお聞きしても？」

一部の教師が色めき立つが、アイリさんはそれを気にするようなそぶりも見せずにいる。そして、ここでも答えたのは織斑教諭だった。

「外部からのクラッキングにより、隔壁が強制的に降ろされたためだ。」

クラッキング元に関しては現在調査中だ」

「分かりました。有り難うございます」

敵意さえ見せる目で一部の教師がアイリさんの方を見るが、気にすることでもないと言いたげにそれまで通りの様子でいた。

「では、ほかに何か質問のある人はいますか？」

学園長が再度促した時、手を挙げた人が二人いた。

「凰さん、オルコットさん。何ででしょうか？」

手を挙げたのは凰とオルコットだった。

二人は一瞬互いの顔を見ると、話す順を決めたみたいでまず凰が話し始めていた。

「質問ではありませんが、少し補足しておきます。

あの白い機体に関するのですが、あの機体が本格的に未確認生物との戦闘を始める前に、私に合成音声で『俺の敵は、あの化け物共だ。お前たちじゃない』と言っていました」

さらに、その言葉に続くようにオルコットも続けた。

「私の方からも、補足です。

観客席まであの未確認生物が来てしまった時、あの機体の搭乗者かその関係者と思しき合成音声による通信が入ってきました。

内容はあの未確認生物への対抗策についてで、私の装備の攻撃力を向上させることができると。

結果としてはその通りで、私はあの機体の支援のもと撃退に成功しましたわ」

二人の捕捉に、一部の面々がざわつき始めた。そんなはずは無いという声もあれば、味方なのかという声、そして何としてでも行方を追うべきだという声も所々から聞こえる。

「静粛をお願いします」

学園長が一回その場を締め、次の話題を切り出していた。

「では、他に何か意見のある人はいますか？」

「良いでしょうか？」

そこで手を挙げたのは、織斑教諭だった。

「影内、他の専用機持ちが避難誘導をしている中お前はどこに行っていた？」

《アスディーク》で戦ってたよなどとはもちろん言えないので、適当な言い訳を考え始めた時だった。

更識会長が織斑教諭に気付かれないように俺と虚さんに目配せす

ると、虚さんが手を挙げて話し始めた。

「それについては私の方から。」

生徒会として現場の状況確認をするため、一度彼に連絡を取った後避難のための人員は十分だと判断し教師部隊が突入するための経路を確保してもらうため下側の扉まで来るように伝え、その後細かい経路を私と合流してから進む予定でした。

ですが、その最中に一部の通路が崩落しました。無理に突破しようとする私を巻き込む危険性があると判断した影内さんは、その後少しづつ通路を確保していきしましたが、最終的には出遅れる結果になりました」

「……そうか」

露骨に不愉快そうな顔を露わにした織斑教諭だが、それ自体はどうでもいいので放っておく。それと、虚さんには後でしっかりとお礼を言っておかなければ。

「では、次に移ります。」

これら一連の案件に関する処理ですが、まずは箝口令を敷きます。それ以外の部分について、意見のある人は述べてください」

「学園長、破壊された隔壁の件についてはどうしましょうか？」

織斑教諭の発言に、教師部隊の中の一部が賛同するように頷いている。

「それについては、私の方から答えてもいいでしょうか？」

俺がその質問に対して何かを言うより早いタイミングで、アイリさんが答えていた。

「それに関しては、我が社の方から修繕費を出す予定です。」

今回の行動に関しては人命優先という意味で致し方ない部分があるとして、それについてはすでに話が通っています。

それと、我が社の方からも一応の処罰を出す予定です」

実際には架空企業だったはずなので、本当の出所は違うだろう。

軽く更識会長の方を見れば、してやったりという感じの笑みを浮かべている。一枚かんでいそうなので後で詳しく聞くことにしよう。

「俺からも一つよろしいでしょうか」

それと、いい加減に言っておいた方がよさそうなので俺自身も口を開くことにした。隣のアイリさんの方を見れば、頷いてくれていたのでそのまま続ける。

「一度、教師部隊の方々には緊急事態への対応を見直した方がいいかと。特に今回の場合、相手は只々暴れていた獣たちです。不幸中の幸いなことに白い機体の方にばかりあの獣たちが集中していましたが、先程の映像と証言を加味すると、もしあの機体が来なかった場合は人的被害も免れなかったのではないかと考えます」

「そ、そんなはず無いでしょう！」

世界最強の兵器であるISをあれだけ投入したのに……」

俺の発言に、ついに我慢の限界が来たのか教師部隊の一人が騒ぎ出した。

だが、その内容は呆れる他無い。同時に、不可思議な納得も得ていた。

(これじゃ対策が欲しくなるわけだ……)

騒いでいるのは一部で、実際にはそうでない教師や騒いでいる教師を白い目で見ている教師もいる。だが、そういった騒ぎ立てる人がどれだけ集団としての力を落とすかなど、言うまでもないことだろう。

「いえ、影内君の発言は強ち間違いでもありません」

はつきりとした声で一部の教師の発言を否定したのは、更識会長だった。

「あの場で避難誘導を手伝った者の一人として言わせてもらいますが、あの時、未確認生物の内一体が観客席まで到達し、やむを得ず迎撃しました。」

ですがその時は二機がかりでの爆発性の攻撃による足止めが精々で、オルコットさんがあの機体からの支援を受けて撃破する直前にはそれさえ突破されそうになっていました。

IS三機がかりで一体への集中攻撃でも倒しきれなかった所を考えると、専用の対策を練るといえるのはむしろ必須ではないかと」

あくまで提案の形だったが、その声音は確信に近い響きを帯びていた。

さらに、一部の教師部隊の面々からもそれに賛同する声が聞こえてくる。専用の対策の作成に関しては織斑教諭まで賛成に回っていた。「では、対策に関しては後々、そのための会議を持ちます。いいですね？」

轡木学園長がそう言うて締め、この話題は一旦打ち切られた。

「他に何か質問、提案のある方は？」

轡木学園長が再度問いかけ、周囲の面々を見渡した。だが、それ以上の意見は挙がらない。

その状況を確認して、轡木学園長は「では」と切り出した。

「避難誘導を行ってくれたオルコットさんと凰さんについては特に問題がなかったため何もなし。ただし、この後一度報告書類の提出のみお願いします」

「分かりましたわ」

「了解しました」

「教師部隊の方々は後で再度、今回の反省も踏まえて根本的な対策を講じるために会議を開きます。いいですね？」

「了解しました」

「影内君への処罰に関しては直属の上司であるアーカディアさんと、貴女方の会社に一任します。ですが、最終的にどのような処罰になったかは此方にも伝えてください」

「分かりました。一夏、いいですね？」

「委細了解しました」

「生徒会のメンバーと剣崎さんはこの後、別に集まってください。いくつか話すべきことがあります」

「わかりました」

「白い機体については私の方から専門の方々調査を依頼しておきます。それでいいですね？」

轡木学園長のそれぞれに対する対応のまとめに、異論は出てこない。

「では、今回の会議はこれにて終了とします」

轡木学園長から終わりが告げられ、その時の会議はお開きとなっ

た。

Side 千冬

「……で、あの黒い無人ISは貴様の仕業か、東？」

『そ、そうだけど……ちよつと怖いよちよちやあくん……』

通信先で半泣き声を出している天災バカがいるが、そんな事はどうでもいい。第一、こんな声を出したところで反省するような奴でもない。

「で、一体何をどうしてあんなったんだ？」

私の再度の問いかけに、東も観念したように話し始めた。

『えつとく……まず、試作した『ゴーレム』何機かをちよつとそつちに向かわせたんだけど……』

「ゴーレム……あの無人機の事か。」

で、なんで向かわせようとしたんだ？」

『箒ちゃんだけ強くなったのかな……つてのとく、程よく陽炎あ壊して新しい機体渡したかったな……つていうのとく、いっくんが出てきてくれればついでにユナイテッド変・ワイバーンなも壊して早く白式使つて欲しかったな……つていうのがあつてですね……』

「……貴様、いい加減にしろよ？」

通信先で小さな悲鳴があつた気がしたが気にしない。そんな事はどうでもいい。

「一応、私も学園の安全を預かる立場の一人であるにも関わらず、よくもまあそんな事が言えたものだな。」

そんな事をしている暇があつたら早く例の物を仕上げたらどうだ？」

少々ドスを効かせたが、効果はあつたらしい。

東は壊れた自動人形のように何度も一定のリズムで頷いていた。

「で、それがどうしてあの化け物共に繋がったんだ？」

だが、このままでも埒が明かない。なにより、今はあの化け物共と もう一つが先決だ。

『うくん……それがちよつと分かんなくてね〜』

「……何だと？」

だが、返ってきた答えは私の想像の斜め上を行っていた。

『それがさ〜、二日前に下見した時は待機させてた所に何にも無かったのに今日になっていきなりだったんだよね〜。』

それで状況を確認した時にはもう戦闘になっちゃってて、振り切れずにそのまま行くことになっちゃったと』

「貴様という人間は……！」

ここまで酷いと処置無しの一言に尽きるが、だからと言って何もしないというわけにも行かない。これ以上暴走されても被害が広がりがねない事なのだし。

それに、今日になってあの数がいきなり現れたというのも、それはそれで不気味な話だった。

「……とにかく、余計な事はするなよ。」

あの二人も、今の状態だとそうそう簡単に受け取るとは思えんしな。今以上に受け取る気のない状況を作っても仕方がないだろう」

『うくん……じゃあとりあえずはあの二機の仕上げにかかるね〜』

「そうしている。」

ああ、それともう一つ。調べておいて欲しい事がある」

こいつの行動に忘れそうになったが、今回はもう一つ重要なことがある。

『ん〜、何々〜？』

「今日、あの化け物の大群をほぼ単機で屠った機体が現れてな。」

その機体の追跡ができないかと思つたのだが」

『……あの大群を、単機で？』

「ああ」

私の返事を聞いた束は少しの間停止した後、唐突に不気味な声を上げていた。

『私が……大天才のこの私が！』

こんなに苦労してるつてのに!!

一機だけでの対処を止めて二機がかりにしたつてのに!!!

それを単機で悠々と!!!?』

徐々に徐々に、束のボルテージが上がっていく。それはもう狂笑にさえなりかけるほどに。

『分からない解らない判らないわからない解らないワカラナイわからない!!』

どうすればどうやればそんな事出来るかなア!?!』

いい具合にやる気が出てきたみたいだが、もうそろそろ止めないとマズイか。

そう判断し、頃合いを見て私も叫んだ

「おい、束!」

『……ん、何?』

「取りあえず、追跡はやるのか?」

『当然!』

何時に無く生き生きとした表情で束の奴は答えていた。

(まあ、やる気があるのはいいことだが)

だがまあ、釘は刺しておくか)

「見つけても逸るなよ。」

できるだけ壊さず殺さずに。最悪、例の二機ができるまでは追跡だけでもいいだろうし」

『わあかつてるよ』

この束さんの頭脳をもつてしても全然見当もつかないシステムを積んだ謎の機体。こんな、私の人生で初めてと言ってもいい機体を壊すなんてとんでもない!

じっくりゆっくり解析したいところだね』

「搭乗者の方も殺すなよ」

『ん……もしかして、ちーちゃん。搭乗者の見当がついてたりする?』

この異常なテンションでもこちらの考えを言い当ててくることに微妙な苛立ちを覚えるが、それを指摘したところで改善するような奴でもない。そこは諦め、本題に戻ることにした。

「まあ、ある程度な。」

確信には程遠いが」

『そつかく……ま、いいけどね』

「じゃあ、頼んだぞ」

『りよ〜か〜い』

その一言を最後に、通信は切られた。

S i d e 楯無

影内君とアーカディアさんが生徒会室に入ってきたことを確認してから、私は話を切り出した。

「二人とも、こんな時に来てもらって悪いわね。」

とりあえず、座って」

「失礼します」

二人が席に着いたところで、話を切り出す。いま集まっているメンバーは、影内君が初めて学園長に会った時とほぼ同じ、違いは、アーカディアさんもいる事だけ。

話す内容は、影内君も一度確認しようとした、あの黒い機体について。

「話す前に、少し失礼。」

生徒会の皆さんと学園長、事後処理への協力ありがとうございます」

話そうとした直前、アーカディアさんが丁寧に礼を言ってくれました。

今回の事に関しては、むしろ彼が居なければ大惨事になっていた危険性も極めて高いからお礼を言うのはむしろこっちなんだけどね。」

「そういうえば、今回の事後処理のあれは一体……?」

「まあ、簡単に説明しちゃうと事前にそういう話にしようって話を準備したのよ。ついでに、実際の費用は私達の方でどうにかしておくから心配しないでちょうだい。それと、『白い機体』に関しても適当に報告しておくから」

影内君が納得したように頷くと、「ありがとうございます」と丁寧にお礼を言ってきた。

「気にしないで。」

それに、どうしてそこまでして戦力を欲しがったかは今日の会議でわかったでしょう?」

「それは……そう、ですね」

その時の様子を思い出したのか、影内君は苦笑いだった。

(ま、そもなるわよね)

その対応にある種の必然のようなものを見出しながら、私はやった甲斐はあったかと思った。

IS学園の教師部隊は、一応は軍属だったりもするけど実情として経験している戦闘は競技のみである人が多い。そのような人員構成である以上、どうしても緊急時の対応の速さや的確さに個人差が出やすく、有り体に言っても危機感のない人もいる。

その中で出現した、あの化け物たち。

(本当に、影内君が居てくれてよかったわ)

本題に入る前に思案にふけてしまっただったけど、そこは思考を切り替えて話を進める。

「それじゃあ、本題に入るわよ」

前置きを一つ。少しの間をあけて、私は話を切り出した。

「内容は、今回の会議で影内君も指摘していたあの黒い機体について。」

まず、無人のISであることが確認されたわ。編成は純戦闘用の機体が四、サポート用と思われる機体が一機だったわ」

虚ちゃんがコンソールを操作して件の機体の残骸を表示してくれた。

「戦闘用の機体はいいんだけど、問題はサポート用の機体よ。」

この機体には大量の電子戦装備が積み込まれていたんだけど、その中の一部に今回の襲撃と深く関わっている機能があったの」

「どんな機能ですか?」

すかさず質問してきたのは影内君だった。何時もながら、この手の対応の早さには驚かされる。

「二つは周辺にナノマシンを散布して、周辺の電子機器を狂わせる機能。」

仕組み上ISには効果が無いみたいだけど、それ以外の機器には電子基板に侵入してその機能を狂わせる事ができるみたいね」

私の説明に、影内君と箒ちゃん表情が険しくなった。

(まあ、隔壁の異常は十中八九この機能のせいね)

多分同じことを考えながら、さらに説明を続ける。

「二つ目は、自機周辺の広域にジャミングフィールドを形成する機能。アクティブステルスとでも言えばいいのかしら。」

この機能を使うとレーダー類の多くを無力化できるみたいね。これのおかげで、あの大軍の発見がアリーナのシールドバリアが破壊されるまで大幅に遅れることになったわ」

この説明に影内君の表情が険しいを通り越して凶悪になりだした。けれど、私も多分内心で同じ表情をしている。

「でも、この機体のコアを解析してある重要な情報がわかったわ。」

この機体の航行ルートがある程度割れたの。そして、その中に無人島があることも分かったわ。今はまだ確認中だけど、例の化け物が潜伏している可能性が非常に高いの」

私の説明に、影内君はその真意を読み取っていた。

「つまり、その島にいる化け物を始末してほしいと?」

「そういう事ね。」

できれば明日か明後日にでもと言いたいけど、さすがに今日の事もあるし暫くの間休んでから……」

「いえ。可能であれば今晚にでもやってみましょう」

さすがにこの一言には私も驚いた。

「だ……大丈夫なの!？」

箒ちゃんが驚いたように聞いているけど、むしろそっちが普通の反応だと思う。私も、同じ気持ちだった。

「はい。何とか……」

「一夏。回避できる無理はしないでくださいね」

そこに釘を刺したのは、アーカディアさんだった。その表情はいつ

も通りに見えたけど、何処か心配しているようにも見える。

「今から夜の出撃まで休めば大丈夫です。それに、一人では無理だと判断すれば帰ってきます」

再度アーカディアさんが何か言おうとしたけど、思い直したのか、それ以上は何も言わなかった。

その後は、今晚の出撃の段取りを決めてから解散した。

Side アイリ

「中々、とんでもない話でしたね」

「はい、本当に……」

一夏が今使っている部屋へと入ると、私たちは話し始めました。同室の簪さんは劍崎さんと何か別な話があるとの事で、今は居ませんが、私としても一夏と内々に話がしたかったので、間がよかったですと言えよかったです。

内容は、既に決まっています。

「それで、内々の話というのは？」

「……先日、セリスさんと夜架さんの二人がとある場所に合同で任務に赴きました」

「あの二人が、同じ任務に？」

一夏はすぐに、その事態の異常性を察したようです。

そう、今では特層階級の機竜エクスクラス ドラグナイト使い、それも神装機竜まで持っている二人が同時に赴かなければいけない。そう考えれば、それがどれだけ重要視された任務であるかは簡単に分かることです。

「そこで、奇妙な幻神獣アビスが確認されました」

「奇妙な、幻神獣……？」

一夏が訝しむような表情になり、目付きが鋭くなりました。

「はい。なんでも、小さなガーゴイルやキマイラのような幻神獣だったと」

「小さな幻神獣……」

一夏の目付きが一層鋭くなりました。おそらくは、まだ見ぬ敵へと思考を巡らせているのでしよう。

「それと、もう一点。」

「こちらはまだ確実なことは言えないようですが、新種と思われる幻神獣も目撃されました。巨大な黒蟻のような姿だそうです」

「巨大な黒蟻、ですか……。」

「ですが、それをなぜ今に」

「時期ですよ」

一夏の表情が、変わった。

「その顔だと分かっていると思いますが、最近の『球体』^{スライア}が確認され始めたころから、あの黒蟻型と思いき幻神獣と、小さな幻神獣が確認され出したんです。

今はまだ確実な事は何も言えませんが、もしかしたら……」

その先の言葉は言いませんでしたが、要りもしませんでした。一夏も、既に察している様子です。

「さて、一夏。」

私が伝えるべき事は伝えました。よければ、此方の方の事を聞いても?」

「……あ、はい。委細了解しました。」

まずは……」

この後は、雰囲気や和らげる意味も含めてこちら側の事も少し聞いておきます。

今夜にも再度の討伐に出なければならぬ一夏の緊張を、少しでも和らげるためにも。

第三章（10）：声を上げるために

Side 簪

「それで、簪。」

「聞きたい事とは？」

「うん……えと……」

今、私は箒と一緒に屋上のほうに来ていた。理由はこの前の話の続きをするため。

「織斑一夏」という人について聞くため。

「別にそんな気負わなくていいだろう。」

「予想外の形にすぎたが、もうクラス対抗戦も終わったしな」

箒は気楽そうに、心配しなくていいという感じで言ってくれました。

「ですが、内容が内容なだけに心配は拭えませんでした。」

「……箒。最初に言っておくけど、もし気を悪くしたらごめんさい」
「だけど、このまま引きずるわけにも行かないと、そう思ってた。」

「そして、箒も私の言葉を聞いてからは真剣な顔つきになった。」

「確か、その……幼馴染の人がいるって、前に言ってた事があったよね」

「ん？」

「確かに、そう呼ばれた人はいるが……」

「その人のことについて、その……教えて欲しくて……」

私の質問に、箒は意外そうに眼を見開きました。ですが、それも少しの間の事で、すぐに懐かしそうに目を細めると、どこか遠くを見ながら話し始めてくれました。

「幼馴染……と言うと、私にとっては一夏の事になるが。」

「それでいいんだな？」

「えっと……その……うん」

「ああ。誤解無いように言っておくが、影内の事じゃないぞ。」

「名前は『織斑一夏』。昔……まだ、私が前の名前だったころに幼馴染と呼んだんだよ」

箒はまずそれだけ言うと、少し困ったような顔を浮かべながら続く言葉を言いました。

「幼馴染と言っても、実の所、そう多くを語れることは無くてな。

別に関わり合いが薄かったとは思っていないが、私と彼の関係はかなり単純だったんじゃないかと、今になってそう振り返っているだけだ」

そこまで言って前置きを終えた後、箒はさらに言葉を続けました。

「一夏と小学校の低学年だったころに色々あつて知り合つて、その後は家が近かつたのと、同じ道場で剣道や剣術を習っていた時期もあつて親しくしていたと思う。」

それが、大体小学四年までは続いた」

「……あのプログラムが実行に移される前まで、つていう事？」

私の言葉に、箒は少し寂しさの見える顔で頷きました。

「そうなるな。」

当時は家族ぐるみの付き合いをしている、仲のいい友人……いや、親友だと思つてたよ」

そこで少し言葉を切つて、箒は当時の状況の続きを話し始めました。

「ただ、離れ離れにはなつたが不幸中の幸いな事に、一夏と私は電話を中心にある程度のやり取りをする事ができたんだ。そこで、色々と話したよ」

「最初のころは他愛の無い話ばかりだったな」と、どこか可笑しそうに箒は笑つて言いました。

ですが、その直後に腕組みしている手を僅かに強く握り締めながら

「暫くして、剣道や剣術を止めるって聞いた時は、驚いたよ」

——振り絞るように、それだけ言いました。

「同じ道場で一緒に剣道やつたところの一夏は、姉の……織斑先生の自慢になれるような、そんな弟になろうと努力を欠かさない奴だった」

それだけを聞けば、仲睦まじい良い姉弟のように思えた。

でも、今の織斑先生がどれほどの事を成し遂げているかを考えれば、それがどれほど大変な事かなんて想像さえ出来ないほどの事だった。

「だけど、止めるといったその時の声は……酷く疲れているような、でも肩の荷を降ろして少し気が楽になっっているような、そんな……なんとも言いがたい声音だったのを、今でもよく覚えている。

正直、その声を聞いたときは後悔した。なんで、もっと早く気づけなかったんだろうって」

平静を装おうとしている箒ですけど、その声が震えている事は隠せていませんでした。

「あの時はとにかく、一夏の状態が心配になった。

泣いているんだっいたらまだいい。怒っているんだっいたら、失望しているんだっいたらまだ分かる。

けれど……あの、疲れたような声で、どこか他人事のように言われたあの言葉は……今でも、鮮明に思い出せるくらいには記憶に残っているよ」

箒はそれだけ言うと、また少し言葉を切ってから続きを話し始めました。

「その後暫くして、第二回モンド・グロツソの観戦に行くことになったと言ってな。とは言っても、あの状態から考えるに……多分、形式的なそれだったろうけど」

そこで箒は一旦言葉を切ると、肺から空気を全部抜くかのように深い息をしてから最後の締めに入りました。

「その後は、簪にもいつかに話した通りだ。

私は後になつて一夏がドイツで行方不明になったことを知って、私自身の周りの事もあつて自暴自棄になりかけて……その後は、簪も知つての通りだ」

そこまで話すと、箒は一通りの話は終わりだと短く告げました。

私はこれ以上箒に聞くのは悪いかな、と考えてその話を切り上げようとして――

「……知っている名前が出てきてると思つたら、二人揃つて何話して

んのよ」

——私達にとって予想外の人が居たことに、二人揃って驚きの声を上げかけました。

Side 鈴音

「……知っている名前が出てきてると思ったら、二人揃って何話してんのよ」

私がいきなり来たからか、声をかけた二人は相当に驚いているようだった。

「鈴!?!」

「凰!?!」

「大声で呼ばなくても聞こえてるわよ」

軽く突っ込みながら、二人の会話に入ってしまった。さすがに、二人の話題に出てきた人のことについてはいくつか言っておきたいこともあったことだし。

「ちよつと模擬戦の相手してくれそうな人を探してたのよ。

で、したらあんたら二人がここで私にとっても親友である人の名前が出てきてるもんだから、何事かと思ってね」

取りあえず私が二人を探していた理由だけ告げると二人はそれで納得したようだった。

でも、今はそれも半ばどうでもよくなっている。

「で、私は最初の質問に答えてもらって無いけど?」

「私はただ簪に聞かれたから答えていただけだが」

私の一言を聞いた箒は、簪のほうに視線を移していた。

そして、簪の方も同意を示すように頷いている。

「その……出来れば、聞かないでもらえると、ありがたいんだけど……」

だけど、理由は言いたくないようだった。

でも、それは別に構わない。誰しも言いたくない事や言えない事の

「一つや二つはあるだろうし。」

「……ま、話したく無いんだつたら無理に話せとは言わないけどさ」
それだけ言うと、思わずほんの少しの間だけ遠くを見た。

「……鈴も、その……親しかつたんだよね」

「……ええ。」

私にとつては親友よ。今でもね」

今でも、その部分を自分で聞いてほんの少し驚くくらいには強い語調で言っていた。

「鈴……何が、あつたの……？」

「……聞きたい？」

簪が恐る恐ると言った風に、だけどどこか強い意志を感じさせるような雰囲気聞いてきた。

今まで見てきた彼女はどこか弱気な印象を受けるときが多かっただけに、少し驚きはしたけど、内容が内容だっただけに私も無意識のうちに声が固くなっているようだった。

「……出来れば」

だけど、簪は引かずに聞きたいといった。

内容が内容なだけに暗い話になるかもしれないけど、友達が真剣な表情で言ってきた事を無碍にする気は無い。

「……途中から、少し陰気な話になるわよ」

それだけ前置きして、私は話し始めた。

「……初めて会ったのは、小五の始めのころ。」

さっきの剣崎の話も加味すると、入れ替わりみたいになったのかしらね」

初めて会った頃は、私と私の家族が来日してまだ間もない頃だったっていうのもあって周囲から孤立しがちだった。学校でもそれは変わらなくて、私自身日本人と中国人のハーフってのもあって物珍しかったのか、色々言われたりしてね。

その中での一夏との出会いといえば、まず自己紹介をよく聞いていなかった一夏に性別を間違われた事に、私がキレてグーで殴るなんていう最悪のものだったわ。ま、後になって一夏が聞いてなかったのも仕方が無かったんだって分かったんだけど。

時間がたつにつれて、馴染めていない私に対して集中的に悪口が言われたり……そういったことがよく起こるようになったわ。

でも、そんな時に一夏がその中心になっていたグループと大喧嘩してね。その時はまだそんなに仲が良かったわけじゃないのに、真剣に怒ってくれたのよ。

それが、ひたすら嬉しくて、ありがたくて。後で何度も「ありがとう」って言った。でも、一夏は「大した事じゃない」って笑って言った。

その後、当時はまだ怪しい部分があった日本語を仕事で忙しかった両親以外に一夏からも習うようになって、対人関係の面でも色々助けてもらって、やっと周囲に馴染めるようになった。

その頃になって、互いの事も少し踏み込んだ事まで話すようになって。血縁上の姉が織斑先生であることもその頃知ったわ。

その頃の一夏は、ひたすら頑張っていた。勉強も、剣道も、家の事も。それこそ寝る間も惜しむなんて言葉が生易しく聞こえるくらい。

元々、織斑先生との二人家族だったって言うのもあって、出来るだけ負担をかけないようにしつつ良い結果を残して、心配させないように、自慢になれるように。そのために、アイツは頑張っていた。

でも、その頃台頭し始めたISが、徐々に徐々にそれを狂わせて行ったと思う。

織斑先生自身、元々能力が高かったのもあって周囲からは優秀な人って認識されてたけど、それもあくまで周辺だけの話で済んでいた。なのに、ISでとてつもない結果を出してしまったから、ISに關しては比類なき能力を持つ、世界的に有名な人になった。

そして、それと同時に広まって行った女尊男卑の風潮。合わせて考えれば、一夏がどうなるかなんて明白だった。

それ以前にもそれなりにいい結果を残していたから、周囲からの期

待は際限なく膨れ上がる。一つの成果を残すたびにそれが基準になつていつて、もつともつとつて。最高の姉を持つている弟なんだから、出来るだろうって。

だけど、実際には裏で途轍もなく努力していたわけだから、成果を残すたびに一夏は自分を追い詰める事になつていった。

それが小学六年の頃で、それからそう時間を置かないうちに卒業して中学に進学して。その頃に中学でよく一緒にいる事になった親友達……五反田弾やその妹の蘭、御手洗数馬と始めて会った。

中学の頃は、大体一夏と私と、さつき言つた三人で一緒にいたわ。……あの時までは、ね。

その頃も、まだ一夏は頑張っていた。ただ、その頃はもう本当に酷くなつていて、勉強やら練習やらバイトやらに費やす時間が際限なく増えて、ご飯を抜いたり寝る時間がまともに確保されていないなんて事がザラだった。

さすがに酷すぎたから、当時の親友達や親に相談して、私の両親がやっていた中華料理屋や弾と蘭の家がやっていた食堂にバイト先を移してもらったりした。まかないでちゃんとご飯を食べてもらった時間の融通がきくようにするためにね。

それと、その時になつて発覚したんだけど、織斑家の台所事情は本当に良くなかつたの。

助成金や賞金が出るから良い生活してると思われがちだけど、実際にはそんなの遠征費や強化費用でほとんど消えちゃうから手元に残るのはそれほどじゃなかつたのはその時初めて知つた。IS関連は予算が異常なほど大きく取られてるからそんな事無いと思う人もその当時は居たけど、でもISはまだ出始めてから大して時間が経っていない、しかも未解明の技術が使われている機械。そんなものだから、研究費や研究施設を建てるための費用に大部分が使われて、その残りを選手に分ける事になる。

そうなれば、必然的に手取りは少ない金額になつていった。

しかも、一夏に限つて言えば姉が姉だつたつて事もあつて、結果をひたすら求められて居たにも関わらずそのために何かを教わる事も

できなかった。習い事をしようにも金銭的な工面ができるほどの余裕は無かったし、仮に教わろうにも姉があんまりにも結果を出し過ぎていて、しかも初期の草分けじみた部分もある人だったから、じゃあ弟も大丈夫だろうって言われて放置されたりなんて事もあった。

そんな事、できるはずも無いのに。

私達もできるだけ一夏の負担が少なくなるようにしようとはしたけど、でも焼け石に水だった。全然、一向に良くなる気配なんて無かった。

周囲の人にしてみれば、姉に追いつこうと頑張る一夏が結果を出した時に追いつけるよう応援する事は「善意」だったわけだから。善意でやっていると思い込んでいる行為を止めるように言った所で、変わるわけも無かった。どれだけ声を上げて、それは周囲の声に押し潰された。

それでも一夏が頑張りが続けたのは、ただの一点。

姉に……織斑先生に、認めてほしかったから。ただの一言、頑張ったって言ってもらえれば、それで十分だって。

だけど、それも長続きはしなかった。

一夏が剣道の全国大会で優勝した事があったの。普通だったら賞賛され、皆から認められるだけの成果のはずよね？

でも、そのときの一夏に向けられたのは、決して一夏自身を認めるものじゃなかった。

誰も彼もが「織斑千冬の弟」であることにばかり目が行って、一夏自身が積み重ねた事を見ている人は居なかった……それこそ、血筋だけが重要と言わんばかりで、一夏の人格は無視されていた。

でも、一夏にとってももうそこはどうでもよかったのかしらね。何でもない事のように、家に帰って言ったわ。

それこそ、優勝者なんて思えないほど、静かにね。その日は家に居るっていったわ。

だけど、その次の日……剣道も何も、全面的に止めるっていった時は、さすがに何があったか聞いたでしたわ。

そしたら……織斑先生に電話したらしかったの。当時の一夏にし

たら珍しくね。そして優勝を報告して、かえって来た言葉は……」私の弟だからな。これくらい当然だろう」だったって、言っていた。

人によっては最高の褒め言葉として受け取る人も居るのかもしれないけど、あの時の一夏にとっては最低の褒め言葉よ。それまでの一夏が積み重ねてきた事を、無碍にしているのも同じだったから。それも、一夏にとって一番認めて欲しかった実の姉がね。

しかも、言葉を少し変えれば一夏にとってはどうでもよくなっていた周囲の人とほとんど変わらない言葉だったんだから、なおさらよ。

結局、電話したその日は家で自分の作った簡単な料理を食べて寝たらしいわ。

なにをしても、どうあっても、決して認められる事は無い。自分がどれだけ頑張ったところで、結局はその後ろに居る……いえ、前にいる人にしか目が行かない。

もう、どうでも良くなったって言ってたわね。正直、それを聞いた時は一夏の態度にも納得がいった。

とりあえず、弾たちにも相談してその日は祝勝会を開いたわ。その後は、今まで過剰にやっていた事を全面的に止めて、整理して、一夏のバイト先も随分絞ったわね。結局、残ったのは私の両親がやっていた中華料理屋と弾たちの家の食堂だけだった。

それ以後は休んでいる時間が増えていったけど、そのほうがいいと思った。

今までが、無理の塊みたいなものだったから。

周りや織斑先生がとやかく言った時もあつたけど、もう一夏は気にしなくなってたわ。でも、そのほうが当然よ。

「それが、第二回モンド・グロッソの前までにあつた、大体の事。

細かい部分を話せば更にあるけど……」

そこまで話したところで改めて剣崎と簪を見ると、簪は半泣き状態で、簪は表情こそ見えなかったけど、何かを耐えるように組んだ両腕

を強く握り締めていた。

正直、これ以上を話すのは少し躊躇った。なにせ、今までも十分に酷いけど、これからが本番になるのだし。

「聞くのが辛いなら、ここら辺で……」

「……続けて、くれないか？」

震える声で告げたのは、箒だった。

隣の簪を見れば、半泣き状態だけど、確かに首を縦に振っている。

「……本番は、これからよ」

それだけ告げると、私も続きを話し出した。

一夏が剣道とかを止めてから暫く経って、第二回モンド・グロツソが開催されたわ。

一夏としてはそこまで真面目に見に行く気はなかったみたいだけど、でも織斑先生に無理言われて形式的に行かざるを得ない状況になつてね。

その時は空港まで見送りに行つたわ。

後になつて……その時が、最後に一夏を見ることになるなんて、思いもしなかつた。

その数日後。

第二回モンド・グロツソの決勝戦が終わるころ、織斑先生だけが家に帰って来たのよ。

さすがにおかしいと思つて、押しかけて問いただした。

そうしたら……「誘拐されて、行方不明になつた」なんて、言つたのよ。

さすがに信じられなくて、更に問い詰めて。

ドイツで織斑先生の出場を停止させるために一夏が誘拐された事。その時、日本政府が交渉を完全に放棄した事。織斑先生にも伝えなかつたこと。

そして……一夏は、最終的に誘拐先で行方不明になつた事。

その後、一応は搜索がされるみたいな話になってたけど、それも時間を経つにつれて有耶無耶になっていった。

一か月くらい経つころには、もう打ち切りになった。

抗議しようにも私達はドイツで何が起こったのかなんて分からないから動かすための決め手に欠けるし、知っている織斑先生は「別なところに搜索を頼んだ」とか言つて何もしなかった。とくにどこに頼んだとかは一切言わなかったけどね。

その時はもうただの酔っ払いにしか見えなかった。しかも、拳句の果てには「私の弟があのからいで」とか言い出して、その時は本気で殴り掛かりそうになったのよね。

さらに政府の方が追い打ちをかけてきてね。政府がテロ関連が云々みたいなこと言つて情報の規制を関係者へ求めてきたのよ。しかも、違反したら厳罰付きで。

完全に隠蔽目的な事くらい、すぐに分かった。

その後は私も自暴自棄になりかけたんだけど、その時は蘭が止めてくれた。私まで失いたくないって言つて。

その日、二人で一晩中泣いてた。

その後、皆で一つ約束したの。

結局、誰も彼も一夏の事を無下にして、都合のいいように捻じ曲げようとした。けど、私たちはそれに対して結局何も出来なかった。声を上げてでも押しつぶされるか、上げる事さえも出来なかった。だから、上げた声を聞かせるために。意味のある声にするために。どんな手段でも立場でもいいから、強くなろうって。

「……とまあ、私事が大分入ったけど、これが私が一夏に関して知っていることの大体よ。」

細かい部分は結構省いたりしているけど」

一通り話し終えて、まずは深く息を吐いた。

「これほど一夏のことを話したのは、随分と久しぶりだったから。」

「凰……」

「だから……鈴は、そんなに強くなろうとして……?」

二人の言葉に頷いて、すこしだけ補足した。

「私にとって、強くなるのはただの手段。後ろ盾を得るのも同じ。加えて幸いなことに、わたしには同じ目的を持った信頼できる親友たちがいる。」

自分の意見を、声を押し通すための手段を得る事に、もう躊躇いは無い」

だから、私はせめて堂々と宣言する。

「私は、凰鈴音は、織斑一夏の親友だって声を上げる。」

一夏が決して無価値じゃないって、私が証明する。この力は、そのためよ」

第三章（11）：折れて尚、強く（前編）

S i d e 鈴音

一通り話し終えて、私は一回大きく息を吐いた。人に話すような内容じゃなかったかもしれないけど、久しぶりに話せたためか幾分気持ちが悪く落ちていた。

それと同時に、一つ疑問に思ったこともある。

（……剣崎が、一夏の幼馴染か）

思い当たる節が無いわけじゃない。

一夏からも、昔知り合いの道場で剣道を習っていた時期があったことは聞いていたし、その道場の名前も知っている。

「……剣崎、私も一つ聞きたいことがあるんだけど。」

いいかしら？」

「……？ なんだ？」

「一夏と同じ道場に通っていたって言ってたわよね？」

その道場の名前と、なんでそこに通っていたか。聞いてもいいかしら？」

私の質問に、剣崎は一瞬意外そうな顔をした後に何か得心が言ったような顔をした。

「……一応、なぜその質問をしたのか聞いてもいいか？」

「昔、一夏から私に来る前に道場に通っていたって話を聞いたことがあってね。」

その時、少し聞いたの。一緒に通っていた人の事とか、ね」

悪いことをしているかなとは思ったけど、でもどうしてもそこだけは知りたかった。

どうしても、私の記憶の中で一夏が言っていた内容と食い違う部分があったから。

「だから、か。」

おそらくは風の思っている通り、私は一度苗字を変えている。その上で話すのであれば、少々身の上話が入って来てしまうが……」

「それでいい。」

「とうか、そういう話が聞きたいから言ったわけだし」
私の返事に、剣崎は少しだけ横の簪を見た。
簪も簪で、剣崎に頷きを返した。

Side 箒

「私の事、か……」

凰に聞かれ、少し戸惑った。

正直、あまり人に話していいような内容ではないし、聞いても気分のいい話ではないだろう。

「言いたくないんだっただいいわよ。」

強制するような事はしたくないし」

凰はそれだけ言うと、それ以上は追求しようとしなかった。

隣に居る簪を見れば、止める気は無いみたいだった。頷いただけで、止めるような事は

「……いや、凰もあれだけ話してくれたんだ。」

私だけそう都合のいいことを言うつもりは無い」

少し考えてから、それだけ返事した。

凰にだけ語らせるのは、あまりにも不公平というものだろう。

「最初に言っておくが、これから話すことは他言無用で頼む」

「分かったわ。」

それに、元々誰かに話す気も無いしね」

凰が返事したことを確認すると、私は話し始めた。

まず、通っていた道場の名前だが。篠ノ之道場だ。
通っていた理由は、ただ単にその運営元である篠ノ之神社の娘
だったから。

で、おそらくは凰の察している通り。私は一度名前を変えている。

変える前の名前は……篠ノ之箒だ。

一夏と一緒に住られた時は……この名前で、過ごしていた。

多分、何も気にする事無く信じたいものを盲目的に信じれていたという意味では、あの時が一番幸せだったかもしれないな。

でも、そんな日々も、ISが発表されて、白騎士事件が起こって、その有用性が広く認識されるようになって。

そして、IS篠ノ之束の開発者の失踪と共に、終わりを迎えた。

当時の日本政府としてはなんとしても篠ノ之束を見つけてIS開発において優位に立ちたかったらしい。ISも発表されたばかりの頃はロクに見向きもされなかったものだが、その優位性が認められると掌を返したように求められるようになっていった事だし。

だけど、その中で戦術兵器としての価値を見出した者達がやがて特出した勢いを持つようになっていった。後々、女尊男卑団体の母体になったと言われる連中だな。

だが、やはり天災なんて呼ばれるだけの事はあったのか。篠ノ之束の失踪から暫くして、どれだけ必死に探しても見つからなかったらしい。

その中で政府の、特に急進的な人が目をつけたのは私と両親の、直接関わりのあった肉親だったよ。

ある日、政府の役人たちがいきなり押しかけてきたんだ。

篠ノ之束の連絡先を教えるように言われたが、その時は私の実家の誰も連絡先を知らなくて教えようが無かったよ。

それがわかると、今度は今現在テロに狙われる可能性が云々と言ってきて、家族別々に強制的に転居させられた。「要人保護プログラム」と称してな。

それからは、もう散々だった。私達の意見も意思も全部無視して転居させられるものだから、誰かと友人になったりなんて事をする時間も無いうちに次々と転校させられる生活だったよ。

しかも、女尊男卑主義が蔓延する頃になると輪をかけて行って。それを作り上げた人の妹として、目の敵にされるか祭り上げられるかのどちらかだった。

あの頃は多分、本当の意味で信頼関係のあった人なんて唯一電話で話せた一夏だけだった。

だけど、その一夏も回を重ねるごとに疲れたような様子を見せるようになっていった。そして、剣道も止めると言って。

色々と言いたい事もあったけど、一夏のあの声を聞いたらそんな気も失せてた。

それと同時に、あの時から……父親から受け継いでいた剣道や剣術に、少しづつ疑問を持ち始めていた。私にとってはそれを通じて一夏や父親と繋がっているような気がしていたけど、でもそれが一夏を追い詰める一因になってしまったんじゃないかって。

そして、それからさらに時間が過ぎていって。一夏が第二回モンド・グロツソの観戦に行く事になった時、実は私にも行かないかという誘いがあつたんだ。

とは言っても、ほとんど強制のようなものだったのだが。

あの時は、さすがに恨みたくなかったよ。篠ノ之束も、政府も。

だけど、結論から言ってしまうと結局見に行くことは無かった。いや、見に行けなくなったと言うべきかな。

あの時、私はそのときの住所から空港までバスで移動することになっていったんだが。そのバスの車内で、いきなり銃声が鳴ったんだ。その直後に覆面を付けた数人の男たちが立ち上がると、いきなり大声で叫びだした。「このバスは我々が占拠した」とな。

その後の車内はもうパニックだったよ。泣き叫びだす人もいれば、恐怖で縮こまる人もいた。

一方で、男たちは運転席のほうまで行くと、銃を突きつけながら運転手を脅して指定した場所まで行くように言っていた。

運転手が恐怖しながら運転していく中で、犯行グループのリーダー

がどこかに電話をかけて、何か話していた。後で知ったことだが、どうも政府で私の身柄について色々とやっている連中に電話してみたので、私の身柄の引渡しを要求していたらしい。

篠ノ之束を誘き出すための材料にするためにな。

そのようになって暫くした後だった。運転手に行き先の指示を出していた犯人が、脅すために銃を突きつけた時。運転手が突きつけられた銃口に恐怖して、短い悲鳴を上げたその時だった。

いきなり、バスが揺れたんだ。それと同時にいきなり加速したような感じがしたんだ。

銃口に恐怖した運転手が、運転を誤ったらしかった。

バスはそのまま、そのときは知っていた先にあつたカーブを曲がりきれずに落下した。

そして、落下したバスは大破して炎上。

その中で、犯人の中でまだ動けるのもいてな。私に向かってきて、こう言ったんだよ。

「篠ノ之束も、その血筋も、最後まで他者を呪うな」と。そのとき、この人達はきつと女尊男卑の中で被害を受けてきた人たちだろう事は察せた。

でも、それを作ったのは私じゃないと。私のせいじゃないと、その時だけは、恨みたくなつた。

けど意識があつたのはそこまでで、ただでさえ朦朧としていた私は次に起こった爆発の衝撃で完全に気を失っていた。

「……と、ここまでが第二回モンド・グロツソの前までに起こつたことだな」

「……そんな状況じゃ、恨みたくもなるわよ」

凰の言葉に、私は首を振った。

「恨めるものか。」

彼ら……犯人グループは、女尊男卑の根拠となつたISを、厳密に

言えばその開発者である篠ノ之束を憎んでいた。

でも、それは……私も、同じだったんだよ」

「……え？」

凰が間抜けな声を出して聞き返してきたが、それも無理からぬ事だろう。

「私自身、一家離散の原因というか遠因というか……そのような事態にしておきながら、音沙汰一つ無い姉を恨んだ事は、一度や二度じゃなかった。

ましてや、ISの登場以後は私自身のこともあって、憎しみは募る一方だった。

彼らと私の違いは、憎しみを向ける対象が篠ノ之束個人かその周辺の人々も含めるか。そして、それを明確な形で突きつけたか否かだけだった。

私も、どこかで一步間違えればあの時の犯人たちと同じになっていたかも知れなかったんだよ」

そこまで話すと、凰は納得しがたいとでも言いたげな表情になっていた。

隣の簪を見ても、同じような表情になっている。

「……続けるぞ」

正直、この二人の性格ならそれは違うと言いつうではあるけど、当事者としてはどうしてもそうは思えない部分もある。だから、今は続きを話すことにした。

その判断は、最後でもいいと思ったから。

あの事件の後、目を覚ましたときにはすでに病院だった。

そこで、私の治療を担当した医者から怪我や火傷の痕が残ることを言われたけど、それは半ばどうでもよくなっていた。

そして一通りの説明を受けた後、今度は政府の役人だということが入ってきて、あの時の事件が事故として処理されるということ話を

れた。

色々理由付けてはいたけど、政府の面子を保とうとする意思が丸見えだった。今まで個々人の意見など無視して進められてきた要人保護プログラムでの転居先が漏れてた事が発覚した事もそうだし、犯人グループの動機はISを根拠とした女尊男卑主義者や女権団体が強引に押し進めてきた、そして政府としても法案という形である一定のところまでは認めていた政府の対応にも原因はある。加えて、被害者の数も決して少なくない。

それが一気に表沙汰になれば、IS関連の事業を強引にでも押し進めてきた連中にとっては痛手もいところだったんだろう。

私が何を言おうにも対応は変わらないの一点張りで、もう聞く気も無かったのだろうな。

さらにその後、それ以後の対応について説明するために久方ぶりに両親と会えることになって。久しぶりに両親に会ったよ。

けど、その時会った両親はなんというか……。私の言えた義理ではなかったけど、まるで別人だった。

懂れていた、強かった父親はどことなくやせ細ったような様子で政府の役人に媚を売っていたし、母親はひたすらに篠ノ之束に対する憎しみを口にするばかりだった。とても、自分の腹を痛めて生んだ人に対するそれとは思えないほどに。

しかも、だ。その時、一夏が行方不明になった話もそのときに知ったのだが。その時の両親は、一夏のことを「千冬ちゃんの弟」としか呼ばなくなっていた。

家族ぐるみの付き合いをしていたと思っていたけど、その実、両親も一夏の事を、織斑千冬優秀な姉の弟としてしか見ていなかった事を知った時は、愕然としたな。

そしてその時、私がそれまで継っていた剣道や篠ノ之流剣術に対する誇りなんてもう綺麗に無くなった。

そしてまあ、私は一時的に倉持技研に行かされた。ひとまず最強の戦力であるISを使えるようになって自衛ができるようにとの事だったけど、あわよくば開発者の妹という肩書きを使って宣伝するこ

とでも考えていたのか。

反面、両親は一時的にはそれまで同じ措置がとられることになったよ。

そうして私が倉持技研に行った時、教官役として出会ったのが如月さんだった。

当時の如月さんの印象は、正直あまり良くなかったな。優秀なのが、時折、やる事為す事に突拍子も無さ過ぎて振り回されたことも一度や二度じゃ無かった。

でも、それ自体は些細なことだった。何より、当時の私はもう自暴自棄になってて、けれど自殺なんてしようものなら即刻如月さんに止められることになった。だから、ひたすら如月さん監修の訓練メニューをこなして、なんとか気を紛らわせようとしていた。

結果的にオーバーワーク確定の状態になっていたらしいけど、それを聞いてむしろそれでいいと思ったよ。

「あわよくば過労死……なんて、考えたんじゃないでしょうね」

「その通り。過労死を考えた。」

当時の私は如月さんにかかる迷惑なんて微塵も考えず、馬鹿げた事しか考えていなかった」

私の言葉に、嵐が思いつきり歯軋りをした音が聞こえた。

「……だけど、最終的にそうはならなかった。そのころに初めて会った、ある日本代表候補生のおかげでな。」

なあ、簪?。」

「別に、私のおかげじゃないと思うよ」

簪のほうを見ながら言うと、簪は微笑みながら返事をした。

とはいえ、私にしてみれば、彼女に出会わなければ今の私は無かった事は確かではないかとさえ思えるので、彼女のおかげなのだが。

「一体、何がどうしてそうなったのよ？」

凰の催促に、私は再度話し始めた。

だが、さすがに凰相手に簪の家柄、つまりは対暗部用暗部の家柄であり、それを当てにした政府が護衛^{監視}を目的に付けたという事を話すわけにはいかなかったのでそこだけは控えさせてもらおうことにするが。

その後、色々とおつて簪と初めて会ったんだ。だけど、その時は互いの立場とかがあって、あまり打ち解けた感じではなかったよ。

でも、それから少しして簪と一緒に訓練をする機会があったんだ。後から知ったことだが、如月さんが主導したらしい。

その時に色々と話したっけな。他愛も無いことから、互いのこと、家族のことに、少しばかりの昔の思い出も。

その時に、簪から楯無さんの事も聞いたな。

ロシアの国家代表を務める姉を持つ、日本代表候補生の妹。それだけ聞くと、何とも凄まじく優秀な姉妹だと思っただよ。

けれど、簪自身はそれに満足していないって聞いた時は、正直驚いたな。

理由を聞いたなら、姉に追いつきたいからって。

なんで追いつきたいかって理由はそういういえば聞きそびれていたけど、でもそれをやろうとしているだけでも私からしてみれば凄い事だったよ。私に至っては、姉に追いつこうなんて考えた事さえ無かった事だし。それに、何だかんだと言いつつ結果も出していたんだ。

色々な事に妥協して理由を付けて誰かを恨んでいただけの私とは、大違いだった。

それ以後、自殺なんて考えていた自分が何だか馬鹿らしくなって。必死になって頑張っている人、それも優秀な姉を持った妹っていう私とも少しばかり似たような境遇だった分、余計に自分が情けなくなっただけというのもあった。

もう少しだけ、頑張ってみようって。回数を重ねるごとに、少しづ

つそう思うようになっていった。

それから暫くして簪と話した時に、私の事をすごく頑張っているなんて言い出した時はお世辞を言われたものと思っただけだ。話を進めるうちに、本心だったと分かったときはまさかと思つて。簪の方がよほど凄いと云つたら、そんな事はないなんて卑下していたな。

それが何だか少し可笑しくて。それから踏み込んだことまで色々話して。

話が終わるころには、互いに名前呼び合うようになっていたな。

第三章（12）：折れて尚、強く（後編）

S i d e 簞

簞が始めて会ったころの事を鈴に話して、少し気恥しい思いもあったけど、それ以上に懐かしい思いに私も浸っていました。

あの時は、正直私に家の仕事が押し付けられたと思っただけであまりいい気持ちではなかったけど、でも実際に簞に会ってそんな気持ちは吹き飛んだのを今でも覚えている。

そこには、憎しみと怒りとやるせなさに満ちた目で自分の体を壊そうとしている、私と同じ年の女の子がいたから。

その時に、私の頭の中は綺麗に単純になっていた。彼女を、なんとか止めたかった。

事前に貰った資料で知っていたつもりになっていたけれど、目にした彼女は資料の文字なんかじゃ伝わらないほどに。それこそ、私なんかとは比べ物にならないほどに追い詰められていたから。

そうして一緒に訓練をするようになって、直接話すようになって。境遇が境遇だったからあのようになってしまっただけで、素の彼女は本当に真っ直ぐない人だと分かって。そうしたら、私の中から家の事とかはほとんど抜けていた。監視対象と監視者ではなくて、ただの個人として彼女に接していた。

「……簞の家の事や立場の事はよく分かんないけど。

でも、会えてよかったわね。お互いにさ」

「これじゃ仲良しになるわけだ」と少し冗談めかして、鈴がそう言いました。けど、その言葉は確かに私達の関係をよく言い表しています。

その言葉に今更気恥ずかしくなったのか、簞は少し急ぎ足で続きを話し始めました。

それから暫くして、基本的な操作がようやく様になってきたころだった。如月さんから、試作した装備の試験を頼まれたんだ。

意外だったよ。当然の事ながら当時の私は素人に毛が生えた程度でしかなかったし、もっと頼むのに相応しい人がいると思った。けど、それを確認しても私がいいと言うし、私としても断る理由が無かったから、そのまま引き受けて。

まあ、頼まれたその装備の中身は「機体を完全に固定し、普段は折りたたまれた巨大な多薬室砲と背部の円筒状のガスタービンエンジンレーダーを用い、特殊な榴弾を撃ちだす」という装備だったものだから、実際に使ってみると色々と問題は見つかったんだ、でも、威力だけは多分私が知りえる限り最強だったと思う。

だけど、その時の報告書類を書くのにも書き方や何を書けばいいのかとか全然知らなかったから、結局簪とその頃紹介された本音に手伝ってもらって、ようやく書き上げたんだ。

で、その報告書を如月さんに提出して内容を確認してもらったら、なんでか凄く喜ばれたんだ。

その時から、徐々に徐々に私に頼まれる試験装備の数が増えていったんだ。私としても、最初に提出した時に普段お世話になっている人があれだけ喜んだものだから、つついといやるようになってしまった。

そうして、如月さんとは少しづつ話す時間が増えていった。

それから暫くして、如月さんが食事に誘ってくれたことがあったんだ。その時は、たしか簪と本音も一緒だったよな。

で、その席で如月さんに二人になる時間があつて、その時に思わず聞いてしまったな。

なんで、あの時喜んでくれたのかって。

そしたら、帰ってきた答えが「私が真面目に報告書を書いていたから」って言ってさ。

流星に報告書さえ真面目に書かないものと思われていたのかと思つて少し不満に思つたら、如月さんが誤解だといった後に、少し付け足してくれたんだ。

今まで試作した装備のほとんどで、まともに報告書が書かれた事が

無かつたらしくてな。武装自体の癖が強すぎるのもそうだし、後、対人関係の面でも色々会って、そもそも報告書の作成がまともに行われたことがあまり無かつたらしい。

私のときも実際に使っている場面を見ればいいという程度の気持ちだったらしくて、かなり真面目に書かれていた事が嬉しかったって言ってたな。しかも、それが一度きりじゃなかったというのも拍車をかけたらしい。

私としては当たり前前のことをその通りにやっただけだったから、それだけで喜ばれるなんて思いもしていなくて。

それを知ったときは、私も嬉しかったよ。どんな形にせよ、自分のした事で誰かに喜んでもらったのなんてもう何年かぶりだったから。それからは、試作装備の試験により力が入るようになっていった。

如月さんに面倒を見てもらいながら、簪とも一緒に訓練をする時間も、増えていったな。

「……良い関係じゃない。」

その中で、今のアンタはいろいろと身に付けてったんだ」

「アタシは中国に行つてからは基本一人だったし、その関係性は羨ましいくらいね」と、風は言った。風のこのセリフは、正直私としてもうれしいものがある。

簪や如月さんとの関係は、私にとつても大事なものだから。

「その中で、イグニッション・ターン 瞬時旋回とかも生み出されたんだ」

風がおそらくは何気なく言ったであろう一言に、少し誤解が混じつていそうなので私は早々に訂正する事にした。

「ああ、あれは元々失敗の産物だ」

「……は？」

風が素っ頓狂な声を上げたが、実際に失敗の産物なのだから仕方が無い。

「いや、如月さんに勧められて、イグニッション・ブースト 瞬時加速の練習をしていた時に、

左右のブーシートのバランスを崩して盛大に錐揉み状態で墜落した事があつたんだ。

だけど、その時に『うまくやれば瞬時加速と同じ速度で旋回できるんじゃない』と思つて。如月さんに相談したら是非やろうとなつたんだ」「当時その発想を聞いた私はまさか本当に出来るとは思わなかつたけどね」

隣の簪の突っ込みに、凧も大いに頷いていた。解せぬ。

「とは言つても、最初は肩が外れそうになつたりした時もあったけど、それだけに特化した訓練を暫く続けるうちに何とか形にはなつてつたんだ」

「その時点でアンタは色々とトンデモナイわよ。」

普通は大惨事引き起こして止めるだろうし」

「私もそうすると思うし」と、最後に凧は付け加えていた。

何か色々と釈然としないが、もう少しだけ残っているので続ける事にした。

瞬時旋回もようやく形になつてきたころだった。

如月さんから、倉持の代表試験を受けないかつて話が来たんだ。

驚いたよ。当時の私にしてみれば、何かの代表を務めるなんて考えもつかない話だったから。色々と考えて何度か断つたんだが、如月さんはそのたびに説得してきたんだ。

結局、受けることにしてしまつた。とは言え、当時の倉持技研の人たちからは、色々と言われたものだったよ。事情を知らない人からは姉の七光りとか、知っている人からは弁えろとか。

その中でも如月さんはいつも通りだったし、簪も訓練に付き合つてくれてたな。

ただ、その中で一つ問題が起こつてな。

私は当時から今とあまり変わらない戦術だったんだが、あの時はまだ専用機なんて贅沢なものはないし当然ながら打鉄の標準装備でも

ある日本刀型近接用ブレードの《葵》を使っていたんだが、瞬時加速と瞬時旋回の二つ分の加速を載せた斬撃を直撃させた場合、高確率で《葵》が折れる事が発覚したんだ。

私と簪と本音は途方にくれて、加速のほうを緩めるかそもそも剣ではなくもつと頑丈な近接装備を持っていくかと話をしてたんだが、そこで如月さんが「たくさん持ってけばいいじゃないか」って言って、最終的に粒子化して格納している分も込みにして三十本ほどの《葵》を持っていく事にして対処する事になったのだが。

そうして、試験の日がやってきた。

筆記は意外と問題なく済んで、後は実技試験。つまり、当時の倉持技研の代表との一騎打ちだけだった。

とは言え、試合前には散々な言われようだったよ。特に、実際に当時の代表と相対した時なんか、姉の七光りとか、未熟者とか、経験不足とか、役者不足とか、適性を考えろとか。まあ、考えようによってはほとんど全部その通りだったが、それまでも何度も言われた分なんだか慣れてしまつて。あまり気にはならなかったかな。

そのまま試験が開始された。

当時の代表を務めていた人が使っていたISは大量の銃火器を積み込んだ、弾幕形成を得意とする専用仕様の打鉄だった。半面、私が使ってたのは普段の練習の時も使っていた特にこれと言った変哲のない、普通の打鉄。どう頑張つても同時使用できる銃火器の数に差がありすぎて、単純な火力勝負じゃ勝ち目がなかった。

だけど、私の武器は計三十本の《葵》だったから、火力勝負をする気が無かったという意味ではあまり関係が無かった。

とは強がつても、私が当時出来た事の中でまともな火力が望めたのは《葵》の一撃だけ。それも、最低でも四回、実質はもつと当てなければいけないから、相当に緊張したよ。

だけど、試合が始まるとそんな事も言ってもらえなくなった。

当時の代表の使う専用の打鉄が形成する弾幕は凄まじくて、無駄な事を一切考えないほどに集中しなければすぐに飲み込まれて押し潰

されそうなほどだったんだ。

それでも多少のSEを犠牲に何とか近づいて、一撃を当てたよ。その時に削れた相手のISのSEは三割前後だった。直後に至近距離からガトリングくらって私もそれなりに削られたが、それでもギリギリでダメージレースに勝ってた。

それからは、とにかくどれだけ近づけるかの勝負だった。当時の代表は多種の銃火器を用いた弾幕で迎撃してくるからまだ武器やその特性に対してあまり深い知識は無かった私にとっては中々辛いものがあつたけど、それでも一撃を当てればそれまで蓄積したダメージと同等かそれ以上に削る事ができたから。

後から見直せば、一進一退の攻防と言ってよかったと思う。

そして、最後。

私のSEは残り僅かだったが、それは相手も同じ。どちらが先に当てるかだけだった。

そこまで行くともう小細工なんかはしている余裕が無くて、なんのひねりも無く全力で突っ込んでいた。そして、分厚い弾幕で迎撃された。

だけど、一瞬だけ私のほうが速かった。

ギリギリのところ、勝ってた。

少しの間、私も含めて周囲の全員が固まった。その後、当時の代表が纏っていた専用仕様の打鉄だけが解除されて、ようやくその場の全員が動き出したんだ。

まあ、反応はそれぞれに違ってたけど。

私も私で終わって確認してみたら、SEの残量がIS用のハンドガンの一発にも耐えられないくらいにしか残っていなくて、その時に改めて肝を冷やしたのを今でもよく覚えてる。

その後は、色々と忙しくなった。

新しい代表に就任することになったのもそうだし、そのために必要な事務的な手続きがかなり多かつたりして。

その時に、書類上の名前の事で如月さんから提案されて、簪經由で楯無さんに名前を変えてもらえるように頼まないかって話になった

な。ついでに、事務的な話からでも簪と楯無さんが話す機会にでもなればいいともな。

その時になって簪立会いの下で初めて楯無さんとも会って、その時に実用上の問題とか一度バスジャックが起こっていた事とかを含めて、最終的には手を回してもらえる事になって。

最終的に、必要書類には剣崎姓の方で登録できたよ。

後、書類を提出した後にもう一つ、私にとって嬉しい事があってな。専用機を製作するように倉持の代表から言われて、誰に製作してもらうかという話になったんだ。

私としては、頼みたい人は一人しかいなかったからその人に頼んでも大丈夫かどうかだけ確認して、すぐに頼みに行った。如月さんの所にな。

それまでも散々面倒をかけたけど、でもあの人以外に思いつかなかったというのもあって。会ってすぐに、経緯だけ説明して製作してほしいと頭を下げて頼み込んだ。

そしたら、見て欲しいものがあるといわれて、そのまま図面をみせられたよ。

そこには、打鉄を基に機動性と運動性を再重視する形で改修した機体の図面があったんだ。もう図面の段階で左腕にマウントされてた《叢》が目を引いてたな。

それを見て言葉の無くなった私に、君のための機体だと、如月さんがそう言ってくれたんだ。

一朝一夕にできるものではないし、それなりの時間をかけて設計してある事は知識面で疎い私でも分かった。でも、予め設計してあったのには驚いたけど、よく考えてみると私が来なかったらどうする気だったのかと気になって、聞いてみたらその時はその時だと笑い飛ばしてた。

それから、それまで私に貸し出されていたISのコアを中核に専用機が製作されることになってたのも、嬉しかったな。

それで機体の名前を聞いたら、如月さんが自慢げに《陽炎》って言うっ

たんだ。

その時は、私にとって丁度いい名前だと思ったよ。

あの時が、私と《陽炎》の初対面だったな。コアに限って言えば最初からの付き合いだったけど。

「第二回モンド・グロツソのころから私にあったことは、大体そんなところだな。

その後、色々と代表としてやることができ、その何カ月後かくらに日中合同演習で凰と会った」

「あの時の二勝二敗は忘れないわよ」

凰の冗談めかした台詞に、私も思わず笑ってしまいそうになった。でも、こういう関係も悪くないと、今は素直に言える。

「……そういえばさ、何で苗字を劍崎にしたのよ？」

アンタの事だし、無意味に決めるとも思えないんだけど」

凰に聞かれて、少し戸惑ったが答えない理由もないので答えることにした。

「さつきも話した通り、私自身は一度自暴自棄折れになっているのでな。一度折れた剣の切っ先。剣の先。漢字を変えて劍崎と。それだけだよ。後は、もう篠ノ之流剣術に対する誇りもなかったし、決別したかったというのもあった。

いい加減な決め方と言われれば否定する気は無いが」

私の短い説明に、簪と凰は両方とも顔を曇らせた。

そんな可笑しい事を言ったか、と思ったところで、まず凰が口を開いた。

「……今のアンタを見てると、むしろ研ぎ澄まされてるんじゃないか
としか思えないんだけど」

「私もそう思う」

二人から嬉しい言葉を貰ったが、でもその評価はまだ受け取れない。なにより、私自身が受け取る事を許せない。

「いや、そうでもない。」

どこぞのIS開発者への消し得ぬ恨みはまだまだあるし、企業代表でそこあるがそれも何時降ろされるかも分からないくらいには不安定だし。それに、簪には結局世話になりっぱなしだし。

まだまだ、鈍刀もいいところだろう。

加えて言えば、実際に名乗ったりする時に困るような名前では無いつもりだが、過去の事を忘れなくて済むようにもしたかったんだ。

だから、これでいい」

さらに何か言おうとした二人に先駆け、「それに」と続けさせてもらった。

「一度は半ばで折れて切先だけになった残骸でも、まだ粉々になったわけでも錆びて朽ち果てたわけでもない。

だから、粉々になるその時まで、錆びて朽ち果てるその時まで。誰かを恨むだけじゃなく、一緒にいてよかったって言ってもらえるような人間になってみようって。代表になった時、そう決めた。それを忘れないためでもあるんだ。

今はまださつきも言った通り、誰かの世話になりっぱなしでまだまだ遠い話なのが情けないところだが」

「私は箒と会えてよかったと思ってるよ」

柄でもない事を言った私に、簪が真顔で返答していた。

その言葉は嬉しいが、簪には普段からかなり世話になっているだけに素直に受け取っていいものかどうか。

「……そっか。」

私も、張り合いのある相手と会えてよかったと思ってるわよ。箒」
そして、凰からも意外といえど意外な一言が貰えた。

「別にいいでしょ？」と冗談めかした言葉に、私も嬉しくなってそれまでとは違う呼び方をしていた。

「鈴音がよければな」

私の返答に、鈴音は笑んでいた。

思わず笑ってしまいそうになったのをこらえようとして、視界に指輪が入った。私のIS《陽炎》の待機形態である指輪が。

(……お前にも、苦勞をかけるな。

出来る事も少ない、未熟と無才の主で)

あるいは、《陽炎》は決して優れているとは言えない人間の手に渡った事に不満に思っているかもしれない。

ISには心があるとも言われるし、あり得ないとは言えない事だろう。

(だけど……もう少しだけ、よろしく頼む)

如月さんにその意思が無い事は知っているが、《陽炎》という名前も私にはちようど良いものだと思った。

如月さん然り、簪然り、本音然り、楯無さん然り。所詮は、そういった人達に照らされてないと浮かび上がることさえない。その意味では、本当に丁度良いと思った。

そして《陽炎》もまた、今は私を照らしてくれている。

一時は自殺まで考えたが、でもここまで救い上げてもらったのだから。照らされているのだから。

朽ち果てるその時までには、せめて必死になつて企業代表になつた時の誓いを守り抜く。それくらいしか、できないのだから。

(そして、いつか……)

あの世かこの世かはわからないが、もしもう一度あいつに会えるなら。

(お前にも、友人でよかったって言って貰えるような人間になつてみれるように頑張ってみるよ。

……一夏)

第三章（13）：襲撃者達

S i d e 一夏

クラス代表対抗戦、そしてその最中に起こった幻神獣襲撃の夜の夜。

もう消灯時間も過ぎて、深夜と呼んで差し支えない時間になったころ。

「それじゃ、行きましようか」

「はい、よろしく願います」

既にアスデীগとの接続を済ませた俺に、更識会長、簪、劍崎の四人は例の孤島へと飛び立っていた。アイリさんは更識会長に用意してもらった部屋で待機し、報告を聞いてから帰るとの事。

目的は幻神獣の存在の確認と、確認された場合は速やかに殲滅。ただし、直接戦闘に関わるのは俺だけで、会長と簪、劍崎の三人には周囲の監視を頼むことになる。

「私が先導するから、皆は付いてきてちょうだい。

で、指定ポイントまで着いたら後は手筈通りに」

「委細了解しました」

「分かった」

「了解」

更識会長の言葉にそれぞれ返事を返し、出発する。所要時間は見積もって一時間に届かない程度。

万全とは言い難いが、十分には休息もとれている。

（何もなければいいが……）

一抹の不安を抱きつつも、俺はそこまで飛翔していた。

S i d e 虚

「行ってしまわれましたか……」。

皆さん、ご無事で」

もうただの言葉が届く距離ではありませんでしたが、それでも呟き一旦生徒会室に戻ります。

簡易的なものではありませんが通信機器各種が設置されており、正式な作戦指令室には及びませんが現状の把握程度には困りません。さらにネットワーク回線からは一切が独立し、クラッキングも電子回路が直接弄られない限りは心配がありません。所謂、表沙汰にしたくない事に使うための物です。

『……ほちゃん。虚ちゃん、聞こえる?』

「聞こえますよ、お嬢様」

間もなく、お嬢様から通信が入りました。

声の調子から察するに、今はまだ問題がなさそうです。

『今は何も問題なしよ』

「はい、わかりました。」

通信回線はこのままにしておきますね」

『よろしく』

その一言と同時に一旦静かになります。

その間、私は通信機を付けたままにしつつも頼まれていた別な書類の内容を確認します。

(……影内さんに、アーカディアさん。そして、最初の交渉の時に来たバルトソフトさんの調査結果。

まあ、何と言うか……)

ここまで来るといつそ見事としか言えないくらい何もかも不明。

まず素性が不明。国内くまなくここ一年くらいの記録を探せる範囲全てで探しましたがたけど、見事に何も当たらない。

では国外から来たのかとも思ったけど、税関や港の監視カメラの映像にすら引つかかった形跡がないのでは、正規の手段で入国したとも思えません。

じゃあ不法に入ってきたのかと思ってその筋でも洗ってみただけど、これでも綺麗さっぱり何も出てこない。

「おねくちゃん、何見てるの?」

「本音、少し静かにしてなさいね」

そうして待機しつつ確認していたら、横から本音が声をかけてきました。

一応真面目に仕事をしている最中ですし、即席とはいえオペレーター紛いの事もしている手前、暫くは静かにしてもらおうかと思つた時でした。

「……いつちくの事、何にも分かんないの〜?」

「そうねえ……」

本音の言葉に私は生返事だけ返すと、また資料の見直しと臨時オペレーターの仕事に戻ろうとしました。

「……ここまで何にも無いと、テレポーターションでもしたようだね〜」

「まさか、そんな……ISだってそんな事ができた事例はないのに……」

本音の言葉に、私は流石にそれはという思いを抱きながらも、どこかで重要な見落としをしているのではないかという思いを拭えませんでした。

Side 一夏

「皆、あの島よ」

更識会長の先導の元、件の島へと赴いていた。

そこには孤島が確かに存在しており、余り大きいとは言えないものの、森などもあつて何かを隠すにはちようどよいように思える。

「じゃあ、影内君。

手筈通りをお願いできるかしら」

「委細了解しました」

返事を返し、そのまま件の孤島へと向かつて飛翔する。更識会長達はこのまま待機し周辺の監視などを行う。

幾許としない内に件の島へと着陸した俺を待ち構えていたのは、中々に奇妙な光景だった。

「シヤアアアアア！」

まず、目の前に現れたのは合成獣型の幻神獣であるキマイラのよう
に見えた。

だが、小さい。通常のキマイラの三分の一ほどの大きさだろうか。
ここまで小さいと通常のキマイラと違い見下ろせるくらいである。

「ギイイエアアアア！」

さらに奥からガーゴイルのような幻神獣だった。だが、こちらも小
さい。通常のガーゴイルの半分ほど。

これらが総合計で十数体ほど。もちろん見た目だけで侮るなどと
言った愚行をする気は無いが、神装機竜に乗っていると微妙に迫力に
欠けるように思われる。無論、これでも何も装備していない人の前に
現れたりすれば絶望でしかないだろうが。

（これが、アイリさんの話にあつた『小さな幻神獣』か……）

目の前に不可思議な納得を覚えながら、俺はタスクブレード毒牙剣を握って殲滅
しようとした時だった。

「キシヤアアアアア!!」

小型の幻神獣のさらに奥から、何かの声が聞こえた。明らかに人外
のそれと解る咆哮は、複数体分のそれが重なって聞こえる。

やがて見えてきたのは、明らかに異様な姿だった。

「……黒蟻、なのか？」

それは巨大な黒蟻だった。全高は大凡、汎用機竜のワイアームと同
じ程度。あまりにも巨大すぎて思わず虚を突かれかけるが、さすがに
小型の幻神獣もいる手前しっかりと距離を取っていったん仕切り直
す。

そして、さらに奥から何体もの巨大な黒蟻が出てくるのが見えた。
それがおよそ二十ほど。

（あれが、黒蟻型の幻神獣か!?!）

確かに新種の幻神獣と言って差し支えないだろう。

だが、思考に没頭していたのはそこまでだった。件の黒蟻の数体が
おもむろに立ち止まると、姿勢を低くしてそのまま先程よりも速い速
度でこちら側へと突っ込んできた。

それなりに速いが、この程度で《アスデীগ》を捉えられるはずもない。軽く飛び上がれば、それだけで避けられた。

そのまま急降下し、竜毒牙剣で叩き切る。

「キアアアアアアアア!!」

その一撃だけで巨大な黒蟻を切り伏せるには十分だったらしく、真つ二つになった黒蟻は大量の体液を撒き散らしながら何度か痙攣した後に完全に動きを止めていた。

だが、それ自体はあまり問題ではない。問題は、あふれ出た体液の一部だった。

「……地面が溶けている、だと?」

そう、その体液が巻き散らかされた地面の一部が煙を上げながら溶けていた。

おそらく、あの体液は強酸性なのだろう。叩き切った竜毒牙剣自体には特に問題はないので、おそらく機竜で叩き切った程度なら問題はないだろうが、もし人口密集地帯等に侵入された暁には迂闊に倒せられないだろう。

だが、その後も問題だった。

まず小型のガーゴイルが特出してくる。大きさ相応に弱体化しているのか、一撃一撃自体は大したことは無いものの、同時に複数体が出てきているため手数は相応となっており、足止め程度には効果が出ている。

次に、側面から小型キマイラが突っ込んでくる。まるで小型ガーゴイルに足止めされているのを図ったようなタイミングだが、こちらも問題なく機竜刃鱗ブレードアーマーで迎撃できる。

その間に黒蟻型が周囲を包囲するように動いていた。そのまま、姿勢を低くして待機している。

なぜすぐに突撃してこないのか。その疑問は、すぐに氷解することとなった。小型ガーゴイルと小型キマイラの中で生き残っていた個体が飛び立って場所を開けると同時に、待機していた黒蟻が一斉に突っ込んできた。

「ロングモード……円水斬!」

咄嗟に竜毒牙剣の形態を切り替え、すぐさま神速制御も用いて二刀を振り抜いて一回転。全周囲をいったん一掃する。

受けたダメージ自体はほぼ皆無だが、むしろ別に重要なことが発覚していた。

(別な種類の幻神獣同士が連携をとっている……のか?)

本来、別々な種類の幻神獣が連携をとって組織的な行動をとるという事はない。もし例外があるとすれば、知能が高いと言われるガーゴイルあたりが他の種を利用でもするか、角笛が使われている時くらいである。

にも関わらず、さきほどこの場の幻神獣たちは別種であるにも関わらず連携をとってみせていた。

(この場にはいないだけで、誰かが角笛を使っているのか……あるいは、そもそも別な理由か……?)

不可思議な現象が目の前で起こり自分へと牙をむいてはいるが、それでも個々の能力自体は大した事は無い。各個撃破しつつ包围されないように立ち回れば、特に問題無く撃破できるだろう。

「さて、もうそろそろ倒させてもらおうか」

再度竜毒牙剣を握りしめながら、攻勢へと移っていった。

戦闘を始めてから十数分としない内に殲滅自体は終わった。

小型幻神獣の戦闘力そのものは大したことは無く、普通の幻神獣を大人とするならさしずめ小・中学生といったくらいと言えた。黒蟻の方も見た目や図体のわりに大した能力は無く、あれなら汎用機竜の機竜息銃プレスガンでも十分なほどだった。

終わった後は更識会長に一回断りを入れて周辺を探索したものの、特に変わったものは見られなかった。黒蟻か小型幻神獣の手がかりがあれば、と思ったもののそれもなく、やむなく帰路に着こうとした。異変が起こったのは、その時だった。

「……何だ?」

俺が飛び始めてからそう時間が経たない内に、空気を引き裂き、何が真上から飛翔してくる。

それは最初、黒い影のようには見えなかったが、近づくにつれて徐々にその形がはつきりと見えてくる。そして、俺はすぐに迎撃態勢を整え、更識会長に通信を入れようとした。

だが、通信がつかない。周辺には戦闘の気配は無く、更識会長の方からも特に異変を知らせるような通信は入ってきていない。察するに、既にジャミングされていると考えるべきだろう。

そして、戦闘態勢を整えたのとほぼ時を同じくして、数体の黒い影が目の前に停止した。

その造形は少し前に見たあの無人ISとほぼ同一。

『やつほー！』

そこにいる白い機体の搭乗者さん、聞こえるかなー？』

「……誰だ？」

改めて数えれば五機編成の無人機と思しき機体の内一機、電子戦機という解析結果が出ていた機体と酷似した機体から声が聞こえた。

変声機を通した声で返事をし、出方を窺う。

『私？ 私はISの生みの親で大天才の篠ノ之束さんだよー。はろー』

あつさりとした自己紹介だが、まあこれで犯人は割れた。

『でねー。搭乗者さんにちよつとお願いがあるんだけどー……』

そのIS、束さんにくれないかなー？ 束さんにくれるんだったら

束さん特製の』

フォトンウイング
ブレードアーマー
「機竜光翼、機竜刃麟」

ゴツ！ ザガジュツ！！

特にこれ以上聞く必要性は無さそうだったので、とりあえず機竜光翼で瞬時に電子戦機へと接近。次いで接近した勢いを殺さぬまま胸部を右手の指先の機竜刃麟を使って斬り決り、内部のISコアを直接掴んで引きずり出して機能停止させる。

右手にISコア、左手には機能停止した機体を掴んで土産にすることにした。

『……ね、くれないんだったら力づくって言う手も惜しまないんだけど』

「安心しろ。何を言われようが譲る気は無い。

ふざけた事を言っていないでさっさと去れ」

『そ。じゃあ、やっちゃえ！ ゴーレム！』

直後、ゴーレムという名称なのだろう無人機が周囲へと展開し、一斉にその腕部を向けてきた。

その腕から放たれたのは光弾。おそらくはオルコットのライフルと同様のビーム兵器の大出力版なのだろうそれは、確かに正確に俺に向かつて放たれた。

だが、正直に言つてこの程度では俺と《アスディグ》にとつて脅威たり得ない。ひとまず壊した無人機の残骸がこれ以上傷付かないように注意を払いつつ、脚部の機竜刃麟を準備。

「アナイアレイト・ヴェナム
《消滅毒》」

カポエラのように一旦機体の上下を逆転させたうえで機体を回転。そのまま脚部の機竜刃麟に《消滅毒》を付与して光弾を切り裂き消滅させる。

直後にゴーレムの何機かが接近してきたが、体勢を上下逆から戻して、一旦《消滅毒》を切った脚部の機竜刃麟で適当に受け流してやり過ぐす。

同時に、仮面に仕込まれた通信機を使用。連絡先は更識会長。

『……影内君、どうしたの!？』

さつきいきなり反応が消えて通信がなくなつたけど』

「例の無人機に襲われています。

ひとまず電子戦機と思われる機体を最優先で撃破して通信網を回復させました。既に撃破した一体はコアと機体の両方を抑えていますので、引き取つて欲しいのですが」

『ちよー！』

分かつたわ、すぐに行くから待ってて！』

「引き取つて頂ければ後の迎撃は問題ありませんので、お願いします」
それだけ通信してそう間もないうちに、三人とも来てくれた。

到着直後に俺と離れていた一機のゴーレムに、まず簪が両手のミサイルランチャーを集中砲火。次に更識会長がランスを変形させた水弾のガトリングと《清き熱情》クリア・パッションで攻撃。最後に剣崎が渾身の一振りで叩き切り、一機が撃墜された。

流れるような連撃に、構成ややり方こそ違おうが三和音トライアドの三人を一瞬思い出した。

「お待たせ。とりあえず、コアをこっちに渡してちょうだい」

「委細了解しました」

「箒ちゃん、簪ちゃん。機体の残骸をいったん無人島に」

「任せて」

「任せてください」

だが、それも一瞬の事。すぐに更識会長が此方まで来ると、すぐに強奪したISコアを拡張領域に仕舞い、機体の方は一旦近くの無人島に置くよう簪に指示していた。

手際よく一連の行動が行われ、《アステイグ》の両手も空く。そうなれば遠慮などする必要は無く、竜毒牙剣を二振りとも握り締める。

「それじゃあ、お願いできるっ？」

「はい」

二つ返事を返し、迎撃を本格的に開始しようとした時だった。

『あー！』

ほうきちゃ……』

無人機から剣崎を呼ぶ声が発せられた。

最も、最後まで言い終える事無く剣崎と簪の手により止められたが。

一悶着はあったものの、それ以後は特に何事もなく迎撃は完了。

終わった後に、四人で五機分の残骸を抱えながら学園まで戻る事となった。

ディスプレイをとつとと起動して早速連絡を入れる。
相手なんて、決まっている。

『……それで、何か分かったか。束?』
「その前に……ちーちゃんは、あの白い機体の搭乗者が誰だと思っ
たの?」

相手のちーちゃんはいつも通りの表情だけど、私はいろいろと聞き
たいことはいっぱいだった。

『その様子だと……予想通りか』

「誰だと思っただの?」

さらに問いたださそうとしたところで、ちーちゃんはそうもつたいぶ
ることは無く教えてくれた。

『私の想定は……一夏だと思っただ』

「……予想通りだよ、ちーちゃん。

でも、最初に教えて欲しかったかなあ……」

通信傍受した時に聞こえた、名前。どうしてもその事について聞き
たかった。

そんな私の言葉に、ちーちゃんは素直に『すまん』とだけ言うそ
のまま理由の説明に入った。

『単に確信が無かったというのと、お前の事だから言わない方が効率
よくやるかと思っただけだ。』

現に、頼んだ日の夜という申し分ない速度だったしな』

「それほどでもないよお、ちゅちゃあくん……って、そうじゃなくて
!」

『ああ。それで、あの機体について他に何か分かったか?』

その言葉に、私は苦い思いを抱いた。

「駄目だね。」

いつくんは全然話す気が無いみたいだし、あの機体に至ってはそ
そもISなのか怪しくなってきたしねえ……」

私の言葉に、ちーちゃんは表情を険しくした。

とは言っても、私自身も自分の発言の内容に半信半疑だった以上は
仕方が無い。だけど、冷静に、今まで確保したデータから推測できる

理屈で考えれば、決してありえない話じゃない。

『……どういう事だ？』

ISはISでしか倒せないなんて、今となっては有名な事だろう。そのISでさえ十全な使い手でなければ即死の危険性を持つ相手に、対抗できるだけのものがあると言うのか？』

「そうなんだけどねえ……」

ちーちゃんに生返事を返しながら、私は再度思考し、そしてさらに言葉を続けた。

「まずは性能が高過ぎる事。

実際に私のゴーレムと交戦した時の記録を解析してみたんだけど、ぶっちゃけて言うとな性能が高過ぎんだよね。あそこまでの攻撃力と機動力を持ちながらなおかつ武装自体も複数搭載……《暮桜》とか《白式》とかを考えてみれば分かり易いと思うけど、そこまでやっちゃうとそもそも今現在のISコア自体の処理能力を超えちゃうんだよ。今のままじゃなくてコア自体が十分育つか、そもそもコアが機械的な方面で途轍もなく手を加えられているんだしたら、まあ……在り得ないとは言わないけどさ」

『そこまでの事をした人間が、貴様以外に居ると言うのか……!?!』

ちーちゃんが驚愕に彩られた声と顔で反応をくれたけど、正直私も最初は同じような反応をしていたのでそれはよく分かる。

でも、私はさらにこの続きを言わなければならぬ。

「ううん、それは無いと思うよ。」

そもそもそこまで育てるための時間がどう頑張ったところで足りないし」

『だが、一夏が学園で使っている《ユナイテッド・ワイバーン》の方には色々問題が多かったぞ。その線で考えれば、ISコアのほうに手を加えたのではないか？』

ちーちゃんが今までの話の流れから考えれば、まだ真つ当な意見を言ったけど、でもそこは大天才たるこの篠ノ之束^私を舐めてもらっては困る。

「勿論考えたよ？」

だから、一回はコアネットワークを経由してあの機体のコアの状態を調べようかと思ったんだけど、まあできなくなってるね」

『何……？』

「で、その後さらに調べて。」

今現在世に放った467機のコア全部をコアネットワーク経由で調べてみたんだけど、改造されたのも無ければ男性が乗ったものもないんだよね」

『そんな馬鹿なことが……在り得るといふのか!?!』

ちーちゃんが声を荒げているけど、私も内心かなり荒れている。

そして、これらの事実から考えられる内容は、この気持ちを助長させてあまりある物だった。

「うん。」

でも、今までの疑問を簡単に解消する答えがあるとすれば、それはきつと……」

私は、其処で一回躊躇った。

私としても、色々な思いを感じざるを得ない答えだから。

「……それはきつと。いっくんが使っているあの二機は、そもそもI Sではない何かかっていう事」

第三章（14）：帰還者達

S i d e 一夏

「うん……うん。」

それじゃあ、その方向でお願い……うん、詳しい事は……」

色々ありつつも、迎撃を終えて帰路に着いた、その道中。

更識会長は後方で即席オペレーターとしての役割を担っているらしい虚さんに連絡して、無人機の残骸とコアの収容の準備を整えてもらうよう手配しているとの事だった。

更識会長がコアを全て格納領域に仕舞って運搬し、機体そのものの残骸は、推力に余裕のある俺が二機分を運んでおり、更識会長と簪、剣崎が一機ずつで計五機分を運んでいる。

そうして暫く飛行していくと、学園が見えてきた。虚さんと本音が出迎いの準備をすでに済ませているらしく、裏口らしきところへと行くように指示が出た。

（さて、これからどうなる事か……）

一応意図的だったとは言え、冷静に考えれば現状において各国が欲して止まないだろうI S コアが五機分。学園に幻神獣アビスが襲撃した時に確保した分を含めればさらに増える。

正直に言えばこれだけでもかなりの揉め事になるだろう事は想像に難くない。機竜世界でも遺跡ルインに眠る宝物を巡って各国が競り合っているのを考えると、こちら側における機竜とも言える存在であるI S、その中核であるコアを巡って各国が暴走するのは想像に難くない。現状において登録されている467個のコアの分配の時も揉めたと聞くと、最悪を想定して動いても足りないくらいだろう。

（何を考えているのか……）

わからないのは篠ノ之東の真意。機体を欲しがっていたようなので、さすがに早々に迎撃させてもらったが、もう少し上手く話して何か情報を引き出した方がよかったか、とも思う。

振り返ってみれば、反省の多い事この上ないが、同時に疑問点も多かった。

(何事も無ければいいが……)

今後に多大な不安を残しつつ、俺達は帰路を進んでいた。

S i d e アイリ

「……では、一夏。

件の無人島にて、小型幻神獣^{アビス}と蟻型幻神獣^{アビス}の二種とも確認。単体での戦闘力こそそこまではありませんが、群れて来たことと、複数種の連携と思しき行動をとった、と」

「はい。

セリスティアさんや夜架さんの見た幻神獣と同じかどうかは分かりませんが、少なくともそのようなものは居ました」

「そう、ですか……」

件の島から帰って来た一夏の報告に、私は少し頭を悩ませました。まず、単純な戦力的脅威といった面から、複数種で連携をとるといふのは、脅威度を跳ね上げることに繋がるでしょう。私自身は戦闘経験などありませんが、多少はそちらの方面にも造詣があります。

それに、件の島は元々四十体近い幻神獣が居たと思われる場所です。もし島で確認された種が、あの四十体近い幻神獣とも連携をとれるなら、それは悪夢と言っても間違いではないでしょう。

「それと、もう一つ。

帰路の途中で無人ISの一团に襲われました。主犯は恐らく篠ノ之束……こちらでISを開発した人物で、《アスデীগ》を要求してきましたが、撃破しました」

「それは……マズイですね。

ただでさえこちら側で天災等と言われ、各国の追跡を振り切っている人ですし……」

追加で頭を悩ませることになる報告に、この場で十分な対策を練ることは無理だと考え、いったん新王国に持ち帰り、兄さんたちにも相談することを決めました。

ですが、最も大きな問題はここからでした。

「それと……申し訳ないのですが、織斑教諭に正体が割れました。

今は適当にあしらっていますか……」

「……何を言ってきましたか？」

「機体の変更をするようにしつつこく言ってきました。」

俺にその気は無いともう何度も言っているのですが……」

この事実には流石に頭を抱えました。

「まだ言ってきたるのですか……。」

もう正体が割れたのは仕方ないとして、今後の対応をどうするかです。更識さんたちを頼ろうにも貴方の来歴を話すのは気が引けますし……」

「申し訳ありません……」

一夏が謝りましたけど、正直言つて一夏自身を責める気は少なくとも私にはありません。一応の血縁関係はあった事ですし、気が付いてもそこまでおかしな事とは思わないからです。嘗ての一夏と彼女の関係を、果たしてどこまで家族と呼んでいいのかは疑問ですが。

むしろ、問題は機体の変更を積極的に行かせようとしていることでしょう。しかも、本人から否定され、なおかつ一度は上層部の人たちに止められたうえでなお進めようとしているのですから、今後止まるとは考えにくいです。更に言えば、一夏の来歴……過去に一度は日本政府から見捨てられている、という点を考えれば、日本の暗部組織にあたる更識さんたちに相談するのは、リスクがある物と考えられます。交渉次第では完全に捨て去るべき選択肢ではないでしょうが、積極的に取るべきとも言えません。

なんにしても、ここで対応を決定するには問題が些か大き過ぎます。一度新王国に持ち帰り、兄さんやリーシャ様、セリスさんたちにも相談しましょう。

「ひとまず、私は一度新王国に帰らなければいけないので、その時に兄さんやリーシャ様にも報告し、相談しておきます。」

それまでは、ひとまず今まで通りにお願ひできますか？」

「委細了解しました……」

一夏がいくらか気落ちしたように返事を返してきましたが、一夏を責める気はありません。

むしろ私個人としては、制約と警戒事項の多い中でよくやってくれていると思います。

「一夏。確かに好ましくない事実がありますが、それでも考えるべきはこれからの対応です。」

いくつかの事は不可抗力ですし、そこまで気にしないでください」「はい……」

それでも中々晴れない顔をする一夏に、私も少し言葉を続けました。

「一夏。貴方はよくやってくれています。」

それに、今日も二度の出撃と戦闘を繰り返した後なんですから、気を楽にして、今は休んでください」

それから、いくつかの話を挟んで、その日は更識さんたちの手配してくれた宿へと向かいました。

一夏の腕前については心配していませんが、今後の展開が一部を除いて読みづらい事と、一夏が無茶をしないかだけが非常に心配でした。

Side 箒

「ほーちゃんお帰り〜♪」

「ただいま、でいいのか?」

例の島に赴き、帰り道で一悶着あったものの、無事に帰還した後、I S学園での自室に戻った私は、本音に迎えられていた。

「だいじょぶ?」

怪我とかしてない?」

「特に問題ない。」

基本的に戦闘していたのは影内で、私はたまに手伝っただけだしな」

事実、付いて行ってやった事といえば、周辺の監視と極少数の無人機の共同撃墜、その処理の手伝いくらいなものだ。むしろ、心配すべきは影内だろう。特に今日は昼間も多大な戦闘行動をしているのだし。

もつとも、私などが心配するのもおこがましく思えるほどには、実力差が開いているのも事実なのだが。

「そっか〜……。」

シャワーの用意できてるよ〜。使う〜？」

「ああ、使わせてもらう。

すまないな」

「どうぞ〜(ゆっくり〜♪)」

本音の気遣いに感謝しつつ、用意してもらっていたシャワールームに入ろうとした時だった。

「もう遅い時間だし、大浴場の方も空いてるんじゃないかな〜って、思うよ〜」

遠回しに、入って来たらどうだ、と言われてるだろう事はすぐに分かった。

「だけど、それはしない。出来ない、と言い換えてもいいのだが。

「いや、シャワーのほうを浴びさせてもらうよ。せっかく用意してもらった事だしな。」

「……それに、見ている気持ちの良くないだろう物もある事だし」

「……そっか〜」

私の返答を聞いた本音は、それ以上言及することはせず、少しだけ無言となった。

その間に私はシャワー室へと着替えを持って入り、それまで着ていたものを脱いでいた。

「……見せられるものではないな」

シャワー室に元々設置してあった鏡に写った自分の体を見て、眩いていた。元々の怪我が酷く、さらにその上に第三度の火傷を負っていたので、胸と胴だけが見せられたものではない。

(幸い、隠すのには苦勞しない場所ではあるが……)

隠すのに苦勞しないことに加え、どうも治療には大分時間がかかるらしい。加え、それでも完治するかどうかは怪しいとのことだった。(先にやることもあるしな……)

今はまだ先にやらなければならぬことがあるうえ、多大な時間を費やして治療なんてすると、その分練習時間が削られるし、話を聞いてみると、どうにも内容にも制限がかかるみたいだった。

(さすがにそこまでやってしまうと、なあ……)

私自身、才能やら何やらに恵まれなかったことは知っている。だからこそ、練習などの後付けでできることを徹底しなければならぬというのに、それを削ってはどうかしようもない。

(……もう少しは放っておいてもいいか)

今のままでも特に問題は起きていないし、時間が無さすぎる。

あの日の誓いを守るためにも、今はまだ治療などで足を止めてはいられない。

Side 簪

影内君が自室に戻ってくるまでの間、私は色々と思う事はあつたけど纏まらずにいた。

箒や鈴から話を聞いた限りでは、影内君が織斑先生の元に戻らなかった理由を推測はできる。でも、それなら二年間何処で何をしており、そして何を考えて今の私達との協力関係を築いたのか。謎は深まるばかりだった。

それと、もう一つ。今までの話を加味すると、影内君がこの常識外れともとれる能力を手に入れるのに費やした時間は、僅か二年という事になる。それはそれで不可思議だった。少なくとも、私にはどうやればそれができるかなんて考えもつかない。

そうこうと色々考えていたら、アーカディアさんを見送った影内君が部屋に戻ってきました。

そのまま自然な流れでいくらか話しているうちに、今日の出撃の事

に関する話も出てきます。

「……今日も、結局影内君ばかり戦ってたね」

「元々俺はそれが役割だし、気にすることでもないだろ」

「うん、それは分かってるんだけど、ね……」

そこで私は少し気持ちを落としながら、ほんの少しの自虐的な気持ちも込めて呟いていた。

「それでも、何も出来ないのは情けないし……」

それに、今日は結局どっちも影内君に頼ることになっちゃったし……」

箒と鈴の話聞いた後だと、なおさらこの思いは強くなった。

そんな私の言葉を聞いて、影内君は

「だから、それが俺の役目なんだから気にしなくていいと言っているのに。」

まあ、襲撃された時はともかく、無人機の時は相手が迂闊だったのにも助けられたんだがな」

「……どういう事？」

今一つ影内君が何を言いたいのか分からなかった私は、聞き返していた。

「実のところ、今回の無人機は交戦距離が短かった……つまり、《アスデイグ》の得意な距離で戦っていたんだ。そうじゃないと、《アスデイグ》の攻撃手段はかなり限られることになるから、ちよつと厳しかったかもな」

影内君の言葉に、私は疑問を持ちました。

それを聞くのに躊躇う理由は無く、そのまますぐに聞くことにしました。

「でも、あの単一使用能力……ワンオフ・アビリティ 《消滅毒》アナイレイト・ヴェノムだったよね？」

あの能力があれば、一撃で墜とせるから問題ないんじゃないの？」
私が直接聞いた内容に、影内君は少しかぶりを振りしました。

「《アスデイグ》の《消滅毒》もそうそう万能というわけでもないんだ。」

一つ目として、発生部位の問題。当然の事だが、《消滅毒》を使って

いても、その効果が得られるのは攻撃に使っている部位だけで、他は通常時と大差ない状態だ。だから、効果範囲外に致命打を貰えば当然墜ちる」

言われれば当たり前にも思える事だけど、当然のようにビーム弾を切れる人に、果たしてその弱点を適用してもいいのかどうかは疑問でした。

「二つ目として、近距離装備限定の能力である事。

《消滅毒》はその能力の上での問題として、遠距離武装に使うと射程の低下を招くんだ。今のところは三分の一程度が目安か。だから、根本的に射撃装備との相性が悪い」

「……あれ？」

それだと、なんでオルコットさんの時は問題なかったの？」

冷静に考えてみれば、化け物が襲撃してきた時にオルコットさんのビットにも付与していたけど、遠距離装備であるにも関わらず、威力は激増しているように思えました。

「あれはオルコットが接射したからだ。

もし普段通りの距離で撃とうとしたら、むしろ低威力化していたかもな」

「あ。そっか……」

私の疑問に影内君が簡潔に答え、冷静に振り返れば解る事実を告げました。

「三つ目として、付与できるのはエネルギー兵器限定だって事。

俺が使っているのは、いずれもエネルギーを内包してるか、直接放出するものだから問題ないけど、誰かに付与する場合は、そもそもとして付与できる相手が限られる」

確かにエネルギー兵器にしか適用できないのであれば、いま現在多くのISが主力としている実弾、実剣などの実体装備には付与できないという事であり、いくら付与できるといっても宝の持ち腐れになる可能性も出てきます。

まさしく、今日の出撃なんかそのいい例でしょう。私と箒の装備は実弾と実剣のみ。お姉ちゃんも水という従来の装備とは一線を画す

装備を使つてはいるけれど、それでも実体を持つ装備という意味では、付与はできないと考えられます。

「最後に、使用負荷の高さ。」

一応戦闘する分には困らないけど、とにかく使用負荷が高いから、使い過ぎると継戦能力に支障が出るんだ。とはいえ、これに関しては使いどころを見極めるか、使用時間を極力短くするかで対応してるけど」

この話を聞いた時に私が思ったことを素直に言えば、普通はそんな事できない、に尽きます。

「更に言えば、《消滅毒》以外の側面でも色々とあってな。」

機体そのものも高機動近接系中心で、武装もそれ用。他の装備も基本的に近接補助だから、対応射程が短めなんだよ」

「……？」

確か、遠距離武装も二つくらいなかったっけ？」

「ライフルモードとショットモードだな。」

けど、あの二つも良くて中距離までだから、本格的な遠距離戦されるとな……」

そこで少しだけ影内君が言い淀みましたが、さすがにそれ以上は言われなくてもわかりました。

あの機動力と回避能力を相手に、どうやったら遠距離戦なんてできるのかについては甚だ疑問でしたが。基本的に、同等の機動力を持つ機体に遠距離用のFCSと長射程の射撃武器を搭載していれば、さつき影内君が言った弱点を突けますが、そもそも同等の機動力の機体は私には思い当たりませんでした。

「まあ、要するに《アスディーク》は運用の癖が非常に強い。だから、活躍できるときは活躍できるが、そうじゃない時は上手く立ち回らないと、どうしようもなくなる可能性もある」

内容は十分に理解できるものでしたけど、影内君の戦闘技能を考えると、どこまでこれらの弱点を適用していいのかは疑問でした。少なくとも、私は今までの弱点のどれも突ける気がしません。

あるいは、影内君が師匠と言っていた人たちは、これらの弱点を

あつさり突けるような化け物じみた人なのでしょか。

それからはもう遅い時間だったという事もあつて、特に何事もなく互いに就寝しました。

結局、影内君について何かを聞くことはできませんでした。

S i d e
???

「特別中尉、お呼び出しがかかっております」

「あ、分かりました。」

すぐに行きます」

出撃から帰ってきて、すぐの事だった。

いきなりの呼び出し。しかも、相手を聞くとなんと国防長官という話だった。

(……一体、何があつたんだろう?)

今の私は一応陸軍の所属になっていて、長期の特別作戦に参加している。この国の命運に直結する作戦に。

呼び出した人の待つ臨時の作戦指令室に着き、ノックと来たことを告げてから返事を待ちます。そう時間をおかずに、「入れ」と中から聞こえてきました。

そのまま中に入ると、国防長官が座っていました。

「よく来てくれた。」

さて、まずはこの写真を見てくれ」

勧められるまま写真を手にとってみると、そこには信じがたい光景が写されていました。

今日も戦ってきた……そして、倒すことはついに敵わず、防衛線がさらに後退する結果となったあの獣たちを、ほとんど蹂躪と呼んでもいいほど一方的に倒す白い機体の姿がありました。

「こ、これは……!?!」

「私としても信じがたいが、現実らしい。」

記録された場所はIS学園。先日、かの獣たちとおそらくは同程度

の脅威度があると思しき害獣を、ほぼ一方的に駆逐したらしい」

「そんな……」

そこで国防長官は一度言葉を切ると、私にもう一枚の写真を見せました。

そこに写っていたのは、世界初の男性IS操縦者と言われる人と、その搭乗機……確か、名前は《ユニテッド・ワイバーン》と言った機体だったと思います。

「その二機を見比べて、君はどう思う？」

率直な感想を聞かせて欲しい」

言われて、見比べます。

そして、少しの間思考した後意見述べました。

「写真のみですので推測の域を出ませんが……この二機は、おそらく同じ製造元で製造された、量産試作機と個人仕様の特機か特装機という関係にあると思います。

どちらがどちらかは解りませんが、操縦方法や機体の構成に、従来のISとは一線を画する類似点が多数見受けられるかと」

「そうか……」

私の意見を聞いて、国防長官は深く息をつきました。

そして、ややあつて告げられた言葉は、直ぐには信じがたい物でした。

「もはや、我が国には後が無い。

ここで何らかの手を打たなければ……それこそ、たとえ国際法を犯しかねないようなものであったとしても、手を打たなければならぬ。そうでなければ、国の存亡に関わりかねないところまで来ている。

……君に、頼みたい事がある」

——そして、私にある意味で命がけの命令が下りました。

第四章：異形の影

第四章（1）：橙の風、黒い雨

S i d e 一夏

幻神獣討伐を目的とした無人島への襲撃と、その帰り道で無人 I S に襲撃された日から暫く経った日の事。

今日までにはまだ幻神獣と確定したものはないらしく、いつも通りに鍛錬をしつつ学業にも励んでいた今日この頃。

今日の朝練には簪と箒、凰も加わっていた。この三人は元々の体力もあつたためある程度慣れてくれば朝練にも問題なく参加できたためである。さすがに鍛錬量自体はかなり手加減するが。さすがにセシリアはこの三人に比べ体力方面ではまだ問題があつたため朝練には参加していない。

「さて、朝練は何やるのかしら?」

そして、朝から元氣な凰が内容を聞いてきた。

「とりあえず、基礎体力を鍛える。」

今から本格的に機体を展開して鍛錬するのは時間的に厳しそうだしな」

実の所、王立士官学校^{アカデミー}では朝から機竜を使つての訓練なんてよくやっていたが、それは制約が少なかったためである。

基本的に実機を使える場所がアリーナ内部に限られるため申請が通らないと使えないのだが、いかんせん時間が早すぎるため中々通らない。さすがに教職員もこの時間に起きるのは一部を除き辛いらしかった。

そのために朝練は基本的に基礎体力の向上や体術・剣術の鍛錬が主となっている。

「時間と場所の都合を考えれば妥当なところか。」

で、どれくらいやる気だ?」

劍崎が聞いてきたので、ひとまず考えていた分を特に考える事も無く口にした。

「とりあえず、放課後にやっている分の半分くらいを考えているが」
そして、この瞬間に一瞬だけ三人が固まった。なぜだ。
「……朝からかなりやるんだね」
簪が辛うじてそれだけ言ったが、特に驚く量でもないだろう。
こうして、多少不本意なことがありつつも特に問題なく朝練の時間
間は過ぎていった。

そして、普段通りに朝食を食べて授業の準備を済ませ、それぞれの
教室へと向かっていきSHRが始まった。

だが、その日はいつもより少し騒がしかった。

「私はやっぱハツキ社製かなあ」

「そう？ あれって性能表見るとデザインだけじゃない？」

「そのデザインが良いんでしょうが！」

「私としては性能的にミューレイのかなー」

「あれ高いじゃん」

ISスーツに関する話をしているようだった。

確か、今日からISスーツの申し込みが始まるため、そのような話
が出たのだろう。

「ISスーツか……そういえば、影内。」

お前はどこの物を使っているんだ？」

「あゝ、それ、気になるな。」

何使ってるの〜？」

その中で出たのは、俺が使っている装衣についてだった。

「会社の方の特注品らしい。」

詳しくは聞いていないから、これ以上は分からん」

まさか古代遺跡からの発掘品などとは言えないため適当に誤魔化
し、そのまま流していく。

「諸君、おはよう」

「「おはようびんぐらこます」」

その喧騒の中、織斑教諭が入ってきた。入って来ただけで黙らせるのは教育が行き届いているというべきか流石の恐怖政治と言うべきか。

「今日から実機を使用しての訓練に入る。」

訓練機だがISの実機を使用しての訓練だ。事故など起こしようなものなら間違いなく病院行きになる。それも含め、各人気を引き締めるように。

なお、一部の面々を除きISスーツの申し込みも今日から始まるから、忘れず注文するように。注文したISスーツが届くまでは忘れず学校指定の物を着て来い。いいな?」

「はー。」

先程まで話にもあつたISスーツに関して織斑教諭が必要事項を言い、全員が返事をした。

(実機訓練か……)

気楽なものだな、とだけ思ったのは少々機竜世界側の基準で考えすぎだろうか。

おそらくこのクラス、と言うよりはIS学園に在籍する人たちはその多くは生徒や教師を問わず、IS学園でISに関する知識や技術を学んだとして、それを生かすのはモンド・グロツソなどの大会などを想像するだろう。

だが、実際にそれだけに止まるというのは考えづらい。そもそもとして最強の兵器を謳っている以上、軍事的に使われる可能性が高い状況であることは明白だ。

競技の事しか考えていない者たちが、実際の脅威――過日の幻神獣^{アピビクス}など――に会えばどうなるか。先日の教師部隊の事も考えれば、気が滅入るばかりだった。

(……そのような状況のためにいるわけだが。

まあ、とにかく全力を尽くすか)

どのみち、任務が終われば機竜の世界に帰るつもりなのでそこまで深く関わり合う気もない。この世界の問題はこの世界に生きる人たちに任せる事になっている。

デュノアが一礼して自己紹介を終えようとしたが、そうは問屋が卸さなかった。

「お、男の子……？」

クラスの誰かが呟いただけなのだが、いかんせん静寂に包まれた中でのものでと響く。

「はい。こちらの方にも男性操縦者の方がいると聞きました、それで――」

デュノアが喋れたのはそこまでだった。

そして、俺は既に耳を塞ぐ準備をしている。

「「きやあああああああああああツ!!」」

いつかの自己紹介の時を彷彿とさせる黄色い声の大音量が鳴り響いていた。

そして、それが収まるころを見計らって塞いでいた耳を離して再度周囲の反応を窺うと、今度は各々が勝手に騒ぎ出していた。

完全に登校初日の俺の状況のデジャブだった。

「男の子よ！ 2人目の男の子！」

「金髪紫瞳の美形！ 守ってあげたくなる感じの！」

「1――1で男子を独占！ やったぜ！」

「イイヤツホオオオオオオ！ さあいこおうだぜえええええええ!!」

クラスの面々は世界で二人目の男性操縦者の登場に色めき立っており、明らかな隣の二組に対して授業妨害になっていることが容易に想像できるレベルである。

それでもこのクラスに誰も来ないのは、皆が真面目に授業を受けているからだろう。

そして、このクラスの面々はもう少し静かにするという事はできないのだろうか。

「騒ぐな！ 静かにしろ！」

「み、皆さんお静かに！ まだ自己紹介が終わってませんよ！」

そして、織斑教諭と山田教諭が大声を出して何とかその場を収めていた。

「ボーデヴィツヒ、自己紹介しろ」

「は！ 教官！」

ボーデヴィツヒと呼ばれた彼女は姿勢を正し、異国のそれと思われる敬礼を織斑教諭へと返していた。

一方の織斑教諭はと言えば、生徒の手前か露骨に煙たがるような事こそしていないものの微妙に面倒そうな感じだった。

「私はもう教官ではないし、お前も此処ではただの一生徒だ。わかつたら、私の事は織斑先生と呼べ」

「了解」

相変わらず固い態度のまま、姿勢を正して返事をしている。

だが、続く自己紹介は短かった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ堂々と言い放つと、後は黙ったままだった。

「……あの、以上ですか？」

「以上だが？」

山田教諭が何とか場面を打開しようとしたが、返って来た返答はそんな山田教諭の努力を色々と台無しにするものだった。きつとこの時のクラスの皆の気持ちは、二人目の男性操縦者への興味以上に山田教諭への同情が占めていた事だろう。

同時に、先程までの会話からいくらか彼女の経歴に思い当たる部分も出てきた。

(前に更識会長が言っていた、ドイツ軍時代の教え子か……)

いつだったか、更識会長から織斑教諭がドイツ軍で教官を務めていた時期があり、その時の事が元になって実技教員としての話が出て今に至る、というのを聞いた事がある。

おそらく、彼女はその時の教え子なのだろう。本当に会うことになるとは思っていなかった反面少し驚きはしたが、それ以上に面倒事になりそうな予感がするのが嫌だった。

それに、彼女の転校もそれなり以上には不可解だった。

素人目から見ても軍人であることがわかる彼女だが、なぜわざわざIS学園に、と個人的には少し疑問にもなる。ISの扱いに関しては

大方は軍で習えるだろうし、部隊単位での訓練や運用上の問題も考えれば外に出したくないのではないだろうかと考えることもできる。

(まあ、気にしても仕方ないか……)

あくまで自分には関係の薄い事と考え、その場は黙っておこうとした。

だが、そんな俺の考えとは裏腹に、ボーデヴィツヒから近づいてきた。

「お前が影内一夏か？」

「……？　そうだが」

俺の返答に、ボーデヴィツヒは俺の方を観察するように少しの間見ている。

尤も、観察するようには見ていたのは一人だけではなかったが。

(露骨だな……まあ、ボーデヴィツヒだけでもないが。)

目立たないだけで、デユノアもか……)

ボーデヴィツヒの行動が派手なのでそちらに目が行きがちだが、よくよく注意するとデユノアもこちらを観察するように見ていることが窺える。

(……二人について、更識会長にも相談するか)

三度頼ることになる事実に対して少々気が重くなるが、背に腹は代えられない。

パンツ！

だが、今までの状況の一切を切り替えるように織斑教諭が手を叩いた音が響いた。

「それではSHRを終える。

各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘だ。それから影内、お前はデユノアの面倒を見てやれ。

それでは解散！」

織斑教諭の掛け声に合わせてクラスの女子たちが一斉に動き出した。

一方、デユノアは器用に女子たちの間をすり抜けると此方まで来

た。

「君が影内君だよ。改めて、僕は――」

「すまないが、自己紹介は歩きながら頼む。男子はアリーナに急増された更衣室で着替えなんだ。それと、遅れた場合それなりのペナルティが付くから急いだほうがいい」

「え？ うん！」

デュノアが少々戸惑っているようだが、それを気にしている暇はない。急かしながら、急ぎ足で更衣室へと向かっていく。

「とりあえず、俺は影内一夏。俺とわかれば呼び方は何でもいい」

「さっきも言ったけど、僕はシャルル・デュノア。」

僕も呼び方は何でもいいよ」

割とスラスラと日本語を話しているが、それでもいくらかの突っかかりを感じる喋り方だった。

(……付け焼刃、と言うほどではないが……妙に違和感を感じるな)

気にするほどではないが、それでも違和感は覚える。

だが、そこに対して思考出来たのはそこまでだった。

「いたわ！ 影内君と転校生よ！」

「者ども、出会え出会え！」

どこぞの時代劇を彷彿とさせる台詞回しとともに、女子の一団が現れた。授業はどうした。

「ええい、早く行くぞ！」

「わ、分かった！」

さすがにこの異様な光景の前に、デュノアも急ぎ出したらしい。

その後、俺たちはその後も現れる女史の一団から逃れながら、何とか更衣室へと向かっていった。

S i d e シャルル

IS学園への転校初日。様々な意味でまさかの事態には見舞われたけど、何とか影内君と知り合うのは成功した。

そして、この学校の人たちってあんなに男の人に飢えてるのか、と疑問に思わずにはいられなかった。

「……………この学校って。い、いつもこうなの？」

更衣室に着いた時点で割と疲れることにはなったけど、同じだけ走った影内君は体力も相当あるみたいで特に問題ないみたいだった。ちよつと悔しかった。

「何時もより酷いな。」

まあ、今日はデュノアも来たから、その影響だろうな」

「そ、そっか……………」

影内君の若干投げやりになっている説明に、僕も同じように投げやりな気持ちになってきた。

だけど、気持ちを切り替えて次に取るべき行動に移っていく。

「えつと、ここで着替えて準備すればいいんだよね？」

「そうなる。時間も押してるし、早くしようか」

影内君に言われて、すぐに着替えを始める。とはいっても、やることと言えばほとんど脱ぐだけ。色々と隠すには、そちらの方が都合がいい。

一方、影内君のほうもほとんど同じように脱ぐだけみたいだった。だけど、それよりも気になる物がある。

影内君の使っているISの待機形態である、あの剣。

(…………アレさえあれば)

何としても、現物か…………最悪、データだけでも持ち帰らなければならぬ。

アレさえ何とかすれば、僕の目的は達せるのだから。

第四章（2）：濃緑の銃口

S i d e 一夏

様々な問題が起こったが、何とか授業には間に合った。

グラウンドに着替えたうえで出てみれば、既に一組と二組の生徒が整列していた。一応時間には間に合ったが、どうやら俺たちが最後までしい。

「それでは、今日の授業を始める。

まずは、見本としてIS同士の模擬戦闘を見てもらう。オルコツト、嵐。出て来い！」

織斑教諭が二人を呼び出し、前に立たせた。

この二人は代表候補生でもあるし、見本にはちょうどいいかと思ったらどうも違うようで――

「織斑先生、私達で模擬戦をすればよろしいのです？」

「いや、違う。お前たちの相手は別に用意してある。もうそろそろ来るはずだが……」

――織斑教諭が確認するように視線を上空に向けると――

キイイイン

――ISの駆動音がその視線の先から響いてきたが、それだけに止まらず――

「ど、どどど……退いて下さい！！」

――上空から叫び声、それも不吉な響きのそれが聞こえてくる。

そして、同時に緑色の装甲で覆われたISが飛んできている。纏っている使い手は山田教諭。それはいいのだが、今進んでいるコースをそのまま進むと明らかに生徒たちが密集している場所へと突っ込むことになる。

今現在進んでいるコースを修正しておらず、警告を口頭で発している。つまり、コントロールを失って墜落していると考えるべきだろう。

「陽炎！」

「――降臨せよ。天を穿つ幻想の楔、繋がれし混沌の竜。ヘユナイテツ

ド・ワイバーン」

咄嗟に詠唱し、《ユナイテッド・ワイバーン》を召喚。同時に、剣崎も自身の専用機である陽炎を展開していた。

まず剣崎が器用に軌道を合わせると、掴んで山田教諭の負担にならないように減速し始めていた。元々機動力に余裕のある機体なだけに、問題なく受け止められている。

こっちはこっちで障壁を展開しつつ、四つ足の内後ろを伸ばして杭代わりにしつつ前脚は少し曲げて腕と合わせて衝撃を和らげられるようにしておく。

直後、感じた衝撃はそれなりだったが特に問題は起こらずに止められた。

「山田先生、大丈夫ですか？」

「す、すいません……」

剣崎が山田教諭をゆっくりと下ろしながら言葉をかけ、そんな剣崎へと陳謝している山田教諭がいた。

普通、逆ではないのだろうか。

「山田教諭、落ち着いてください。」

入学試験の時に俺を撃ち倒した貴女は何処へ行ったんですか……」「面目ないです、影内君……」

個人的にも一度その実力を身をもって味わっている手前、これほどの実力者が侮られるような行動は注意してほしいと思う。

だが、割と本気で落ち込んでいそうな様子の山田教諭に、さすがに言い過ぎたかという罪悪感も募った。

「えつと……織斑先生。」

もしかして、私達の相手というのは」

「山田先生だ」

オルコットの質問に、織斑教諭が答えていた。一方、当のオルコットには戸惑いが見受けられる。

そんなオルコットの様子を見て、織斑教諭は挑発するような口調で続く言葉を言い放った。

「安心しろ。今のお前たちでは相手にならん」

「ッ！　じよ、上等です……」

先程の墜落を見たからだろうか、オルコットは山田教諭の事を侮り、織斑教諭の挑発に乗りそうになっていた。だが、正直に言つて挑発に乗つた今のセシリアでは模擬戦の内容の方にも不安が募る。

尤も、それも少々意外な人物によつて諫められる事になるのだが。

「セシリア、落ち着きなさい。」

影内、一度山田先生に負けたつてのは？」

凰が一度オルコットを落ち着かせると、此方へと向き直つて聞いてくる。その質問に嘘を吐く理由もないので、俺も素直に答えておく。

「入学試験の時に、実技の方で相手してもらつてな。」

見事に負かされたよ」

「……そう」

俺の答えを聞いた途端、凰の目付きが変わつた。同時に、周囲が少しざわついた気がした。

「セシリア、答えは聞いたわね。」

後衛頼むわよ」

「……分かりましたわ。前衛はお任せしますわよ」

どうやらオルコットも気持ち切り替わつたらしい。目付きが先程までと大分違う。

(今の二人で倒せるかは怪しいが……いい模擬戦にはなるか)

手本とする模擬戦が望まれている以上は、どちらかが一方的に言うのはあまり望ましくない。

その点、今の二人と山田教諭なら手本とすべき模擬戦をしてくれることだろう。

模擬戦の内容を若干楽しみにしながら、俺も座っている生徒の列へと戻つていった。

S i d e 鈴音

(影内を下した相手、か……)

影内自身からしたら何気なく発した言葉だろうけど、今の私からしてみれば圧倒的と言つていい実力者を一度は下したと言われれば、侮るなんてできるはずもなかった。

そして、それはセシリアにもいい具合に伝わったみたいで、今は油断なく山田先生を見ている。

「倒せたと言えるほどの試合はできてなかったんですが……」

山田先生はそう言つて謙遜してるけど、私からしてみればあの影内にあそこまで言わせた時点でもう実力差が開いているのが容易に想像できる。

さっきの墜落の事は頭の中から綺麗に追い出したほうがいいでしょうね。

ひとまず私は《甲龍》^{シエンロン}を展開して準備しておく。私が終わる頃にはセシリアも《ブルー・ティアーズ》を準備し終えていた。

「やるわよ、セシリア！」

「ええ、よくつてよー！」

「お手柔らかにお願いしま〜す」

直後、山田先生は私の《龍砲》とセシリアの《スターライトMkⅢ》の先制攻撃を軽やかに避けた。

その時には既に三人とも上空へと飛び上がっている。私とセシリアは直ぐに前と後ろに分かれてそれぞれの獲物を手に持ち、再度の攻撃を試みる。

だけど、その時には既に山田先生がその手に持ったアサルトカノン《ガラム》をこちらへと撃ち放つてきていた。その狙いは正確で、私とセシリアは回避か防御のどちらかをとらざるを得なくなる。

だけど、その時にはすでに山田先生が次の行動に移っている。手に持った銃器を《ガラム》から連装ショットガン《レイン・オブ・サタデー》へと切り替えている。

ショットガンの弾幕に押されていると、今度はグレネードランチャーが準備されている。

さすがにあれに直撃するのはまずいから強引に接近して《双天牙月》を振るうけど、盾を装備した腕で器用に受け流された。

この一連の動きには思わず嫉妬を覚えた。

山田先生が使っている《ラファール・リヴァイヴ》は確かに汎用性が高いISだけど、基本装備の関係から本来は中距離戦を得意としている。にも関わらず、山田先生は近距離戦にも十分以上に対応していて、私の《双天牙月》もいなされる。しかも同時進行でセシリアの攻撃にも対応してくるのだから、彼我の実力差は歴然としているといってもいい。

機体の性能でいえばこちらが上である以上、二対一でこうも押されるというのは年季の違いというものを見せつけられている気持ちにさせられる。

(これじゃ、影内がああいうのも納得だわ)

奇妙な納得を覚えながら、私は再度攻撃に移っていた。

S i d e 一夏

凰とオルコットと山田先生の試合が始まって数分。

(……案の定、押されてるな。)

今度、連携とかの訓練もやってみるか)

凰とオルコットの二人は前衛と後衛に分かれて波状攻撃を試みているが、どうにも互いの攻撃タイミングが噛み合っておらず上手く行っていない。かと言ってそれ以外に何かしら連携を取ろうにも互いの動き方がいまいち掴めていないのか上手く行っていない。

何より、互いが互いの攻撃タイミングを潰し合っているような印象になっているのが口惜しい。

俺自身、そこまで連携攻撃などが得意というわけではないが、一通りの訓練は受けたことがある。それに、一時期は連携において最高の見本とも言ってもいい三和音トライアドの三人とよく訓練を一緒にさせてもらった事もある。

「さて、今の間に……そうだな。

デュノア、山田先生が使っているISの解説をしろ」

「あ、はい」

織斑教諭が突然デユノアに説明を丸投げしたが、とうのデユノアは気にした様子もなく説明を始めていた。

「山田先生が使用されているISは、フランスのデユノア社製第二世代型IS《ラファール・リヴァイヴ》です。量産型第二世代機で、現在運用されている量産型ISの中では第三位のシェアを持つ機体です。十二カ国で制式採用、内七カ国でライセンス生産されています。

第二世代最後発の機体ですが、基本性能面では初期型第三世代機と肩を並べられる程度はあります。特徴は安定した性能と豊富な後付武装、それによる高い汎用性と操縦性です。これによって操縦者イコライザを選ばない事と多目性役割切り替えを両立しています。装備と、場合によってはFCSの交換によって格闘、射撃、防衛といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

ファミリーネームの会社の機体というだけあってか、説明はさすがの物だった。

「……一旦、そこまでいい。」

もうそろそろ終わるみたいだな」

そして、丁度説明が終わる頃に模擬戦の方も決着がついていた。

最後、鈴音に至近距離からガトリングを叩き込みつつオルコットにグレネードランチャーを直撃させた山田教諭の勝利となっていた。

二人は悔しそうに唸っているが、二人とも負けず嫌いな事を考えれば、これをバネにさらに実力を付ける事だろう。

「諸君もこれで教員の実力は理解出来たな？ 以後は敬意を持って接するように。」

では、次に専用機持ちをリーダーとしたグループに分かれて歩行訓練を行う。では分かれる！」

その後は織斑教諭の指示で、実際に訓練機を用いての歩行訓練が行われることになった。

現在、一組と二組の専用機持ちは俺と剣崎、鈴音、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒの六名。この六名をリーダーとした六班それぞれ

れに三機ずつ用意された《打鉄》か《ラファール・リヴァイヴ》のうち一機があてられ、担当する一般生徒達に順番で搭乗、歩行まで行ってもらおうとの事らしい。

だが、自由に振り分けさせた結果、俺とデュノアのグループに大多数、次いで剣崎、それより僅かに少ない人数がオルコットと風のグループに入り、ラウラの所には極少数が来るのみとなった。いくら何でもふざけ過ぎではなからうか。

「均等に分かれんか、馬鹿者ども！」

出席番号順に各グループに一人ずつ入れ!!」

さすがにこれには織斑教諭の一括が入り、間もなくして各グループの再編成が終わった。さすがに今度は均等に分かれている。

その後、各班ごとに練習用のISを振り分けることになり、俺と剣崎、風が《打鉄》、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒが《ラファール・リヴァイヴ》となった。

「さて、実際に装着して歩行するぞ。とりあえず出席番号順でいいな？」

それと、降りる時は次の人が乗り易いように前屈みしておくのを忘れないでくれ」

「はいー!!」

妙に息の合った返答が返ってきたのを確認して、順次実際に装着して動かしていく。

俺の方はそれなりにスムーズには進められていたが、一番早く終わったのは剣崎のグループだった。次いで、ファミリーネームの会社の機体を使用しているデュノアが一通りの訓練を終え、それに少し遅れる形でボーデヴィツヒのグループが終わっていた。半面、感覚頼りの説明をしている風と、説明が不必要に細かいオルコットのところは若干苦戦しているようで、最終的に山田教諭が助けに入る事態となっていた。

こうして、幾許かの課題を残しつつISの実機を使用した初の授業は多少の課題を残しつつ無事に終わった。

「引っ越し?」

「うん、引っ越し……」

一組にシャルル・デュノアという名前の男性の転校生が来た、その日の放課後。私の元に、引っ越しのお知らせが来ていた。男性同士で相部屋にするためらしい。

できればもつと影内君と色々と話したかったことがある手前、私としてはかなり不本意だったりする。

そのことを説明すると、影内君は少し苦い顔になっていた。

「デュノアが来たからか……」

できれば、現状維持がよかったが。そうも行かないか」

「元々、一時的についていう事で通していた話だし、『男女七歳にして席を同じくせず』っていう事らしいけど……」

現状維持がよかったというのは仕事方面の事も含めての事なんでしょうけど、正直言って嬉しかったです。

ですが、それとは別に疑問のようなものもありました。

「それにしても、なんで今になって男子の転校生が……」

「……やはり、妙か?」

「私としては、そう思うけど……」

私の言葉に、影内君が確認するように聞いてきました。

「そうか……後で更識会長に相談しようとは思っていたが、早い方がいいか」

そうして、今後の事に関して少し話しながら引っ越しの準備をしていました。

「あ、ちよつと待って」

そうしている最中、私の携帯の着信が鳴りました。

手にしてみれば如月さんからです。

「はい、もしもし」

そのまま、電話に出た私に告げられた言葉は――

『更識君かい？』

ちよつと、大事な話があつてね……』

——私にとって、悪夢以外の何でもありませんでした。

第四章（3）：不穏なる風

S i d e 一夏

「専用機の開発が凍結!?!」

「……………うん……………」

如月さんから一通りの連絡があった後、電話を切った簪がいきなり泣き出してしまい、その後少しして若干落ち着いてきてから俺もかいつまんで事情を聞いていた。

その中で聞いたのは、簪の専用機の開発が凍結された事とその経緯について。

「……………すぐに何とかするのは無理か。」

引越しの事もあるし、後でもう少し詳しい話を聞いて……………そこか
らか」

聞いた経緯を考えれば、今この場で対策を練るというのは流石に無理がある。

ひとまず、今は引越しを済ませ、どこかでより詳しい話をしっかりと聞くべきだろう。対策はそのうえで、できる限りのものを用意しなければならぬ。

(なにより……………理由が理由だったしな……………)

一度、簪が強くなるうとしてしている理由を聞いているうえ、俺としてもこのまま放っておくという事にはしたくない。それに加え、その理由にも思うところが無いわけでもない。

幸い、早い時間から引越しの準備を始めていたためそちらの方は問題ない。それなりに重い荷物もあるが、それは俺が運び、剣崎と本音にも連絡して手伝って貰えばすぐに終わることだろう。

(少々難しいが……………できる限りはやってみるか)

どこまでやれるかはわからないが、何かしらできることを模索しよう。

まずは、そこからだ。

S i d e シャルル

「今日からよろしくね、影内君」

「ああ、よろしく。」

「まだ慣れないかもしれないが、俺の事は気にせずくつろいでくれ」
「うん。」

「ありがと」

影内君と元々相部屋だった人に何か問題が起こったらしく、それで少し引越しが遅れたけど日が暮れるころには無事引越しはでき、その後の荷解きも影内君が問題ない範囲で手伝ってくれたこともあって割とすぐに終わっていた。

それからは、少しの間他愛の無い世間話をしていました。

「そういえば、影内君は専用機持つてるんだよね」

「まあ、確かに支給されてはいるが……」

「それってさ、どんな機体なの？」

学園の専用機はある程度調べただけでさ、やっぱり直接聞きたいし……」

話がIS関連になったところで、影内君の専用機について少し聞いてみることにした。

その時の影内君の表情は、何と言うか、少し困ったようなそれに見えました。

「言ってもいい部分の説明自体は構わないが……少々長くなるし、試作特殊システムも積み込んでいる機体だから、多分言葉だけで説明してもわかりにくいと思うが。」

良かったら、後で模擬戦でもするか？ その方が色々と分かり易いと思うが」

影内君の提案は、正直言って少し迷いました。

確かに、彼と彼の機体である《ユニテッド・ワイバーン》の戦闘能力を知りたい気持ちはある。ですが、彼の提案では僕の《ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ》も晒さざるを得ず、その能力も露呈させることになってしまう。

(……それでも、やるべきかな。

ここであまり嫌がって不信感を抱かせても仕方ないし、それに私もちやんとメリットもあるし)

少し逡巡はしたけど、提案を受けて模擬戦をすることにした。

「うん。良かったらやらせてもらおうよ。」

いつだったら大丈夫かな？」

「早ければ明日だ。元々アリーナは使うつもりだったから申請は出しているし、やる分には問題ないしな。」

ただ、生徒会の方で一回呼び出しを貰っているから、それが終わってからになるが……」

生徒会の用事というのが少し気になったけど、それについては生徒会のメンバーでない以上はどうしようもない。守秘義務がある可能性もあるし、あまりしつこく聞いて不信がられるのも避けたい。

「うん。じゃあ、それをお願い。」

終わるまでは部活動を見て回っているよ」

「じゃあ、終わったたら一報入れる」

「うん。お願いね」

ひとまず、明日やることも決まった。確かめなければならない事も、もう見えている。

(とにかく、まずは明日の模擬戦からだね……)

やるべき事も決まり、その後はまた他愛のない世間話へと戻っていった。

Side 楯無

IS学園にデュノア君が転校してきた翌日。

私は今現在影内君と同室になっているデュノア君について、いくつか伝えたほうがいと判断したことを伝えるために呼び出していた。

正直言つて、彼女の経緯を考えれば、今までの時点で何かあっても可笑しくはないと思う。

(だけど、何かしらねえ……)

この調査結果に、違和感を感じている私もいた。

(何と言うか……見事すぎる、って言えばいいのかしらね……)

確証はないけど、引っかけりも感じている。何より、あまりにも出来過ぎているようにさえ思える。

だけど、どのみち彼に注意を促さなければいけないことに変わりはない。

「失礼します」

資料を捲りながら考えを纏めていたところ、影内君が来た。

「ようこそ。」

取りあえず座って」

私が勧めると、影内君も割り振られた席に座りました。

これで、この場にいるメンバーは私と影内君、そして虚ちゃんの三人。普段なら簪ちゃんと箒ちゃんもいるんだけど、この二人は色々あったみたいで今は居ない。

(出来れば詳しい話を聞かせて欲しかったんだけどねえ……)

今からの話には全く関係のない事を考えたけど、そこは頭を切り替えてきましょう。

「じゃ、話を始めてもいいかしら?」

「どうぞ。」

それと、後で此方も頼みたい事があるので、それについてもよろしいでしょうか?」

「ええ。内容にもよるから、それについては後でまた話しあいましょう」

影内君が言ってきたけど、内容による部分もあるからあまり確実なことは言えない。けど、彼の重要性は私も重々分かっているつもりなので出来るだけその要望には応えようと思っている。

だけど、それも話が終わった後の事。今は私が話すべきことを話しましょう。

「取りあえず、内容は先日転校してきたデュノア君についてよ」

私の言葉に、影内君は少し驚いた顔をした後、少しの満足を覚えて

いるような表情になっていた。

「此方の頼みたい事もデユノアに関する事だったのですが……。手間が省けましたか」

確かに、それなら手間が省けるといふもの。むしろ、お互いにとつてちょうどよかつたといふべきでしょうね。

「それならちょうどよかつたわね。」

さて、改めて始めるわよ」

虚ちゃんに目配せして、影内君に資料を渡してもらおう。

影内君の手に渡つたのを確認してから、改めて説明を始めた。

「まず、デユノア君の身元に関してだけど。」

社長夫妻の周りを洗つたところ、『シャルル・デユノア』っていう名前の息子は居なかつたわ」

影内君が資料を捲り、件の彼女について書かれたページを開く。

そこに書かれていたのは、とある少女の名前。

「社長夫妻……というか、社長周りにいた血縁者の中に居たそれらしい人物で当たつたのは、この子ね」

「名前は『シャルロット・デユノア』。」

社長夫妻の間に生まれた子供ではなく、社長と愛人の間に生まれた子供ですね。愛人だった母親のもとで暮らしていたみたいですが、その母親も2年前に他界し、その後デユノア社長夫妻に引き取られたみたいみたいです。

その際にIS適性検査を受け、高い適性が発覚。デユノア社所属のISテストパイロットとして働いていたみたいですね」

「そんな立場だから、大方、影内君の機体か影内君自身を狙つたスパイとして潜り込まされた、って言った所かしらね。実の所、少し前にデユノア社から一応の所属にしている企業宛てに事業協力の話があつたし。」

まあ、他にあつた同じような話も含めて全部断つていたけどさ。

さて、虚ちゃん。説明ありがとうね。下がつてもいいわよ」

「畏まりました」

虚ちゃんが絶妙なタイミングで情報の詳細を補足してくれたこと

により、私の仕事は後の話し合いを纏めるだけとなった。

そして、虚ちゃんが生徒会室から出て行ったタイミングを見計らって影内君に声をかけた。その時の表情は、何かを訝しんでいるようなものだった。

「影内君、彼女たちへの対応はどうするつもりかしら？」

「そうですね……。」

当面は、彼女の方から何かをしてこない限り今まで通りの対応をしていくつもりです」

「そう……ついでに、何かあつた場合は？」

私の質問に、影内君は僅かに……ほんの僅かに、眼を鋭くしながら答えた。

「出来るのであれば現場を取り押さえ、場合によつては実力行使と
いったところでしょうか。」

この資料の通りなら、同情の余地が無いわけでもないでしょうし
ね」

影内君が言った言葉に、私は少し意外な思いを抱きながらその部分
について聞くことにしました。

「資料の通りなら、ね。」

まるで資料の方に疑わしい部分があるような言い方だけど。そんな
に信頼できないかしら？」

私の言葉に、影内君は困ったような顔を浮かべながら答えました。

「別に調査結果そのものの内容は疑っていませんが……。」

ただ、いくら何でも出来過ぎているんじゃないかと思ひましてね」

「その理由は？」

私の問いに、影内君は少し考えながら答えた。

「まず、この資料によるとデュノアは最初、母親のもとで父親とは別に
過ごしていたんですよ？」

父親であるデュノア社長からしてみれば、揉み消せるのかもしれない
ませんが……それでも、自身のスキャンダルになりえる要素であるデュ
ノアを、そこまで近い場所に置くものなのかと思ひまして。

もし仮にですが、デュノアが最初からそのことを知らなければ、そ

もそも放っておけばいいだけでしようし」

「なるほどね……。」

でも、それは少し根拠としては弱いと思うけど」

私の軽い反論に、影内君も「確かに、これだけでは弱いですよね」と認めつつも、他にも理由があることを告げて続けた。

「さらに言えば、今現在のデュノアは立場や目的の問題があるとはいえ一応は他国の目にも付く場所に一国家の代表候補生として送り込まれています。」

他国の眼にもつく場所にそれなり以上の立場を持たせて送り込んでいる以上、スパイ行為がバレた時の事を考えれば搭乗者を失う可能性も高い場所にそうも優秀な搭乗者を送り込むものかと思ひまして。今はまだデュノア自身の実力を知らないのも何でも言えませんが、彼女自身が優秀な搭乗者であるならそうも簡単に切り捨てられる存在とは言い難いのではないかと。仮に彼女の実力が低く、すぐに切り捨てても問題ない程度なら今度は国のレベルが疑われかねませんし」「それも一理あるわね。」

まあ、追い詰められていけば何をするか分からないのが人間でもあるから、一概には言えないけど……。」

私の返答に、影内君も「そうですね」と返しながさら続けた。「最後に、企業代表ではなく国家代表候補生として編入させている点です。」

もし仮に企業代表として編入させているのであれば、最悪の場合を考えても一企業を切り捨てるのみで済みます。ですが、国家代表候補生という国にも関わりある立場で編入させているのであれば、必然的に国家が関わっていることが推測されます。

当然、偽造にも関わっているでしょうしそれが疑われて当然です。一部の人の暴走だとしてもそれによつて国家の信頼そのものに傷が付く事は避けられないでしょうし、あまりにもリスクが高いのではないかと」

その言葉には私も頷いた。

もし仮にこれが企業だけの問題で済むのなら、私もそこまで違和感

を感じなかった。けれど、国家が行ったとなれば、しかも言ってしまう対策が杜撰な部分も多分に見受けられるこの状況では、正直に言ってこの事実が白日の下に晒される可能性を否定できない。

言い換えてしまえば、お粗末ですらある始末なのだ。

「……実の所、私も結構違和感っていうか、見事すぎるような印象は受けていたのよね。」

確かに、国家ぐるみとなればデュノア君を追い詰めて無理矢理にでも言う事を聞かせることも十分できると思う。でも、一応は国家からの干渉を謳っている場所に行かせている以上、最悪、手痛い反撃を喰らう可能性がある。

それに……まあ、ぶつちやけて言えばわざわざ男性として、つていうのもそれなりにわからない話なのよね。正直、普通に女性として入学させて、卒業までの期間でゆつくりとスパイ活動させればいいだけだし」

私の話を、影内君は頷きながら聞いていた。

「それに加えて。もし仮にデュノア社を切り捨てるような事態になれば、フランスにとって痛手になるのは避けられない。確かにフランスのIS開発は他の欧州各国からは遅れ気味で、次世代機イグニッション・プラン開発計画からも外された。けれど、それでもフランス国内でデュノア社は唯一第三世代機を開発できる可能性のある企業よ。そこまで詳しくは調べていないから断定はできないけど、開発能力で勝る他の企業が無いのであれば切り捨てる可能性は低いと思うのよね。今以上に状況を悪くしかねないし。」

確かにフランスはデュノア社への財政支援を一度打ち切っているけど、その原因になった経営不振も元をただせば異常なほどの違約金
が原因とされているわ。けれど、いくらなんでも過去に例を見ないほどの額に膨らんでいる以上、今回の案件と合わせて何か裏がありそうだし」

資料をめくって関連するページを一通り見た影内君は、私の意見に同意を示してくれていた。

「では、今後のデュノアに対する対処はどうしましょうか？」

そして、一通りの資料も見た後で、影内君は私に聞いてきた。

「ひとまず、影内君は最初に影内君が言っていた通りでいいわ。でも、できれば現場を押さえて連れてきてくれないかしら？」

「委細了解しました。」

「更識会長は？」

「ひとまず、追加で調査ね。」

影内君も違和感があるみたいだし、私としても色々と不審に思う部分もあるし」

私の返答に、影内君は満足を覚えているような表情で頷いた。

「だけど、それから少し真剣な表情になって、唐突に全く別な話題を切り出してきた。」

「話を変えてしまつて申し訳ありませんが。」

「簪の事についてはもう聞きましたか？」

「簪ちゃんの事……つて？」

影内君が何を言いたいのかわからず、私はその続きを促した。

「簪の専用機が、開発凍結になったそうです。」

「詳しい話は」

「この時の私の気持ちを正確に一言で言い表すなら、憤怒と言えたいでしょう。」

「おおのおれえええええ倉持技研……！！！！」

そして思わず叫んでしまつてもいた。

「よくも……よくも、私の大事な簪ちゃんを蔑ろに……！！」

そして、一言で一気に怒髪天になった私を、影内君は微笑ましいものを見たという目で見ていた。

「何よ。何か文句でもある？」

その態度に若干の苛立ちを覚えてしまい、

「いえ。ただ、簪の事を大事に思っているんだな、と思ひまして」

「そんなの、当然じゃない」

確かに色々あったけど、簪ちゃんの事を大事に思っていることだけは変わらない。これだけは、自信をもって言える。

「その割には、どこか他人行儀な部分が見受けられますが？」

そして、影内君は痛い所を的確に突いてきた。

「……今でこそ、簪ちゃんも家の事に関わるようになってきたんだけど。」

一時期は本当に疎遠だったの。今のようない関係になったのも、簪ちゃんと出会ってからだから、それ以前は話す機会も数えるくらいの時もあったしね」

簪ちゃんの自慢の姉で居たくて、色んな事を頑張った。武術や勉強は当然の事として、他にも沢山の事を習って、できるようになった。

でも、いつの事だったか。気が付くと、簪ちゃんは私の事を化け物でも見るような目で見ていた。

それからだった。私は簪ちゃんに話しかけるのが、徐々に怖くなっていった。

「それに、家の当主になってからはむしろ疎遠のままだった方がいいんじゃないかと思う事もあったの。」

だって、そっちの方が簪ちゃんが安全かもしれないから」

対暗部用暗部なんて家柄である以上、常に手段を問わず殺される危険に晒されるのが宿命ともいえるのが更識家。その当主になったのであれば、必然と私にもそれは適用される。

私はそれでもいい。元々、なった時から覚悟なんてできている。

だけど、簪ちゃんにはそんな事を気にせずに過ごしてほしいかった。

「それに、今の簪ちゃんを見ると、余計にそう思ってしまう部分もあるのよね」

私の呟きに、影内君はどこか興味深そうに続きを促してきた。

「確かに、簪ちゃんが離れていくのは寂しいけれど。でも、それだけ立派になって、私なんか近くに居なくてもいいくらいに成長してくれたのだとしたら。それはそれで嬉しいじゃない？」

実際、簪ちゃんも今は代表候補生になっているし、私が見てきた他の代表候補生と比べてみても実力的には悪くない……どころか、むしろ上位に入るくらいじゃないかしら。加えて、箒ちゃんに会って、一緒に訓練をやるようになってからはさらに伸びている。

専用機も持って、その機体と一緒に伸びていったら、私なんかが守

る必要なんてそれこそなくなるんじゃないかしら」

これは本音だった。

最初は私と同じようにIS搭乗者になる必要なんかないと思って、それとなく止めようとした時もあったけど、でもしつかりと着実に実力をつけていつている今の簪ちゃんを見てみると、

それに加えて、箒ちゃんという親友に如月さんという信頼できる人を、簪ちゃんは得ている。自分の力で得た、信頼できる人達を。

「でも、今までの話を聞いていると、本当は仲直りしたいようにも聞こえますが」

それまで静かに聞いていた影内君が、唐突に言葉を発した。

そして、その言葉は確かに私の心情を言い当てていた。

「……いやに言ってくるわね」

見透かされている事に対するささやかな苛立ちを込めた私の言葉に、影内君は「そうですね」と肯定しつつ「ですが」と続けた。

「俺が確実に言えることがあるとすれば。

仲直りしたいのであれば、できる限り早いうちにしてしまう事をお勧めしますよ」

それだけを言って、影内君は生徒会室を出ていった。

だけど、影内君が出ていく直前、その時に呟いていた言葉は、私には聞こえなかった。

「……簪が、俺のようになる前に………」

第四章（4）：降る雨、吹き抜ける風

S i d e 楯無

影内君が出て行ったのとほぼ同時、入れ替わるように生徒会室に虚ちゃんが再度入ってきた。

その顔は、神妙だった。

「お嬢様、どうでしたか？」

「ひとまず、デユノア社については再調査ね。」

どうにも腑に落ちない部分が多いってことで意見が一致したわ」

「分かりました。すぐに始めます」

「お願い」

この事については比較的すんなりと話が進み、家の方にも連絡が行った。

だけど、ある意味でこの先が本番だった。

「それと、影内さん、アーカディアさん、バルトシフトさんの三名に対する調査結果なのですが……」

「やっぱり、何も出ない？」

「はい……」

ある意味でデユノア君以上に身元が不祥な存在である、影内君を含めた三人について。

最初は普通に身元調査をしたけど何も出てこず、入国ルートから割り出そうにも何も出てこず、それ以外に手を尽くしても何もわからない。

（……少なくとも、影内君個人に関しては何も問題無さそうなんだけどねえ）

あくまで感覚的な部分が出てきてしまうため、不確定ではあるけど、関わってみた感じだと、影内君個人に関してはあまり警戒しなくてもいいように思われる。

だけど、個人と組織の方針については別。もし仮に彼の所属する組織が何か企んでいたとしても、今の状況では何もわからない。

「余計ないざこぎを避けたかったから、あえて所属組織については聞

いてこなかったけど、そうも言ってもらえなくなってきたかしら」

「ですが、それで協力関係が崩れてしまうと……」

「そうなのよねえ……」

悩ましいのはその点で、正直私達の側に付いてくれている戦力だけで考えると、あの化け物たちへの対処が極めて厳しい事になる。その点、影内君という戦力の重要性は並大抵のものではない。

けれど、その戦力が所属している組織がどういったものなのか、それが全然分からない。

「まあ、そこはゆつくりと進めていきましょう。」

今まで何も起こしていないし、私達に要求する情報も、基本的にあの化け物関連か、流出しているかもしれない機体のデータに関するものだけ。当面は大丈夫でしょうから」

「分かりました」

そこで一旦、影内君に対する話題は打ち切った。

でも、この先に私としてはもう一つ調べておきたいことがある。

「それと、虚ちゃん。」

もう一つ、調べて欲しい事があるんだけど……」

「簪お嬢様の専用機の事ですか？」

虚ちゃんの思わぬ一言に、私は一瞬硬直した。

「な、なぜそれを……」

「先程、本音から話が来ました。」

そして、今の状況でお嬢様が調べて欲しいなどと言いそうな事はそれしかありませんから」

何か色々な意味で負けた気がしたけど、それを気にしては話が進まない。

「ここは気を取り直して、次に行きましょう。」

「そ、そうね。」

「それじゃあ、早速……」

「如月さんに連絡しますか？」

「それはダメ！」

「はい、簪お嬢様に知られるからですな」

確かに虚ちやんの言う通りだし、そこは認めざるを得ない。

(でもそれは、ちよつと怖いといつかなんというか……)

言い淀んだ私を見かねたのか、虚ちやんが話し始めた。

「だから、いい加減素直になつて直接簪お嬢様と話しあいましょうつて……」

「それはそうなんだけど……」

この後、小一時間ほど私は虚ちやんに説教されることになった。

Side シャルル

「ハアアアアアアアア！」

ドンツ！ ガガガガ！ ガギユ！ ガンガンガンガンツ！

模擬戦の約束をした日の放課後。僕は、生徒会の用事が終わった影内君と約束通りに模擬戦をしていた。

「引き出しの多い機体だな！」

僕の機体、《ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ》はカスタム前の機体である《ラファール・リヴァイヴ》の^{プリセット}基本装備を一部外し、後付け装備用に^{パズスロット}拡張領域を原型機の2倍にまで拡張、その搭載量は追加装備だけで20になる。

今の攻撃は追加武装の内アサルトカノン《ガルム》、重機関銃《デザート・フォックス》、連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》、55口径^{アサルトライフル}突撃銃《ヴェント》を僕の得意技術でもある戦闘中の高速武器切り替え、^{ラピッド・スイッチ}高速切替を使つて順に撃ち放つた。

普通の相手なら複数種の弾丸への対処を行うのは難しい。なにによりそれぞれの弾丸への対処が違う以上、複数の対処を正確かつほぼ同時に行うのは本来並大抵の事じゃない。だからこそ、この攻撃方法なら通じると踏んでの事だった。

なのに、結果は余りにも呆気なく突破されるという始末だった。まず、大口径のキャノンのようなもので大半の銃弾を消し飛ばした後、ステップしつつ大剣を構えて消しきれなかった弾丸を防ぎつつも回

避していた。

さらに、今度は鞭のようなものを使い牽制していた。さすがにそれを避けるには苦勞しないけど、その後に来るライフルの射撃が地味に避けづらくなるのがつらい。

「影内君のほうが凄いけど、ね!」

鞭のような装備は避けつつ、ライフルは左手のシールドで防いでいく。同時進行で右手に近接ブレード《ブレード・スライサー》を呼び出し、接近してきた影内君の大剣を火花を散らしながら受け流していく。

(武装構成は一部除いて量産機っぽいのに、この攻撃性能はなんなの!?)

驚異的なのは武装構成ではなく、一つ一つの基礎性能。武装の威力も高い上に、それらを支えうる機体の基礎性能も十分に確保されているように思える。

そして、それを扱う影内君自身の腕前も十分以上。というより、下手な代表候補生以上は強いと思う。至近距離で銃撃を行って反撃をしようにも、推進器らしい翼と特徴的な四つ足を動かしての巧みな重心移動を併用しての回避能力は途轍もないものがあり、早々には当たってくれない。

「けど……僕にも、ささやかな意地があつてね!」

とっさに両手の装備を《ヴェント》に切り替え、フルオートで連続射撃。回避した先へと移動して《ブレード・スライサー》を振るう。数回斬り合ったけど、さすがに近接戦で勝ち目はなさそうなので、すぐに《レイン・オブ・サタデイ》に切り替えて至近距離からの射撃。

今度は何とか当てれたけど、有効打にはなっていない。けど、一筋縄でいく相手とも思っていないから気にすることもなく、次の攻め手へと移っていく。

「そちらも、斬り合いと銃撃の切り替えが上手いな……攻め手に移りづらくてしょうがない!」

「それでも押している人の台詞じゃないよ、それ!」

私の戦術は砂漠の逃げ水と呼ばれてる。射撃と格闘を織り交ぜて、

押ししても引いても一定の距離と攻撃リズムを保つ事を基本としている。本来なら攻防で安定した戦術なんだけど、影内君はズバ抜けた反応速度で私の戦術に対応してくる。

(本当に、なんで今まで無名だったのさ!?)

予想をはるかに上回る実力者を相手に、僕も持ちこたえるので精一杯だった。

それから攻防を繰り返すこと数分。

私のSEは、ついに底をついた。

Side 一夏

デノアとの模擬戦を終え、それからもうアリーナの使用時間が残り僅かだったこともあり、それぞれに撤収の準備を始めた。

異変が起こったのは、その時だった。

——キイイイイイン!!

「……ISの飛行音?」

「此方に向かってきていますわね」

鳴り響いたISの飛行音。近づいてくる音の方に目を向ければ、その正体はすぐに分かった。

「ね、ねえ! あの機体って!」

「ドイツの第三代機、だよね……?」

「まだ本国での試作段階のはずじゃ……?」

周囲の生徒たちのざわめきも大きくなって来たころには、もう目の前まで来ていた。

搭乗者はラウラ・ボーデヴィツヒ。その身には、漆黒を基調としたISを纏っている。

「影内一夏、私と戦え」

「いきなりだな……理由を聞いてもいいか?」

「貴様が知る必要はない」

「そう言われてもな……」

彼女の態度は頑なであり、おそらく言葉だけで断るのは困難だろう。かといって、他の生徒が撤収の準備をしている手前、ここで戦闘をするわけにはいかない。

だが、俺がその先を考える前にボーデヴィツヒが動いていた。

「フン……ならば、戦わざるを得ないようにしてやる！」

言うや否や、彼女はいきなり肩に装備された大口径砲を向けてきた。

回避すれば後ろへと砲弾が逸れ、後ろで撤収しようとしている他の生徒が巻き添えを喰らう事は避けられない。防御したとしても、弾かれた砲弾がどこへ行くかは不透明であり、最善の策とは言えない。

ではどうするか。答えは、簡単だった。

「フッ！」

軽く息を吐いて四つ足全てで跳躍、同時に推進器を吹かせて一気に距離を詰める。

同時に、ある行動も挟んでおく。

「フ……直線での行動なぞ！」

一方、ボーデヴィツヒは何も気にせずに此方へとその大口径砲を撃とうとした。

が、それはすでに対策済みだ。

「……何!？」

そう。すでに大口径砲の内部には神速制御を応用して投擲した《機竜牙爪》^{ダガ}が刺さっている。

ボーデヴィツヒの表情から察するに、内部の異常を検知して発射不能となった、と言ったところだろう。

「チイツ！」

ボーデヴィツヒが今度は両手を構えて何かしようとしたが、その前にすでに接近は終了している。

四つ足を使ってボーデヴィツヒの機体の両足を挟み込み、一度空中で前転してから地面に叩き付けた。

「ガハッ！」

叩き付けた際の衝撃が十分通じているのを確認してから、声をかけ

る。

いい加減、俺も

「もうアリーナの使用時間も終了間近だ。

勝負なら後で正式に時間をとって相手をするから、この場は引いてくれ」

「貴様……ここまでやっておきながら、引けだど!？」

侮辱する気か!!？」

一向に引く気の無いボーデヴィツヒに、内心頭を悩ませた。

「私は……教官の教え子として、力を示さねばならない!!」

このような醜態を晒したままで、終われる物か!？」

この叫びに、何処かで不可思議な納得も覚えた。

(……あの師匠にして、この弟子ありか)

おそらく、ボーデヴィツヒは織斑教諭の教えを歪んだ形で、あるいはどこかが抜け出たまま受け継いでしまったのだろう。だが、力が全て、敵を作ること躊躇していない、自分にとって価値ある事以外がまるで目に入っていない。そういったところは、よく似ていた。

だが、思考していたのはそこまでだった。今はこの場をおさめることが先決だ。そう思い、何とか説得しようとした時――

「……ドイツの軍人って、その程度なんだ」

――横から聞こえてきたのは、酷く冷め切った声だった。

「何だど!？」

「だってそうでしょ。」

君は、自分の行動が織斑先生の評価を貶めかねない事になっていくって気づいてないの?」

声の主は、デュノアだった。

彼女の様子を横目で窺えば、酷く冷め切った……それこそ、哀れみの感情さえ向けているような様子さえ見受けられる。

「君の行動は、厳密に言えば君が織斑先生の名前を出して行動している時点で、君が織斑先生から色濃い影響を受けているっていうのは誰でも想像できることだよ。その行動も、必然的に織斑先生の教えを受けての事って考えるのは簡単だね。」

その行動が、極端な言い方をすれば誰も模範になるような行動だったら織斑先生の評価も間接的に上がったろうね。けど、その逆を言えば君の行動が粗悪なら織斑先生の評価を間接的に下げていることになる」

「貴様……言わせておけば！」

ボーデヴィツヒがデュノアを睨むが、対するデュノアに怯んだ様子はない。

「それに、君の機体は、確かドイツで開発されていたイグニッション・プラン次世代機開発計画用の試作ISだね。さらに君は織斑先生の事を『教官』って言っていた。軍事機密レベルの試作機を使っていてその呼び方ってことは、つまり君は自分がドイツ軍の軍人だって喧伝しているようなものでしょ。

その君のとつた今の行動は、どう考えても評価を下げることにしかならないよ」

そこで一息置いたうえで、デュノアは畳みかけるように言い放つた。

「僕は、曲がりなりにも小さくても、デュノア社とフランスを背負って此処にいる。

君に、その自覚と覚悟はある？」

静かに、だが堂々と言い放つたその一言には、見る者を何処か圧倒する風格が備わっていた。

「それと……君がいくら望んでも、この場で決着を付ける事はできないよ」

『其処の生徒、何をしている！』

学年とクラス、出席番号を言え！」

そして、タイミングよくスピーカーから大音量の教員の声が聞こえた。

ようやく騒ぎを嗅ぎつけたらしい。今度からはもう少し早く気付いてほしかった。

「フン……今日は引いてやる」

「ここまでになって、ようやくボーデヴィツヒは引く気になったよう

だった。

(それにしてもな……)

だが、今この時引つかかっていたのはデュノアの台詞。

(負い目のある……ましてや、無理矢理やらされている人間が、あそこまで言う事は無い。しかも、この前見た資料の通りとしては欧州周りの事情に詳しくすぎる。)

一体、何があつたんだ?)

引つかかりと疑問を感じつつも、その時は何も聞かずに終わらせた。

(だがまあ……好ましいものでは、あつたな)

出会った形さえ違えば、何の疑いも無しに友人になれたかもしれない。

今の行動は素直に、そう思えた。

Side 鈴音

(……織斑先生の教え子、ねえ)

ボーデヴィツヒの発言や行動を見聞きして、納得できる部分も多々あつた。

正直、この学園で見してきた織斑先生の行動や態度を、良くない意味で受け継いでいる部分が多々見受けられる。

(近いうちに嵐が来そうね……)

多分、ボーデヴィツヒはまた影内を狙ってくることでしょう。

今回だけでは、終わらない。そんなことくらい私にもわかる。

(まあ、いいわ)

影内を狙ってきてはいるけど、周囲に被害が出ないとは限らない。その矛先が、もし私か私の友人に向けたとしたら……その時は、叩き潰すだけ。

もう二度と、奪わせたりはしない。

第四章（5）：重なる不運

S i d e 一夏

（なんでこうも厄介事が立て続けに起こるのか……）

内心で少し愚痴りながら、廊下を少し速めに歩いていった。

ボーデヴィツヒとのいざこざの後、その時のアーナの責任者を勤めていた教員の一人に口頭で簡単に経緯を説明することになり、それが終わってからある部屋に向かって進んでいた。

場所は生徒会室。用件は二つ。簪の専用機についての事と、デュノアについて追加で分かった事について。

（少々遅れているし、なるべく早く速く行くか）

少し気持ちが逸っていた事もあり、自ずと急ぎ足になる。

だが、その足も途中で止まる事になった。

「……ぜです、教官!？」

なぜ、こんな所で教師など!!」

「だから、何度も言わせるな。

私には私の役目がある。それだけだ」

聞こえてきたのは織斑教諭とボーデヴィツヒの声。ちょうど曲がり角の先で言い争っているみたいだった。息を殺して様子を伺うと、廊下を挟むように立っている。

だが、それは正直言ってもいい。重要なのは言い争っている場所が俺が進もうとしている先であり、そして二人が廊下を挟むようにして向かい合って立っている以上、そこを通過するときは嫌でも二人の目に留まることになる。そして、ボーデヴィツヒとは少し前に問題があったばかりであり、織斑教諭も今となっては会いたくはない相手に入る。

当然、この二人の間に割って入って行くのは得策とは言えない。止むを得ず傍らで休みつつ、この二人の会話に聞き耳を立てた。後で何かの役に立てばいいのだが。

「このような極東の学園で、教官に一体何の役目があるのです!？」

どうか、どうかお願いします教官。もう一度、ドイツに来てくださ

い。ここでは、教官の能力の半分も生かせないではないですか!？」
「それは決めるのはお前ではないし、何度も言うが私の役目があり、必要だからやっている」

「この学園の者たちの何処に、教官の時間を割く価値があるのです!?」
力の象徴であり、今や世界のパワーバランスの代名詞ともなっている……そして、なにより、その気になれば他の兵器を圧倒しての勝利すら約束するISを、ファクションか何かのように……そんな危機感も無く程度も低い者たちのために、教官の時間を使うなど……!」

少なくとも、この学園に入って以来初めて見るほど饒舌に語るボーデヴィツヒの姿に、色々と察しがついた。

(なるほど……織斑教諭を連れ戻しに来たわけか)

これまでの言動からして、彼女がドイツ軍内での織斑教諭の教え子であることは察せる。そして、どうしてもドイツ軍に戻りもう一度指導してほしいために、わざわざこの学園にまで来たのだろう。だが、織斑教諭にその意思は無いらしい。

(……織斑教諭がボーデヴィツヒの提案を受け入れてくれれば、俺としては色々と楽になりそうだが)

織斑教諭が何を思っここに居るのかは知らないし興味もない。が、仮にボーデヴィツヒの言う通りにすれば関わる機会が激減することとは確実なので、俺としては機体の押し付けを始め様々な問題が離れていくことになるのだが。

今の応答を見ている限り、その可能性は限りなく低そうなので期待はしないけれども。

「……いい加減にしておけよ、小娘」
「っー」

一瞬だが殺気さえ乗せて放たれた千冬の言葉に、あれほど饒舌だったボーデヴィツヒの言葉が途切れる。自身を言葉で押しつぶそうとでもしているような重圧を伴う師の言葉を受け、彼女はたじろいでいた。

「少し会わない間に、随分と偉くなったな。十五歳で選ばれた人間気取りとは」

「わ、私はそんなつもりは！」

明らかに恐怖していることが読み取れる態度で、ボーデヴィツヒが何かを言おうとした。

その内にあるのは、二種類の恐怖だろう。単純に圧倒的な力を前にした恐怖と、自身にとって絶対的な存在から見放されることに対する恐怖。

「これでも私は忙しい身なのでな。

お前も、さっさと部屋にでも戻れ」

「……はい」

声をいつもの調子に戻し、織斑教諭がボーデヴィツヒに告げた。対するボーデヴィツヒは完全に沈んだ状態で、一言返事した後は何も言わずにその場を去っていった。

「……さて、いつまで覗いている気だ？」

「ただ単に話が終わるのを待っていただけなのだが……」

苦笑しつつ、その場を後にしようとする。話しが終わって道が空いたので、この場に止まる理由もない。

そのまま通り過ぎて目的地に行こうとした、その時だった。

「お前は……ラウラの事を、どう思う？」

唐突に織斑教諭が言葉を紡いだ。

その言葉に律儀に答える義理も無いが、いくつかは言いたいことがあったので言っておくことにする。

「先を急ぐので手短にですが……兵器としての側面からISを見ている事には好感を覚えますね。少なくとも、現状ではそのように扱われているわけですし。」

ですが、それだけです。その他の部分に関しては、良くも悪くも織斑教諭の考えから色濃い影響を受けているように見受けられます。妄信か狂信と言い換えてもいいですが」

「何……？」

「では、先ほども言いましたが先を急ぐのでこれで」

後は何も話さず、その場を足早に去っていく。

元々先を急いでいるのだし、別にいいだろう。

「本日二度目だけど、生徒会室にようこそ」

様々な問題が起きはしたが、それでもなんとか目的地である生徒会室についていた。そして、本日二度目となる更識会長からの出迎いの言葉をいただいていた。

今現在この場に居るのは俺と更識会長、虚さんと本音の四人。最初はこの四人でデュノアについての話を聞き、次に如月さんから簪の専用機について詳しい話を聞けるとの事だった。

「まず、デュノア君について分かった事から。」

虚ちゃん、お願い」

「はい、お嬢様。」

まず、学園長より許可を貰い学園側の資料からも調べた結果、フランスについて不信な点が浮上しました。これをご覧ください」

虚さんの言葉とともに配られた資料に記載されていたのは、ある生徒に関する資料だった。個人に関する部分が隠されているが、フランスの代表候補生として転入してくる予定だった人であることが見て取れる。

「……デュノアではない？」

虚さん、この人は？」

「フランスから留学してくる予定だった代表候補生みたいなのですが、直前になって留学を取りやめています。」

理由としては専用機の開発の遅れとされていますが、その説明にも後述の調査結果と合わせていくつか不審な点が見られます」

資料を捲るように促され、ページを進める。

「まず、この資料にある人物に渡されるはずだった専用機についてですが、」

彼女について調査した結果、第2. 5世代機に分類される機体であることが判明しました」

「2. 5世代機？」

「第三世代機のテストベットとして、既存の第二世代機に第三世代兵装を積んで使えるように調製しただけの機体ね。

基本性能的には第三世代機に劣るけど、既に確立された技術で製作された機体だから信頼性と安定性に優れているし、もし仮に何か問題が起こったときに破棄も容易。加えて、問題があつた時の原因は大体追加された第三世代兵装だから、純粋な新型の第三世代機よりも原因の特定がしやすいっていう利点もあるわ」

更識会長の説明に、機体については理解できた。

だが、同時に新たな疑問も出てくる。

「……デユノア社は、確か第三世代機の開発の遅れが原因でフランス政府からの支援が打ち切られていたんですね。なのに、なぜ第三世代兵装が？」

「それについて、興味深い資料が見つかってね」

更識会長に促されて、資料をめくっていく。

そこにあつたのは、《ラファール・リヴァイブ》を基に改修したと思われる第三世代機があつた。詳しい事は分からないが、それでもこれが存在しているというだけで疑惑としては十分である。

「フランスが計画していたと思われる第三世代機に関する資料です。」

機体についての詳細な情報は不明ですが、フランス政府はデユノア社と共同でそのISの開発を進めようとしていたと思われま

す」

「次世代機開発計画から外されたのは本ただけで、その後しっかりと第三世代機の開発をしているあたりはさすがね。しかも、高性能の追求を基本方針としていた欧州各国の次世代機開発計画の試作機と違って、すでに確立された量産機の技術を惜しげも無く使っているものだから操縦性や整備性では群を抜いてるんじゃないかしら。」

でも、なんでかは分からないけどこの計画も凍結されてるのよねえ……」

それはそれでわからない話だった。

フランスにとっては起死回生ともなりうる可能性のある機体の開発を、わざわざ自主的に凍結。企業側に問題があつたとしても、フランスの状態を考えれば無理やりにも開発したいはずだ。

「さらに、本番はここからよ」

「シャルロット・デュノアとデュノア社についても追加調査を行った結果、このような資料が発見されました」

示された資料に写っていたのは、ある意味で意外過ぎる代物だった。

「……デュノアの、企業代表の申請書？」

「そうよ。」

この資料が本物だとすると、デュノア君は一度はデュノア社の企業代表になろうとしていたことになるわ。にも関わらず、その申請を突然取り下げ、その後には国家代表候補生の資格を得たことになる」

今までの話を纏めて考えると、この代表候補生は一度は開発の目途が立っていた専用機が突然開発打ち切りになったために留学を取りやめたことになる。だが、機体の開発凍結事態に不審な点が見られるし、そもそもとして専用機の開発が遅れても従来型のカスタム機でそれなり以上の性能を叩き出せる《ラファール・リヴァイブ》がある以上、一時的な代替機としてそれを使ってもらい、完成した専用機に代替機で集めたデータをフィードバックするなどして方法はあるはずだ。

そして、その後釜にデュノアをスパイ目的でこの学園に留学させた事になる。それも、わざわざ企業代表から国家代表候補生の後釜にしてである。だが、その細部を見れば不審な点が多々出てくるうえ、やっていることの内容にもリスクが大きすぎる。

「……何と言うか、デュノアのスパイ行為以外にも何か隠してそうですわね。」

ついさっきの模擬戦の時も、色々とあったのですがどうも無理矢理やらされているとは思えない台詞がありましたし」

「そつちも聞き及んでるわ。確かに、無理矢理やらされている人の台詞じゃないわね。」

いずれにせよ、こっちは追加で調査するわ」
「お願いします。」

対応については変わりないですか？」

「ええ。その方向でお願い」

ひとまず、デユノアについて新しく分かったことはここまでらしかった。

最早怪しきしかないが、その裏に何かあるのかはいまだ読み取れない。そういう意味では、まだまだ警戒は解けなかった。

「さて、デユノア君についてはここまでね。」

次は簪ちゃんの専用機についてよ」

その言葉とともに、何処かと通信が繋がった。

モニターに通信先の人が映った。

『こうして直接話すのは初めてだね。』

僕は如月網太。倉持技研で研究員やっついていて、剣崎君の専用機の整備主任と更識君の専用機の開発にも関わっている。

それと、今君が身に着けている腕時計型通信機と多機能仮面も僕が作ったんだよ』

「お世話になってます。」

それで、今日は確か……」

『うん、僕の方から更識君の専用機《打鉄式式》の開発凍結までの経緯を説明するよ』

その一言を言ってから、如月さんは一回言葉を切った。

そして、少しの間をおいてから語り始めた。

『事の発端は、おそらくは君も知っているであろう《白式》だったんだ。

まず、僕も所属している《打鉄式式》の開発チームのほうでは順調に開発が進んでいた。一部を除いた機体フレームの部品と《打鉄式式》専用の特殊仕様部品は大体出来上がっていたし、更識君個人に合わせるためのデータも通常の《打鉄》を使って十分に集まっていた。後は、残っている部品の調達と機体そのものを組み上げて第三世代装備の《マルチ・ロックオン・システム》と、ソフトウェア周りの調製を残すのみとなっていたんだよ。

でも、そこで政府が《白式》を開発するよう言ってきた。世界唯一の男性IS操縦者である君に渡すためと言ってね。だけど、さすがに倉持技研でもIS二機の同時開発はできなくてねえ……。結局、所長

は《白式》を最優先にして、それに全ての技術者をつぎ込んだ。私達《打鉄二式》開発チームも含めてね。ただ、僕も含めて直接《打鉄式式》に関わっていた人は開発の全面的な凍結に反対して、まあ、揉めてね。その時は一時的な凍結のみで後から開発を再開するってことで決着はついていたはずなんだ』

あの機体が関わっていたのかと思うと少々複雑な思いもあるが、今はそれはいい。

重要なことは、《打鉄式式》に関する諸事情だ。

『だけど、その後になって新型量産機の開発計画が持ちあがってね。

その量産前の機体として、《白式》が選ばれたんだ』

「あの途轍もなく『世界最強』用とでもいうべき機体が?」

更識会長が驚きとも呆れとも似つかない声で疑問の声を上げたが、声には出していないだけでその意見については俺も深く同意していた。

『まあ、実際に機体性能そのままで量産したら使う人はほとんどいないだろうね。シエアで考えても《打鉄》より遥かに小さくなるだろうし。

だけど、さすがにそこまで馬鹿じゃなかったみたいだね。《白式》に搭載されている専用装備の《雪片式型》には、第四世代に分類される技術が使われている事がわかってね』

「第四世代?」

疑問の声を上げた俺に対し、如月さんは特に嫌な顔をするでもなく答えてくれた。

『第二世代が装備の換装を前提に汎用性を向上、第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標としているのに対して、第四世代は装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代だよ。今は机上の空論とされているんだけどね。

で。さつきも言ったけど《白式》の《雪片式型》には、第四世代機フソノフ・アピリテイに類する技術が使われていてね。最初から単一仕様能力の《零落白夜》が使えるのはその恩恵なんだ。

今現在の所長の構想としては、すでに各国が開発を開始している第三世代機を開発して競争するより、手元にある第四世代機を解析して技術的に一足先に行きたいみたいだね。しかも、装甲部分にこの技術を使えば最初から単一使用能力を使える量産機が手に入るようになるから、それはそれで売りになるし。

そのために、第三世代機に分類される《打鉄二式》の開発を凍結して、新型量産機の開発に尽力したいみたいでねえ……』

「……単刀直入に聞きますが、出来るんですか？」

今の話聞いていて、単純に疑問に思った。

そもそもとして、今話を聞けば解析しようとしているものが技術的に難しいものと解釈できる。そして解析が出来なければ、新型量産機の計画自体が最初から潰れているという事になる。

『機械的な解析がちゃんと終わって、モニターデータさえきちんと録れれば、後々他の機体でも同じ機能の再現くらいは可能性があると思うよ。』

でも、そのモニターデータは一つも無いし、解析するにしても膨大な時間と多大な費用が掛かるからしばらくはそれ以外何もできなくなるだろうね』

可能性が皆無ではないという返答を聞き、言葉に詰まる。

(この線から開発再開に導く材料を探すのは困難か……)

新型量産機の開発が完全に行き詰まれば、あるいは。そう考えたが、現状を鑑みるにその可能性は低そうだった。

「……一応聞いておきますが、モニターデータをとるのに企業代表である剣崎が駆り出される可能性は？」

『完全に無いとは言えないけど、可能性は低いと思うよ。』

もう既に対外的に大々的に宣伝している別な専用機が支給されるし、わざわざ広告塔を潰すような事はしなないと思うけどねえ……。もしモニターデータをとろうとするなら、最悪外部から誰かを招くという可能性も否定できないし』

モニターデータ方面もあてにできないことがこの返答で分かった。同時に、ある可能性にも思い当たる。

(まさか、な……)

某世界最強の事が一瞬頭をよぎったが、今はそれを気にしている時ではない。

「如月さん、《打鉄式》を組み上げるのには何が必要ですか？」

唐突に、それまで沈黙を守っていた更識会長が言葉を紡いだ。

その声音は、ひどく真剣だった。どれだけ妹の事を大事に思っているかが伝わってくるような気がした。

『ひとまず、未だ揃っていない部品の調達が必要だね。推進系と駆動系の部品だよ。それと、機体そのものの組み上げが出来る設備と機材。最後に、ソフトウェア……というより、機体のプログラミングが出来るだけのコンピュータとそのため接続ケーブル類かな。』

とは言っても、最悪、部品は流用するアテがあるからいいし、ソフトウェア系の開発は相応に上等なコンピュータがあれば出来るから何とかなるか。その気になればコンピュータ周りは僕が使えるモノで済むし。

だから、この中で問題になるのは機体そのものの組み上げを行うための設備と機材かな』

「機材と設備ねえ……」

更識会長はそれだけ呟くと、何かを考え込んでいた。

「……虚ちゃん、確か整備課って機体の分解から組み立てまで一通り行えるだけの設備があったわよね？」

「確かに、ありますが……お嬢様、まさか!？」

「言い訳を考えればいいだけよ。」

大義名分があれば案外なんとかなるものだし」

そこまで言われたところで、俺も更識会長が何を考えているのかは大凡推測が付いた。

そして、俺としても一つ思いついたことがある。

「如月さん、一つ質問よろしいでしょうか」

『何かな?』

「さっき言った第四世代に類する技術の解析ですが……話を聞くに、解析すべき部分は《雪片式型》だけですよね？」

『まあ、そうだね』

「《白式》の扱いはどうなるのでしょうか？」

『今は実質、宙に浮いている状態かな。』

遠慮なく言っちゃうと、別に機体がアレじゃなくても、コンセプト上の大元になった高速機動仕様の《打鉄》に《白式》のコアを入れれば済む話だし』

そこまで聞いたところで、ある提案をすることにした。

「じゃあ、こんな事はできませんか？」

第四章（6）：専用機

Side 楯無

『……中々面白い事を考えるね。』

部品のアテは別につけてたんだけど、そっちのほうで進めてみようか』

「そのように言っていただけなら良かったです」

学園の設備を使おうとした私も大概だったけど、この二人は多分輪をかけて酷かった。目の前で行われた会話はそれだけの衝撃のある会話だった。

とは言え、内心私も止める気なんて全く無いあたり人のことは言えないのだけだ。

「更識会長のほうもよろしいでしょうか？」

「ええ、構わないわ。むしろそれで行きましょう。」

簪ちゃんの専用機を放り投げた人にはそれ相応に吠え面かいてほしーしー』

『僕のほうでも少し声をかけてみるよ。』

《打鉄式式》に直接関わっていた面々は結構不満溜まってる人多いしねえ……！』

少なくとも、この場においての意見は纏まった。

『それじゃあ、僕はもうそろそろ失礼するよ。』

さっさと行動して、一刻も早く打鉄式式を完成させたいしねえ……♪』

如月さんが微妙に不気味な笑顔で宣言してから通信を切り、一時、静寂が生徒会室に訪れた。

だけど、それも少しの間の事。

「それでは、もうそろそろ戻らせていただきます。」

今後ともよろしく願います」

「ええ、こちらこそね。」

今日はありがと」

軽く挨拶だけした後、影内君は帰っていった。

「……お嬢様、お茶をお入れしましょうか？」

「お願い」

一人が居なくなり一人分の声が聞こえなくなった生徒会室で、私たちは一息入れ始めた。

この後のことを決めながら。

S i d e 一夏

(さて……一度、簪には謝らないとな)

考えても見れば、『白式』の一件が無ければ簪の専用機に被害が波及することもなかった。その意味では俺の不始末でもあるので、謝っておかねば。

ちようど、この後は様子を見るという意味も兼ねて色々と話すつもりだ。その時でいいだろう。

「つたく、まさかここまで大事になるとは……」

愚痴を言いつつ、簪の部屋に向かう事にしていた。

同時に、同室のデュノアに部屋に戻るのが遅くなる旨を伝えておく。色々と怪しい人物ではあるが、今はまだただのルームメイト。最低限の意思疎通はしておくことにする。

電話越しに「分かった」と返事を貰い、そのまま切ろうとした。が、それだけに終わらなかった。

『そういえば、部屋に織斑先生が来たよ。』

何か、話があるって言うってたけど』

危うく口から暴言が出そうになったが、何とかこらえて続きを促す。

「……分かった。」

内容については何か言っていなかったか？」

『ううん。すぐに済む話としか言っていなかったよ』

「そうか……分かった。」

部屋に帰るまでに寄るから、さらに遅くなる」

『了解』

そこまで話すと、互いに何言か言葉を交わしてから通話を切った。

「……さて」

今から行く簪の部屋での用事が終わってから、寮長室に行くとしてしよう。

今度はまともな話であればいいのだが。

Side 簪

「……簪、本気か？」

「うん」

最初は泣いていた。

今日はずっと落ち込んでいた。

でも、それじゃ何も変わらない。そのことを教えてくれた、そして実際に努力してみせた人がいる事も知っている異常、私もへこたれてなんていられない。

「そうか……正直、技術的なことは私には分からないから具体的に何を手伝えるというわけでもないが、出来る事があつたら言ってくれ。

出来る限りは手伝う」

「……ありがとう、簪」

一度決めた以上は、止まる気はない。とにかく、やれることから一つづつ始めていく。

でも、それを応援してくれる親友がいるっていうのは素直に心強かった。

「とは言え、まず何から始める気だ？」

「えつと……確か、如月さんの話だと《打鉄式》が今抱えている問題は、部品の一部の未調達と、機体その物の組み立てが終了していない事。そしてソフトウェア……つまり、プログラム周りがまだ未完成って事。

この内、手持ちの物で解決できそうなのはプログラム周り。だから

ら、そこから始めようと思う。

さすがに《マルチ・ロツクオン・システム》その物を作るのは無理だから、既存のプログラムを引っ張ってきてそれを改造して、って言う形になると思うけど」

私の答えに箒は少し考え込んだ後、箒はさらに重ねて聞いてきました。

「そうか……。そうになると、プログラム方面では特に手伝えそうには無いな。元々、その手の事は私の不得意とする分野だし。」

部品の調達は何か目処か心当たりはあるのか？」

「えっと……。さすがに思い当たらない」

「使えるんだったら、《陽炎》の予備部品とかどうだ？」

如月さんも《打鉄式》のためだといったら用意してくれそうだし」箒の言った内容に、少し驚きました。

確かに、機体そのもののコンセプトで言えば《陽炎》と《打鉄式》は機動力、運動性重視という意味で被る部分があります。だけど、《陽炎》が通常の《打鉄》のカスタム機であるのに対し、《打鉄式》は新規設計の部分も多い。使えなくはないけど、接続周りの調製は必要でしょう。

とはいえ、今の状況ではこの上なくありがたい提案です。

「いいの？」

それって、箒や如月さんにも……」

「私のことは気にしなくていい。」

それに。如月さんは元々完成させる方向で考えているようだったし、案外受け入れてもらえるかもしれないぞ」

「……ありがとう。」

如月さんに頼む時は、私も同席させてもらってもいい？」

「ああ」

そうして、私たちが話を纏めて行っている時だった。

コンコン

「あ、はい。」

どちら様ですか？」

「影内だ。入ってもいいか？」

扉をノックしてきたのは、影内君でした。

断る理由などなくむしろ色々と話したいこともあったので、箒と領き合ってからそのまま部屋に入ってもらいます。

「どうぞ」

「失礼する」

そう言って部屋に入ってくると、影内君は一回扉を閉めてから近場の空いていたところに座りました。

ひとまずお茶を出して一息入れてから話しをしていくことにします。

「ちよつと話があつてきたのだが、いいか？」

「うん、何？」

「いや……簪の専用機についての事なのだが」

その一言に、思わず動きが止まりそうになりました。

「実は、さつき如月さんの方から詳しい話を聞いてな。《白式》が絡んでいることも聞いた。

まず、意図しなかった事とは言え、俺の機体の問題を波及させてしまった事について。申し訳ない」

それだけ言うと、影内君は一回深々と頭を下げました。

影内君自身は悪くない事はすでに知っていたので、その反応に驚くと同時に慌てました。隣で一緒に聞いていた箒も予想外だったのか、目を丸くしています。

「か……影内君のせいじゃないのは知っているし、別にそんな……」

「いや、あれは俺の不始末でもあった。機体を早々に解体に追い込んでおけばよかったものを……」

「影内、それを言ってしまうと一応の企業代表である私の立場はどうなる。」

内情を全然知らなかったどころか、何もできてはいないというのに」

何か話が暗い方向に行ってしまったし、今話すべきことは多分それじゃない。そう思い、何とか話題の転換を試みます。

「か、影内君。」

その……まず、って言ってたし、話してそれだけじゃないよね?」
「ん、ああ……。まずは謝つといた方がいいかと思つてな。」

次の話だが。簀、部品の調達先の事だが、アテは?」

その話を聞いた時、つい先ほど話したばかりだった事もあつて私と
簀は顔を見合わせました。

ですが、特に隠し立てる内容でもないので素直に話したことをその
まま伝えることにします。

「えつと……。さつき簀とも似たような話をしたばかりで。」

で、如月さんに頼んで簀の《陽炎》の予備パーツを使わせてもらえ
ないか相談しようつて事になって……」

「そうか……。実は、さつき俺も同様の事を聞いてな。」

それで、少し考えた事があるのだが」

「考えた事?」

『それについては僕から説明しよう!!』

突如としてこの場にはいないはずの第四の声が響きました。

声の発生源は通信用ディスプレイ。声の主は、私達もよく知ってい
る如月さんでした。

『いや、さつきの影内君の提案の件なんだけど、意外なほどすんなり
話がつつてねえ。』

少し拍子抜けした位だけど、ま、僕としてはこの方向で進めるのが
いいかなつて思うんだよね。ただ、少し簀君にも手伝ってもらふ事態
になるかもしれないけど』

「私が、ですか?」

出来ることと言えば機体のテスト位なのですが」

『そう、まさしくソレをして欲しいんだよ!』

今一つ話が見えてきませんが、それは簀も同じみたいで少し困惑し
ています。

「すみません、如月さん。」

まず、何がどうなつたのかを聞きたいんですけど……」

『ああ、そうだったね。』

事の発端はそこにもいる影内君の出した提案でね。まあ、要約すると『《白式》を解体して機体部品を《打鉄式式》に組み込んで、第四世代装備としての《雪片式型》を別に試せばいいのではないか?』って内容だったんだ。

確かに、これらを別にする理由なんていくらでも思いつく。まあ、そこは僕が適当に所長相手に言っといたから、心配しないで。

まあ、一度は自分の専用機を開発中止に追い込みかけた機体の部品なんて使っていられるか、って事だったら方向転換するけど』

「私は別に……そんな……」

『OK, OK! じゃあ、決まりだ!』

先日とは打って変わってハイテンションな如月さんに少し押されかけるけど、内容自体は特に拒むところもない。確かに、一度は《打鉄式式》を開発中止に追い込みかけた機体ではあるけど、それをとやかく言っても始まらない。むしろ、

「如月さん。私のテストというのは、もしや……」

『《雪片式型》だね。』

一応コアも纏めてテストする必要があるけど、それ自体は高機動仕様の《打鉄》に積み込んで諸々のデータをとるから《陽炎》を弄る必要はないよ』

「良かった……」。

日程の方はどうなっていますか?」

『そこは調整中だね。追って連絡するよ』

そこまで聞くと、剣崎は頷いていた。

「如月さん。何から何まで、有り難うございます」

『いーやいや、前にも言ったけど、僕も更識君が《打鉄式式》を纏って飛ぶその雄姿を是非とも、是非とも! 見たいからねえ。』

それに、お礼だったらむしろこの提案を最初に思いついた影内君に言っておきなよ。

それじゃ、僕はこれで。アディオス!』

それだけ言うと、如月さんは一回通信を切ってしまいました。

「影内君、ありがとね」

「いや、俺は思いついたことを伝えただけで、他には何もしていない。むしろ、実際に動いてくれている人に感謝した方がいい。それと、俺もできることがあったら手伝うから言ってくれ」
それだけ言うと、影内君は部屋を後にしました。

S i d e 一夏

簪と箒との話がおおよそ纏まり、部屋へと戻る道の道中。ある部屋へと寄っていた。

寮長室、と呼ばれる部屋。はっきり言って入りたいとは全く毛ほども思わないが、呼ばれている以上はこの学園の一学生として応じないわけにも行かない。

その要件がこの学園の一学生として、ならよいのだが。

コンコン

「失礼します。影内です」

「入れ」

ノックをしてから扉を開け、部屋へと入る。

中にいたのは、当然と言えば当然の事ながら織斑教諭だった。

「それで、何の用件でしょうか？」

「いや……知り合いから、ISの試験をしてくれそうな人はいないかと話が来てな。」

できれば近接系の人がいいらしいが……」

「……言っておきますが、俺はやりませんよ」

俺はそう言ったが、織斑教諭は聞く耳を持っていないようで——
「そう言うな。」

今回は客員という事だから、別にお前の所属している会社の方針とぶつかる事もないだろう。試すISは前にも言った《白式》だが、お前の技能なら十分だ。

私としてもこの話自体は予想外の物だったが、お前の立場を変える必要が特に無いのであれば断ることもないだろう。それに、これは倉

持技研の今後の計画にも関わることが決まっているから、人助けという意味も込めて……」

——またあの機体を薦めてきた。

簞の一件もあり、もはやあの機体には忌々しい思いさえ抱いている。無論、《白式》自体が悪いのではない事は知っているが。

「……いい加減にしてください、織斑教諭。何度も言いましたよね？俺はそんな機体に乗る気はないって。

予想外とか言ってますけど、手を回していたりはしてませんよね？」

「いや……これは私としても本当に予期していなかった事態だった。

だが、別にそこは気にしなくてもいいだろう」

言葉をその通りに受け取るなら、確かに関係は無いのだろう。

もつとも、だからと言って許しがたい事には変わらないのだが。

「気にしますよ。それに、何度も言いましたがおれは乗る気はありませんので。

それに、その機体もいつまでその形のままあるか分かりませんし」

「何……？」

「どういうことだ？」

説明を求めてきたが、馬鹿正直に答える義理もない。ここで下手な事を言つて振出しに戻るの好ましくないし。

「さあ。その知り合いに直接確認すればいいでしょう。

それと織斑教諭。《打鉄式》って機体は知っていますか？」

「倉持のほうで試作している機体に、似たような名前の機体があったことは知っているが……それがどうかしたか？」

織斑教諭が食いついてきたので、自分の蒔いた種がどうなったのかも一応は言っておこう。

「倉持技研の方で製作される筈だった、日本代表候補生の専用機ですよ。

《白式》の開発が無理矢理捻じ込まれたために開発が一時凍結、その後は貴女が言った重要計画とやらを進めるために正式に開発凍結されかけている第三世代機です」

「それがどうした。私にもお前には関係ないだろう」

割と本気でこの時は殴り掛かろうかと思っただが、それをしたところで意味は無い。何とか堪え、次の言葉を吐き出す。

「彼女は少し前までルームメイトでしてね。随分世話になりましたよ。」

それでも、関係ない?」

「確かに悪い事をしたとは思うが、専用機の事はそいつと倉持技研の問題だろう。」

私は関与していないし、その事については認識もしていなかった。それで一体どうしろと言うんだ」

この瞬間、この人には何を言っても無駄だと確信した。

「……自分の行動がどういった影響を及ぼすか。貴女は、行動する前に考えたりなどしないんですか?」

自分の都合のいいように物事を解釈する人や、自分の思惑通りに事を運ぼうとする人は機竜側でもよく見てきた。だが、この人はそれがさも当然のように押し通る物と思っている分、余計に質が悪い気がする。しかも、悪気も無しにだ。

この話題を話すだけ無意味だと判断し、別な話題を持ち出すことにした。

「そういえば、前に出した問題は解けましたか?」

「……名字の事、か?」

「ええ」

最初から期待はしていないが、話の締め代わり聞いておくことにしよう。

結論から言えば、聞いたことが間違いだったかもしれないが。

「回りくどいことなどせず、言いたいことがあれば最初から口で言えばいいだろう。」

どんな意味なんだ、一体?」

この瞬間、割と本気で《アステイグ》の機攻殻剣ソード・デバイスを抜きかけた。が、すんでのところで押し止まる。

「……分からないのなら、結構です。」

それでは、失礼します」
それから、もう何も喋らずに部屋を出ていく。
もう、何も話す気にならなかった。

第四章（7）：鳴り響く雨音

S i d e 一夏

寮長室から部屋へと戻ったが、その時にはすでに結構な時間が経っていた。消灯までもそこまで時間があるというわけではないので、やることだけ早いうちに済ませるべきだろう。

「お帰り、遅かったね」

同室のデュノアに迎えられる。既にシャワーを浴びたとのことで、くつろいでいる。

「もう遅いけど、シャワー浴びる？ 一応すぐに浴びれるけど」
「助かる」

さすがに時間が遅かったことを考慮してか、シャワーが使える状態にしているらしい。

疲れはとりたかったので入る事にはしたが、念のために何も仕込まれていないかは調べる。結論から言えば特に何も無かったのでそのまま入ったのだが。

少しぬるめのシャワーを浴びながら、今までの事を思い出していた。ボーデヴィツヒとの一件、《打鉄式式》の問題とその顛末、デュノアに関する新たな疑惑、最後に織斑教諭の事も。

（……正直、任務の事だけに集中したいところだが。
そもいかなないのなあ……）

多分に諦めの様な物を含んだ溜息を吐きはしたが、それで状況が好転するわけでもない。

問題を片付ける手段を講じつつ、その日は消灯までの時間が無かったのもあって特に何事もなく終わっていった。

S i d e セシリア

「……で、今日はなんでか知らないけど箒と簪、本音は急用で別行動。影内は生徒会関連で遅れるみたいだから、先に始めちゃいませよ」

ボーデヴィツヒさんが影内さんに勝負を挑んだ日の翌日の放課後。いつものように特訓のためアリーナに集まった私ですが、その日は大半以上の人にそれぞれの事情があつていないか、後から来るかという時でした。最初からいた人は、私と鈴さんのみです。

「ええ。」

では、何から始めましょうか？」

「何時もメニューの大元を考えてるのは影内だけど、今は居ないしねえ……。」

とりあえず、軽い模擬戦でもする？」

「さすがに最初から模擬戦は……。」

そうして、鈴さんと訓練の内容について話し合っている時でした。

ドンッ！

鳴り響いたのは砲撃音。

それが自分たちを向いていると判断したのとほぼ同時、反射的に回避行動を取っていました。

「……いきなりね」

鈴さんが呆れながら、視線を砲弾が放たれた場所へと向けました。

その先には、ドイツの代表候補生と、その専用機にして第三世代機《シヴアルツィア・レーゲン》が佇んでいます。

「……一応お聞きしますが、何用でしょうか？」

「中国の《甲龍》とイギリスの《ブルー・ティアーズ》か？」

ちようどいい、私と戦え」

「いやよ。」

つていうか、やるにしても正式な手順を踏んだらどう？」

「昨日のデュノアさんの話が全く身になっていないご様子ですわね。程度が知れるというものですわ」

私たちの非難もどこ吹く風。ドイツの候補生は何も気にせず鼻を鳴らしたけでした。

「フン……負けるのが怖いのか？」

「……訂正してあげるわ。」

勝負したいんなら、まずは正式な手順を踏みなさい」

鈴さんが完全に呆れ声ですが、やはりドイツの候補生は気にしないみたいですね。

私も呆れ返りますが、同時に直感の告げるまま、《ブルーティアーズ》のビットを準備しておきます。

「なら……嫌でも戦うようにするだけだ！」

直後、あろうことか、ドイツの代表候補生は私達ではなくその後ろにいる無防備な他の生徒に向かって照準を合わせました。

当然、発砲すれば大惨事は免れません。

(一時期の私だってこんな事はしませんでしたわよ！)

こんなくだらない事を考えていられたのも短い間の事。内心で毒づきながら、咄嗟にビットを構えて引き金を引きます。

ビシユ！

回避行動を取らせ、発砲は阻止します。さらに鈴さんが衝撃砲で追撃してくれたおかげでこれ以上無関係な生徒たちには被害が生まれませんでしたわ。

代わりと言ってはなんです、私たちが済し崩し的に戦闘に突入してしまいましたけど。

Side 一夏

今回は純粹に生徒会としての仕事で呼ばれたがそれも無事に終わり、アリーナに向かって歩みを進めていた。

書類仕事自体は今となっては慣れたものなので特に問題も無いが、久方ぶりだったためか少し精神的に疲れのようなものを感じてもいた。

最も、訓練するにあたっては支障ない程度だが。

ドオオン……

「ん？」

聞こえてきた爆発音。

音源は向かおうとしていたアリーナの方。

「……一体なんだ!？」

反射的に毒づいたが、意外にもその言葉に答えてくれる女生徒が居た。

「ぼ、ボーデヴィッツヒさんが第三アリーナでオルコットさんと凰さんに!」

「ッ! すまない、誰か先生呼んできてくれ!

余裕があつたら織斑教諭も!」

「わかった!」

答えた女生徒も元々そのつもりだったのか、慌てて走り去って行く。

だが、俺はもうそちらを見ていない。会話が終わると同時に、アリーナに向かって走り出していたから。

S i d e 鈴

まさかの無防備な生徒をロックオンするとかいう暴挙をやらかしたドイツの候補生を相手していたが、正直言って状況は余りよろしくない。

なにより、コイツは周辺を全く見ずに戦闘しているものだから流れ弾がまだアリーナにいる他の退避していない生徒の方に流れかねない。

必然的に、私たちの動く範囲は限られる。

「やりづらいですわね……ッ!」

「さすがはあの人の教え子、って言ったところかしら」

「フン……その程度の腕前で、代表候補生か? 笑わせる!」

私の皮肉も気にしていない。というより、多分気付いていないみたいね。

馬鹿馬鹿しいにもほどがあるけど、事実分が悪いのはこちら。

『……セシリア、少し付き合いなさい』

『鈴さん……?』

このままでは被害が拡大しかねない。
そう判断した私は、セシリアに個人間秘匿通信プライベート・チャンネルで少し打ち合わせる
ことにした。

『いい？ 今の状況のままだとどのみち後ろの生徒が危険にさらされる。だから、アイツの射線上に他の生徒が入らない位置を取る。攻撃は二の次。とにかく上空か反対側で回避重視で戦術を組み立てる。』

それと、アイツのISも第三世代機ってことは多分何か第三世代兵装があると思うけど、確かアンタと同じ計画の機体よね？ 何か知らない？』

『残念ですが、何も』
『そう……』

ここでアイツの手の内が分かればやり易かったところだけど、分からない以上は仕方ない。

ひとまず、今現在の最大の問題はあの肩のキャノン砲。威力も弾速も十分。普通に砲として優秀。だけど、それ以外に射撃装備を出していない以上、他にないと信じたい。

『ひとまず、他の生徒がアイツの射線上に入らないように立ち回りましょう』

『分かりましたわ。』

鈴さん、いつかのように前衛お願いしますわ』
『いいわよ。』

その代わり、後衛はお願い。
私たちの第三世代兵装
衝撃砲とビットもガンガン使って行き
ましよ』

『良くってよー！』
そこまで話したところで、私とセシリアは互いに弾かれるように動いた。

「貴様らなど……私の敵ですらない！」
色々と言いたいことはあるけど、それは全て後回し。

私は上に、セシリアは他の生徒達が余りいない方の横からアイツの後ろ側へと回り込んでそれぞれに攻撃を仕掛ける。私は衝撃砲を、セシリアはライフルを。

だけど、ドイツの代表候補生は肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットから何かを射出した。その数、二。射出されたけど速度はそこまでではない事と、何が繋がっている事から見てワイヤーか何かを鞭のように使う装備と思える。

セシリアも気付いたみたいで、ライフルでの攻撃を中止して回避に移っている。だけど、それでいい。

私には何もしてこないけど、それなら仕掛けるだけ。《龍砲》を多少狙いは大雑把でもとにかく撃ちまくる。

「そのような物……私と《シユヴァルツィア・レーゲン》には通用せん！」

私が撃った直後、ドイツの代表候補生は右手を私の方へと向けてきた。

そして、《龍砲》の衝撃弾が着弾する直前——その威力を失った。

「効果が無い……それがその機体の第三世代兵装ってわけね！」

「今更気づいたところで、遅い！」

貴様らなど、このA I Cの前では無力だ!!」

そう思ってたんだったら正規の手順を踏んで示せば、誰もが認めただろうに、とは思ったけど口にはしない。

そして、そのままでは《龍砲》が無意味そうなので周辺に撃ち込んで土煙を上げる。同時に、セシリアにあることを打診しておく。

私の話を聞いた直後、セシリアは頷いてくれた。幸い、ドイツの代表候補生は目晦まし代わりにした土煙のおかげで私とセシリアの話しはばれていないと思われる。

それと、上まで上がった土煙だけが妙に対空時間が長い。理由は不明だけど。

(多少は攻略の糸口が見つかるといいんだけど……)

完全に土煙が晴れる前に、再度ワイヤーのような装備が見えた。合計は六。それが半々に私とセシリアに襲い掛かってくる。

《龍砲》で撃ち落としながら真下へと《双天牙月》を構えて急降下。

「教官ほどの腕前があるわけでもないのに、A I Cに向かってくるのか……愚かな！」

予想通りと言えば予想通り、相変わらざるの侮蔑を向けてくる。でも、今だけはそれでいい。

これまた予想通りに《双天牙月》が受け止められたけど、それも予定調和。

「……………そこですわー！」

私がかからかかっていったことで、真横はガラ空き。その周囲の一部を、セシリアが操作するビットが他の生徒が射線上にこないように包囲する。そして、一斉射を仕掛けようとした。

ビシユシユシユシユ！

放たれる四つの光弾。

だが、向こうも腐つても代表候補生。躊躇なく《A I C》という装備を解除すると回避行動に入った。結果、一撃も入らない。

(なんだってこう、力だけは受け継いでんのよ！)

内心で毒づきながら、ドイツの代表候補生がA I Cを解除したことで拘束が解除された私も追撃を仕掛ける。だけど、その追撃もいなしかわされ逸らされていく。

織斑先生の嘗ての教え子は無駄にその实力を見せながら、私たちに着実にダメージを与えに来る。認めたくはないけど、状況的にはジリ貧だった。だけど、その甲斐あつてか無関係な他の生徒の避難は完了しつつある。当初の目的は十分に果たせると言えるだろう。

だけど、そう考えていた間が、隙になった。

「そこだ、馬鹿がー！」

ボーデヴィツヒが手刀を入れてきた。そのままなら大した脅威にはならないけど、生憎そうはいかないみたいで、その手首から何か光の刃みたいなのが展開されていた。

「近……………ッー！」

「潰れるー！」

そのまま、続けざまに何発か貰う事になってしまった。

私の《双天牙月》も大柄な武器である以上、密着されすぎると振る辛い。半面、あの手首から出ている刃は至近距離でも十分な威力があることでしょう。

だけど、それ以上の追撃は来なかった。

「……ようやく、来たか。」

影内一夏！

ドイツの代表候補生の視線の先には、影内がいる。

一方、影内は私とセシリアに目配せして避難するように促していた。

(ここは撤退すべきね)

すぐにそう判断した私は、セシリアと一緒にその場を後にし始めた。

どのみち、ダメージレベルが気付いたらBにまでなっている今だと、足手まといにしかならない可能性もある。

(悔しいけど……まかせたわよ、影内！)

Side 一夏

二人が退いたのを確認してから、一度ボーデヴィツヒに向き直る。

相も変わらずふてぶてしくすら見える微笑を浮かべるボーデヴィツヒを一瞥し、おそらくは無駄だろうがいくつかは聞いておく事にする。

「……何をしてるんだ、お前は」

「フン……私はただ、この力を証明するだけだ。」

ISという、絶対的な力をな！」

そこにあつたのは狂信者の顔だった。

「……証明してどうする気だ」

「愚問だな。」

ISという、選ばれた人間だけが使える絶対的な力を示す。それ以上理由など要る物か!?

敵を叩き潰すための、圧倒的な力を示すことにこそ意味があるのだ

!!

色々と呆れる他無い部分が多分に含まれているが、困った事に彼女

が遠慮無く仕掛けてくるおかげで此方も対処せざるを得ない。

幸いな事に、嵐とオルコットがかなり頑張ってくれたおかげでアリーナの他の生徒の避難はすでに完了している。遠慮なくやれるだろう。

(後で二人とも少し話をするか……)

考えを巡らせたが、それも少しの間のこと。ひとまず、今は目の前の問題から片付けなければいけない。

「……安心しておけ、ボーデヴィツヒ。」

お前は確かに強いよ」

「ほう?」

ボーデヴィツヒが一瞬意外そうな顔をしたが、それもある種興味の範疇の外にある。

第一、『最強』を信奉している彼女が次の台詞を聞けば逆上するだろうことは確実だろうし。

「俺が師事した『最弱』には確実に勝てないだろうが」

「……何だと?」

一瞬でボーデヴィツヒが鬼の形相になったが、気にするほどの事でもない。

「聞こえなかったか?」

俺にも何人か師と呼ぶ人がいてな。その中でも最もお世話になっているあの人には……『最弱』を含む二つ名を持つ、あの人には足元にも及ばない。

そう言ったんだ」

この一言に一瞬で沸点に達したらしいボーデヴィツヒは、次の瞬間には不気味な笑い声をあげていた。

同時に、肩の砲撃装備と思しき部分がこちらに向く。

「ク……ククク。」

ほざけ、最弱風情が! そこまで言うなら、その証拠を示して見せる!!」

「そうか。」

なら、そうさせてもらおうか!」

実の所、努めて冷静を保つてはいたが俺としても友人たちを攻撃されていい気などするはずもない。

少々手荒にはなるが、いい加減にしてもらおうでしょう。

ドンツ！

派手な音が向けられていた砲口から鳴り渡る。

最も、大した脅威には感じない。脅威には違いないが、《七つの竜頭》^{ゼブンヘッド}の威圧感に慣れた身としてはいなせるという時点でそう大事に考える必要もない。

クイックドロウ
「神速制御」

神速を以って《機竜牙剣》^{ブレイド}を振るい、あの大口径砲の弾丸を逸らす。

ギヤギイ！

直後に細長くしなる鋼線のような装備が飛び出してくる。察するに《竜尾鋼線》^{ワイヤーテイル}のような装備だろうが、数は六。あまり見たことは無い数だった。最も、それ単体で脅威になる場合などフィルフィさんの《テュポーン》の特殊装備である《竜咬縛鎖》^{パイル・アンカー}くらいなものだが。
(ま、警戒するに越したことはないか)

幸いなことに、ボーデヴィツヒはあの鋼線^{ワイヤー}を包囲するように動かししている。が、正面はあの大口径砲に頼るつもりだったのか意外と穴が開いている。

罠の可能性も無いとは言い切れないが、仕込まれるまえに仕掛ければいい。

ゴッ！

背翼の推進器を思いつきり吹かすと同時に四つ足全てで地面を蹴って跳躍。一気に距離を詰める。

「フン……正面から来るだけか！」

ボーデヴィツヒはあの大口径砲を再度撃ってきたが、再び神速制御を用いて弾く。弾速は中々のものだが、それだけで止められるほど軟な鍛え方はされていない。特にセリスティアさんには。

そうして肉薄した直後だった。

「フン……教官でもないのに正面から剣技だけで来るなど。このAI Cの前には無力だ！」

ボーデヴィツヒが叫び、右腕を前に突き出した。直後、斬りかかろうとしていた右腕の《機竜牙剣》が全く動かなくなる。

特に何かがあるわけでもないのに、だ。

「……なるほど。」

相手を拘束する装備、とでもいったところか」

「今更気づいたところで……」

「存外、遅くないものだぞ」

が、それでも全身を止められない限りは意外と反撃の余地がある。ひとまず左手の装備を《機竜息銃》プレスガンに持ち替え、至近距離から銃撃。

「ガアッ！」

不意打ちだったためかそれともAICという装備の操作にでも集中していたのか、ボーデヴィツヒは特に何かをするでもなく正面からくらつていた。

（悪いが、動きが拘束されるのは《暴食》リロード・オン・ファイアの结界や《天声》スプレッシャーで慣れてんだよ……）

この機を逃す気もないので、拘束を解かれた《機竜牙剣》で再度攻撃を仕掛ける。

（さて、いい加減に止まってもらおうか……！）

S i d e ラウラ

（予想はしていたが……ここまでの物か！）

私が教官から教わった力を示すため、他の代表候補生を叩き潰し、最強として君臨する。

その中でも、最大の障害となるだろうとは予測していた。この、影内一夏という男は。

（事前の調査においても、コイツの実力の高さについては予想していたが……）
《A》アクティブ・《I》インナーシャル・《C》キャンセラーを初見で突破しただ?!）

高い回避技能と近接戦闘技能。加えて、補助と割り切れば必要最低限はあると思しき射撃技能。そして、ある種異形ともいえる異様な高

性能機。

強敵である事は最初から分かっていたが、その力量は予想を超えていた。

「この……舐めるな！」

反撃を仕掛けるが、そのどれもが有効打となっていない。半面、奴の攻撃は私の《シユヴァルツィア・レーゲン》のS・Eシールド エネルギーを着実に削り取っていく。

そして、私がプラズマ手刀で何度目かの攻防を仕掛けようとした、その時だった。

「……全く。これだからガキの相手は疲れる」

その声に、私の体は一瞬で凍り付いた。

S i d e 一夏

「……全く。これだからガキの相手は疲れる」

「教官?」

ようやく現れた織斑教諭は普段と変わらぬスーツ姿であり、ISどころかISスーツさえも装着していない。にも拘らず、ISの武装である近接ブレード《葵》を軽々と扱い、更にはボーデヴィツヒの一撃を横から抑え込む実力。

(一応、フリュンヒルデ世界最強と呼ばれるだけはあるか)

少し後ろを見ると、最初に口頭でアリーナの異変を教えてくれた女生徒が息を切らしながら立っていた。どうやら、彼女が織斑教諭を連れてきてくれたらしい。後でお礼を言っておこう。

「いい加減にしておけよ、ボーデヴィツヒ。」

模擬戦をやるのは止めん。だが、人命に関わる事態が起きては見過ごす訳にはいかない。どうしても戦いたければ、学年別トーナメントの時にでも決着をつければいい」

「……教官が、仰られるなら」

素直に頷いたボーデヴィツヒは、ISを解除する。直後に《シユ

ヴァルツエア・レーゲン》が光の粒子へと変換され、弾けて消えた。
終わったのなら俺としても機竜を纏い続ける事は無い。俺も俺で
解除した。

「……影内も良いな？」

「ええ、問題ありません」

簡単に返事だけ返して、その後は早々にアリーナを後にする。

一方の織斑教諭も、すでにアリーナに生徒がいないためか早々に後
にしている。

そして、この数時間後。学年別トーナメントまで一切の私闘を禁じ
る校内放送が流れる事態になった。

第四章（8）：力の意味

S i d e 一夏

「……以上が、俺が知る限りの経緯です」

「……分かった。」

「ご苦労。これで事情聴取は終わりだ」

ボーデヴィツヒの一件の後、当事者である俺達は織斑教諭の主導で事情聴取されていた。とは言うものの、ボーデヴィツヒ自身はかなり話したらしく後の面々は簡単な補足だけで済んでいるのだが。

「それでは、これで失礼します」

いずれにせよ、俺としては事情聴取が終わった以上これ以上ここに居る理由も無い。デュノアの一件別な問題を片付けるためにも、早々に後にしようとした。

「……なあ、一夏」

が、そこで織斑教諭に呼び止められた。

無視して進んでも良かったが、その判断を下す前に織斑教諭が話を切り出してきた。

「アイツは……ラウラは、前はこんな事をする奴じゃなかった。」

出会ったころのアイツは、アイツの部隊の隊員皆から好かれている面倒見のいい……それこそ、模範的な隊員だった。なのに、いつからか、ああなつていった……」

「……で、それを語った上で俺に何を言いたいんだ？」

今のボーデヴィツヒの姿からは少し想像がつかない話しが出たが、その先の流れがわからない。確かにそのボーデヴィツヒから目を付けられてはいるが、だからどうしろと言うのだ。

「今のお前なら、ラウラを救えるんじゃないかと思っただ……」

この二年間、お前がどこで何をしていたかまではわからないが、明らかにお前は成長していた。私よりも成長したお前のほうが、アイツをより良い方向に導けるんじゃないかと思っ……」

取りあえず言いたい文句は山ほどあるが、それを言ったところで聞き入れるような人でもない。そして、ボーデヴィツヒもなぜこんな人

を崇拜するようになったのか。

が、それでも言うべきことは多分他にあるだろう。これからの話がそれに対して最善であるかの自信は持てないが。

「……一々答える義理も無いが、いい機会だから答えておく。

俺にボーデヴィツヒを救えなど、土台無理な話なんだよ。賢姉殿」

「何……？」

ここでルクスさん最初の師匠の事を話すのは得策とは言えないかもしれないが、それでも思うところが無かった訳ではないので話しておく。

特に、今の話を聞いたうえで尚の事だった。

「ボーデヴィツヒにもある程度は話したが。俺にはな、師匠と呼んだ人たちがいてな」

「……初耳だな。

一体、何処の誰なんだ？」

「そこまで話す気はない」

ルクスさん達について多くを話す気は無いが、それでもこの位なら問題は無いだろう。

「ただ、確実に言えるのは随分とお世話になっている……其の人達全員が全員、大恩人だという事だ。

俺はその師匠達から色々と教わった。向こうの方での常識や生活様式もそうだし……戦い方や、そのために必要な事も色々と学ばせてもらった。

あの人たちが居なければ、今の俺は居ない……どころか、生きてすらいないだろうな」

ルクスさんからは機竜の基本操作から特殊な操作などを学んだ。

リーズシャルテ様からは機竜そのものに関する機械的な知識を学んだ。

クルルシファーさんからは射撃や相手の行動の予測に関する知識を学んだ。

セリステイアさんからは鍛え方を学んだ。

フィルフィさんから体術を学んだ。

夜架さんからは実戦での戦い方を学んだ。

だけど、全員に共通して言えるのは、これら以外にも共通して『戦う理由』を学ばせてもらった事。

それぞれに違う理由だが、それに支えられた強さには、今でも届かない憧れのような想いさえ抱いている。

「その中でも特に最初の師匠と呼んだあの人には返せないくらいの多大な恩があるし、その人たち以外にも色んな人に様々な形でお世話になった。」

その人達から、強くなる理由も貰った」

「……それが、なぜラウラを救う事が出来ないという話に繋がるんだ!？」

業を煮やしたのか、多少の苛立ちさえ見せながら織斑教諭が話を遮って聞いてくる。

「分からないのか、賢姉殿？」

いい加減、勿体ぶる事も無い。早々に吐き出してしまおうとしよう。

「結局、俺も——ボーデヴィツヒと、大差無いんだよ」

この一言に、織斑教諭の瞳が鋭くなった。が、気にすることでもない。

(褒められたものではないが……事実ではあろうしな)

「どういう、意味だ？」

「だって、そうだろう？ ボーデヴィツヒにとっては織斑教諭が、俺にとってはある人達が様々な事を教わった尊敬する師であり、救ってくれ恩人だ。加えて、ボーデヴィツヒは織斑教諭には基本的に逆らう気が無いみたいだが、俺もあの人達相手には滅多な事が無い限り逆らう気が無い。そして、俺が強くなろうとした理由も言ってしまうれば借りの理想と結んだ約束のためだが……それらも、元を正せばあの人たちから貰ったものだ。アイツがアンタを戦う理由にしたのと、まあ少し似ているかもな。」

強くなるために誰かに教えを乞う事はあるし、俺はそうだった。けど、その先が未だに見つけられていない。そんな人間が、何を教えられると言うんだ。

こんな、ボーデヴィツヒと同じ穴の貉か……下手すればそれ以下とも言える俗物を相手に救えなどと。よくも言えたものだな。尊敬すらするよ」

ルクスさん
あの人が聞けば多分怒られるような言い分だが、事実としてこれが今の俺が自身に対して抱いている自己評価なので仕方がない。

それに、過剰に自信を持つよりはマシだろう。

「俺とボーデヴィツヒに違いがあるとすれば、それは恐らくただの一点。」

俺は、俺が師匠と呼んだ人たちから多くの事を教わった。が、それと同時に止められた事も一度や二度じゃなかった。やつてはいけない事、間違った事、あの人たちにとってしてほしくない事をしようとした時は、懇切丁寧に止めてもらえたよ。

俺は、あの人たちに何度も止めてもらえた。おかげで最終的にまずい事をする事は無かった。だけど、アンタはどうだ？ 賢姉殿？」

驚愕の表情を顔に貼り付けていた織斑教諭だが、それも短い間の事ですぐに憤怒の様相を見せ始めた。

「じゃあ、お前はその借り物で満足なのか!？」

それでいいというのか!？」

「まあ、確かに借り物の理想だが……それでも、借りてきた理想そのものに、あの理想そのものに価値があると信じている。だから、そのために戦っている。その一助にでもなればいいと思ってるな。」

それだけでもないのは確かだが……」

ここまで言ったところで、織斑教諭は多少たじろいでいるような様子になったが、それでも言葉を止めるつもりは無い。

「い、一夏……」

「それと、俺の名前は『影内一夏』です。いい加減に覚えてください」
直接的な言い方は避けるが、多少は伝わるだろう。

「……目を付けられている以上、無関係ではいられない。それは分

かっているし、それ相応の対応はする。

が、それ以上に関わり合う気は無い」

ここまで言ったところで織斑教諭が何か勘違いした希望でも持っていないような雰囲気を出したが、変に希望を持たれても困るというものだ。

だから最後に、織斑教諭から嘗て言われた台詞を少し借りて意趣返しをしよう。

「確かにボーデヴィツヒから目を付けられはしましたが、この問題は貴女とボーデヴィツヒの問題でしょう。」

俺は関与する気はなかったし、ボーデヴィツヒの事情については認識もしていなかった。それで一体どうしろと言うんですか？」

その言葉を言い終えると同時、俺は扉を開けて部屋を後にした。

S i d e 鈴音

(……結局、最後は押し込まれちゃったわね。

まだまだ弱いままってわけか)

医務室で検査を受けながら、先程の一件の事を考えていた。

最後の瞬間までは二体一という事もあつてそれなりに優位に進められていたけど、それでも最後は押し込まれた。

「……セシリア。最後、格闘戦している時にどうにかして撃てたりはしなかった？」

「その……あまりにも近すぎた上、思いの他」

しかも、セシリアにも聞いてみたらこの有様。言っている意味はよく分かるので、セシリアを責める気はない。

(むしろ、私自身の不出来を呪いたくなるどころよ……っ！)

あそこまでの状況にしておきながら、得意としている格闘戦で押されるどころか逆転さえ許し、あまつさえダメージ判定がCに近いBにまで膨らんでいる。

代表候補生なら常識ともいえるけど、『ISは戦闘経験を含む全て

の経験を蓄積する事でより進化した状態へと自らを移行させる』と言われている。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれていて、ISのダメージレベルがCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまい、平常時での稼働に悪影響を及ぼす可能性がある。

今回はギリギリそこまで行つてなかったから、これから修復に専念すれば何とかトーナメントには参加出来る。でも、一歩間違えばそれさえ出来なかったかもしれない。

結果に対して不甲斐無さを覚えていたけど、そんな時に不意に声をかけられた。

「入っても大丈夫か？」

声の主は影内。

私もセシリアも、招き入れて特に問題があるわけではない。頷き合うつと、そのまま招き入れた。

「失礼する」

「二人とも、大丈夫か？」

「大変なことになったって聞いているけど……」

影内以外にも箒と簪もいた。

普段から一緒にいる面々なだけに、

「一応、私たち自身に問題は無いわ。」

ただ、機体の方は少し厄介なことになったわね」

「ひとまずトーナメントには参加できそうではありますが……そのために、今からは修復の方に専念せねばなりませんから、練習時間は大幅に削られることになりましたわね」

私たちの答えに、影内たちは少し苦々しい顔になっていた。

「すまないな。」

もう少し早く来ていたらよかつたんだが……」

「別に、影内のせいじゃないでしょ。だから、謝るのは無し。」

「いいわね？」

私の言葉に、影内は渋々といった具合に頷いていた。表情も少し暗く見える。

だけど、そんなしんみりとしていられたのも短い間の事だった。

ドドドドドドドドドツ！

「……………」

廊下から聞こえたのは大量の足音。一人や二人とかじゃない。しかも、間隔からして多分走っている。廊下は歩きましょうという常識はIS学園では通用しないのか。

そして、ちょうど医務室の前くらいでその音が止まった。その次の瞬間には、恐ろしい勢いで扉が空けられたけど。

入ってきたのは一年生の女生徒の一団。見知った顔もちらほら見える。

(一応医務室なんだし、少しは静かにしなさいよ……………)

S i d e 一夏

医務室で騒ぎが起きるといふ非常識なことが起こったが、押し寄せた一団が俺を包囲した時点でその目的が俺と関わりがあることも知れた。

だが、いくら男性が少ないと言っても酷すぎる。王立士官学校アカデミーでも見たこと無い事態に、辟易としている自分がいた。

「影内君！」

「デュノア君……………は、いない」

そして、ようやく騒ぎが収まってきたところを見計らって声をかけることにした。

「ど……………どうしたんだ？」

何があつた？」

状況がほぼ把握できていなかったところに、一枚の紙が差し出された。内容を見るに、学内の緊急告知文が付随した申込書のようだが、その内容が問題だった。

「……………」今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行う為、二人組みでの参加を必須とする。尚、ペアが出来なかった

者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――

「そういう事なので!」

再び叫び声が木霊すと、申請書を持った手が付きだされた。

「私と組もう、影内君!」

誰に対しても返事を出した時点で面倒事になるのが確定しているので、出来れば返事を先延ばしにしたい。

(さて……どうした物か)

切り抜けるためのいい手を模索していたが、結論から言うとなんかやらす必要がなくなった。

「いっちょ、ちよつといい〜?」

「のほほんさん?」

どうしたんだ?」

「生徒会の方で、用事があるから呼んで来てって言われたので、来ました〜♪」

この時はナイスタイミングと言いたくなかったが、それよりも先に離脱することにしよう。

お礼はその後でもいい。

「分かった。すぐに行く」

返事だけ返すと、そのまま部屋を後にした。

後ろが少し騒がしくなった気がしたが、そこは気にしない。

歩きながら、この時呼ばれた意味を確認していた。この時呼ばれたのは普通の生徒会活動とは大きく意味合いが違う事は事前に把握している。

蒔いた疑似餌の成果を確認しなければならぬのだし。

(さて……フランスの王子様の仮面を剥がしに行きますか)

S i d e 楯無

「……虚ちゃん。この情報、確実なのよね?」

生徒会室でデユノア君に関する追加の報告書を読んでいる。

内容は、今までの調査書類は何だったのかと言いたくなるほどの物だったけど。

「はい……。信じがたい事ではありませんが、確かな情報筋からの物です」

「……にしたって、ねえ。」

これは、やられたかしら」

「ですね……。事前に気付けた事だけが、幸いでしょうか。」

手遅れになる前に、気付けた事だけが」

危うく引つかかる所だったのには、かなり肝を冷やしたけど。

この時、生徒会室が防音であることをいい事に私は思いつきり私怨を込めて叫んでいた。

「やってくれたわねフランスウウウウウウウー……！！！！」

Side シャルル

(暫くは部屋に誰もいない……。専用機は更新プログラムのインストールのために放置したまま……。やるなら、今しかない)

生徒会での活動があった後、ボーデヴィツヒさんの一件で影内君が事情聴取を受け、部屋に一度戻ってきて専用機の更新プログラムのインストールのためにあの装飾の付いた短剣のような待機形態の専用機を置いて行ってお見舞いに行くと言っていた。

お見舞いだけならそう時間はかからないだろうし、僕だってこんなことは考えなかった。

けど、その少し後に「急に生徒会からの呼び出しが入った。しばらく時間がかかる」って連絡が来た時は「この時しかない」と思った。

今なら、誰にも見られずにデータを盗める。しかも、もともと更新プログラムのインストールのために内部のデータが見放題な状態だから、痕跡を隠す必要性すらない。

(今なら、確実にデータを盗める……いや、そのものをダミーにすり替える事だつて……)

パソコンに繋がれたままになっている専用機の片割れに、いくつかのコードを接続して専用のデータ記憶端末にコピーして記憶していく。

そう時間はかからずにコピーの作業は終わり、次に影内君の専用機の待機形態を模したダミーとすり替えておく。

(すり替えさえしてしまえば、後は今夜か明日にでも『緊急の呼び出し』を言い訳にフランス^本に持ち帰ってしまえば……)

僕の目的は、悲願は達せられる。

そこまで考えた、その時だった。

「……何をやっているんだ？」

シャルロット・デュノアさん？」

部屋の出入り口から聞こえてきたのは影内君の声。

しかも、ごく丁寧に声をかけた直後に部屋の扉の鍵をかけている。何とか押し切つて逃げようにも、影内君の実力なら鍵を開けるといふ一動作の間に僕を取り押さええることなど容易い事だろう。

(こ、こつこうなつたら……)

不確実なのであまり頼りたくは無いが、あの捏造設定の方を使うしかない。

完全に温情頼りなので、本当はやりたくないけど。

「……言い逃れは、できそうにないね」

「そうだな。」

薄々想像は付いているが、一体何をやっていたんだ？」

言葉を間違えないように気を付けながら、言葉を紡いでいく。

「多分影内君も調べがついているんだろうけど、僕は父の命令で男のフリをして入学した」

「目的は俺自身か、もしくは専用機である『ユナイテッド・ワイバーン』か？」

影内君の言葉に、頷きを一つ返してから予め用意していた事情を話し始めた。

「今現在のデユノア社は、量産機の世界シェア第三位の業績がある有数のIS開発企業……だけど、実際には倒産の危機にある。」

欧州では今、欧州連合総合防衛計画を進めてるけど、現時点で実用化の目途が立っているのはイギリスの《テイアーズ》型、ドイツの《レーゲン》型、イタリアの《テンペスタII》型。デユノア社は……開発出来なかった。」

そのせいで次期主力機体選定からフランスは外された。デユノア社もその影響を受けて、政府からの援助は大幅カット。開発資金は激減、経営は困難。」

この状況を打開するためにデユノア社が講じたのが、僕を男として学園に送り込んで、社の広告塔とする事。そして影内君に接触する事で《ユニテッド・ワイバーン》の……稼働状態の第3世代型の情報を取得する事。デユノア社にとっては幸いな事に、僕は切り捨てても問題ないだろうしね」

ここまで話したところで一回話を切り、少し間を開けてから次を話し始めた。

「でも、ここまでだろうね。」

結局はバレちゃったし、本国に呼び戻されて事情聴取と投獄かな。デユノア社も今まで通りとは行かないだろうけど、僕にはもう関係ないかな」

ここまで話してしまえば、後は相手の出方次第。

次に影内君がどんな言葉をかけてくるかで、僕の命運も決まる。

「……今の話が、全て本当だったとしてだ。」

だったらなぜ、お前の事を調べている最中に第2.5世代機なんて言葉が出てきた？ 確か、デユノア社は第三世代兵装の開発に失敗しているはずだが……」

「……ッ!!」

(……マズい!!)

この言葉を聞いた瞬間、僕は咄嗟に隠し持っていた拳銃に手をかけていた。

その事は、知られてはいけない事実だったから。その事にまで手を

伸ばしているという事は、僕の本当の出生と今現在のフランスとデュノア社の本当の現状について知られている可能性が高いから。

そして、僕が拳銃を構えた瞬間だった。

キンツ！

「……接近戦では剣の方が速い。」

覚えておけ」

影内君が、僕の拳銃を切り裂いていました。そのまま私の片腕を片腕で捻り上げると片足を当てて足の動きも妨害し、さらに喉元にも剣を突きつけてきました。

それも、今現在机の上に置いてあるはずの短剣の方で。

「ど……どうして……」

「元々、置いてあったものはダミーだ。」

本物はこの通り。今お前の喉元に突きつけている方だよ」

茫然とした僕に、影内君の声が無慈悲なまでの響きを伴って告げられました。

「さて。」

本当の事を、話してもらおうか」

もう、本当に言い逃れできない。

その時の僕はそう考えて、半ば自暴自棄になりながら叫んでいた。

「……アイツらさえ来なければ、こんな事にはならなかったんだよ!!!!」

第四章（9）：風が止んだ日

S i d e 一夏

デュノアの一件の後、一度叫んだがそれっきり黙りこんでしまった彼女を連行して、俺は一路生徒会室へと向かっていった。

理由はただ一つ。更識会長に連絡を入れた後、暫くして更識会長のほうから呼び出しがかかったためである。

連行する際は簪に剣崎、のほほんさんが手伝ってくれたので見つかる事無く進めたため、それなりに楽ではあったが。

（さて、どうなるのか……）

色々と不透明ではあるが、ひとまずやろうとしていた事が完全な違反行為であることには変わらない。

其のことも含め、諸々と追及させてもらう事にしよう。

S i d e 楯無

「ようこそ。シャルロット・デュノアさん」

影内君達が文字通り連行してきた彼女に向かって、私は若干の呆れも含んだ声で出迎えていた。

「……」

肝心のデュノア君……いえ、デュノアさんと言えば、こちらを非常に暗い目で見つめるばかりだけど。

「さて、まず本題からはいっちゃうけど。

こつち見て頂戴」

虚ちやんにディスプレイにつけてもらい、ある人物との通信を開いてもらう。

そこに居たのは、確実にデュノアさんと関わりのある人。

「……!?」

そ、そんな……」

『……もう、隠せないわよ。シャルロット。』

「どうやったかは知らないけど、この人達はもう八割方は調べている。残りの情報が割れるのも……時間の問題でしようね」

会話を聞いて、私の立てている推測に確信を得た。

そして、ここからは追求する番。

「さて、洗い浚い吐いてもらうわよ。」

デュノア社長夫妻御令嬢のシャルロット・デュノアさんと、現社長夫人にして副社長、そしてシャルロットちゃんの実母のシルヴァーナ・デュノアさん？」

S i d e シャルロット

「あ、貴女達は……一体、どこまで調べて……」

私の言葉に、生徒会長は資料をめくりながら言葉を紡ぎ始めた。

「もうデュノア夫人には説明したけど、確認の意味も含めてもう一度説明しましょうか」

猫の鳴くような声で喋っているけど、今はその喋り方が恐ろしい。

「まず、デュノアさん達……というより、フランスがやろうとしていた事は大体調べがついているわ」

そう前置きして、生徒会長は話し始めた。

「最初に貴女を男性と偽ってI S学園に編入させる。この時に同じ男性だからという理由で影内君と確実に同室になり、出来る限り短期間で《ユナイテッド・ワイバーン》か男性操縦者の情報を奪取。」

その後、バレなければそのままフランスに持ち帰って解析。バレたら予め用意していた愛人の娘っていう設定の二つ目の偽造戸籍の情報を使って温情に働きかけるか何かして時間稼ぎ。ここまでの情報は意図的にセキュリティをある程度引き下げておくから裏付けは取れるようにしておく。その先の情報はガチガチに固めておいた上でね。

で、そうして何とかして国に情報を持ち帰る。バレていなければさつきも言った通り国からの呼び出しとして、バレていれば国内での

捜査の重要参考人か、司法取引か、即刻逮捕のためか……要は一度国に帰ればいいわけだし、言い訳はいくらでもあるわね。で、その後情報をしかるべきところに渡したら、後は元々存在しない人である『男性IS操縦者のシャルル・デュノア』を不幸な事故か何かで、『愛人の娘であるシャルロット・デュノア』を投獄されたか何かで表舞台に出られないようにしてしまう。

そうしてしまえば、表舞台には出られなくなるけど貴女というIS操縦者をフランスは抱えたままにできる上、有用にもほどがある重要な情報が手に入る。そのくせ、ほとぼりが冷めた頃に『デュノア社長夫妻の娘であるシャルロット・デュノア』として復帰の道も残る」

「……」

どこまで、調べているのか。憎たらしく感じるほどの口調で流れるように説明していく姿に、私は一種の恐怖のような感情を覚えていた。

だけど、本当の意味で背筋が冷えるのはここからだった。

「ここからは私の推測も入るけど。そうまでして影内君という男性操縦者か『ユナイテッド・ワイバーン』の情報を欲した理由は一つ。

フランスは何らかの理由で割り当てられたISコアを紛失した。違うかしら？」

この言葉を聞いた瞬間、私の心には絶望が広がっていった。

Side 楯無

「そ、そんな事は……」

「……」

デュノアさんがうろたえたような声を出しているけど、デュノア夫人は沈黙を守ったまま。

「根拠の一つ目として、フランスのISコアの公表されている可動実績を調べてみたんだけど、その中でいくつか偽装と思われるものがあつたのよね。で、さらにその実績を調べて行ったら、過去の実績と

ほぼ同一の物が出てきた。これが一つ目。

二つ目として、つい最近デユノア社の工場が爆破事故を起こした事が隠蔽されていた事。かなり大規模だったみたいね。さらに、工場がコアの組み込みも含んだISの組み立て作業を行う時もあるうえ、新型の研究所も併設されていたみたいだから旧来の機体を組み替えて新型の装備か何かへの換装作業中に、っていったところかしら。

更に言えば、この工場爆破事故のおかげで輸出する予定だった《ラファール・リヴァイヴ》が壊滅。それによって発生した違約金によって経営が一気に圧迫。

併設されていた新型研究所で研究されていた新型機も破壊されたことだろうし、新型機研究にも大きな痛手になったのではないかしら。さらに言えば、其処にも多額の研究資金を費やしていた事だろうから、それが実を結ばずに水泡に帰した以上途轍もない額が無駄になったことでしょうね。

しかも、これらの事情によって政府も資金援助を停止したでしょうし……」

『……もう、いいわ。』

更識さん……だったわね。見事な手腕よ。是非我が国にも欲しいくらい』

唐突に、私の言葉を遮る声が聞こえた。

声の主は、これまでずっと沈黙を守ってきたデユノア夫人。その声には、どこか達観にも似た感情が見えた。

「光栄な評価ですが、私は今の立場を捨てる気はありませんので」

『あら。残念ね』

最期だけは少しだけ気楽な、冗談を言っているような口調だった。だけど、その瞳は強い意志が垣間見える。

『でも、そうね。惜しむらくは、貴女達の回答はある一点で大きく間違えている事でしょう。』

……シャルロット』

「……は、はい」

不意に、デユノア夫人がデユノアさんと呼んだ。呼ばれたデユノア

さんは、少し怯えているよう声になっている

『私は、少し貴女抜きで話がしたいわ。それに失敗した以上、貴女は不要よ。』

何処へなりと、すぐに去りなさい』

「……!? ぼ、僕は……」

『いいわね?』

静かな、だけど聞くものをどこか圧倒する威圧感を伴った口調でデュノア夫人が言い放った。

そのセリフを聞かされたデュノアさんとは言えば、一気に生気を失ったような顔になっていた。

「四人とも、悪いけど別な場所……そうね。確か寮に空き部屋があったはずだから、そこで別にデュノアさんの事情聴取をお願いできるかしら?」

「……分かりました」

ひとまず、今は彼女の言う通りにしましょう。聞かなければいけない事は沢山あることだし。

それから間もなく、虚ちゃんが主導してデュノアさんは空き部屋へと連れていかれた。

「さて、さつき言っていた大きな間違いが何なのか。聞いてもいいかしら?」

『ええ、いいわよ。』

でもその前に……』

「デュノアさんの亡命、ですか?」

私の言葉に、デュノア夫人は穏やかな笑みを浮かべながら頷いた。

『話が早くて助かるわ。』

これだけは、あの子にも内緒であの人とも決めていた事だから。どうしてもね』

「……酷い人ですね、貴女も。』

意図的に突き放すような言葉を言って、自分たちの元から引き離すことで亡命を促す。そうなれば、デュノアさんだけでも助かるように

しようなんて」

『……元々、この計画を立てたのはフランス政府だったけど。でも、あの子に決断させてしまうほど私達は弱くなってしまった。

だけど、元を正せばこの原因は私たち大人の問題。大人の問題は大人が片付けるもので、子供に押し付けるものではないのだから』

「……貴女は、それでいいんですか？」

私の言葉に、デュノア夫人はこれ以上何も語ろうとはしなかった。代わりに語ったのは――

『……そうね。

もうそろそろ、別な話をしましょう。何故、私たちがこんな事をしたのか』

――今回の騒動の、原因についてだった。

『まず最初に言ってしまうけど。

貴女は工場の事故によって、と言ったわね？』

「ええ」

頷いて肯定した私に、彼女は苦虫を噛み潰したような表情で語り始めた。

『間違いはそこよ。

アレは、事故などではなく……災害だった。害獣という名前の、天災』

「害獣……まさか!？」

私の反応にもデュノア夫人は特に驚くでもなく淡々と続けた。

予想通りだと、言わんばかりに。

『ええ。あなたもIS学園で見た筈でしょう。ISを屠ることさえ当たり前のように起こしうる、あの獣たちを。……私たちの国にも、彼奴らが来た。

初めて現れたのは一年よりほど前。最初に現れたのは……蟻のような外観だったと、聞いているわ』

「蟻、ですか……」

『ええ。とは言っても、それ単体が少数の時は通常兵器で何の問題もなく倒せた。でも、数週間としない内に大量のそれが出てきた。そし

て、同時に他にも似たような化け物共も出てくるようになって。

それらが通常兵器を数で押しつぶしてくるほどに、大量に出てくるようになってしまった』

デユノア夫人はそこで一度言葉を切ると、少しの間をおいてから再度話し始めた。

『それからしばらくして、その蟻を含んだ大量の害獣を駆逐するために攻撃部隊の編成が決まったの。』

でも、その時にはもう手遅れになっていたのを知ったのは、それから間もなくの事だった……』

「何が、あつたんですか？」

『……さつき貴女も話した、研究所が併設されていた工場。』

あそこの地下から、蟻がトンネル掘ってやってきたのよ』

「!？」

私の驚きを他所に、デユノア夫人は淡々と言葉を紡ぎ続ける。

言葉のどこかに憎しみと後悔を乗せながら。

『その時は文字通りの惨劇だった。工場と研究所はどちらもスタズタ、輸出用に生産していたIS数機分の部品と新型試作機がどちらもほぼ完全に破壊された。』

しかも、さらに悪い事に。あの時の研究所には……デユノア社長が……いえ。夫が、視察に向かっていた』

「……!? まさか……」

思わず飛び出た私の言葉に、デユノア夫人は顔を伏せながら答えた。

その声は、僅かに震えていた。

『不幸中の幸いな事に、一命だけは取り留めた。』

けれど、暫くの間は目を覚ます事すらなく、ようやく目を覚ましても寝たきりが長かった……。つい数週間前にようやく車椅子に乗れるくらいまでは回復したけど、でも一生車椅子の可能性もあるのが現状よ……』

そして暫くの間、何かに耐えるように黙った後、話を再開した。

『そして、工場と研究所があのかげ物共の襲撃で完全に破壊されたの』

だけど。さらに、あの化け物共は忌々しい事に、そこに巢を作り始めたのよ』

「巢……ですか」

『ええ。工場の……今は跡地とでも言うべき状況になってしまったけど、そこに巨大な巢が作られてしまった。そして、そこからさらに大量の化け物共が出現するようになった。蟻型の割合は減ったけど、それとは別なのが現れるようになってね』

「別なの……」

『ええ。貴女達の学園に先日出現したようなのと酷似した奴もいたわ。その中の一種としてね』

そこまで話したところで、デュノア夫人はもう一度話を止めて深く息を吐いた。

『そして、ついに総攻撃が決定された。攻撃目標にはあの工場跡も含まれていたわ。』

その時は、当時まだ企業所属で軍事作戦への参加ができなかったシャルロットのISを除いたフランスが保有する全てのISも投入されたし、それ以外にも大量の通常戦力が投入された。

あれだけの攻撃を行えば、倒せると……そう、信じていた』

そこでもう一度深く息を吐くと、意を決したようにデュノア夫人は話し始めた。

『でも、現実には残酷だった。』

それまで確認されていなかった、新しい化け物が出てきた。翼を携えて空を飛ぶ、黒い巨躯の歪な獣人のような怪物。後から確認したら、その姿も能力も悪魔のようだった。

その戦闘力は圧倒的で……投入されたすべてのISが倒されて。しかも、コアにまでその被害は及んでいて、とても修復なんて望めないほど。当然、使用していた人たちも相当傷付いて……脊髄損傷になった搭乗者さえいた。

そして作戦は失敗。今は防衛線を張って何とか抑え込んでいるけど、人員と物資の補給、それらにかかる費用……様々な面から、もう支えるのも困難なほど逼迫してきている。政府も私達も、フランスが

崩壊した時に発生する難民の避難先をどうにかして探そうとしているくらいだった。

シャルロットも、そつちに留学する前までは国家代表候補生の立場で軍事作戦に参加していたのよ。それも、かなり強引にねじ込むような形で』

そこまで話したところで、デユノア夫人は薄く笑った。

嘗ての夫人自身を嘲笑っているような、そんな痛々しい笑みだった。

『でも、そんな時にある情報が飛び込んできた。

IS学園で、四十体以上に上る数の化け物をほぼ一人で一方的に倒した、謎の機体の情報。俄かには信じられなかったけれど、でももう賭けるしかなかった。今のフランスは、それほど追い詰められている』

「だから、今回の計画を……」

私の確認に、特に反応を返すこともなくデユノア夫人は言葉が続けた。

『そういう事ね。

確信があつたとは言えなかったけれど、でもあの白い謎の機体と《ユナイテッド・ワイバーン》はとてもよく似ていた。正直なところ、男性操縦者という事実がどうでもよくなるくらい、あの謎の白い機体につながる可能性の高い機体として私達は《ユナイテッド・ワイバーン》という機体を欲したの』

ここまで話して、デユノア夫人はいったん深く溜息を吐いてから話を続けた。

『でも、もうここまででしょうね。

もう既にして《ユナイテッド・ワイバーン》も手に入る可能性は無い上、仮に今の状況を乗り切つてもISコアを失つたという事実が消えない以上、各国からの追及も避けられない。

今にして思えば、あの時から私達は詰んでいたのかもしれないわね……』

そこまで話したところで、デユノア夫人は大きく息を吐いた。

吐き出したかった事をやっとの事で吐き出したかのような、そんな顔だった。

Side 一夏

「……フランスであった事は、これで全部。」

其の後の事は、大体は生徒会長が推測した通りだよ」

生徒会室での一幕があった後、俺たちは再び場所を移したうえでデュノアから話を聞いていた。

「……分かりました。」

ひとまず、貴女にはここに居てもらいます。後々の事は決定次第伝えますので」

「……………はい」

生気の抜けたような顔で、デュノアは返事をしていった。

常に俯いたまま、弱々しい声を振り絞るように出す姿には思わず

「それでは、一旦失礼します」

虚さんはそう言っただけでいったん部屋を出て行った。後に残ったのは、俺と簪、劍崎、のほほんさんの四人。

「……………」

残ったのは、沈黙。

「……………一つ、聞いてもいいか?」

「……………何?」

だが、個人的には一つ聞きそびれていたことがある。それだけは、確認しておきたかった。

「お前は、デュノア夫人やフランス政府の事をどう思っている?」

俺の質問に、デュノアは僅かに肩を振るわせた後に声を震わせながら話し始めた。

「僕は……………フランスも、父さんと母さんが大きくしたデュノア社っていう会社も、父さんと母さん自身も好きだよ。だから、進んでテストパイロットとかやっていたし、フランス軍の軍事作戦にだって参加し

た。

軍事作戦の時に一緒に戦わせてもらった軍の人たちも、皆国を守ろうと必死になっている人たちばかりで。その人たちと一緒に戦えることに誇りを感じたのもあるけど、それ以上にこの人たちの役にも立ちたいと思つて。

けれど、状況は良くならなくて……。そんな時に、この計画の話が来て。

僕一人が表舞台に立てなくなるくらいで、状況が好転するならば……それでもいいかなつて。そう思つた……。

でも、今はもう……。っ！」

「……そうか」

この返答を聞いて、少し思い出していた。

例えば、アイリさんがルクスさんとデイルウィ卿が戦っている時に言い放つたあの言葉であつたり。例えば、セリスティアさんがルクスさんを戦いから遠ざけるために入学を認めようとしなかつた時の事であつたり。例えば、レリイ学園長がフィルフィさんを救うために単身遺跡ルインの最奥に踏み込もうとしたことであつたり。例えば、クルルシファーさんと彼女のお父さんのことであつたり。

あるいは、今日の前にいる簪と更識会長も含んでいいかもしれない。

(……同じ感じがするな)

彼女のネックレスについている、ある物を見てそれは思った。

ネックレストップの形を待機形態としている、デユノアの専用機《ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ》。

(……食えない人だな、デユノア夫人)

Side 楯無

「……随分、詳細に言うのですね。」

もう少し手古摺るかと思つたのですが」

『そうでしょね。』

けど、更識さん。仮にあの子がシャルロットISコアを持ったまま貴女達の元に亡命したとしましょう。そうなったら、どうなると思います?』

この言葉を聞いた瞬間、盛大に呆れかえった。

座っていた椅子の背もたれに体重を預けるようにしてもたれかかりながら、返答を口にした。

「食えない人ですね。」

娘の命と将来を確実に約束させる他に、難民となったフランス国民の受け入れ先としての役割りも望むと?」

『流石に、全部が全部とまでは言わないわ。出来る限りでいい。』

でも、仮にあの子がコアを持ったまま亡命してしまったとしたら、日本はISコアの保有数が最初の割り当てよりも多くなってしまう。当然、国際世論の非難もあるでしょうし、最悪を考えるのであればそれ以上も在り得る。

その事態を避けるためには、私達の口添えが必要。どうかしら?』

「……流石、ほぼ一代の夫婦二人三脚で会社を大きくしたといわれる人ですね。」

計算高い」

『素直に悪女って言ってもいいのよ?』

流石にこの言葉には、首を振った。

「言いませんよ。」

若い時の社長夫妻についても調べたのですが、探してもスキャンダルが出てこない夫婦なんて言われて、評判だったらいいですね。それに。先程も言いましたがデュノア社長と夫婦二人三脚、特に経営方面から会社を支えて大きくした立役者みたいですし。

そのためには、これくらいの計算高さは必要だったんでしょ?』

『さて、どうかしら?』

でも、私があの人を、あの人と一緒に育て上げたデュノア社を、そして我が祖国であるフランスを、そしてシャルロットを愛しているのは本当よ』

そこまで聞いたところで、私は話を切り替えることにした。

「……さすがに、すぐには返事ができません。

少し間をおいてもいいですか？」

『出来る限り早く、お願いできるかしら？』

「ご期待に添えるようにしますよ」

そこまで話したところで、互いに通信を切った。

後には、不気味に感じる静寂だけが残っていた。

Side 一夏

「そつちで聞いた話しは、これで全部ね？」

「はい」

デユノアから聞いた話の内容を虚さんが更識会長にも伝えたらしく、内容の一致を確認したところで俺も呼びだされた。

フランスの問題に幻神獣アピスが関わっているのが原因であり、そのために呼ばれたらしい。

「影内君。一応聞いておくけど、貴方はどうしたい？」

「……基本的に、あの化け物は殲滅するように仰せつかっています。そして、範囲は指定されていません。」

その意味で言えば、俺としてはフランスにいるのであろうあの化け物も殲滅に行きたいところなのですが」

俺の返答を聞き、更識会長は満足そうな顔で頷いた。

「そうね……。彼女たちの話が本当なら、実の所私もそれが最善だと思うわ。」

で、影内君にさらに聞きたいんだけど。単刀直入に言って、彼女たちに話に合った物量の敵を相手にできるの？」

「お任せください、と言いたいところですが……。」

流星に一人では厳しい事になりそうです。そちらが大丈夫ならば社にも増援を打診してみますが……」

詳細な数が分からないので何とも言えないが、さすがに話を聞いた限りでは厳しい事になりそうなのは想像に難くない。ほぼ一人で挑

むというのは、無謀に過ぎる。

出来る限りはルクスさん達の負担にならないよう一人で解決するつもりだが、それで死んでしまつては元も子もない。

そうなれば、必然と増援に頼らざるを得ない事になる。

「是非、そうしてちょうだい。」

「こつちもこつちで色々と動いてみるから」

「お世話になります」

「お互い様よ」

意外といえは意外なほどスムーズに話が纏まり、互いの為すべきことが決まつていく。

「さて。解決のために、お互いに備えるとしましょうか」

「ええ。よろしくお願いします」

第四章（10）：緊急報告

S i d e 一夏

デュノアへの事情聴取と、フランスにも幻神獣が出現している可能性が浮上した日の翌日。

あの事はすぐに学園長にも報告が行き、ひとまずデュノア自身は近日に決まる処分が決まるまでは事情聴取にも使った部屋で軟禁となった。さすがに学園内でのスパイ行為を容認はできないとのことだったらしく、其の事はフランスの方からの緊急の呼び出しという形で決着がついている。

一方、俺はと言えば授業を完全に放り出して学園から外出しある場所を目指していた。

「……もうそろそろだと思いが。」

さすがに《アステイグ》ほどの速度は出せないか」

今現在、《ユナイテッド・ワイバーン》を迷彩を用いて隠れつつ飛翔してある場所を目指している。

と言うのも、フランスの一件が内容が内容だったためさすがに此方から連絡して向こうから連絡役を請け負う人が来るのを待つ、という段階を踏んでいると手遅れになる可能性が否めないという結論に達したためだった。そのため、俺の方から直接出向いてでも早く連絡してほしいと更識会長に頼まれたのである。

俺の方としても、否と言う理由は無いのであればやらない理由もない。そのため授業を完全に放り出して時折休憩を挟みながら連絡のために球体スライアを目指していた。

「……？」

こんな晴天で、一部分だけに霧……？」

が、その途中でおかしな場所があった。

天気は晴天であるにも関わらず、一部にだけ濃い霧が出ている。周囲に水源らしい部分はなく、さらに前日に雨が降ったという事もないのは事前に調べたので知っている。

つまり、あまりにも不自然なのである。

(……考えすぎだと、いいのだが)

正直、霧と言うとあまりいい思い出が無い。

更識会長が霧を利用した特殊な装備もだが、それ以上にグライファーさんの神装機竜《クエレブレ》の特殊装備《隠れ家の真名》と、シングルン卿の神装機竜《リヴァイアサン》の神装《王権》が強く印象に残っている。前者には摸擬戦で何度も身をもってその脅威を実感し、後者は話に聞いただけであり実際に対峙した事はまだ無いがそれでも十分以上の脅威にしか感じなかった。

あの霧もそれらと同様の脅威かと聞かれれば確信は持てないが、それでもやっっている事が事なだけに不自然であれば警戒するのが当然と言える。ゆえに、速度を落として探知機を起動。念のために探りを入れる。

(……探知できない?)

何らかの要因によって探知そのものが阻害されているという事実、余計に警戒心が強くなる。

そして、探知機を切った直後にそれは起こった。

キユオオ!

「ッ！」

突如として飛んできたのは、見覚えのある極太の光弾。

(また無人機か!?)

《ユナイテッド・ワイバーン》の翼を操作して回避しつつ、過去に相対した時の事を思い起こす。

が、今回はあの霧が邪魔をしてくるおかげか、向こうの状況が一切わからない。加えてこちらは《ユナイテッド・ワイバーン》の迷彩機能を用いつつ飛んでいたはずだが、それにもかかわらずこちらを捉えて射撃を放ってきている。そして、《ユナイテッド・ワイバーン》を使っている以上、この前と違い直接戦闘力の側面で少々劣ると言わざるを得ないだろう。

「厄介なことを……！」

咄嗟に高度を落とし、地面スレスレを飛んでいく。さらに飛行コースを一部変更、あの光弾の射線が直接は通らないように低空飛行して

いく。

同時に、更識会長へと連絡を入れようとしてみたがどういいう訳か繋がらなかった。

(またジャミングか!?)

流石に迂闊に《アスデীগ》を使うわけにはいかないが、このまま一方的に攻撃され続けるわけにも行かない。

(少々手荒だが……)

止むを得ず機竜息砲キャノンを手に取り、出来る限りの速度でチャージ。同時に再度飛び上がり照準を付ける。狙いは、あの霧の中心。

「行け！」

一切の躊躇なく、撃ち込む。数瞬の後、機竜息砲が着弾した位置で派手な爆発音が響き、盛大な土埃が巻き上がる。

幾許もしない内にそれが落ち着いた時、見えたのは何時かにも戦った無人機の一団。確認できた数はおよそ四機だが、その中に場違いな影が見えた。

(……銀髪の女の子?)

少々長い銀髪の女の子が、四機中二機の無人機に庇われる形で立っている。どことなくボーデヴィツヒに似た顔立ちだが、少なくとも外見からはISなどを纏っているようには見えない。

いったい何を考えてそのような軽装で立っているのかは知らないが、少なくとも撃つてきた以上は敵に違いない。そして、敵の攻撃はほぼ完全に無人機に依存しているだろうことが見て取れる以上、躊躇する理由は無い。ここに他の伏兵がいる可能性も否定できないが、いずれにしても先程から攻撃してきているあの四機を排さなければいけない事には変わりないのでそのまま攻め立てる。

再度高度を下げ、両手の装備を機竜息銃ブレスガンとライフルに切り替える。基本的には周囲の森の中を迷彩を切つて出来る限りの速度で進みつつ、タイミングを計って迷彩を使い森から飛び出て銃撃。

進みは遅く攻撃の効率も良くは無いが、それなりの速度で敵の足を止めながら進む分には一定の効果が見込めるのでそれでいい。

「……止めきれませんね。」

格闘戦用意」

其れなりに近づいてきた時、あの銀髪のものと思しき声が聞こえてきた。そして、内容から明らかに無人機達の指揮を執っていることが窺い知れる。

であるのであれば、尚の事逃がす訳にはいかない。

本来であれば《アステイグ》に切り替えたいが、さすがにこの瞬間に援護も無しに切り替えるのは危険性が高すぎる。やむを得ず、《ユナイテッド・ワイバーン》のまま格闘戦へと移行していく。

幸い、向こうから四機中二機だけが突っ込む形をとったために俺としては余り脅威に感じない形で突っ込んできたが、それと同時に霧で視界が遮られかけたため竜尾鋼線ワイヤーテイルを用いて片方の一機と《ユナイテッド・ワイバーン》を繋いでおく。

「クイックドロウ神速制御」

繋いだ竜尾鋼線を無理やり引き寄せ、視界が霧に覆われる前に無人機と《ユナイテッド・ワイバーン》の距離を近づける。向こうも拳を振り上げてきたが、振り下ろされる前に装甲の薄い部分を切り裂いてしまえば何と言う事もない。

さらに、回し蹴りの要領で格闘を仕掛ける。無人機は残った片腕を使つて受け止めようとしてきたが、むしろ都合。四つ足の内二つを使つて一時的に捕獲すると、そのまま推力任せに振り回し近くにいたもう一機の無人機の格闘からの盾代わりにする。

盾にした無人機が大破、格闘を仕掛けた無人機も片腕大破という結果に終わり、さらに壊れた部分から無人機の内部に機竜息銃を叩き込み、装甲を無視して破壊していく。

これで二機は仕留めた。

「……凄まじい戦闘能力ですね。

織斑一夏様」

「……………」

さて、二機を破壊した直後にいきなり霧が晴れたと思つたらあの銀髪が声をかけてきた。

「私は束様よりの伝言を預かってきています。

《ゴーレム》二機を撃破した時点で伝えるように仰せつかっていたため、お聞きくだ……」

「一応言っておくが、人違いだ」

仮面は付けたままなので素顔は晒していないし、変声機も使って声を変えてはいる。

このまま白を切つてついでに捕まえるかとも考えたが――

「いえ、既に貴方の事に関しては束様が直々に確認されています」

――面倒な事に、むこうは聞く耳持たず。

「まず、束様は貴方が今現在使用している《ユニテッド・ワイバーン》か、先日使用していた白い機体を所望しています。

渡してくださいれば、束様ご自身が手塩にかけてISを一時的に渡すと同時に、より強化したうえで……」

「そもそも織斑一夏ではないが……断る。

この機体は元々ある方から借りているだけだし、それを抜きにしたところでそんな怪しきしかない場所になんぞ預けられるか」

この言葉に銀髪が一度言葉を止めたが、気にすることでもない。同時、飛び出るタイムミングも図っておく。

「それと、もう一つ。

《白式》の事について、束様が確認したいことがあると仰られております。つきましては」

「そんな機体の事は知らん」

確実に面倒事になりそうなので最後まで聞かずに断ろうとしたが、ここでも面倒が待っていた。それも、今後の活動に関わりかねないレベルの物が。

「いえ、既に過去の通話ログから貴方が関わっている事を束様は確認なされています。

ですので、其の事について……」

「知らんと言っている。

それに、さつきも言ったが話す気も無い！」

言葉を話し終えると同時に、背翼を吹かせて一気に無人機へと接近。

さらに――

「神速制御！」

——向こうの反応が一手遅れたその隙をついて、二機纏めて二刀の神速制御で胴体を両断。元よりただで返す気など無い。

「!?」

銀髪が驚きの顔を見せるが、あれだけ派手にやっておきながら何も無いとでも思っていたのだろうか。

「よし。」

護衛もいなくなったみたいだし、一緒に来てもらおうか。主犯についても何かしら知っているみたいだしな」

《ユナイテッド・ワイバーン》を纏ったまま、銀髪の目の前に立つ。

同時に機竜鋼線ワイヤーテイルを取り出し、あまりいい趣味とは言えないが動きを

拘束できる程度には縛り付けておく。

（一旦戻って、更識会長達に事情聴取でも頼むか……いや、でもな……）

よくよく考えてみれば、銀髪を確保まではしたもののその先に不安が残る。

まず、仮に更識会長に預けたとして。取り調べの最中に銀髪が俺の事について話す可能性を否定できない上、そうなれば俺としても拙い事になりかねない。何よりも任務に支障が出かねない。かと言って新王国に連れて行つては、万が一こちら側に帰って来たときに新王国を始めとした機竜側の事が漏れるため情報の漏洩防止という意味で好ましくないことが予想される。

今後の対応について、少し考えていた時だった。

「いっく〜ん……さすがにくーちゃんを連れて行くのはよしてよお〜……」

背後から声が聞こえる。

振り返れば、居たのは主犯と思われる人間だった。

「……主犯が自らお出ましか。」

出来るのであれば諸々と追求したいところだが」

「つも〜、そんな言い方しなくていいじゃ〜ん♪」

昔みたいに束さんでも全然OKって、そうじゃなくて！ ひとま

ず、そのよく分からない機体を渡してほしいんだけど……渡してくれないみたいだし。ちよつと乱暴だけど♪」

何か妙に子供っぽい装飾の杖を出してきたが、わざわざ見逃す理由もない。ひとまず「くーちゃん」などと呼ばれていた銀髪を無理矢理手繰り寄せると、そのまま直上に飛び上がる。

銀髪への負担など知らん。

「何をやる気だ?」

「……ひ、ひとまず降りてきてくれないかな」

「この状況で降りると思うか?」

やはり強硬手段を使うつもりだったのか、引き攣った顔をこちらへと向けてくる。銀髪も恨みがましい視線をよこしている。

が、こちらにも腸が煮えくり返っているのでお相子とさせてもらおう。

「で、何の用だ?」

「あ、その不細工な仮面の下に誰がいるかくらいは知っているからそんな白を切らないで欲しいんだけど……」

とりあえずさ、くーちゃんを下してあげてくれないかな?」

「……貴様がこの場から立ち去ったなら考えるが」

少し考えた末、情報源を手放す事にした。

正直、この天災を相手にしていると切りが無い。急ぎの用事があるうえ、向こうが何を隠し持っているかもわからない。半面、こちらは全力ではない上に他に誰かがいるわけでもない。最善とは言えないだろうが、安全策を取るのであればこの場から退去してもらうのも選択肢の一つだろう。

「……分かったよ」。

ちやんとくーちゃん下ろしてあげてね」

不本意だとも言いいたげな顔で篠ノ之束は何処からか飛んで来させた人参のような外見の何かに乗り込むと、そのまま去っていった。

このまま無視して確保も考えたが、付きまとわれても仕方がない。だから、銀髪を下ろして片手に機竜息銃を構える。

「お前の主にでも伝えておけ。最後通告だ。」

これ以上関わるな。もし、次があれば——」
話の途中で少し間を明け、銀髪のをいくらか掠める程度に単射で撃ち込む。

落ちた髪を見て銀髪の顔が恐怖に凍ったが、それ位でいい。

「——一切の容赦無く、消し去る」

俺からの最後通告に、銀髪は硬い表情で頷くとその場に固まった。ここにこれ以上止まる理由もなくなったため、再度迷彩を使用して姿を隠しながら飛翔。

「……行くか」

目的地は、機竜側とIS側を行き来するのに現在使っている『球体』^{スライア}。

報告と相談のため、早く行くことにしよう。

S i d e セリスティア

(この道に行くのも、久しぶりに思いますね)

新王国の中でも、極一部しか知らないとある道。繋がっている先は、私にとっても初の教え子と言える一夏が出向いている世界へとつながっている『球体』のある場所。

私も一夏の見送りの時も含めて何度か来た事はありませんが、

「元気にやっているといいのですが……」

馬車の中で特に誰に聞かせるでも無く呟きました。

私にとって、一夏はルクスとは別な意味で大切な人です。自慢の教え子であり大切な後輩であり戦友であり仲間とも言える、そんな人です。

そんな人だからこそ、心配になるのは必然と言えるでしょう。

(それに、彼は……)

前にルクスとアイリと話した事を、思い出しました。

二人が推測している、一夏の抱えるある大問題について。私も、一夏が苗字を変えた時に二人に言われて納得したのを今でも覚えてい

ます。

「……出来れば、彼に伝える前に解決したいですが。」

「そうとも言えないのがつらい所ですね」

「だからこそ、今から向こうの世界に言っても伝えなければならぬ事があるという事実が、両肩に重くのしかかりました。」

「しかも、場所が場所だけに迂闊に助けにも行けないのもつらい所です。」

「そうこうと考えている内に、駐屯部隊がいる場所に着きました。」

「ですが、何処か様子がおかしいです。少し騒がしくなっています。」

「失礼。何かあったのですか?」

「対応してくれた兵の一人に確認しますが、そこで予想外の事態が起きていることが発覚しました。」

「報告します。」

「影内一夏が、緊急の報告があるとの事について先ほど『球体』より帰還されました!」

「……! 私も彼に話があるので、ちょうどよかったですね。」

「彼は今どこに?」

「ラルグリス補佐官が来ると伝えた所、ここで待っています」

「分かりました。」

「どこにいるか、案内してくれませんか?」

「予想外にも過ぎる事態ではありますが、それでもやることに変わりはありません。」

「早く、合流するとうしましょう。」

S i d e ルクス

「一夏、セリス先輩。」

「緊急の報告とのことですが、一体何が?」

「外面的な意味を多分に含めて建設する事になった自分の屋敷で政

務を行っていたところに、突然飛び込んできた報告。夜架から聞かされた時は本当に驚いたけど、でもそれだけの事態になったと考えれば聞かない理由はない。

内容によってはリーシャ様やラファイ女王にも立ち会ってもらった方がいいかもしれないけど、今は二人とも別に仕事が入ってしまったから先行して聞くことにした、

「一夏の報告を優先してください。」

私の内容はすでにルクスには伝えてありますが、貴方の話はまだですすしね」

「はい。それでは失礼します」

とりあえず屋敷で事情を聞くことにはしたけど、セリス先輩の話は事前に聞いている。

それはセリスさんも分かっているみたいで、一夏の報告を優先してくれた。

「まず、先日IS学園に転校生が来たのですが……端的に申し上げて、彼女にスパイ目的で近づかれました」

「スパイ目的……転校前に身元調査とか行われなかったのですか？」

一緒に聞いていたアイリが疑問の声を上げたけど、僕も同意見だった。

「どうも国家ぐるみで行われていたみたいで、書類から何から偽造工作が行われていました。」

幸い、向こうの協力者の手によって大事に至る前にスパイ行為の現場を押さえる事が出来ましたが……」

「そっか……ひとまず、大事無いようでもよかった。」

でも、こっちにわざわざ来たって事はそれだけじゃないよね？」

一夏の性格から言って、最終的に問題が無かったのであればわざわざわざわざこっちに事前の連絡も無しに来ることなどは考えにくい。だから、続きを促した。

「はい。問題になったのはこの先の事で……。」

彼女と彼女が所属しているフランスという国家がスパイ行為に走った原因なのですが、国内で発生した敵性生物の排除にフランスの

保有している戦力だけでは足りず、そのために機竜……向こうでは俺の専用ISとして通している機体を欲したためとの事でした。

そして、その敵性生物の特徴が……」

「まさか……幻神獣^{アピクス}の特徴と一致したのですか!？」

セリス先輩が驚きの声を上げながら言った言葉に、一夏は神妙な表情で頷いて肯定した。

「少し前に向こうで通っている学園に出現したグリプスと似ていたとの発言もありましたから、おそらく。」

そして、もう三つ。厄介なことが推測されて……」

「その、三つって言うのは?」

さらに続きを促し、話を進めていく。

思っていたよりも話が大きくなっていることに戦慄を感じるけど、だからと言って手をこまねいているわけにも行かない。だからこそ、出来る限りの情報が欲しかった。

「まず一つ目として、出現した幻神獣の種類です。」

話聞いた限りでは、向こうで確認された種類の中で最も多かったのは、黒蟻型だったとのこと……。しかも、その黒蟻型が巣を作り始めているとのことでした」

「そう、ですか……」

一夏の報告に、少し悩んだけど伝えることにした。

元々、伝えることは確定している内容だったのでむしろちょうどいいかもしれない。

「一夏。実のところ、黒蟻型の巣はこっちでも確認されています。」

その規模は極めて小さい物でしたが……」

「そう、だったのですか?」

一夏が上げた疑問の声に答えたのは、夜架だった。

「ええ、私とセリスさんで確認してきましたわ。」

ですが、調べた時にはすでにもぬけの殻だったのが悔やまれますわね」

夜架の答えに、一夏も頷いて納得したようだった。

そして、再び報告の続きに戻る。

「二つ目は、その規模です。」

それなり以上に有力な国を窮地に立たせるほどの数が確認されている上、巢の中にそれ以上の数がある事も推測されるということです」
「大量の幻神獣ですか……むしろ、何の予備知識も持たない国がよく持ちましたね」

アイリが感心したような声で返事したけど、僕もフランスという国に対して同じような気持ちを抱いていた。

「はい。ですが、対処しきれないため最終的に《ユナイテッド・ワイバーン》を《アステイグ》に繋がる機体として欲した、とのことでした」

「そういう事ですか……」

ようやくスパイ行為と幻神獣の出現が繋がったけど、それはそれとかなり強引な手段に出たなと思った。

「それと、最後ですが……」

目撃された幻神獣と思しき生物の中に、厄介な種類ではないかと思われるものがいまして……」

「厄介な種類、ですか？」

一夏がそのように言うほどの種類はそう多くは無いですけど……一体何が？」

一夏の報告に、セリス先輩が問いを返した。

「はい。外見の証言から、ディアボロスではないかと推測される種類がいるようです。」

それらが、大量の黒蟻型やそれ以外の幻神獣と共に出現し、巢を作った。報告の内容は、纏めるところになります。それで、出来れば殲滅という方向で話が進んだのですが、さすがに規模が規模ですので……」

「……流石に、それだけの規模になると一夏でも厳しそうだね。」

僕の方からも、増援を頼んでみるよ」

「お願いします」

覆せないほどの大多数の中に、強力な一体がいる。これは戦術的には極めて厄介だと思えた。数の差で強力な一帯を覆う事も出来なけ

れば、数の差を覆す強力な一機を投入しても敵側の強力な一体に抑えられ、最終的には数の差で負ける。

ここで一夏がこの事を伝えてくれたのは良かったと思えた。今後の事を考える時間の確保もある程度できるけど、内容が内容なだけに長時間の放置はマズイ。出来る限り速く対処しよう。

「それと、さらに追加の報告が……」

ここに来るまでの道中、向こうのI Sの開発者である篠ノ之束が接触してきました。ですが、強硬手段を使っても《ユナイテッド・ワイバーン》か《アステイグ》のどちらかを奪取しようとしてきました。

その時は迎撃しましたが、今後、向こうに来る際には十分注意すべきかと……」

「そうだね……」

強硬手段を使ってきたみたいだし、これからは向こうに連絡入れるときの人選も考えないといけないかな」

ただでさえ色々と問題が多い行き来に、さらに問題が加わったことは頭の痛い問題だった。

(けれど、もう一つあるのか……)

今から一夏に伝えることは、セリス先輩から事前に内容を聞いてはいたけど、改めて話すとなるとまた気が重くなる。

だけど、それでも伝えないといけない。

S i d e 一夏

「では、一夏。」

私たちの方からも伝えなければ行けない事があります」

一通りの報告を終えた時、ちょうどセリスティアさんが話し始めた。

「俺に、ですか？」

「ええ。恐らく、今あなたが受けている任務にも関わる可能性がある

ことですから」

「まず、単刀直入に言わせていただきますが……。」

遺跡^{ルイン}から発掘された装甲機竜^{ドラグライダー}の行先を出来る限り調査した結果、不自然に行先の不明な機体が何機かあることが発覚しました。他国の行先に関するユミル教国やヴァンハイム公国に協力を仰いで調査しましたが、結果は同様です。

つまり……」

「向こうに流れた可能性が、あると……？」

俺の返答に、ルクスさんもセリステイアさんも頷いていた。

「それも、非常に高いです。」

向こうにいる協力者がそちらの方面に長けているみたいですし、出来る限り急ぐようにお問い合わせできませんか？」

「しかも、そっちの方には強奪してでも手に入れようとする人もいるみたいだしね……。」

流れていないといいけど、先に手を打っておくに越したことは無いし。一夏、お願いできるかな？」

「委細了解しました。お任せください」

再度IS側に行ってからやるが増えたが、それでも基本は変わらない。それに、当初の目的も一応は達成できた。

(後は……俺の方が、返事待ちか)

こちらの方で対応を決めるまでに必要な時間もあるし、そこをとやかく言っても仕方がない。

後は、向こうでこなすことをきつちりこなそう。

第四章（11）：タツグ決定

S i d e 一夏

「……という事で、いくつかの問題が起きましたが増援の方は掛け合ってもらえる事になりました」

「そう……」

分かったわ。強行軍だったことでしょうし、ご苦労様」

「いえ。それが俺の役割ですのよ」

新王国へと報告に行き、その後再度『球体』^{スライア}を通じてIS学園へと戻った其の後。

ひとまず更識会長へと増援を打診した旨を伝えるため、生徒会室の方へと来ていた。

「こつちの方でも色々決まってきたわ。」

ひとまず、向こうに出向く日程は二週間くらい後。色々根回ししてるけど、時間がかかりそうだからそれくらいになりそうだよ」

「大丈夫なんですか？」

話を聞いた限りだと、状況がかなり逼迫しているみたいですが……」

思いの他動くのが遅い事に意外な思いを抱くが、更識会長の考えは違うようだった。

「さつきも言った通り色々根回ししてるのよ。」

それに、今回みたいなことがまた起こったら敵わないしねえ……。少しでも可能性を減らすためにも、って意味もあるのよ。」

ま、悪いようにはしないわ」

「お願いしますよ」

一応念を押しはしたが、当の更識会長は涼しい顔で応えるのみだった。

とはいえ、これまでの事からその手腕は信頼している。ここは任せしておく事にした。

「それと、更識会長。」

報告に行った際、こちらの方でも少々厄介なことが発覚しまして

……。そちらの方についても頼んでいいでしょうか？」

「内容は？」

更識会長の目線が少し鋭くなったような印象を受けたが、気にせず続ける。

「最初にも話した、機体の流出の件ですが……。」

可能性が極めて高くなったため、出来る限り調査の方を急いでほしいのですが。よろしいでしょうか？」

「その件かぁ……。」

分かったわ。けど、流石に確実な事は約束しかねるわよ」

「それでも十分です」

ひとまず伝えるべきことは伝えたので、もうお開きかと思ひ戻ろうかと考えた時だった。

「あ、それと最後に少しいいかしらっ？」

「何でしょうか？」

だが、予想に反して更識会長にはまだ話があるみたいだった。

「さっきの話にも関連する事なんだけど、時期的に学年別トーナメントの事はもう聞いてる？」

「タッグマッチになった、という事ですか？」

「そうそう。」

で、そのタッグの事なんだけど……簪ちゃんと組んでくれないかしらっ？」

意外といえば意外な言葉に、少し訝しんだ。

正直、俺自身はわざわざ出場する理由は無いし、普段から一緒に練習している面々も簪と剣崎、凰とオルコツトあたりで組みそうな気がするので出場しなくていいかと考えていたのだが。

「ぶっちゃけると、何かあった時に動きやすいからよ。」

この前のクラス代表戦でもあんな事があったし……。」
言わんとする事は分かったため、それ以上は言及しないことにした。

「分かりました。」

簪にはもう伝えたので？」

「あつと……それは、まだなの。」

できれば影内君の方から言つて貰えるとありがたいんだけど」

文句を言うつもりは無いが、それでも思う所はある台詞だった。故に、其処だけは付かせてもらおう事にする。

「……何故に直接言わないのですか？」

「いやあく……影内君から直接言つた方がスムーズに事が進むかなあつて……」

「……本当は、ただ単に話しかけづらいだけ。なんて事は無いですよね？」

平素と変わらない口調で言つたつもりだったが、更識会長は一瞬その身を強張らせるところこつちへと向き直つて返答を口にした。

「そ、そんな訳、な無いじゃな、いい……」

「口調がおかしいのですが」

口にした返答は明らかに吃つており、向き直つた表情も強張つている。誰が見ても隠せていないことが明らかだった。

「別に俺の方から簪に伝えること自体は構いませんが……いい機会ですし、打診するついでに色々と話してみたらどうです？」

「そうですね、お嬢様。」

先程も私にそれを言つて断られたばかりだというのに。今度は影内さんに頼んでいるのですか？」

「う、虚ちゃん!？」

俺が言い終えるのとほぼ同時、虚さんが生徒会室へと入ってきた。

心なしか、少しジト目気味になっているようにも思える。

「懲りずにまたですか……」

そうやって切つ掛けを掴み損ねているからですね……」

「そ、そう言えば虚ちゃん！

デユノアさんと《打鉄式》の件はどうなつたかしら!？」

露骨な話題逸らしを慣行してきた更識会長だが、虚さんはそれ以上言及せずに溜息のみに止めると話題を切り替えた。

「ひとまず、デユノアさんには処遇が近日中に決まる事とそれまでは今まで通りの学園生活を送ってもらう旨を伝えました。本人も承諾

したみたいです。

《打鉄式式》の件も同様です。如月さんの方もすでに準備はできているみたいですし、問題なく行けば学年別トーナメントまでに『マルチ・ロツクオン・システム』以外の面は何とか用意できるかもしれないとのことでした。

いずれの案件も、学園長も了承済みです」
「ん、お疲れ様」

更識会長は短い言葉で虚さんを労ったが、此方としてはいくつか気になる単語が出てきた。

「《打鉄式式》とデュノアの処遇、何かあったんですか？」

「ああ、そういえばまだ話してなかったわね。」

まずはデュノアさんの処遇からでいいかしら？」
「ええ」

前置きも短く、更識会長は話し始めた。

はぐらかされている気がしないでもないが、それは後で言及すればいいだろう。

「まず、当面はそれとなく監視の目を付けつつ普段通りの生活を送ってもらう事にしたわ。」

詳しい理由は後にするけど、今後の事を考えての事ね。あんまり露骨に隠してばかりだと色々と面倒なことになるだろうし。

ひとまず、トーナメントには箒ちゃんと一緒に組んでもらう事になったわ」

「剣崎と？　　というか、出場させるので？」

俺の疑問に、更識会長は頷きを返すとそのまま答えた。

「まあ、ね。」

さつきも言ったけど、あんまり事を荒立てるような真似はしたくないし。こちらからの提案の具体的な内容はまだ伝えていないけど、それも影内君の方の増援が決まり次第伝えられるくらいにはするつもりよ」

「そう、ですか……。」

もしかして、ペアの打診の件は」

「簪ちゃんも普段から一緒に練習している人の方が何かと組みやすいとは思うけど、その中から箒ちゃんが抜けちゃうとね……。」

勿論、簪ちゃん自身が決めた相手がいるなら何も言わないけど。相手が決まっていなかったらと思ってるね」

ある程度の納得を得たところで、別な疑問の方にもこたえてもらう事にした。

「《打鉄式式》の方も何かあったのですか？」

「実はねえ……。」

いえ、今言うのは止めておこうかしら。でも、すぐに分かると思うわよ」

話そうとしたところで考えを変えたらしく、更識会長ははぐらかすのみだった。

が、その顔はどちらかと言えば悪戯を楽しむようなそれになっている。

「そうですか……。」

まあ、此方に問題が無いのであれば特に何もいう気はありませんが」

「それは大丈夫よ」

大事な部分のみを確認にとどめ、その日は終わりにした。

S i d e 箒

「さて。」

色々と思う所はあるだろうが、暫くの間はよろしく頼む」

「よろしく……。」

諸般の事情により、暫くは監視という意味も含めて一緒に行動することになった。

が、肝心のデユノアが沈んだままだった。というより、生気が感じられない。

(……駄目だ、昔の自分を思い出すな)

どこか親近感の様な感情も覚えたが、だからと言って何か進展する訳でも無い。

「……」

「……」

そして、目下最大の問題として致命的なまでに会話が続かない。

「……なあ」

「……何？」

「後で、一度手合わせしてもらってもいいか？」

会話の糸口が欲しかったというのもあり当たり障りの無い話題を言ったつもりだったが、ディノアには意外なセリフに聞こえたらしくかった。

目を見開きながら、聞き返してきた。

「……どういう事？」

「いや、トーナメントには出ることになるんだし、互いの実力を把握するためにも思ってたな」

「本当に、普通に出場していいの？」

てつきりどこかで負けるようにでも言われる物かと……」

なぜか妙なことをデュノアが言い出したが、そんなことをしなければいけないことなどない。

「ああ。私としてもやるんだったら是非とも優勝を狙いたいし、楯無さんからもそう言われてるのでな」

「何で……？」

「知らん」

楯無さんが何を考えているかなどわからないのは本当の事なので、そのまま嘘偽りなく答えた。

「……え？」

そして、デュノアは素つ頓狂な声で返事していた。

(そんな声を出さなくてもいいだろう……)

微妙に引かれた気がしたが、そこまでおかしいことは言っていない……はずだ。

「何、悪いようにはしないだろう。」

現に、お前の目の前にその一例がいる事だし」

「一例……?」

理解できないとでも言いたげな表情で見られるが、其処を詳しく話すとは色々面倒なことになるので適当に答えておくことにした。

「気にすることじゃない。」

ただ、あんまり心配しなくてもいいんじゃないかという話だ。それに、悪いようにする気だったら軟禁なんてもんじゃ済んでいないだろうし」

「それは……そうかもしれないけど……」

未だ言い淀んでいるデュノアだが、このまま意気消沈したままでもらうのは少々好ましくない。

だが、これ以上気の利いた言葉が言えるわけでもないのとおりあえず話を元に戻そうかと思った。

「さて。とりあえず模擬戦でもしないか?」

「……って、今までの流れでなんでそうなるのさ!」

「いや、考えても結論が出ないなら体を動かした方がいいかと思ったんだが」

「発想が飛躍してない? それ……」

私の返答にデュノアはどこか呆れ顔だが、先程までの沈み切った顔よりは幾分いい顔になっているように思えた。

「それに。どの道お前が沈んでいても話が好転するわけでもない。」

だったらどう転んでもいいように、何かしらの実績はあったほうがいいだろう」

「……そう、なのかな」

「何も無いよりはマシ、の方がいいか?」

「ちよつと前向き過ぎない……?」

ひとまず、盛大に呆れられているのはとにかくとしてデュノアとの会話が生まれてきていた。

(これでいいか)

当初の目的である会話を生むという事には成功しているし、デュノアの視線は未だ下向きだが、それでも最初の生気がまったく感じられ

「だけど」

「だったら、いい……いい、のか？」

簪の返答に困惑はしたが、それで誰も不幸にならないならそれでいい。

そう思い直し、この話題はここまでにすることにした。

「ああ、それと簪。少しいいか？」

「何？」

「学年別トーナメントの事なんだが、タッグを組む相手はもう決まったのか？」

この事について、まだ話していなかったことを思い出して聞いておく事にした。決まっていなかったらついでに申し込んでおくのもいいだろう。

「えつと……まだ、だけど。箒はデユノアさんとだし、鈴はオルコツトさんと組むことにしたみたいだしで……。」

でも、何で？」

「いや……良かったら組んでくれないか？」

一応聞いてみた所、簪が妙に驚いたような顔になっていた。

「わ、私と!？」

「待て、声の音量を下げてください」

予想外に大きな反応に一瞬戸惑ったものの、そのままでは

「先日、タッグを組んでくれと押しかけられたことがあったのは覚えてるか？」

「あ……うん」

「またあんな事があつては敵わないが、かと言って不参加にするわけにも行かなくてな……。だけど、もし有事になったときに組んだ相手が事情を知らない相手だったら色々やりづらい。」

更に言えば、普段から一緒に特訓している相手の方が動きも合わせやすいんじゃないか、と思つてな。操縦者としての簪の腕前は疑ってないし、

ひとまず伝えるだけ伝え、後は返事を待つだけ。

簪は少し逡巡したみたいで、返事まではわずかに時間を要した。

「わ、私でいいんなら……」

其の後の返事は、俺としても安心できるものだった。

だが、その中にも気になる点があった。

（それにしても……顔が少し紅潮していた気がするが、調子でも悪いのか……？）

負担をかけていなければ、いいのだが。

Side 簪

今現在、複数のクラスが合同で授業を行えるほどの大教室で行われている授業に出席していた。

とは言っても、私と影内君に関してはある意味で儀礼的な側面が多分に含まれており、席も一番後ろの目立たない席に座っている。

「それでは、特別授業を始めます。

臨時講師の如月さん、お願いします」

「はい。

それでは、ISの基礎については授業である程度習っていると思いますので説明を省き……」

そう、如月さんが整備課向けの臨時教員としてIS学園で授業していた。理由としては、整備課の設備を使わせてもらう代わりに整備課全体への授業を行うための事だけど、如月さんの性格を考えると多分この特別授業も楽しんでるんじゃないかと思える。

デユノアさんと組むことになった筈にも聞いてみたけど、同じ意見だったから多分間違いじゃないと思う。

現に、今現在授業している如月さんはすごい笑顔だった。

（如月さんの考え方に毒され過ぎた人が現れないといいけど……）

授業の内容自体は特に心配していない。

如月さん自身、筈にISに関する様々な知識を教えてきた経験と実績がある以上、ある程度教えるという事には慣れている。教えている内容に関しては言わずもがな。

だけど、もしどこかで何かの間違いが起こり如月さんの設計思想が受け継がれてしまったら。私は、そこが少し心配だった。

「さてー！」

元気に《打鉄式式》の開発を始めようか！」

「よろしくお願いします」

そして、特別授業も終わった放課後。

私と如月さんは整備課の施設の一角をほぼ占領させてもらって、《打鉄式式》の開発を行っていた。部品は既に解体された《白式》の部品を流用する形で調達したため揃っていて、後は組み立てるだけ。それだけでも二人だけで行うとなると相当に時間がかかるけど、それでも完全に開発が止められかねなかった時に比べればずっと希望が持てる。

「という事で、まずは組み立てから入ろうか」

「はいー！」

そうして、私たちが作業を始めてそう時間が経たない内の事だった。

「すいませーん！」

ちよつといいですか!?!」

扉を開けて現れたのは、先程授業を受けていたらしい整備課の生徒。それも、一人ではなく結構な人数がいる。

「ど……どうしてここに?」

ここで開発していることはあんまり人には言っていないはずだし、いくらなんでもタイミングが良すぎる。そう思って聞いてみると――

「いやね〜。

影内さんと剣崎さんと凰さんとオルコットさんと布仏さんが、ここで更識さんが専用機の開発をしているってことを教えてくれてさ。しかも、如月さんもやっているって言うし。

これは、もう手伝いに行くしかないと思ってね！」

——すごく意外な返事が返ってきた。

「四組の人としてはクラス代表の機体を仕上げるのを手伝えるなら手伝いたいし、整備課としてもIS一機丸々仕上げるのに関わる機会なんてそうそうないからいい経験になるしよ」

「それに、今まで更識さんが特訓とかいろいろと頑張っていたのを見ている人もいてね。頑張っている人が居たら手伝いたくなる人もいるんだよって」

他にも来ていた人たちが、口々に追加で応えてくれていた。

私は予想外な展開に思わず呆けた。けど——

「いや〜……これは、予想外に嬉しい展開だねえ〜♪」

それでは皆さん、張り切っていきましょーか！」

——如月さんは特に驚くでもなく、むしろ嬉々として整備課の生徒達からの提案を受け入れていた。

こうして、私の専用機開発は予想外な展開を見せつつも順調な滑り出しを見せていた。

Side 一夏

「……で、今度は何の用件でしょうか？ 織斑教諭」

「《白式》が解体された件についてだ。

お前は、その事を知っていたな……!?!」

「さて。何のことでしょうか？」

例の如く消灯直前に呼びだされた俺は、織斑教諭から《白式》解体の事について詰め寄られていた。

「とぼけるな！」

この前それらしいことを言っていたのは、しっかりと覚えているぞ！」

「そうですか……」

もうなんか色々と面倒にしか感じないが、それでも答えるだけこた

えるとしよう。

後で直接言えばよかつただろうなどと言われても困るし。

「何故解体した!？」

アレはお前が乗るのに……」

「何度も言いましたが、俺は乗る気はないです。

そして、乗る気の無い機体を押し付けられている人間の気持ちも少しは考えてください」

ここまで言ったところで踵を返し、そのまま扉に手をかける。

「それで、要件はこれだけですか？」

なら、もう部屋に戻って寝ておきたいのですが……」

「待てー!」

織斑教諭が声を荒げて静止してきた。

もう部屋を出ようとしていた手前、面倒に感じたが

「お前は、そんなにあの四つ足や……もう一機の方が、いいのか？」

そして、聞き捨てならない一言が発せられた。

「……何のことでしょうか？」

俺は《ユナイテッド・ワイバーン》しか使っていませんが?」

「……クラス代表選の時、あの化け物共を倒した、あの白い機体。

アレは、お前ではないのか?」

俺が発した確認のための問いへの、織斑教諭の答えはある意味で重大な事実を物語っていた。

「……あの時の俺の動向は、事後処理の会議の席で全て話したはずですが」

「あの程度、その気になればいくらでも言える。

白い機体の動き方は、根底の部分でお前とよく似ていた。機体の特徴も含めて考えても、お前が乗っていたと考えるのはそう可笑しくはないだろう」

淀み無く答える織斑教諭に、いくつかの意味を含んだ苛立ちを覚えていた。

（腐っても世界最強と呼ばれただけの事はあるか……っ!）

だが、いくら見破られていると言ってもそう簡単に認めるわけには

いかな事実でもある。

だから、この場では白を切ることにした。

「仮に、そうだとして。あるいは、そうでないとしても。

貴女に話す義理は無い。だからこれ以上、俺の仕事に干渉してこないで下さい」

誰が来るかはわからないが、この次来る連絡要員への報告内容が増えたことに頭を抱えた。が、それ以上に別な思いもある。

（未だ隠せるほどの腕前は無いと。そういう事なのか……っ！）

忸怩たる思いを抱きながら、部屋へと戻っていった。

第四章（12）：密会

S i d e 一夏

「……本当に、そこまでのメンバーでこちらに来るのですか………？」

「はい。そういう運びになりました」

新王国へのあの報告から暫く経って。

俺は、向^{新王国}こうからの連絡役として来たアイリさんと、付き添いとして同行していたフィルフィさんに何かの間違いじゃないかと思つて聞き返していた。

「そ、そんなに来て大丈夫なんですか……？」

「心配、ないよ……」

「新王国には極秘裏ではありますが一時的にローザ卿が滞在する手筈となっております。ユミル教国の方にはヴァンハイム公国からコーラルさんが、ハイブルク共和国には市場への出席の名目でヴァンフリーク卿が滞在することでそれぞれ穴を埋めています。」

まあ、コーラルさんとローザ卿はともかく、もう一人で危ない橋を渡ったのは本当みたいです」

約一名、おそろしく相手したくない人^{隊長}の名前が出てきていたが、それ以外でも気になる部分が出てきていた。

「しかし、なぜそこまでして……？」

増援メンバーについては俺が付いて行く必要性を感じないほどの安心感があるが、むしろそこまでの事をしてこれほどの人員をそろえた理由が気になった。

「簡単に言うと、蟻の『巣』が出現しているという話が出たためです。」

新王国の方でもいくつか確認されていますが、そのいずれも蛻の殻か小規模で有力な情報が得られていないのが現状です。そこで、こちらの方で大規模化した巣から何か有力な情報が得られないかと考えての事だそうです。

また、一国のみでは情報の信憑性について何かと問題にされる可能性があるため、ユミル教国のほうからも来る運びになりました」

アイリさんの説明に、なるほど、と思った。

確かに、あの蟻によつて実害が出ているにも関わらず未だ詳細が不明。情報戦で後手になることがどれだけ恐ろしいかなど、言うまでもない。

ただ、一部の貴族はその調査の際に此方の戦力で行えれば自分たちの懐が傷付かない、とでも考えていそうだと考えてしまうのは俺がひねくれているからだろうか。

「ひとまず、こちらの協力者である更識会長達にはその方向で話しておきます」

「ええ、お願いします」

そこまで話した時、唐突にフィルフィさんが俺の目を見ると、そのまま話し始めた。

「一夏君」

「はい」

そして伝えられた言葉は、俺にとっては嬉しいものだった。

「ルーちゃんが、ご苦労様つて。後、またこんな事があつたら、ちゃんと伝えてつて。一人でやろうとし過ぎないようにつて、言つてたよ」

「一応私からも言つておきますが。」

一夏、貴方は自分でやろうとし過ぎる部分があります。もう少し、自分を大事にするという事、そして、無茶な事はしないという事を覚えてください。

……兄さんの弟子という時点で、無茶をしないようにというのは半ば無意味でしょうが」

「……さすがに、それは」

最後が酷い言われようだったけど、それ以上に嬉しい事を言われた。だからこそ、裏切つてはいけなないと。改めて、そう決意できた。

「さて。デュノア夫人、そしてデュノアさん。

此方として、現時点までで決定したことを伝えます」

「……はい」

『さて、どうなったのかしら？』

影内君から報告を受けた日の放課後。

下準備は既に終わっており、そこに影内君から増援メンバーが決まったという旨の報告を受け、早速デュノアさんを読んだうえでフランスに連絡を取っていた。

「まず、前提の確認をしますが……。」

今現在、貴女達が抱えている問題は大きく分けて三つ。デュノア社の主幹工場が占領されていること、化け物への対抗戦力の不足、ISコアが破壊されたことによる責任追及。

これで、合っていますか？」

『ええ。そうなるわね……』

「でも、これだけの問題を一度に解決する事なんて、もう……。」

横で箒ちゃんと一緒に見ていたデュノアさんが悲観的に呟く。さらに、通信先に居るデュノア夫人も同じような顔。けど、それこそがある意味で私の狙い目。

わざとらしく溜めを作った後、それとなく話す。

「そうね。確かに、一度に三つ全てを解決するのは不可能だわ。

精々できたとして、二つかしら」

『……なんですか？』

「会長……貴女は、一体何を言ってる……？」

私の言葉に、デュノアさんとデュノア夫人が揃って不信感に満ちた声を上げる。

「ただ、それでいい。向こうの手札は知っている。今はこちらの手札を切る番。」

「まず、貴方達が抱える問題ですが……。」

内二つに関して、非常に簡単な解決方法があります。しかし、そのためには貴女達にも協力していただく必要があります。いいですか？」

『……何を、しろと?』

デュノア夫人は相変わらず不信感に満ちた声で問いかけてくるけど、それは構わない。

第一、すぐに信用されるとおも思ってははいないし。

「まず、フランスの方で破壊されたISについて。」

「今から私が提示した形で説明していただけますか?」

『……内容は?』

「簡単です。コア以外の部分が破壊されたと説明してください。それ以外はむしろ現実通りに、特に量産型ISとして大きなシェアを持つ《ラファール・リヴァイブ》が、コアが無事だった事が奇跡的だったということを強調して」

私の説明に、デュノア夫人は相変わらず不信の目を向けている。

そして、次の台詞はそれを一切隠そうとしていないものだった。

『……それで、一体何が好転すると?』

結局、ISコアが失われていることには変わりはない

「デュノア夫人、これが見えますか?」

言葉と同時に、ある物を取り出して見せる。

今回の交渉における、切り札その一を。

「……!? そんな……ISの、コア!!?」

『ど、どこから……』

デュノアさんと夫人が揃って驚愕の声を上げたけど、それも想定内の範囲内。

「実は以前、この学園には無人ISが襲撃を仕掛けてくるといふ事件が発生してまして。」

「このISコアはその時、鹵獲した物です」

「そ……そんな話、どこからも……」

「箝口令が出ていたし、当然といえば当然でしょう?」

あえて軽い口調で、流すように話しておく。

「私達のさっき言った説明も、コレがあれば問題ないでしょう?」

『……それを、私たちに渡すというの?』

「まあ、そうなりますね。」

今はまだ手元に隠して置いていますが、このまま世界大戦の火種にでもなったら一大事ですし。だったら、角が立たない方向で有効に活用したほうがいいとは思いませんか？」

私の発言に、デュノア夫人はいつたん黙ると何か考え込んでいるようだった。その様子は、商談の内容を吟味している商人のようにも見える。

『……確かに、それがあれば事後処理の問題は大幅に軽減できるでしょう。』

しかし、そもそもとして事後に至れるかどうか、という問題が残っていますか？」

「それは……つまり、あの化け物を殲滅できる戦力が無い、という事ですかね？」

私の確認に、デュノアさんと夫人がそろって苦い顔になった。

「それでは、戦力の不足に関して……影内君、いいかしら？」

「ええ、構いませんが」

そして、ここで一度影内君の方に話を振る。

増援の決定は聞いていたけど、やはりここは本人から直接聞いた方がいいでしょう。

「まず、断言してしまいますが。」

貴女達が対抗戦力として欲した、あの白い機体。貴女達が推測した通り、俺の会社はあの白い機体と繋がっています。

それと、本社の方からは基本的な方針として殲滅が可能な戦力を送り込むためにあの化け物を確認次第所在を知らせるようにと、仰せつかっていています」

影内君の宣言に、デュノアさんとデュノア夫人が揃って絶句したが、私も含めて本当に驚くのはここからだった。

「そして今回、貴女達フランスへも同様の対応……つまり、出来るのであれば殲滅する方向で本社の方では話が進みました。

その結果、あの白い機体を最低戦力とする合計八機を出撃させる許可が下りました」

「……………え？」

『……………影内さん。貴方、今なんて言いましたか?』

デユノアさんと夫人の二人が信じられないという声を上げたけど、私としても、自分の耳が疑わしくなる発言が飛び出してきた。

「いえ。ですから、あの白い機体を最低戦力とする合計八機を出撃させる許可が下りました。つまり、貴女達が此方の要求を呑んでくれるのであれば、その戦力で増援に向かう事が出来るという事です」

《アステイグ》を含んだ上で最低戦力と言い切れるほどの戦力が八機とかいう、背筋が凍るような思いと敵でなくて良かったという本当に場違いな思いが同時に出てきた。

けれど、そこで驚いてばかりもいられないからひとまず続きを促しておく。

「……………と、まあ。そういう事です。」

貴女達が喉から手が出るほど欲しがった戦力は、私達の出す条件を守れば無理に奪わなくても協力してくれるという事です」

『……………二つは解決できるとは、こういう意味ですか。』

しかし、それを以って貴方達はいったい何を望むというのです?』言葉には相変わらず不自信が見えるけど、向こうは乗り気になってきている。少なくとも、糸口は掴んでいる。

そう確信して、私は続きの言葉を紡ぐ。

「まず、いずれはあの化け物を殲滅するための軍事作戦が実行される……………それは間違い無いですね?」

『ええ。』

そうしなければ、フランスには後が無い』

「その作戦に、フランスや影内君の方からの増援以外の……………他国のI Sを参加させること。また、その作戦の決行日時を二週間ほど後の日とする事。」

これが、第一の条件です」

私の言葉に、デユノア夫人は再び思案顔になった。

『第一という事は、他にもあるのかしら?』

「ええ。とはいっても、次の条件の方がおそらくは大前提なのですが……………」

第二の条件は、ここでの交渉……特に、I Sコア周りの事を極秘裏とする事。I Sコアの受け渡しが行われたなんて知れたら、お互いに大事になるでしょう?」

『そうね……。そこは、まあ当然かしら。』

他は?』

提示した第二の条件に対しては特に反応を示すでもなく、デュノア夫人が続きを促してきた。

「第三に、今後このような事……つまり、スパイ行為を行わない事です」

『それは大丈夫でしょうね。』

今回の事で、骨身に染みて分かったことですし』

呆れたような声で答えたデュノア夫人だけど、多分その呆れ声を向けた対象は自分たちだったことでしょう。

そこに対して突っ込むようなことはせず、あくまで話の続きへと戻っていく。

「第四に、私達が今後、フランスを始めとした欧州各国において何かしらの行動や調査を行う際、そのバックアップとなって頂く事」

『……なるほど。』

しかし、私達も種々のパイプはあるとは言え、それでも限界はありますが?』

「それで、十分です」

私の言葉に、デュノア夫人は思案顔に戻った。

多分、内容を吟味しているのだろう。デュノアさんは話に付いていないのか黙っている。そうして少しの間、生徒会室は静寂に包まれた。

だけど、それも長い間の事ではなかった。

『……今すぐ解決しなければいけない問題の解決には、協力する。けれどその先の経営回復は自分たちでやる。そして、協力の見返りに先ほど言った条件を呑む。』

今までの話を要約すると、こういう事ね?』

「そうなりますね。』

で、どうします?」

今までの話の中身を簡単に確認し、再び思案顔になったデユノア夫人。返事には時間がかかるかもしれないと思っていた私の耳に、第三者の声が響いた。

『いいじゃないか。』

この話、受けよう。シルヴァーナ』

響いたのは、低くてもよく通る男性の声。ゆっくりとした口調であり特に迫力を感じるようなものではないけど、不思議な抗い難さがある。

『れ、レイヴィング!?』

「父さん!」

その正体は、デイノアさんと夫人の二人の叫び声ですぐに割れた。デユノアさんの実父にして、デユノア夫人の夫。そして、デユノア社の社長。レイヴィング・デユノア其の人だった。

金属の擦過音も聞こえるのは、おそらく車椅子を押しているからでしょう。

「……レイヴィング・デユノア社長御自らが対応なさるとは。

ところで、確認しますが。返事は先程の言葉の通りでいいのですか?」

『今のフランスの状況を鑑みれば、当然の結果だろう。』

このままでは、我々どこかフランスも座して死を待つばかりときえ言える状況なのだしね』

どこか達観したような声に、疲れのような物がにじんでいたようなのは多分間違いないでしょう。

「と、父さん……こんな、すぐに決めて大丈夫なの……?」

『そうよ!』

どう返事をするにしても、まずは方々に……』

二人からの抗議を、デユノア社長は軽く手を翳して遮ると通信先から私へと声をかけてきた。

『フム……更識さん、と言ったね。』

返事はどれくらいの間、待ってもらえるのか。聞いてもいいかな

？』

「そうですね……。」

先ほど言った、第一の条件については聞いておられましたか？」

『ああ』

私の問いに、短く、だがしっかりとデュノア社長は返事した。

「先程話した、決行日時。」

貴方達がそれに間に合うように返事してくださいれば、それで十分です」

『となると、二週間後までに準備を終えられるようにか……。」

時間が無いね。可及的速やかに準備を始めよう』

デュノア社長はさして気負うでもなく、さらりと云つてのけた。その言葉にデュノアさんと夫人が何か言う前に、社長が続く言葉を話していた。

『シルヴァーナ。君にも負担をかけることになる。が……もう少しの間だけ、頼む。必用なのは今を乗り切ることだけだ。

なに、首が切れるにしても私だけさ』

この言葉に、ついに夫人が折れた。

諦めたように、だけどどこか吹っ切れたようにも聞こえる声音で叫んでいた。

『ああもう！』

いっつもそうやって人の話を聞かないのだから!!』

言葉とは裏腹に、その顔には活気が満ちている。

『シャルロット』

「は、はいっ！」

今までのやり取りの間ずっと呆気に取られていたデュノアさんは、デュノア社長からの返事で正気を取り戻した。

『苦勞をかけて、すまなかつたな。』

もう少しで終わる。それまで、辛抱してくれ』

父親からのその一言にデュノアさんは張りつめていた何かが緩んだようで、その場で膝をつくと嗚咽を堪えるように俯いて震えていた。

それから幾許と掛からず、話は纏まっていた。
概ね、私の狙い通りに。

S i d e 一夏

「……思っていたよりは要求内容が普通のように思われますが。」

その実、何を考えてあのように？」

一通りの話が終わり、デユノア夫妻との通信も切り、デユノアと劍崎も退室した後。

生徒会室に残っているのは、俺、虚さん、更識会長の三人だけになっていた。

「……あんまり良い手とは言えないけど。」

今後、手を出されないようにするためよ」

少しの苦々しさを含めたように、更識会長は返事を返した。

「具体的には、どのように？」

「ぶっちゃけると、手を出すよりも協力した方が得だと思ってもらえればいいのよ。」

手を出せば手痛いしつぺ返しを貰う、けれど協力すればあの化け物周りの件での協力は得られる。並みのISでは太刀打ちもできない化け物が現れた時の、問題解決の協力が。

そうなれば、どちらの手を出した方が得かは算数ができればわかる話でしょう？」

更識会長の言葉に納得すると同時に、其の手腕と豪胆さに呆れとも関心ともに似つかない溜息が自然と出てきた。

「要は、力を見せつけて抑え込みつつ協力体制を一時的にでも築き上げるのが目的と。」

だからこそ、量産型とはいえISが手酷いダメージを受けて撃墜されたという事実は知らしめつつ、各国のIS部隊を集めた上で作戦を執行させようとしたわけですか。そして、内容において譲歩する部分

が多かったのはそもそも他国のISを参加させたいという作戦の決行そのものが目的だったからと」

俺の返答に、更識会長は頷いた。

「圧倒的な力を見せつけられた上、武力以外での圧力をかけようにも相手の得度は知れない。」

そんな相手と事を交えるなんて、少なくとも私ならごめんだしね」
「しかし、そう上手く行きますか？」

確かに更識会長の思い通りに事が運べば此方としても動きやすくなるが、逆に各国を刺激して此方に降りかかる厄介事が増えればこちらの方が面倒なことになる。

が、更識会長は否定の意を示した。

「その可能性は低いと思うわよ。」

国防において、迎撃不可能な兵器っていうのはそれだけでも脅威なのよ。だからこそ、町中にいきなり現れて戦車一台や戦闘機一機とかでは全然足りないほどの火力を叩き出すISは脅威足り得る。でも、それを簡単に倒せるような脅威……それも、人間同士の損得勘定ではなく、野生の本能で動くような化け物がいる。

そして、それを倒しうる戦力も存在する。それだけの能力を持った相手を自国の敵に回そうとするのはそういないわよ」

更識会長の話に、そんな物なのか、と思いつつも納得しておくことにした。

「それとさ」

それあでの口調とは打って変わって。

幾分優しく、同時に悪戯に成功した子供が得意げになっているような、そんな感じを漂わせる口調になっていた。

「やっぱり、家族は仲良く居て欲しいじゃない？」

「それについては全面的に同意します」

この言葉には、素直に頷いた。

「……っていうかさ。」

私も驚いたんだけど、増援に来てくれる人達が影内君と《アスデーグ》が最低戦力になるっていうのは本当？」

「対等な条件で行った模擬戦の結果、勝率が四割を超えた人がいます
ん。というか、中には本気出された時点でまともな模擬戦にならない
人もいます」

「……世界は広いわね」

異世界の機竜ドラグナイト使いの話なので、広いという表現には語弊があるよう
に思われた。

それに、俺が強いのは《アスディーク》あつての事なのだが。

(……俺如きでこれだと、ルクスさんやメルを見たらどうなることか)

いずれ行われる殲滅作戦を成功させるのは当然だが、其の後の事が
少し不安になってきた。

第四章（13）：タツグトーナメント

S i d e 一夏

「……かなり、人が入っているな」

「そう、だね……」

フランスの問題もひとまず解決の目途が立ち、簪の《打鉄式式》も完成して迎えた学年別トーナメントの当日。

観客席が各国の要人で埋め尽くされているの控室から見て、多少げんなりした気持ちを抱えていた。

（ほとんどは研究機関か各国の軍事関係だろうな……スカウトか青田刈り目的だろうが）

遠慮なく本音を言ってしまうえば、新王国の機竜使いドラグナイトとして生きていくことを決めている以上こういう場所で注目を集めるのはかえって面倒事になりかねない。

とは言え、一応はこの学園に通っている以上はあまり露骨にこういった行事を特に理由もなしに参加せず悪目立ちもしたくない。

（それに……お披露目位は手伝ってもいいだろうし）

隣で一緒に控えている簪を見ながら、今までの事を少し考えていた。今は選手用の個別控室で抽選の結果を待っている。

簪の専用IS《打鉄式式》は第三世代兵装一部を除き完成している。完成後は一緒に練習しつつ細かい調整を手伝い、完成度を高めていった。が、やはり完成までにそれなりに時間がかかっているため、十分とは言えないものもある。

（……そこは、俺としても出来る限りフォローしつつ簪の操縦者としての腕前に期待するか。今まで一緒に訓練した感じだと、十分期待できそうだし。

とはいえ、さすがにトライアド三和音のようには行かないだろうが……）

練度の不安はあるが、もうどうしようもない。出来る限りの最善を尽くすのみだ。

「ねえ、影内君」

「何だ？」

そうこうと考え事をしていたら、簪からの声がかかった。

「影内君は、どのペアが強そうだと思う？」

「そうだな……。」

確実なのは凰とオルコットだろう。互いの能力が前衛と後衛ではつきりと分かれている分、立ち回りやすいだろうしな。それに個々の能力も十分。

その次に、剣崎とデュノア。二人とも第二世代の機体だが、基本性能の面では侮れない上、遠近双方からデュノアの手厚い弾幕支援を受けつつ一撃必殺の剣技を持つ剣崎が突っ込んでくるとなるとな……」

凰の《甲龍》とオルコットの《ブルー・ティーズ》も修復が完了しており、2人も当然参加する。が、やはり修復に多大な時間がかかってしまったため連携の練度に不安が残る事態となっていた。が、2人の機体特性を考えれば無理に複雑な事をするより互いの役割りをキッチリと熟した方が実力を出せるだろう。そして複雑な連携を必要としないという事は、多少の練度の低さは補えるという事にも繋がる。とはいえ、一度その連携を崩されると脆いだろうが。

剣崎とデュノアの方も侮れるペアではない。いつかにデュノアと模擬戦したとき、彼女の遠近双方での攻撃能力と、それを支える対応能力の高さは既に見た。そして、剣崎は近接限定とはいえ一撃必殺と呼んで差し支えないほどの剣技を持っており、其処に至るまでの回避能力においては群を抜いていると言ってもいいだろう。想定される戦術はデュノアの種々の銃火器での火力支援を受けつつ剣崎が突っ込む。それだけでも、あの二人なら強力な陣形足り得る。弱点らしい弱点と言えば両方とも装甲が厚くはないことくらいだが、それ以外にも探した方が多分いい。

「……個人的に少し聞いておきたいんだけど、ボーデヴィツヒさんとかは？」

「ボーデヴィツヒか……。」

「何でかは知らないけど、影内君を目の敵にしていたみたいだし。

もし当たることになったら、って思ってた……。」

簪の問いかけに、少し考える。

確かに、ボーデヴィツヒ自身の腕前は悪くない……どころか、おそらくは一年生内においてボーデヴィツヒと並ぶほどの腕前を持つ人はほとんどいないだろう。

「……正直、同学年内での個人としての腕前で言えば間違いないけど上位だろうな」

だが、今回のトーナメントのルールにおいてはその限りではない。むしろ、やりようによっては脅威度が激減するだろう。

「どう戦うつもりなの？」

横の簪が少し心配そうな顔で聞いてくる。

少し気が早いけど、伝えておいた方がいい内容だとは思ったのでこの場で伝えておく。

「確かに厄介な装備を持っているし、個人としての腕前も高い。

が、それだけが勝敗を左右する重要な要素というわけでもない。特に、今回のようなタッグを組んで戦うような場合はな」

「えっと……つまり……」

簡単に要点だけを言ったが、簪は理解が微妙そうな表情をしている。

だから、もっと直接的に分かり易く説明することにする。

「……まず、ボーデヴィツヒの態度からして多分、任意で組んだペアではなくて抽選で決まったペアになるだろうな。そうなれば連携の練度は低いだろうし、そもそもボーデヴィツヒ自身が連携を取ろうとするかどうか自体が怪しい。加えて組む生徒は多分一般の生徒だろうから、鳳とオルコットののように互いが役割をこなせばそれなりに形になるという事もない」

「でも、組むペアがそうと決まればボーデヴィツヒさんも対策してくるんじゃない？……？」

簪が口にした疑問は至極真つ当なものであり、ある意味では当然と言えるものだ。

ましてや、ボーデヴィツヒは本職の軍人。連携の重要性を知らないはずがないのだから、むしろ簪の言った通り何らかの対策をしてくると考えるの方が自然だろう。

だが、個人的にはそうと思えない部分があった。

「ボーデヴィツヒはそれを分かった上でフォローしない可能性がある。」

前に戦った時、ISという力を示すことにこそ意味があると言っていた。つまり、アイツは何らかの理由で力そのものを誇示することに執着している。今回のトーナメントのルールで、その目的を果たすのに手っ取り早い手段は何だ？」

「……実質的に、一対二での圧勝？」

核心は無かったのだろう、少し弱い語調で眩き気味に放たれた簪の台詞に俺は頷いていた。

「俺も同じ考えだ。」

つまり、ボーデヴィツヒは戦力的な不利を承知であえて一対二の状況での戦いを挑んでくる」

「でも、そんな事……出来るの？」

いくら専用機持ちって言ったって、其処までの事を……専用機持ち同士でのペアもいるのに……」

簪の懸念ももつともだが、今までのボーデヴィツヒの言動や織斑教諭の発言を考えるとやる可能性は高い。

そう考え、理由も一緒に言っておくことにした。

「さつきも言ったが、ボーデヴィツヒ自身の実力ははつきり言って高い部類にある。一般生徒同士のペアだと一対二でも勝負にならないだろう。」

専用機同士のペアを相手にしても、腕と立ち回り次第では互角以上に立ち回ることでもできないはない。いつかの模擬戦の時の山田教諭なんて、量産機で専用機二機を相手にしていたしな」

「ボーデヴィツヒさんも、それが出来るって言う事……？」

「出来る出来ないより、本人が出来ると思っているだろうって事だ」

俺の返答に、一応は言いたいことを理解してくれたらしい。

「もし、そうだったとして……どうやって勝つつもりなの？」

影内君なら心配しなくてもいいのかもしれないけど……」

簪の懸念を聞くと同時に、少し苦笑が漏れ出た。

(確かに、手が無いわけではないが。それよりも此方が問題か)

簪の言った通り、ボーデヴィツヒと《シユヴァルツェア・レーゲン》の組み合わせに対する対策はいくつか考えてある。

が、やはり一人でできることには限りがある。

「やりようは無くはないだろうが……それよりも、出来れば協力してほしいんだが」

「……初めての实战になる《打鉄式》で、どこまでやれるかは少し不安だけど。

でも、頑張ってみるね」

不安を隠しきれていない簪だが、それも無理のない事だ。《打鉄式》を使つての衆人観衆の中での公式の試合は初めてであるうえ、彼女自身も思い入れのある機体なのだから無様な姿など見せられないと気合が入っていることだろう。

だが、今の彼女はそれが重圧となつて極度に緊張し、体が硬くなっている印象を受ける。

とはいえ、上手い事を言えるわけでもない。だから、率直に思っている事だけ告げた。

「こういうことを言うのもなんだが……俺は簪の事を当てにしている」

S i d e 簪

「こういうことを言うのもなんだが……俺は簪の事を当てにしている」

ここまで多くの人の中で戦うのは初めての事だったから緊張しっぱなしだった私に、ペアを組んでくれた影内君は意外な一言をくれた。

「確かに一人で相手出来なくは無いが、それと勝てるかどうかは別な事だ。

簪の腕前は一緒に鍛錬していたこともあつてある程度知っている

し、それが十分信用できるものであることも知っている。

だから、そんなに緊張しなくていい。普段通りに、全力でやればいい」

今まで、箒と組んでの二対一でもほとんど勝てたことが無いだけにこんな風に言ってくれるのは意外だった。

「それに、いざとなれば二人で戦えばいい」

「二人で……？」

影内君の言葉に、少し考え込みかけました。

ですけど、私が答えを出す前に影内君が続きを答えてくれました。

「そうだ。折角のタッグマッチトーナメント、わざわざ二対一を二つやる必要はない。二対二で戦えばいい。」

さつき言ったボーデヴィツヒへの対策でも、その装備特性上ボーデヴィツヒの《シュヴァルツィア・レーゲン》は対単一が得意であることは間違いない。だから、単純に二人で適切に攻め立てるのが一番効果的だろう」

「だから、個人としての腕前だけが勝敗を左右する重要な要素じゃない、と」

「そういう事だ」

影内君の説明に、その考え方へとようやくある程度理解が得られました。

けれど、同時にここまで説明されたことと、こういった事をすぐに思いつくことに対してどうしても私と影内君の差みたいなのを感じていた。

(やっぱり、まだ頼ってる……)

いくら一緒に訓練させてもらっていると言っても、年季の違いがある上にあのバケモノ相手にも戦えるほどの覚悟と実力がある影内君と私では、やはり私の方が役者不足ではないか。影内君に言っただけで貫つてはいても、そういう思いが抜けきりませんでした。

そんな暗い方向に行きかけた思考を誤魔化すため、私はトーナメントの組み合わせがもうすぐ表示される画面の方を見ました。

「もうすぐ組み合わせが発表されるね」

「そうだな」

「だけど、その組み合わせは「まさか」としか言えないものでした。

「……初戦から見知った顔とはな」

この言葉のとおり、初戦の相手は鈴とオルコットさんのペア。二人ともいどは影内君に負けているだけに、もしかしたら相当リベンジに燃えているかもしれません。

そしてもう二組、気になっていたペア。箒とデュノアさんのペアに、ボーデヴィツヒさんの入っているペア。

まず、箒とデュノアさんは一般生徒とのペアと当たることになっているようだった。箒とデュノアさんのペアなら問題なく勝ち上がれると思う。

次に、ボーデヴィツヒさんのペア。影内君の予想通り、ボーデヴィツヒさんは一般生徒とペアを組んでいた。そして、相手はやはり一般生徒のペア。此方も二回戦に勝ち上がってくることになると思う。

そして、二回戦に上がってくる人を考えると……少し、身構えてしまった。

「しかも、この組み合わせだと……二回戦で、多分ボーデヴィツヒさんと当たる、よね？」

そう、今現在の予想のままボーデヴィツヒさんが二回戦に上がって来た場合、私達か鈴とオルコットさんと当たることになる。

私以外の全員が総じて先日の問題の当事者なだけに、何か問題が起らないかと心配だった。

「そうなるだろうな……」

まあ、それについては後にしよう。今は目の前の相手に集中すべきだ。凰とオルコットも侮れない相手だし、対策でも練らないとな」

「あ……うん。そう、だね」

影内君に言われ、確かにその通りだと思いました。同時に、そのことに対してなんで考えが行かなかったんだろうと少しの自己嫌悪もでかけました。

「それじゃ、鈴とオルコットさん相手にはどうする気なの？」

「そうだな……まず、聞いておきたいんだが……」
そこから、私たちは想定される対戦相手とその対策について話し合っていました。

Side ???

「いよいよだ……あのシステムがどうなるか……実に、実に楽しみだよ………」

堪え切れず、笑いが漏れる。

あの嘗ての作品は活躍しようがしまいがどうでもいいが、せめて俺の実験くらいには役立ってもらおう。

「……例の機体、本当に機能すんだろうな？」

だけど、そんな上機嫌なところに水を差してくる声が出てきた。

口が悪くてガサツな茶髪ロングヘア。その体には威嚇か警戒のためか、八本の装甲脚を備えるISを展開している。

だけど、そんな事はどうでもいい。俺自身そこで見ている女にはさほど関心は無い。いや、今のスポンサーという意味ではどうでもよくはないのだが、その気になればあの機竜で制圧してしまえばいい。たかが女にしか使えないIS風情など、どうとでもなる。

「そういや、お前の黒蟻の事で少し話がある。

分かったら聞いとけ」

「内容は？」

私の作品アスカトルに関して、気になる話が出てきた。が、肝心要の内容の方は少し拍子抜けするものだった。

「フランスの方で大規模殲滅作戦が少し後に始まるみたいだぜ。しかも、お前が妙に気にしているあの白い機体も参加するのかなんとか。

どうする気だ？」

「放っておけばいい」

考えるまでもない事なので断言したが、私の発言に女は怪訝そうな表情をし、不信感を露わにした目をしている。

ここまで低能だと説明するのも面倒だが、説明しなければ食いついてくるだろう。たかが女風情だが、ここで変に問題を起こすのも面倒なことになる。ここは説明してやるとしよう。

「下手に手を出して私のアスカトルの限界が見れなくても困るしなあ……。」

ま、どこまでできるかの試金石にでもしようじゃないか」

「……チツ。」

いいぜ、そういう事にしといてやるよ」

露骨な舌打ちが聞こえてきたが、実験の成り行きの方が重要なので無視しておくことにする。

だが、その中にもまだ不確定要素はあった。いや不愉快な要素というべきかもしれない。

(だけどもあ……新王国の人間、しかも機竜ドラグナイト使いもか……。

不愉快極まりないが、精々実験の比較材料くらいにはなるか……)

トーナメント表の対戦相手の中にいる、一つの顔。

世界初の男性IS操縦者なんて言う真っ赤な嘘をついている触れ込みでいる一人の機竜使

い。さらに、その一味だろう新王国に尻尾を振った元皇族と、私もその実験に関わったあの金持ちの女。

別にいまさらあの国に特別な感情は無い。ただ、私の実験がとてつもなくやりやすかったアーカディア帝国をぶっ壊されたのはかなり頭に來ていた。

(……私の実験生活を邪魔しやがって。

俺の邪魔をする奴は、皆、死ねばいい)

今後の実験の実行計画に少しの修正を加えながら、私は実験の成り行きを見守ることにした。

第四章（14）：一人のデビュー、二人のリベンジ

S i d e 鈴音

「セシリア……この組み合わせ、どう思う？」

「そうですね……形は違いますが、いつかのリベンジの約束を果たすいい機会ではないかと」

「そ。私も同感」

初戦の相手である影内と簪のペアについて、二人で益体もない事を話していた。

けれど、それは二人を侮っているからじゃない。むしろ、あの二人は決して侮れる相手じゃない。一度負けてる影内は当然だけど、今の今まで量産機で戦い抜いてきた簪が専用機を持ったという事も拍車をかけている。そして、その二人がタッグを組んでいる。

（冗談じゃないわよ……）

ある種の異常な近接技能を持つ影内と、対応力と火力が高く純粋な力押し以外の戦術も熟せる簪のペア。しかも影内は戦闘経験が豊富そうな部分がこれまでも何度か見られた以上、私たちの想定以上をしてくることも考えられる。

（まあ……だからって、負けてなんてやらないけどさ！）

確かに強力なペアであることには変わらないけど、影内へのリベンジは前々から決めていたし、ようやく専用機を持った簪とも戦える。

そんな二人との対戦を前に、内心で叫び、気合を入れ直す。

「じゃあ、勝ちに行きますか！」

「ええ！」

そして、口にも出したその言葉に私のタッグパートナーは威勢良く答えてくれた。

「凰鈴音、《甲龍》。行くわよ！」

「《ブルー・ティアーズ》、セシリア・オルコット。行きますわよ！」

私たちは、恐ろしくも楽しみな相手へと挑むために飛び出した。

S i d e 一夏

タッグマッチトーナメントの自分たちの番が回ってきて、簪がカタパルトから出撃、俺も《ユナイテッド・ワイバーン》の召喚符パスコードを唱えて召喚し速やかに接続。準備を終えて、少ししてからだった。

「待たせたわね」

「お待たせしてしまい、申し訳ありませんわ」

二人が反対側のカタパルトから出てきた。その目には、好戦的な光が見て取れる。

「今までは量産機だったけど、今回は互いに専用機。

「だけど負けないわよ?」

「私だって、負けないよ!」

出て来て早々に簪が凰から宣戦布告されていたが、対する簪も強気に言い返している。いい傾向だと思った。

「いつかの、再戦の約束……果たさせていただきますわよ」

「それは楽しみだ」

そして、此方も此方で宣戦布告されている。が、それ自体は互いに戦意を高めるためのようなものだろう。

『学年別タッグマッチトーナメントAブロック一回戦第一試合を始めます』

アナウンスが流れ、少しの間が空く。

『それでは、影内一夏、更識簪ペア対凰鈴音、セシリア・オルコットペ

ア——バトル・スタート戦闘開始!!』

ブー!!

開幕の宣言の直後、それぞれがそれぞれに動き出していた。

S i d e 簪

影内君の当初の予想通り、まずオルコットさんが下がって鈴が前に出てきた。鈴はそのまま真っ直ぐ進んでくると同時に衝撃砲を使用

してこちらを牽制してきた。さらに、オルコットさんのライフルとビットの二重射撃で攻撃してきた。

私も影内君も咄嗟に回避したけど、その回避先が同じ個所に誘導されていることに二人揃って気付く。

「簪！」

「分かってる！」

背面に装備されている二門の連射型荷電粒子砲《春雷》しゅんらいを使用して牽制。さらに、影内君が前に出て鈴と切り合いに突入していった。

「そこですわ！」

その中に、オルコットさんの狙撃が割り込んでくる。鈴が影内君に押し込まれかけたタイミングを狙い、鈴はその間に体勢を立て直している。

「やらせないよ……！」

だけど、この状態を続ける気はない。すぐに《春雷》の照準を鈴に向けると、数発だけ撃って立て直しを妨害する。そして、影内君がその瞬間に

「簪、オルコットの方を！」

「分かった！」

聞こえてきたのと同時に加速してオルコットさんに肉薄を試みる。《打鉄式式》は《打鉄》と違い高機動の機体として箒の《陽炎》のノウハウも取り入れて設計されていたけど、後から追加されることになった《白式》の背部ウイングスラスターの一部によってさらに推力が強化されている。この機動性の高さなら、肉薄は容易だった。

けど、さすがにオルコットさんもそう易々と近づけさせてはくれない。ビットで包囲しつつ、ライフルで狙ってきている。

「撃ち抜かせていただきますわよ！」

「させない！」

《打鉄式式》の切り札とも言える最大の装備、六機の八連装ミサイルポッドから合計で四十八発の独立稼動型誘導ミサイルを発射する。《山嵐》やまあらしを準備する。

「発射！」

ロックが終わると同時に時期の速度を少しだけ緩めて発射。狙い通り、四十八発のミサイルが私と《打鉄式式》に先行してオルコットさんに襲い掛かる。

最初に見た一瞬こそ驚いた様子を見せたオルコットさんだけど、すぐにビットを使って私のミサイルを迎撃してきた。おかげで大部分のミサイルが撃ち落とされたけど、それはむしろ狙い通り。

迎撃されたミサイルから爆炎があがり、視界が一瞬制限される。その瞬間に合わせて私は一気に再加速、通常ブーストで出しうる最高速度を出して接近する。追加されたウイングスラストによつて並みの高速機を凌駕するほどの推力を得た今の《打鉄式式》ならそれができる。

「……!?、ち、近づ」

「そこっ!」

近づいたその一瞬に、対複合装甲用超振動雑刀《夢現》ゆめうつを振るう。

「ッ! インターセプター!!」

だけど、オルコットさんも国家代表候補生の一角。すぐさまナイフを呼び出すと、それで私の《夢現》を受け止めようとしてくる。そして、同時に近くに数機のビットも呼び出していた。

けど、そのくらいなら問題ない。

「ハアッ!」

《夢現》の刃でオルコットさんのナイフを一回打ち据え、その反動を利用して《夢現》を一回転。同時に、機体を半回転させて続くビットの射撃を回避。

「……この、タイミングで!」

オルコットさんが驚いたような様子を見せたけど、ここからが本番。

一回転させた《夢現》を回している途中で少し短めに持ち替え、石突にあたる部分で半回転の勢いも加味しながら再度、ナイフを持ったオルコットさんの腕を打ちすえる。

衝撃に耐えかね、オルコットさんがナイフを取り零した。その隙に少し下がって、再度《山嵐》を起動。ロックできた瞬間に一斉射する。

「行って！」

「させませんわよー！」

オルコットさんもすぐに切り替えてライフルとビットで迎撃してきた。

(やっぱり通常のロックシステムだと、活かせきれない……っ！)

本来搭載される予定だったはずの第三代兵装《マルチ・ロックオン・システム》が搭載されておらず、それとの併用が前提の仕様だった《山嵐》は今現在、通常の対単一ロックオン・システムを採用している。だけど、それでは四十八発の独立稼働型誘導ミサイルを十分に活かす事が出来ない。

(でも、やりようはある……！)

それは、完成までの調整中に影内君に教えてもらった。

たとえ本来の主力兵装である《山嵐》の性能を完全に引き出すことはできなくても、その火力そのものと爆破範囲は健在。なら、それを活かしつつ他の装備とも合わせて戦術を組み立てていけばいいって。

だから、そうした。影内君自身もいくつか提示してくれたし、私自身でも考えた。

その結果が、今ここにある。

(《打鉄式》での初めての实戦だけど、それでもここまで……！)

そして、自身の愛機との付き合いの長いオルコットさんところまで戦えている。

確かに、オルコットさんの《ブルー・ティアーズ》は近接戦闘を極端に苦手としているという大きな弱点を有している。けれど、その分ライフルやビットの攻撃性能は本来侮れるものじゃない。一撃必殺と呼べる爆発力はないけど、十分に性能を引き出した時のS E^{シールドエネルギー}への恒常的な攻撃力は侮れない。ビットでのオールレンジ攻撃も影内君や箒が例外的なだけで、普通のIS搭乗者なら避けきるなんてことはできない。

普通に戦ったら、私が押し負けていてもおかしくは無い。

(でも、だったら……接近戦で、戦えばいい！)

わざわざ相手の土俵で戦う必要は無い。それは何度も教えても

らったし、見せても貰った。だから、私もそうする。とは言っても、私と影内君とでは根本的な技能で差がある。特に回避と近接戦能力では顕著。だから、私はそこに射撃も織り交ぜることでどうにか戦えるレベルにまでしようとした。

さらに、本来は前衛を務めるはずの鈴を影内君が抑えている。この状況なら疑似的に私とオルコットさんの一対一ができる。

(本当に、頼りになる……でも！)

それだけに頼りきっちゃいけない。

そして、影内君からも合図が来た。

(やってみせる！ そのための、《打鉄式》なんだから！)

Side 一夏

「ハアアアアア！」

「ゼア！」

簪がセシリアと戦っている中、俺は凰と剣戟合戦を繰り広げていた。

「本ツ当に、出鱈目ね！」

あんな鍛え方してりやそうなるだろうけどさ！」

「光荣だが、俺の師匠達はもつと強いぞ！」

「今は目の前をアンタ達を倒す方が重要だからそれはいいわ！」

互いに少しを会話を挟みながら、全力で斬り合いの格闘戦を続ける。

凰もこの前戦った時から一層実力を磨いたようで、この前よりも一撃一撃が重い。しかも連撃の腕は据え置きなものだから、接近戦での脅威度は高くなっている。さらに衝撃砲も以前より全体的に精度を増しており、より侮れない相手になっていた。戦術そのものというよりは、技能方面を中心に磨かれている。

が、此方も鍛錬を怠った事は無い。

(悪いが、今は圧倒させてもらう！)

事前に簪と打ち合わせていた通り、ここでは凰を出来る限り近接戦で圧倒する。

今回、簪に取っては初めての实战となる。そこでこの二人をいきなり相手にするのは俺も付いているとは言っても不安材料は残った。元々この二人は互いの得意分野がはつきりとしており、それぞれの役割をこなせばそれだけでも一つ連携の形になる。そして、それが正しく機能した時の脅威度はそれぞれを相手にしたときの比ではないだろう。

(なら、答えは簡単だ……分断すればいい！)

二人同時に二人で相手したときに不安材料が残るなら、明確な弱点が残る一人を相手にしたときの方がまだやりやすい。そして、こちらも数が同数で簪の腕前も信用できるからこそ実行できる戦術だ。

とは言え、凰とオルコットも腕は確かである以上は其のうち対応されることは想像に難くない。だから、その前に此方が次の一手を打つ。

「このっ……いい加減に当たりなさいよ！」

「断るー！」

何度かの剣戟とその中の軽口のやり取りの最中、両手に持っていた機竜牙剣ブレイドの内一刀を機竜息銃ブレスガンに持ち替え、凰を狙ったように見せかけて別な相手を狙う。

「何処に撃ってんのよー！」

「いや、これでいい……ッー！」

狙った相手は俺から見て同じ凰と同じ射線上に居るオルコット。放った弾丸は、確かにその肩部の非固定浮遊部位アンロック・ユニットに当たっていた。

その直後に、凰の背後から大量のミサイルが殺到した。

「……!? ミサイルー！」

凰の対応も早いもので、射角に制限の無い衝撃砲の乱射でミサイルを迎撃しにかかっている。そして、直撃したミサイルは

が、それでも爆炎は大量に出る——それこそが俺と簪の狙いだっ
た。

「……やあああああああ!!」

爆炎を突っ切り、簪が此方へと突っ込んでくる。同時に、俺も反対側——オルコットの方へと、全力で接近していた。
(さて……選手交代と行くか！)

Side 鈴音

「ここで簪が相手って……！」

正直、焦った。

影内と簪の戦い方の違いは普段の模擬戦の事もあって知っているけど、その二人の戦い方は大きく異なっている。影内は基本的に能動的に攻撃してくる格闘型だけど、簪は攻めても受け手もできるオールラウンダー。影内とは別な意味で厄介な相手。

「ここからは私が相手だよ、鈴！」

「……ッ！ やってやろうじゃない！」

普段の簪からは中々想像できない挑戦的な声が発せられ、その手に握られた長刀が振るわれる。私の《双天牙月》よりもリーチで勝る其れは、簪の戦闘距離の維持の上手さと相まって攻撃する機会そのものを奪われている。その中に織り交ぜられる連射特化の荷電粒子砲も、中々にいやらしい。

(しかも、このままだとセシリアとも関係がとりにくい……そこも戦略の内って事かしらね)

そしてもう一つ。影内と簪は、多分私とセシリアを分断しに来ている。

理由もわかる。私もセシリアも苦手分野が明確で、そこを補い合う事でペアとして機能させてきた。けど、それは裏を返せば互いの苦手分野をフォローし合えないとその難点がそのまま疲れてしまう事を示している。そして、影内はそれを分かった上で突いてきた。

さらに、私達が手を打つ前に互いの相手を交換した。これはおそらく、私達がこの状況に対応する前に別な状況に切り替え、それを繰り返すことでペアとして機能させないことが目的。

「セシリア！」

「よくつてよー！」

だけど、このまま何も手を撃たないという選択肢は無い。

簪の専用機《打鉄式式》の長刀のリーチと簪自身の長刀の技量、特に受け流しに優れたそれは影内とかとは一味違った脅威だった。柔よく剛を制す、を体現しているとも言える。

だからこそ、二刀と格闘での力押しが一番得意な私としてはあまり戦いたくない相手だった。衝撃砲での射撃戦にしたところであの連射効率のいい荷電粒子砲と大量のミサイル相手では手数と火力の差が歴然。

（簪相手なら、セシリアのほうが今はいいわね……いえ、それ以前にどうにかして向こうのペースを崩す……そのためには！）

「《龍砲》、行きなさい！」

狙いは大雑把で、とにかく数を撃つことを中心に《龍砲》を放つ。狙いは足止め。

「そのくらいでー！」

狙い通り簪は回避しつつ射撃戦に移行し、少しの間接近の勢いが緩まった。その隙に私はセシリアの方へとブースト。合流を図る。

「やらせるかー！」

だけど、そこで影内が射撃を放ってきた。手にしていたのは小型の銃火器のような装備で、そこそこの威力がありながら連射効率がよく弾幕を張るにはうってつけの装備。

（けど、止まらないわよー！）

回避動作は必要最低限に抑えて、構わずセシリアとの合流を優先する。

影内の機体である《ユナイテッド・ワイバーン》は、詳しいスペックは知らないけどそれぞれの基礎性能が優れているように思える。そこに並みの代表候補生などより高い能力を持つ影内の組み合わせは、単純に脅威であり同時に対処がし辛いという強みも生み出していた。だからこそ、一人で相手するのは得策とは言えない。

かといって、二対一などやれば今度は後ろから簪が来る。だから私

とセシリアが作るべき状況は、二対二。だからこそ、ここで止まってまた一對一という状況は悪手だった。

「私も居ましてよ、一夏さん！」

影内からの射撃を受けていたところに、セシリアがライフルとピットでフォロワーを入れてくれた。この機を逃すわけもなく、無事合流。

「さて、反撃よ。セシリア！」

「ええ。訓練の成果を見せてあげますわ！」

S i d e セシリア

（やはり一筋縄でいく相手ではありませんわね……ですが、私とて！）
ライフルを構え、狙いを定める。

一旦は相手が簪さんから影内さんへと移りましたが、状況はなんとか悪化させずに済みました。簪さんは初見の装備と戦術が多くすぐに対処が思いつかなかったというのもあります。影内さんなら前にも何度か立ち会わせてもらいある程度その動き方を知っています。それでも当り前のように回避されてしまうあたり、彼の強さは底が見えないとしか言えません。

「さて、反撃よ。セシリア！」

「ええ。訓練の成果を見せてあげますわ！」

ですが、このまま手をこまねいているわけにも行きません。

何より今の状況では実質一對一を二つやっている状況であり、このままでは私と鈴さんそれぞれの弱点を突かれて負けるという結果を晒しかねません。

だからこそ、ここで合流しておきたかった。幸い、鈴さんがこちらへと来てくれたおかげで私にとつては簡単な援護をするのみで済みます。

そして、無事に合流できたのは光明でした。

「簪！」

「分かってる！」

向こうもすぐに合流し、二対二の状況になりました。けれど、先程よりは抵抗できます。

まず、私が《スターライトMkⅢ》と《ブルー・ティアーズ》での一斉射撃で二人へと先制攻撃。当然のように避けられました。二人が完全に離れきる前に鈴さんが衝撃砲と二振りに分割した青龍刀で襲い掛かりました。

ですが、さすがに二人を同時に相手するには分が悪いです。其処へ再度、《ブルー・ティアーズ》で援護しました。狙うのは主に獲物を持っている手か手首の部分。いつかの箒さんへとやらせて頂いた手段と同じことですが、今回は前衛を務めて下さる鈴さんがいるおかげで以前よりずっと攻撃の機会が多いです。

「そこっ！」

「お行きなさい！」

さらに、私が打ち漏らしてもすかさず鈴さんが衝撃砲と格闘で追撃をかけてくれます。

私も鈴さんも、形は違えど全周囲への攻撃ができます。だからこそ、互いへの誤射にさえ気を付ければ互いへの射程内のどこからでも援護や追撃ができるのです。

(ですが、それだけで勝たせてくれるほど易い相手ではないでしょうけど……)

現に、手首や関節部といった場所へとしつこく攻撃を仕掛けてはいますが、影内さんにも簪さんにも対応されています。何度か当てられそうな場面はありましたが、影内さんがあの四つ足と鞭のような装備を使って変則的な軌道を実現しているため、予想外の避けられ方をされてもいます。

さらに、鈴さんも攻めあぐねているようでした。片や同格、片や完全に各上の使い手である計二人を相手にしての格闘戦なので当然といえば当然ですが、鈴さんが倒されれば私達に勝ち目など微塵も残りません。

『セシリア！ 狙いはもうちょい粗くていいから、もつと撃てる!?!』

『出来ませうけど、それでは……』

『構わない！』

小手先の技術で勝てるような相手じゃないし、仮に手首や足を一つ撃ち抜けてもそこに行くまでのこっちの被害が多分とんでもないことになる！』

鈴さんからの提案を受け、ほんの一瞬、思索しました。

確かに、今現在の状態では当てるまでに時間が掛かることは必定でしょう。そうなれば、私も鈴さんもこの二人を相手に十分なエネルギーを残せない可能性は高いです。

(鈴さんの言う通り……私と鈴さんの攻撃力を考えるなら、鈴さんの攻撃を一撃でも多く当てたいところですね)

一撃が重いのは明らかに鈴さんであり、最大限に生かすべきはその火力。

(なら……！)

「そこですわー！」

《スターライトMk-III》の照準を、あえて影内さんが防ぎやすい正面へと持っていきます。さらに、五機の《ブルー・ティアーズ》の照準を簪さんの方へ。

ビシユシユシユン！

一斉射を仕掛けますが、影内さんはあの大剣の内一刀で防ぎ、簪さんには避けられました。

ですが、そこで再度鈴さんが攻撃を仕掛けます。影内さんには衝撃砲で、簪さんには避け終えた瞬間を狙って接近しての格闘攻撃を。

「っらあ!!」

「ッ！」

「いい連携だな……！」

その攻撃は、致命傷には至らなくても確かに二人に傷跡を残しました。

「ここからは……」

「そちらの好きには、させませんわよ!!」

第四章（15）：決着、不穩

S i d e 簪

（やっぱり、二人とも強い……もう立て直してきてる……）

序盤は影内君の戦略もあつて優位に進めていたけれど、それでも鈴とオルコットさんは巻き返してきている。

私達の敗色が濃厚になったとは思っていない——むしろ、最低でも同等だと思う。けど、同時にここまで巻き返してきた鈴とオルコットさんの腕前を改めて感じていた。

（でも、私だつて！）

私と《打鉄式》だつて、このままで終わる気は無いし、影内君の足手纏いになるつもりも無い。

（でも、ここからどうやって攻めれば……？）

だけど、今は鈴とオルコットさんの二人を相手にどうやって攻め立てるか。それが分からなかった。

鈴とオルコットさんは二人とも、特性は違うけど全方位攻撃が可能オールレンジな装備を持っている。そして、恒常的な攻撃力に優れたオルコットさんと《ブルー・ティアーズ》に、格闘戦での連撃能力とそこからくる瞬間的な攻撃力に長けた鈴の組み合わせは、ペアとして機能すると恐ろしいほどの攻めづらさを発揮している。

だけど、そうやって考え込んで逡巡していた私へと短い問いが投げかけられました。

『簪、《山嵐》は後何斉射分残っている？』

『まだ結構残ってるけど……どうするつもりなの？』

唐突に影内君から問われた私は、未だ衰えない目の前の攻撃を警戒しながら答えました。

答えた直後、横目で少しだけ影内君の方を見ると——頼もしい、不敵な笑みを浮かべていました。

『この状況の打開と、最後の仕上げを頼みたくてな。』

その分が残っているかどうかの確認だ』

そして、私の疑問に帰ってきた影内君の答えは、やはり頼もしい物

でした。

だけど、影内君の組み立てたその戦術の中に私が果たすべき役割があるのなら、それを出来る限り早く把握しておきたかった。

『まず、合図するからその時に一回《山嵐》を派手に撃ち込んでくれ。

合図の内容は……』

一夏の作戦とその根拠を聞き、私はその作戦への確信と一握りの不安を抱きながらも準備を進めていきました。

S i d e 鈴音

(……影内が下がった。

何を考えてるの!?)

今現在、拮抗し始めているこの戦況での後退。

ほぼ確実に影内と簪の戦略だけど、ここで仮に乗っからないように動くとすれば私たちも距離を取つての様子見になる。

だけど、その場合良くても戦局は膠着。影内の射撃も格闘が目立ちまくっているから印象が薄いだけで、射撃の腕も低いわけではない。簪の火力は言わずもがな。半面、私達は遠距離での瞬間的な火力は低め。私の衝撃砲はどちらかと言えば牽制や相手の体勢を崩すのに向いていて、セシリアは単射の威力は並みかそれより少し高め位のためある程度の数を当てないと火力が出にくい。

(遠距離では、むしろこっちが不利……なら!)

「セシリア!」

「お任せ下さいまし!」

すぐに体制を整えると、セシリアの援護を受けて影内に追撃を仕掛ける。

影内も射撃を仕掛けるつもりだったのか、片手には拳銃のような、もう片方には拳銃型を大きくしたような大型砲を用意している。けど、その状態だと良くても四つ足を使った格闘が精々。

(今、格闘を仕掛ければ……影内相手でも、打ち勝てる可能性はある

！)
前に出ればそれだけ攻撃を受けやすくなるけど、迎撃する以上はどうしても私の方に攻撃が集中する。そうなれば今度はセシリアが攻撃しやすくなる。

一歩間違えば再び分断されかねないけど、今の影内は両手が射撃武器。簪も《打鉄式式》の多連装ミサイルと連射型荷電粒子砲を展開していて、格闘戦に移行するには少しだけ間がある。今なら、この二人を相手に格闘で優位に立てるかもしれない。

(賭けになるけど……分の悪い賭けは、嫌いじゃない！)

畏の可能性は捨てきれない。けれど、それを警戒して何もできないようだとこの強敵二人を相手にしての勝利なんて望めない。

そう考えて、セシリアに援護を任せて私は踏み込んだ。

——この時、二人がほんの僅かに会心の笑みを浮かべていたことに、私は気付かなかった。

Side 一夏

(来たな……今の嵐とオルコットならそうすると思っただ、予想通りか)

嵐が予想通りの行動を取ってきたところで、少し後ろの簪の準備を確認する。

「そこおっ！」

真正面から最短の距離を出し得る最速で嵐が接近してくる。

そして、その手に握られた二刀の青龍刀が俺に向かって振り抜かれる——その直前。俺は、チャージを終えた機竜息銃プレスガンと機竜息砲キャノンを、後ろで待機していた簪へと投げた。

「……ッ！」

「ハアッ！」

ガギンッ！

俺の行動を見て、凰が一瞬だけ驚きの表情を見せた。それと同時に、一刀のみ手にした機竜牙剣プレードを、神速制御クイックドロウを用いて振るう。

あの重い二刀を相手にしての神速制御では押し切るのに威力が少々心もとないが、それでも体勢を崩すには十分。現に、凰は姿勢を横に揺らしていた。

さらに、振り抜いた直後に空いていた片手に竜尾鋼線ワイヤーテイルを握り、振るう。

ヒュッ!

狙う相手は凰ではなく、後方に控えているオルコット。元々回避能力そのものに難のあったオルコットは、俺の狙い通りライフルを握った手に竜尾鋼線を巻き付けられる事態になっていた。

「さて、一対二でもするか? 二人とも」

返事など待たずに、反撃しようとしてきた凰へとカウンター気味に二本の右足を使った回し蹴りを入れ、胴体を挟み込む。さらに、二本の左足で今度は足を拘束する。

「ちよ、動け……この!」

「させないよ!」

ドシユシユシユ!

咄嗟に衝撃砲を放とうとした凰だが、そこは簪からの援護が入った。ミサイルが何発か凰へと殺到していた。

「ッ!」

当然ながら今の状態では回避行動ができないため、迎撃か防御の二択となる。そして、凰が選択したのは衝撃砲による迎撃だった。

が、迎撃に衝撃砲を使ったため俺の方からは逸れる。そして、俺はその間に竜尾鋼線を思いつき引き寄せながら四つ足で凰を拘束しつつ推進器を使い全力で加速した。

ゴッ!

加速の反動を感じつつ、全力で引き寄せる。

元々推力ではこちらに分がある以上、勝算は十分にあった。

「な、これでは……!」

「セシリア、避けなさい!」

粗方撃ち尽くした私は、思っていたよりも凄い事になっている爆炎の向こうを見つめながら眩いていた。

『試合終了!』

勝者、影内一夏、更識簪ペア!』

高々と鳴り響いた審判役の先生の声に、ようやく実感が湧いてくる。

でも、勝利の余韻に浸っていたのはそこまでだった。冷静に考えれば、鈴とオルコットさんが空中に投げ出されている可能性が高い。しかも、最後は必死だったこともあつて遠慮なく撃つただけに、尚更だった。

「簪、オルコットの方頼む」

「了解!」

そこには影内君も気付いていたみたいで、すぐに手分けして二人の手元に飛んでいく。そして、予想通り装甲が自動で解除されたISから放り出された二人を受け止めると、そのまま軟着陸。

「あああああ負けたああアアア!!」

「くっ……やはり、お二人ともお強いですわね」

着陸して二人を立たせた直後、悔し気な様子を隠そうともしていない二人の叫び声が響いた。

でも、心なしか少し晴れ晴れとした表情にも見える。

「でも、まあ……二人とも、強かったしね。」

「これで次負けたりしたら承知しないわよ?」

「ええ、本当に……。」

敗者は潔く舞台袖に下がらせていただきますが、お二人の御健闘をお祈りさせていただきますわ」

二人がその場で称賛と応援をくれたことに、素直に嬉しく思うと同時に少し気恥ずかしくも感じました。けれど、それ以上に誇らしくもありません。

「……二人も強かったよ。以前よりもよほど。」

今のお前たちと試合を出来た事、誇りに思う」

「わ、私もだよ!」

そして私が少し感動して呆けていたところで、影内君が二人への返事を返しました。私も慌てて後に続きましたが、そんな私の様子を見て鈴とオルコットさんが微笑みながら私の方へと向き直りました。

「それとき、簪。」

アンタ、相方に負けないくらい輝いてたわよ」

「ええ。お二人の連携、思わず嫉妬してしまいそうでしたわ」

二人からの言葉に、思わず涙ぐみそうになりました。それほど、嬉しい言葉でした。

横で影内君も満足気な様子を見せていたことも、拍車をかけていたかもしれません。

それから間もなく、それぞれのピットへと戻りました。

S i d e 一夏

「一夏、簪さん。」

二人とも、お疲れさまでした」

「あ、アイリさん」

「観戦されていたのですか」

試合を終え、整備室から出てきた俺と簪は、直後にアイリさんとその護衛として来ているフィルフィさんに迎えられていた。

「……いい、試合だったと、思うよ」

「有り難うございます」

「あ、えつと……有り難うございますー!」

体術の師でもあるフィルフィさんから言われ、少し誇らしい気持ちになった。

一方、相方を務めてもらっている簪は何故か完全に焦って混乱しており、一杯一杯な様子に見受けられる。

「簪、落ち着け。」

そんなに緊張しなくても大丈夫だ」

「わ、分かってる、よ……大丈夫大丈夫……」

「全然、大丈夫そうに聞こえませんかよ。」

もう少し気を楽に持つてください」

見ていたアイリさんも何処か可笑しそうに微笑みながら、簪へと話しかけていた。

そして、アイリさんの護衛として来て頂いているフィルフィさんは一歩前に出ると――

「……これ、食べる？」

「え、あ……いい、頂きます」

――手に持っていた、IS学園の購買で買ったと思しき菓子パンの一部をちぎって手渡していた。

俺の方はある意味でフィルフィさんらしい行動にどことなく安心感を覚え、簪の方もそのゆつくりとした口調とお菓子を差し出すという毒気を抜かれる行動で緊張も解れたらしかった。

「さて、一夏。

滑り出しは上々といったところですか」

「ええ。」

幸いなことに、相性も腕も良い相方もいますしね」

「ふえ!?!」

簪の方をほんの一瞬だけ見ながら話したところ、アイリさんも「そうですね」と微笑みながら返事を返してくれた。……笑みが微妙に黒く見えたのは気のせいだと思いが。

「それは良かったですね。」

ですが、今後は何が起こるか分かりませんしね。十分気を付けるように……。また、誰かから目を付けられているみたいですし」

そして、次いで放たれた言葉は少し棘があるように感じた。

「ええ、まあ……」

「この前の報告の時にでも言ってくればよかったですか……出来る限り、伝えるようにと何度も言ってきたはずですが？」

「解決の目途は立っていましたし、あの時はより優先すべき事がありましたので」

「もしかして……ボーデヴィツヒさんの事、報告してなかったの？」

横で聞いていた簪が目聡く事情を察し、切り込んできた。

心なしか、少しジト目気味になっている気がする。

「ああ。」

別件の方を優先したんでな」

「そうなんだ……」

言っている別件の内容はすぐに分かったらしく、簪はそれ以上の追及はしてこようとはしなかった。言いたいことはありそうだったけども。

だが、別な人からその続きが話された。

「……一夏君。ダメだよ」

フィルフィさんから、言葉少なに、だけど確かに叱責が下された。

「アイリちゃんも、ルーちゃんも、私も……皆、心配してるんだよ。」

だから、ダメ。ちゃんと話して」

「で、ですが……こちらの方だけで処理できる事案でしたら、そうした方がよいかと思ひまして……」

俺の話を聞いても、フィルフィさんは激するようなことは無く少しだけ優しい表情になって――

「話してくれば、皆で頑張れるから。ね？」

――諭すように、言ってくれた。

不意に言われた言葉に、思わず涙ぐみそうになったが、誰の目があるかも分からない手前何とかこらえる。

「前々から言っているとは思いますが……貴方は自分だけでやろうとしすぎる部分がありますから。逐一報告するくらいでちょうどいいんですよ。」

………まったく、なんで家の男性は心配ばかりかけらるんでしよう……」

さらに、アイリさんも言い聞かせるような口調で言ってくれた。後半は声が小さかったこともあって上手く聞こえなかったけども。

「……はい。次からは出来る限り報告します」

返事は短く止めた。それだけ言うのが精一杯だったから。

「さて。」

今から次の試合を案内してほしいものですが……」

そこでアイリさんは何を思ったのか、僅かに目線をずらしてから再度向き直ってから話し始めた。気のせいかもしれないが、少し険しい表情になっているように見える。アイリさんの横にいるフィルフィさんも同様だったため、多分気のせいではないと思うが。

「少し、寄り道をしてから行かせていただきます。」

確か、第三アリーナでしたよね？」

「はい」

「では、一夏。先に行って席を確保しておいてくれませんか？」

「委細了解しました」

寄り道の内容が気にならないわけではないが、フィルフィさんもある事だし多少の事なら問題ないだろう。それに、俺も行かなければならないような事になったなら連絡が来ることだろう。

そう判断し、この場は行くことにした。

——後々、この判断を大いに後悔することになったが。

S i d e アイリ

一夏と簪さんが第三アリーナの方へと行ったのを見送り、声が届かないくらい距離まで離れたのを確認してから後ろの方へと向き直りました。

「いい加減、出てきたらどうです？」

一教師が一生徒とその後援者の会話を盗み聞きするのも、あまり良趣味とは言えないと思いますが？」

「いけしゃあしゃあと……言ってくれるものだな」

出てきたのは、予想通りと言えば予想通りな人物。織斑千冬、其の人でした。

「で、今回は何用ですか？」

「フン……貴様らと話す気など無い。

一夏をあかも変えた連中になど」

彼女からの返答に、かつて一夏から報告されたことを思い返しました。

彼女には既に一夏の正体が割れていることですし、一夏から聞いた過去の彼女の話とこれまでの言動から考えると今の一夏があのようになった原因の一端が自分にあるとは思わないでしょう。

（まあ……あの二つの約束を結んだ私が偉そうに言えた義理ではないのですが）

過去のある過ちを思い返し、思わず苦笑が漏れそうになったのは何とか堪えました。

一方、彼女はそんな私たちの様子に苛立ちを感じている様子を隠そうともしていませんでした。

「では、何をしに来たのですか？」

「こうするために、だ……ッ！」

このままでは何も進まないと思い、話を進めようとしてきた時でした。

彼女は、一気に私目がけて間合いを詰めてきました。その右手を握り締めて、腰のあたりに構えながら。私には戦闘技能の類は皆無である以上、避けることはできないでしょう。

「……させない、よう？」

「……な、に?！」

ですが、それが私に届くことはありませんでした。護衛として来てもらったフィルフィさんが前に割って入り、放たれたその拳を掴んで受け止めてくれたからです。

余程の自信があったのでしょうか、彼女は面食らったような様子でした。

「アイリちゃんを、守ってって……ルーちゃんに、言われたから。」

やらせない、よ……!」

その心強い姿に私は安心感を覚えました。が、反面、彼女は少し気圧された様子でした。

その姿に背中を押されたようにも感じたこともあり、少しだけ話すことにしました。

「……私には、家族がいます。」

たった一人だけの、家族です」

「……一人、だと？」

「ええ。その人以外の家族は、今は居ません。」

私にとっては唯一の肉親であり……一夏にとっては、最初の師でもある人です」

それを聞いた瞬間、彼女は殺意に満ちた目を向けてきましたが、気にする事でもないので続けることにします。

「其の人は、困った人でしてね……心配ばかりかけるんですよ。その癖、厄介事にも首を突っ込みたがるような人です」

「……そんな人間に、一夏が！」

「ですが……そんな人にも、自慢できるような点はあるんですよ。」

そして、本人の前では絶対に言いませんけど。私はそんな人が私の家族で良かったと、今は心の底から言えますから」

相変らず剣呑な雰囲気のままでしたが、それは次の私の話で

「そして、最後に。」

私は、一夏から貴方がそのような存在だったとは、一度も聞いたことがありません。初めて出会った、あの日から。ずっと」

「そ……そんな、馬鹿な事がある物か！」

信じられないといった表情を顔に張り付けて叫んだ織斑千冬さんでしたが、其処に取り合う理由はありません。

「いえ、事実です。」

どうして、そのようになったのか。よく考えてみてください」

そこまで言ったところで、急速に織斑千冬の覇気は萎んでいったように見えました。

「……一つだけ、言っておくね」

そしてその場を去って一夏の元に行こうとした時、意外と言えば意外なことに、フィルフィさんが話し始めました。

「アイリちゃんに、手を出したりしたら。絶対に、一夏君は貴女を許さ

ないよ。

……一夏君にとって、アイリちゃんはそれだけ大事な人だから」
意外といえば意外な言葉に、思わず顔が熱くなったのを感じました。

(……それが、異性としてのそれだったら最高だったのですが)
ですが、それがどういった意味であるかも知っている以上、手放しに喜べるものではない事も知っています。

(……その程度で、諦められるような物でもなかったのですが)
そこまで考えたところで、おかしな方向に行きかけた思考を元に戻します。

そして、フィルファイさんにも声をかけて一夏達の待っている第三アリーナの方へと脚を向けました。

S i d e 箒

「デュノア、援護頼む！」

「OK！」

第三アリーナでの第一試合が、私達の初戦だった。

相手は三組の一般生徒同士のペアで、実力的には悪くなかった。双方とも打鉄だが、片方が近接仕様、もう片方が超長距離射撃用追加装備《パッケージ撃鉄》を装備した精密射撃仕様。役割をキツチリと分担しつつ双方がそれぞれに特化した戦術を行う事で練度の低さを補い合う、考えようによっては非常に合理的な戦術だった。

(戦術の発想と着眼点は悪くないが……装備が少々極端すぎるな)

だが、少しばかり無駄が目立つ。アリーナ程度の交戦距離では《撃鉄》の射程距離を持て余す上、長距離精密射撃のための性能を優先している以上どうしても砲身冷却や再装填にかかる時間が長く、ひいては連射効率が悪いといえる。そして、相手の射程距離内で連射効率の悪い武器というのは回避技能が高いか確実に当てられる射撃技術のどちらかが無いと厳しい。また、格闘戦仕様の方も武装の総数が多

く、持て余し気味になっている。機動力を殺さない範囲で適正な装甲を追加してるのはいいが、持て余している格闘用装備を減らして牽制用の装備でも積むべきだろう。

(ま、初期の私よりはずつといいが)

そこまで考えたところで、少し自虐的な方向に行き始めた思考を、切り替える。

(だが、年季だけはこちらが上だ。

加えて、デュノアは遠近双方で高いレベルの実力者……悪いが、ここは通させてもらおう！)

「ハアアアア!!」

近接戦仕様の《打鉄》を纏った生徒へと瞬時イグニッション・ブースト加速で一気に接近し、間合いに入った瞬間に瞬時イグニッション・ターン旋回で急旋回。同時に《叢》を振り抜く。一撃でSEを大幅に削り取る。

仕留めるまでには至らなかつたが、反撃を受ける前に離脱。すぐに後ろで精密射撃仕様の《打鉄》を纏っている生徒へと狙いを変更する。

後ろから近接仕様の《打鉄》を纏った生徒が追いつてくるが、それは阻止された。

「僕を無視しないで欲しいな」

デュノアが構えたアサルトカノン《ガルム》と重機関砲《デザート・フォックス》の銃弾が正確に刺さり、見事に近接仕様の《打鉄》を沈黙させた。

さらに、私の方もすでに接近を終了させている。そのまま近接戦へと持ち込み、SEを削り取っていく。

間も無く、決着は付いた。

Side 一夏

「見事な物だな、あの二人は」

「……いい動き、してるね」

「短期間で構築したとは思えないコンビネーション……」

「ええ、素晴らしい腕前ですね。」

しかし、それでも当たれば負ける気はないのでしょうか?」

第三アリーナの観戦席、最初に簪と二人で観戦を始め、其の後にアイリさんとフィルフィさんの二人と合流し、最後に機体の整備を最低限終えたらしい凰とオルコットの二人が来て、最終的に六人で観戦をしていた。

「ええ。」

当たるといふようなことがあれば、全力で迎え撃ちます」

「アンタが言うとお洒落にならないわよ、それ……」

「今は簪さんと言うパートナーも居ますから、中距離以遠の火力も充実していますしね……。」

一年のトーナメント優勝候補ではなくて?」

見ていた凰とオルコットがぼやくように言っていたが、その評価自体は素直に受け取っておくことにした。

が、後には気を抜けない相手がいる事も事実。それに、俺も俺でまだ目標とする高みには至っていない事も自覚しているつもりではある。

「その評価自体は光栄なのだがな……」

「でも、負ける気が無い事は確かなんだよね?」

「一緒に頑張ろう!」

「ああ、頼む」

隣で見ていた簪が元気に宣言してくれたところで、次の試合の組み合わせが発表された。

——その組み合わせの中には、「ラウラ・ボーデヴィツヒ」の名前もあった。

S i d e ラウラ

(やはり勝ち抜いてきたか……予想通りと言ったところだろう)

トーナメント表を確認し、次の試合で当たることになった相手を確認していた。

そこには、予想通りのペア。影内一夏と更識簪。後者はデータ不足による予想外の事態の発生を除けば特に脅威には感じない。反面、前者はこれまで無名だったのが不可解とさえ思えるほどの腕前であり、十分な対策を練ることが必要不可欠とさえいえる相手だった。

(……敵を砕く力こそ、必要なのだ。それを示すことにこそ、意味がある。)

それだけが、兵士の全てだ)

だが、敵がいかに脅威であれど、やるべきことは変わらない。

「……叩き、潰す！」

第四章（16）：黒雨の暴威

S i d e 一夏

対戦表に表示された名前のうち一つを見て、思わず表情が強張ったのがわかった。

「ボーデヴィツヒの試合か……」

「やっぱり不安なの？」

隣で見ていた簪が聞いてきたが、そこにはおそらく意識の違いがある。

「いや……正直なところ、相手をしているペアには悪いが勝敗は見えている。」

心配事は、その試合内容の方なんだがな……」

「さすがにその言い方はエグイわよ」

嵐がすかさず突っ込みを入れてきたが、それでも事実ではある。それに、下手するとエグイだけでは済まされない事態になりかねない。

「下手な慰めのような評価よりも、その中で何を見出すが重要な時もあるんですよ。」

それで、一夏。心配事の内容は？」

「……ボーデヴィツヒが、どのような戦い方を選ぶかです。」

普通にSEを削り合うだけなら、まだいいのですが」

「一方的な試合になると？」

ですが、前回の騒動を知っているならその程度は想定範囲内でしょうし、そうでなくても専用機持ちの代表候補生であることくらいはすぐに分かります。言い方は悪いですが、相手チームにとっても想定範囲内ではなくて？」

アイリさんに聞かれて返した答えに、オルコットが疑問の声を上げた。

正直なところ、自分の実力を一切理解していない自信家か何も考えずに参加した余程の馬鹿でもない限りはオルコットの意見で正しいと思う。

が、それとはまた別な懸念があった。

「……オルコット。」

「一番心を抉られる負け方って、何だと思う？」

「心を抉られる……？」

俺の質問にオルコットは鸚鵡返しのように呟いたが、それよりも先に答えを出した人がいた。

「何も出来ないで、負けた時ですよ」

答えたのは、アイリさんだった。

その視線は相変わらずアリーナの中心を見つめたままだったが、瞳が映している景色は別なもののように見えた。

「何も出来ないで負けると、其の後に何も残らないんです。残ったとしても、それは後悔と惨めさだけ」

「……後から、反省する事もできないから。どうすればよかったとか、それも考えることができないから。」

余計に、辛くなるんだよ」

アイリさんの台詞にフィルフィさんが続き、聞いていた簪と凰、オルコットが息を呑むのがわかった。

「この試合で、アイツがそれをやるって？」

「……力を、見せつけるために？」

凰が確認のように呟き、簪がその目的と推測される事を言った。

「……気のせいだと、いいんだがな」

俺としても外れて欲しい予想を抱きながら、その試合は始まりを告げた。

S i d e ラウラ

「下がっている」

開幕の宣言が下された直後に、それだけ告げて下がらせる。

(下手に飛び回られても、邪魔なだけだ。

それに、被弾などされて私の評価を下げてもらっても困る)

下がった事を確認し、眼前の二機を見据える。

二機とも火力寄りのバランス型だろう。装甲や機動系は通常仕様のままだが、その両手には軽量型のグレネードランチャーやミサイルランチャーといった、軽量の高火力単射装備を備えている。

(素人の浅知恵が……)

軽くブーストし、大きく横へと移動する。それだけで弾丸が逸れていく。

単射である以上、一撃を当てるだけでもそれなりにダメージを与えることができる。それが単射高威力の最大の利点だ。そして軽量であれば機動系への影響も最小限で済む。が、同時にそれは一撃を外した時の隙も大きいことを意味し、軽量高火力の装備は総じて弾数が少ない傾向にあることが多い。つまり、確実に当てられる腕前かそれ以前の前座となる牽制用装備が必要となる。

今回の相手である二人は、二人で攻撃を互い違いに行う事で単射の欠点を強引にカバーしようとしている。それは結構だが、素人に毛が生えた程度の腕前では根幹的な射撃技能に問題を抱えておりカバーしきれていない。

(所詮は有象無象……小手先の戦術で覆せると思っうな!)

現に、此方の進路を横に大きく振るだけでほぼ全てを回避できている。

其のうち迎撃しきれないと判断したのか、片方の装備がガトリング、もう片方が両手に重機関砲へと交換した。弾幕狙いの装備だろうが、ヌルいと言わざるを得ない。

「その程度で、対策のつもりか……!?!」

前進を中断し、急停止をかけて肩の大型レールカノンの照準をつける。狙いは、ガトリングの基部。

ガオオオオオオン

発砲音が響き、狙い通りにガトリングの基部を破壊した。

「ちよ、まつ……!」

相手ペアの片方が持っていたガトリングが爆発した。それによって発生した爆炎を目晦ましに再度急接近。

事前にロツクオンは完了している。そこへと向かって、ワイヤーブ

レードを一本投射し、爆炎の先で相手を補足。そのまま巻き取りつつ接近し、捕縛する。

ゴウツ！

次に、スラストターを吹かせて捕獲したまま一気に加速。地面へと叩き付ける。

ドゴンツ！

「……ッ!?!」

叩き付けた相手が一瞬息を詰まらせ、動きが止まる。

そのまま残っていた五本のワイヤーブレードを投射した際の速度を以ってメインスラストターと四肢のフレームの装甲の内部へとその隙間から突き刺していく。

SEは大して削れていないが、それでも相手は詰んでいる。スラストター無しのPICのみで動けるほどの腕など一介の学生が持っているはずもなく、四肢が事実上稼働不能になっている以上は攻撃手段がほぼ残っていない。

「……!?! う、動かない!?!」

フレームと推進系を破壊された相手が何か喚いているが、気にすることもない。

そのまま試合を終わらせるため、次の相手へと向かっていく。相手も最後の悪足掻き同然に重機関砲を向けてきたが――

「フン……その程度で!」

――アクティブ・イナージェナル・キャンセラー《A・I・C》を起動し、重機関砲の砲身部分のみ停止させる。

目論見通り、内部で銃弾が詰まり発砲時の薬莖が爆発した際の衝撃を全く逃がせずに爆散する。

さらに爆発で怯んだところへと追撃を仕掛けるべく再度右手を翳して《A・I・C》を使用し捕縛。同時に左手のプラズマ手刀を展開し、切り刻んでいく。

元々バランス重視のセッティングだったためか、装甲はそこまで厚くない。SEを削り尽くすのに、そう時間はかからなかった。

「……」

言葉が出てこなかった。

目の前で行われた試合は、もはや試合とさえ呼べない。それほどに一方的だった。

「……当たって欲しくない予想が当たったわね」

「……確かに実力はありますが。」

ドイツは、ここまで落ちぶれましたか」

鈴とオルコットさんが口々に評価しましたが、その内容はお世辞にも高評価とは言えないものでした。

同時に、横では別な意味で格の違いが判る会話が繰り広げられていました。

「……一夏君、どうだった？」

「悪い言い方をしていますが、概ね予想通りの試合でした。」

それでも、最後まで戦おうとした二人は素直に称賛したいと思いませんが」

「その口ぶりだと、攻略の目途は立ったみたいですね」

最初にフィルフィさんが影内君に無難な問いかけをして、影内君も影内君らしい答えをそれに返していた。そして最後、アイリさんが影内君に爆弾発言ともとれる質問を確信に近い声音で聞いていました。

「ええ。前々から考えていた攻略法もですが、いくつかの新しい案も。」

いずれも確信があるとは言いがたいものですが……」

「自信を持ちなさい、一夏。」

貴方が積み上げてきた経験はこんな所で碎かれる程度の物ではないでしょう。それに、今はパートナーとして闘ってくれる人もいますのでから」

アイリさんが私の方をちらつと見て、影内君へと言いました。

さらに、そこに続く人もいます。

「アイリちゃんの、言う通りだよ……。」

ね？ 簪ちゃん、だったよね？」

「は、ハイ!」

唐突に、それまで影内君と話していたフィルフィさんが私の方へと声をかけてきました。

突然の事に驚いて声が裏返った私に、それでも自分のペースを崩さないで語ったことは、私の想定の遥か外のことでした。

「……一夏君は、冷静に見えて無理しちゃうから。だから、一緒に戦ってあげて。」

一夏君の、師匠の一人として……友達の一人として、お願いです」「は……はい!」

私の想像の遥か外側の事を言ってきましたが、その内容は私にとつて改めて一緒に勝ち抜いていく決意を固めさせてくれるものでした。

(……うん。)

せめて、必死に頑張ろう。やれることは少ないかもしれないけど、それでも……)

そして、決意を新たにした時でした。

ふと、ついさっきのフィルフィさんの台詞が蘇りました。

(……って、アレ?)

確か……今、フィルフィさんは影内君の……)

「あ、あの……さっき、影内君の師匠って……」

「……? うん。一夏君に、体術教えたの。私だよ」

この瞬間、私の周囲には疑問と驚愕の入り混じった雰囲気広がりました。

「……まあ、予備知識が一切無い状態で会えばそうなりますか」

最初に呆れとも諦めとも取れる声でアイリさんが言いました。

「いや、でも……え?」

「……不躰ではありませんが、雰囲気からは想像も付きませんね」

次に、鈴とオルコットさんが混乱と疑問の声を上げた。

「安心しろ、オルコット。真実だ。」

俺如きでは練習相手すら務まらない人だよ」

「でも、一夏君にとっては、ルーちゃんが一番の師匠だよな。」

後、一夏君。そういう言い方は良くない」

「ええ。一時間も経たない内に言われた事を忘れましたか、一夏？
いい加減に自己評価をもう少し高く持ちなさい」

一方、影内君は相変わらず低い自己評価を注意されていました。心
なしか、アイリさんが不機嫌そうにも見えます。

でも、影内君の言い方を聞いていた私としても、彼の言い方はあまり
気持ちのいいものではありませんでした。

(確かに、真実なのかもしれないけど……それにしたって、自信が無さ
すぎない……?)

私自身、何度も救われている相手でもあり、今はトーナメントでの
パートナーでもある人です。影内君とは実力的に本当にそこまで開
いているとしても、必要以上に卑下しているように感じました。

(……なんで、こんなに卑下するんだろう……?)

それまでとは別種の疑問も抱きつつ、時間は過ぎていきました。

Side 一夏

一悶着あつたボーデヴィツヒペアと一般生徒ペアの観戦を終え、そ
の後何試合か終わった後。

俺と簪は、再びピットに居た。

「……いよいよだね」

「ああ」

この後に控えているのは、ボーデヴィツヒペアとの試合。

とは言っても、相手の戦力はその九割九分がボーデヴィツヒだろ
う。と言うより、ボーデヴィツヒがそうなるように仕向けるだろう。

「さて、傾向と対策は事前に話しておいたが……」

「それ以前に、何が起こるかかわからない、だよな。」

大丈夫……とは、まだ言えないけど。それでも、全力で頑張るよ」

「余り根を詰めすぎるなよ。」

いざとなれば、こちらもできる限り……」

事前に話したことの確認と、一時とは言えパートナーを務めている俺が果たすべき最低限の責務として考えている事を口にした、その時だった。

「私だって、影内君と一緒に特訓したんだよ。」

まだまだ追いつけたりはしないけど、一方的に頼りっぱなしにはしないよ」

意外なほどに強気で放たれた言葉に、一瞬面食らう。

が、同時にその変化を好ましくも思った。

「そう、か……。頼もしいな」

最初に会った時はどこか頼りなさげな雰囲気であり、同時に気弱そうな面も多分に見受けられる。そんな印象だった。が、今はそんな雰囲気などない。時としてはそういう場面もあるが、全体的には随分いい顔をするようになったと思える。

(この短期間にここまで変わる物か……。いや、以前からその素養と土台はあったのか)

短期間に随分と頼もしくなった一時の相棒と一緒に、次の試合へと出撃した。

Side 簪

「唐澤さん、《打鉄式式》製作の件は有り難うございました。」

ですが、今は試合ですので……」

「いえいえ、私としても貴重な経験が出来ましたのでお気になさらず。」

むしろ、私としては全力で来て欲しいですね。私も製作に関わった《打鉄式式》の性能を見たいですし!!」

どこか異様なハイテンションで受け答えをしてくれたのは、三組の所属で整備課の一人として《打鉄式式》の製作にも協力してくれた唐澤靖子さんです。

ですが、どこことなく見覚えのあるハイテンションに試合とは全く別

の意味で不安になりました。

「あ、それとその内倉持技研の事……というより、如月さんの開発した製品について、紹介してくれませんか？」

この前、高出力レーザーを利用した装備について話が盛り上がりまして。あんなに真剣に話を聞いてもらえたのは初めてだったので、将来的には如月さんのもともと働くことも視野に入れたくてですね……」

この時、私は必死で現実逃避したくなる気持ちを抑えていました。

(……心配事が、現実……)

ですが、そう固まっているわけにも行かないのでなんとか答えま
す。

「……善処、してみるね」

私は、これだけ応えるので精一杯でした。

S i d e 一夏

「……来たな」

「まあ、試合だしな」

試合のために出撃したところ、早速ボーデヴィツヒにお出迎えされていた。特に何の気無しに返事したところ、挑発を重ねてきた。

「随分と余裕だな。」

まるで自分たちの勝利を疑っていないかのようだ」

「負けるつもりで試合に臨むヤツは居ないだろ」

が、挑発されるのにも主に機竜世界で慣れたものだったためか、特にこれといって気にするような事でもない。

「フン……まあいい。」

叩き潰してやる」

「……その言葉、取りあえずそのまま返しておく」

ボーデヴィツヒの、試合前最後の挑発。

それだけは、そのまま返した。

(……あの時、最弱風情などといった事。

忘れてはいないのでな)

かつて、ボーデヴィツヒが凰とオルコットを強襲した時の事。

あの時に、俺が挑発の意味も込めて言った言葉に対して、ボーデヴィツヒが発した言葉。

友人を襲撃された上、彼女のあずかり知らぬ事とは言え最初の師匠ルクスさんを小馬鹿にでもするような発言が合った事。

(纏めて、今回の試合で返させてもらおうぞ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ！)

第四章（17）：悪夢の始まり

S i d e 一夏

「ハアアアアア！」

「オオ！」

互いに叫びながら、動き出す。俺は機竜牙剣を構えて急接近しながら、ボーデヴィツヒは肩の砲撃装備を準備しながら。

ガオオオオン!!

最初に仕掛けてきたのは、ボーデヴィツヒの方だった。正確に狙いをつけてくるとそのまま躊躇う事無く射撃を仕掛けてくる。

それ自体はサイドステップで特に問題なく避けられたが、その先にあのワイヤーのような装備が待っていた。

(……この程度で対策のつもりではないだろうな)

確かに避けにくい、それでも大きな問題になるようなものではない。

「フツ！」

クイックドロウ

神速制御を用いて手にしていた機竜牙剣を振るい、ワイヤーを弾き返す。

すぐさま弾かれた先で進路が再度修正されて此方へと来るが、それまでには十分に接近の猶予がある。背翼の推進器にエネルギーを回しさらに加速。

が、ここでボーデヴィツヒは右手を突き出してきた。

(また、あの停止装備か?)

ボーデヴィツヒのISが持つ、第三世代兵装。相手の行動や弾丸などの物理的な運動を一定範囲内に限って停止させるあの装備は、格闘戦や実弾射撃を主体としている機体に対しては非常に強力であり効果的と言える。

(……いや、そう安直な選択肢には走らないだろう。

となれば……)

現在、周囲には背後から迫るワイヤーが数本。照準が向けられたままの大型火砲。そして、向けられた右腕。

(……そういう事か)

俺が得意とするのは基本的に近接戦であり、当然接近して動き回ることになる。

が、それは同時に動きが止められれば一気に窮地に陥ることを示している。そして、ボーデヴィツヒにはそれを行うにはうってつけの第三世代兵装装備がある。だがそれは前にも一度俺に見せている上に、すでに限定的にしか止められないという弱点を露呈している。となれば別な手段も考えるはずだ。

そして今現在の状況でそれと思しきものは、後ろから迫るワイヤー。今現在まで知り得る限りの状況では補助装備の印象が拭えないが、嘗てのコーラル卿が示したように補助装備だからと言って侮れば痛い目を見ることになる。現に、関節付近に巻き付けるだけでも動き位なら止められるだろう。

(なら、此方が取る手は簡単だな)

一度四つ足全てを使って急停止をかけ、空いていた片手に機竜息砲を用意。多少の威力と引き換えにチャージ時間を短縮し極短時間で引き金を引く。

「……チツ！」

ボーデヴィツヒは舌打ちしつつ、最低限の横移動のみで回避する。が、それにより火砲の照準が逸れ、ワイヤーも一時的にコントロールを失う。

その隙に機竜息砲をしまうと、改めて推進器を吹かしつつ地面を蹴って一気に接近を仕掛ける。

「この程度で！」

だがボーデヴィツヒもされるがままではなく、回避した際の勢いを殺さぬまま火砲の照準を合わせることなく撃ち放った。その狙いは俺ではなく、ボーデヴィツヒが組んでいるペア——唐澤靖子さんと言つて、簪の《打鉄式式》製作も手伝ったらしい——と戦っている簪に向かつてだった。

(考えることは同じ、か……ッ！)

今回、簪に唐澤さんの相手を頼んだのは不確定要素を出来る限りな

くすことだった。

ボーデヴィツヒ自身は進んで二人で戦おうとはしないだろうが、誰にとっても今回の戦いぶりが自身の評価に繋がる事には違いない。となれば、半ば無理矢理にでも介入してくることは十分に考えられる。

その可能性を早期に無くすために簪に頼んでいたのだが、どうやらボーデヴィツヒも同じようにこれまでの戦闘データが一回しかない簪と《打鉄式式》を不確定要素として不意打ちを使ってでも潰しに来たのだろう。

咄嗟に防ぎに行こうとしたが――

「大丈夫！」

影内君はボーデヴィツヒさんに集中して！」

――簪は特に苦にした様子も無く回避し、そのまま唐澤さんとの戦闘を続行していた。しかも、戦況を見るにあちらは終わりが見え始めている。

(……いくら専用機を得たとはいえ、ここまで変わる物か)

簪の動きを見て、実際に彼女の言う通りにボーデヴィツヒの方へと集中する。

ボーデヴィツヒは砲撃の反動を殺さずに利用することで、さらに勢い良く旋回していた。無防備に背面をさらしていたためそのままブレードで切りかかろうとするが――

「その程度で、通じる物か！」

――ボーデヴィツヒは器用に右腕を後ろへと正確に突き出すと、その手首に当たる部分から光刃を展開していた。そのまま受け流すと、さらにもう片方の手にも同様の物を展開して格闘戦を仕掛けてくる。

ボーデヴィツヒの手首に取り付けられたその武装は、単純に腕の延長として使える分小回りと手数が圧倒的に多い。こちらも機竜牙剣二振りに対応するが、攻撃回数ではむしろボーデヴィツヒが上だった。

「フン……口ほどにもない奴め！」

ボーデヴィツヒが勢いづき、より直接的な攻撃を多く仕掛けてくる

ようになる。

が、それこそがこちらの狙い目だった。

クイックドロウ
「神速制御」

ギヤギン！

「……ッ！」

神速の一振りに、攻撃に寄った戦い方へと移行し始めていたボーデヴィツヒが動揺した。そのまま受けきる事が出来ずに直撃する。

「この……小癩な！」

直撃したことで動揺はしたが、さすがにそこは現役の軍人。すぐさま体勢を立て直すと三度の攻撃を仕掛けてくる。

が、その時にはこちらも次の一手の準備を終えている。

センジン
「戦陣・劫火！」

ボーデヴィツヒが大上段に振るった手刀を、袈裟懸けの一閃で弾き飛ばす。攻撃力を強化して放ったその一撃は、確かにボーデヴィツヒにもダメージを与えていた。

が、ボーデヴィツヒの方も咄嗟に地面に肩の火炮を撃ち込み、盛大な土煙を目晦ましにしてきた。ISのハイパーセンサーのように咄嗟に索敵ができない機竜には、この目潰しは意外と効く。

(……まあ、これが一対一だったならばの話だが)

簪から聞こえてきた通信の声を聞きつつ、俺は俺で次の一手の準備のためあえて普通に機竜牙剣を振るいボーデヴィツヒの第三代兵装に捕まっていた。と同時に、機竜牙剣の握り手に竜尾鋼線を巻きつけておいた。

Side 簪

「ごめんなさい、唐澤さん！」

これで終わりです！」

《打鉄式式》の主兵装である《山嵐》を一斉射して唐澤さんの最後のSEを削り取った。その時、唐澤さんがどことなく満足そうな良い笑

顔だったのはこの際気にしないでおくことにした。

唐澤さんが無事に着地したのを確認した直後に、影内君に通信を入れる。

「影内君、こっちは終わった!」

『分かった。』

出来るなら、こちらの援護に入ってほしい』

「何をすればいいの?」

影内君からの返答を聞いて、身構えました。

(最初に、影内君が言っていた……一人で、適切に攻め立てる。

それが、ボーデヴィツヒさんへの最大の対処になる!)

心の中で気合を入れ直して、影内君からの返答を待ちました。

『まず、此方が意図的にボーデヴィツヒの第三代兵装に捕まる。そこに荷電粒子砲を撃ち込んでくれ。』

前に風とオルコットが襲われた時、ボーデヴィツヒはオルコットの

ビームを避けるだけで止めなかった。つまり……』

「エネルギー系の装備は止められない……!」

『推論だがな。』

駄目だったら、また別な手を使うさ』

言われたことに納得しつつ、連射型荷電粒子砲《春雷》を準備します。今は土煙が上がっていて正確には狙えないと思いましたが、それは杞憂でした。

『簪、狙えるか?』

「土煙が上がっているから、正確には……センサー類の反応だけだと大雑把になりがちだし……」

『分かった。』

取りあえず、今から直上に上がる。その時、真下の位置に』

「分かった!」

言われた直後、影内君が真っ直ぐに飛び上がっていました。その手には鞭のような装備が握られています。

そして、その先にはボーデヴィツヒさんが見えました。

「逃がさない!」

ボーデヴィツヒさんが気付いて回避しようとしたけど、その時には既に私の《春雷》が届いています。数発は当てられましたが、大したダメージにはならずボーデヴィツヒさんは回避軌道へと移っています。

さらに、影内君も主力としている大剣を回収しました。

「簪、そのまま！」

「うん！」

ですが、そこで影内君が援護に入ってくれました。彼が得意とする格闘ではなく、マシンピストルと大型砲に似た性能の二種の射撃装備です。

「……チツ、小癩な！」

ボーデヴィツヒさんが反撃しようと、肩の大型実体砲を向けてきました。

ですが、それ位なら今の状態でも十分に回避できます。《白式》のスターやブースターの一部を組み込んで推力に余裕があるために、《春雷》を向けた状態のままでも余裕で移動ができるからです。影内君も空中では支えるのに苦労するだろう大型砲を仕舞うと、ライフルのような形状の装備に変更して移動しながらの射撃に移っています。

そのまま影内君と私はボーデヴィツヒさんを中心とした円運動を描くようにしての回避運動と同時に射撃攻撃を仕掛けていきます。

（影内君の言った通りだ……中距離以遠のまともな火力があの大砲以外にないから、必然的に単射化する。それなら、撃たれるタイミングを読んで回避さえすれば此方から一方的に攻撃出来る！）

ボーデヴィツヒさんへの対策が上手く行っていることに実感を抱きながら、私たちはさらに次の一手を考え始めました。

S i d e アイリ

「上手く戦っていますね。流石です」

「本当に……二人とも、凄くいい流れを作っていますね」

一夏とそのパートナーである簪さんのタッグマッチを眺めながら、呟きました。それに相槌を打つように答えてくれたのは、試合後に合流したシャルロットさんです。

一度はスパイをしようとした相手ですが、事情が事情だったためこれ以上の実害が出ない限りは此方としてもそこまで厳しい対応はない方針です。

(まったく……いつもあんな感じで闘ってくれたらいくらかは安心してきるのですが……)

ここで考えるべきではない事を考えながらも、観戦を続けていました。

「簪も随分いい動きをするようになった。」

影内との訓練はやる気も出た事だろうし、影内の指導もよかった。あそこまで伸びるのも納得と言えば納得だが」

「フフ……再戦が楽しみになってくるじゃない。」

影内相手には当然だけど、簪にも後でリベンジね」

簪さんの友人である剣崎さんと凰さんは、やはり友人の事が気になるのか簪さんの動きにも注目しているようでした。

(……一夏も、貴女達がよく知っているであろう人なんですがね。

本当に、一夏は……)

一夏が彼女たちにとって友人である事を知っている身としては、少し寂しい感情も感じます。ですが、それが一夏の彼女たちに対する、彼なりの気遣いであることを知っている身としては迂闊に話すこともできません。

(果たして、それが本当に気遣いと言えるかどうかは甚だ疑問ですが……)

「いっちょくらく、かんちゃんもがんばれ〜!」

「……お菓子、食べる?」

「いただきます〜」

そして、今回護衛として同行してもらったフィルフィさんは、横に座っている本音さんと一緒に応援していました。

ただ、途中途中でお菓子を食べていたり、完全にマイペースです。

そして、あの二人の周辺だけ時間の流れがゆっくりになったように感じました。

「……戦況は概ね影内さんと簪さんに優位、半面ボーデヴィツヒさんは影内さん一人への対策に固執しすぎて簪さんへの対策が不十分だったみたいですね。

このままの流れでしたら、あのお二人の勝利は揺るがないでしょう」

オルコットさんが今の状況を分かり易く纏めてくれました。

そして、試合の方も更なる動きが見られています。

(……本当に、強くなりましたね。一夏)

一時期の彼を知っている身としては、この試合に少し感慨深いものを感じました。

(なんせ、あの時期の一夏は兄さんに教えられながら、必死になっていましたからね。

それが今では教える側とは……)

彼の成長も感じながら、私は試合を見守っていました。

Side 簪

「行つけえええ！」

「この……邪魔だああああ！」

ボーデヴィツヒさんを相手に、《山嵐》の四十八発のミサイルを撃ち込みました。ボーデヴィツヒさんはあの第三世代兵装で対応する……のかと思いましたが、そこで意外な手を打ってきました。

(……ワイヤーカッター!?)

あの六本のワイヤーカッターを空中の一点で固定したように止めると、そこから先を円形に振り回して即席の盾にしてみました。

ミサイルはあくまでボーデヴィツヒさんへと向かって進んでいくため、そのワイヤーの盾を超えることができません。ほぼ全て撃ち落とされ、凄まじい爆風が発生しました。

ですが、これだけでは当然終わりません。

「影内君！」

「任せろ！」

「……後ろから、だどー！」

爆風の発生した反対側から、影内君が突撃しています。その手には二振りの大剣を携え、完全に格闘戦を仕掛ける気です。

「ツチー！」

ボーデヴィツヒさんが毒づきながら、あの第三世代兵装で止めに掛かりました。

何とか止められたみたいですが、彼女にとってかなり辛い状況であるのは表情から読み取れます。

「爆炎を目晦ましにして後ろからの不意打ちなど……卑怯者が！」

「生憎、敗北が許されない場所に立ったことも一度や二度じゃなくな。

この程度の策、弄するのも慣れてるんだよー！」

挑発を仕掛けていきますが、その時には既に私たちの次の一手を打っています。

「ハアッ！」

私が《夢現》を持って接近戦を仕掛けて行きます。

この時、ボーデヴィツヒさんは体を横に向けながら片腕だけを向けて影内君を第三世代兵装で捕縛しています。でも、この体勢だとあの大型砲は射角の問題から使えず、ワイヤーカッターは射出位置の問題から注意を怠らない限りは十分に避けられます。

「ッ！」

ボーデヴィツヒさんが選択したのは、手首に仕込まれているエネルギー刃の手刀による反撃でした。ですが、薙刀である《夢現》と手刀では余りにも大きなりーチの差があります。加えて、今この瞬間に限っては影内君を《A・I・C》で拘束しているボーデヴィツヒさんは事実上その場に釘付けにされており、反撃の余裕があるとは思えません。

ザギイイイイン！

何度かの格闘のやり取りの後、《夢現》の刃が私の狙っていた左肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットを捉えました。そのままの勢いで、内側まで深く抉っていきます。

「この……ッ！」

卑怯者どもが！ 1人では勝てないとも言う気か!？」

ボーデヴィツヒさんが啖呵を切りましたが、それに対して意外といえど意外な反応を示してくれた人が居ました。

『簪、少し我儘を言ってもいいか?』

「……我儘、つて?」

《打鉄式》の個人用回線プライベート・チャンネルへと、影内君が通信を繋いできました。

以前は影内君側の機体の問題でできませんでしたが、それ自体は如月さんが専用の通信機を作りそれを《ユニテッド・ワイバーン》に増設する形で問題を解決しています。

そして、そんな形でボーデヴィツヒさんに聞こえないように行ったその会話の内容は、影内君の言葉としては意外なものでした。

Side 一夏

ペアを組んでいる簪に要点だけ掻い摘んで説明し、了承は得た。

これで、何も憂うことなどない。

「1人では勝てない……ね。」

そう言えば、ボーデヴィツヒ。前に言っていたな。『ほぎけ、最弱風情が。そこまで言うなら、足元にも及ばないと言ったその証拠を示して見せろ』と」

「ああ、そんな事もあったな。」

で、それがどうした?」

時間稼ぎの意味も含めて、何時かにボーデヴィツヒが嵐とオルコツトを襲撃した時の話を始めた。予想通りではあるが、ボーデヴィツヒはその話に乗っかってきている。

「何、此方としてもその台詞には多分に思う所があったな。」

加えて言わせてもらおうが、俺としてもあの時に友人二名が襲撃されている。というわけで、だ」

ボーデヴィツヒ自身にも見せるための次の一手の準備のため、肉体操作による全力の行動を、自身の精神操作によって抑えながら続きの台詞を話していく。

「……あの人には、遠く及ばないが。」

よく見ておけ。これが、『最弱』と呼ばれた人が生み出した奥義が一つだ……！」

「フン……見せてみる、最弱風情の剣を！」

ボーデヴィツヒも啖呵を切るが、俺は稼がれた時間を使って準備を終えている。

ゴッ！

背翼を全力で吹かせて、最短距離を真っ直ぐに進んで行く。同時に、機竜牙剣を大上段に構えた。

《ユナイテッド・ワイバーン》から小刻みな震えが伝わってくる。それが、俺達の勝利への確信を持たせてくれた。

Side ラウラ

「フ……そんなに震えていて、よくも大口が聞けたものだな！」

今しがた啖呵を切った影内一夏の様子をよく見れば、それが虚勢に過ぎない事がわかる。

小刻みな震えを隠しきれず、よく見ればその機体にも震えが伝播していることが見て取れる。そのような状態で振られる剣など、嘗てブリュンヒルデ世界最強と呼ばれた教官の剣を見てその指南を受けた身とすれば脅威などではない。

其のことは知ってか知らずか、その状態のまま影内は何の捻りも無く正面から突っ込んできた。

ゴッ！

(……愚かな。

まだ、格闘では有効打を撃てない事に気付かないのか！

迎撃してもいいが、回避される危険性があるくらいなら一度接近させたうえで振るわれた剣を《A・I・C》で捕縛したほうがより確実に仕留められる。

「行くぞ……！」

影内一夏は両手で大上段に一振りの大剣を持ち上げるが、そのような大振りの動作は《A・I・C》の格好の的だ。

(愚か者めが……貴様は、今ここで仕留める！)

疑いようなない勝利に向け、右手を突き出し《A・I・C》を起動する。

影内一夏の何の捻りも技術も工夫も無いその剣を、確かに受け止め

「……な、にッ?!」

——切れなかった。ゆつくりとだが、確実に影内の剣は《A・I・C》の停止結界の中を進んでいる。

やがて、その剣は徐々に徐々に停止結界の中で加速していき——

「強制超過！」

——完全に、食い破った。

バキヤアアアアドゴオオン!!!

ISの金属装甲が力任せに無理矢理に叩き切られていく不協和音が響き、斬った大剣が勢いあまって地面に激突しクレーターを作り其の周囲に亀裂を作る程の圧倒的な破壊を齎^{もたら}していく。

ただの、大剣の一撃が、である。

「ば、バカなあああああアアアアア！」

《A・I・C》を使用して尚、装甲には優れた部類のISである《シユヴァルツィア・レーゲン》の右半分がほぼ壊滅するという悪い冗談のような被害を確認する。

(こんな、事が……信じられん……)

「まったく……何も、正面から破らなくてもいいでしょう……」

「でも……少し、一夏君らしいね。」

一夏君、ルーちゃんを悪く言う人、許そうとしないから」

この顛末を呆れながら見ていた私のぼやきに、ファイルフィさんが微笑みながら返しました。

「……………」

一方、横を見ると皆さん言葉が出ないようでした。

「……皆さん、どうしましたか?」

流石に居心地が悪くなってきたのでそれとなく声をかけてみた所、皆さんすごい勢いでこちらを振り向いてきました。正直に言うところ、ただけ気味が悪く感じました。

「アーカディアさん!」

「は、はい……なんですか?」

思わず冷や汗が出かけるレベルの気迫でオルコットさんから話しかけられ、次いで皆さんが口々に問いかけてきました。

「今、影内は何をしたんですか!?!」

「アレ、どう考えても尋常じゃないですよ!」

「絶対おかしいよね、アレ」

「……なん、だったんだ……あの一撃は……」

皆さんが混乱の只中にあることは分かりましたが、だからと言っても気迫が入り過ぎています。

「落ち着いてください。」

そうですね……説明できる範囲での説明はしますよ」

「是非、お願いします」

剣崎さんが凄いい勢いで頼み込んできましたが、さすがに機竜とISでは根幹的な操作が異なる以上は詳しく教えたところで意味はありませんし、そもそも教えることもできません。

ですので、要点だけ伝えることにしました。

「あれの名前は、強制超過リコイルバーストと言います。少々特殊な操作技術で、それにより超絶的な威力の一撃を放つ事を可能とするものです。」

クイックドロウ
神速制御同様、訓練を積みれば誰でも使える可能性はありますが……。色々と難点もありますので、使う人はあまり見ませんね」
私の説明に、幾人かの人が食いついているようでした。さらに質問が続きます。

「その、特殊な操作ってのは……？」

「企業秘密ですので、さすがに答えられません」

クイックドロウ
「神速制御って、あの高速の一振りですよ？ それも同様ってことは……」

「あれもちよつと特殊な操作を行う事で、神速の動作を可能とする技術ですよ。系譜的には強制超過リコイルバーストとはちよつと違うものですが。

ついでに、これも教えることはできませんよ」

「そ、そうですか……」
それぞれからの質問に答えつつ、誤魔化すところは誤魔化していきます。

ですが、私の答えを聞いたたびに皆さんが打ちひしがれたように沈んでいっています。

「しかし……停止させることに特化した装備を前にして、正面から切れるなんて……」

「すつごい威力だね〜」

デユノアさんと本音さんが感心したように言いましたが、私は切れたこと自体にはさほど驚きは持っていません。私が呆れたのは、その手段を選択したことについてです。

「それ自体は、別に不思議な事ではないでしょう」

「……え？」

「どんな物にも、限界があるという事です。

あれだってISが運用する装備には変わりないのですから、ISが運用できる以上のエネルギーを出力することができません。しかも、その中でさらに他の武装の運用などにも割り振りますから、もし今回の強制超過のように威力のみに特化した一撃を受けた場合、受け止めきれなくなることは十分に考えられることです」

私達の世界
機竜の側においても、一見すると強力無比に思える神装でも何らか

の制約や欠点を有していることなど珍しい事ではありませんでした。その意味で言えば、この結果もそう驚くような帰結でもありません。最も、この考え方をISに適用していいのかどうかは疑問の残るところではありませんが。

ですが、私の言った考え方はIS搭乗者の方々には特に新鮮に聞こえたようで、皆さん呆気にとられたような表情になっていました。

(……やはり、考え方に違いがありますか。)

まあ、それはそれでいいのですが)

こういう所で私たちと彼女たちの考え方の違いを実感しつつ、視線をアリーナに戻します。

「そもそも、先程の一撃もある程度の加減はしている事でしょうし」

「あ、アレで加減……!?!」

そして、特に意識せずにボヤいた私の言葉に、更に混乱が広がりました。

「ええ。」

そもそも、正中線で切っていませんしね。もし本気で切りに行っていたら、ボーデヴィツヒさん自身を含めて半壊程度では収まらなかったことでしょう。だから当たる直前に剣筋を無理矢理逸らして、半壊程度で済ませたんです。後は、あの停止装備を超えた直後に駆動系の出力もある程度は落としていくことでしょね。

実際は一夏に聞かないと分かりませんが……」

私の言葉に、一緒に見ていたIS関係者の皆さんは啞然としています。ですが、視線をアリーナの中に戻した直後に、その驚きは全く別なものへと向けられます。

向けられた先は、アリーナの中。そこでは、誰にとっても予想外の展開が繰り広げられていました。

S i d e ラウラ

(負ける……こんな、ところで？　私が、負ける?)

霞がかかり始めた頭で、思考していた。

《シュヴァルツィア・レーゲン》はすでに半壊状態であり、当然の事ながらSEはすでに尽きている。私の敗北は、変わりようのない現実となっていた。

(……負けられない……私に、敗北は許されない……！)

塗り潰された思考の中で、何時かの記憶が霞がかかった頭の中で鮮明に思い起こされる。

『……私は、強くないさ。』

唯一の家族を……弟を、失いたくなかった。そのためにここまで来た。でも、出来なかった。だから、強くなどは無いさ』

その件は知っていた。というよりも、ある意味では私も当事者だった。

第二回モンド・グロツソの決勝戦で、教官を辞退させるためにその弟であった人間が誘拐された。が、日本政府は教官を優勝させるためにその事実を隠蔽し、最終的に弟であった人物は行方不明——事実上の死亡扱い——になったらしい。

そして、その時の私は基地での待機だったが、会場の警護にあたった部隊は——私が隊長を務める以前の『シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊』だった。

『ただ、弟を失いたくなかった。それだけだったんだがなあ……』

その時の、泣きそうな笑みを今でも覚えている。

それまでの自分は、ISが登場して以後、成績が低迷するばかりだった。最底辺の成績と言っても間違いないほどに。

その中で、教官の弟の誘拐事件が起こった後に隊長へと抜擢された。多くの隊員が交代を余儀なくされるほどの大怪我を負ったこともあり、隊長も交代することになったからだ。

最底辺の成績だった自分が隊長に、である。

強くならなければいけないと思った。その思いを叶えてくれたのが、織斑千冬教官だった。

なのに、其の人は自分を強くないといった。

(力を……さらなる、力を……！)

分からなかった。だから、答えが欲しかった。

なのに、その答えをくれるかもしれない人は、自分を強くない
といった。だから、答えを探そうとした。強くなれば、答えが見付け
られると思った。答えが見つければ、私の望みが叶えられると思っ
た。

だから——力が、欲しかった。

—ダメージレベル：D—

—セイシン精神状態：キテイチ規定値クリア—

—キドウ起動条件：クリア—

—VTシステム：キドウ起動—

「ツがアアああああああアアア!?!」

激痛と共に思考が塗り潰され、戦闘時の動き方が大量に頭の中に入ってくる。

だが、その中で一欠片だけ、戦闘とは関係のない記憶が混じっていた。

『私は、————のために、強くなければいけないと考えています。』

だから、教えてください。貴女が、どうやって強くなったのかを』

そこで、少しの違和感を覚えた。

(……私は、あの時。何と、言っていた………?)

だが、大量の記憶で塗り潰された思考の中で、それ以上考える事は
できなかった。

Side 一夏

「ツハア……ハア……」

強制超過で《A・I・C》を超え、万が一の事を考えて半壊程度で
済むように多少の手加減を交えつつ、ボーデヴィツヒへと止めを刺し
た。ボーデヴィツヒを倒しきれなかった時の事を考え簪に後詰を頼
んでいたが、SEの残量を見るにそれは必要なさそうだった。

無理に手加減を加えたおかげでいつもよりも疲れたが、それをしただけの価値はあっただろう。簪も緊張状態から解放されたためか、

——そうして勝利の余韻に浸っていたのは、短い間だった

「ツがアアああああアアアア!?!」

突然、ボーデヴィツヒが悲鳴を上げた。

流石に俺も簪も驚いてボーデヴィツヒの方を見るが、その時には既に異変が起こり始めていた。

「な、なんだ……コレは……?」

「ISが……溶け、てる?」

ボーデヴィツヒのISが、真っ黒に染まった粘性の高い液体のような状態になると、そのまま原型など一切とどめない形状にまで溶けていく。見た目に言えば、まるで黒い汚泥だった。そして、その汚泥は意識が朦朧とし始めた様子のボーデヴィツヒを飲み込み、その身へと纏わり付いていく。

ISは、少なくとも習った範囲で言えば、その形状を変えるのは搭乗者のデータ入力である初期化フィッティングとそれによって機能を整理する最適化パインナライズの最初の起動時と、形態移行の時のみならず、それにしても、ここまでの変異ではないはずだ。

「へ、この形状って……まさか、じゃあ……コレは!?!」

「……簪、知っているのか!?!」

簪には思い当たる事があるみたいなので、説明を求めようとした。

だが、その前に変異したボーデヴィツヒのISの形状を確認した時、俺は我が目を疑った。

全身が黒い汚泥を塗り固めた人形のようにも見えるが、それは確かに人型だった。成人女性のような体形の周りには、腕、足、頭部のみが必要最小限の装甲のみを纏った、近接戦闘に特化したISのようにも見える。そして、その手には、一振りの日本刀を握っている。

その形には見覚えがあった。

嘗て、一振りの刀のみで世界最強ブリュンヒルデと呼ばれるにまで至った人物とその時の専用IS。今、量産機として幅広く使われている《打鉄》の考元にもなった機体。

「……《暮桜》、なのか？」

「うん。多分、そうだと思う……。でも、もしそうなら、あのシステムは……まさか、《VTシステム》、なの？」

簪が、そのシステムの名前を言った時。

ボーデヴィツヒを取り込んだISが、此方へと一気に接近してきた。

第四章（18）：悪い正夢

S i d e 一夏

「チイツー！」

ガギヤリイイイイン！

機竜牙剣と《雪片》モドキの刀がぶつかり合い、金属質で耳障りな音が鳴った。そこにはよく見なくても火花が散っている。

「影内君！」

後ろに庇った形になった簪が叫び、咄嗟に《山嵐》の引き金を引いたみたいだった。

だが、その動き方はもはやボーデヴィツヒ自身のものではない。だからこそ、対ボーデヴィツヒを想定した対抗戦術は通じない。

「……」

ボーデヴィツヒを取り込んだ《暮桜》モドキが簪の方を向くと、そのままそちらの方へと全力で接近した。しかも、その道中に狂氣的としか思えないような超高速での鋭角な軌道をとると、四十八発のミサイルを斬り落としている。爆風も発生するが、それさえもダメージソースになっていない。

（……何の冗談だ！）

姿のみならず、その剣技や操縦技術までもを模倣している。それは、正しく偽物の世界最強ブリュンヒルデと言える存在だった。

が、そんな事を考えている余裕はない。ミサイルを全て切り払うという凶行に出た《暮桜》モドキはそのまま簪の方へと進路を変更している。

（マズい！）

簪の腕前が信頼できるものであることは知っているが、それでもこの《暮桜》モドキを相手するには危険すぎる。なにより、《暮桜》モドキは恐らく取り込んだボーデヴィツヒへの負担を無視して動いているため、非常識な軌道で動き回っている。半面、簪はいくら機体が機動性重視とは言ってもどちらかと言えばオールラウンダー。純粋な近接戦のみとなればどちらに軍配が上がるか。それは目に見えてい

た。

なんとか強引に前に割って入り、振り抜かれた剣筋に合わせて神速制御をもつて機竜牙剣を振るう。なんとか一太刀はいなせたが、次ぐ一手は四つ足でのバックステップと障壁へのエネルギー供給で間に合わせた。

だが、衝撃を殺しきれずに後ろへと半ば吹っ飛ばされた形となる。「全く……無様晒してるな……」

簪、大丈夫か!?

「それは影内君でしよ!」

自身の晒した無様を不甲斐無く思いつつ、簪の方を見た。横目で見た限りでは特に問題なく見え、元気な返事が返ってきている。おそろくは、まだ問題ないだろう。

だが、いつどこでどのように転ぶかもわからない。最悪、《ユナイテッド・ワイバーン》を調律し本来の出力状態へと移行、機竜本来の性能で闘う事も視野に入れている。

(だが、それだと今後の活動がな……)

あくまで任務でこの世界に來ている以上、優先すべきはその達成ゆえに、ギリギリのところまでそれを考えなければいけない。

ひとまず、今日の前にいる《暮桜》モドキに対する情報が無さすぎる。

「簪。さつき、今のボーデヴィツヒのISの変化に心当たりがあるようなことを言ってたな?」

「う……うん。」

あれは、多分だけど……《VTシステム》だと思う」

「よければ、解説貰ってもいい、か……ッ!」

簪へと解説を頼もうとした瞬間、こちらへと再度狙いを付けてきた《暮桜》モドキが急接近してきた。そのまま《雪片》モドキの刀を振り、こちらへと斬撃を加えてくる。

再度、神速制御を用いて機竜牙剣を振るう。が、其の後の斬り合いには付き合わず弾いた際の速度を利用して後退。今度はキツチリと避けていく。

「影内君！」

「大丈夫だ。それよりも……」

俺の返答と催促に、簪も幾分落ち着きを取り戻しながら説明をしてくれた。

「う、うん。」

《VTシステム》……正式名称《ヴァルキリー・トレースシステム》は、過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きを模倣するシステムなの。

だけど、相応の鍛練を積んでない人が部門受賞者の……特に、高機動系や格闘系の人の動き方を真似すると操縦者の身体が付いていけずに、最悪死に至る可能性があったから、今はアラスカ条約でいかなる国家や組織でも研究、開発、使用の全てが禁止されてるはずなんだから……」

「今回、ボーデヴィツヒの《シュヴァルツィア・レーゲン》には搭載されていた、と……」

システムその物への嫌悪感を覚えるが、今は目の前にいる以上どうにかして対応しなければならぬ。

「簪、逃げれるんだっけ？」

「影内君は!?!」

「どうも此方を狙ってきているみたいだな。」

教師部隊が来るまでは、壁役やっているさー！」

『非常事態発令！』

トーナメントの全試合を中止！ 状況をレベルDと認定。来賓、生徒は直ぐに避難する事！ 教師部隊は速やかに鎮圧にあたれ！

繰り返す！———』

聞こえてきたアナウンスに、ようやく事態が動き始めたことを察する。

そして、もう一つハッキリしたことがあった。

『一夏、聞こえますか?』

「アイリさん?」

聞こえます。ご用件は?」

アイリさんからの通信だった。今日は観客席の方で観戦をしてい
たはずなので、今は避難誘導の只中にいる事だろう。誘導しているの
かされているのかまでは言及しないが。

『現在、観客席のほうでは一般生徒と来賓の避難誘導が行われていま
すが、その安全確保のためにアリーナを覆っているシールドバリアと
シャッターを破壊することは避難誘導への支障が出ることが予想さ
れるためできません。』

ですので……』

「教師部隊が来るまでか、最悪でも避難誘導が終わるまでは持ちこた
える事……ですか？」

俺の答えに、ギリ……と歯噛みしたような音が聞こえた。

『……はい、そうです。無理をしろとは言いません。万が一の事態に
なる前に、本来の性能で相手してしまっても構いません。』

……一夏。二つ目の約束は、覚えていますね？」

「はい。忘れるなど、ありません」

俺の答えに、アイリさんは念を押すように続けた。

『決して、あれだけは破らないでください。』

此方もできる限り早く済ませます』

そこまで言うと、通信が途切れた。

観客席の方を横目で見ると、慌ただしく避難誘導されている多数の
観客と来賓が見える。そして、その中で避難誘導している教師陣と代
表候補生、そしてアイリさんとフィルフィさんも見える。

色々と言いたいことは多いが、今やるべきことは変わらない。先の
強制超過で少々疲労が溜まっているが、それでもやらなければならな
い。

目の前から再度襲い来る《VTシステム》を前に、俺は再度、機竜
牙剣を構えた。

「速く避難してください！」

「落ち着いて、避難経路はこちらです！」

つい先ほど、研究機関のテストパイロットを務める箆さんから、今起こっている現象——《VTシステム》についての説明を受けましたが、

ですが、それそのものへと嫌悪感を覚えたことはとにかく、今はそれによって引き起された事態を收拾しなければいけません。

(ですが、今の状況では……)

『非常事態発令！』

「トーナメントの全試合を中止！ 状況をレベルDと認定。来賓、生徒は直ぐに避難する事！ 教師部隊は速やかに鎮圧にあたれ！」

繰り返す！———』

非常事態と教師部隊の招集を示すアナウンスが相変らず流れまていましたが、それはいいです。むしろ、前よりはよくなったと思いうべきでしょう。

私たちにとつて問題なのは目の前の隔壁で、これのおかげでフィールフイさんが一夏の支援に行けません。というより、観客席にいた誰もが行けません。

(しかも、教師部隊も大部分が避難誘導……事実上、今アリーナで《VTシステム》の相手をしているのは一夏と箆さんだけ……)

教師部隊の避難誘導が余り上手く行っておらず、結果的に質の低さを数で補っていました。ですが、それだけ数を割いているという事はそもそも《VTシステム》に割いている人数が減ることを示しており、結果的に一夏と箆さんの負担が相対的に増えることを示しています。

(この学園の危機管理体制はどうなっているんですか!?)

王立士官学校アカデミーでも、問題が全くなく過ごしたという事は出来ません。ですが、そもそも想定される事態への対策が杜撰な部分が二度に渡って散見された以上は疑問を禁じ得ませんでした。

さらに、もう一つ心配な部分が今回はあります。

(……一夏、無理しないでくださいね)

今回、一夏は後ろに箆さんという共に闘うパートナーがいますが、

それはあくまで試合での話。実戦となれば、多少の無理をしてでも一夏は簪さんを守るように動くでしょう。

(それ自体が悪いとは思いませんが……)

心の中で無事に事態が収まることを祈りながら、私も避難誘導を手伝いました。

S i d e 簪

「っ、強い……!?!」

目の前から迫りくる《VTシステム》を相手に、私たちは常に後手に回る結果となりました。

しかも、どういう訳か《VTシステム》は第一に影内君に、その次に私に向かって積極的に攻撃を仕掛けてきており、そもそも逃げるに逃げられない状況へと陥っています。

ガギャン!

「影内君!」

「大丈夫だ! それよりも、逃げれるなら逃げておいた方がいい!」

その状況下で、影内君は積極的に迎撃に出ていました。半面、私は手を出しかねる状況になっています。

理由は明白です。私の《打鉄式》は高機動をコンセプトとした全距離対応機であり、其の主力とされる装備は第三代兵装《マルチロックオン・システム》との併用を前提とした多弾頭ミサイル《山嵐》です。そして、その他に連射型荷電粒子砲《春雷》と、対複合装甲用超振動雑刀《夢現》の三つ。主力である《山嵐》は《マルチロックオン・システム》が未完成のため性能を出し切れず撃墜され、《春雷》は連射性を重視したため威力が不足している上、そもそも切り払いされるとかいう始末の悪さ。《夢現》では根幹的な近接戦の技量不足で話にさえなりません。

(こんな時に、何もできないなんて……ッ!)

いざという時に何もできない不甲斐無さを感じて、思考を切り替え

ました。

(……違う。)

守られるだけは、もう嫌だって……でも、どうすれば……)

援護をしようにも攻撃は切り払われるか当たらず、《VTシステム》によつて強引に動いている《シユヴァルツィア・レーゲン》だった機体はたとえ切り払った後でも影内君の攻撃を避けることを可能としていた。

(どうすれば、攻撃が当てられる……当てられる?)

ふと、影内君と鏢迫り合っている《VTシステム》の足元を見ました。そこには、足があり——当然、地面を踏みしめて踏ん張っています。

「影内君、聞こえる!？」

「なんだ!？」

「足場を崩すから、その隙に反撃できる!？」

思わず怒鳴るような感じになってしまった私の問いに、影内君は不敵な笑みを浮かべて答えてくれました。

「……任せろ!」

その答えが聞こえるのとほぼ同時。反射的に、《山嵐》を発射していました。

狙いは、《VTシステム》が踏みしめている地面。

「行つけえええ!」

ドドドドドド

当然《VTシステム》も反応しようとしたのですが、それは影内君が許しませんでした。

「させるか!」

そのまま鏢迫り合いの形で半ば強引に押し込んで抑え込み、《VTシステム》の行動を阻止しました。さらに、弾こうとした時の反動を使ってそのまま下がっています。

そして、その直後。《山嵐》から放たれたミサイルが地面と《VTシステム》の両方へと着弾しました。ですが、《VTシステム》は自分に届くミサイルのみ正確に切り落としました。

「影内君！」

「オオッ！」

ですが、そこに影内君が上側から接近していました。そのままクイックドロウ神速制御という非常識な速度での一閃が襲い掛かります。

それも迎撃しようとした《VTシステム》ですが、剣を構えて踏ん張ろうとした時。姿勢を崩しました。

それも当然です。なぜなら、足場としていた地面がさっきのミサイルの爆発で抉れており、不安定になっています。

普通の相手だったら切りかかられるまでの間に立て直しができたでしょうが、影内君の神速の一閃はその隙を与えずに切り裂いていました。

ですが、やられるままの《VTシステム》でもなく、反撃を仕掛けようとしてきます。

私と影内君が、再度の攻防に移ろうとした直後――

ゴガンッ！

――私と影内君以外の第三者が、《VTシステム》の頭部を正確に撃ち抜きました。

直後、私達へと向けた通信が入ります。

『お待ちせしてすいません、二人とも！』

その射線の先には、通信の主である山田先生が教師部隊の先頭に立っていました。

S i d e 真耶

更識さんと影内君がなんとか時間稼ぎをしている間に避難が終わり、教師部隊と共に増援に入りました。

そのまま、押し返し作戦が始まります。

(ここまでの機数の差と、専用の対策を講じてもギリギリ……)

《VTシステム》で再現された現役当時の先輩織班先生の動きを前に、私たちは優位な状況にも関わらず冷や汗が出るのを止められませんでした。

《VTシステム》の取り押さえ作戦自体の内容は、そう難しいものではありません。

まず、大口徑ライフルを持った中衛部隊がSEを削り取る攻撃の主軸を担い、ほぼ攻撃に専念します。その前には前衛部隊として大盾と大型ガトリングガンを持った部隊が展開し、《VTシステム》の行動を抑えます。さらに、後衛部隊としてミサイルランチャーやグレネードランチャーといった爆破系の装備を採用し、前衛に近づいた時や抜かれそうになった時の足止めを担当します。

文字通りの、三段構え。そして、全てのISに共通する『絶対防御が起動した時点でSEがなくなり、ほぼ行動が不能になる』という欠点を突くための物量作戦。

さらに、先輩織班先生からのアドバイスもあつて基本的には自分たちに近寄らせない事を最優先にしての布陣。

影内君と更識さんのこれまでの頑張りを無駄にしないためにも、確実に迎え撃つ……そのための、作戦だった。

(なのに……押し切れない!)

ですが、そこまでしても戦況は決して有利とは言えない。むしろ、何とか拮抗している状況。

本来であれば避難してもらはずだった影内君と更識さんも、今は《VTシステム》を逃がさないためにシャッターが下ろされているため、立ち往生している状況です。

「弾幕を途切れさせないで!」

影内君、無理はしないでください!」

「そう言われましても……こうも狙われるのでは、相手するしかないでしょう!」

それどころか、《VTシステム》の標的が影内君に向いているため積極的に接近しに行つており、しかも時折、搭乗者であるボーデヴィツヒさんへの負担を無視しているかのような挙動も見せているため私たちの予想を超えた挙動も見せています。

更識さんも後衛部隊と一緒にミサイルで援護していますが、先生という立場で言えば、本来、避難してもらわなければならぬはずの生

徒にまで参加させていることに歯噛みしそうになります。

(ですが、それでも着実に追い詰めて行っているはず……)

戦況は芳しくありませんが、このまま行けば私たちが勝てる。そう、希望が持てる状況ではありません。

ですが、その最中。誰にとっても予想外の事態が起きていました。更識さんと影内さん、そして教師部隊に囲まれて攻撃され続けた《VTシステム》が突然行動を停止しました。

その直後、そこで起きた反応は私達全員を混乱の只中へと突き落とすのに十分すぎるものでした。

S i d e 一夏

それは、今までとは明らかに違う反応だった。

黒い汚泥を塗り固めたような機体の腹部にあたる一部分が溶けたように波打つと、その中心から何かがゆっくりと突き出された。

それは、ISの装備としては装飾過多な一振りの剣だった。

「……あ、それは!？」

その剣には、見覚えがあった。

いや、それ自体には見覚えが無い。ただ、似たようなものは数多く知っている。

そして、その剣が見えてくるのとほぼ同時。

機体の胸部からボーデヴィツヒの上半身だけが露出された。幾許もしない内にゆっくりとその目が見開かれるが、その瞳にはまるで光が無い。虚ろで、何も映していないかのような瞳だった。

さらに、ボーデヴィツヒの腕が動いた。酷くゆっくりとした、緩慢で脱力したような動作で機体の腹部の当たる部分から突き出された剣を握ると、そのままに無造作に剣を鞘から引き抜いた。

『———這い出でよ、暗闇の世界に住まう蛇竜。至宝の光を見せよ、

〈ヴェーヴル〉』

最後。機械音声とボーデヴィツヒ自身の声が混じり合った不気味な声音で唱えられたそれは、間違うはずもない。

——それは、神装機竜の詠唱符^{パスコード}だった。

第四章（19）：邪竜纏う偽刀

S i d e アイリ

「なっ……アレは!?!」

「……」

思わず声を荒げてしまいました。目の前で起こった現象はそれだけの驚きを伴っていました。横で一緒に見ていたフィルフィさんの表情も険しくなっています。

「な、なんですか!?!」

「一体、何が起こったんです!?!」

さらに、近くに居た剣崎さんや凰さん、オルコットさん、デユノアさん、布仏さんも驚きの表情や戸惑いの声を上げています。

（マズいですね……あの神装機竜の性能は不明ですが、仮に《ユナイテッド・ワイバーン》本来の出力で戦ったとしても苦戦は必須……教師部隊のほうも被害がどうなるか……）

決断までに、さほど長い時間はかかりませんでした。

「フィルフィさん、支援に行ってくれませんか?」

「うん……いいよ」

私の問いに、フィルフィさんが頷いてくれました。

同時に、剣崎さんに対してあることを打診しておきます。

「剣崎さん、少々よろしいでしょうか?」

「な、なんですか?」

「私はこちらにいる際、諸般の事情により基本的に護衛を付けるように言われています。今回、フィルフィさんにはその役目で来てもらいました。」

ですが、そのフィルフィさんに一夏の支援に言っただけのように頼みました。つまり……」

「私に、護衛の任を任せたいという事なのでしょうか?」

剣崎さんへと、護衛の役目を一時的に引き受けてもらうためです。

最も、実際には完全にただの口実です。本当の目的は、更識会長へと通信をつなぐため。厳密には、その時に諸々の説明の時間を省き、

自分たちの秘密を厳守するためです。

剣崎さんは私の思考を知ってか知らずか、戸惑いながらも了承してくれました。一方、フィルフィさんは既にアリーナの方へと向かって凄まじい速度で走り去っていました。

(間に合ってください……！)

どうしようもない焦燥感を覚えながら、私も足手纏いにならないように早々にやるべき事を始めました。

Side 一夏

(神装機竜だと……どうする!?)

あまりのも予想外の変化を遂げた目の前の機体を前に、一瞬迷いが生まれた。

目の前に佇む神装機竜《ヴィーヴル》は、赤黒い色の装甲に焦げ茶色が所々入った装甲と紫に光るラインを纏い、その中心にISを据えていた。

四脚型であるところから特装型の神装機竜であることが窺い知れるが、本来、機竜では装甲が無いはずの部分に黒を基調とした《シユヴァルツィア・レーゲン》の意匠が見て取れる装甲が存在している。また、右腰の部分には《シユヴァルツィア・レーゲン》の大型砲と酷似した装備が搭載されており、左腰にも追加の装甲と思しきものが見て取れる。その他に、機竜の二の腕にあたる部分の内側が膨らんでおり、その装甲の色が黒色が基調であったことからそこもおそらく《シユヴァルツィア・レーゲン》から派生したそれであろうことが予想できる。

無理矢理にその状態を言い表すのであれば、ISの上からさらに^{ドラッグライド}装甲機竜を纏っている、重ね着の様な物だった。

『《幻惑の宝玉》』^{フェスナイト・クリスタル}

だが、思考に没頭している余裕は無かった。機械音声^{メカニカルボイス}が鳴り響くと同時に、虚ろな表情のままのボーデヴィツヒの頭に着いた特徴的なデ

ザインをしている機竜のバイザーが、ボーデヴィツヒの顔を覆った。「ガ、あ……ああアアアアああアアアアあ?!?!」

そのまま強く発光すると同時に、ボーデヴィツヒが絶叫を上げた。

今までその異様な状況に様子を見守らざるを得なかった教師部隊や簀、そして俺自身も一斉に動き出した。教師部隊と簀はそれぞれの得物を一斉射して攻撃しにかかっており、その中で俺は咄嗟に《ユナイテッド・ワイバーン》を本来の出力状態まで引き上げる。

そして、その直後。

「……トレジャー・マドネス《狂気誘う至宝》」

ボーデヴィツヒが《ヴィーヴル》の特殊武装と思しき名前を呟くのとほぼ同時に、《ヴィーヴル》の装甲のラインの一部が強く発光した。

その状態のまま、大盾とガトリングを構えた教師部隊の前衛の一人へと向かって四つ足全てを使い跳躍、突進した。その速度は尋常なものではなく、神装機竜と言えど特装型のそれとは思えないほど。

「くっ……!?!」

狙われた教師部隊の一人が咄嗟に照準を調整し、ガトリングを発砲した。その弾丸の狙いは素晴らしく正確であり、確かに《ヴィーヴル》を捉えており、仮借無い弾丸の雨となって襲い掛かる。

だが、其の弾丸が《ヴィーヴル》へと傷をつける事は無い。其の弾丸の全てが全ての機竜に共通する基礎的な機能である障壁に阻まれる。さらに、仮にその先へと言っても今度はISのバリアーに阻まれる。

「ヒッ……!?!」

《ヴィーヴル》と狙われた教師部隊の前衛の間に割って入ろうとしたが、特装型とは思えない速度で移動した《ヴィーヴル》を相手に僅かに間に合わず、そのまま到達を許してしまった。

ザギンツ!!!

「……が、ハッ!?!」

構えていた大盾ごと叩き切られ、さらにその衝撃により前衛を務めていた教師部隊の一人は中衛と後衛をそれぞれ一人ずつ巻き込んでアリーナの壁面へと叩き付けられた。

この一撃とその余波により、前衛の教示部隊員のISは大破して強
制解除され、巻き込まれた二人のISも壁面との激突時の衝撃を吸収
しきれずに搭乗者が気を失う事態となっていた。

「た……ただの一撃で、三機もー！」

「こ、こんな事が……」

この一撃が教師部隊へと与えた衝撃は大きく、明らかな動揺が広
まっている。

（マズい……味方の士気が落ちている上、相手する戦力も高い……こ
のままだと、全滅もあり得るな）

周囲の状況を鑑み、それがあまり良くない事を察する。さらに、先
程の剣技を見てもう一つ、推察できることがあった。

「い、今の……まさか、一閃二断……!?!」

その眩き声は、山田教諭からだった。

（やはり、間違いない……。《VTシステム》の影響か、機竜の影響か
は不明だが……）

目の前の機竜が繰り出した技は、一閃二断。嘗て織斑千冬が切り札
とした、二撃必殺の剣技。横一線の一撃目で相手の刀を弾き、直ぐ様
上段に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち斬る剣技。

今回のそれは本来速度を重視しているはずの初撃の居合の横一閃
で大盾を両断し、斬られた大盾ごと二撃目で切り伏せたのだろう。
が、やったことがわかると同時にその異常性が浮き彫りになる。

（いくら神装機竜と言っても、ここまで基礎性能は異常だ……）

軌道の補助はISの機能の恩恵があるにしても、あの剣戟の威力は
特殊武装か神装の類のはず。その正体が分かれば楽なのだが……）

思考するが、同時にそう上手く行くはずもない事もわかっている。
だが、分かっている範囲だけで考えてもその危険性は非常に高い事
が分かる。

が、思考している間も《ヴィーヴル》は止まらない。そして、次の
標的は俺だった。

ドッ!

ただの踏み込みだけで四つ足全てから盛大な土煙が出て、一気に距

離が詰まる。

クイックドロウ

「神速制御！」

咄嗟に神速の一閃を振るい、辛うじていなす。

が、完全には威力を逃がしきれなかつたらしく、《ユナイテッド・ワイバーン》が僅かに傾きかけた。咄嗟に踏ん張り、返す刀で斬り合いを演じる。

ゴガギギヤギギイイイン!!!

数度の打ち合いは演じたが、それでも状況は芳しくなかった。

「本来の出力に戻しても、コレか……ッ!？」

《ユナイテッド・ワイバーン》本来の出力状態であるにも関わらず、一撃一撃の威力で負けているためにも不利な状況だった。

ギ……ギギ……

が、そんな中で不意に金属が歪んでいるような異音が聞こえた。

《ユナイテッド・ワイバーン》じゃない……とすると、まさか!？」

異音の発生源は《ヴィーヴル》だった。見れば、其の駆動部分が動く度に歪んでいる。

（この機竜……装甲が耐えられずに歪むほどの高出力で、駆動し続けているのか!？）

確かに、そこまでの異常な出力で動いているのなら今までの基礎性能の高さにも説明がつく。

だが、こんな原因での損傷など暴走か強制超過リコイルバーストにでも失敗した時くらいにしかない。ボーデヴィツヒはISの操作しか知らないはずであり、暴走状態ではそもそも先程の二閃一断のような剣技は扱えない。

（とすれば、神装か特殊装備……なら、あの機竜は長時間稼働すればやがて自壊する!）

僅かに光明を見出し、この戦いに勝利するための策を模索し始めた時だった。

バーサーク・ドラグーン
「《宝玉の守護龍》」

ボーデヴィツヒが再度、眩くように言い放った。

その瞬間、《ヴィーヴル》の罅割れていた装甲や歪んでいた駆動部分

から金属製の触手に濃い紫に光る血管の様な物が浮かび上がっているようなものが絡みつくように覆うと、濃い紫に強く発光しつつ在り得ない速度で損傷や歪みが修復されていき、発光が収まるころにはほぼ召喚されたときと変わらない状態にまで再生していた。

「再生した……そんな……」

「あ、ISの修復能力だつてこんなには……」

一方、アリーナに立ち往生する形となった教師部隊はただ茫然としていた。

だが、無理もない。下手に手を出せば最初に切り伏せられた教師の二の舞になりかねないこの状況下では散発的な攻撃がほぼ意味をなさない事を、むしろ一門の腕があるためによく分かっているのだから。

だが、悪い知らせは続く。今度は、仕切り直すために俺が距離を置いた時だった。

ガオオオオオン！

《ヴィーヴル》の腰に搭載されていた、《シユヴァルツィア・レーゲン》の大型砲が火を噴いた。しかも、機竜からのエネルギー供給で撃っているのか、試合の中で放たれたそれよりも威力は格段に高かった。

——そう、流れ弾の一撃で教師部隊の後衛の内一機が戦闘不能にさせられるほどには。

「こ、こんな……勝てっこない！」

「この……このオ！」

そして、その一撃が引き金になって教師部隊に広がっていた動揺は狂乱へと変わり、パニックを引き起こした。

「陣形を崩さないでください！ 弾幕を張り続けて!!」

「チィィー！」

正気に戻った山田教諭が声を張り上げるが、時既に遅し。もはや陣形は総崩れに近く、少しでも陣形から離れ孤立しかければそこから喰らわれる。

(こくなつたら、《アスディーク》を使うしか無いか……ッ!?)

以後の活動に多大な影響を与えかねないが、これ以上被害を大きくするわけにも行かない。《アステイグ》の機攻殻剣ソート・デバイスに手を伸ばしかけ、一回止まった。

今現在は戦闘中であり、しかも今現在は俺自身が《ヴィーヴル》の標的となつて引き付ける形でその相手を引き受けていた。この状態で機竜を切り替えれば、確実に致命的な隙をさらし殺される結果となるだろう。だが、かと言って教師部隊に任せるのは無理筋だ。特に、今現在の陣形が辛うじて保たれているような状態では尚更だった。

「今のままで、やるしかないのか……ッ！」

そんな気持ちを抱きながら、機竜牙剣を構えた。

もとより不利な条件だが、それでも為すべきことに変わりはない。そう思い、再び挑もうとした時だった。

『影内君、聞こえる!?』

「……更識会長？」

手短にお願ひします」

余裕が無すぎたため少し粗雑な口調になったが、更識会長も分かっているのか特に気に留めないで続けてくれた。

『今から教師部隊を全員退避させるわ。』

それと、今そつちに増援が行つたわよ』

「増援……?」

『アーカディアさんの護衛で来ていた人よ』

その言葉に、一気に勝機を見出せた気がした。

それと同時に、ピットの扉が開け放たれ、陸戦型機竜に特有の車輪の音が聞こえてくる。

ゴガアアアアア!

真つ直ぐに近づいてきたその機体は、そのままの勢いで強烈な回し蹴りを《ヴィーヴル》へと叩き込んでいた。

間違えるはずもない、その姿は——

「ごめんね……ちよつと、遅くなっちゃった」

—— 体術を教えてくださいました師匠にして、陸戦型神装機竜《テュポーン》を纏う機竜使い。

フィルファイ・アイングラムその人だった。

S i d e 真耶

「ご、互角に渡り合っている……」

目の前の光景に、もはや言葉を失う他ありませんでした。

あの異様なまでの近接能力を持った機体を相手に、あろうことか、あの紫色の大柄な機体は格闘戦で対抗していました。

ドシユシユシユン！

ですが、その中であの赤黒い機体は《シユバルツィア・レーゲン》の武装だったワイヤーカッターを左腰から撃ちだしてきました。それがあの紫の機体を包囲するように動いています。

ですが、それでも一切、あの紫の機体の搭乗者は顔色を変えませんでした。

「《パイラル・アンカー竜咬縛鎖》」

ですが、あの紫の機体も全身からワイヤーアンカーの様な物を射出すると、それで《シユヴァルツィア・レーゲン》のワイヤーカッターを叩き落としていきました。

ワイヤーが通じないことを悟り、強化された《シユヴァルツィア・レーゲン》の火砲が火を噴きました。ですが、それもあの非常識に強固な防壁の前に阻まれ、弾かれています。

戦況は総じて互角。ですが、やはり不安定であることには変わりありませんでした。

(何より……何のための、教師部隊ですか！)

そして何より、統制も何も無くただ自分の身を守るために必死になるかただ茫然と戦況を見守るかの二択になっている体たらく。私も後者の一人であるため、本来ならこんなことを言えた義理ではないのですが。

『……い……おい、聞こえるか!？』

全員、返事をしろ!!』

そこで、織斑先生からの通信が聞こえてきました。

いえ、通信ログを見るとずっと前から呼びかけていたみたいです。ただ、現場の方の混乱が酷すぎて聞こえていなかったみたいです。

「お、織斑先生！」

『真耶か！』

いいか、今すぐ撤退しろ！ このままではあの紫の機体が倒れた瞬間に全滅するぞ！』

「で、ですが！」

『影内と更識も退避させる。』

いいか、お前たちはあの紫の機体が倒れる前に再度突入するんだ！』

織斑先生の言葉に、歯噛みしながらもなんとか行動しました。更に、通信が聞こえた他の教師部隊員もそれぞれに撤退を始めています。既に倒されていたり気を失ったりしている隊員には、他の隊員が手を貸したり抱え込んで退避させたりしていました。影内さんと更識さんも長時間闘っていたためか消耗こそ激しいみなのですが、一人でも帰還できるほどに無事みたいで安心しました。

(今現在の、唯一の戦果ですね……)

教師として最低限果たさねばならなかった事だけは何とか果たせていたことだけが、その時の唯一の救いでした。

S i d e 一夏

「一夏、無事ですか!？」

「はい。なんとか……」

ひとまずピットに入り、アイリさんの問いに《ユナイテッド・ワイバーン》の接続を解除してから答えた。

今現在、アリーナではファイルフィさんが一人で戦っている。あの人の実力に疑いなど抱いては居ないが、それでも不確定な要素がある以上は支援に行くべきだろう。無論、《アスディーク》のほうで。

「アイリさん、更識会長に……」

そう考え、打診しようと言葉を口に出した時だった。

「もう既に打診は済んでいますよ」

「影内、こっちに。」

場所は私が聞いている。後は、そこまで行つて本音と虚さんに扉を開けてもらうだけだ」

アイリさんが答え、それに補足するように臨時の護衛を引き受けていてくれたらしい剣崎が続いた。だが、剣崎は苦々しそうな表情で簪の方へと向いた。

「それと、簪……本来なら私がやるべきことなのだが、数をそろえた方が確実なんだ。」

もう少しだけ、頑張ってもらえないか？」

その一言に、簪は一瞬だけ面食らつたような表情になつたが、すぐに表情を引き締めた。

「任せて！」

この力強い一言とともに、俺たちは移動を開始した。

S i d e 真耶

(予想以上に、疲弊している……)

何とか撤退しピットへと待機していましたが、それでも状況は良くありませんでした。

何より、疲弊の具合が酷い。体力的な面ではなく、精神的な面の。

「あ……あんなのと、どうやって戦ったら……」

「か、勝てる、の……？」

「あ、あの紫の機体に任せの方が……」

あまり人の事は言えませんが、それでも今現在、あの機体を相手に戦うことそのものに恐怖感を覚えている人は少なくありません。

(仮にこのまま出撃しても……結果は……)

一部の部隊員は弱気、その他の一部に何も言わずに何とか恐怖に耐

えて出撃しようとする者、そしてあの機体をアリーナの外に出してはいけないとむしろ戦おうとするもの。今の教師部隊の状態を分けるのであれば、主にこの三種です。

ですが、総じて士気はボロボロ。単機の性能では勝ち目がない事がわかり切っているからこそ、この状態は致命的でした。

(今まで、一対一か同程度の数での試合……それも、一方的な戦闘になんてなった経験がある人はほとんど居ないか、駆け出し以来なかったか……)

原因の心当たりもありますが、それがすぐに解決できるようなものでないことがわかっていいるからこそ気が重くなりました。

「泣き言を言うなー!」

ですが、その中で一際大きな声が響きました。

「前衛と中衛はミサイル系の軽量高火力の装備に切り替える。どのみち弾幕兵装では削る事さえ出来ん。盾も要らん。基本的に回避を最重視し、攻撃されそうになったら躊躇なく離脱しろ。」

いつまで呆けている気だ? 倒すべき敵と救助すべき生徒がすぐ近くにいますぞ!」

声の主は織斑先生でした。指令室から走ってきたのでしょうか、少し息が上がっています。

そして、その姿を見てわずかに希望を見出したような表情になっている人もいました。それだけ、本物の世界最強ブリコンヒルデに対する信頼は厚いのです。

其の後、織斑先生の指示のもとに再編成している中、アリーナの戦況に更なる非常事態が起きました。

Side 一夏

「それでは、皆さん。今から作戦を開始します」

『手筈通りをお願い。』

一応、教師部隊が手を出そうとしたら止めてもらえるように学園長

には連絡しておいたから』

目の前にいる虚さんと、通信機越しに俺達が立ち回り易くなるように取り計らってくれた更識会長

「まず、目の前の扉の電子ロックを私が解除します。その直後に、劍崎さんと簪お嬢様が大量の煙幕弾を投射して視界を塞ぎます。その隙に、予め用意した影内さんが出撃してください。後は、本音が扉を閉めた後に開閉記録を改竄しておきますので」

全員が頷き、作戦が開始される。同時に、既に用意を終えていた俺はフィルフィさんに竜声を介して今からやることを掻い摘んで伝えしておく。

「それじゃ、開くね〜」

本音が相変わらずの口調で告げ、作戦が開始された。

まず、隔壁が開け放たれるのと同時に簪と劍崎が全力で煙幕を作り上げ、視界を一気に奪い去る。煙幕が形成されるのと同時に、《機竜光翼》フォトンウイングも使って俺は一気に戦場の只中へと戻っていく。後ろで扉が閉められる音がしたが、それはむしろ安心出来ることだった。

ゴッ!

加速の反動を受けながら、同時に腰だめに《竜毒牙剣》タスクブレイドの内一刀を構える。

だが、《ヴィーヴル》も自身へと近づく機影に気付いたらしい。煙幕が薄くなってきたときに見えたそれは、バイザーに覆われたままの顔をこちらへと向け大型の《機竜牙剣》ブレードに似た装備をこちらへと向けてきている。

だが、それが振るわれる事は無かった。

「《竜咬縛鎖》」

フィルフィさんの《テュポーン》が持つ特殊武装、全身から放たれる鋼線《竜咬縛鎖》が《ヴィーヴル》を捕獲した。そのまま動きが一瞬止まる。

「アックスモード。

センジン
戦陣・劫火!」

出来る限りの威力が出る形態で、叩き切る。

さすがに一撃で倒せはしないが、それでも障壁を大きく削ることができた。同時に、後ろへと弾き返すことにも成功している。

「バイティング・フレア竜咬爆火」

さらに、弾かれて姿勢を崩したままの《ヴィーヴル》を《竜咬縛鎖》を巻き取るような形で引き寄せつつ、《竜咬爆火》で攻撃を仕掛けていた。

爆発によって再度此方へと飛ばされてきたため、攻撃を仕掛けようとした。だが、《ヴィーヴル》もやられるままではなく、姿勢を強引に整えるとそのまま跳躍し空中で静止した。

(ISの……PICか)

この現象の正体はすぐに分かったが、だからと言ってどうにかできるわけではない。

『一夏君、これって……』

「PIC……ISの機能の一つに、自機の慣性を制御するものがあります。おそらく、それではないかと」

『PIC……』

竜声を介して聞いてきたフィルフィさんの問いに、短く答える。

空中で静止していた《ヴィーヴル》だが、すぐにこちらへと向きを整えるとそのまま加速しながら降りてきた。その手に握った《機竜牙剣》を腰だめに構えている。

だが、そのまま攻撃されるままになる理由もなく、こちらも迎撃に移る。

「ショットモード」

まず、二振りともショットモードに移行して光波を飛ばし、牽制。当然《ヴィーヴル》は避けるが、その先には《竜咬縛鎖》が待っている。狙い通りに引っかけり、《ヴィーヴル》の動きが一瞬制限された。

だが、《ヴィーヴル》は進行方向をテュポーンの方へと変更すると、自身でもワイヤーを射出してテュポーンに絡ませそのまま接近している。

「ブレードアイ機竜刃麟》、パワーモード」

だが、その前に此方が接近している。先程のショットモードの直後

から移動し、其の眼前へと一気に躍り出る。後は、全身の《機竜刃鱗》と《竜毒牙剣》のパワードモードでの連撃を叩き込む。

「ガ……アアアああああアア!!」

流石に《ヴィーヴル》もこれ以上は喰らわないようにと判断したのか、こちらへと反撃を仕掛けてくる。

だが、それも織り込み済みだ。

「フィルフィさんー!」

「任せて」

言葉少なに、だが確実に予め絡めていた《竜咬縛鎖》を引っ張り、自分の距離へと持っていく。

さらに、俺も俺で先程の連撃の間に《シュヴァルツィア・レーゲン》のワイヤーを切つてある。片側にだけワイヤーが巻かれた形になった状態で引つ張れば、自然と横を向く。そして、それは剣技を扱う相手には有効だった。

ドゴンッ!!

強烈な打撃音を響かせて、フィルフィさんが操る《テュポーン》の回し蹴りが炸裂した。さらに、返す勢いで拳が放たれる。しかも——
「《竜咬爆火》」

——この特種装備まで付けての拳打である。当然、威力は凄まじい事になり、特装型で機竜としては装甲の薄い部類にある《ヴィーヴル》は一気に吹き飛ばされた。

だが、そこで攻撃の手を緩めるようなことはしない。再度、俺の方で接近して連撃を仕掛ける。空中だったが《P I C》で機体を支えた《ヴィーヴル》はそのまま反撃をしようとして来ている。

が、空中だと此方は足技を使いやすい。最初に《機竜刃鱗》も使つての回し蹴りを叩き込み、次いでアックスモードへと変更した《竜毒牙剣》を二刀同時に叩き込む。さらに、《機竜光翼》を使つて切つた際の勢いを殺さぬまま前転するように回転し、再度、踵の《機竜刃鱗》を叩き込む。無理矢理な反撃が来るが、肘と二の腕の《機竜刃鱗》で受け流しつつ、同時にもう片方の手の《竜毒牙剣》で切り裂く。

さすがにここまで喰らわせれば無傷とはいかず、《ヴィーヴル》の損

傷はかなりの物になっている。だが――

「《宝玉の守護龍》」

――再度、あの修復能力が起動し、其の損傷を直していった。のみならず、今度は使用し続けることでさらに強引に攻め立てようとしているみたいだった。

「……一夏君」

「はい」

竜声を介した、ISの通信記録には残らない形でのやり取りを通してフィルフィさんがすこしだけ話しかけてきた。

その声は、心なしか、いつもよりも少し真剣実を帯びているように思われる。

「……どうやったら、助けられるかな？」

その問いに、すぐに返せなかった。

別に、ボーデヴィツヒを助ける気が無いわけでもそのために考えている策が無いわけでもない。ただ、少し博打性が強いように思われたから、躊躇った。

「案は、あるのですが……」

「どんなの？」

フィルフィさんが、自身の方へと迫ってきた《ヴィーヴル》を捌きながら重ねて聞いてきた。

俺の方でも《竜毒牙剣》のライフルモードとショットモードを使い分けて適度な距離を保ちつつ援護しながら、答えた。

「それは、ですね……」

Side 千冬

『織斑先生、聞こえますか？』

「……学園長!？」

予想外の通信相手に、戸惑いを覚えた。

確かに今現在、アリーナで非常事態が発生していることは確かだ。

だが、それでもあくまで現場指揮官は私である以上、こういった事態に直接介入してくることは考えにくかった。

『申し訳ありませんが、突入は少し待ってください』

「なんでですか!?!」

次いで、告げられた内容は耳を疑いたくなるものであり、同時に受け入れがたい内容だった。

『其の理由ですが……今現在のそちらの士気と、以前にも出現した詳細が不明の機体が現れたためです。』

もし、今の状態で暴走したボーデヴィツヒ君の《シユヴァルツィア・レーゲン》とあの白い機体を同時に相手取るような事態になれば、人的被害も避けられないでしょう』

学園長からの指摘に、歯噛みした。

私自身としても薄々は分かっていたことだが、それでもこうして指摘されると改めてその現実を突きつけられている気分になる。

『ですので、今すぐの突入は止めて下さい。幸い、監視されているボーデヴィツヒ君の生命バイタルデータは安定しており、早急な生命の危険は低いでしょう。』

なので、何時でも迅速に突入できる準備だけは済ませておいてください。そして、突入タイミングは決して早まるようなことが無いように、お願いします』

「……了解、しました!」

何とかそれだけ返事を返し、次いで伝えるべき点のみを他の教師部隊員へと伝えていく。

この時の私は、さすがに苦い気持ちでいっぱいだった。

(あの白い機体が一夏だと本人が伝えていれば、支援にも行けただろうに!)

ドイツ軍時代の教え子と、弟が戦っている中で指を啜えて見ている現状に、歯痒い思いが募っていった。

「分かった……やってみる、ね」

案を話した直後、フィルフィさんは特にそれ以上、何かを言うでもなく二つ返事で了承してくれた。

意外といえば意外な展開に、一瞬慌てた。だが、それよりも早く、フィルフィさんが続く言葉を言い放ってくれた。

「一緒に戦ってきた仲間を、信じる……だから、一緒に頑張ろう」

「……はい！」

その一言だけで、吹っ切れる。

「でも、アイリちゃん……賛成してくれるかな……？」

「正直、難しいかと……」

『あくまで保険、ですわね？』

突然聞こえてきた声だが、間違えるはずもない。

「アイリさん」

『確かに、『笛』は持ってきています。』

ですが、あれは本来あまり使わない方がいいものであることを忘れないでくださいな」

その答えに、俺とフィルフィさんは頷き合った。

「行くよ」

まず、フィルフィさんが《竜咬縛鎖》で《ヴィーヴル》を絡めとりつつ、その先端を適当な場所に突き刺してその場所に固定。身動きも回避も取れないようにする。さらに、フィルフィさん自身も地面を《竜咬爆火》で抉り取りつつ、其の場に自分自身も固定する。

《ヴィーヴル》の異常な駆動出力ならある程度強引にその拘束を取り払ってくるだろうが、それでも一時的に動きを止められる。

「《機竜刃麟》、《機竜光翼》」

同時に、両手の《機竜刃麟》の準備をしつつ《機竜光翼》を起動。一気に距離を詰める。

「……アナイレイト・ヴェノム《消滅毒》！」

此方の間合いに入った瞬間、両手の《機竜刃麟》を介して《消滅毒》を使用。展開された障壁を消し去りつつ、その下へと手を伸ばす。

——ISの、シールドバリアーの領域へと。

バチイイイイ!!

甲高い異音が鳴り、一気にSEを消し去っていく。

だが、その減り具合が妙に遅い。

フォース・コア
(幻創機核からのエネルギー供給でも受けているのか……)

厄介と言えば厄介な事態だが、同時に予想の範疇でもある。

元々、ISのSEを直接消し飛ばす事を想定して、その内側のボー
デヴィツヒを傷付けないようにある程度出力を落としていた。それ
を、少しずつ上げていく。

無論、こんな悠長な事をしていれば本来は反撃は避けられない。だ
が、今はフィルフィさんが動きを拘束してくれているため、それが外
れる前に決着を付けねばいい。

「……ッアアアアアア！」

出力を徐々に上げつつ、同時に両手にも力を込めて強引に捻じ込ん
でいく。

だが、そこで予想外の事態が発生した。

ジ……ジジジ!!

金属が焼き切られる音が、絡めとられているはずの《ヴィーヴル》の
右腕から聞こえた。

眼だけで音の発生源を見ると、《シュヴァルツィア・レーゲン》の物
と思われる部分から、《シュヴァルツィア・レーゲン》も使っていた光
波の手刀が発生し、それが徐々に《竜咬縛鎖》を焼き切っていた。

(……こんな、時に！)

焼き切れていく速度から考えて、おそらく向こうの方が早い。一気
にマズい状況になったが、それでもここまで来た以上は下手に下がる
と最初まで逆戻りもあり得る。

「……アイリさん、フィルフィさん。」

万が一の時は、お願いします」

『……いいよ』

『フィルフィさんがいいのでしたら、私もいいですよ』

最後の保険もかけておき、心置きなく攻撃と回避にのみ集中してい

く。

が。それでも一瞬、《ヴィーヴル》が腕の拘束を焼き切るほうが早かった。

躊躇なく拘束されたままの《機竜牙剣》を手放した《ヴィーヴル》は、その腕に取り付けられた光刃で此方の顔を突き刺そうとしてきた。

「普通だと必殺の距離。だが生憎、今は普通の状況ではない。」

「《竜咬爆火》……！」

絡めていた部分の一部を緩めると、フィルフィさんはそこを爆破した。

結果、姿勢を僅かに崩した《ヴィーヴル》の狙いが少しそれる。だが、それだけでは足りない。だから――

「……ッ！」

――顔だけを逸らして、やり過ぎた。

そして、この瞬間に此方の策が成った。

ギ……ギギ……ギツ……

ISの部分の動きが急速に劣化していき、間もなくその活動を停止した。それと同時に、ISが粒子化して待機形態へと戻っていく。

「……ありがとうございます。フィルフィさん、アイリさん。」

自然と、お礼が口をついて出た。

フィルフィさんは微笑みを返してそれを返事としたようで、それ以上は何も言わなかった。だけど、それだけで下手に言葉をつづけるよりも気持ちが伝わってくるような気がした。

一方、アイリさんは呆れと感心と安心をないまぜにしたような口調で続く言葉を言ってくれた。

『いざという時のための『笛』は用意していましたが……使わなくてよかったです。』

それにしても、ISの方だけを停止、ですか。あの状況でよく思いつきましたね』

「ええ。」

ISの方だけでも停止させてしまえば、決着を付けられると踏んだので」

この戦いの中でこの策を思いついたのは、ボーデヴィツヒがIS操縦者であることと、わざわざ《シユヴァルツィア・レーゲン》の制御コントロールを《VTシステム》で奪ったうえで《ヴィーヴル》を使用したためだった。

一見すれば強力な組み合わせに思えるが、いくつか不可思議なこともある。その最たる物が、操縦系だった。

IS学園でISについて学んだためにより強く自覚したことだが、そもそも神装機竜とISでは大きく操縦方法が違う。この二種を同時に十分以上に使いこなすには、おそらく長期間の鍛錬によつて十分に習熟する必要があるだろう。

ボーデヴィツヒ自身はISの搭乗者だが、神装機竜の機竜ドラッグナイト使いではないはずだ。そうなれば、動かせるのには何か秘密がある。

そして、様々な理由により機竜の方に大きな変更を加えるのは容易ではない以上、考えられるのはISへの機能の付随。つまり、IS用の操作を機竜の操作へと変える変換装置としての役割を持たせること。

(そして、見事に的中か……)

現在、《シユヴァルツィア・レーゲン》だった部分のみが解除された様子の《ヴィーヴル》を見ながらそう思った。その中心に居るボーデヴィツヒは、気を失っているのか一切動かない。

『一夏、もうすぐ教師部隊が来てその機体を回収するそうです。』

本来ならその機体神装機竜も回収してほしい所ですが、手遅れになると面倒なので早く離脱をお願いします」

「了解しました」

指示を受け、その場から離脱していく。

間もなく教師部隊が入つて来たみたいだが、その時にはすでに俺は其の場にはいなく、ボーデヴィツヒが無事に保護されたのとファイルフィさんも事情聴取に付き合わされる羽目になったのを知ったのはその少し後だった。

第四章（20）：過ちの生まれた場所

S i d e ラウラ

（ここは……どこだ……）

激しい頭痛の中で、意識が僅かに覚醒した。

未だ朦朧としてはいるが、それでも現状を認識して、まだ自分は眠っていることを自覚した。

（私は……IS学園にいたはず……だが、ここは……）

見慣れた景色だった。

一時期は、通い詰めていた場所だったのだから。

「ドイツの、基地の……訓練場……」

まだ私が優等生だったころ、そして、其の後に劣等生になつてからも、通い詰めた場所。

そして、その中には、シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊の部下の姿もまばらに映っていた。

「……この頃は、まだ共に訓練に励んでいたな」

私はまだ、教官と出会う前の事だった。

元々、アドヴァンスト遺伝子強化試験素体として生み出された私は、軍人として十分な存在であることを求められた。

その中でも、ISの登場以前はそれ以前のほぼ全ての主力兵器に適合できたために前線指揮官としての役割りを求められ、私はその任を負った。

軍人として、振る舞った。乱れた規律を正し、他の隊員たちの指針となり、率先して腕を磨き、統制のとれた実力ある部隊の一員になろうと努力した。

だけど、それもISの出現と同時に一度は終わりを迎えた。

私が、ISに適合できなかつたから。

ISの性能をより引き出すために、私の瞳には《ヴォーダン・オージエ越界の瞳》が移植された。人体に埋め込む擬似ハイパーセンサーとでも呼ぶべき其れは、適合さえできればISへの適性を大きく引き上げることができるとさえ言われた。

だが、結果は散々だった。私へと移植された《越界の瞳》は機能不

全を起こし、事実上制御不能に陥った。しかも、そのせいで左目は普通の眼としては使えなくなり、日常生活にも支障をきたしたため常に眼帯をしなければいけない始末。

もはや、この金色の瞳は私が落ちこぼれとなった証左でしかなかった。

私は交代部隊員に降格された。当然といえば当然の結果だった。

だが、それでも休むことは許されないと、せめて、練習を続ける姿勢、態度だけでも模範的な軍人であろうとした。

どのみち、私にはここ^軍以外で生きていける場所などないのだから。だけど、成績の低迷の一途をたどるばかり。どう足掻いても結果はついてこなかった。

「すみません、隣で訓練してもいいですか？」

「私は構わない」

短いやり取りをしていただけで、隣で練習をしていた隊員とそれ以上話すことは無かった。ただ、互いに黙々と訓練を続けただけ。

それが、何日か続いた。シミュレーションを欠かした日は無かったし、出来ない日は別な訓練をした。その度に、なぜか誰かが近くにいる事が多かった。

(……そう言えば、あの頃は誰かと一緒に訓練をしていない日の方が少なかったな)

別に一緒に訓練をしたから成績が上がったという事は無かったが、一人でやるよりは幾分、身が引き締まるような思いだったのは確かだった。

どのみち成績は最底辺だが、それでも欠かすことなく訓練を続け、態度だけでも模範的であること。それだけが、あの時の自分にできた事だった。

同時に、一緒に訓練をするようになっていった何人かの隊員から、相談事や愚痴といったものも聞くようになっていった。特に気の利いた事が言えたわけではなかったが、それでも無下にする理由もなかったので付き合った。たまに消灯時間ギリギリになる時もあったが、それはそれでいいかと思ってた。多少は注意されたが、それ以上

に至ることは無かったのだし。

同僚同士でのいざこざが発生した時に、仲裁に行った時の風景が映った。行ったら大体私に優先が向き、適当に受け流していると其のうち終わるので気に留めるような事でもなかった。それで訓練時間などが確保できるのであれば、それは喜ばしい事だったのだし。

だけど、私自身は、こんな日々の中で、当たり前のようにできる事しかできない自分に、無力感だけが募っていた。

そして、そんな中で決定的な事件が起きた。

私達の所属する黒^{シユヴァルトツェ・ハーゼ} 兎 隊が、ドイツで開催されることになった第二回モンド・グロッソの警備を担当することになった。

私は成績が低迷していたのもあって後方の基地で待機を命じられていた。不測の事態が来た時のためとのことだったが、あの頃の黒兎隊の中から選抜されたメンバーはその時の最精鋭と呼べる隊員達ばかり。加えて、あの時の会場には世界最高峰のIS操縦者たちが集っていた。

その中で問題が起こるなど、考える人間は少なかつただろう。それに、起こることを想定していた人間でも、最悪の手段としてISによる力押しでの解決という手で何とかなると考えているものが少なかつた。

同僚たちのそれに関しては何度か注意したが、もとより実力の側面で大きく劣っている人間が言ってもさして説得力は無かつただろう。それでも、それなりに真剣に領いてくれた同僚がいたのは幾許か安心できたことだった。

だが、それも数時間後に崩れ去ることになる。

誘拐事件の発生と、それを誘拐された当事国である日本が一切報告せずにはぼ見捨てる形で放置したこと。

完全に予想外の事態だった。特に、報告さえ無かつたというのは。

其のことが知れ渡ると同時に、直ちに基地で待機していた黒兎隊の隊員達にも情報収集の側面での補助を行うよう命令が出された。無論、私も参加した。私自身、直接的なIS運用能力は低かつたが、それでもそれ以外の方面ではそれなりに優秀だったからだ。実際、搜索

対象の監禁場所は私が推測した場所だった。

その行動を行っていく風景の中で、捜索対象とその名前も、思い出した。

（名前は、織斑一夏……だが、この顔は……）

ふと激しい既視感に襲われ、やがてその正体に思い当たった。

（そう言えば、影内と随分似ているな……）

影内の顔をいくらか幼くしたら、こんな感じだろうか。そんな顔だった。

だが、そこまで認識した所で急激に風景が切り替わっていった。それは、事件の報告でのこと。

「ひ、被撃墜率……70%以上……っ！」

「あ、ありえない……こんなの、ありえない！」

「……」

私と他の黒兎隊の同僚たちは、顔面蒼白となっている極少数の無傷の生還者となった隊員のうちの一人から報告を受けていた。

そこで語られた内容は、もはや悪い冗談にしか思えない物だったが、報告を受ける直前に見た重症の隊員と、それ以前の通信から聞こえてきた悲鳴が現実であることは静かに物語っていた。

その時、叫び声をあげたり恐慌状態に陥ったりする隊員が居なかったのは、不幸中の幸いだった。だが、顔面蒼白になっている隊員は決して少なくは無いので、多大な悪影響は与えていたことだろう。

再び、景色が切り替わった。

この事件の時、選抜された隊員の多くが重症となったために部隊は再編を余儀なくされていた。そして、その時に私にとって予想外の事態が発生した。

「私が、隊長……ですか？」

「うむ、そうだ。」

異論は無いな？」

黒兎隊も所属している基地の指揮官から告げられた、意外な内容。

だが、どうしても聞かなければならない事があると。この時は、ただそう感じていた。

「……質問の許可を頂けないでしょうか」

「いいだろう。内容は何かね？」

私の返答に、特に表情を変えなくてもなく指揮官は許可してくれた。

「なぜ……私が、隊長なのですか？」

「他の隊員たちからの強い推薦があったからだ」

やはりあまり表情を変えずに、指揮官は答えてくれた。

だが、それでも私の疑問は深まるばかりだった。

「さて、以後は君の副官にハルフオーフ大尉が付く事になる。

今後は書類仕事も増えていくことになると思うが、よろしく頼むぞ」

それだけ言うと、もう話すことは無いとでもいうように椅子に深く座り直していた。今現在の部隊の状況を考えれば、心労が溜まっているのだろうと容易に推測できた。

部屋を出ると、すぐに見知った顔が現れた。それまでも何度か交流があった同僚だが、今の私の成績では逆立ちしても勝てない事はよく知っていた。

「よろしく願います、ボーデヴィツヒ隊長」

その呼び方に、激しい違和感を覚えた。

むしろ、ハルフオーフ大尉の方が適任なのではないかと。私はどう足掻いてもISの実機訓練の成績が足りていないのに対し、彼女はその成績も十分。一部の隊員からは階級ではなく親しみを込めて「お姉さま」などと呼ばれてもいる。加えて、彼女はあの時の誘拐事件の際の数少ない無傷の生存者の一人。

実力とそれを証明する実績、そして隊員たちからの信頼。理想的な隊長なのではないかと――

「……いちよう、ボーデヴィツヒ隊長。どうされましたか？」

——そこまで考えて、何度か呼びかけられていたことに気付いた。「いや……何でもない。」

これからよろしく頼む、ハルフオーフ大尉」

「は、隊長！」

それからしばらく、互いに無言で歩いてた。

隊長室で今後の指針を話すためだが、その道中でついに聞いてしまった。

「……なあ、ハルフオーフ大尉」

「何でしょうか？」

「……お前は、不満は無いのか？」

「……？ 仰られる意味がよく分かりませんが」

表情を見るに、本当に分かっているらしい。だから、続けた。

「私が、隊長になったことだ。」

「こういう言い方も本来あまり良くないが、私もそれなりに自身の成績は理解しているつもりだ。だからこそ——」

「隊長、何故ご自身が隊長に任命されたかはお聞きになりましたか？」

唐突に、ハルフオーフ大尉が聞き返してきた。

だが、それ自体は既に指揮官から聞いている。

「ああ。他の隊員からの推薦があつたとのことだったが……」

「私も、推薦した者の一人です。」

その私が隊長に対して不満を持つなど、ありえませんが

その言葉を言い放った時の顔は、大真面目だった。

「……そうか」

それだけを返答し、それ以降は私の就任に関する会話はしなかった。

だが、疑問が尽きたわけではない。

(なぜ、私だったんだ？ ……ハルフオーフ大尉)

だが、個人の疑問など今は重要なものではない。

隊長室に付いてからは、その時様々な面で再編を余儀なくされていた部隊の再編成を進めつつ、自身の執務もこなしていく。同時に、それまでと同様に他の部隊員の起こした問題も片付けていく。

それだけが、その時の自分に出来た唯一の事だった。

やがて、そんな無力感を深めていた日々も終わることになる。

臨時教官として就任した、織斑千冬教官の手によって。

それまで最底辺だった成績が、劇的に改善した。それも、基本としか言えないような訓練の積み重ねだけで。

教官の課した訓練を忠実に熟せば熟すほど、私の成績は良くなった。右肩上がりの、劇的な改善だった。これは私に限ったことではなく、部隊全員の成績が大小の差異こそあれど上がっていた。

その状況に、私はある種の希望も見出していたと思う。私自身の事もそうだが、それよりも部隊の事に関して。

あの事件以後、部隊には常に不安が巢食っていた。元々が軍人と為るべくして作られ、今は最強の兵器と謳われているISの運用部隊としての側面が強いのが「黒兎隊」の現状だった。だが、その前提である「ISが最強の兵器である」という通説が覆った時に、果たして自分たちはどうなるのかと。そうでなくても、そのISを倒しうる存在が現れた時に、果たして自分たちは生き残れるのかと。

だからこそ、自身達の成績の劇的な向上其の疑念を否定しうる事実へと、縋るような思いで飛びついていった。

私も、その中の一人だったと思う。特に、部隊を纏める立場長という責任を負っている以上、隊員たちが不安に駆られながら日々を過ごしていくのは好ましくない事だと考えていた。

だから、聞いた。強くなるにはどうしたらいいか、その答えが知りたかった。そうして、より強くなれば。隊員たちに無意味な不安など抱かせることも無くなるのではないかと思つて。

だけど、織斑教官は自身の強さを否定した。だから、分からなくなった。わからなくて、強くなるための答えを探そうとして、ただ闇雲に訓練をするようになっていった。

その時の訓練風景が映し出されたときに私が見たのは——訓練場で、一人だけで訓練をしている私の姿だった。劣等生だったころのように、或いはISの登場以前のように、誰かと訓練している場面を見かける事は無かった。

そして、再び景色が暗転した。今度の景色は——織斑教官と対面し、どうして、強いのかと聞こうとした時の事だった。

その記憶の中での、嘗ての私は——

「私は、部下達のために、強くなければいけないと考えています。

だから、教えてください。貴女が、どうやって強くなったのかを」

——そう、言っていた。

記憶の中の私は、確かにそう言っていた。

「……あ」

ようやく、気付いた。いや、思い出した。

私が強くなりたかつたのは——

「あ、あアアああああああ……あアアアアアッあああ
ああああああああ!?!?」

——部下となりにてくれた、人達のためだったんだと。

強さの証明とかは、本当は手段だったんだという事に。

(私は、最初から……間違えていた?)

過ちを明確に認識し、吐き気のような物に襲われそうになった。咄嗟に手で覆った口からは嗚咽が漏れかける。同時に膝から崩れ落ちた。

『——お前が、もう一度立ち上がることを信じている。

だから、もう一度……私を、正しく使え』

最後。顔もよく見えない誰かの声が響いた気がした。

そのまま、私の意識は急激に遠退いて行き——。

Side 千冬

「さて……揃いましたか。

それでは、これより会議を始めます」

呼び出された面々全員が揃った事を確認し、轡木学園長が告げた。

「まず、今回の事件の経緯の説明を……織斑先生、お願いします」

「はい」

まず、経緯の説明から入り、今回の事件の大筋の説明から入っていく。

「今回の事件が発生したのは、第三アリーナ。影内、更識ペアとボーデヴィツヒ、唐澤ペアの対戦中に起きました。」

ボーデヴィツヒの《シュヴァルツィア・レーゲン》が《VTシステム》を起動し、ボーデヴィツヒを取り込んで暴走を開始。以後、教師部隊は緊急事態発生時の対応マニュアルを基に避難誘導を開始すると同時に、シールドバリアとシャッターを展開。避難終了と同時に装備を整え突入しました」

スクリーンに記録映像を映しつつ、説明を続けていく。

「それで一次的に《VTシステム》を制圧しかけましたが、その後、《VTシステム》が詳細不明の刀剣を取り出すと同時に形態を変化」

あの、異形と狂気を詰め込んでいるとしか思えない機体を思い出し、戦慄しかける。

が、それを内心で押し殺して説明を続けた。

「量産型ISである打鉄、ラファール両機種を圧倒しうる性能で教師部隊と逃げ遅れていた影内へと攻撃を加えてきましたが、最終的には影内の支援者の護衛役として来ていたフィルフィ・アイングラム氏の協力と、乱入してきた例の『白い機体』により鎮圧」

横目で一夏とアイングラムとかいう女の方を見ると、一夏の方は疲れ気味なのか、座っている椅子にもたれかかるようにしていた。アイングラムの方も同じようにしている。最も此方は目を開けておらず、既に舟をこいでいるが。

(いい加減な奴め……)

「ご苦労様です。」

さて、何かご意見のある方はいますか？」

この台詞とともに、一斉に腕が上がった。

かく言う私も、その一人だが。

「予想通りですが多いですね……では、席順という事で山田先生からとします。」

山田先生、どうぞ」

「はい。」

今回《シュヴァルツィア・レーゲン》に搭載されていた《VTシス

テム》について。

条約違反のシステムに対して、ドイツの関与が疑われますが……それについて、ドイツ政府は何処まで関与を認めているのでしょうか？」

今回の事件の経緯からすれば、ごく自然な質問だった。私としても、聞きたいことの中の一つに入っていたことである。

だが、それに関して。学園長は微妙な表情で意外な言葉を返してきた。

「それに関しては、今後、国際IS委員会を中心に各国の合同調査隊が派遣される予定です。また、ドイツからもこれを可能な限り全面的に受け入れるとの回答が来ています。」

ですが、それに先んじて……先程、こちらからの問いかけに対してドイツからある程度の返答が来ました。

その内容ですが。ドイツとしては確かに、アラスカ条約締結以前は研究したことを認める。しかし、条約締結当時の監視下の元での研究データを破棄して以後は、一切の関与を行っていないとしています」

「……!?」

この返答には、その場にいたほぼ全員が面食らった。

「ま、待ってください！」

幾らなんでも、そんな見え透いた……」

質問の主である山田先生から反論が出るが、それはこの場にいる全員が抱いていた感情だった。

一夏や、いつの間にか起きたのかアイングラムまで疑わしそうにしている。

「それはそうですが、どうもドイツの内部も今回の問題で大分混乱している様子です。」

ですので、これ以後の展開は合同調査の報告を待つ他無いでしょう」

学園長の言葉に、其の場が一旦静まり返った。これ以上、この場で言及しても展開が無いと分かったのだろう。

「では、次に……誰か、他の質問がある方は居ないでしょうか」

だが、あれだけで質問が終わるとはだれも考えておらず、それは学園長もらしい。

すぐに場の空気を切り替えると、会議の続きを促していく。

「質問、いい?」

少し間延びしたような、独特の口調で真つ先に再度の質問を投げかけたのは、整備課所属のインド出身黒人女性「ラクシャータ・チャウラー」先生だった。常と変わらぬ気だるげな所作でありながらも、その目は真剣そのものだった。

「何ででしょうか?」

「さっきのドイツの返答だと、《VTシステム》には関与してないんだよねえ……。

だったら、機体の方は? アレは、完全に《シユヴァルツィア・レーゲン》とは別物の……と言うよりは、既存のISとは一線を画している。アレはアレで……というより、あちらの方が問題が大きいと思うんだけどねえ」

この質問に、場の雰囲気が一斉に動いた。反応は様々だが、特に前線に出た教師部隊の隊員からの反応は著しいものがある。

(まあ、仕方ないか……)

あの機体……《ヴィーヴル》という名前だったか。あれは、完全にISの外側の代物にしか思えないものだったからな。

まあ、その所有者ならこの場にもう二人ほどいるわけだが)

一夏とアイングラムの方を見ると、二人とも真剣に聞いていた。

「それに関しても、ほぼ同様です。

そもそも、あんな機体が存在したのならもつと早く正式採用に向けて動いている、とも話されていましたしね」

「そうかしらねえ……。

ま、こつちも進展は見込め無さそうか」

やはり気だるげに、ラクシャータ先生はそれ以上言及する事は無かった。

が、個人的にはこの質問に関して、別に聞くべき人間がいるのではないかと考えていた。

「それに関して。」

聞きたいことがある人がいるのですが、よろしいでしょうか？」

「当人同士での同意が取ればいいでしょう。」

それで、誰に何を？」

「影内と、アイングラム氏、アーカディア氏に」

私の言葉に、学園長が渋い顔になった。

さらに、一夏とアーカディアも幾分真剣な表情になった。アイングラムの表情は相変わらず無表情に近いが、その瞳は私の方へまっすぐに向けてきている。無表情でありながらのそれは、此方の事を全て見透かしてきているような感覚さえ覚えさせられた。

（だが……今回の一件は、さすがに疑惑では済まさんぞ）

止められはしていないことを確認し、話を続けた。

「先程ラクシャータ先生も言っていた、あの機体。機体の特徴が、影内の《ユナイテッド・ワイバーン》とアイングラムが使用した機体になり酷似していた。それについて、何か心当たりは無いのか？」

それと、影内。お前があの機体と対峙した時、明らかに《ユナイテッド・ワイバーン》の性能が引き上がっていたように見えた。さらに言えば、アイングラムの機体に至っては単機で互角に戦ってみせている。それについても、聞かせてもらえるな？」

主だった内容は二つ。絶対に、ここでハッキリとさせておかなければならない内容だった。

（さあ……どう、答える気だ）

私の質問に、その場にいたほぼ全ての人間の眼が三人に集まった。

「それについては私の方から。よいでしょうか？」

答えたのはアーカディアだった。その目で私を射抜くように睨みながら、言葉を発している。

（フン……その程度で威嚇のつもりか？）

だが、そうして発せられた答えは半ば以上に予想外なものだった。

「まず、今回の事件で相対したあの機体との類似性についてですが。」

今現在、社内での調査を進めている段階ですので明言はできません。ですが、社内から何らかの経緯で機体の設計データに関するもの

が持ち出された可能性も視野に入れて調査中です。無論、嚴重に管理していますのでその可能性は低いのですが……」

ここまでではいい。予想通りと言えば予想通りの内容だった。

ある意味での本番は、この次。

「それと、機体性能についてですが……」

《ユナイテッド・ワイバーン》の基礎性能が向上していたのと、フィールフィさんの機体があの機体に対して、単機で何とか互角に戦えるレベルの攻撃性能を持っていることは事実です」

意外といえば意外なほど明言されたこの回答に、私を含めて多くの教師が驚き、浮足立つ。だが、本当の意味で問題になるのはこの次だった。

「ですが、それはまともなISとしての運用を投げ捨てているためです。

具体的に申し上げるなら、あの戦闘能力を發揮できる出力状態では絶対防御が機能しなくなります。ですので、真つ当なISを使用して

いる皆さんは使わない方をお勧めします」

「……!?!?」
この回答に、一切動じなかったのはこの場で三人だけ。そう、当事者である一夏、アイングラム、アーカディアの三人だけだった。

「ど、どういう事ですか!?!」

絶対防御が機能しなくなるって、そんなの……!!」

「貴様ら、正気か!?!」

そんな物を使わせるなど、どういう了見だ!?!」

「そんな物を使っていたの!?!」

「ぎ、危険すぎます!?!」

即刻、通常の機体への変更を……」

最初に山田先生が反論の声を上げ、次に正気に戻った私が抗議した。更に、他の教師部隊員たちも続いて声を上げる。

「落ち着いてください!?!」

だが、それはただの一声の前に押し止められる事になった。再び、アーカディアが口を開いたからだ。

「確かに《ユナイテッド・ワイバーン》とフィルフィさんの機体は、あの状態では絶対防御が機能しなくなります。

ですが、それはあの状態の時のみの話です。普段はSEの残量が表示されないだけです。それと、あの出力状態の時に限った話ではありませんが、機種によって強度こそ違いますが基本的に強固な防御障壁が張られています。完全な代替とは言えませんが、それでも全く無防備になる、というわけではありません。

更に言えば、基本的な方針として私たちは機体を使うかどうかは使用者本人にらせています。つまり、本人が拒否すればこちらとしても強要することはありません」

言外に、本人が承認しての上だ、と言われていた。

(だからと言って、許容出来る物ではないだろう！)

だが、そこで私よりも早く反応した者がいた。

「か、影内君！

影内君は本当にその機体でいいんですか!？」

山田先生だった。鬼気迫る表情で、一夏の方へと問いを投げかけていた。

「ええ。

特に大きな問題は起きていませんし、個人的にも気に入っています。それに、あの出力形態になれるのは基本的に自身の命の危険があると判断した場合だけです。普段はそんなに危険でもありませんよ」

「で、ですが！

最後の命綱の無い機体を生徒が使うなんて、教師としては……」

「……確か、ISは未完成なもの、なんでしたよね?」

山田先生の言葉を遮り、唐突に、一夏が要領を得ない事を言い出した。

「え……あ……はい」

不意打ちのように言われたからか、其の場の全員の勢いが止まっていた。

同時に、影内の方から畳みかけるように次の台詞が放たれる。

「俺の《ユニテッド・ワイバーン》は確かに、多少は他の機体より危険性が高いことは事実です。

ですが、それは過去にも前例があつたはずですよ。例えば、攻撃に特化するという形では《零落白夜》を搭載した《暮桜》などで。

それに、俺の機体は元々、今回の相手ほどではありませんが、それでもある程度格上の相手や不利な状況で戦う事も想定されています。その意味では、最後の命綱よりも状況を逆転できる切り札とも呼べる何かがあつた方がいいのではないかと考えていますので」

恐らく、この話自体は嘘ではないのだろう。

その考え方自体は理解できる。一夏が例に挙げた《暮桜》を使つていたのは私であり、確かにあの機体は攻撃に特化していた。

そして、一夏自身も一度は命の危険に晒されている。その上、今は世界唯一の男性IS操縦者である以上、狙われる危険性は高いだろう。その意味では、強ち的外れとは言えない。

(だが……だからと言って)

私も、姉として、一教師として、容認できる事実ではない。さらに反論しようとして――

「では、この話はここまで。

これ以上の事は、正式に学園の方から影内君たちの会社の方へと協議の場を設けられるように依頼を出しておきます」

――学園長が、いらぬ横槍を出してきた。

(ええい、余計な真似をー)

だが、これ以上この話に終始しているといつまでたつても話が終わらない。其のことを分かっているのか、誰もそれ以上言及しようとはしなかった。

(……この場では、これ以上続けようとしたところで横槍が入るだけか。

仕方ないが、また後にする他無いか)

私自身、この場でこれ以上追及するのは無理だろうと判断し、それ以上言及することは無かつた。

だが、同時にもう一つ確認しておきたかつた事を聞いておくことに

した。

「そう言えば、影内。」

お前たちの会社について、調べてもあまり詳しい情報が出てこなかった。単に私の問題ならばそれでいいのだが、何か心当たりはないか？」

「新興の会社といって差し支えない状態ですし、今は余り大々的な宣伝などもしていないので、知らなくてもおかしい事では無いかと」

「……そうか」

言っていることを完全に否定する気は無いが、むしろ不信感の強くなる答えだった。

（見え透いた嘘を……）

以前、束とともに調べたことがあったが、その時は実体のない架空会社という結論に至っていた。

あれだけの機体を所有する、得体の知れない集団。その中に一夏がいる。

（それに、今までの事実を考えるだけでも恐らく相当に戦い慣れている。

そんな集団の中になど、なぜ……）

思わず怒鳴りたくなかったが、そこは堪えておく。今はまだ、その時ではない。

「さて。他に誰か質問はありますか？」

轡木学園長が再度、続きを促した。が、先程の衝撃的なやり取りがあったためか、誰も言葉が出てこない。

「はい、いいでしょうか？」

その中で飛び出た質問は、教師部隊の一員だった教師からだった。「あの機体の解析などは、どのようになっていてでしょうか？」

出てきた質問は、むしろ今まで出てこなかったのが不思議なくらいのものだった。

「それに関しては、学園の設備での解析は難しいと判断されたため専門機関に任せようと考えています」

「専門機関というと……倉持技研ですか？」

妥当といえれば妥当な場所を挙げた山田先生の台詞に、意外なことに学園長は首を振った。

「それが妥当なのでしようが……倉持技研は現在、内部に抱えていた問題によって揉め事が起こっているため、通常業務以上の事を行うのが難しい状況だそうです。」

ですので、それ以外の機関を探すことになるでしょう。そちらの選定は、此方で済ませます」

そこまで言ったところで一旦話を切り、反論がないことを確認してから再度、話し始めた。

「まだ何か、質問はありますか？」

轡木学園長が続きを促すが、今度は誰も出てこない。

「では、これで会議は終了とします。」

この事件に関する一切の事実と会議で話された内容の一切は箱口令を敷くものとし、一切の口外を厳禁とします。破った場合は厳罰ある物と考えてください」

轡木学園長が会議の終了を宣言し、解散となる。

それが、この会議の呆気ない幕切れだった。

第四章（21）：後始末

S i d e ラウラ

「……………」

奇妙といえば奇妙な夢から覚めた時、そこは見知らぬ白い天井だった。所々にある黄色が単調さを感じさせずに、小奇麗な印象を醸し出している。

ただ、独特の薬品の臭いは誤魔化しきれていない。そして、それがここが何処であるかを推測させた。

「……………医務、室？」

「気が付いたか」

声を掛けられ、そちらへと顔を向けようとした時、激しい痛みに襲われて呻き声をあげてしまった。

「無理をするな」

その声は、聞き間違えるはずもない。織斑教官の物だった。

「全身への過度な負荷が原因の疲労がある。

ただ、思ったほど外傷は酷くないから暫く寝てれば直によくなくなるそうだ。そういう訳だから、寝てろ」

「何が、起きたのですか……………!?!」

先ほど言ったことも嘘ではないのだろうか、おそらくは本題を避けるための誤魔化しという部分も含んでいるだろう。

だが、今回ばかりは例え織斑教官にその気が無くても聞かなくてはならない。故に、多少は無理をすることになったとしても、上半身を起こして正面から見据えた。

「……………一応、機密事項扱いだ。

其のことを頭に入れておけよ」

言われるまでもない。

元々、私は軍人だった。機密など両手で数えられないほどには持っている。

「《VTシステム》は知っているな」

その問いかけに、頷いた。

アラスカ条約の締結以前、本来の用途とは違う使い方をするために今は《シユヴァルツィア・レーゲン》となっているコアに搭載されていた時もあったからだ。

「はい……」

過去のモンド・グロツソの部門受賞者ヴァルキリーの動きを模倣するシステムだったはずですが……」

「そう、アラスカ条約によって研究、開発、使用、そのいずれも禁止されているシステムだ。その改造版らしきものが、お前のISに組み込まれていた」

言葉が出なかった。

いや、薄々は予想していた。だが、改めて現実を直視すると気が滅入りそうだった。

「巧妙に隠されていたがな。」

機体のダメージ、操縦者の意志……むしろ、願望だな。それらを起動キーとして、起動するようになっていたらしい。近く、委員会も含めた合同調査がドイツに入る」

願望、と聞いて俯いた。

あの時は精神的に追い詰められていたことも手伝って、半ば錯乱していたように記憶している。だが、そこで何を願ったかは鮮明に覚えていた。

「……私が、願ったからですね」

隊長として、強くあろうとした。

そのために、どうしたら良いのか。その答えが、欲しかった。

でも、分からなくなつて、探し求めて、切望して、焦つて——
見失った。

（……その集大成が、あの醜態か）

もはや何のために強くなるうとしたかも忘れ、拳句の果てに「自分ではない別の誰かになる」などと言う方法を選択した。

（全く……これでは、付ける薬も無いか）

そうして、自虐的な方へと思考が傾きかけた時だった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、ハイ!？」

突然、織斑教官が声を張り上げて私の名前を呼んだ。思考が追いつかず、返事した私の声は自分でも分かるほどに裏返っている。

「お前は、誰だ？」

「……」

答えられなかった。

ここで、「ラウラ・ボーデヴィツヒ」というのは簡単なのだろう。だが、それでは何かを間違えたままになりそうな、そんな恐怖にも似た感情があつた。

「答えられないのなら、今からお前は「ラウラ・ボーデヴィツヒ」になれ。」

どうせ、後約三年ほどはこの学園に居るんだ。ゆっくり見付けるといい。それと、私にも責任はあるだろうし、気が向いたら来るといい。出来る限りは協力しよう。

……今度は、ちゃんと見つけろよ」

そこまで言うと、織斑教官は医務室から出て行った。後に残ったのは、言葉も出なくなった私だけだった。

S i d e アイリ

会議の後。私たちは、更識さんに呼ばれて生徒会室に行っていました。

理由は簡単で、あの神装機竜《ヴィーヴル》に関するのと、今後の活動方針について、だそうです。

「生徒会と協力者の皆さん。」

この度は、本当にありがとうございます」

まずは今回の協力に関して、始まる前にお礼を言っておきましょう。

彼女の協力が無ければ、今回の一件は恐らく人的被害も出ていたことでしょう。

『VTシステム』……説明を聞いただけでも相当に嫌悪感のある代物ですが、それに神装機竜を重ねた。

おそらく、これをやった人は機竜についても造詣があるはず。となれば、私たちとしても無視できませんね」

さらに、今回の一件で無視し得ない事実が出てきました。

フランスの一件も含めて、今後は先行調査ではなく、近いうちに本腰を入れた対応になるかもしれません。

「気にしないで。むしろ、お礼を言うのはこっちなのだから。

……だけど、いくつかは聞かせてもらおうよ」

「ええ。答えられる範囲でしたら、どうぞ」

幾許か、いつもよりは鋭い視線で問いかけられました。

ですが、それも想定範囲内でしょう。特に、今回の事件とその後
の会議の内容を含めて考えれば。

「まず、最初に確認しておきたいのだけど……貴女達の機体、本当に絶対防御が付いてないの？」

「付いていない、というのは言いすぎですね。

厳密には、例の化け物に抗いうる出力状態の時だけ、機能しなくなるだけです。それに、防御障壁が展開されていますから無防備ではありませんよ」

私の返答に、更識さんは顔をしかめました。そして、それは同席している学園長や、他の生徒会メンバーもです。あの布仏本音さんまでもが同様でした。

そのまま少し思案した更識さんは、再度、話し始めました。ただし、それは一夏に向けた物みたいです。

「影内君。

会議中も言われたらしいけど、本当にその機体で大丈夫なの？」

「ええ。

会議中にも言いしましたが、個人的にも気に入っていますから。それに、あの化け物共を相手取るとなるとその程度の事を気にしている余裕なんてありませんし」

「……その程度の事、ね」

更識さんが軽く引いているようにも見受けましたが、それはこの際に気にしないでいいでしょう。

(しかし……こちら側の人たちは、随分と『絶対防御』を信頼しているみたいですね。

確かに、有用な防御手段ではありませんが)

有用な防御手段であることには同意せざるを得ませんが、だからと言っただけばかりを信頼し頼るのは過信と言わざるを得ません。

現に、一夏が受けた授業の中でもそれを貫通し得る手段が存在することは確定しているみたいですし。

(そうでなくても……原理は不明ですが、幻神獣^{アビス}の攻撃も貫通するのはシャルロットさんの話からほぼ確定していますしね。

まあ、それでもやるべき事には変わりはありませんが)

「ともかく……貴方たちがそれを了承しての上の事なら私たちとしてもこれ以上何かを言う気はないけど。今後は、その事も考慮して行動予定を立てていくわ。

影内君や、今回協力してくれたフィルフィさんに万が一の事があつてほしくは無いし」

「どの事ですが……一夏?」

横目で軽く見ると、穏やかな笑みを浮かべている一夏が視界に入ってきました。

どういう意味かにもよりますが、一夏の事ですから、彼女たちの事を好ましく思っただけの事だったのでしよう。

「お心遣い痛み入りますが、これまで通りでも問題ありません。

それに、こちらとしても為さなければいけない事があります。そして、それは貴女達の方針とも一致しているはずですよ。ですので、今まで通りで構いませんよ。そちらに問題があるというのであれば此方から口出しをする気はありませんが」

そこまで言うと、一回話すのを止めて相手の反応を待っていました。

一方、更識さんは何とも言い難い微妙な表情になっています。学園長は学園長で難しい顔で唸っていますし。

「君たちの好意は、有り難く受け取っておく。

だが、此方にも守らねばならない一線というものがある」

「そういう事ね。」

確かに、貴方達に頼らざるを得ない現状ではあるけれど……でも、貴方達に過剰な負担をかけてしまうのは、本末転倒だしね。十分な休息も含めたスケジュールとか、後は周辺の警戒とか……今後は、より一層気を付けないといけないかしらね」

学園長が厳しい顔で言い始め、更識さんもそれに同調しつつより実務的な側面から話をしていました。

ですが、その内容はむしろ安心できるものだったことは、純粹に良かったと言うべきでしょう。

「気に、し過ぎないで」

そして、私たちの中で最初に話し始めたのは、少々意外でしたがフィルフィさんでした。

「そうですね……。」

元々、私たちは『戦力』を提供する。そういう取引でしたし、私たちとしても本当に対応できないような事態に陥った際に進言しますので、その時に最大限の配慮をしていただければ十分ですよ」

「俺としても同意見です。」

それに、先程の学園長と更識会長の発言は十分信頼できそうなものでしたし」

フィルフィさんに続いた私の言葉に、さらに一夏も続いてくれました。

そして、この反応を見た更識さんが少し意外そうな表情になっていきます。

「それは、どういう意味かしら？」

ほんの少しの不信感も混ぜて、更識さんは私たちの方を見据えてきました。

「単純に、貴女達がこちらの事情を考慮したからですよ。」

もし、絶対防御の付いていない機体であると聞いた時に、『自分たちの機体でなくてよかった。私たちの懐は傷付かない』とでも言う反応

を少しでも見せれば、こちらも取引相手以上の信用はしなかったでしょう」

「ですが、更識会長達は此方の命まで考えて行動する方向へと舵を切った。これは、個人的にも信頼し得る対応なのではないかと考えたのですよ」

私たちの返答に、更識さんは少し不本意そうな表情になりました。「貴方達にとっては取引相手でしかないのかもしれないけど。」

でも、命を懸けて戦ってくれている相手を蔑ろにするほど人間として腐った覚えもないわよ」

少し拗ねたような口調のその言葉に、思わず笑みが零れかけました。それは一夏とフィルフィさんも同じみたく、少しだけ笑みの形へとなっています。

そのことに気付いたのか、更識さんの顔が赤くなり始めました。

その様子を少しの間微笑ましく見守っていたうちの一人が、いい加減会議に進展をもたらすためか、話し始めました。布仏虚さんです。

「さて。それでは、アーカディア様。」

依頼していた機体解析の件はどのように？」

「具体的には、まだ何とも言えませんが……基幹的な技術はほぼ私たちの物と同一ですので、何らかの形で盗用されたと考えていいでしょうね。」

それについては、私たちの方でも調査します」

「それ以外の面では？」

重ねられた質問に、すこしだけ顔をしかめました。

それだけ、この《ヴィーヴル》と言う機竜には非人道的なものが搭載されていたためです。

「最初に言っておきますが、細かい製造元等についてはほぼ記録がなかったため分かりませんでした。ですが、性能面ではある程度の事がわかったため、それを述べさせていただきます。」

まず、《ヴィーヴル》は基礎性能的には私たちが運用した《アスデーグ》とフィルフィさんの機体には及びません。ですが、優れた索敵性能や光学迷彩機能など、特種装備に優れているようです。主兵

装として大型の剣と小型の剣が搭載されていますが、それ自体は非常に強固であることを除きこれといった特徴はありませんね。

ですが、《ヴィーヴル》には直截的な戦闘力を大幅に引き上げる、そういう機能が付加されていました」

「……具体的には？」

更識さんの問いに、頷いてから答え始めます。

「《ヴィーヴル》には、大きく分けて二つの特殊装備と、単一使用能力と思しき能力があります。

一つ目は、《幻惑の宝玉》フアスネット・クリスタル。簡単に言うと、使い手の脳に作用して一種の強力な暗示、催眠状態に陥らせる装備ですね。これにより、一時的に精神を異様な状態にすることで、精神が無意識にかけている肉体の制限を強制的に外し、同時に負担を認識させなくするみたいです。

二つ目は、《狂気誘う至宝》トレジャー・マドネス
リミッター。こちらは先程とは逆に、機体の方の制限を強制的に解除することで機体性能の限界、あるいはそれ以上を引き出すための装備みたいです。ですが、その反動として、機体の方には自壊の危険性が付き纏うみたいです。

そして、最後。単一使用能力と思しきものですが、名前は《宝玉の守護龍》バーサーク・ドラゴン。この能力は単純で、一時的に激烈な再生能力の付与を行うものです。ですが、その間、使用者にかかる負荷は常軌を逸する物みたいです」

その意味に、真っ先に気付いたのでしよう。更識さんとフィルフィさんがそれぞれに表情を変えていきました。他の人たちも、少し遅れてその表情が概ね悪い方向に変わっていきます。

「統括するのであれば……。腕が折れるくらいの力で剣を振れ、脚が碎けるくらいの力で動け。碎けても全て再生能力で清算するから。

こんな所でしようか」

私の言葉に、解析に携わった私と一夏以外の人は、言葉も無くなっているようでした。フィルフィさんは怒りによって、他の方々は青ざめた表情になって。

「控え目に言って……。嫌悪感しか抱きませんね」

私の言葉に、その場にいた全員が頷いていました。

S i d e ラウラ

時間の経過を、傾いた日だけが伝えてくれた。

(私は……)

いつまで経っても答えの出ない問いを抱えながら、ただ寝ているだけだった。

少なくとも、体の調子そのものは良くなっているように思う。派手な外傷は無く、内蔵等も不思議と致命的な傷などは無かったみたいだった事。そして、元々体内に医療用ナノマシンを持っていたことなどが原因だろう。

コンコン

「……？ 誰だ？」

そうして、取り留めも無い思案に耽っていた時だった。不意に、ノックの音が聞こえた。

特に深く考えることなく返事を返した時に聞こえてきた声は、意外な人物の物だった。

「入っても構わないか？」

聞こえてきた声は、つい数時間前まで対立関係と言ってもいい関係だったと思っているだけに、意外な来客だったと言わなければならない。

(……いや、影内は最初から相手になどしていなかった。

相手にしたのは、私が彼の友人たちを襲撃し、彼にとつての大恩ある師を侮辱した時からだったな……)

冷静になって見直してみれば、一層と愚かしさを自覚した。

が、ここで何時までも返事をせず待たせておくのも望ましくない。

「構わない」

それだけ返事を返して、部屋へと入ってもらおう事にした。

直後、プシュ、と空気の抜ける軽い音が鳴って扉が開く。その先に

は、影内が佇んでいた。

「怨み事と侮蔑、どちらだ？」

「別にそんな時間の無駄にしなければならない事をするために来た訳じゃない。いい。」

「それよりも、容態は？」

私の自虐にも似た軽口にも取り合わず、当たり前障りのない話題を振ってきた。

「過度な負荷が原因の疲労だそうだ。」

「安静にしていれば直によくなる、とも」

「そうか……。」

まあ、後遺症になるような傷が残らなかったことは不幸中の幸いか」

そのまま少しの間、無言の時間が続いた。

「……気を失っている間、少し、昔の事を思い出していた」

「昔の事？」

だが、その中で私はどうしても聞きたくなかったことがあり、そして実行に移していた。

「昔の……織斑教官に出会う前の事と、出会ったばかりの頃の事。そして、出会った後の間もない頃の事だ」

それから、なぜだかは分からないが、当時の事を語り始めてしまった。

だが、影内は嫌な顔一つせず、むしろ所々で語り口に詰まっている私に対して上手い具合に言葉尻を掴まえ、時折軽い質問を交えながら聴いてくれていた。

もしかしたら、能動的にここまで話したのは、初めての事かもしれない。なかった。

「……そして、気が付いたらあの醜態を晒していた、というわけだ」

そして、最後の締めとして今回の事も踏まえた自身の醜態を特に気にすることも無く語った。そもそもとして目の前にいる人物はその醜態を晒した私を間近で見えており、なおかつ切って捨ててみせた猛者なのだ。今更、取り繕う事も無かった。

「……なんだかな。」

「少しだけ、親近感が湧いてくる」

「……な、に？」

だが、其の猛者の口から放たれたのは意外に過ぎる言葉だった。

その不可思議さはその間を置かない内に興味へと変換され、私の口からそのまま問いかけとなっていた。

「どういうことだ？」

「……俺には、師匠と呼んだ人達がいる。それは、話したよな」

「ああ」

自分が小突いた内容なだけに、よく覚えている。

「その師匠達に、幾つかの技も教えてもらった。」

お前に見せた強制超過リコイルバーストも、その一つだな」

「そういえば、言っていたな。」

『最弱』と呼ばれた人が生み出した奥義が一つだ、と」

「ああ。」

ただ、そうして色々と教えてもらいはしたんだが……一時期、伸び悩んでいてな。あの時は随分と悩んで、迷走したよ。思えば、あの時に今も使用禁止になっている技を生み出したりもした」

この台詞に、私は二重の意味で驚いた。

「お前ほどの人間が、悩んでいた……？」

しかも、使用禁止を言い渡された技があるだ?!」

これは私にとって衝撃でしかなかった。

自分の事を過剰に信用する気は今が無いが、それでも目の前のこの男が臂臑式なまでの実力を持っていることは確信している。にも関わらず、禁止を言い渡された技が存在している。

しかも、この男が弱かった頃というのもそれはそれで想像が出来なかった。

「何、俺も所詮それなりでしかないということだ。」

それに、誰でも最初は弱いものだろう？ それこそ、例外でもない限りはな」

「……そうだと頷きたいが、今はお前も例外に思っている」

「買い被りだな」

私の話を、ただの一言で否定した影内は「話を戻すか」と繋げて言った。

「そうして暴走して、その時に物理的にも精神的にも止められたりしたんだ。痛い目も見た。」

けど、その時に一つ、大事なことを教えてもらったと思う」

「大事な、事？」

私の言葉に、大事な思い出を傷つけないように慎重に言葉を選びながら、話してくれた。

「直接言葉にしてもらったわけじゃないんだがな。」

力を持つには、それ相応に強い心が必要だって事。そうじゃないと、安直に強い力や結果ばかりを求めるようになって、結局、本当に欲しかった何かや成し遂げたかった何かを忘れてしまう

心が力に、負ける。それだけは、あつてはならないって言う事。それを、学ばせてもらったように思う」

「……私は、心が力に負けた側の人間、という事か」

影内は何を言うでもなく、頷いた。

だが、それで終わりにはしなかった。

「俺も、一度どころじゃなく何度も間違った。だけど、その度に止めてくれる人や、正してくれる人がいた。そして、強くなる理由をくれた人もいる。」

お前は、どうだ？」

影内の言葉に、ようやくもう一度見つける事のできた答えを言おうとした。

「部下になってくれた人たちのために、強くなりたかった。」

だが、どうやって強くなればいいのか分からなくなって……焦って……見失った」

だが、口から出たのは後悔の言葉だった。

そんな私の情け無い様子を一切笑う事無く、正面から真剣に見据えて言い放った。

「なら、もう大丈夫だろうか？」

「……え？」

疑問の声を上げた私に、少しの微笑みを混ぜながら真剣な顔で影内は答えてくれた。

「俺も、嘗ては間違ったから言わせてもらおうが。一度間違うと、次間違えるのが怖くなる。だからこそ同じ間違いを犯さないようになる。だけど、その傷跡は残り続ける。」

皮肉な話かもしれないが、転んで出来た傷跡が俺を強くしてくれた。重ねた後悔の数だけ間違いに気付けるようになった。

特に、俺のような凡人かそれ以下にとっては尚更だったんだよ」
そのセリフを聞いて、私は俯いた。

自分の事を必要以上に卑下しているように感じるが、同時に言葉の端々に敬意を感じられる。誰に対しての物かなど、言わずもがなというものだろう。

そんな私の様子を見て、何を思ったのか、影内は再度、私へと話し始めた。

「そうだな……。」

一度、お前の部下たちと話したらどうだ？　今まで、ずっと分からなかったことも含めて」

「隊長に推薦した理由か……。」

だが、今となっては手遅れだろう。私の《シユヴァルツィア・レーゲン》には《VTシステム》が搭載されていた。最悪を想定するのであれば、私ごと事実を『無かった事』にするかもしれない」

「ならば、尚更だ。」

最後の挨拶くらいは済ませておいた方がいい。出来なくなつて後悔する前に、な」

影内の台詞を聞いて、逡巡した。

だが、影内はそんな様子の私へとそれ以上言う事は無く、時計を横目で見ると席を立った。

「さて、思っていたよりも長居してしまっただし、もうそろそろおいとまさせてもらおう。」

お大事に、な」

それだけ言うと、もう話す事は無いと言わんばかりに医務室から出て行った。

それから暫く考え込んで、私は軍の秘匿回線へと接続できる支給品の通信機を手にしていた。

だが、それを押す手が震えていた。体の症状とは全く別の意味で。さらに暫くして、震えながらようやく番号を押すことができた。通信先は、自身の副官でもあるハルフォーフ大尉の物。

『隊長ですか!?!』

通信が繋がるまでの時間を考慮すれば、向こうはほぼワンコールで出たであろうコール時間の短さだった。

「……ああ」

短く、それだけ返事した。

(まだ、私が隊長だったのだな……)

ほんの少しの感慨を覚えつつ、つぎの言葉を口にしようとした。だが、それよりもはるかに早く、ハルフォーフ大尉の

『隊長、そちらで隊長の《シュヴァルツィア・レーゲン》が《VTシステム》を起動したと聞きましたか……』

「ああ、そうだ」

何も躊躇う事無く、ただ淡々と述べた。

『その……もう通信為されているという事は、ある程度回復したと推測いたしますが、お体の調子の方は?』

「まだ本調子とは言えないが、大分マシだ。」

それよりも……大事な、話がある」

『何ででしょうか?』

息を呑む音が聞こえ、少しの間、沈黙が訪れる。

「……私は、今回の一件で恐らく隊長職を、というよりは軍を追われることになるだろう。」

そこで、次の隊長になるのはお前ではないかと考えている。だから

――

『絶対に認めませんよ!』

私の言葉を途中で遮り、ハルフォーフ大尉が大声を張り上げた。
『いいですか？』

隊長がご自身で辞退なさるご決断を下されたならともかく、証拠隠滅のために望まずに辞めさせられるなど私たちが断固阻止します！

私たち黒兎^{シユヴァルツェ・ハーゼ}隊の隊長は、ラウラ・ボーデヴィツヒなのです！ そのことを、忘れないでください！』

そこまで言うのと、『動きがあったみたいなので、失礼します！』とだけ言われて通信が切られた。

暫く呆けていた私は、頬に冷たい感触を感じた。

「……涙？」

悲しいわけでもないのに、涙が出ていた。次いで、嗚咽が漏れ出る。

——嬉し涙と言うのだと知ったのは、暫く後の事だった。

第四章（22）：覚悟の在り処

S i d e 一夏

ボーデヴィツヒの見舞いからの帰り道、俺は一つの問題に直面していた。

本来の目的だったボーデヴィツヒが機竜の事をどれだけ把握していたかの確認はとれたからいい。思い出話の内容から考えても、おそらく本当に知らなかったと考えると問題ないだろう。

だが、彼女の境遇に対して親近感を覚えたために、思っていた以上に長居してしまった

（まあ、そちらも今以上に大きな問題には発展しないだろう……）

そんなことを考えながら、廊下を歩いてる時だった。

「影内君、ここに居ましたか！」

「山田教諭？」

少し急ぎ足気味に此方の方へと歩み寄りつつ声をかけてきたのは山田教諭だった。何事かと思いい用件を尋ねようかと思ったが、俺と違い実務の方面で今回の一件の後始末をしていた事を思いだし、まず労いの言葉の一つくらいは掛けておくべきだろうと判断した。

「会議後の事後処理、お疲れ様です」

「いえいえ、これ位はどうって事ありませんよ！ 先生ですからね！

と言うか、それを言うのであれば……むしろ、あの状況下で常に先陣を切り続けた影内君の方でしょうか？」

「ほぼ成り行きですし、あの時は性能面でのこともありましたから」

「……その性能と腕前が、今は心配ですね」

性能の方は絶対防御の有無について、腕前は高性能だが危険な機体を扱ってしまう事に対するそれだと推測できた。最も、騎士団シヴァレスの活動にも参加していた身からすれば通常業務の範疇ではあるのだが、それを知らない山田教諭に言っても無意味だろう。

「それはそうと、影内君！」

なんと、今日から男子の大浴場の使用が解禁されたんですよ！」

「……すいません、記憶違いでなければ来月からだったと思うのです

が」

「予定ではそうなっていたんですけど、今日行うボイラーの点検が予定よりも大分早く終わったんですよ。で、時間的な余裕ができたので影内君とシャルル君の男子二名に入ってもらおうって事になったんです。特に、影内君は今回の一件の事もありませんし。」

ですが、影内君は今まで生徒会の方に行っていたとのことなので、先にシャルル君に入ってもらってしまいました……」

山田教諭の説明とその中で出た名前に、一種の戦慄と安堵を覚え

た。
(デュノアは先に入って、出た後か……)

彼女の素性を知っている身としては、異性が一緒に風呂に入るという状況にならなくて良かった……！)

ある種の冷や汗が噴き出た俺を見て山田教諭は何を勘違いしたのか、少々慌てながら弁解と説明を始めてしまった。

「も、勿論お望みとあれば今から一人でも入れますよ！」

そ、それに入浴中は女子生徒が入ってこないように私が見張りに着きますし……」

「あ、いえ……別にそういう事でもないのですが。」

ですが、お心遣い痛み入ります」

普通にお辞儀してお礼を述べた所、山田教諭の方が申し訳なさそうな表情になった。

「これくらいは当然の事ですよ。」

……あんな事態に巻き込まれてしまったのに、何の労いも無いのは私達教師陣としても心苦しいものがありますから」

「IS機竜に乗ることになった時からある程度覚悟していたので、それについては別に気にしていませんが」

「それでも、ですよ。」

命が危険にさらされる可能性が高い機体については、私としては未だに納得しかねるものがありますが……その機体で戦ってくれたのです。お礼の一つくらいはしたいものですよ。

それに、一応私は大人で影内君はまだ子供と言っている年齢なんで

すから。少しくらいは大人に甘えても罰は当たらないと思いますよ？」

優しい笑顔で言われたその言葉に、一瞬呆けた。

「……有り難うございます」

自然とお礼が口をついて出る。山田教諭はそれに対しても「気にしないでください」とだけ答え、その後はコレ以上遅くなるのも問題があるからと大浴場に向けて歩いていった。

「それでは、ごゆっくり♪」

大浴場に着いた後、山田教諭に扉の前に立って見張りをしてもらいつつ入ることになった。

(そう言えば、風呂も久しぶりと言えば久しぶりか……)

王立士官学校でも都合が合えば入らせてもらう時もあったが、こちら側に戻ってからはほぼシャワーで済ませていたか入らないかという状況だったため久しぶりと言えば久しぶりという気持ちになっていた。そして、その中には少なからず楽しみに思っている部分もある——だがこの時、俺は重大な見落としをしていたことに気が付かなかった。

この後、脱衣場で脱ぐと日頃の習慣もあってソード・デバイス機攻殻剣を持って風呂に入ってしまった。

「……見事だな」

風呂の設備と中身を見て、素直に感心した。

その設備は国立校という事もあってか、王立士官学校にも劣るものではない。風呂も大浴場を中心にいくつかあり、個室で分かれているサウナもある。窓から見える夜景はIS学園の前の星空とそれを映す海を切り取った、見事な風景が広がっていた。

作法通りに体を一度流してから、浴槽に近づいた時だった。

「……ん？」

浴槽に人影が見えた。

その直後――

「……………」

……!! きゃああああああああああああああああ!!?!」

――見えた人影、つまりは簪からの盛大な悲鳴が聞こえてくることになった。

「そ、その……………すまなかつた」

「ううん。確かに驚いたけど……………事故だし、仕方ないよ。」

でも、こっちは出来るだけ見ないでね。その……………は、恥ずかしいから……………」

互いの姿を確認し、互いに背を向けながら浴槽に浸かっていた。

「しかし……………どんな偶然なんだろうな……………」

「まさか、ちようど見張りの山田先生がいない時に私が入っちゃうなんてね……………」

そう、この状況になった原因。

単純な事で、山田先生が俺を呼びに行っている間、どこから漏れたかは知らないがボイラーの点検が早く終わり大浴場を使えることを知った簪が生徒会の方へと呼び出されていて遅くなったのもあつて入りに来たらしい。会長と虚さんは未だ話し合い中、剣崎は諸事情で普段から大浴場は使っておらず、本音は剣崎と一緒に部屋へと戻っていったとの事。そして、俺と山田先生は簪が入っている事を知らずに当初の予定通りの行動をとってしまったらしい。

要約すれば、完全に間が悪かったというだけの事故である。

(漏らした相手に悪意が無ければ、だが……………)

とは言え、このまま俺が出て行けば山田先生から不審がられることは必須、簪が出て行けば俺の有罪確定である。短い話し合いの結果、今は互いにこのまま湯船につきり、適当に頃合いを見て互いの部屋に戻ろうという話になった。

「えつと……………ごめんね。」

男子はもう入り終わったって聞いてたから」

「終わったのはデユノアだけだろうに……中途半端な伝達でもあったのか？」

大昔の三和音トライアドの悪戯を思いだして頭痛がしかけたが、今回は事故であらうことが予測されるだけに余計に質が悪い。

「ね……影内君」

「……何だ？」

「今日は、その……お疲れ様。」

それと、ありがとうね」

間の悪い事故について頭を悩ませている中、簪から告げられたのは感謝の言葉だった。

が、特にお礼を言われるようなことをした覚えがない。

「……別に、礼を言われるようなことをした覚えはないんだが」

「沢山しているよ。」

今回の事もそうだし、今まで戦ってきてくれた事もそうだし。私の事に限って言えば、タッグを組んでくれた事も、電車の時の事もそう」
「此方に見れば、その全部が通常業務の範囲内だ。だから、感謝されるような事でもない」

俺の返答に、心なしか簪が不機嫌そうな声音になってさらに言葉を重ねた。

「……仕事じゃないと組んでくれなかったんだ」

そこなのか、と言う言葉が出かかったがそこはさすがに抑えた。

「別にそうは言っていない。」

ただ、そう気にすることじゃないとだけな」

「……あんな事になっちゃったけど。」

私にとっては、色々と感謝している事ばかりなんだよ」

あんな事、というのは《VTシステム》関連の一件だろう。俺達機竜側としても、神装機竜の流出がほぼ確定した以上は本腰を入れざるを得ない決定打となっただけに、記憶に焼き付いている。

「それに……ずっとずっと、命がけの状況で一番前で戦って貰っているのに、更に頼っちゃって……。」

言い訳だけど、あんなに危ない状態で戦っていたなんて知らなかったから……」

「それについてもだ。」

更識会長や学園長、ここまで案内してもらった山田先生もそうだったが。むしろ、気負い過ぎだ。此方はそれでいいと了承しているし、むしろ気を使って貰っているって思っているくらいだ」

いくらかの言葉を選んで言った後、少しだけ沈黙があった。

「……前々から思っていたけどさ。」

影内君つて、凄く……戦い慣れているよね。それに、命を懸ける覚悟も常に決めているような感じがするし」

少しだけ苦々しい感情が混ざっているように感じたが、簪が感じているかもしれない其れの内容を考えた時、俺としては感じなくていいものを感じているのではないかと思った。

「確かに慣れているし、覚悟も決めているつもりだ。」

けど、本当はそういったものを求めないのが一番いいのかもしれないけどな」

「……？ どういうこと？」

思った事を言ったところ、簪は不思議そうな声音で聞き返してきた。

「戦いに対する慣れや覚悟は、言い換えればそれだけ命のやり取りをしてきたってことだ。俺も、それなりには経験してきたつもりではある。」

けど、本当はそういつた経験は無い方が……そういう経験を積む必要のない、平和な場所の方がいいんじゃないかって思ってたな」

「……そう、なのかな」

「あくまで個人的な持論だ。話半分に聞いてくれればそれで十分」

簡単に締めた後、少しの間は沈黙が続いた。

が、ふとあることに気付いて此方から聞くことにした。

「そういえば、簪。」

のぼせてたりはしないよな？」

「……会話に集中してたから気づかなかったけど、もうそろそろ出た

方がいい…かな？」

返答を聞いて、最初に決めていた通りに俺も出ることにした。というのも、俺が出なければ必然的に見張り役をしてもらっている山田先生もそのままになり、簪が気づかれずに出ることが難しいからである。

その後、風呂場から出た俺は山田先生にお礼だけ告げると、そのまま部屋へと戻っていった。山田先生も役目が終わったとの事でその場を後にしている。

その少し後、簪からも部屋へと戻っていったという話が聞こえてきた。

S i d e 千冬

プルルルル プル

『ヤッホー……！ ちーちゃあああああん!!』

プッ

余りの五月蠅さに、反射的に電話を切った。が、すぐに着信音が鳴った。電話をかけてきた人間を見れば、先程自分が電話を掛けた相手であることがわかる。

正直に言えば、面倒な相手ではある。だが、用があることも事実であるため電話に出た。

『酷いよ、いきなり切らないでよ！』

せつかく、せえくつかく！ 東さんが忙しい中電話に出たのにさー!!』

『五月蠅いぞ、東……もう少し声の音量を抑えろ……!』

もう何度目になるかも分からないが、それでも咄嗟に出た言葉を止めることなく吐き出した。

どの道、この程度で自身の行動を直すような性格でもない。

『いやあ〜、ちーちゃんのほうから連絡してくれたから東さんは嬉しくて嬉しくてテンションが上がりまくっちゃってんだよね〜!』

「私は五月蠅いといった筈だが？」

注意するにはしたが、それでも治らぬ態度に辟易する。

が、そればかりにもかまけていられないため、早々に本題に入ることにした。

「束……お前に、聞く事がある」

『それは、もしかしくなくても……《VTシステム》の事かな？』

実に不愉快そうな口調で、束はその名を口にした。

「ああ。そうだ。

貴様は、アレにどこまで関わっている？」

『ちーちゃん……さすがにその台詞は束さん悲しくなっちゃうよ？』

天災と謳われているこの私篠ノ之束が、あんな不細工な代物に手を出すわけないじゃん。私の作る物は、完璧にして十全がモットーなんだからさ』

「そうか……それが分かれば、いい」

『ああ、それともう一つね。

あの不細工システムについて、変なことがわかってねー』

「変な事、だと？」

意外な展開に少々驚きつつ、束の言葉の続きを素直に待った。

『うん。

あのシステムが積まれていた国の研究機関片っ端から調べて、あの不細工なものを作った施設を跡形も無く消そうと思ったんだけど……』

「勿体ぶるな。それで、やったのか？」

どうせやったのだらう、そう思つての返答だった。

だが、そこから続いたのは意外な言葉だった。

『ううん、やってない。というか、出来ない。』

あの不細工な代物に関わっていた施設は、もう既に全部稼働を停止していたの。それもほぼ完全にと言つてもいいほど。今は本当に手を出していなかったみたいだね。

それに、どうもアラスカ条約締結以前の使い方も妙な方向に行つたから、今回のようになるかって聞かれると微妙だし』

「妙な方向、だと?」

疑問の声を上げた私に対し、束も幾許かの興味を抱いている様子を隠さずに答えた。

『うん。』

まあ、簡単に言っちゃおうと……体感型学習装置、かな?』

「学習装置、だと?」

『そう。もっと具体的に言うと、部門優勝者の動きを模倣するにはヴァルキリー変わりがないんだけど、そこで過剰な負荷が掛かったら出来る限り安全に停止するようにリミッターが掛けられていたみたいだね。』

それで……実際の運用では、普段は体感型学習装置として実際に動かし、動かし時の感覚や動き方を学びつつ、実戦になればそのまま格ゲーのコマンドみたいな感じでタイミングよく動きの一部一部を取り出して使用する。

まあ、機数に限りあるから訓練用と実戦用を分けたりするのが難しいからの苦肉の策だろうけど……これはこれで、興味はあるかな。あの不細工システムを、それなりに上手く活用しようとしたみたいだし』

束の説明を受けて、その利点を考えた。

確かに、事実上ISコアを束一人しか作れない現状を考えると、限られた数をどううまく使うかというのは重要な課題となる。まさか相手国が弱っているからと直ぐに全面戦争などと考える輩は居ないだろうが、それでも国防の戦力は充実しているに越したことはない。

となると、嘗てのドイツは訓練機としてISを使用した際の事実上の戦力低下を防ぐために、このような事をしたのだろうか。あるいは、訓練機と実機の役割を総取りしようとしたのかもしれない。

『ま、結果的にはアラスカ条約の影響で頓挫したみたいだけだね。』

それに……当時のドイツ軍の議事録を調べてみると、それまでの研究成果から、下手に無理な研究続行なんてやってもそれほど成果が上がるが見込めない上、発覚した時の各国からの追及の方でそれ以上の不利益を被りかねないって判断したみたいで、少なくともその時には停止しているみたいだね。

だからまあ、暫くは犯人捜しかな』

「……一夏の後援者を名乗っていた連中の可能性は？」

私白自身騎が嘗士て犯事した過件ちの事を思い出し、深く考える前に言っ
てしまった。

だが、束は特に動じた様子も無く冷静にほんの一瞬だけ思考する
と、その可能性を否定した。

『全く無いとは言えないけど、低いかな。』

そもそも、いつくん達がドイツのあのISの事を知らなかったっ
ぽいし』

「それも、そうか……」

一回、大きく息を吐いて気持ちを落ち着けた。

私の弟一夏と教え子ラウラに対してあのようなことをしでかしてくれた連中
を許す気など毛頭ないが、今は情報が足りない。ならば、それを何と
かして集めるまで下手に動かない方が得策かもしれない。

「……分かった。」

それと、用件はもう一つある」

私の言葉に、束はまたしても先に答えを言ってみせた。

『そつちで起こった騒動に出てきた機体の事だよね？』

具体的には、『ヴィーヴル』とかいう機体と、例の白い機体。そして、
ファイルファイ・アイングラムとか言うのが使っていたあの紫色の機体の
三機』

「そうだ。」

単刀直入に聞くが、何か分かったことは無いか？」

『ダメだね。』

分かったことといえば、ほぼ確実に架空企業っただけ。あのIS
じゃない機体群の方はもうお手上げだね。なくんにも出てこない。

あ、でもいくつか推測できることはあったよ』

「なんだ？」

束をして何もわかっていないというセリフに言葉を失いかけたが、
やはり何も収穫が無いわけではなかった。

其のことに幾許かの安堵を覚えつつ、内容を聞こうと続きを促し

た。

『まず、行先とか移動したルートとかを調べただけで、その中に不自然な場所があったんだ。』

場所は某所の奥深い森の中。付近に一応本社っていう設定にしている古い倉庫みたいななどはあるんだけど、そこが登録される以前からそこに行つてたみたいだしね』

「そこに、何かあると?」

具体的な場所は?」

そこに行けば、何かを掴めるかもしれない。そう思い、その場所の座標を聞こうとしたが、その考えは呆気なく潰えることになった。

『うくん……それがさく。』

大雑把な場所は分かっているんだけど、詳しい所は微妙なんだよね。そもそもが森の中で衛星写真とかは使いづらいし、下手に無人機とかで行つちやうと周辺で警戒している連中の目に入つちやうからね。

それに、ちよつと前にIS学園からそこまで行つた時があつたからその道中にいっくんに聞こうかと思つたけど、結局できなかったしね。』

「……警戒している人間、だと?」

何処のどいつだ?」

『ん……あんまし興味なかったから調べてなかったけど、多分、更識家とかいうのじゃない?』

ひつじよくに悲しい事に、いっくんも箒ちゃんもそつちに行つちやつてるからねえ……』

言われて、合点がいった。

確かに、今の一夏は生徒会の一員であり、現生徒会長はその筋の人間だと聞いている。しかも、その生徒会も今代のメンバーはほぼその筋の人間で構成されているとも聞いている。

(なるほど……生徒会入りは、その意味もあつてか。)

いや、そうなると学園長も……)

多少、今の一夏の周りの人間関係が整理出来てきたが、それと同時

に面倒そうな現実も見えてきた。

「そうになると、強行突破しても面倒なことになるな。そちらは別に考えるしかないか……。」

「それと、今日の会議で一つ気になることがあったのだが……。」

『奇遇だね。』

私も、今日ちよこつと調べたら少しばかり気になることがわかってね。』

「お前が気になる事、だど?」

意外といえば意外なセリフに、その内容に気が行った。

『うん。』

でもその前に、ちーちゃんの方から』

「……あの機体に関することだ。」

単刀直入に言うのと、あの機体には防御用の障壁があるのみで、絶対防御は無いそうだな」

『う〜ん……ISじゃないって考えれば辻褄は合うけど……。』

なくんか、それにいっくんが乗ってるつてのが気に入らないかな〜』

思っていたよりも薄い反応だが、以前推測した内容の真実味が増すには十分な材料だった。

そして同時に、此方に話すべきことだと言っていた内容も気になっていたので、それを促した。

「さて。貴様の方の話は何だ?」

『うん、まあ要約して話すと……ちよつと後に、いっくん達がフランスに行くみたいだね。ただ、そこでやるのがね……。』

「フランスだと? そこを何を?」

『いや〜……束さんも今まで興味なかったから調べてなかったんだけど、そこに例の怪物が大量に居るみたいだねえ……。』

「な、何?!」

だが、事態の深刻さは私の想像をはるかに超えていた。

『しかも、いっくん以外にも何人が行くっぽいね。』

一応、ステルス追加した無人機をカメラマンにしてその様子を見る

予定だけど』

「……指をくわえて見ているだけのつもりか？」

さすがにこの発言には異を唱えたが、当の束は何処吹く風とでも言うかのように反論してみせた。

『勿論、いざとなったら手を出せるようにはしておくけど……でもさ、少し気にならない？』

「何がだ？」

『いっくんが、ああなっちゃやう原因になった人がどんなのなのか。それと、そいつらの実力について。』

把握しておいた方がいいとは思わない？』

言われて、思考する。

(……束の言う事にも一理あるか。)

それに、いざという時の備えはしているみたいだしな……)

決断までには、そう時間は要しなかった。

「分かった。」

だが、後でもう一度、詳しい話を詰めさせてもらおうからな」

『オツケ〜♪ それじゃ、私はそれまでに情報でも集めてるね〜♪』

お茶会の日時はくーちゃんに追って伝えてもらおうつもりだから、ヨロシク〜♪』

そこまで話したところで、この時はいったん解散になった。

不穏な予感は拭えなかったが、それでもこの時出来ることは他に無かった。

Side 一夏

風呂場での騒動から一晩明けた翌日。

《VTシステム》の一件により学園も含めた関係各所が大混乱したために、学年別トーナメントは全面的に中止されていた。

が、それもどこ吹く風で今日も教室は平和だった。些か危機感が無さすぎるように思うが、無駄に緊張するのもそれはそれでよくないと

思い直してそのまま過ごすことにした。

「おはよう、影内」

「いっちょおはよう」

教室に入って間もなく、剣崎と本音から声を掛けられた。

「おはよう」

簡単に返し、席に着く。その後は、幾許かの時間的猶予があったため二人や合流してきたセシリアと雑談を交わしていた。

「そういえば、影内さん。デュノアさんは？」

「少し遅れると言っていた。」

まあ、今朝方は居たことだし、心配はしなくていいんじゃないか？」

セシリアから告げられた質問に、今朝方の事が思い起こされる。

が、内容は薄々と見当がついているので気にしなくていいだろう。

そうして、授業が始まる直前の事だった。

「あ〜……諸君、席に付け……」

まず、妙に疲れた様子の子の織斑教諭が入ってきた。

そして、その隣にはボーデヴィツヒがいる。これまでも幾度か騒動を起こしているだけに、教室にいたクラスメイトが警戒の視線を向けた。

だが、当の本人は気にすることもなく教壇の前、教室にいる全員からよく見える位置に立った。

「この時間を少し借りることを許してほしい。」

それと、皆。昨日の一件とそれまでの行為について、多大な迷惑をかけてしまったことをお詫びしたい。本当に——すまなかった」

深々と頭を下げて、謝った。

昨日までの態度との違いに、戸惑いが広がる。だが、彼女を非難する言葉は出てこない。そんな微妙な雰囲気を感じたのか、口を開いたのはセシリアだった。

「……言いたい事は色々ありますが、ここでそれを責め立てるのは情けないというもの。それを許す度量を備えるのも女性として必要な事でしょう。」

ですが、ボーデヴィツヒさん。今後、今回のようなことを繰り返さ

ないように気をつけてくださいましね」

「寛大な対応に、感謝する」

ボーデヴィツヒは再度深々と頭を下げ、謝意を示していた。セシリアもセシリアで嘗て自身がやらかした事と重ねて見ているのか、少しだけ遠い目を織り交ぜてボーデヴィツヒの方を見ていた。

だが、それが終わるとなぜか自分の席ではなく俺の席の方に近づいてきた。

「それと、影内。恥を忍んでお前に頼みがある！」

「……内容による」

嘗ての三和音トライアドをなぜか思いだして嫌な予感がしたため、慎重に返答の言葉を選んだ。

そして、その予感は的中してしまった。

「影内、私をお前の弟子にしてくれ！」

「断る！」

もはや条件反射で出た言葉だったが、言われたボーデヴィツヒには大きな衝撃だったらしく割と慌てた様子で説明を求めてきた。

「な、なぜだ!？」

日本では、尊敬する人には弟子入りするものだと私の副官であるクラリツサが言っていたのだぞ!？」

「そもそも前提であるその知識が間違っているが……それを抜きにしたところで、到底許容できないんだよ。これは其方の問題じゃなく、俺の問題だ。だから、諦めてくれ」

「いや、諦めん！」

お前が認めるまでは決して……」

このままでは埒が明かないので、別方向から攻めることにした。

「ほぅっ？」

では、お前は自分の我儘を押し通すためにお前が尊敬しているであろう織斑教諭の授業時間を削る気か？」

この一言を聞いたボーデヴィツヒは、一瞬凍りつくとその姿勢のまま目まぐるしく表情を二転三転させた後に――

「わ、私は諦めんからな！」

絶対にお前を私の師匠にするからな！」

——どこかの小悪党のような捨て台詞を若干涙目になりつつ吐きながら、自身の席へと付いた。

なお、この時にクラスメイトの彼女を見る目が本当に変わっていた。何と言うか、ちよつとヤンチャな小動物を見るような感じになっている。

「影内、手加減してやれ。」

それでは、諸君。授業を始める……前に、少し話がある」

その雰囲気を感じてか、織斑教諭が声を上げた。が、その声には隠し切れない疲労——おそらくは精神的なソレ——が含まれている。

「山田先生」

「はい……」

そして、山田先生を読んだ。が、呼ばれて入って来た山田先生は本当に疲れているらしく、まったく隠せていなかった。隈も酷い。

が、それは織斑教諭にも言えるため、おそらくは教師陣を睡眠不足に陥らせる何かがあったと考えるべきだろう。それに対して心当たりもある分、同情の念も湧いてきた。

(お疲れ様です、先生方……)

同情の念を覚えたのは俺だけではなかったらしく、教室のそこかしこから気遣う声が聞こえてくる。

その雰囲気を感じたのか、山田先生が仕切り直す意味も含めて声を張り上げた。

「え……今日は皆さんに、新しいクラスメイトを紹介します。いえ、知っているには知っている人ですが、その、何と言うか……そもそも転入扱いでいいのかも未だに疑問ですが……とにかく。」

入ってきて下さい！」

山田先生の呼びかけに応じ、件の原因となった生徒が現れた。

「失礼します」

が、その姿を見たクラスメイト達は一様に絶句することになる。

それもそのはずだろう。なにせ、入って来たのは——若干の改造が入った女生徒用のIS学園制服に身を包んだシャルロット・デユノア

其の人だったからである。

「皆さん、改めまして。シャルロット・デュノアです。」

諸般の事情によりこのようなことになってしまいましたが、気負う事無く接していただけると幸いです」

デュノアからの丁寧な挨拶が入ったが、それでも暫くは呆けている者の方が多かった。呆けていないのと言えば、事実を知っていたために苦笑している俺と劍崎、そして相変わらずのマイペースだった本音の三人だけ。

が、その時間も長くは続かなかった。

「……つまり、シャルル君ではなく、シャルロットちゃんだったという事？」

「そして、すごい美少女……！」

「ついでに、影内君とは同室だったはず」

「それと、昨日は男子が大浴場使ったような……」

「これは事案ですね！」

「……………、今年の薄い本はどうすれば……」

一部におかしな反応が入っていたが、気にしている余裕は無い。ひとまず、簡単に弁明できる方から片付けるとしよう。

「……一部で誤解されている様なので弁明するが。」

確かに昨日は大浴場の使用許可をいただいたが、俺はその時生徒会の方に呼ばれていてデュノアとは入浴した時間がずれている。最終的に彼女とは鉢合わせることは無かった。

ですよね、山田先生？」

「ええ、そうですね……」

相変わらず生気が抜けていたが、それでも返事をしてくれた。なお、この弁明を聞いた瞬間に一部からあからさまな落胆の音が聞こえた。

(何を期待していたんだ……！)

不信感ともいえる感情が首をもたげるが、そこを気にせず追加の説明を重ねた。

「それと、同じ部屋に一時期は居たが、結局そういうことは無かった。」

うまく隠されてしまったみたいだしな」

再度の落胆の声が聞こえたが、一々気にしていたらキリが無いと思
いそのまま放置することにした。

実際にはこれだけで事が終わらない事も知っているが、それでも今
はこれでいいだろう。

(後は数日後に迫ったフランスでの作戦か……)

頭の中では全く別の事を考えつつ、其の後は通常通りに授業を受け
て行った。

なお、この弁明の時は簪との混浴の件は完全に伏せた。

S i d e 簪

「影内君、ちよつといいかな?」

「ああ」

午後の授業と放課後の特訓も終わり、部屋に戻ってゆっくりとして
いた夜。

デュノアさんが女性だと分かり、そのまま直ぐに引越すことにな
って、代わりに私が戻るようになっていたため今は再度、影内君と
同室になっていました。

元々同室だったことと、空き部屋の状況などでこうなったみたいで
す。とは言っても、本当は私が相変わらず連絡要員として出来る限り
一緒にいる時間を確保するためなのですけど。

(でも……影内君と一緒に居られるなら、それもいいかな)

そして、二人きりの時間を使って聞きたいことがあったので聞くこ
とにしました。

「ボーデヴィツヒさんから、弟子入りさせてほしいって言う話があつ
たって聞いたんだけど」

「ああ、そんなことも言われた」

「断ったって聞いたけど、なんでかなって……?」

私の質問に、影内君は少し困ったような顔になって答えてくれまし

た。

「そうだな……俺に師匠がいるって話はしていたよな」

「うん」

その話は私自身も前に少しだけ聞いたし、ボーデヴィツヒさんの会話の中でも言っていたのでよく覚えています。

「俺にとつての師匠っていうのは、あの人達でな。そして、俺は未だに何一つとして、あの人達から習った以上を出来るようになったことも無いし、自分自身の独自の何かを生み出した事も無い。

……いや、一応は暴走の産物があるが……アレは使用禁止になつているからカウントしなくていいか」

「影内君が使用禁止になつた……？」

「ああ、そこは気にしないでくれ。多分、死力を以つて戦わなければいけないような状況でもない限りは使わないだろうし。

で、話を戻すが。かなり悪い言い方をしてしまうと、俺は師匠達から習った分野それぞれで、習ったところから進歩も無く立ち止まってるんだ。極端な話、劣化版とも言える。

そんな人間が師匠なんてやっていいものか？ また、ボーデヴィツヒが迷走しかねんぞ」

この返答には、思わず顔を顰めそうになりました。

「影内君。それはいくら何でも、言い過ぎじゃないの？」

「本人が自分のことを言う分にはいいだろう。

それに、過剰に自信をもって道化を演じるよりはマシかと自負しているが」

「必要以上に自分を下に見るのは他の人を見下しているのと変わらない、っていう話をどこかで聞いたことがあるのだけど」

自分でもよく分からない苛立ちを込めて、ほんの少しの反撃を入れてみました。

「言っている意味は分かるのだが……それでも、俺にとつて師匠っていうのはあの人たちの事を言うのであって、間違つても俺自身は入らないというだけだ。

それに。俺自身も色々と言いはしたが、これでも未だに後悔してい

ることもある。ボーデヴィツヒに色々と言ったのも、未だに後悔していることがあるからこそつていう部分もあるんだよ」

「……何を、後悔しているの?」

その内容に、もしかしたら、という思いがよぎりました。

(……箒や、鈴。あるいは、鈴の話にあつた親友だった人達の事なの?)

そして、その予感——

「……昔、俺がまだ師匠達と出会う前の話だが。

幼馴染と、親友と呼んだ人達が居たんだ」

「……!」

——的中しました。

胸中の驚きを出来るだけ表に出さないようにしながら、話の続きを待ちます。

「随分と世話になったよ。

あの頃の俺は、弱くて……何もできなかったからな。本当に、今生きているのもあの頃世話になっていた人達のおかげつていう部分が大きい。

ただ、其の後……唯一の肉親だった人が、ある競技の大会に出ることになってな。そこでちよつとした事件に巻き込まれて、アイツらとは別れることになった。詳しくは調べてないからわからないけど、多分死亡扱いになっているだろうな。

で、それでも俺自身は遠い土地でしぶとく生きていたわけだが……事情が重なつて、別れも言う事が出来ていなくてな。それからもう何年も経っているけど、未だに後悔している」

「……お別れを、言えなかったことを?」

どうしても、確認しておきたかった。

箒と鈴の、今の親友として、どうしても。

「それもあるけど……それ以外の方が大きいかな。

何より、親友達にはほとんど一方的に世話になっていたし、当時大きな悩みを抱えていた幼馴染相手には何の役にも立てなかったどころか、こつちが励ましてもらつていたくらいだった。

その癖、変なところで意地を張ってて。一時期まで、こつちの事なんかまったく振り返ることのなかった肉親の影を追いかけていた。そして、其れが無意味だったと感じるようになったところに勝手に立ち止まった。

本当は……世話になつていた親友達への恩返しや、幼馴染の役にも立てるように何かしら模索でもすればよかつたのにだ。

要約すると……本当に大事にすべきだった人達を、蔑ろにするようなことをしていたんじゃないかって後悔している。正直に言えば、恨まれていてもおかしくないんじゃないかって」

この話を聞いて、どうして本当のことを話さないのか、どうしても確認しておきたくなった。

「だったら、その人達の所に行かなくていいの？」

今の影内君たちの立場なら、やろうと思えばできると思うけど」

あの二人の話を聞いた後だったこともあつて、行ってほしいという思いも含めて

「いや、行かない。

確かに、やり方を選ばなければ会えるだろうが……今やっていることを考えると、会う気にならなくてな」

「今やっていることって……」

影内君が言ったことをそのまま呟いた私に、影内君はほんの少しの寂しさを混ぜながら答えてくれました。

「……一応、命を懸けて戦っている。

そう簡単に死ぬつもりは無いが、其れだけで生き残れると思うのも間違いだ。最悪を考えるのであれば、いつ死んでもおかしくない。

そして、俺はそれを受け入れている」

そこで少しだけ言葉を切ると、どこか遠くを見つめながら続きを言いました。

「……ただでさえ、あの時まで世話になつていた。何もできない人間に好意的に接してくれるほどの、お人好し達だった。

そんな人たちに……同じ人間の死を、二度も経験させることも無いと思つてな……」

「……!!」

影内君の話してくれた内容に、私は何も言えなくなっていました。「もし、今の俺が世話になっていた人達に対してやれることがあるとすれば、

あの化け物共を早々に駆逐して、多少なりとは安全に過ごせるようにすること位なものだろう。だったら、それでいい」

その話に、どこか悲壮とも呼べる決意と、何かを間違えていると思うのになんか言い表せないもどかしさを感じながら、私はただただその話を聞いていました。

そして、影内君の話が一区切りついた時、私は最後の質問を重ねました。

「……もしも、だけど。」

あの化け物の事が片付いて、影内君もちやんと生きてたら……どうするの?」

最後の質問に、影内君は少し答えに悩んだようでした。

けれど、それも短い間の事でした。

「……多分だけど、何も言わないと思う。」

どの道、今はあの場所で生きていくことを決めている。下手すると二度と会う事は無いかもしれないほど、遠い場所だな……。

薄情かもしれないけど、過去の亡霊が挨拶だけしてまた遠くへ行きましてなんてのも、どうかと思うしな……」

「……私が言うのも変だけどさ。」

出来れば、挨拶くらいはしてあげた方がいいんじゃないかな。きつと、その人達にとつては今も影内君は大切な人だと思うし……」

「……もしそうなら。それだけでも、十分過ぎるくらいなんだけどな」

今はこれだけ言うのが精一杯だった私に、影内君は何処か優しい気な表情で答えを返してくれました。

それが、この日の就寝前最後の会話でした。

S i d e ???

「フフフ……♪」

思っていた以上にいい具合に動いていたなあ……ドラッグナイト ストラトス システム D ・ S ・ S
は」

「……話には聞いていたが、ああも圧倒的なものなのか」

隣で見ていた蜘蛛女が感心したように、あるいは意外そうに言ったが、相も変わらぬ理解力の低さだった。

「だから言っただろう？」

私は、最初から嘘は言っていないと」

「……そうやって調子に乗らなけりや、多少は信憑性も増すと思うんだがよ」

今度は呆れているみたいだが、まあいい。今の私は、実験が概ね良好な結果に終わり、非常に機嫌がいいのだから。

「しっかし……まさか、《VTシステム》の方をカモフラージュ扱いるたあな。

IS学園やIS委員会の連中も想像ついてねえんじやねえの」

何が可笑しいのか、今度は含み笑いになっている。

だが、その意見は楽観視と言えるものだ。

「うむ……それに関しては、情報さえある程度手に入れば思い当たる連中がいるかもしれない」

私の台詞に、それまでの含み笑いを一瞬で消し去り、真顔で此方へと顔を向けてきた。

理解力の低い無能かと思っていたが、さすがにその筋にいる事はある。アーカディアの連中よりは低い練度だが、それでも使い道はありそうだ。

精々、利用され合っているでしょう。

「何処のどいつだ？」

「あの白い機体と紫の機体の搭乗者の一派だ」

「今回、テメエの機体をブツ潰した奴等か……根拠は？」

「今説明しても二度手間だが……まあいい。」

理由は簡単だ。あの一派は、私と同じ源流から派生しているだろう

からだ」

私の簡素な説明に、蜘蛛女が途端に険しい表情になった。

「おい、それはどういうこったよ。今はいいが、後で懇切丁寧に説明してもらうぜ。」

——元ドイツ軍《VTシステム》兼《越界の瞳》研究者、ウエイル・アーカディアさんよ」

設定資料：3

オリジナル機竜設定

名称：ヴィーヴル

使用者：ラウラ・ボーデヴィツヒ

近接戦闘力：B+

機動力：C

制御力：C

遠距離火力：E+

耐久力：C+

出力：A

機攻殻剣：ルールブレイカー（F a t e）

詠唱譜：『——這い出でよ、暗闇の世界に住まう蛇竜。至宝の光を見せよ、〈ヴィーヴル〉』

特性：特装型

基本武装

・機竜^{ブレード}牙剣

・機竜^{ダガ}牙爪^ガ

特殊武装

フアスネイト・クリスタル

・幻惑の宝玉：機竜使いの脳に作用し、一時的に強烈な催眠状態に陥らせる事で一種のトランス状態を引き起こす特殊装備。これにより、痛みや精神的な負荷を無視し肉体的な限界を超えた運動能力を持たせる。

ただし、あくまで精神的な作用であるため物理的な傷をつけられれば当然相応の能力の低下を引き起こす。さらに、自身の状態についても把握しなくなるため死ぬまで行動しかねない悪循環を生み出す危険性もある。

応用的な使い方として、使用者が見てきた操縦技術や剣技を『再現出来る』^{トレンジャー・マドネス}と思い込ませることで模倣するのにも使える。

・狂気誘う至宝：使用中、常に機竜の性能の限界を強制的に引き出し続ける特種装備。

《限界突破》オーバーリミットや《強制超過》リコイルバーストに近い状態であるため、極めて高い戦闘能力を得られる。半面、通常の運用の十数倍以上に及ぶ負荷を機竜、ドラッグナイト機竜使いとともに受け続けるため非常に消耗が激しく、使用後は良くて戦闘不能、悪ければ自壊の危険性が付きまとう。

神装

・宝玉パール）の守護龍：発動中、高負荷と引き換えに機竜と機竜使いに絶大な再生能力を一時的に付与する能力。ほぼ無制限の再生能力であり、一撃で機体全てを消し飛ばさない限り再生され続ける。

しかし、使用中の負荷は常軌を逸しているため普通の機竜使いでは何分と持たない。

その他武装

・シユヴァルツィア・レーゲンの武装各種

解説：ラウラ・ボーデヴィツヒの専用IS『シユヴァルツィア・レーゲン』の拡張領域に武装として収納されていた機攻殻剣から召喚された神装機竜。

赤黒い色の装甲に焦げ茶色が所々入っており、紫に光るラインが入っている。サイズ的には夜刀ノ神とほぼ同じ。

基礎的な能力は神装機竜としては低いものの、特殊武装と神装によって強制的に機竜使いと機竜そのものの能力を限界以上に引き出すことを可能にしているため一時的には圧倒的な能力を得る事ができる。

また、ラウラ・ボーデヴィツヒが搭乗した時に限りシユヴァルツィア・レーゲンがIS用の操作を機竜用の操作に変換する操縦装置として機能していたため本来機竜の操作を知らないはずの彼女でも操作を可能にした。さらに、絶対防御とPICの機能も生きていたため搭乗者の安全性の向上と特装型にも関わらず飛行能力が付与されている。

登場人物設定

・名前：ラウラ・ボーデヴィツヒ

黒兎^{シュヴァルツェ・ハーゼ}隊隊長を勤める少女。

ISの登場以前は優秀であり態度も模範的な隊員だったが、ISが登場して以後は成績が落ち込んでいた。なお、その間も態度は模範的であり、他の隊員たちからの信頼も厚かった。

やがて、黒兎隊の中で当時の隊長や副隊長を含む先輩たちが一度に何人も再起不能やそれに近いほどの怪我を負うという事件が発生。その時に大部分の隊員の交代が余儀なくなり、その中で他の隊員たちからの信頼や態度、統率能力を見込まれ隊長に抜擢される。だが、この時ラウラ本人としては「なぜ成績の悪い自分が」という思いが強かった。

その後、臨時教官として織斑千冬に指導を受け、一気に成績が良くなる。その後、大規模交代以後の隊員たちの不安に駆られる姿などを見るようになるにつれ「隊長として」その状況を何とかしなければいけないと思うようになる。やがて、自身が強くなることでその状況を解決しようと試みるようになり、一層訓練に力を入れ始めた。

だが、その後はトップエースと呼べる成績を維持しているものの伸び悩むようになり、臨時教官を務めていた織斑千冬に直接強くなるための手段を聞こうとしたが、その答えを聞いて余計に分からなくなり、改善しない状況に焦りを感じるようになる。

そこから、徐々に徐々に歪んでいくことになった。

第五章：異形の巢

第五章（1）：異界より来たる者達

S i d e 一夏

フランス行きの前日。

平日ではあったが、授業よりも遥かに優先度の高い用事があったため俺は完全に学校を放り出して『球体』^{スライア}の前で待っていた。

今現在、更識家の協力によってこの付近に設立したという設定にした本社に近づく不審人物の監視、という名目で『球体』付近の監視を依頼している。最初は不審がられたが、何とか了承はしてもらった。

「さて、予定ではもうそろそろのはずですが……」

「ゆつくり、待つてようよ」

「いえ、あまりゆつくりもしてられないのが現実では？」

一緒に待っているアイリさん、フィルフィさんと会話を交わし時間を潰していた。

今この場には、協力者である更識家の関係者はいない。それは更識会長や簪たちも例外ではなく、本当にIS世界側の協力者は一人もない。

（さすがに、もうそろそろ時間が迫っているはずだが……）

向こうのメンバーを考えると、恒例の騒ぎ^{痴話喧嘩}が発生しているのかもしれない。だが、それでも出発に間に合わないような事態にする人たちでもないのは知っているので、特に心配はしていない。仮に間に合わなかったとしたら、それはむしろ向こうで何か問題が起こったと考えるべきだろう。

「……来た、よ」

だが、それも杞憂だった。

僅かに『球体』の発光が増すと、その中から幾人かの機竜を纏った人影が見えた。その数は六人。そして、その姿が鮮明とするにつれて良く知っている人たちであることが知れた。

「皆さん、ご足労有り難うございます」

出迎えの意味も込めて、まずは簡単な挨拶だけした。

「いいよ。これほどの事態だったら流石に一夏でも大変だろうしね」
「お礼は不許可ですよ。これも、私たちの為すべき事の一つですしね」
「そうね。私としてはルクス君と一緒に居られる口実を作ってくれたことだし、むしろ感謝してるくらいよ」

「でしたら……こちらの方で、世継ぎを作られるのですか？」

「おいちよつと待て!？」

いきなり何を言っているんだこのエロ女!!」

「……ルーちゃん。こつちのお菓子、食べる？」

最初はルクスさんからの、これまでの働きに対するいい意味で不相応な労いの言葉をかけてもらったが、それを噛み締める暇も無く何時ものやり取りが開始されてしまった。だけど、相も変わらぬこのやり取りに、思わず笑みが零れそうになる。この人たちが揃うと、いつもこうだった。

「異世界に来てても相変わらずですね。兄さん」

「いや、それは皆にも言える……っていうか、皆に言つてよ！」

「さつすがお兄ちゃん、モテモテね。でも、クルルシファーみたいな貧相な体の人に好かれてもねーっ♪」

「あら、それは私の事を言えるようになったという事かしら？」

「……くっ！ いいもん、一夏！」

「……こつちもこつちで平常運転ですね、一夏」

「いえ、それは俺のせいですか？」

そんな状態のルクスさんへと容赦のない一言を入れるアイリさんに、そこへとツツコミを入れるルクスさん。茶々を入れようとしてクルルシファーさんから手痛い反撃を貰ったメルからなぜか肩車の体勢を取らされ、再度のアイリさんからの容赦ない一言を貰う事になった俺。

(……このメンバーで集まったときの恒例のパターンと化しつつあるな)

なんとなく不思議な感慨を覚えつつ、このままここで立ち往生とも行かない事情も鑑みて声を張り上げることにした。

「これ以上待たせてもいいけないので、早く行きましょう！」

「そうですよ。ただでさえこちら側の協力者である更識さんをお待たせしているんですから、早く行きましょう。」

ですが、一夏。ギザルト卿を肩車したままだと今一つ緊張感に欠けるのですが」

「……ギザルト卿、申し訳ありませんが降りてください」

「公の場だけど、気にするような場所でもないから何時もの呼び方でいいでしょ？」

上ったときと同じく無意味に軽やかな身のこなしで俺の肩から降りて言ったメルは、何時の間にかいつもの調子に戻っていた。

「さて。では、改めて行くとするか！」

この場での代表を務めることになっているリーシャ様が改めて宣言し、ルクスさん、リーシャ様、クルルシファーさん、セリスさん、フィールフィさん、夜架さん、メル、アイリさん、俺の九人はその場から全員で移動する事になった。

S i d e 楯無

影内君、アーカディアさん、アイングラムさんの三人が本社からの増援メンバーを迎えに行っている間、僅かに手持ち無沙汰になった間に少しばかりの考え事をしていた。

(ここに來ることにしてあったって言っていたけど、でもどうして……?)

考えても見れば、最初に簪ちゃんを助けた時の位置もこの付近だった。そして、それ以後もこの位置を中心に活動しているように見受けられる部分が多々ある。

「お嬢様、考え事ですか？」

「まあ、ね。」

今までも何度か調べた、影内君たちが何者かについて、だけど……
そんな私に声をかけてきたのは、虚ちゃんだった。

「それですか……」

前に調べた時も、結局何もわかりませんでしたしね。本音なんか、瞬間移動でもしてみたみたいなんて言い出す始末でしたし」

最後の一文、虚ちゃんは冗談めかしたつもりで言ったことはすぐに分かった。

だけど、私は不思議とそれがそこまでの間違いではないように思えてしまっていた。

「瞬間移動、ね……」

「……お嬢様？」

訝しむように私の顔を虚ちゃんが覗いてきたけど、その時の私の思考は全く別の場所にあった。

（瞬間移動……確かに、そうだとすればこんな山奥に拠点と思しき場所を構えている事にも……出入国記録そのものが存在しない事にも……それに、条件が限定的とはいえISを超える性能を持っていて男性である影内君も使える機体群、そもそもアレはISなの……!?)

一気に意識が思考の中へと傾きかけた時、私を現実へと引き戻した。

「……お嬢様、増援の方々がお見えになりましたよ」

「……ん。ありがとう」

虚ちゃんが見ている方向を私も見れば、そこから九人の人影がこちらに向かって来ていることがわかる。背格好が微妙に違うけど、その容姿までよく見えるようになってくるにつれて意外な思いを抱くことになった。

（……? なんて、一人だけ黒いローブ付き?）

一人だけ妙な格好をしていたけれど、そこをつつくのはまた後の事にした。

「ここでききなり帰られても困ることだし。」

「ようこそ。歓迎するわ」

「ああ、こちらこそ、世話になる。」

一応の代表者を務めることになった、リーズシャルテ・アティスマータだ。よろしく頼む」

私の挨拶の言葉に答えてくれたのは、一番前に出てきた短い金髪と、少し勝気な感じのするのに全く嫌味を感じさせない表情の中に強い意志を映し出す朱い瞳を携えた女性。容姿から考えられる年代的には私達とそう変わらないであろうことが想像できる。

「もう知っていると思うけど、更識楯無よ。」

とりあえず、今日の宿に案内するわ。具体的な話をそこで確認したいのだけど、いいかしら?」

「助かる」

短い返事だけだけど、それと同時に見せた笑顔に不思議と引き寄せられそうになった。

(……カリスマ、って言っているのかしらね)

見たものを半ば理屈抜きで惹き付ける、それが出来る人なんてそうそうお目に掛かれるものではない。にも関わらず、この人はそうなんだろうなと漠然と思った。

だけど、そこに引き込まれるわけにも行かない。あくまで、今は彼らから見て外部の協力者という立場に止めておく。

(彼らが何者か、それが分かればもう少しやりやすくなるんだけどねえ……)

僅かに抱いた感情はおくびにも出さず、ひとまず移動用に用意していた車に案内していく。虚ちゃんが気を聞かせて、皆が乗る前に合わせて車の扉を開けてくれた。

「一夏、コレが……!」

「落ち着いてください、リーシャ様……」

ただ、車に乗るときにリーズシャルテさんが少し興奮気味だったのが気になった。

「さて、ひとまず今日泊まってもらおう予定の部屋だけ……どうかしら?」

取りあえず止まってもらおう予定のホテルの部屋へと案内し、部屋を

見てもらった。さすがに九人が一斉に泊まれる部屋は無かったの
で、三人部屋が三つとなっている。

今はそのうちの一室。それぞれ、簪ちゃんと虚ちゃんに案内して
もらっている。

「お世辞抜きに、いい部屋だな」

案内していたうちの一人であるリースシャルテさんから、思いの他
良好な評価を頂いていた。

(ま、不評よりはいいか)

ひとまず案内した先の部屋に荷物を置いてもらい、別に用意して
いた大部屋に集まってもらおう事にした。

「さて……荷物も置いたし、確認の方に移っても？」

「ああ、構わない。」

ルクスとセリスも、それでいいよな？」

「はい」

「許可します」

同室予定の二人も概ね気に入ってくれたらしく、それぞれに同意し
つつ荷物を置いて行っている。

(しかし……相変わらず、謎の黒いローブね)

正直に言えば凄まじく目立っているけど、不思議と見失いやすかつ
た。というか、同行している色々と煽情的な服を見た黒髪の美人が手
を引くたびに見失っていたと思う。

そうこうと考えているうちに、一時的に借りている大部屋へと付い
た。

「それじゃあ、まずは互いの紹介と行きましょう。」

もう顔見知りの人もいるけど、初対面の人も多いしね」

「ああ、そうだな。」

それじゃあ、私からでもいいか？」

「ええ、どうぞ♪」

そこまで言うと、「では」と前置きしてから自己紹介を始めてくれ
た。

「さつきも言ったが、私の名前はリースシャルテ・アティスマーダ。一

応、今回の増援メンバーの代表を務めることになっている。機体の名前は《ティアマト》だ。

用向きがあれば気楽に言ってくれ。後、口調も堅苦しい方向のは無しで頼む。正直、堅苦しいのは好かないんだ」

どこか悪戯っぽい印象の明るい笑顔で言われ、私も「そうさせてもらうわ」とだけ返答させてもらった。

「次は私ね。」

名前はクルルシファー・エインフォルク。機体は《ファフニール》。私も今回の増援メンバーの一人よ。よろしく」

今度は薄い青の長髪で、クールな印象の長身の女性。涼やかな声で、だけどどこか悪戯っぽい印象も受ける。

「それでは、次は私が。」

セリスティア・ラルグリスと言います。機体は《リンドヴルム》。私も今回の増援メンバーの一人です。よろしくお願いしますね」

エインフォルクさんの次は、金髪で長身の女性。ハッキリ言って女性として凄く羨ましい体形に、意志の強そうな瞳とどこか硬い口調が強く印象に残った。

「……私は、いいかな?」

「……まあ、両方知っていますしね」

次に声を上げようとして、思いとどまったのはアイングラムさんだった。確かに、この名に在るメンバーの中では双方とも知っているだけに、飛ばしても大きな問題は無いように思われる。そして、それを指摘したのはアーカディアさんだった。

「では、僭越ながら次は私の方から。」

名前は切姫夜架きりひめよるか。機体名は《夜刀ノ神》ヤトノカミ。普段は主様の従者を務めさせて頂いておりますが、今回は増援の一員として尽力させていただきますわ」

五人目の紹介は、妙に色っぽい服装の黒髪の美人さん。色々と煽情的な部分が目立つけど、所々で出ている卓越した能力や根拠も無く感じる人として不安定な印象が、ある意味での要注意人物という感想を抱かせた。

(ま、そんな事はおくびにも出さないし。味方となれば心強いの一言に尽きるからいいけど)

「じゃ、次は私ね」

言うのと、この中でも一際幼い印象を受ける女の子が立ち上がった。立ち居振る舞いも、他のメンバーに比べて子供っぽい印象が目立つ。「増援メンバーの一人で、名前はメル・ギザルト。で、私の機体は《ドライグ・グワイバー》。」

気軽にメルって呼んでね」

正直に言っただけでアーカディアさんがいた時点である程度予想はしていたけど、それでも驚いた。

(下手すると私と同年代か、それ以下でしょ……こんな子が……?)

影内君からは、増援に来てくれる人たちは折紙付きの実力者ばかりという事を事前に聞いていた。その中でこの年で来ているのだから、それはある種の異常と言ってもいいでしょう。

だけど、この場でその疑問は押し殺した。どのみち、今詮索したところで意味は無い。そういう部分もあって、この疑問は無視することにした。

「では、最後になるが……」

アティスマータさんが目配せすると、黒ローブの人が一歩前に出た。

「……ルクス・アーカディア。増援メンバーの一人で、機体は《バハムート》。」

よろしくお願いします」

最後に紹介された人は、ローブを纏った例の人だった。紹介そのものも短めだったけど、話し終わった後に顔の部分だけを出して見せてくれた。いくらか童顔だけど顔立ちは良く見える。ただ、どちらかと言えば男性っぽい感じがした。

「……って、アーカディアって」

「私の家族ですよ」

そう言ったのは、アーカディアさんだった。

「そうだったの……」

「ややこしいようでしたら、名前の方でも構いませんが」

「そうさせてもらおうわ。ルクスさんのほうも、いいかしら？」

「ええ、構いませんよ」

疑問もすぐさま氷解し、手早く次へと移っていく。

そう、今度は私たちの方の自己紹介。

「それでは、今度はこちらの方から。」

日本の暗部にあたる家のうち一つ、更識家の当主を務めさせてもらっている更識楯無よ。今回のバックアップやら何やらを担当させてもらっているわ」

私の紹介に、増援メンバーの方々はそれぞれに反応を示してくれた。

だけど、その中には悪い反応は見受けられない。

「楯無お嬢様の従者で、のほとけうつほ布仏虚と申します。」

以後、お見知りおきを」

一礼とともに、虚ちゃんが紹介を終えた。その感触も、概ね良好と言えるもの。

「妹の、更識簪です」

「その友人の、剣崎箒と申します」

その次に紹介した二人のも、無難と言えば無難なもの。感触も悪くない。

「かんちゃんのおさな」

「本音……？」

「……簪お嬢様の、従者で、布仏本音と、申します」

最後に、本音ちゃんがいつも通りの挨拶をしようとしたところ、虚ちゃんの一睨みと妙に平坦でゆっくりとした口調の前に、ちゃんとした挨拶をした。

ただ、この時の増援の方々からは、微笑ましい物を見たという気持ちがありありと伝わってきた。

そのままにするわけにも行かないので、一つ咳払いをして雰囲気は何とかした後話を続けることにした。

「それじゃあ、今日の……と言うか、今後の日程を確認したいのだけ

ど。いいかしら？」

「ああ、頼む。」

一通りは一夏から聞いているが、やはり事前に確認しておくに越したことは無いしな」

答えてくれたのは、一応の代表だというアティスマータさん。最初に言った通りに砕けた口調で、そこに堅苦しきは感じない。

(ま、私もこういう雰囲気の方が好きだし、いいけどさ)

すっかりあちらの雰囲気にもなまれている事に危機感が無いわけではないけど、今現在は無問題と判断してそのまま話を続ける。

「ひとまず今日はここで休んでもらって、明日の朝一の便で出立する予定よ。フランスに着いた後は車で移動になるわ。で、そこで現地で待機している部隊と合流して作戦説明、その翌日に作戦開始ね。」

現地の部隊はフランスを中心にした欧州合同部隊が主だけど、他にもアメリカやアジア各国、ロシア等々の国々がI Sを中心とした戦力を送り込んでいるわ」

「I Sを中心とした、か……」

「……？　どうかしたかしら？」

アティスマータさんが小さい声で、尚且つ鋭い目付きで呟いた。

それまでとは一変した様子を流石に見逃すわけにはいかず、その真意を聞こうとした。

「いや、気にしないでくれ。」

これ以上の戦力や作戦に関する内容は、現地についてから、その指揮官も含めたうえで話し合った方がよさそうだしな」

その言葉に対する増援メンバーの返事を確認するかのようには、アティスマータさんが周りの面々を見渡した。それに答えるように、それぞれが首肯したりして同意の意を示している。

「分かったわ。これ以上は、現地についてからにしましょう」

作戦に関する話はここまででいったんお終い。

そして、ここからは私達からの細やかな前払いと行きましょう。

「ところで、増援メンバーの皆さま。」

これから夕食となりますが、このホテルでのそれでよろしいでしょ

うか？」

実にいいタイミングで、虚ちゃんが話を切り出してくれた。

「ああ、問題ないが」

やはり、答えたのはアティスマータさんだった。特に反対意見も出てこないの、

「では、ご案内します。こちらです」

「ああ、それと。」

ここのレストランはここ近辺の中では一番評判のいいところよ。バイキング形式だから、好きなだけ食べて頂戴。其の後は各部屋でくつろいで、明日に備えて」

私の言葉に、それぞれがそれぞれの反応を示してくれた。けれど、それは概ね良好なもの。

(態々用意した甲斐はあったか)

いくらかの満足感は覚えつつ、私も夕食をとるために下りて行った。

「遠慮なく食べていいとは言ったけど……まさか、ここまで食べる人がいるとはねえ……」

夕食のバイキングの席にて。

私も含めた全員が更識家の伝手も使って貸切った食堂にて夕食を食べていた。けれど、私はそこで、主に約一名の凄まじい食事を目撃することになった。

「美味しいわね」

「ええ、中々の物です」

エインフォルクさんとラルグリスさんはいい。時折エインフォルクさんがルクスさんやラルグリスさんをからかっていたりするけど、それはじゃれ合いの範疇のそれとしてみてもいい範囲でしょう。

「うむ、いい味だな。」

しかし……」

アティスマータさんもエインフォルクさん、ラルグリスさん達と一緒に、言葉少なだけど美味しそうに食べていた。でも、なぜか時折炊飯器の方や照明を見ては何かを考え込んでいる。

「……まさか、古都国のそれに似た料理があるとは」

切姫さんもそれまでと余り変わらない様子で食べていたけど、時折、本当に僅かだけど懐かしそうな様子が見受けられた。

「ルーちゃん、食べる?」

「いや、フィーちゃん取り過ぎだからね!」

そして、ルクスさんとアイングラムさん。終始、凄まじい量を取ってくるアイングラムさんにルクスさんがツツコミを入れる形になっていた。

しかも、取って来た料理の九割方はしつかりと自分の胃に収めているので、決して無駄に取ってきているという訳でも無い。ただ、その食事量そのものに驚かされている私がいるのも本当の事だった。

「……いつもこんな感じなの?」

「何時もとは一部が違いますが、まあ……」

「リーシャ様と夜架さんだけです、普段と違うの……」

一方、ギザルトさん、アイリさん、影内君は同じテーブルについて食べていた。増援メンバーの中では年下組と言っていいのかもしれないけど、何故か一番常識的な席になっているようにも思えてしまう。

(……総じて、不思議な人達ねえ)

何とも言えない感想を抱きつつ、私たちもそれなりにしつかりと食べていた。

「お嬢様……さすがに、この食事量は……」

「……後で、追加で払っておいて頂戴」

小声でこつそりと、虚ちゃんと大事なことを決めておくのも忘れずに済ませておいた。

「思わぬ歓待でしたが、前払いと考えた方がいいのでしょうか」

「別に、取引の条件以上の事をした覚えはないのですけど」

「私としては、美味しい料理が食べれたしそれでいいけどねーっ♪」

夕食後、俺達は三人一部屋となつている自室へと戻っていた。

部屋分けは、俺とアイリさん、メルで一室。他に二室取つてあり、内一室にはルクスさんとリーシャ様、夜架さんの三人、最後の一室にクルルシファアさんとセリスティアさん、フィルフィさんの三人となっている。部屋の並びとしては、俺達の部屋とクルルシファアさんたちの部屋でルクスさん達の部屋を挟むような感じになっている。

どうしてこんな並びにしたのかというと、簡単な事で。

「しつかし……この並びにして正解でしたね」

「おにいちゃんつてば相変わらずモテモテねー♪」

「……一応、協力者がいるといっても右も左も分からない場所のはずなのですが。」

よく飽きずに集まりますね」

隣のルクスさんたちの部屋から、計六人分の賑やかな声が聞こえてきた。痴話喧嘩と言い換えてもいいかもしれないが、同時にいつもの事でもあるのでこの部屋の面々は気にしない。

ただ、同時にここは公共のホテルでもあるので隣の部屋に宿泊客が居たら迷惑になるだろう。だからこそ、集まりそうな部屋を自身達の部屋と空き部屋になりそうな部屋で挟む形をとった。なお、最初に言いだしたのはアイリさんであることを付け加えておく。

「無駄に緊張するよりはいいんじゃない?」

「にしても、限度というものがあるのでは……?」

「もう、気にしても無駄なんですよ……本当に、兄さんの女癖の悪さときたら……」

「いや、さすがにそれは……」

「本人に自覚が無いだけで、女誑かしているのは合ってるんじゃない?」

「メルまで……」

此方も此方で緊張感に欠ける話題を続けていたが、夜が更けるとともにそれも終わりになっていく。

(さて……明日はいよいよ、現地入りか)

S i d e 楯無

「さて……もうそろそろ出発になるけど、準備はいいかしら？」

「ああ、問題無しだ」

一泊してもらった翌日。空港前でフランス行きのメンバーが全員いる事を確認し、そのまま乗り込んでいた。

ただ、その道中。空港内部で増援メンバーの方々が割と戸惑っていたのが少し意外だった。何と言うか、空港そのものに慣れていない感じがする。

「さて、今日乗る飛行機はアレよ」

ひとまずロビーで待っている間、待機している飛行機の内一機を指さした。

「アレか……！」

まず最初に反応したのは、アティスマータさんだった。心なしか、目が輝いているように見える。そして、それぞれに搭乗予定の飛行機を見て物珍しそうな反応を示した。

唯一反応が薄かったのと言えば、影内君ただ一人だけ。

「それじゃあ、行きましようか」

搭乗橋を通って、そのまま全員で乗り込んでいく。

「国家代表が使うように用意されている飛行機よ。」

本来は関係者以外立ち入り禁止だけど、それだけに一番確実に安全だから今回は使わせてもらっているわ」

「豪華だな……」

「IS関連は無駄に予算が多く取られてるからねえ……」

それと、実は簡易のIS用補給装置とかも付いていたりするし」

「……そんなもので！」

「使う機会があるかどうかはとにかく、ね……」

影内君が感心したように言ったけど、私としては呆れを含んだ返事しか出せなかった。

「流石に離着陸の時は席に着いてちようだい。」

それじゃあ、もうそろそろ離陸よ」

様々な事が起こりつつも、一路フランスへと向かっていく。

例の化け物共が、跳梁跋扈しているであろう場所へと。

第五章（2）：異国の空の下

S i d e 鈴音

「……で、セシリア。」

「アンタも増援については何も聞いていないワケ？」

「ええ、そうなりますね」

「ラウラも？」

「うむ。私どころか、シュヴァアルツェ・ハーゼ黒 兎 隊 全員が知らなかったぞ」

専用機持ちの代表候補生として、フランスに飛んだ当日。

同じように代表候補生として呼ばれたセシリアと、ドイツ軍の軍人として呼び出されたラウラと一緒にある作戦の説明が始まるのを待ってた。

「……しかし、ISを倒しうる未知の生物の殲滅作戦か。」

「それも、大量の」

「難しい顔で唸ったのは、ラウラだった。」

俯き加減になった顔の中の瞳が見据えているものが何かは分からないけど、私もそのセリフに思う所はある。

「……鈴さん。」

「その生物とは、もしかや……？」

「……クラス代表対抗戦の時の化け物共かもね」

セシリアの台詞に続けるように、同じ心当たりを言い放った。セシリアも同じ考えだったみたいだけど、ハッキリと言葉にした途端に渋面になっていた。

「……私はその時居なかったからそいつらがどのような物か分からないのだが、それほどまでの脅威だったのか？」

「……謎の白い機体が出てこなかったら、今頃は私もセシリアも生きていなかったんじゃないの？」

「勿論、冗談を抜きで、ですわよ。」

「ああ、ついでに言っておきますが一応箝口令の敷かれた内容ですの
で、悪しからず」

「軍属になっていればその程度の事、幾らでもあるから別に構わんが

……」

私とセシリアの返答に、ラウラは若干苦笑した後には渋面になっていた。

「……しかも、一部の面々の危機感が無さすぎるんだけど」

「鈴さん、その意見に深い同意の意を示しますが、国家代表や副代表、他国の代表候補生に対する言葉ではありませんわよ」

「わあかってるわよ。」

……ま、知らないのは気楽でいいわね」

そして、今現在待機している一室。

フランス軍が一時的に失われた基地の機能を移しているという施設の一室、作戦会議室として使用されている超大規模な部屋。そこに、参加した国家の主要な戦力や作戦説明を聞かざるを得ない人物たちが集まっていた。

参加したといっても、遠方にあたる国々はISとその搭乗者のみを送り込んでいる場合も多く、しかもその国の搭乗者も他の国の搭乗者と呑気に話している。それが緊張を紛らわせる目的だったりすれば、なにも文句は無いのだけど、どうにも今回の戦闘を侮っている内容のそれが多く感じてならなかった。

「我が黒^{シユバルツェ・ハーゼ} 兎 隊はそのような事は無いから安心してくれ」

「その言葉が聞けて良かった」

横で会話を聞いていたラウラが、微笑を伴って言い放った。その微笑には嘗ての傲慢だった姿の影は見受けられない、自身の部隊への誇りに満ち、他者への安心を促す笑みだった。

(……案外、この顔に惹かれたのが多かったから隊長に抜擢されたのかしらね)

そんな馬鹿なことを考えながら、軽口で返しておく。こうでもしないと調子が崩れそうだった。

「しかし……最後の増援として呼んだっていう面々が未だに来ていないってどういう事よ!?!」

「鈴さん、落ち着いてくださいまし。」

一応今日は作戦会議並びに説明のみで、しかもまだそれにも時間的

余裕はありますのよ」

「しかし、それにしても時間がかかっているな」

そう、今現在ここに居る面々以外で増援に来るはずの、最後の一団が来ない。聞いた話だと、実働要員が八人にサポート一人らしい。

他に、ロシアからIS学園生徒会長で簪の姉である更識楯無さんがロシア国家代表として、日本からは簪と箒が来ることになっているはずなんだけど、其方もまだついていない。

「隊長、お飲み物をどうぞ」

「うむ、すまないなクラリツサ。感謝する」

「いえ、それには及びません。」

「ご学友の方々も、よろしければ」

「頂きますわ」

「ありがと」

ラウラの部隊の副官だというクラリツサさんが取ってきてくれた水を飲みつつ、今後の展望に少しばかりの希望が持てた。

「しかし、本当に来るのでしょうか……?」

他国の部隊と違い、最後の増援として呼ばれた方々は詳細が不明ですし」

「まさかとは思うけど……臆病風に吹かれた、とか無いでしょうね?」

私がそうして、冗談交じりにぼやいた時だった。

「……交通渋滞という名の臆病風に吹かれて悪かったな」

後ろからかけられたその言葉に慌てて振り返ると、そこには――

「……影内?」

「そうだが。どうかしたか?」

――世界唯一の男性IS操縦者と言われる、学友が若干不機嫌そうな顔で立っていた。

S i d e 一夏

空港から降りた後に乗った車での移動中、臨時基地に着くまでの間

に交通渋滞に巻き込まれ予定よりも到着が遅れたが、それでも間に合
いはしていた。

着いた直後に僅かながらの一悶着があったが、それはこの際無視す
るとしよう。

「それでは、作戦会議を行います」

現地の司令官だという、フランス軍の男性が一番前に立って作戦会
議が始まった。

「まず、この映像を見てください」

最初に、会議室前の大型スクリーンにある映像が映し出された。

「旧来の小型偵察航空機で撮った、現地の様子です」

その映像には、見渡す限りを埋め尽くす幻神獣アビスが映し出されてい
た。

『……！』

その映像に、参加していた機竜ドラッグナイト使いの面々が表情を強張らせた。俺
もそれは例外ではなく、自分でも強い緊張を感じているのを自覚でき
るほど。

だが、周りのIS乗りたちの面々は驚きこそすれど、それ以上の物
はない。しかも、徐々に侮り始めているものさえいる始末だった。例
外と言えば、一度はその脅威を目にした凰とオルコット、軍人として
真摯な姿勢で臨んでいるボーデヴィツヒ、俺たちにとっての協力者で
ある更識会長と簪、劍崎、そして俺達にとって今回の一件の発端と
なったデュノア位なものだった。

「前回の作戦の際は、これらの生物の一団に囲まれた結果、フランスの
保有するISを含めた戦力がほぼ壊滅状態に陥りました。

これが、破壊された《ラファール・リヴァイブ》です」

そして、場面が切り替わり回収されたと思しきISが映し出され
た。それも、複数台分。

その損傷の状態は酷く、無事な部分を外見から探すのが困難なほ
どだった。それは俺たち以外もそうで、それまで緊張など感じていな
かったIS搭乗者がはつきりと体を強張らせているのがわかるほど
だった。

「I S コアは全機辛うじて無事でしたが、搭乗者の中には重症患者も出ています。」

以上のように、あの生物たちにはI S の防御能力を超えうる攻撃能力を持っていることが確認されています」

この映像を見せた後、会議室は一気に静まり返っていた。雰囲気は映像を見せられる前とは一変し、強い緊張に包まれていることがわかる。

「その生物だが、具体的にはどれくらいが確認されているんだ？」

その質問を出したのは、リーシャ様だった。

「確認されているだけでも、常時五百体以上はいます。」

また、その中にI S を倒した個体と同種と思われる個体が、常時五体は居ます」

司令官の男性が答え、其の司令官の指示に従い副官の男性が機材を操作し、その個体の映像を見せてくれた。

「その個体が、これです」

(……！ やはり、か)

映し出された個体は、紛れも無く幻神獣の内一種、それも中型の中でも危険性の高いと言われる《ディアボロス》だった。

(五百以上の数に、ディアボロスもか……)

流星に数が多すぎる上、脅威度の高い個体も確認されている。これは戦略的に極めて厄介な事態と言えた。

「また、その他の敵性生物も移動能力が高く個体数の多いものほど外周で行動し、我々が便宜的に『巣』と呼んでいるあれらの巣の付近にはより防御能力に特化した個体が確認されています」

再度映し出された場面には、数階建てのビルにも匹敵する大きさの超巨大な蟻塚のような形状の巣と、その付近を護衛していると思われる《ゴレム》と思われる幻神獣が確認できる。

(また厄介な奴がいるな……)

また、その上空には《ガーゴイル》と思われる個体も確認できる。

だが、その一連の映像を見ていて、これまでの機竜側での経験とはつきりと違う事実が確認できた。

(やはり、連携をとっている……それに、確かにこれまで見てきた幻神獣と思われる個体ばかりだが、微妙に違う気も……一体、何が……?)
総じて驚異的としか言えない光景だが、同時にこれまで見てきた幻神獣とは違う何かも見取れる。

だが、それでもやることには変わりない。

「敵側はある程度分かったわ。」

此方側の戦力はどうなっているのか、聞いてもいいかしら?」

クルルシフアーさんが特に表情を変えことなく、司令官に聞いていた。

「こちら側は、現在フランス国内に存在しているフランス軍の戦車と戦術航空機を最大限に、歩兵戦力も可能な限り。ISは、フランス国内では現在稼働可能な機体がデュノア特別中尉の《ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ》しかないが、各国からの応援により総合計で四十機余りのISが参加している」

「分かったわ。ありがとう」

苦々しさの混じった表情で答えた司令官に対して、クルルシフアーさんは表情を変えなかった。だけど、其の額に一筋の汗が見えたことから、内心が伺い知れた。

「味方戦力の配置と敵戦力の配置はどのようによ?」

次に聞いていたのはセリスティアさんだった。

「IS部隊を最前列に、その後ろに戦車を配置して援護する。戦車隊の周囲は歩兵が護衛する。戦闘機は基本的に爆撃の役割を担い、広域攻撃に徹する」

「IS部隊の編成は?」

「それについては、こちらをご覧ください」

司令官が答え、副官が機材を操作して地図の様な物を表示した。

そこには、範囲分けされた幾つかの枠の中に国名や地域名が書かれている。察するに、その範囲で指定された国々のISが戦闘するとのことなのだろう。

(……機体特性等々は無視か)

考えようによっては無理からぬことだったが、それでも若干、辟易

とする思いはあった。

今回、各国が主力として送り込んできたISはその多くが専用機か、それに近いところまでカスタマイズした量産機かのどちらかだった。当然、機体には一癖も二癖もある機体が少なくない。その分強力ではあるが、それらには明確な弱点がある場合が少なくない。

弱点を補いあえるような編成なら、それも気にならなかった。だが、国ごとに分かれてという編成でそれを期待できるかと聞かれると、微妙なところではないかという思いが強かった。

それを感じたのは俺だけではないようで、機竜側から来た機竜使いは僅かに眉根を寄せるなど、傍目には分かりづらいが変化が見れた。

「アタシ達の役割は？」

そんな中で、不機嫌そうな顔を隠そうともせず聞いたのはメルだった。

「基本的には広域での遊撃を、と考えています」

「……それだけ？」

「はい」

始まる前から疲れた表情になったメルに対し、思わず心の中で労いの言葉を唱えていた。

（総合的な戦力が前回を上回っているからなのか、それともIS関連の陣形や連携、運用理論が不十分だからなのだろうか……いくら何でも大雑把すぎる。しかも、周囲のIS部隊の面々もそれで納得している。

後で機竜使いの間での作戦会議だな、この流れは……）

心の中でそんなことを考えつつ、それ以後は特に進展の無い時間が続いた。

「ちよつと、質問いいかしら？」

その言葉を発したのは、アメリカから来たメンバーの内の一人であるナターシャ・ファイルスと名乗った人だった。アメリカ軍で中尉の階級を持つISのテスト操縦者らしい。

「何か？」

「なるべく多くの戦力が欲しい、というのは今までの説明でよく分

かったのだけど……代表候補生は分かるにしても、そこにいる人たちは？」

そうして、こちらの方を見てきた。言わんとする事は分かるが、ここに来てまでそれを言うのかとも思ったのは事実だった。

「彼らは、今作戦の主力を担っていたく予定の方々です」

現地司令官の言葉に、IS搭乗者の一部が怪訝な顔になった。

「^{アタシ達}国家代表よりも、か？」

そう言ったのは、アメリカの国家代表IS操縦者『イーリス・コーリング』だった。

確かに、今回来たメンバーの中で顔が知れているのは俺だけだし、俺も俺で世間一般ではあくまでIS学園に通う一学生程度でしかない。懸念も当然といえば当然の物だろう。

俺はそのことに対して特に何も思わなかったが、そうではない人も少なくなかった。

「一夏、アレを見せてやれ」

「いいのですか？」

「ああ、遠慮なく見せてやれ」

リーシャ様の考えは違ったみたいで、見せるように指示を出していた。他の人達を見渡しても、一様に頷いていることが見て取れる。

「では、失礼しまして」

一言断りを入れて、会議室の前に立った。

そのまま一振りの機攻殻剣ソイド・デバイスを抜くと、詠唱譜パスコードを唱える。

「——覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、へアスデイーグ」

あくまで目的がソレである事の証明であるため、右腕の部分召喚だけに止めておく。だが、これだけでも効果は十分なようだった。

「……!?」

「……マジ??」

「白い機体の噂は聞いていたけど……これは予想外ね」

《アスデイーグ》の右腕がそうであると認識した瞬間、方々から騒めき声が聞こえ始めた。喋っていない人もいるが、それはただ単に驚愕

して何も言葉を発していないだけであることが表情から読み取れた。だが、正体を話していなかったとはいえ、デユノアまで驚いているのはどうかと思った。

「既に察している方もおいでとは思いますが、

IS学園で化け物が現れた時、迎撃に出た白い機体。あの機体の名前は《アスディーク》で、搭乗者は俺です」

この一言で、大半以上のIS搭乗者は黙ることになった。

「影内、驚かせてくれたわね！」

「すまん」

「鈴さん、はしたないですよ。」

ですが、私も驚きましたわ」

「うむ。さすが師匠だなー」

「その任を了承した記憶は無い」

余り細かいところが決まらなかった作戦会議が一時中断した後、俺は嵐、オルコット、ボーデヴィツヒの三人に囲まれていた。

学園での何時もの面々と言えばそれまでだが、状況が状況なだけに不思議な気分になっていた。

（しかし……国家代表候補生とは言え、まだ学生である彼女たちまで出撃させるのか）

同時に、ある程度の軍事訓練を受けているとはいえ、それでも未だ学生の身である彼女たちを命懸けになる戦場に出撃させる。特に内一人は個人的な思いもあり、出来るのであれば出て欲しくは無い。（だが、いまさら言っても無意味か……）

思う所はあることは事実だが、今それを言う事はできない。実戦が避け得ないというのなら、闘って守り抜く。これだけが今できる事だろうと、そう決意を固めた時だった。

「ちよつといいっ？」

そうして声をかけてきたのは、非常に特徴的な外見の人物だった。

まず最初に目に入ったのは、腰まで届く赤髪のツインテール。服装は肩から胸元まで露出する程に着崩した着物に、ピンヒール。アンバランスこの上ないが、其れとは別な意味で目の行く部分があった。

(隻腕に、隻眼……)

右腕と右目が無い。ここに居る以上はIS搭乗者なのだろうが、それとは別にどこか既視感を感じていた。

「アリーシャ選手!？」

「ああ、知っている子もいるの」

「そ、それは当然ですよ！」

世界二位の方の名前を知らないなんて、そんな……」

「ですが、確か数年前の事故で現役は退かれたと聞き及んでいます……」

「だからこの作戦に行かされたんだろうが、ヒョッコ共が……」

話しかけてきた人物に対し、鈴とセシリアの反応は劇的だった。同時に、その会話からその正体が誰であるかもわかった。

(第二回モンド・グロツソの準優勝者か……)

数年前、自分が誘拐されることになった事件を思い出しそうになって記憶に蓋をした。今更どうと思う事も無いが、万が一何かを悟られでもしたら面倒この上ない事になりかねない。

「それで、お前が噂の男性操縦者か？」

「ええ。影内一夏と申します」

「IS学園での活躍と、白い機体……《アスディイグ》だったな。その噂はそれなりに聞いている。」

そう言う事で、後で一勝負してくれ。この作戦が終わった後位に「いろいろとツッコミどころ満載の要求が出されたが、相手が相手であることも考えて出来るだけ穏当に終わらせる方向で考えた。」

「……」一応言っておきますが、俺を含めた会社からのメンバー九人は日程の都合によりそう長くは滞在できません。

ですので、申し訳ありませんが」

「ああ、そういう事なら無理強いはいしねえ。」

邪魔したな」

それだけ言うと、踵を返して左手をひらひら振りながら帰って行ってしまった。

「もうそろそろ、会議が再開するぞ」

ボーデヴィツヒから声を掛けられ、席に座り直す。

其の後は、作戦会議の続きへと戻っていった。

Side 一夏

「結局……私たちの役割は、広域遊撃という事以外には決まらなかったか」

色々と問題の残った作戦会議が終わり、俺たちは翌日の作戦に向けて俺たちの待機用に割り当てられた部屋へと集まっていた。

「過ぎたことを言っても仕方ないわ。」

建設的なことを話し合いました」

「許可します。このままで行くのは、色々と危険であると判断します」

「……賛成」

「私も、賛成ですわ」

「さすがに、あれだけだとね……」

「雑だったわね」

「皆さん、早く始めましょう」

「ええ、作戦は明日です。」

十分な休養を取るためにも、話し合いを早く始めましょう」

危うく多少の愚痴も交えた雑談になりそうだったところを、俺とアイリさんが制止していた。その流れのまま、機竜使い同士の作戦会議の方へと移っていく。

「さて、まずは最初の迎撃の時の段階だが……」

「そこは任せなさい！」

自信満々でメルが宣言したが、さすがにそれだけでは終われない。

そもそも、ここで終わってしまったらこの作戦会議の意味がない。

「待ちなさい、メル。」

貴女の実力はよく知っているけど、長時間の戦闘にはまだ問題があったでしょう」

「だったら、どうするのよ」

クルルシフアーさんに嗜められて不満げな様子のメルを見て、ルクスさんが徐にクルルシフアーさんへと話しかけた。

「クルルシフアーさん。メルは援護に入ってくれないかな？」

「ええ。元々、そうするつもりだったしね」

ルクスさんの提案に、クルルシフアーさんは快く頷いていた。

「では、メルが先陣を切り、クルルシフアーがその援護を行うという事で一角はいいでしょう。」

ですが、この範囲です。もう二組、同様の形を構築しておくべきではないでしょうか？」

クルルシフアーさんの提案をさらに発展させる形で、セリスティアさんが提案を上乗せしていた。

「それだと二人残る形になるが、その二人はどうする気だ？」

「それは、機動性の高い飛翔型機竜を持っているルクスと一夏にお願いしようと考えています。役割は、押されている場所の支援を主に、広域を飛んでもらう形に。」

ルクスは戦局を見渡せる観察力を持っていますし、一夏は普段からこの手の事に慣れてるので、お願いしたいのですが」

リーシャ様からの疑問の声に、セリスティアさんは淀み無く答えていた。答えを聞いたリーシャ様も頷きつつ、ルクスさんと俺の方へと顔を向けた。

「どの事だが。ルクス、一夏、大丈夫そうか」

「はい、問題ありませんよ」

「委細承知いたしました。お任せを」

ルクスさんと俺の方も、その役割を拒否する理由は無かった。すぐに返事をし、その役割を熟す事を決定する。

「では、残りの組み合わせだが……」

「それは、僕の方からいいですか？」

「ああ、内容は？」

「リーシャ様と夜架、セリス先輩とフィーちゃんです」

ルクスさんが考えていた組み合わせの内容を聞き、リーシャ様が少し考え込んだ。

だが、リーシャ様よりも早く、セリスティアさんが聞き返していた。「理由を教えてくださいませんか？」

「はい。」

まず、リーシャ様と夜架は、今回の作戦で相手する敵の物量が膨大になるためです。リーシャ様は広域攻撃ができますから、夜架の《夜刀ノ神》の索敵能力との組み合わせは効果的ではないかと考えました。

セリス先輩とフィーちゃんは、性能的に相性がいいのではと考えたためです。普段はセリス先輩に攻撃の主軸を務めてもらいつつ、いざとなったらフィーちゃんに前に出てもらって一時的な時間稼ぎや攻撃をしてもらう。そうすれば、互いの消耗を抑えながら戦えるのではないかと思っただけです」

ルクスさんの考えに、セリスティアさんも少し考えた後に同意を示してくれた。リーシャ様も同様だったらしい。

「そういう事なら、私はいい。」

やれるな、夜架」

「ええ。主様の御下命とあらば、容易い事ですわ」

「フィールフィ、よろしくお願いします」

「うん。よろしく」

それぞれが自分の担当を確認し、組むことになる相手へと声をかけていた。

「では、最後に行われると予想される『巣』の内部探索についてだが……」

一通りの確認が終わり、今度はまた別な内容への確認へと入った。

「それも、いいですか？」

「ああ、いいぞ」

「僕とフィーちゃん、夜架の三名を考えています。」

夜架の索敵能力は『巣』の内部構造を把握するのに役立ちますし、

フィーちゃんの《テュポーン》の重装甲と格闘能力は空間が限定されていることが予想される『巢』内部で戦闘が起こったときに有効かと思っただけです。僕が行くのは、内部に広い空間があった時の戦闘のためです」

事実上の進行役となっていたリーシャ様の確認に、ルクスさんが答えを返した。

「そうだな……確かに、空間が限定されているのであればその組み合わせが効果的か。」

二人とも、いいか？」

「問題ありませんわ」

「大丈夫、だよ」

再度の確認にも、一切動じることなく二人とも答えていた。「さて。」

後は、巢の内部を突いた後に何が出てくるか、だな……」

「普通の蟻の巣なら、女王がいるものですがね」

リーシャ様のつぶやきに、アイリさんが重ねるように言った。

「あの巣の主となると、どれほどになるのか……」

「終焉神獣^{ラグナレク}クラスの敵は居ないと思いたいわね……」

「ですが、最悪の場合として、想定はしておくべきかと」

「何が出てこようが、敵なら倒すわよ。私が」

最後の最後、何処かいつもの調子にも戻り始めた面々を見て、アイリさんと顔を見合わせた。

「……結局、最後はこうなるんですね」

「ま、無駄に緊張するよりはいいでしょう。」

とは言え、細かい部分がまだ残っているかと思うのですが」

「そうですね、では……」

この後、多少声を張り上げて再び会議に戻しつつ、その後の内容の確認や決定を行っていった。

S i d e アイリ

明るる日、対幻神獣殲滅作戦の決行当日となりました。

私は基地で待機しつつ、いざという時のために手渡された《ドレイク》の機攻殻剣を腰に差しています。私は基地で待機しての連絡係兼記録係ですが、いざという時は《ドレイク》で自分の身を守るように言われています。蟻型が地中を移動できるという情報があつた以上は、警戒しなければならなかつたからです。

「では、行つてきますね」

「行つてきます」

作戦の先陣を切つたのは、セリスさんとフィルフィさんでした。

「――降臨せよ、為政者の血を継ぎし王族の竜。百雷を纏いて天を舞え、へリンドヴルム」

「――始動せよ。星砕き果て穿つ神殺しの巨竜。百頭の牙放ち全能を殺せ、へテュポーン」

二人が詠唱符を唱え、所定の位置へと移動していきます。

「次は私たちが行かせてもらうか。」

夜架、いいな?」

「ええ、勿論ですわ」

その次は、リーシャ様と夜架さんです。

「――目覚めろ、開闢の祖。一個にて軍を成す神々の王竜よ、へテイアマト」

「――侵食せよ、凶兆の化身たる塵殺の蛇竜。まつろわぬ神の威を振るえ、へ夜刀ノ神」

二人も機竜の接続を完了させ、同じように所定の待機位置へと移動していきます。

「行くわよ、クルルシファアー!」

「あんまり慌てないで」

三組目は、クルルシファアーさんとギザルト卿でした。

「――転生せよ。財貨に囚われし災いの巨竜。遍く欲望の対価となれ、へファフニール」

「――相食む二対の穢れ、身に纏いて甦れ。天壤覆滅せし争いの竜よ、

〈ドライグ・グワイバー〉

二人も機竜を展開し、飛翔していきます。

「一夏、僕たちも待機位置に行こうか」

「委細了解しました」

最後は、兄さんと一夏です。

「――顕現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜。黒雲の天を断て、へバハムート」

「――覚醒せよ、血毒宿す白蛇の竜。其の怨敵を喰らい尽くせ、へアスデイグ」

二人も飛翔していき、待機位置へと移動していきます。

私はその光景を見送りながら、作戦の成功を祈っていました。

――これが、長い一日の始まりでした。

第五章（3）：『巢』 攻略戦、前編

S i d e セシリア

『作戦開始！』

通信越しに、作戦開始の合図が送られました。それと同時に、空中から爆弾やミサイルによる爆撃があつた。あの化け物や『巢』^{ネスト}へと降り注ぎます。

ですが、その多くは化け物の放つた攻撃によって撃ち落とされました。さらに、爆撃を契機として地上や空中に待機していた化け物たちが一斉に動き出し襲いかかってきました。

それに合わせ、戦車隊も砲撃を開始しました。大量の砲弾が発射されましたが、それも数がある程度削るのが関の山で後から後から湧いて出るように化け物が襲い掛かってきます。

『I S部隊、直近の敵を攻撃してください。』

歩兵は戦車に近づいた敵の撃破と、I S部隊の援護を』

通信が入り、私たちの攻撃が始まりました。

それぞれの国家ごとに分けられた部隊が、突出してきた一部の化け物と正面からぶつかりました。さらに、その後方からはI Sの銃火器による射撃と、歩兵の操る火器による攻撃が開始されています。

ですが、それでも圧倒的な物量差が覆せていませんでした。倒した敵の死骸を踏みつぶしながら、後続の敵が迫ってきます。

『各機、一旦空中に飛んで攻撃を！』

私を含む、この区域のI S部隊の隊長を務める『イーリス・コーリング選手』から指示が出されました。

迫りくる壁の様にさえ見える化け物の大群を相手に、私たちも上空に飛び上がりつつ呵責無い攻撃を浴びせ続けます。ですが、それでも一匹を倒す間に五匹ほどが迫ってきているような状況に、徐々に余裕が無くなりつつあります。

『リーシャ様、あちらに纏まっていますわよ』

『ああ、そうだな。』

では、まずは一発と行くか！』

そんな状況であるにも関わらず、むしろ不敵な声と一切の緊張感を感じさせない声が聞こえてきました。

『《七つの竜頭》！』

叫び声が木霊した直後、朱い閃光が視界を埋め尽くしました。

やがて、閃光が止んだ後には、何も残されていませんでした。

「……何の、冗談ですか？」

余りにも馬鹿げた威力を目の当たりにし、一瞬、場違いなほど呆けてしまいました。

『何を呆けている。』

次が来るぞ！』

再び、あの朱い閃光を放った朱色の機体から通信が入り、私たちは我に返りました。

再度それぞれの得物を構え、再び迫りくる化け物へとその照準を向けます。そのまま、再度の呵責ない攻撃が浴びせられて行きますが、やはり止めきれずにそのまま後ろへと突破されています。

「……戦車隊、歩兵隊！」

「戦線を抜かせるな！」

押し返せー！」

地上の後方で敵を迎撃していた戦車隊と歩兵隊が、突出した敵へと攻撃を仕掛けています。

ですが、それでも全ては押し返せず、突破を許しています。さらに、空中からも敵が迫っており、私たちは其方の敵にも攻撃して押し返さねばなりません。しかし、それは必然的に地上への援護が薄くなることを示しており、僅かに躊躇を覚えました。

『あら、でしたら私がお相手してさしあげましょうか？』

ですが、その瞬間。細いワイヤーの様な物に、地上の敵の一部が切り裂かれました。

「……!?!」

『呆けている場合ではありませんわよ。』

リーシャ様、空はお願いしても？』

『この状況では仕方ないしな。』

地上の方は任せたぞ』

『ええ。お任せ下さい』

地上にいる黒い機体がいつの間にか敷設した細いワイヤーが、敵を切り裂いたみたいでした。

さらに、広域に敷設したそれがあの敵の進路を阻害し、進行速度を遅くしています。それは、一部を除いて遠距離攻撃能力に乏しい敵が必然的に迂回しています。ですが、その先にはあの黒い機体がいま

す。
黒い機体が自身の方へと誘導された敵を、絶え間ない斬撃をもつて出迎えていました。その一撃で寸断される敵の死骸を一顧だにすることなく次から次へと切り裂いていく姿は、一種の畏怖さえ覚えるほどの物でした。

さらに空中から接近してきた飛行能力を持つ個体は、いつの間にか飛んできた何かによって直線上へと押し出された後、再度撃ち放たれたあの朱色の閃光が跡形も無く焼き尽くしていました。

「い、今のは……」

『私の特種装備の一つで、《空挺要塞》。』

簡単に言えば、私の指示を受けて自己推進する鏃型の投擲装備だ』
「……射撃機能が付けば、完全にイギリスの《ブルー・ティアーズ》の上位互換ですわね。

性能面ではそちらの方が上そうですし」

『そういう話は是非とも後でじっくりとしたいが……今は、目の前の敵だ！』

その言葉の直後、地上と空中、双方で敵が倒されていきました。

その行動に私たちも触発され、再度、攻撃が再開されます。戦車隊と歩兵隊もそれは同様で、敵の集中している場所へと、或いは孤立した敵へと攻撃を仕掛けていきます。

孤立した敵への集中砲火で僅かなながらも数を減らすと同時に、戦力の中核を為す二機に出来る限り敵の多い方へと向いていてもらいうためです。

『一夏。』

私たちの方から見て右方向へと抜けていった敵がいるが、処理を頼めるか?』

『委細了解いたしました。お任せを』

その通信が聞こえてくると同時に、深く暗い青の光を従えながら、一夏さんの駆るあの白い機体《アステイグ》が右手に飛んでいた化け物を一太刀の元に寸断すると、そのまま私たちの方へといったん近づいてきました。

「この中で、エネルギー系の装備を持っている人は?」

「……一夏さん、もしや」

「ああ。」

《アステイグ》の単一使用能力《消滅毒》アナイアレイト・ヴェノムはエネルギーを変性させ、触れた敵を消滅させる能力を持っている。そして、正体を明かす前にオルコットには一度やったことがあるが、《消滅毒》はエネルギー系の装備に限り、他者にもその能力を適用できる。射程の低下は招くが、それでも今の状況なら使うべきかと思っただけ

その言葉に、私とともに戦っていたIS搭乗者たちのうち何人かが騒めきました。

「一夏さん、いつかと同様に」

「ああ」

迷うことなく、私の《ブルー・ティアーズ》の装備に適用してもらいました。

一発限りですけれど、一撃で撃破できる強みは計り知れません。その意味でいえば、迷うことなど何もありませんでした。

「それ、私にもいいかしら?」

そう言ってきたのは、アメリカのIS搭乗者であるナターシャ・ファイルス中尉でした。

「私のIS、《銀の福音》シルバリオ・ゴスペルには多連装のエネルギー弾を撃てる《銀の鐘》シルバー・ベルがあるわ。」

相性はいいと思うわよ?」

「同意します。」

適用するにはその装備に直接触れる必要がありますので、こちら

に」

「分かったわ」

その言葉を発すると同時に、ファイルス中尉は背部の羽根型のスラスト・ユニットを前の方へと向けました。

その行動を受けて、一夏さんも私とナターシャさんそれぞれの得物に《アステイグ》の腕が触れました。その瞬間、何時かのときと同じように弾丸を構成するエネルギーが変性し、多くの計測器でエラーコードが表示されます。

それは、隣でともその能力を適用してもらっていたファイルス中尉も同じでしたが、彼女の場合は初めての事だったためでしょうか、些か慌てている様子にも見受けられます。

「一応説明しておきますが、その能力は確かに一撃で相手を消滅させることを可能にします。

ですが、それは基底出力に依存して効力が変わるうえ、能力の性質上、射程距離がおよそ三分の一になります。ですので、十分に引き付けてから攻撃すべきかと」

「了解したわ」

ですが、一度説明が入ったおかげで落ち着いたのででしょうか。すぐに平静を取り戻すと、冷静にその一撃を使うべきタイミングを計っているようでした。

「必要でしたらもう一度、付加しに来ます。

ですので、あまり気負わずに」

まるで場違いなくらいの気遣いの籠った声でそれだけ告げると、一夏さんはすぐに別な方を向いてしまいました。

「リーシャ様、そちらには?」

「両方に頼む」

其の後、朱色の機体の付近まで近づくとそのまま二三言葉を交わし、そのまま《七つの竜頭》と《空挺要塞》という装備両方へと《消滅毒》を適用していきました。

さらに、それだけには終わりません。

「夜架さんは?」

「お願いしますわ」

さらに、いったん地上の方まで降りると今度はあの黒い機体へと《消滅毒》を使用していました。

空中の朱色の機体の《七つの竜頭》と《空挺要塞》、さらに地上の黒い機体の大剣がそれぞれ不気味な白い発光を蓄え、敵へと襲い掛かっていきます。

朱色の機体は複数の《空挺要塞》で一体を狙いつつ確実に減らし、その効果が薄くなってきたと見ると即座に《七つの竜頭》を撃ち放ちました。しかも、その射線へと《空挺要塞》を使って敵を押し出していきます。そのまま、押し出された敵が文字通り消滅しました。

一方、地上の黒い機体はそれまであまり手を出さなかった大型の敵へと肉薄するとそのまま異常なほどの速度を持つ剣戟で敵を寸断していました。速度を重視したのだろうその一閃は、しかし付加された《消滅毒》の効果がいかになく発揮されており、全く問題のない威力となっています。

一夏さん自身も分断される形になった敵の小集団へと肉薄し、その手に持つ二刀の大剣を振るっています。何の問題も無く極短時間で殲滅すると、別な場所へと飛び去って行きました。

「呆けている場合じゃねえぞ！

各機、攻撃！」

コーリング選手からの怒声に、皆が一斉に攻撃を開始しました。

「イギリスの！

あの黒いのを狙えるか!？」

「黒いの……」

言われ、指定された先を見ます。

そこには、黒い翼人の様な体躯を持つ敵が飛んでいます。数は、三。

(私に付与された《消滅毒》は合計で五発)

二発は外せるとみるか、二発しか外せないとみるか……)

正解としては、後者でしょう。

(命が掛かると、ここまで違うものですか……)

引き金を引く指が震えそうになり、両肩に重い何かのしかかって

いるようにも感じます。この作戦が始まってからずっとそうでしたが、目の前で行われた凄まじい一言に尽きる戦闘にその感覚を一時の間、失っていたみたいです。

しかし、再度《スターライトMk-III》引き金に指をかけたことでその緊張が蘇ってきました。

「……当たり前ささい！」

最初に《スターライトMk-III》による射撃。通常時の射程の三分の一より少し短い程度の位置で撃った其の弾丸は、確かにあの黒い翼人へと直撃した。

ですが、それを見た他の二体が不規則にその軌道を揺らしながらの飛行へと変更しました。

（小賢しい真似を！）

狙撃手が相手するには微妙に嫌な機動に、少し身構えました。

ですが、私の手持ちはレーザータイプの《ブルー・ティアーズ》の四機。故に、四機とも飛ばして片方を包囲するように動かします。

「……そこですわ！」

一発目の射撃を回避した翼人の背後にもう一機を待機させての、背後からの射撃。

一発は外しましたが、それでも二発目で確かに撃破しました。

（残り一体！）

先程と同じ戦術で、そう考えかけて一瞬迷いました。

あの敵は先程、私の狙撃に対して一回で対応策をとってきました。つまりはある程度の知性があり、こちらの攻撃に対する対抗策を練ることが可能であるという事です。

（先程と同じでは、回避されるかもしれない……ですが、なら……）

どうすべきか、そう考えた時でした。

ヒュッ！ ドンッ！

空気を切り裂きながら飛翔した朱色の物体が、あの翼人へと激突しました。翼人へと与えた衝撃は凄まじく、あの翼人は一気に体勢を崩していました。

『今だ！』

その声の主は、あの朱色の機体を操っている方からでした。どうやら、《空挺要塞》というのを一機、ぶつけてもらえたようです。

無論、この絶好の機会を逃す気などありません。残る二機の《ブルー・ティアーズ》で間髪入れずに撃ち抜きました。

『貸しにしておくれ』

朱色の機体の主がそれだけ言うと、そのまま前へと向き直りました。そのままそれまでと同じように戦闘を続行しています。

(何と言う、空間把握能力……！)

私も特性の面で似通った武器を使うのでわかりませんが、あの手の武器を使うには周辺の空間のどこに何があるのか、それを詳細に把握する必要があります。いくらハイパーセンサーの恩恵があるとは言っても、それは簡単な事ではありません。

にも関わらず、あの朱色の機体はそれを事も無げに自分が意識すべき空間以外にも気を配り、最適なタイミングで《空挺要塞》の一機を突撃させた。それも、あの速度からして一切の躊躇も無く。

「ナタル、行け！」

「ええ！」

私が朱色の機体の性能と搭乗者の腕前に戦慄を覚えた直後、ファイルス中尉の《シルバリオ・ゴスペル》が敵陣の上空へと突出しました。

『Fire!』

ファイルス中尉の叫び声が通信機越しに聞こえた瞬間、《シルバリオ・ゴスペル》の真下へと大量のエネルギー弾が放たれました。さながらエネルギー弾による一人爆撃とも言えるその様は、見ていて圧倒されます。そして、《消滅毒》も付与されたうえで放たれたその大量のエネルギー弾は、直撃した眼下の敵を文字通り消し去っています。

「敵陣に穴が開いた！」

「一気に畳みかけるぞ！」

『戦車隊、歩兵隊前進！』

敵を押し返せ！」

この機を逃すつもりの方はここには居ません。

防戦から一転、攻勢へと出ました。

S i d e ラウラ

「各機、各々の判断で砲撃開始。」

ただし、突出した敵を優先して攻撃、一体たりとも通すな！」

「了解！」

シュヴァルツェ・ハーゼ

黒 兎 隊の参加者全員からの返事が木霊し、レールカノンによる砲撃が開始される。

着弾すれば高威力も手伝いそれなりの傷を負わせられるが、致命傷に至る者は少なく、その多くが傷つきつつも接近してきている。

「各機、近接戦に備えろ！」

号令を出し、接近戦に備えさせる。小隊各員もそれぞれの得物を用意しつつ、接近され切る前に少しでも削るために砲撃を続けていく。

ドゴンツ！

「……!?」

「近いのと、集まっているのは大丈夫……」

「ですので、孤立している敵や遠方への敵の削りをお願いしても？」

あれだけ接近されたにも関わらず全く動揺せずに、そして呆気ないほど簡単に倒したにも関わらず油断なく構え直すと、地上と空の両方でそれぞれが戦いだした。

「総員、聞いていたな？」

孤立した敵を各個撃破。遠慮はいらないぞ！」

「了解！」

黒兎隊への指示を変更し、自身もレールカノンによる砲撃を再開する。その狙いは主に孤立した敵で、集中砲火することで着実に数を減らしていく。

一方、増援メンバーとして来てもらった二人はと言えば、凄まじいの一言に尽きた。

「《竜咬縛鎖》」

地上の方は強靱なワイヤーアンカーのような装備を振り回して敵

を捕捉したり、或いは直接攻撃したりしていた。そして、自身の至近距離まで迫られたときに繰り出したのは、ただの拳打。だが、その威力は馬鹿げてるものがあり、木っ端か何かのように蟻型を始めとした地上の敵を吹き飛ばし、粉碎していく。

「雷閃」

空中の方は何をしているかもわからないものがあり、凄まじい勢いと精緻さで突撃槍を振るい、時折その先端から電撃と思しきそれを放っている。離れていようが近かろうが関係ないと言わんばかりの強さだが、それさえも序の口

『支配者の神域』
ディバイン・ゲート

まるで瞬間移動のように敵の背後を一瞬でとると、そのまま突撃槍の一突きで葬っていた。さらに、振り向きざまの雷撃でもう一体、倒している。

(……師匠影内があのような言い方をしていたのも納得だな。

圧倒的過ぎるぞ、コレは……！)

敵である化け物共もあの二機がこの場における最も大きな脅威であると分かっているのか、集中的に狙うようになってきている。だが、そうして敵が集中したところを、或いはその中に入っていない小集団を狙えばいいだけである此方からしてみれば狙うべき標的が集中しているのは一網打尽にしやすいとも言えた。

間もなく、歩兵隊と戦車隊からも砲火が放たれる。外しようがないほど分かり易い狙いがある状況で、その火力は十分に生きていた。

(だが、この布陣ではあの二機に負担が集中する……早急に打開策を取らなければ……)

私がすこしの焦りを覚えだした、その時だった。

『援護、入ります』

通信機から聞こえた、もう一人の声。その直後に見えた、黒い機影。紅く光るラインが刻まれた、美しいとさえ感じるほどの漆黒を纏う機体だった。それが敵へと隣接すると、流れるような動作で敵が寸断されていく。

『永久連環』
エンドアクション

それは一度に止まらず、何度も続いていく絶え間ない攻撃が敵を次々と葬っていった。片時も休むことのない攻撃の嵐は、時として敵の攻撃をも切り裂いてすらいる。

(……凄まじい。これでは、まるで……!)

影内と比較してなお冴えわたる剣技を前に、嘗て師事した世界最強織斑教官の事を思い出した。だが、それは同等とすら思えるものを見たからではない。

(まるで……織斑教官ですら、越えているようではないか……!!)

「さすがですね、ルクス。」

私も負けていられません！」

「私も、頑張る……!」

あの漆黒の機体に触発されたのか、近くで闘っていた二人の動きが先程にも増して良くなってきていた。ただでさえ戦力としてあまりにも大きく水を空けられている状況で尚、さらなる強さを見せてつけられている状況は、私の想像のはるか上を容易にいくものだった。

(だが……今は、素直に追いつきたいと思える。

そのためにも、この作戦を生き勝ち抜き、隊員たちと研磨し、師匠影内に師事しなければ!)

私が内心で決意を新たにしている中、敵の一陣の大部分を片付けたあの二人は支援に来た漆黒の機体と何かを話していた。

『僕が後続を削っておきますので、二人は無理しないでくださいね』

「それは貴方にも言える事ですよ、ルクス」

「うん。これ位なら、大丈夫」

あれだけ倒してなお止まらないのかと恐怖にも近い感情を抱いたが、其れとは別な

「……! 隊長、右前方より突出してくる敵が!」

「問題ない。」

シャルロット!」

『了解!』

その中、砲撃とあの二機を回り込むことで回避したのだろう敵がこちらへと迫ってきていた。

だが、その位置には既にフォローに回ってくれる機体がいる。

ガガガガガ!

けたたましく実弾の発射音が鳴り響いた。

「トドメー!」

ドンツ!

最後の一撃にパイルバンカーを突き刺し、敵を沈黙させた。

私たちとは違い、日本に入国する前は特別中尉という立場で、この戦場で戦っていたらしかた。安定性と武装運用能力の高いラファールを、そのまま至近距離で大量の弾丸を当てるための装備として運用していたらしい。

「各機、警戒態勢を維持しつつ前線を押し上げる。

進め!」

「了解!」

周辺の敵が粗方一掃されたのを確認し、前線を押し上げていく。

ここからが、本格的な攻勢だ。

Side 鈴音

「……馬鹿馬鹿しいくらい強いわね」

いま、目の前で戦っている白と赤の機体を見ながら、私自身も戦っているにも関わらずそんな感想を抱かずにはいられなかった。

「さあ……ドンドン来なさいよ……!」

小柄な体格に全く似合っていない凶悪な表情から好戦的なセリフを吐きながら、大量の敵を相手にむしろ前に出てひたすらに死骸の山を築いていた。

それも、ただ機体の性能による前進ではない事は見ててよく分かった。ある敵には一度加速をつけて斧槍を豪快に叩き付けつつ、次の瞬間には石突の方でやたら硬い毛で覆われた敵を相手に突いて発火させる、それで丸裸になった敵の何体かを再度切り捨てている。

「《ドライブ・グウィバー》、フライング・モード飛翔形態」

それが終わるや否や、蟻型の一体を踏み台にして飛び上がると機体を変形させて敵が密集した位置の上空へと態々飛び上がった。先程とは単純に外観の違いがあり、先程のは陸戦に特化した形態、今度のは空戦に特化した形態なのだと推測できる。

「グランドバスター地砕角弾」

瞬間、下方へと何かが発射された直後、爆発が起こった。その威力は馬鹿げているの一言に尽きるものがあり、下方の敵をほぼすべて消し炭に変えている。

なのに、まだ止まらない。そのまま飛んでいくと、今度は数体ほどの学園にも出現した奴らの前に出て一閃。灼熱を纏って振るわれたそれは、あの化け物の羽を見事に焼き尽くしていた。

だけど、その直後。真後ろから黒い化け物が襲い掛かっていた。

「ツッ」

一緒に戦っていた簪が咄嗟にミサイルの照準を付けたけど、結論から言えばミサイルが撃たれる事は無かった。

ビシュ！

一条の閃光が黒い化け物の頸に突き刺さると、着弾点を中心に凍り付かせた。そのまま動きを止めた化け物へと、紅白の機体が振るった斧槍によるトドメの一撃が突き刺さる。

『メル、あんまり前に出ないで頂戴。』

孤立しかねないわよ?』

「そういうのをフォローするのが補佐官の仕事じゃないの?」

メルと呼ばれた紅白の機体の搭乗者は、窘められた事を意に介してないかのように再度敵のど真ん中へと突撃していく。

『だからと言って、無闇矢鱈と前に出られても困るわ。』

もう年も年なんだから、自重も覚えて』

「別にいいじゃない。後ろにはクルルシファーが居るし、前に行っても一夏親友がフォローしてくれるし。」

それに、私はあいつらを殺さずにはいられないし」

『だから、それは問題なのよ。』

それに一夏に無理をさせないで。あの子もあの子で問題が無いわ

けではないのだから』

あまりにも気楽な会話とは裏腹に、その攻撃は苛烈だった。

紅白の機体が積極的に前に出て敵を葬り去っていく。半面、先程の長距離射撃をこなした薄い水色の装甲を持つ機体は相変らず長距離射撃を主体とした戦術をとり続け、的確に敵を狙撃し続けている。

(なんて命中率よ……)

一時期のタッグトーナメントでセシリアと組んでいて教えてもらった事だけど、この距離での射撃なんてそうそう当たるもんじゃない。それをさも当然の様に直撃させるのだから、彼女の狙撃の腕前は異常としか言えないものがある。

しかも、それで孤立した敵の撃破から集団の足止め、突出した紅白の機体のフォロワーまで、狙撃役がこなすべき役割がそれ以上の事をほぼ完璧ではないかと思えるほどにこなしていた。

「鈴、感心するのはいいが手は止めるなよ!」

「いつ私が手を止めたつてのよ、箒!」

私が増援としてきた二人の動きに戦慄にも近い感情を覚えている横から、箒の注意が飛んできた。

私と箒は機体特性上、前衛以外の役割をこなすのが極端に困難だったためにこの配置になっていた。中衛に簪と楯無さんが、後衛として戦車隊と歩兵隊という構図になっている。

私としては別段、手を抜いていたつもりは無い。けれど、箒にはそうと取られてしまったらしかった。

「二人とも、《山嵐》撃ち込むから下がって!」

簪からの呼びかけに、反射的に二人とも一旦下がる。その少し後に、大量のミサイルが撃ち込まれていた。だけど、数体残ってしまった。

倒そうとしてすぐに踏み込まうとした直後――

「《清き熱情》」

――楯無さんの《清き熱情》が炸裂していた。それも、わざわざ《山

嵐》やそれ以前の格闘で開けられた傷口を狙って。

これで数体は倒せたけど、楯無さんを含めた四人の今までの撃墜数

が増援二人のうち片方の半数にも満たない事には不甲斐無さしかなかったけど。

「三人とも、あの二人に遅れないようについていくわよ。

ドンドン前線を押し上げて行っているしね」

この場のISチームのリーダーでもある楯無さんからの号令がかり、私たちも前に出ていく。

ここからは、私たちが少しずつ押し込んでいく番だった。

第五章（4）：『巢』 攻略戦、中編

Side 一夏

（今のところは、順調か……）

幻神獣^{アピス}の殲滅作戦の最中、周辺の確認をしながらそう考えた。

現在、三方面から幻神獣の『巢』^{ネスト}へと侵攻しているが、まだ特に大きな問題は起こっていない。幻神獣の総数は圧倒的の一言に尽きるが、それも大雑把な削りを機竜側と戦車や歩兵で、細かい部分をISに行ってもらう事でなんとか優位に進めている。

心配な点と言えば、ただでさえ消耗の激しい神装機竜でこのペースのまま戦闘を継続して、果たして持つのかという事だが。

（……ま、俺が心配する事そのものが烏澁がましいか。

あの人たちに比べれば、共に戦えている事が光栄なレベルだし。それに……）

考えた最後の部分に、自分の中で否定の意を示した。

（いや、アレは使用禁止になっているしな。

それに、下手をすれば自爆にしなければならない以上、安直に使用を考えるのは避けるべきか）

愚考ともいえる思考を早々に切り上げ、戦闘へと集中していく。

ルクスさんと俺の役割は、基本的には押されている味方の支援。だが、今現在は特に苦戦している場面も見られないため、主に分裂した小集団へと攻撃を仕掛け、部隊の背後への回り込みなどを阻止する役割を担っていた。

（今のまま、特に何事も無く作戦が終わってくればいいが……）

どこことなく何処かで何かが起こる予感を覚えつつ、部隊の進行の支援をこなしていった。

Side ルクス

（今のところは順調、かな……）

周辺の状況を一通り確認し、状況を整理していた。

(だけど、厳しくなっていくのはここからかな)

『^{ネスト}巢』の周辺にいる敵を見ながら、そう考えた。

そこにいるのは、双頭の幻神獣であるオルトロスを筆頭に、巨躯の幻神獣であるゴーレムが直近を守っている。空中にはガーゴイルとディアボロスの二種によって構成された直近部隊とも言うべき群れが存在している。

(それに……以前からの報告にもあったけど、やっぱり複数種で連携して行動している)

これまでとはハッキリと違うと言える幻神獣の行動を前に、戸惑いもあった。

今までの経験で言えば、複数種の幻神獣が連携を取ったのは誰かが角笛を吹いている時か、一部の終焉神獣^{ラグナレク}が居た時くらいだった。

だけど、ここにはそれにあたる存在がいない。角笛を吹く人も、少なくとも今は終焉神獣のような存在もない。

(音が聞こえてこないって言う事は、多分、角笛じゃない。そもそもこんな広域に音を響かせられる笛なんてないはず。

となれば……)

今までの経験を無理に当て嵌めるのであれば、今回は終焉神獣がいる可能性が高い。だが、そもそも終焉神獣は遺跡^{ルイン}に一体ずつしかいない存在であり、つい最近できたことが確認されているこの巨大な蟻塚のような^{ネスト}巢でそのような存在がいるかどうかは分からない。

『普通の蟻の巢なら、女王がいるものですがね』

作戦会議の時のアイリの台詞が思い浮かんだ。

(あるいは、本当に……)

そこまで考えて、思考を一旦切り替えた。

目の前の、新たな幻神獣の群れに接近してきたから。

(凄い……)

圧倒的な戦力。それしか言葉が見つからなかった。

前回の、僕自身は参加できなかった作戦の時は通常戦力やフランス最高峰と呼べるIS操縦者の一団が機体ごと撃墜されるという散々な結果に終わっていただけに、そして、それ以後の僕も参加した侵攻阻止を目的とした緒戦でも苦戦続きで徐々に戦線を押されていただけに、今回の順調ぶりは目を見張るものがあつた。

(もう……別次元の強さにはか思えないよ……)

私も決して、倒していない、というわけではない。けど、余りにもその数がかげ離れていた。私とラウラの率いる黒^{シュヴァルツェ・ハーゼ}兎隊も、着実にではあるけど倒している。

けれど、今この場で戦っている二機も、影内君の駆る《アステイグ》も、現実離れしているとさえ言えるほどの力を見せつけているだけに、自信なんて欠片も持てなかった。

(でも……これだけの実力者と高性能機があれば、今度こそは……) ある種の戦慄を覚えつつも、同時に作戦の成功への強い手ごたえを感じていた。

現に、もう少しで『巢』に到達できそうなところまで詰めている。

「シャルロット、気を抜くな！」

ラウラからの掛け声に、もう一度気を引き締めた。

僅かな時間の後に突出してきた敵へと再び多量の弾丸を叩き込み、バンカーで止めという一連の流れでなんとか倒していく。

(この前も、ほとんど同じ戦術で何体か倒したけど……全然、弾数が足らなかった。

なのに、今回はむしろ余裕がある)

残弾数も確認し、まだ戦えることを確認する。

確かに今回の作戦の要は影内君たちの駆る八機だけど、だからと言つて何もせずに手を拱いているというのはあり得ない。

「せめて、最後まで……！」

そう決意した時、戦況がさらに動いた。

『最前線の部隊が、『巢』の付近へと到達。

未確認生物の直近部隊と交戦に入ります』

「いよいよ、あの巨大で忌ま忌ましい場所への足がかりが手に入るかもしれない。」

「逸る気持ちを抑え、僕も自身の役割に徹した。それが、フランスを取り戻す最善の手段だと信じて。」

S i d e 一夏

『一夏、こつちの方に来れる?』

「委細了解しました。少々お待ちください」

ルクスさんから竜声による通信が入り、その内容を確認して、ルクスさんのいる位置まで移動を開始する。幸い何とか目視できる範囲だが、IS部隊付近で小集団の殲滅を中心としていた自分と違ってルクスさんは最前面付近で戦っていたらしく、俺よりも幾分前にいるように見えた。

道中で接敵した場合は容赦なく切り裂き消滅させながらその位置まで前進し、ルクスさんと合流する。

「只今到着しました」

ルクスさんと合流し、顔を見合わせる。それも僅かな間の事で、直ぐに本題に入りだした。

「今から、『巢』の付近を守っている四種の化け物を殲滅する。」

一夏、付き合ってくれるかな?」

「お任せを」

一切の躊躇い無く頷いた。四種とは、地上のオルトロスとゴーレム、空中のディアボロスとガーゴイル。この人と一緒であるなら、あの程度の幻神獣は容易い。

「一夏、君は地上の二種を。僕は空中の方にあたるから。」

それと、《消滅毒》アナイレイト・ヴェノムも貰って大丈夫かな?」

「委細了解しました」

即座に《バハムート》の特殊武装である大剣《烙印剣》カオスブランドへと《消滅

毒』を付与していく。

終わった直後に二人でそれぞれの敵の元へ飛翔した。

「――落鋼刃」

ゴーレムの光弾を適当に回避しつつ接近、そのまま直情から
タスク・ブレイド
《竜毒牙剣》の内一刀を真下へと構えて急降下する。

ガギヤアアアアア！

金属質で耳障りな音が鳴り響き、ゴーレムの片腕を切り落としていた。

拳をもって反撃を開始したゴーレムに対し、使っていないかつたもう
クイックドロウ
一刀を神速制御を用いて一刀両断。元より硬質の体を持つゴーレム
だが、《消滅毒》の前にはその防御は意味をなさない。

さらに、神速制御の一振りを振り抜いてそのまま半回転。後ろから
迫っていたオルトロスの前両足を切り落とし、移動能力を奪う。

オルトロスはそれでも襲いかかろうとしてきたが、前のめりの状態
から後ろ脚だけで飛び掛かるにはどうしてもワンテンポ遅れる。そ
れは、この《アステイグ》にとつては遅すぎる動作だった。

ドッ！

突き出された犬の頭のうち片方へと、落鋼刃で使用した方の刃を構
え直し、その顎を両断するように突き立てる。

だが、それでもオルトロスは生き残っている方の顎で噛み砕こうと
頭を突き出してきた。

「仕舞いだ」

だが、距離が近すぎる以外は特に脅威ではない。左手の《機竜刃鱗》
ブレイドアーマー
を展開し、貫手の要領で《竜毒牙剣》と同じように顎を裂くように突
き立てる。

《竜毒牙剣》と《機竜刃鱗》を展開した左手を抜くころには、次のオ
ルトロスが襲い掛かってきている。ゴーレムも外敵の排除のために
移動しているようだが、元々移動能力は高くないため遅れに遅れてお
り今はまだ脅威となりうる場所にはいない。

「次、か」

《竜毒牙剣》を備え直す暇も無く、オルトロスが接敵してくる。が、

それでも大きな問題ではなかった。

踵の《機竜刃麟》を展開し、回し蹴りの要領で頭部を切り裂く。それだけでは仕留めるに至らなかったが、続くもう片方の足先の《機竜刃麟》を用いた蹴りで追撃を入れる。この時、《機竜光翼》^{フォトンウイング}を片方だけ起動して回転のバランスを崩し僅かに前に出る事で、より深く切り付ける。当然、致命傷に至らせた。

さらにオルトロスが二頭ほど来ているが、その前に別な場所から移動してきたと思われる鹿に似た幻神獣であるハインドの群れが近づいていた。その少し後ろには数体のハイートもいる。

「《竜毒牙剣》、ロングモード。《消滅毒》」

《竜毒牙剣》の形態を切り替え、同時に飛翔。さらに《機竜光翼》も準備しておき、適当な位置で真下へと向かって起動する。

狙った位置は、ハインドの群れと数体のハイートの中間地点。

「――円水斬」

神速制御で二振りを同時に振るい、周囲を円形に切り裂く。数体のハインドとハイートを巻き込み、さらに《消滅毒》の効果もあって文字通り消滅させた。

残ったハインドとハイートは問題なく殲滅できる程度であったため、《消滅毒》を切って消耗を抑えながら戦い、間もなく全滅させる。

小休止する間もなく今度はオルトロスが来るが、其れに關しても一対一の状況である以上は十分に対処が可能だ。

一息に《機竜光翼》も使って踏み込み、腰だめに構えた《竜毒牙剣》を二振りとも振り抜く。防御障壁を纏った形態であるパワーモードによる一撃目でオルトロスの攻撃を弾き、再高威力の《アックスモード》による一撃で二つの頭の間を狙い、二分割するように叩き切っていく。

だが、ここで別な問題が起きた。

「……三体、か。」

贅沢な足止めだったな」

周囲には、鈍足でありながらもここまで移動してきたゴーレムが三体。察するに、これまでのオルトロスを囷か足止めにしてここまで

ゴーレムが移動する時間を稼いだのだろう。

何とも贅沢な話だが、状況だけを見れば絶望には程遠い。

ゴッ!

ゴーレムの内一体が拳で攻撃してくるが、直撃する前に《機竜光翼》を起動。ほぼ垂直に飛び上がる。

が、そこでもう一体のゴーレムが光弾を撃ちだしてきた。通常の推進器による機動で十分に回避できたためそのまま回避、ついでとばかりにショットモードへと変更した《竜毒牙剣》を用い、光波を発射。光弾を撃ってきたゴーレムの頭部を潰しておく。

最後の一体も同じように光弾を発射しようとしていたが、その前に手を打っておく。再装填が終わった《機竜光翼》と通常の推進器を同時に使用し、機体に一息に莫大な推力を与える。さらに、《竜毒牙剣》の内一振りをアックスモードへと変更。

「――旋墜斬」

擦れ違い様に半ば推力任せの一撃を叩き込み、本来防御力に優れるであるゴーレムを一撃のもとに斬り抉っていく。

並みの機竜をはるかに上回る加速力と速度、そして威力に優れるアックスモードの組み合わせだが、最高速度に到達する瞬間に合わせ振り抜かないとあまり意味のないものになってしまうため、少々注意の必要な技でもあった。

だが、この瞬間には確かな威力を発揮している。半ばから折れるように倒れたゴーレムを一瞥し、次のゴーレムへと肉薄していく。

次の相手は、最初に光弾を放ってきたゴーレム。拳の一撃を横向き
の《機竜光翼》で回避し、続く一撃も同様に回避。懐へと潜り込む。

「――翔炎斬」

アックスモードの《竜毒牙剣》へと、《戦陣・劫火》センジン コウカを応用してエネルギーを集中。その状態であらかじめ装填を完了させておいた《機竜光翼》を吹かせ、垂直上昇。攻撃力の強化された剣は遺憾なくその威力を発揮し、二対目のゴーレムを切り碎いた。

《機竜光翼》の効果が切れるころには既に出力状態を戻し、最後のゴーレムへと向き直る。

もはやなりふり構わず、その拳と頭部から放たれる光弾で攻撃してくる。だが、そのどれもが《アスディーグ》にとつては遅すぎる。拳はその威力こそ脅威だが当たらなければ意味は無く、光弾も三次元的に移動し、時折速度を変更することで単調な狙いから外れていく。

「《消滅毒》」

最後のゴーレムへと肉薄し、二振りの《竜毒牙剣》と全身の《機竜刃麟》での多弾攻撃を仕掛ける。

付与された《消滅毒》の効果により、ゴーレムは本来大した傷になどならない程度の斬撃でも十分な致命傷へと至らしめることができ。今回は念を入れての多段攻撃、致命傷にならないはずが無かった。

「地上の方は殲滅終了。ルクスさんの方は……」

殲滅を確認し、空へと目を向ける。確認するまでもない思ったが、その通りだった。

S i d e ルクス

「ガーゴイルに、ディアボロスか」

一夏と別れて、空中の方にいる二種の幻神獣、ガーゴイルとディアボロスへと接近していく。

接近に気付いたガーゴイルが羽型の光弾を発射してきたけど、それ自体は特に問題も無く避けられる。必要最小限の軌道で回避した後、ガーゴイルは半ば無視して先にディアボロスの方へと接近。

「クイックドロウ
神速制御」

ディアボロスがその巨体を生かし、刀剣のように巨大な爪で攻撃してくる。本来であれば脅威的な一撃だけど、一夏から貰った《消滅毒》の効果が付与されている今では特に脅威にはならない。突き出された手から神速制御の一閃で切り裂いていき、その一撃でそのまま倒す。

（何時もの事だけど、本当に味方の強化にも使える神装だなあ……）

一夏の神装は一見すると圧倒的な攻撃能力が目につく神装だけど、その実、他者へも付与できるという性質がその価値を別な方向にも伸ばしていた。その気になれば機竜部隊の攻撃力を丸ごと激増できるという能力は、一夏自身のある種の才能と相まって多大な戦果を挙げている。部隊でも単機でも価値ある能力、僕の知っている神装機竜でもこれに当てはまる能力はそうそうない。

(だけど……だからこそ……)

そこまで考えたところで、戦闘へと戻った。

次のディアボロスとガーゴイルが襲ってくるけど、そこは一気に攻勢へと出ていく。

「永久連環」
エンドアクション

《消滅毒》の効果がまだ切れていないことを確認して、連撃へと移行していく。

普段は手古摺るような相手でも、《消滅毒》を付与した状態であれば、使いどころを間違えない限りは圧倒的な優位を築ける。特に、連撃を重視しているために《暴食》リロード・オン・ファイアを使って複数撃の威力を一点に集中させない限りは威力が不足しやすい永久連環とは相性が良くすぎるほどだった。

そうして、残りのディアボロスとガーゴイル数体を一気に倒し切る。

「ギィエエアアッ!!」

残っていたガーゴイルが攻勢に出てくる。僕がこれまで先手を取っていたため、逆に先手を取らせないようにしようと考えての事なのだろう。

けれど、むしろこっちの方が僕本来の戦い方だった。

「極撃」

その爪で攻撃しようとしてきたガーゴイルに対して、攻撃される瞬間にその腕に剣を添える。威力をそのまま反転させた攻撃は、十分にガーゴイルへとダメージを与えていた。そこからさらに攻撃を重ね、一体を倒す。

残った直衛のガーゴイルは、二対。その二対が、同時に突出してき

た。

(同時攻撃、か)

さらに、光弾も放ってくる。

牽制からの同時攻撃。目的は、おそらくそんなところだろうと読めた。

「《暴食》！」

先の五秒間で事象を激減させ、後の五秒間で圧縮強化する《バハムート》の神装《暴食》。対象は自己ではなく、周囲の空間。もつと言えば、放たれた光弾と、放った機竜爪刃^{ダガ}。

規模が規模であるため負荷も小さくて済み、すぐに次の行動へ移れる。その行動は、片方のガーゴイルへの接近。

「ギイエアツ！」

咆哮と一緒に、腕が突き出される。

「即撃」

けれど、分かり易い大振りの攻撃は合わせるのも簡単だった。腕の振りの隙間に合わせて、神速制御を用いての即撃を当てる。

そのまま、幻神獣の核も切断。これでガーゴイルの内一体も倒した。

けれど、今この瞬間に背中側からもう一体のガーゴイルが迫っている。

ドッ！

けれど、ガーゴイルの腕が刺さることは無い。さっき投げていた機竜爪牙が、腕と体に突き刺さっているから。

狙い通りに行ったことに安堵しつつ、振り向いて一閃。これで、最後の一体を倒した。

「二夏、そっちの方は？」

竜声で通信したところ、頼もしい返事が返ってきた。
『殲滅はすでに終わりました。』

そちらも、問題ないみたいですね』

「うん。」

ところで、このあともう一役頼めるかな」

『委細お任せを』

こつちも一夏のいた方を目視で確認したけど、確かに問題無さそうだった。

さらに、後方の方も一段落しつつある。大規模な部分はこの場にいる機竜やIS、さらにこの世界の兵器で武装した部隊全ての活躍によってほぼ殲滅されており、同時に残った小集団も駆逐されつつあった。

(今が、頃合いかな)

全体に余裕が出来つつあるという事は、僕たちも動きやすくなるという事。

僕たちの目的としては、どうしても『巢』の中へと突入する必要がある。だけど、巢の中に何がいるかも分からない以上は迂闊に突入できない。

だから、外の状況が落ち着くまでは待ちたかった。だけど、待ちすぎて『巢』の中から増援という展開は徐々に追い詰められていくことを意味するために避けたかった。

「リーシャ様、もうそろそろ……」

『巢の中へ突入、だな。』

確かに、頃合いだろう。司令部へは私が話を付けておくから、そっちはファイルフィと夜架の二人と合流しておいてくれ』

「はい」

リーシャ様との通信が終わり、一夏の方へと向き直る。

「一夏、まずファイちゃんをここまで連れてきて。」

其の後、あの巢に風穴を開けて欲しい」

『突入されるのですね』

一夏からの確認に、頷いた。

「うん。」

そのために昨日決めた突入メンバーをここに集めて、一夏にあの巢への突入口を開けてもらいたいんだ」

『委細了解しました。』

では、まずファイルフィさんを連れてきますね』

「うん、頼んだよ」

出した指示に対し、一夏はすぐに了解の意を返してくれた。同時に、すぐにフィーちゃんの方へと飛んで行ってくれている。

『ルクス、いいか?』

「リーシャ様?」

そして、僕も夜架と合流するために飛び始めた時だった。唐突に、リーシャ様からの通信が入っていた。

『アイリ経由で司令官には突入の許可をとった。』

ただ、突入のタイミングだけは少し待てとのことだ。地上の歩兵隊の補給がもう少しで終わるから、そこまでな』

「了解しました」

リーシャ様から思ってたより早く許可が取れた事が確認でき、ひとまずの難関は突破できたと感じた。

(後は、実際に突入してからどう出るか、かな……)

一応、突入口には一夏達に居てもらって内部から出てきた場合の対処を頼もうかと考えている。

だけど、全員はそこに居られない。何より地底にトンネルを掘って移動することが確認されている以上、周囲を警戒する必要がある。どうしてもある。

故に、探索に求められるのはなるべく短時間で有用な情報を持ち帰る事。

(でも、あの規模……厳しそうかな)

規模が規模なだけに単純に時間がかかることが予想され、しかもあの蟻が作り上げた以上は嘗ての『遺跡』の経験も役に立つかどうか怪しい。

(それでも……やるしかない)

やるべきことを心の中で確認しながら、僕たちは準備を進めていった。

S i d e 一夏

突入メンバーであるルクスさん、フィルフィさん、夜架さんの三名が集まり、突入の準備が整う。歩兵隊や戦車隊も補給が終わり、いよいよその時がやってくる。

「《竜毒牙剣》、アックスモード」

《竜毒牙剣》の形態を切り替え、二振りとも最高威力の形態にする。

「戦陣・劫火」

さらに、エネルギーを集中させ威力を激増。

ゴガアアアアン！

振り下ろした二振りは、確かに『巢』の外殻に穴を空けていた。

幸い、中から追加の幻神獣は出てこない。軽く中を見ても其れらしい影は無いので、少なくともここからはしばらく出てこないと推測できた。

「それじゃ、言ってくるよ。」

一夏、ここの監視はお願いね」

「留守はお願いしましたわよ」

「ちよっとだけ……待っててね」

三者三様の挨拶を聞いた後、見送った。

(さて……こちらは、この穴と周辺の警戒か)

自分の役割を確認し、俺は其の場で適度に力を抜きつつすぐに動けるように待機していた。

S i d e ルクス

「思いのほか、通路は広いみたいだね」

『巢』の中に入って数分、思いのほか広い通路に少し戸惑いながら進んでいた。

すでに突入するときにあけた穴は見えなくなっているけど、それはあまり気にしないでおくことに居た。今は、前に進む方が重要だから。

「……主様、此方に進めば地下に進むことになりますわ。」

上の方へと行く道もあるみたいですが、其方には何もいませんので、地下に行くべきでは?」

「そうだね。ひとまず、地下方向に行こうか。」

「フィーちゃん、何か気づいたことはある?」

「ん……今は、何もなし」

「そっか。」

何か気づいたことがあったら、すぐに教えてね」

「わかった」

今現在は特に大きな問題も無く進みながら、それでも必要最小限の警戒は怠らずに進んでいく。

それから暫くは歩を進めた。

散発的に幻神獣が出てきたけど、少数や単数だったこともありそれは問題なく倒せた。時折、少し広めの空間に多数の幻神獣が集まっている時もあったけど、狭い通路との境界付近におびき出して数の利を生かせないように立ち回りながら戦う事で対処した。

そうして、一時間以上の時間が経過した頃。

「……主様、この先に巨大な空間がありますわ。」

多数の弱い幻神獣の反応と、巨大な幻神獣の反応が一つあります」

「……いよいよ、かな。」

「フィーちゃん、準備は……フィーちゃん?」

夜架の反応に、この『巣』の『女王』と呼ぶべき存在との対面になるのかと思った時だった。

隣のフィーちゃんが、鼻を抑えながら不快そうな表情をしていた。

普段は無表情に近いだけに、この時の反応には驚いた。

「……変な、臭いがする」

「匂い?」

「……血のような、鉄のような、生臭いような、腐ったような……嫌な、臭い」

その言葉に、思わず夜架と顔を見合わせた。

フィーちゃんのは感覚は、ある特殊な事情によつて常人よりも遥かに

優れている。そして、その感覚の鋭さは幻神獣に対しても言えることだった。

「何か、あるね。」

とにかく今は前に進もう。フィーちゃん、大丈夫？」

「うん……大丈夫」

さらに数分ほど進むと、唐突に、開けた空間に出た。全体的には、中心に巨大な土の柱が立った御椀型の空間のように思える。その広さは馬鹿げているものがあり、小さな貴族の屋敷位なら入ってしまうのではないかと思えてしまうほどだった。

「……主様、弱い幻神獣の反応元はここの天井ですわ。」

しかし、これは……」

夜架が珍しいまでに、感情を露わにしていた。

でも、それも無理のない事だと思う。僕自身も驚愕を隠せていないのを自覚出来ていた。

「ルーちゃん、臭いの元……これだよ……」

フィーちゃんが、顔をしかめながらそう言った。僕もその言葉に、納得を覚えた。

そこにあつたのは、人間大からゴーレムやディアボロス等の大型の幻神獣が余裕で入るほどの大きさのものまで、小ささまざまな大きさのある——黄色い、楕円形の、虫の卵のようなものだった。

「……これ、は」

その卵は淡く発光しており、心臓の脈動のように明滅を繰り返している。

それが、広大な天井の全面に所狭しと張り付いており、一分は壁面にも張り付けられている。

——キ

そうして三人とも絶句した時、奥の方から明らかに人ではない何かの発した声が聞こえた。

その方向へと、顔を向けると——

——キエエエエアアアア!!

——明らかに、これまで見たどの蟻型よりも遙かに大きな蟻型の個体がいた。嘗て対峙した終焉神獣《ポセイドン》にも匹敵するほどの巨軀に、その背には羽蟻のような羽がある。

そして、蟻の腹部にあたる部分の先端から——あの黄色い卵を、生み落としていた。

——パリ

すぐに女王と思われるその個体を倒そうと身構えた時、上の方から異様な音が聞こえてきた。或いは、女王がついさつき上げた叫び声ともとれる声に反応したのかもしれない。

——パリパパリパリ

上、つまり天井の方へと眼を向けると——

——キ

——あの卵が一齐に割れだし、多量の孵化が始まっていた。

しかも、そこから生まれていたのは蟻型だけではなかった。例の小型幻神獣と思しきそれも、同じようにそこから生まれている。

——キイイイキイイキイイキイイキイイキイイキイイキイイキイイキイイキイ

キ！

一齐に孵化した大量の蟻型及び小型幻神獣と、目の前の女王を相手に、僕らは戦いを始めざるを得なかった。

第五章（5）：『巢』 攻略戦、後編

S i d e ルクス

「フイーちゃん、全力で下がって！」

夜架、地上の方に今の状態を伝えて！」

言いつつ、僕も永久連環エンドアクションでひたすら生まれたばかりの小型幻神獣アビスや蟻型幻神獣を倒していく。

（一体一体の能力が低いのがまだ救いかな……永久連環でも倒せる）

一応、通常の幻神獣より大分低い能力であることに、ある種の救いがあった。これでこれまでの幻神獣と全く同じ能力だったとしたら、単純に数で押し潰される危険性もあった。

「《竜咬爆火》
バイティング・フレア」

フイーちゃんもそれを察知したのか、半ば無理矢理に退路を作っている。というか、自分の通った道を退路にするかのように敵を薙ぎ払いながら進んでいく。

もちろん、その道を無駄にするようなことはしない。

「夜架、伝えた!？」

「ええ……ですが、地上の方も厄介な事になっているみたいですよ、主様」

夜架が常と変わらない、けれどどこか苛立ったような声で続けた。

「地上では、トンネルを掘った蟻型によって後衛部隊を担当していた戦車と歩兵が囲まれたようです。」

地上に残っている方々が応戦しているようですが……IS部隊の対応が遅れている上に一部が独断専行を働いたらしく、芳しくないようですわ」

「……どのみち、僕らもここで応戦していれば不利は避けられない。」

急いで地上に戻って、そこで全員で応戦するよ。地上までの通路の間に女王以外の幻神獣アビスを倒す。フイーちゃん、通路まで道を開けて！

夜架、後ろの敵を僕と二人で足止め！」

「承りましたわ、主様」

「分かった……！」

足の車輪で唸りをあげながら、フィーちゃんのお《テュポーン》が重装甲と膂力を最大限に生かして突き進んでいく。

僕と夜架はその道を辿りながら、後ろや上、横から来る敵をいなしていく。

(今は、下がるしかない……通路で敵が来る方向を一方からに限定できれば、まだ対処のしようはある。そこまで、行けば！)

この状況を打開するため、とにかく敵をいなしながら後退を続けていた――。

Side 一夏

『畜生！ 地中からの奇襲だど！』

「……ッ！」

開けていた通信から、嫌な状況を指し示す声が聞こえてきた。

『一夏、『巢』の入り口の監視はもういい！』

近場の敵をとにかく倒してくれ！』

「委細了解しました！」

リーシャ様から竜声による指示を受け、すぐさま飛んでいく。

(……広い！)

複数箇所と同時に地中からの奇襲を仕掛けたのか！)

思っていたよりもはるかに悪い戦況に、焦る気持ちが生まれてくる。しかも、今までは見られなかった羽蟻型の幻神獣まで出現しており、空中での戦力も増している。だが、今はそれらによる焦りを押し殺し、冷静にやるべきことを迅速にこなしていくことを最優先にしている。

とにかく、まずは近場の敵から順に切り伏せていき、少しでも被害を抑えることを優先。

『一夏、後ろの方は私達がなんとかするから、一夏は付近の方をお願いね』

「委細了解した、メル」

メルからの通信に、自身の役割を再認識する。同時に、最も近かった敵が此方の射程の内側に入ったため、一気に攻め立てる。

「タスクフレイド《竜毒牙剣》、ライフルモード」

《竜毒牙剣》のモードを切り替え、ライフルに近い性能にする。そこから幻神獣の集団へとひたすらに撃ち込み、まずはその標的を此方へと向けた。

「ショットモード」

間髪を入れずにショットモードへと移行し、本格的な攻撃を仕掛ける。同時に、その只中へと踏み込み、さらなる攻勢へと出ていく。

(この間に、少しでも戦車隊と歩兵隊が離脱してくれるといいんだが……)

横目で刹那の間に確認すれば、狙い通り、戦車隊と歩兵隊が徐々に後退や集結を開始している。

だが、反面、IS部隊は総崩れと言ってもいい状況だった。

「そ、そつちに敵が……!」

「早く援護して!」

「ちよ、このタイミングだと……」

主に一部の搭乗者が酷いだけなのだが、他の搭乗者がその一部のフォロワーをしなければならず、陣形の構築もままならない状況だった。

元々、IS部隊は多数の敵を相手にした場合には火力不足に陥りやすい部分があった。それを助長するような形で起きている事態には、頭を悩ませられた。

止むを得ずに其方にも赴き、数体ほど幻神獣を切り裂いてから離脱。此方へと幻神獣を引き付ける。IS搭乗者が何か言った気がしたが、正直に言っただけにしている余裕は無かった。

(ルクスさん……地上の戦況は支えます。俺よりも他の師匠達の方が活躍しています。)

ですので、どうか『巢』の方をよろしくお願いします!)

そうであって欲しいと思いつつ、俺は剣を振るい続けた。

S i d e ルクス

最下部と思われる大量の卵があった広場から何とか逃れ、比較的細い通路で正面から蟻型や小型幻神獣デビースを迎え撃っていた。

地上の方にも大量の敵が出現しているとのこと、しかもその敵に奇襲に近い形で包囲されているという状況下では、この数の幻神獣を連れて行くわけにはいかない。だからこそ、ここで迎え撃つ必要があった。

その中での唯一の救いと言えたのは、生まれたばかりのためか、戦闘力が低い事だけだった。今まで戦った同種のそれよりも更に低く、特別な一撃でなくても十分に倒せる。

(でも、こうも数があると……！)

一体一体の単位で見れば十分に余裕をもって倒せる。けれど、単純に数が多くて対処に時間が掛かっていた。後ろに女王もいる以上、あまり時間を掛けたくはない。けど、それを許さない数が襲ってくる。

「——特種武装《蜘蛛ノ糸》」

そうして苦慮していたところに、夜架が糸の罫を張った。

数体が止まり切れずに、あるいは気付いていない後続に押し出されるような形で糸の罫に切り裂かれる。

「主様、これで多少は時間稼ぎと、敵の来る方向の制限ができますわ。

……尤も、焼け石に水でなければ良いのですが」

「ううん、十分だよ。」

「これからは、後退に合わせて適宜張り直してくれる？」

「お安い御用ですわ、主様」

夜架の張った罫により、少し幻神獣の進行が遅くなる。

出来る限り倒しながら、同時に最初の強引な突破で消耗しているフィーちゃんの様子を確認する。

「フィーちゃん、大丈夫!？」

「まだ、大丈夫……」

言葉こそ強がっているけど、明らかな消耗が見られる。

(やっぱり、地下空洞から脱出するときは無理して……でも、僕も夜架もあんまり余裕が無い。)

「でも、何とか地上までは！」

かなりの焦りが出てきたけど、その中に僅かながら突破口は存在している。

(とにかく、生まれたばかりの幻神獣だけでも抑えて、できるだけフィーちゃんの方には行かせないようにして……)

そうして場当たり的ではあるけど対策を練りながら後退を続けていたけれど、その中でさらに事態が悪い方向に転んでいることが予想できる一言が発せられた。

「ルーちゃん、大きいのが来る！」

「……!! 夜架、探知！」

「……あと数分、といった距離ですわね。」

急いで離脱することを進言いたしますわ

フィーちゃんの台詞に、急いで確認するように指示を出す。

そして、確認してもらった夜架からの報告で、その状況を確認した。

「二人とも、迎撃は必要最小限。とにかく『巢』から全速力で出るよ！」

「分かった……！」

「承りましたわ、主様」

すぐに後退速度を上げて、できる限りの速さで『巢』の出口を目指していく。幸い、行きで通って来た道は全てそのまま生きていたために、来た道をそのまま後戻りするだけで済んでいた。

だけど、そうして後退していく最中で不意に地震のような振動を感じ始めた。

(まさか……！)

思ったよりも早い展開に、一瞬だけ最悪の展開が頭をよぎる。

「二人とも、障壁に出力を回して！」

「主様、来ますわ！」

その瞬間、下から土の壁を砕きながら——あの女王が、真上へと向かって侵攻してきた。

「!!」

足場が崩れたことで、大半の幻神獣が落ちていく。けれど、それはフイーちゃんと夜架も同じで――。

Side 一夏

「……………」

『巣』の方から異様に大きな崩落音の様な物が聞こえてきたため、思わずそちらを振り向いていた。

そこは、中心付近から陥没するように崩落が始まっており、地上部分の大半が崩れる事態になっていた。

『な……………なんだ、アレは！』

『ば……………バケモノ……………！』

『……………ア……………ア……………』

そして、同じように崩落し始めた『巣』のほうを見た歩兵隊の隊員やIS部隊の隊員たちから悲鳴が聞こえだした。

が、無理もない。俺も以前に何度か似たような巨大な敵を見たからある程度落ち着いていられるだけで、驚いてはいるのだから。

『女王様が登場、か……………』

『あら、いずれ同じ立場になるのにそんなこと言っているの？』

『蟻の女王と一緒にするな！』

『言い争いは不許可です。どのような能力を持っているかは不明ですが、油断は禁物です』

『アレも一応幻神獣なんですよ？ だったら、私が倒すわよ！』

一方、同じようにあの女王蟻と思しき敵を目に付けたリーシャ様、クルルシフアーさん、セリスティアさん、メルの四人もそれぞれに反応を返していた。

と言っても、それは悲観的なものではなく、立ち向かう決意に溢れているものだった。

『……………一夏、聞こえる?!』

『ルクスさん?!』

『来れるんだったら、少し手伝って！』

今、崩落に巻き込まれて上までの通路がほとんど通れなくなっているんだ。しかも、足場も崩されたからフィーちゃんも夜架も宙吊りになっている。僕の《バハムート》じゃ一人連れて行くのが限界だから……』

ルクスさんからの要請に、考える必要などなかった。

「委細了解しました。少々お待ちください」

『ありがとう。夜架、ナビゲートしてあげて。』

リーシャ様、すいませんが……』

『地上の方は任せろ。それより、早く来い』

『承りましたわ、主様。』

一夏、準備は大丈夫ですか？』

「もう少しだけ、お待ちください。」

地上の方の幻神獣と、まだ交戦中にして……！』

すぐに話しは纏まったが、こちらの方の準備が整っていない。歯がゆい思いを抱きつつ、同時に早く向かうためにできる限り早く殲滅しようとした時だった。

「その程度の雑魚だったら任せてくれてもいいわよ」

真横から、戦っていたキマイラの内一体に対してメルの《ドライグ・グウィバー》の《竜戦斧槍》ハルバートが襲いかかっていた。陸戦形態ワイアーム・モードでの膂力と車輪での加速を乗せて、なおかつ十分な支えを持って無駄なく放たれた一閃はほぼ致命の一撃と化している。

「戦闘してたらまたま近くに落ちちゃってね。」

「ここは私が持つから、お兄ちゃんの事は頼んだわよ。親友」

「……委細心得た」

心強い援軍との短いやり取りに、拳を突き合わせるような動作を挟んでからすぐに向かう。

『一夏、その位置からしばらく真下に。』

いずれ土壁に突き当たると思いますが、そこからは適宜、道を指示しますわ』

「委細了解しました」

夜架さんの指示通りに飛んでいき、そう時間をおかない内に言われた物と思しき土壁に突き当たった。

『一夏、そこは右下の孔へと入ってください。』

そこからは——』

そこから数分ほど夜架さんの指示通りに進み、間もなくルクスさんたちの待つ位置へと到達した。

「遅くなり、申し訳ありませんでした」

「ううん、大丈夫だよ。」

一夏、それで早速で悪いけど、フィーちゃんを連れて行って貰ってもいいかな?」

「委細了解しました。」

「フィルフィさん、よろしいでしょうか?」

「うん、いいよ」

「夜架は僕が連れて行くから、それでいい?」

「ええ、問題無いですわ」

手短かに確認を済ませ、実行へと移っていく。

ルクスさんの《バハムート》へと夜架さんが《夜刀ノ神》の《蜘蛛ノ糸》を巻き付け、俺の《アステイグ》にもフィルフィさんの駆る《テュポーン》の《竜咬縛鎖》バイル・アンカーを適度に巻き付けて軽く吊り上げられるようにする。

「今からできる限り短時間で『巣』から出るよ。」

其の後は、全員であるの『女王』を倒そうと思っているんだけど……」

「その他の幻神獣はいつも通り俺が相手しますか?」

『巣』から脱出するために上昇している間、少し話しあっていた。

そこでのルクスさんの提案に、個人的には大きく抵抗する気は無かった。確かに、幻神獣側で残った戦力で最も大きいのはあの女王であろうことはたやすく予想できる。

その他の幻神獣も脅威であることに違いは無いが、それでも十分に相手取れる範疇ではある。半面、あの女王はその巨体と重量だけでも相当な脅威であることが予想され、最優先で倒すという考えにも十分に賛同できた。

「いや、一夏にもこっちで戦ってほしい。」

他の幻神獣はIS部隊や歩兵隊、戦車隊の方に任せたいんだ」

「……こういう言い方するのも悪いのですが、それで大丈夫ですか？」
ルクスさんの考えに、単純に疑問に思った。

今まで戦った限りだと、IS部隊や通常兵器を使用する部隊の火力では厳しいように思われた。少数だったら十分に倒せる可能性はあるが、今、外にいる幻神獣はまだ大多数と呼べるほどの数がある。最低でも一人、機竜側から助けに入る必要があるのではないかと思っ

た。
「それは大丈夫。倒せなくても、最低でも足止めだけしてくれていれば十分だから。」

それと、あの女王を最優先で倒しておきたい理由は別にあるんだ」
「別に、ですか？」

俺の疑問に答えたのは、ルクスさんではなくフィルフィさんと夜架さんだった。

「あの女王、卵を産んでいた……」

「しかも、その卵から幻神獣が生まれているのも目撃しましたわ。」

おそらく、あの女王蟻はある程度の条件が整えば、どこでも幻神獣を増やせるのでしょうね」

二人の台詞に、はつきりとした戦慄を感じた。

その事実が意味することは、つまり――。

「ここで逃せば、『次』がある……!?!」

「そう言う事になるね。」

一夏。なんとしてでも、あの女王蟻だけはここで倒すよ!」

「委細、了解しました!」

ルクスさんの宣言に賛同し、揃ってできる限りの速度で上昇を続ける。
出口は、もうすぐだった。

S i d e リーシャ

「司令部へ。IS部隊と戦車、歩兵隊は現在どうなっている!?!」

『戦車隊と歩兵隊の生き残りは後方で陣形の再構築中、負傷者はほぼ既に收容した。だが、IS部隊は一部から混乱が広がっており、未だ立ち直れていない状況で……』

通信手という、連絡を担当する役職からの報告を受けて頭を抱えた。

「だあああああ!」

それ相応の責任というものがあるだろうに、其の一部は自覚無しか!」

通信を切った直後に、思わず悪態をついた。

此方側の世界で最強と呼ばれるIS部隊が一番混乱しているという体たらくだと聞けば、無理もないと思つて欲しかった。

「愚痴と文句は不許可ですよ!」

今更言つても何も変わりません!」

「分かっている!」

互いに組んでいた相手が『巢』の中へと突入したために即席で組んだセリスに突つ込まれるが、その内容は私も重々承知している。ただ、それでも口から思わず出してしまう愚痴と言うものがあつた。

「クルルシファー、メル!」

そつちは大丈夫か!」

『私の方は問題ないわ。』

ただ、注意を払わないといけない範囲が広すぎるけど……!」

『こつちはとりあえず手当たり次第よ!』

……つて、あの女王、翅を広げてるわよ! クルルシファー、翅だけでも撃つて! 逃げられる!」

『簡単に言つてくれるわね……!』

二人からの返事を聞き、状況の悪化を悟つた。

(この状況……こちら側の撤退支援はある程度片付いたが、クルルシファーとメルはまだ手が空きそうにない。

こうなつたら……!)

「セリス！」

「何かしら？」

「この場を任せてもいいか!？」

私はあの化け物女王蟻を、最低でも足止めする！」

私の提案に、だがセリスは首を振った。

「それは不許可です。」

貴女の《ティアマト》の方が広域での戦闘力に優れています。半面、私の《リンドヴルム》はどちらかと言えば一対一の方が向いています。

その役目は、私です」

セリスの指摘に、歯軋りした。

言っていることは正論であり、私としても性能による適性を考えるのであればそうすべきであることは理解できる。

だが、それはあの未知の女王蟻を一人で相手取ることを意味している。

「……いざとなったら、私が《スプレッシャー天声》で押し潰してでも止める！」

無理はするなよ！」

「心配は不許可ですよ。」

ある程度の戦力が集中できる状況になるまでの足止めという役割は心得ています」

それだけ言うと、セリスはあの女王蟻へと向かおうとして——

『すいません。遅れましたけど、時間稼ぎの役割は僕がします。それと、できれば全員で此方に来てください。』

あの女王蟻、思っていた以上に厄介な能力があります」

——その前に、待っていた私の騎士がその到来を告げた。

「……遅いぞ、ルクス！」

『申し訳ありません。』

ですが、今からは——リーシャ様の騎士として、七竜騎聖として、しっかりと働きますから』

S i d e ルクス

「ところで、リーシャ様。」

少し、司令部の方に話を通してもらえませんか？ 少しの間だけ、幻神獣の相手を戦車隊と歩兵隊、I S部隊の方に任せたいと」

『理由は？』

リーシャ様の怪訝な声に、すぐに答える。あの女王蟻だけは、ここで仕留めておきたかった。

「あの女王蟻、幻神獣を増殖させる能力を持っています。」

このまま放置して、もし逃げられでもすれば」

『……もう一度、同じ事が起こるといふ事か。』

分かった。話は私が付ける。それまでに、他の面々に話して集めておいてくれ』

「はい」

やり取りも短く、リーシャ様は了承してくれた。

そして、リーシャ様が司令部へ話しを付けてくれているその間に、僕の方も準備を進めておかなければいけなかった。

「セリス先輩、クルルシファーさん、メル。」

今からこちらに来れますか？ あの女王蟻だけは何としても倒しておきたいのですが」

『もう少し待ってください、ルクス。』

今受け持っているところがあと数体で片付きますので、終わり次第行きます』

『私は戦車隊と歩兵隊の展開が終わったら行くわ。』

I S部隊の支援は……展開が終わった戦車隊と歩兵隊に任せましょう』

『私はここら辺の幻神獣を倒し終わったら行くからもうちよつと待ってねー』

三者三様の返事を聞き、十分に合流の見込みがあることを確認する。クルルシファーさんの声がほんの少しだけ呆れ気味だったのはこの際気にしないでよかった。

同時に、この場にいる四人で時間稼ぎし、できるなら女王蟻の戦力

を少しでも分析しておいた方が今後の役に立つと思えた。

「フイーちゃん、夜架、一夏。」

今から全員集まるまでこの場に女王を押し止める。それと、できる限りでいいから女王蟻の能力や弱点を探すから、協力してくれないかな」

「分かった……」

「承りましたわ、主様」

「委細了解しました」

三人全員が二つ返事で承諾してくれたのは有り難かったけど、基本は僕が相手するつもりだった。

三人はこれまでも長時間の戦闘を熟しているし、消耗も激しいはず。それに、確実に止めを刺さなければいけない以上は全員が集合し、より確実に倒せる状況になるまで温存しておきたい意図もあった。

「一夏、回避重視ととにかく飛び回って、できるだけ注意を引いて。夜架は周辺から来る幻神獣がいないかの監視と、居た場合の迎撃。フイーちゃんは地上から攻撃できそうなら攻撃してみて、様子を見て。僕は空中からやるから。」

とにかく、今は回避と足止めを中心に。あの女王蟻は未知数だから、無理はしないで」

簡単に竜声を介して指示を出したところ、再び全員が応じてくれた。

(さて。)

ここから、どこまで探れるかな……)

ある意味で非常に重要な場面に、僕も強い緊張を感じていた。

Side 楯無

「あの化け物を最優先で倒すから、他はIS部隊と戦車隊、歩兵隊で持ち堪えろですって!?!」

『はい。』

あの化け物を万が一逃がした場合、再び『巢』を作られる危険性が発生し、最優先で撃破する必要があるためとのことでした。

この上申は既に認められています』

簡単に言ってくれる、と言いかけて何とか堪えた。

「了解しました！」

通信を切ると、思わず舌打ちしかけて何とか思いとどまれた。

(確かに数は減ってきているし、各個撃破ができない状況じゃない。

けれど、それにしても主力を全て一ヶ所に集める……思い切った判断をしたわね、あの一行……)

他の場所が完全に私たちに任せられるというのは、確かに本来こうあるはずだったと言える状況だろう。むしろ、其れでどうにかできなければこれ以降の不安が大きすぎる。

だけど、それでもどうにかできる気がしなかった。少なくとも、現在のIS部隊で彼ら彼女らの代わりは絶対に務まらない。

(それでも、やってやるしか無いのね……)

決断までに、時間は掛からなかった。

「簪ちゃん、《山嵐》お願い！」

とにかく広域で動きを止めて！」

「分かった！」

簪ちゃんに先制でミサイルを撃ち放ってもらい、まずは大雑把でもいいから動きを止めると同時に削りを入れておく。

これで、一部の足が止まった。

「簪ちゃんと鈴ちゃんは動きが止まったのを各個撃破！」

返事するよりも早く、二人は動き出していた。半ば力任せに叩き潰すように、それぞれの持ち味を生かした形の格闘で数を減らしている。

私も私で二人が相手している敵以外の敵へとある程度近づき、蒼流旋で関節などの比較的脆い部位を中心に狙っていく。ここで倒し切る必要は無く、止めは後続に簪ちゃんと鈴ちゃんに任せる形で削りに徹する。この形を維持しつつ、最低でも戦線を維持していった。

どうしても小数向きの戦術になるけど、別にこの場にいる全ての敵を倒す必要はない。

『火力支援、開始します。』

「I S部隊は前に出ないでください」

通信とともに、未だある程度の数がある後続へと戦車と歩兵による火力支援が突き刺さっていく。その火力の前に大部分の敵が飲み込まれていくが、あの化け物はそれだけで倒れてくれないのも事実だった。

でも、着実にその体躯へと傷は蓄積していつている。

（これだけの火力支援があれば、私達がやるのは突破してきた敵の撃破だけ……それも、かなり傷付いた敵の撃破。

あの化け物も驚異的だけど、決して不可能じゃない……！）

ほんの少しだけ、あの巨大な蟻の方へと視線を移す。そこには、既に増援として来てくれた八機が集結しつつあった。

（頼んだわよー！）

この作戦の成否に関わる一戦を前に、私も自分の戦いを続けた。

S i d e ルクス

（ある程度の能力は割れてきたかな……）

数分ほど引き付けている間、ある程度あの女王蟻の能力は割れた。

攻撃方法の一つは巨大な顎とその巨大な体躯を生かした格闘攻撃。それは予想の範疇だった。そして、もう一つ。

「——キエエエエアアアア!!」

空間そのものを凶器へと変える、大量の蟻酸。それを卵と同じように腹部の先端から放っていた。霧のように広がっていく其れは、ある程度飛んでいるうちに広がり、やがて地面へと落ちて行っている。

だけど、長時間その中に居ればいるほど致命傷へと近づいていくその攻撃は、広域への攻撃という事もあって単純な脅威となっていた。

（だけど、攻撃らしい攻撃はこれだけ……突破口は十分にある！）

回避と時間稼ぎをしつつ、勝利への策を練り続ける。

『ルクス、こちらは粗方片付いた。今行くぞ！』

『ルクス、聞こえますか？』

今、そちらに向かっています』

『私も概ね、行けそうな状態になったわ』

『今から私も向かうわよ』

そうして時間稼ぎしつつ作戦を練っていたところに、リーシャ様、セリス先輩、クルルシファーさん、メルからそれぞれ連絡が入った。

(もうすぐで、全員が揃う。)

その時に、一気に決着を付ける……！)

長期戦でそれぞれ消耗が激しい事を考えれば、機会は多くない。

強い緊張を感じながらも、その時を待っていた。

S i d e セシリア

「このー！」

迫りくる化け物共を前に、徐々に押され始めていました。理由は明白で、この区域を担当していた一部の I S 部隊の隊員が独断専行を働いたために陣形が崩れ、そこから敵がなだれ込んできてしまったからです。

此方の支援を担当してくださっていたあの二機も、今は親玉としか思えない巨大な蟻を倒すためにそちらの方へ向かってしまった以上は私達や戦車隊、歩兵隊が相手するしかない。

(せめて、全員が足並み揃えられたらまだ抵抗も出来よう物なのですが……)

心の中で僅かながらに悪態を吐きつつ、トリガーを引き続けました。

(まだ、持たせることはできる……でも、火力不足が深刻ですわね。)

一撃では倒せないというのが、ここまで響くとは……)

後方からの火力支援もあつて今は持たせられていますが、それもい

つまで続けられるか分かりません。

(影内さん、早く決着を付けてくださいまし！)
情けないとは分かりつつも、私はそう思わずにはいられませんでした。

Sidde ラウラ

シュヴァルツェ・ハーゼ
「黒兎隊各員、弾幕を切らすな！」

「了解！」

部隊単位で行動し、全機に装備されているレールカノンを用いてとにかく戦線を維持するように弾幕を張り続けた。

「シャルロット、右前方に突破したのが一体。処理を頼む！」

「OK！」

小數で突破した物の処理はシャルロットに任せ、私達は相変わらず火砲による足止めを徹する。

そうすればある程度化け物が集中する場所が生まれだし、そこに戦車隊や歩兵隊からの火力支援を集中することで有る程度効率よく敵を倒すことができた。

(しかし……抜けたことで、あの二機の凄まじさがより一層わかるな。

ここまで、厳しいとは……！)

あの二機が最大の脅威となるであろうあの巨大な敵の対処へと向かった事で、この戦線は私たちが持たせざるを得なくなった。

決して対処が不可能というわけではないが、それでも厳しい状況であることに変わりはない。

(せめて……弾薬が完全に尽きる前には、決着を付けて欲しいものだが。

そう贅沢も言ってもらえないな)

心の中で出た弱音を自分で否定し、再度、レールカノンの照準を合わせていく。

終わりが近い事を、信じながら。

「強制超過」
リコイルバースト

《空踏》で飛び上がったところを《バハムート》で運び、脚の二本を強制超過で切り裂く。巨体を支えるだけあって耐久力も尋常じやないものがあつたけれど、それでも大きく動きを制限させるだけの傷跡にはなつた。

「キエエエエアアアア!!」

僕と夜架を敵として倒すためだろう、女王蟻は腹部を曲げて大量の蟻酸を放とうとした——その時。

「させないわよ」

クルルシファアさんの《ファフニール》の特殊武装《凍息投射》フリージング・カノンが腹部と胸部の継ぎ目へと連続で照射される。そのどれもが着弾し、関節を凍らせた。

その状態では当然動けないが、それでも女王蟻はもがき、その翅を動かして飛ばうとした。けれど——

「逃がすわけないじゃん」

——飛翔形態で飛んだメルフライング・モードの《ドライグ・グウィバー》が振るつた《竜戦斧槍》ハルバートの一撃を受け、片方の羽が斬られる。切り痕が赤化していたところを見るに、《ドライグ・グウィバー》の神装《相克の天理》デュアルシフトで極度に熱化した《竜戦斧槍》を振るつたのだと推測できた。

だけど、それだけに終わらない。今度はその場から離脱する直前だった。

《地砕角弾》
グラウンドバスター

もう片方の、残つた翅に向けて放たれた一撃。大威力の爆破攻撃であるその特殊武装は、確かにもう片方の翅を根元から吹き飛ばしていった。

そのまま一時離脱したメルと替わるように、今度は一夏が入つて行つた。一夏が攻撃しようとしている甲殻の下には、女王蟻の核があることを既に夜架によつて探知してもらつている。

「——落鋼刃」

最大の速度をもつて真下へと向けた《アスデীগ》の全重量を剣先の一点に集中させる攻撃に、今は更に重ねる。

「《天 声》！」
スプレッシャー

リーシャ様の神装機竜《ティアマト》の神装《天声》を用い、一分だけでも強力な重力場を作りあげて動きを遅くする。さらに、この重力場によって一夏もさらに加速し、放とうとする一撃の破壊力を増していた。

ガギャアアアアアン！

甲殻へと当たった一夏のー撃は、確かにその甲殻を広域に渡って砕いていた。だけど、それだけでは倒すに至っていない。

《星光爆破》
スターライト・ゼロ

一夏がその場から離脱したのと入れ替わるように、セリス先輩が入っていった。砕けた甲殻へと降り立つのと同時に、ゼロ距離から《星光爆破》を叩き込んでその体表を抉り取っていく。

さすがにここまでできれば女王も何とかしようと思え、更に暴れ出そうとしたけど、それは敵わなかった。

「暴れ過ぎだー！」

リーシャ様が《空挺要塞》レギオンを操作し、脚の関節部へと連続して叩き込んでいく。最後にはトドメとばかりに《七つの竜頭》セブンヘッドズを至近距離から撃ち放ち、足の一本を完全に折っていた。

しかも、それに続く形でクルルシファアーさんと一夏が別な足をそれぞれに攻撃していく。クルルシファアーさんは《凍息投射》で動きをほぼ完全に止め、一夏に至っては《消滅毒》アナイレイト・ヴェノムを付与した《竜毒牙剣》のロングモードで一刀両断している。更に、脚が動かなくなったことで負担の軽くなったファイちゃんも《竜咬縛鎖》を巻き付けたまま車輪を最大限に動かした。これによって無理に開かれた脚は何か断裂するような音が鳴った後動かなくなっていた。

「永久連環」
エンドアクシオン

永久連環で《星光爆破》で完全に甲殻が吹き飛ばされた場所へと斬撃を刻んでいく。狙う方向は女王蟻の核。でも、これだけでは多分倒せない。

《暴 食》
リロード・オン・ファイア

だから、《バハムート》の神装で斬撃の威力を遅延させ、威力を集中

第五章（6）：戦い、終えて

S i d e 一夏

「それでは、作戦の成功を祝しまして……乾杯！」

デユノア社長ことレイヴィング・デユノア氏が乾杯の音頭を取り、そのまま『ネスト巢』攻略成功記念祝賀会が開かれていた。

と言つても、俺とアイリさん、メルは壁にもたれながら互いにオレ
ンジジュースを煽っているのだけでも。

「二人とも、今回はお疲れ様でした」

喧噪の中で話すには少し小さな声で、アイリさんが話し始めた。

「別に」

「これが役目であると心得ていきますので」

集まった三人とも、そう大きくは無い声で会話していた。メルだけは予め持ってきていた料理を頬張っていたため、少しばかりくぐもつた声だったけども。

「それでも、ですよ。」

ギザルト卿、今更ですがユミル教国よりのご足労有り難うございました」

「気にしなくていいわよ。」

幻神獣アピスは殺せし、お兄ちゃんや一夏にも会えし、最近お兄ちゃんに会えない関連の愚痴が増えたクルルシファーにとつてもお兄ちゃんに会う良い言い訳にもなっただろうし」

「クルルシファーさん、そんな事になつてたんですか……」

続く返答に僅かながらに呆れつつ、そのまま三人で集まって談笑していた。

と言うのも――。

「おい、ルクス！」

今回の報酬としてあれを貰えないかと交渉したいから、私は少し戻るのが遅れると新……」

「リーシャ様、自重してください！」

それはマズイですよ！」

「そうよ。今は私達の代表者なんだから、自重してちょうだい。

それよりルクス君。婚約者を放っておくのは感心しないのだけど……」

「クルルシファー、そう言いながらしな垂れかかるのは不許可ですよ！

「……いや、ここは私も乗っかるべきなのでしょうか……？」
「是非そうしてください。」

「これで、お世継ぎまでの道のりが短縮されますわね」

「いや、クルルシファーさんもセリス先輩も夜架も止まってよ！」

「ルーちゃん、この料理美味しいよ。」

「食べる？」

「あ、うん。頂くよ。」

「……って、なんでカートごと持ってきてるの！」

何時もの方々が、あの様子騒ぎである。もう慣れたものだが、突撃する気にはならなかった。一方、各国の方々もそのある種異様な様子に、話しかけようにも話しかけられない様子だった。恐らくは今後、自陣営を鼻負してもらったために何かしら話しかけたいのだろうが、完全に平常運転である師匠達相手にそれを為せるものは多くないようだった。

加えて、振る舞いが振る舞いとは言え全員が機竜側では政治的な部分にも大なり小なり関わってきた身である。一筋縄で行くものでもない。

（そもそも、住む世界が文字通りに違う以上は余り鼻負も出来ないのだが。

それは言えないしな……）

そういつた事情が重なり、現在は仮に話しかけられても煙に巻いている状況だった。こちらの方に人が来ないのは、事前にアイリさんがこちら側の代表者がリーズシャルテ様であることを広めておいたかららしい。

それでも、たまに来る実際に戦闘に参加した者、特にIS部隊に属していた人達から絡まれたりはしているのだが。

「楽しんでるかしら？」

そうして三人で話し込んでいたところ、第三者の声が割って入った。

「どうも、更識さん。今回はお世話になりました。

それで、今回はどのような要件でしょう？」

「挨拶回りよ。一応、こんなんでもそれなりに立場ある身でね。

貴方達相手なら必要もないかと思ったけど、今回はお世話になったことだし、御礼の一つくらいはとも思ったから」

「別に私は気にしてないわよ。

あの獣共は私にとっては殺したくて仕方ない怨敵なわけだしね」

「俺の方も、元よりそういう取引でしたから。お気になさらず」

「何と言うか……相変わらずね、貴方達」

更識会長が苦笑とも呆れとも感心とも似つかない表情を浮かべたが、直後にその様子を消し去った。

その様子を見て、こちらもある程度気になっていたことを確認することにした。

「そういえば、目論見の方は大丈夫そうですか？」

「それに関してはなぜ聞いてきたのと言いたくなるわね。

十分を通り越して過剰なくらいよ」

「それは良かった。

私達としても、今回の一件の発端になった案件のようなことはもう起きて欲しくないですしね」

「ってか、単純に運が良かったのもあるでしょう？」

私だったら、確定した時点で即時ひとつとらえるだろうし」

俺たちと同じように壁にもたれかかった更識会長からの返答に、アイリさんとメルがそれぞれに返していた。

「そう言えば、アイリさんとギザルトさんと少し話したいことがあるって子がいるのだけれど。

もし良かったら何処かで少し時間を貰えないかしら？」

そうして少し話し込んだあたりで、唐突に更識会長が問いかけてきた。

「話せる内容であれば、今からでも。」

それで、どちらでしようか?」

「わたしも構わないわよ。」

で、誰?」

「ありがとう。今から連れて来るから、少し待って……」

「雑談しかしていませんでしたし、私の方から行きますよ。」

今、其の人が何処にいるのか教えてもらってもよろしいですか?」

「私もよ。」

問題ないようだったら早いうちに済ませておきたいし」

二人がそれぞれ話があるという人の元へと行ったが、俺は行かなくてよいとのことだったので其の場でそのまま待っていた。

とは言っても、手持ち無沙汰になっただけなのだが。

(取りあえず、何か食べるか……)

そう考え、食べ物に乗せられた手近なカートに近づこうとした時だった。

「影内君、ちよつといいかな?」

「デュノアか。」

フランスの方はその後どうだ?」

意外な声の主だったが、邪険にする理由も今となつては無い。当たり障りのない話題を選びつつ、手ごろな料理を手にとっていた。

「おかげさまで。」

政府からデュノア社への援助も再開の目途が立ったし、不幸中の幸いなことに崩壊した研究所の中から新型に関する資料や試作されていたISのパーツとかが発見されたみたいだから、意外と早く完成するかもしれないね。

それもこれも、あの脅威を排除する方向で動いてくれた影内君達のおかげだけだよ」

「それは俺じゃなくて代表のリーズシャルテ様に言った方がいい。或いは、手筈を整えてくれたデュノア社長か、更識会長の方にでもな」
「それでも、影内君があの人達に伝えてくれなかったらどうなっていたか分からないしね。」

だから、これはその分のお礼だよ」

デュノアからのお礼を貰った後、僅かばかりの会話を交わした後そのまま離れていった。デュノアもデュノアであいさつ回りなどをする必要はないらしい。

「すみません、影内さん。」

少々お話よろしいでしょうか？」

そうして再び一人になった時に話しかけてきたのは、宝飾品こそ少ないものの品良く仕立てられたドレスを着こんだオルコットだった。

S i d e 簪

「それで、私に話とは？」

アイリさんに無理を言って話をする時間を貰った私は、自分から頼んだにも関わらず緊張していました。

「……影内君に関する事で、どうしても気になることがあつたんです。

本人に聞くような事ではないと思って、付き合いが長い貴女にと思つたのですけど……」

「答えられる事でしたら、構いませんよ」

微笑さえ伴った返事に、それでも私はどうしても内容が内容なだけに気後れしてしまいます。

「以前から、影内君と話をしている時に感じていたのですけど……。自分の実力に対し、何と言うか……過少評価をしているように思っています。

あくまで、私の主観ですので……間違っているのかもしれませんが……」

先の作戦で見た影内君の師匠達の動きを見れば、確かに影内君よりも一歩も二歩も先に行っているように思えました。

ですが、それはあくまで彼の師匠達と比較しての事。彼自身の腕前が非常に高い事を否定する理由にならないことには変わりありません。

ん。

「……私は、戦闘能力という意味でいえば皆無です。ゆえに、今から話す事にはその側面において十全な能力を持った人から聞いた伝聞や、それを基にした個人的な結論が入ってきます。

それを、前提に聞いてください」

それだけ言うと、最初にアイリさんは困ったような表情になっていました。

「結論から言ってしまうと……噛み合い過ぎてしまったんです」

不思議な結論に対し、私が疑問の表情を浮かべたのを見て取ったらしいアイリさんがそのまま説明をしないでくれました。

「二夏は当初、『ユナイテッド・ワイバーン』の元になった二種の量産型機の内一機を使って練習に励んでいました。

その頃はまだ乗り始めて間もない、初心者と言って差し支えない腕前でしたよ」

懐かしそうに目を細めたアイリさんでしたが、その視線はどこか下向きでした。

「ですが、其の後……何度か大規模な事件があったんです。

一夏自身はまだ戦力になれるほど強くないという事で、実戦に出ることは滅多になかったんですが、それでも偶発的に戦闘や何かに巻き込まれたことは何度かありましたね。

今にして思えば、素人同然の人間がそのような状況で準備も不十分なまま戦闘に巻き込まれたにも関わらず、救出や支援が入るまで生き残っていたという時点で、才能の片鱗が出ていたのかもしれない」

「……！」

その言葉の意味を考えた時、戦慄が走りました。

もし、私と同じようにISに触れたばかりの頃にそんな戦闘に巻き込まれでもしたら――。

(無理だ……私じゃ、同じことはできない……！)

そんな私の様子に気づいているのかいないのか、アイリさんは視線を天井の方へと移して話を話し始めました。

「彼が私たちの所に来て暫く経って、詳しくは話せませんがある事件

がありました。

《アステイグ》を手に入れたのは、その時です。そして、その時に一緒にいた三人組……内一人は、貴方も知っているバルトシフトさんですが、その人達と一緒に戦ったのです。と言っても、あの時の一夏の役割は参加した他の人の予備の武器の運搬等でした。

つまり、あの時もまだまだ機体機音を動かす分には何とか問題ないという程度で、とても実戦に耐えられる実力ではない……はずでした」

そこで、少しだけ言葉を区切ってから続きに入りました。まるで、その話の内容を話す前に確認するみたいに。

「ですが、その予想に反し……偶発的な要因による鹵獲とも言えますが、一夏は《アステイグ》を手に入れました。そして、その後から当時一緒にいた三人と戦う事となったのですが……一緒に戦っていた三人は、その戦闘が終わった後の報告で口を揃えてこう言ったんです。

『あの時、あの瞬間に限って言えば、一夏は確実に自分達を凌駕していた』と」

「凌駕していた、って……」

あまり意識せずに発した私の呟きに対する答えとして、アイリさんはより具体的な表現を用いてきました。

「そうですね……本来なら格上と表現できる相手を前に、自身の機体を一撃で葬り去るような攻撃に一切当たる事無く完全に避けきり、しかも自分の攻撃はほぼ確実に当てる。それも、本来機動性に特化した機体では動きづらいだろう限定された空間の中で。

それに近い事を、《アステイグ》を手に入れたばかりの一夏は実行したそうです」

「そんなの……人間技じゃない……!」

私が畏怖にも似た感情を持つて思わず口にする、アイリさんが補足するように話し始めた。

「ですが、それを熟せるだけの機動力と攻撃能力が《アステイグ》にはありましたし、一夏はそれを十分以上に引き出して見せていた。

無論、先程話した三人組も一緒に戦闘に参加したのですが、戦果を

挙げたのはむしろ一夏の方だったとも言っていましたね。同時に、おそらく一夏以上に《アステイグ》の性能を引き出せる人はいないのではないかと、とも」

それは、一体どんな凄まじさだったのだろうか。

明らかに当時の影内君よりも腕の良い人達から、手放しに認められる。どんな操縦をすれば、そんな事を現実足らしめることができるのだろうか。

(想像以上だ……一体、影内君はどれだけ強いのか……!?)

「その後、何度かの戦闘や鍛錬も挟んだりした後、一夏が最初の師匠とも呼んだ私の身内とも話して、一夏に関してある結論が出たんです。

一夏の持つ最大の才能は、努力を一切躊躇わないというのもそうですが……同時に、第六感センスと呼ばれるものが、より具体的に言えば『当て勘』と『避け勘』と呼ばれる物が、異様なまでに鋭いのです。それこそ、天性の第六感であったと言えたでしょう。

そして、『敵の攻撃を回避する事』と、『攻撃を当てれば一撃必殺になり得る』という二点に特化した性能を持った《アステイグ》は、一夏の持っていたこの才能に、怖ろしいほどに噛み合い過ぎてしまったんです」

「で、でも……それだけなら、自分と最高の相性を持った機体との出会いっていうだけで済むんじゃない……」

私が咄嗟に放った台詞に対し、アイリさんは目を軽く瞑るとゆっくりと頭を振りました。

「……一夏が戦闘能力という意味で本格的に強くなっていったのは、大雑把に言えば《アステイグ》を入手した頃です。そして、私達と出会う前の一夏自身の経験から、彼は自分自身の強さを信じていなかった。

これらが大きな要因となった結果、戦闘能力という意味での自分の強さは入手した《アステイグ》による部分が大きく、自身の才能によるものではないと誤解してしまっただけです」

「……!」

この時のアイリさんの顔が切なそうだったのは、多分見間違いでは

ないと思います。

「しかも、一夏にそれに関する技能を教えていた人達、つまり彼が師匠と呼んだ人達が所謂その道の凄腕揃いと言う事も拍車をかけてしまいい……私達の所に来る以前は指導を受けた事その物がほとんど無かったというのもあり、それだけの能力を持っている人達から教えを乞うているのだから、強くなれるのは必然と考えてしまったみたいで……」

「それは、絶対に違う……！」

もし仮に、私が同じ様に教えを受けたところで同じ様には絶対にならない。それは断言できる。

「しかも、更に言うのであれば……」

一夏の持つ天性の第六感が発揮されるのは、極限まで追い詰められて集中力が異様に研ぎ澄まされた時の……つまり、命の懸かった瞬間の事。模擬戦や訓練では、ほとんど発揮された事は無いんです。

ですから、模擬戦等ではそれまでと余り変わらなかったんです。それでも、一夏自身の努力もあつて着実に腕前は上がっていったのですが」

補足で締めくくったアイリさんの表情は、決して晴れやかとは言えないものでした。

私としても、思う所は多分にあります。以前に箒と鈴から『織斑一夏』の過去を聞いた時の事と合わせて考えれば、特に。

(……織斑一夏だった時間が、今も影響を及ぼしているんだ。

でも、それでも……)

あれほど強く、完全とは言えないのかもしれないけど前を向いて進んでいる。でも、過去の記憶が足を引っ張っている。

「それと、今までの話を聞いてもらえれば解ると思いますけれども。

一夏は、自分の戦闘能力のほとんどを彼が師匠と呼んだ人達から受けた訓練と、『アステイグ』の性能によるものだと考えています。

裏を返せば、この二つの要素が揃えば自身と同等程度まで多くの人がいけるとも考えていることでしょうかね」

「……そんな事って！」

淡々と、だけど血が出かねないほどに強く拳を握りしめたアイリさんを見て、私はそれ以上は何も言えませんでした。

(……『織斑一夏』を、『影内一夏』の事を大切に思っている人だって、ちゃんと居るのに!!)

もどかしい思いを抱きつつも、この場ではもう何も言う事が出来ずにそのまま会話へと戻っていました。

Side 鈴

「それで、私に話って何?」

「聞きたいことがあったの。」

でも、答えたくないならそれでもいいから」

今回の参加メンバーの中の一人であるギザルトさんに、無理言って来てもらっていた。本当はこっちが頼んだ以上、私の方から行くのが最低限の礼儀だと思っただけ、私が行く前にギザルトさんの方から来てくれていた。

「別に、答えられないようなこと以外は別にいいわよ。」

で、内容は?」

「……実は、影内の事で少し聞きたいことがあるのだけど」

そう言うと、ギザルトさんは少し驚いたような顔をした後にどこか納得したような顔になっていた。

「話せる内容は、多くないわよ」

「それでも、少しでも思っって。」

影内が師匠って言っていた人って、貴女なの?」

「違うわ。」

それは、あつちに固まっている人達の方よ」

そう言っってギザルトさんが指さして見せたのは、一部で固まっって何やら騒いでいる一行だった。あの中に入っていく気にはなれない。

「そういう訳で、私は一夏の師匠じゃなくてただの親友ね」

「親友、か……」

その響きに、どうしても少しの羨望を感じてしまっていた。だからか、どうしてもその馴れ初めが気になってしまった。

「よければいいけど。どこで知り合ったのか、教えてもらってもいい？」

「貴女、意外と遠慮無いわね」

別にいいけど、とも言いつつギザルトさんは話し始めてくれた。

「詳しくは言えないけど、最初に会ったのは仕事の関係よ。」

本当は別の人と色々と調整する予定だったんだけど、其の人が急用が入っちゃったみたいでね。内容が内容だったから、私も我慢してたけどさ。

一夏と会ったのは、そんな時ね。急用で少し遅れるって伝言を伝えに来てくれてたわ。ただ、そのまま待つのも暇だったから少し話し相手になってもらおうと思って、そのまま話し込んだんだけど」

そこで少しだけ話を切ると、多くの想いを込めながら再度話し始めた。

「その時に、一夏と私は、少し似ている部分があるって分かったから。だからかしらね、親近感が湧いたのよ。そのことを話したら、すぐに意気投合しちゃったわ」

誇らしげに、だけど何処か寂しげな雰囲気も混ぜながらギザルトさんはそれだけ話しました。

その内容が気になった私の心情を察したのか、ギザルトさんが説明の続きを始めてくれた。

「まず、一夏には搭乗者としての才能があった。私も人並み以上には才能があつた方だけど、それは同時に同年代の搭乗者が少ないって事でもあつて……ぶっちゃけ、同年代の搭乗者として親しく話せた相手なんて相当限定されてね。一夏は、そんな私にとって数少ない気の置けない相手だった」

「……まあ、さっきの戦闘を見れば才能があつたなんて分かり切っているけれど……」

同じことを訓練だけでやれと言われたら、私は裸足で逃げる自信がある。

(ま、実際はやれるだけやってやるけどさ)

そんなことを考えていた私の事を知ってか知らずか、ギザルトさんが話の続きを始めた。

「それと、最大の理由として……。」

「そうね、これを話す前に聞いておこうかしら」

「何を？」

真剣な顔で私を正面から見据えたギザルトさんの問いに、私も身構えた。

「貴女は、善意というものが常に誰かにとつての救いになる物だと思う？」

「思わない」

即答した。これだけは、何の躊躇いも疑いも無く答えられた。

「私もそれは同じ思いよ。」

だから、私と一夏は同じ痛みを知っていると云えたの。それだけとは言えないけど、多分それが一番大きかったと思う。

細かい事を言えば、一夏と私でその内容も少しは違ってたんだけどね」

「どういう所が？」

「そうね……。」

詳しく話すと一夏自身の過去にも触れないといけないからほとんど話せないけど、私は周囲の人が信じている物を全くと言ってもいいほど信じていなくて、よくて形だけ。言ってしまうえば、周囲の反応を立場に関係ある時しか気にしないってところかしら。

反面、一夏は過剰なほど周囲の反応を気にしていたの。私はそれに早い段階から頭角を示すことができたけど、一夏はそうじゃなかった、或いは示しても一夏自身の物にはならなかったからでしょうね。

今でこそ大分改善されているように思えるけど、それでも自分の事を根本的なところで軽視しているような部分が見受けられるのが、ね……。」

そこまで少し暗い声音と表情で話していたけれど、そこでギザルト

さんは一気に雰囲気を切り替えた。

「ま、一夏が私の親友だつて事には変わりないから。

それだけは断言できるわね」

最後に、少し悪戯っぽい笑顔でその言葉を言ったその姿を、私は素直に眩しいと思った。

Side 箒

「えっと……あの……」

影内の師匠だという人達と話すために近づいたまでは良かったものの、一種の異様な雰囲気呑まれてなかなか近づけずに居た。

「……どうしたの？」

そんな私の元に、両手に料理の乗った皿を器用に持ったアイングラムさんが来てくれた。どうやって食べてるのだろうと思つたのは完全な愚問だと判断し、そのまま聞きたかつたことを聞くことにした。「その……影内がよく師匠と呼んでいる人のことを話していたので、良ければ誰なのか教えていただけないかと思ひまして」

「いいよ。」

ルーちゃん、呼んでる」

アイングラムさんが仲介し、黒いローブを相変わらず着込んでいたルクスさんと呼んでくれた。

「一夏君の師匠に、会いたかつたんだつて」

「そ、そっか。」

えっと、剣崎さんだつたよね？ 一応、僕が最初の師匠つて呼んでもらつているよ」

「あ、えっと……改めてですが、お会いできて光栄です。」

先の作戦を含め、諸々、お世話になります」

突然の事であつたために少々間拔けな返答になつてしまつたが、それでも会えた分は前進だと思つて前向きに考えることにした。

「でも、ここに居る全員が師匠と言えば師匠なんだよ。」

皆、何かしらを一夏に教えていることだしね」

「許可します。」

一夏の体力関連を鍛えたのは私です」

ルクスさんが苦笑とともに言った言葉に、ラルグリスさんが心なしか誇らしげに体を反らしながら答えた。

「……………ん？」

あの、失礼ですが、もしや貴女が影内の特訓メニューを考えたのですか……………？」

「ええ、そうですよ」

アイングラムさんの時も思ったが、人は見かけによらないと思っただ。特に、影内の師匠達は。

が、ここでそのことを追及しても仕方がないと思い直し、話題を変えることにした。

「先の戦闘ではお世話になりました、ありがとうございました」

「その礼は不許可ですよ。」

それが、今回の私達の為すべきことだったのですから」

「そうね。それに、貴女もよくやっていたじゃない。」

もう少し誇ってもいいんじゃないのかしら？」

ラルグリスさんの言葉を引き継いだのは、エインフォルクさんだった。そして、その言葉に、ラルグリスさんも頷いている。

「……………過分な評価、痛み入ります。」

ですが、貴女達や貴女達の弟子である影内の方が活躍していたのも事実です。それに、影内とは普段からある程度良くしてもらっていますから。

追いつきたいという思いも無きにしても非ずですよ」

「追い付きたい、か……………」

そう言つて貰えれば、一夏も少しは自分を認めてあげられるのかな……………」

私の返答に対して、ルクスさんはどこか物憂げな様子で独り言のように呟いていた。

「……………？ どういうことですか？」

確かに影内が普段から言っている通り、貴女達の方が腕前は上のよう
に思われます。ですが、だからと言って影内の腕前が認められない
などと言った理由にはならないと思うのですが……」

私が特に深く考えずに上げた疑問の声に、ルクスさんたちはそれ
も丁寧に対応してくれていた。考えようによっては、非礼ともとれる
発言をしたのに。

「まず、最初に言っておくけど……」

一夏は、凄く……自分の本心を隠すのが、非常識なほど上手だっ
たんだと思う。あるいは……自分でも気付いていなかったのかもしれ
ないけど……。

だから、これから話す事は推測とかも入っているから」

それだけ前置きすると、ルクスさんから話し始めた。

「一夏は、確かに普段は自分の命もちゃんと大事にするし、其の上で他
の人も守ろうとする。けれど、それは……余裕がある時の話だったん
だ。」

戦っているのであれば、其れこそ今回のような実戦の時は誰しもが
命を懸ける。それが必然になると思う。

けれど、どうしても勝ち目が無くて誰かが殿を務めて撤退しなけれ
ばならないとなった時や、途轍もない戦力差の中で足止めを誰かが努
めなければならなかった時、一夏は躊躇なく自分の命を懸けてし
まう。

もっと要約して言うと、どうしても命を懸けなければいけない時に
真っ先に自分の命を懸けようとしてしまうんだ」

「悪い言い方をしまえば、自分の命に限っては無自覚に使い潰す
方向へとその思考を走らせてしまうのでしょね」

その言葉を引き継ぐように、エインフォルクさんが続きを話し始め
た。

「多分、普段は釣り合っている命の天秤が、その時だけは自分の方が軽
くなっているのでしょね。」

だから、躊躇なく一番危険な場所へと踏み込んでしまう」

「私とは似て異なりますわね。」

私は未だに人の心と言うものに疎いですが、一夏はそれを知っている。だから、普段は私でさえほとんど気付かないほどに律することができる……引いては結果として隠せてしまう。或いは自分からですらも。

自分の命を、どう思っているのかを」

エインフォルクさんの話に続くように、切姫さんが言い放った。言葉の端々に気になる事はあったけど、其れ以上に内容が衝撃的過ぎた。

「実の所、私達の所属している場所は諸々の事情が重なって一夏のように腕のいい、あるいは腕の良くなる可能性が十分にある搭乗者を放っておくことができなかつたんだ。

アイツの腕前は知っているが……追い込まれたときの判断が、生き残る方ではなく敵を殲滅するために自ら命を懸けに行く方向へ行きがちになってしまうのが、どうしても不安を拭えなくてな」

それは、おそらく影内が師匠と呼んだ人達の共通認識なのだろう。ほぼ全員が一抹の不安を感じていることが見て取れた。

「今までの話を聞いてもらえれば分かると思うけど、僕は多分、一夏が言うほど出来た人じゃない。本当に出来た人なら、早々に一夏の精神的な問題を見つけて、論じていただろうから。

今回のように、事前にちゃんと準備できるのならまだいい。けれど、どうしても緊急での対応が必要な時があるから、不安は残る。

それでも、できる限りは一夏の助けになるよ。それが、一夏に師匠と呼んでもらった人の、最低限の責務だと思うから」

(……ああ、これは確かに尊敬に値する相手だな)

優秀ではあったが人間ができていなかった人、というのを二人ほど知っている。だからと言うわけではないだろうが、この人達が真剣に影内個人の事に気を配っていることがなんとなくわかった。

(私も、今この瞬間は友人でいさせてもらっていることだしな。

一夏の時の後悔は、もう二度とごめんだ。なら、私もできる限りは……)

話を聞き、心の中で一つの決意を固めていた私もいた。

S i d e 一夏

「先の戦いぶり、凄まじい物でしたわね」

「元々、あれが俺の役割だしな。」

それに、俺よりも師匠達の方が凄まじかっただろうに」

「だからと言って、貴方の戦いぶりが無かったことになるわけでもないでしょう」

オルコットが来てから、少しばかり話し込んでいた。

相も変わらず、それこそ俺よりも腕前師のいい人達匠の戦いぶりを見ているにも関わらずだ。

「評価してくれるのは素直に嬉しいが、まだまだ手放しで喜べもしないのではな」

「ストイックというか、謙遜が過ぎるというか……。」

だからこそ、貴方ともう一度戦いたいのですがね」

そこまで言ったところで、オルコットの表情が変わった。その顔には、静かながら同時に内側で闘志の炎に薪をくべていることが容易に分かる表情を浮かべている。

「影内さん。」

今度、よろしければ《アステージ》の方で、私と試合してくれませんか?」

第五章（7）：蒼い雫

S i d e 一夏

「本当に、いいんだな？」

「ええ。」

これは、ある意味では私にとっての儀式の様な意味合いもありますから」

「師匠達相手ならともかく、俺では大仰すぎるだろうに……」

思わず苦笑しつつ言った台詞に、オルコットは静かに首を振った。

「それは過小評価というものですわ。」

代表候補生が国家代表と闘って勝負にならないから弱いと言っている程度には」

そこまでか、と疑問の声を上げた俺に対してオルコットは確かな確信を持って頷いた。

「ええ。貴方の、本当の意味での『本気』を知る事。そして、私自身の今の実力を直視する事。」

それすらも出来ずして、貴方を撃ち抜くなど叶うはずもないでしょうから」

オルコットはいつそ清々しいほど澄み切った笑顔で宣戦布告を言い切った。

既にその身には《ブルー・ティアーズ》を纏っており、臨戦態勢を整えている。

「……なら、俺も対等な条件の上で全力を出させてもらおう。」

「ご要望の通り、《アスデীগ》のほうでな」

かく言う俺も、既に《アスデীগ》を召喚し、コネク接続を済ませてある。いつでも始められる態勢だった。

『それでは、試合を開始します』

アナウンスが流れ、試合の開始が告げられる。

場所はデュノア社が保有していた施設の中で、生き残っていた施設の一つ。稼働試験も兼ねてとのことだったが、それは多分、大義名分の類の物だろう。

こちらの要望を聞き入れてくれたデユノア社長には頭の上からな
い思いだった。

(さて……最初はどうか出てくる?)

《機竜光翼》フォトンウイングを用意し、いつでも攻撃及び回避の両方に移れる様に備
えておく。対して、オルコットは手にした長大なレーザーライフル
《スターライトMk-III》を躊躇なく、尚且つほぼ一瞬と言つてもいい
ほどの時間で照準を合わせ、撃ち放つてきた。

ビシユ!

いつぞやのクラス代表決定戦と同じような幕開けだが、あの時とは
互いに違うものも多かった。

ゴツ!

撃たれたタイミングに合わせ、《機竜光翼》を用い回避すると同時に
オルコットの方へと接近する。

「《竜毒牙剣》、ライフルモード」

両手の《竜毒牙剣》をライフルモードに変更し、牽制射撃を放つて
いく。元より大した攻撃になるとは思っていないが、それ以上にオル
コットがこちらの予想を上回ってきた。

「あの時ならともかく……今なら、その程度!」

オルコットは躊躇なく射撃を止めると、そのまま回避へと移ってい
た。だが、あのライフルは握りしめたまま、すぐにでも再度の攻撃へ
と移れる体勢を維持している。

そして、回避軌道の最中、一瞬で狙いをつける的確な射撃を仕掛
けてくる。此方も接近を試みるものの、回避と並行して行わなければ
ならない以上はやはりやり辛さを感じざるを得なかった。

(だが、それでも踏み込めないほどではない……!)

再度、《機竜光翼》を使い加速。同時に、《竜毒牙剣》の片方をパワー
ドモードへと変更。楯代わりに振るいつつ、最速を持って此方との距
離を詰めていく。

「強引ですわね……ですが!」

オルコットが周囲へと円形に《ブルー・ティアーズ》を配置した。そ
れをそれぞれにタイミングをずらしながら、絶え間ない射撃を仕掛け

てきている。しかも、それぞれ微妙に射線をずらしていることで避けるべくして避けた。

さらに、ビットの軌道をかなり制限することで制御の負担を軽減しているらしかった。かなり限定的ではあるものの、自身も移動しつつそれに追従させる形でビットを操っている。

「今回こそ、その剣舞を私と《ブルー・ティアーズ》の円舞曲で凌駕してご覧にいただけますわ！」

絶え間ない射撃の中、オルコットが一切の油断なく宣言してみせた。

「中々だ……だが！」

だが、俺もこの程度で止められるものではない。

「生憎、荒っぽいダンスを踊り慣れているんな。」

もう少し早いテンポで頼む！」

瞬間、推進器と《機竜光翼》フォトンウイングを同時に操りつつ、脚部で機体のバランスを意図的にある程度崩して回避軌道を取っていく。同時に、牽制としていたライフルモードの《竜毒牙剣》をパワーモードへと変更しておき、防御をしやすくしておいた。

(さて、その攻撃方法でいつまで持つ?)

オルコットも何時かに戦った時とは見違えるほどに強くなっていくことがわかる。複雑な操作に固執することなく、あくまで現状に対して有効と思われる戦術を繰り出していく。そして、それは一撃一撃の精度に現れ、同時に自身も動いていることから接近までの猶予を引き延ばしていた。

しかし、絶え間なくビットを使っているという事は――

「……くっ！」

このままでは……」

――エネルギーを補填する間が無いという事でもある。

五分と経たない内に、《ブルー・ティアーズ》のビットのエネルギーが底をついたらしかかった。やはり、稼働時間の問題は払拭できていないらしい。

「そっ！」

オルコットがビットのエネルギーを補給するために肩のアンロック・ユニット非固定浮遊部位へと戻した瞬間を狙い一気に距離を詰める。

「見逃しませんね……だからこそ！」

だが、オルコットも二の手が無いわけではなかった。腰の細長いアーマーからあのミサイルタイプのビットを撃ち放ってくる——だけではなく。

「ッ!？」

ビシユン!

此方がミサイルを切り落とした時の爆炎と煙により視界が奪われたその一瞬に、ほぼ最高と言ってもいいのではないかと思われるタイミングで《スターライトMk-III》の引き金を引いてきていた。

「味な真似を！」

咄嗟に二刀の《竜毒牙剣》を壁代わりになるように円形に振るい、被害を抑える。だが、それでも無傷とは言えなかった。

だが、裏を返せば——この、距離は。

「悪いが、俺の距離だ！」

《機竜刃麟》ブレードアーマーも展開しつつ、両手の《竜毒牙剣》とともに一気に攻め立てる。最初に片方の《竜毒牙剣》で切り裂いた後に、両腕と両足の《機竜刃麟》、最後に残っていた方の《竜毒牙剣》による神速制御クイックドロウを締めとした連撃を仕掛けた。

ザザザザザギイイン!

オルコットは無理に受け止める事は無く、機体を後ろに下げつつ左手でかわしきれなかった分を受けていた。攻撃を受ける羽目になった左腕は辛うじて動く程度の大破だったが、半面、右腕はほぼ無事だった。

そして、無事だった右手のみでライフルを発射。一拍空けてから再度展開されたビットによる時間差の攻撃が此方へと襲い掛かる。

が、ここまで近いとオルコットがライフルを構えるまでの一動作の間にその射線から外れることなど容易く、ビットの射撃は無理をせずにパワーモードの《竜毒牙剣》が纏う防御障壁を利用して防いでいく。

「ならば！」

オルコットが再度、ミサイルタイプのビットを放とうとした。

だが、それはこの状況では悪手だった。

「ロングモード」

わずかに空いていた距離を一気に詰めると同時に、《竜毒牙剣》の形態を変更。さらに――

「神速制御」
クイックドロウ

――神速をもって振るい、腰に付いていたミサイルビットの発射口を潰した。

オルコットが一瞬、驚愕の表情に包まれる。だが、すぐに笑みを浮かべた。

「……お強いとは、分かっていましたか。

やはり、手も足も……」

だが、それは現状の不利を自覚しての事。或いは、最初の台詞からして既にある程度覚悟していたのかもしれないが、さすがにそれだけで終わりというのは余りにも呆気なく感じた。

「まさか、その程度では終わらないだろうか？」

撃ち抜いて見せろ、オルコット！」

故に、この言葉をかける。

彼女が試合前に言った言葉は嘘ではないと信じて。

S i d e アイリ

「中々、オルコットさんも善戦していますね。

ですが、やはりまだ一夏には及ばない、でしょうか」

試合を見つつ、呟くように言っていました。

今現在、この試合を見ている人は実は多くいます。施設を貸してくれたデユノア社の方々を始め、機竜側から来た面々に、IS学園でよく一緒に行動している方々、ドイツの黒^{シュバルツェ}兔^{ハイゼ}隊の方々、イギリスの開発陣の方々。

(意外に、多いものですね)

周りをほんの少し見渡しただけでも結構な人数が目に入り、改めてこの試合が当人たちの考えているよりも注目されていることを実感します。

ですが、そのほとんどが納得できる立場の方々なだけに、そう意外な事でも無いのかも知れませんが。

「でも、油断は禁物ね。」

彼女も中々悪くない腕前だし」

「ええ。まだまだ改善できそうな点も多いですが、それをよく分かった上で戦術を組み立てて行っている傾向が見られます。」

自分の弱さも強さも知っている、油断ならない相手ですね」

クルルシファアーさんとセリステイアさんがそれぞれ口々にオルコットさんを評価していました。

「……でも、一夏君も負けてない」

「ええ。」

実戦経験の違いというものを教えて差し上げなさいな」

フィルファイさんが相変わらず言葉少なに的確な表現で形容し、夜架さんが聞こえてはいないでしょうけども激励ともいえる発言を発していました。

「私の背中を任せられるような奴が弱いわけではないじゃない」

ギザルト卿は自信満々に言いつつ、どこか誇らしげに胸を張っています。

「ふ……私たちと共に闘い抜いた仲間であり、そして愛弟子でもあるんだ。」

「そうそう簡単に負けるものか」

リーシャ様も誇らしげです。事実、一夏はすでにアテイスマータ新王国でも実力でいえば有数の機竜ドラグナイト使いでもあるので、何もおかしなことなどないのですが。

(さて……ここからはどう戦う気ですか？ 一夏)

一夏の勝利を信じながら、私も私で試合の経過を見守っていきました。

S i d e セシリア

(まだ……全然、届かない！)

彼と私の腕前の差は、分かっているつもりでした。

ですが、改めて対峙した彼の『本気』は、私の想像を超え、戦慄を覚えざるを得ないものでした。

「まさか、その程度では終わらないだろう？

撃ち抜いて見せろ、オルコット！」

(そうですね……こんなところで！)

思い起こすのは、影内さんと最初に対峙した時の事。

『俺は、最初から全力で勝ちに来るお前に勝ちたかったよ』

最後の最後。あれほどの暴言を吐いていた私に対し、影内さんがくれた言葉は余りにも意外なものでした。

飾りなどは無く、無骨なまでに、だからこそその言葉の真意が伝わってくるような、そんな気のする言葉。

あれほど傲った私を正面から切り伏せたうえで、尚そんな言葉を紡げる。

その、愚かなまでの眩しさに。輝かしいまでの愚直さに。決して自らが傲る事を許さぬ先達への敬意に。

私はきつと、久方ぶりに当たり前の感情を抱いていた。

それはきつと、多分、競技に参加したことのあるISの搭乗者ならば誰もが一度は持ち得るはずの感情。

(この人に……勝ちたい)

誰もが最初は弱い物。故に、誰もが最初はそれを夢見る。だけど、夢に見るだけでは終われないから。夢に見るだけで終わりたくないから。

だから、誰もが強くなろうとする。勝ちたいと、願い。その願いを、叶えるために。

(何時から、だったのでしょうか……記憶の片隅からすらも消え去っ

てしまったのは)

だけど、強くなるほどに。勝てるようになるたびに。勝つことが、徐々に当たり前になっていくたびに。

何時しか、傲り高ぶるようになってしまった。思考の上ではまだまだ強い人がいると分かっている、感情の上では自分に酔いたくなってしまう。

私は、そんな一人でした。

(ですが、そんな心の淀みも見事に切り伏せられた。

力のみならず、何を語るでもないその姿からさえも……)

ただ、己の研鑽を怠ることは無く、相對した時に全力での勝負が許される状況ならばそれを望む。

相手が例え格下であろうとも、侮りはせず、けなしもせず、ただ己の目指す果て無き高みを目指していく。

実戦ともなれば先陣を切り、己の役割を熟す。確かに恐怖があるでしょうに、それを見せる事も無く。

多分、抱いたのは憧れにも近い感情だったことでしょう。

嘗ては、私もそうでありたいと願い、そうならうと研鑽を積んだ時代もありましたから。

無論、オルコット家存続のために代表候補生になったという面があったのは否めません。私にあったB T兵器への適性がイグニッション・プラン次世代機開発計画に対して有利に働くということも手伝った、言い換えれば私自身の腕前では無い部分で選ばれる要因があったのも事実です。

ですが、代表候補生の訓練課程の中で実際に軍の訓練にも参加して行くうちに、IS搭乗者として祖国を守る一人になれたという事と、試合の中で勝ち上がっていく喜びを見出していたことも事実でした。

だけど、心は何時しか淀み、確かにあったはずの誇りは下らぬプライドへと置き換えられていった。

(ですが、今は……)

出会ってしまった。

嘗て私自身がそうでありたいと願った姿を体現したような、其の人

に。私が忘れてしまった姿を思い出させてくれた、其の人に。

(故に、こんなところで……！)

終わりたくななど、ない。

届かぬ憧れのままに、終わらせたくない。

「ええ！」

このままで終わるとは思わないでくださいまし！」

自分でも意外なほどの音量で出た声とともに、ライフルタイプの《ブルー・ティアーズ》を四機とも射出しました。そもそもミサイルタイプは既に発射口を破壊されているので使えないのですが。

射出した《ブルー・ティアーズ》を破壊しようと剣を振ろうとした影内さんに、《スターライトMk-III》を撃って回避行動を取っていたできます。たったの一動作ですが、《ブルー・ティアーズ》を配置するまでの時間を稼ぐには十分でした。

「今度こそ！」

そのまま、狙いは多少大雑把でもいいのでとにかく数で押ししていきます。影内さんを囲むように配置したそれらから放たれた攻撃は乱射と言って差し支えないでしょう。そして、時には照射時間を長めにとって撃ちながら照準を調整していきます。弾丸というよりは擬似的な刃に近い感じですよ。

「《機竜刃鱗》！」

ですが、そのような五方向からの弾丸の雨すらも、影内さんは上を行きました。あの全身に装備した刃を展開すると、その一つ一つを用いて乱射された弾を文字通りに全て切り裂いて見せたのです。その動きは荒々しいと同時に洗練された剣技でもあり、ある種の舞の様にさえ感じます。

「切り裂くなんて！ 本当に貴方は人間ですか!？」

「失礼な！ 俺はまだまだ人間だ！」

人間技とは思えない動きに思わず上げた叫び声に、律儀にも影内さんは答えていました。声が若干不服そうに聞こえたのは、目指している場所が違うからなのか戦闘経験を積んできた場所が違うからなのかでしょうか。

「それに、この程度で諦めるような人間でもないだろう!？」
「無論ですわ!」

確かに人外染みた剣戟に驚きこそしましたが、鬪志の炎は全く衰えることを知らず。むしろ、目指す高みを認識するほどにその場所への渴望を薪に燃え上がっていった。

だけれど、思考は鬪志とは全く逆に静まり返った湖のように冷静で。

倒すという強い決意と、ひどく冷静な思考。戦略を思考し、それを実行に移していく。

ですが、その尽くを影内さんは切り伏せていく。私の想像を上回るほどに積み重ねた鍛錬と経験によって。

(……足りない)

だからこそ、認めざるを得なかった。今の私では、今のままの私では、どう頑張ってもこの人を超越することはできないと。

(だから何なのですか!)

だからと言って、このまま終わるのを認めるわけにはいかない。足りないというなら、足らせるまで。

(……そうですわ)

今のままでは無理筋と言うのなら、ほんの僅かでも一瞬一秒前の自分を越えるまで。

(越えればいいだけ。足りないというのなら、満ちていないというのなら……)

鬪志の炎が制御できていないと言うのなら、ほんの少し、雫の一滴でもかけて冷静になりましょう。

思考の湖がまだ満ちていないと言うのなら、僅かながらの雫の一滴でも満たしましょう。

——そう、私には蒼い雫が共に在ってくれるのですから。

「……な、にっ!？」

刹那、私自身ですら思いもかけない一撃が放たれて——。

S i d e アイリ

「これは……!?!」

一夏が被弾した攻撃に、私は少なくとも無い衝撃を受けました。それは私だけではなく、兄さん達も驚いたり唸ったりしています。

「おお……まさか、ここにきて至るとは……!」

その中で、一人、明らかな驚嘆を示している人が居ました。イギリスのIS開発主任だという人、つまりオルコットさんに《ブルー・ティアーズ》を託した人です。

「偏光射撃……第三世代兵装である《ブルー・ティアーズ》が最大稼働状態となったときに使用可能となる攻撃方法だ。」

だが、それもあくまで理論上の話。今まで、この攻撃を実行できた人は居なかった。年単位の時間を掛けてもできるかどうかと思っていたが、それをこんなに早く見れるとは……

開発者さんは感極まったように、少し涙声で言っていました。

「《ブルー・ティアーズ》が最大稼働状態となった時のみ使用できる攻撃方法……つまり、今のオルコットさんは《ブルー・ティアーズ》の性能を引き出し切っている?」

「そこまで言うのは早計だが……確実に、その領域へと近づいて行っている」

私の疑問の声に、開発者さんが幾分冷静さを取り戻した声で答えていました。

「……オルコット君には、元々才能は有った。後は、精神的、技術的な面で開花する条件さえ揃えばと踏み、IS学園行きを提言したが……そうか。無駄ではなかった……」

的確にデータをとりつつも、その声はどこか感慨深げです。それだけ、この人には《ブルー・ティアーズ》に対して費やしてきた物が、或いは彼女へと期待していたものがあったという事でしょうか。

(ですが、この位の事で倒される貴方でもないでしょう。

信じて待っていますよ……それだけしか出来ないのが……)

心の奥底の想いを表に出さないように気を付けつつ、再び試合を見守っていききました。

Side 一夏

「……な、にっ!?!」

目の前で起こったことに一瞬、思考の隙間ができてしまった。オルコットの放つビーム相手に、それは隙にしかならない。しかし、だからと言ってもこれに驚くなどというのは出来なかった。

だって、誰も考えないだろう。まさか、目の前で放たれたビームが曲がるなどは。

「パワーモード!」

咄嗟に《竜毒牙剣》の形態を切り替え、曲がった末に俺の方へと向いたビームを防ぐ。

だが、この現象はこの一度だけに止まらない。背後からの一撃を回避したかと思えば横からの一撃に変わり、或いは避けにくくなるように複数のビームを同時に曲げることで逃げ場をなくそうとしたりしていた。

「こんな隠し玉があったとは、な……」

何とか一通りの攻撃を凌ぎ、こちらの損傷を軽微に済ませた。

一方、この攻撃を仕掛けたオルコットはと言うと――

「……ま、まさか……」

――自分で自分の攻撃に驚いていた。

今まで訓練に付き合ってきた中で俺も見たことのない攻撃だったが、オルコットの反応にもしやと思った。

「……今しがた、出来るようになったのか」

確かにあのまま終わるとは考えていなかったが、だからと言って無茶苦茶にもほどがある。試合中の土壇場で新しい操縦技術を習得するばかりか、あまつさえ戦術として昇華させるなど。

「ええ……今しがた、出来るようになりました。」

まだまだ十全とは行きませんが……それでも、狩られるばかりの私ではなくまりましたわよ?」

「別に狩られるばかりではなかっただろうに。」

だが、その力で倒しに来るといふのであれば……一切の油断も容赦もなく、切り伏せさせてもらおう!」

「ええ。それでこそ、ですわ!」

互いに短く言葉を交わした後に、飛翔。

オルコットは距離をとるように、俺は距離を詰めるように。

(厄介だな……)

ビームが曲がるようになったことで、射線が読みづらくなっていた。今までならビットの位置と向きから比較的簡単に射線が読めたが、撃つた後に曲がるようになったことでオルコットの射撃の自由度が格段に上がっている。

それは単純に今まで以上に回避や防御へと注力せざるを得ないという事実を示しており、ひいては此方の不利へと繋がる事実だった。

(まあ……それでも師匠^{ルクスさん}ほど勝ち目が無いわけではないか)

気持ちを切り替え、改めてオルコットの新しい戦術についての攻略法を思考する。

これまで通りでは持久戦が確定するが、それを《アスデীগ》で実行するのは得策とは言えない。何より、《アスデীগ》の燃費の悪さとそれに起因する消耗の速さを考えるのであればむしろ下策とさえ思えた。

「なら、手は決まっているな……!」

狙うは一気に踏み込んだの決戦。究極的な見方をしてしまえばあの曲がる射撃も、射撃であることには変わりがない。つまりは遠距離攻撃。

位置関係を変えやすい近接戦では自身への誤射の可能性が拭えない以上、使用頻度はどうあっても減る。そして、それは同時に《アスデীগ》の得意な距離でもある。

(後は、そこまでどうやって接近するか。

手は無いわけではないだろうが……今考えているものでは、賭けに

なるな)

いの一番に思い付いた策に自分で苦笑してしまいました。考えようによっては《アステイグ》の特性を殺しかねない策であることに思い当たってしまったからだ。

「……えっ?」

オルコットが一瞬、呆けた声を上げた。だが、それも仕方がないだろう。なんせ、今撃とうとしていた相手が急停止したのだから。

其の結果、移動先を読んで撃った射撃は全て外れる。

「フォトンウイング機竜光翼」

さらに、今現在の此方へと撃たれた射撃に関しては到達する前に《機竜光翼》による急加速によって回避。

「まさか……そのような……!」

オルコットが此方の考えに気付いたらしい。信じられないといった表情をしていた。

確かにやっている事は中々に分の悪い賭けではある。移動先を予測して放たれた射撃は急停止して回避し、今いる場所へと撃たれた射撃は急加速によって避ける。射線が曲がるという現象は脅威だが、停止して最終的に攻撃が来る場所を其の場へと限定してしまえば予測は容易かった。

(さて、此方の距離に入るのが先か、オルコットに撃たれるのが先か……)

俺としても僅かなタイミングの狂いが命取りになる状況に、一瞬たりとも気を抜けない。停止と加速、どちらか一方でもタイミングが狂えば当然、被弾する。今のオルコットならばその隙に攻撃を続けて当てることもやってのけるだろう。

しかも、この方法だと体へとそれなりに負担がかかる。元々、機竜はそこまで急停止や急加速は得意ではない。

(だがまあ、手抜きは失礼極まりない事だし、な!)

全力を以って、オルコットを倒しに行く。

それこそが、この試合を望んでくれた彼女への最低限の礼儀というものだと思つたから。

S i d e セシリア

(何てこと……まさか、こんな方法で!?)

急停止と急加速を繰り返しながら、影内さんが確かに距離を詰めてきています。

(確かに、狙われる場所とタイミングを絞ってしまえば偏光射撃フレキシブルと言えど回避は可能です。

ですが、それをまさかこの短時間で……!)

移動先を狙った射撃は急停止によって予想を狂わされ、逆にその場を狙った射撃は一瞬で途轍もない速度まで加速することによって避けられ、二点を狙った攻撃はそれ以外の場所へと行くか、あの大剣によって防がれる。

「本当に、どれだけの経験を積んできたのですか!? 貴方は!!」

偏光射撃フレキシブルへと至って尚、足りない。その埋めがたい差を前に、羨望とも嫉妬とも言える感情が鎌首をもたげてきます。

「それなりの経験は積んできたつもりだ。

だが、そんな俺を倒すと言ったのはお前だぞ!」

ですが、それらはただの一言を皮切りに全て闘志の炎へと薪となつてくべられていきました。

「ええー! そうでしたわね!!」

再び、全力で墮としにかかる。最早、劣等感やそれに近い感情を抱いている余裕等ありませんでした。

ビシユシユシユシユン!

出来うる限りの軌道予測と射撃精度を以ての全力攻撃。偏光射撃フレキシブルも混ぜて放ったそれは、並みの手合いならこれだけでも決定打となるでしょう。

ゴツ!

ですが、影内さんは急加速と急停止を駆使して的確に避け、避けきれなかった攻撃は全身の剣で切り裂くか大剣で防いでいっています。

攻防の結果としては、総じて私の不利。ですが、終わってはいません。

「まだまだー！」

密度も精度もさらに上げていき、より攻勢へと打って出ます。どのみち、守勢に出たところで私の不利は覆せません。

「いい攻撃だ……だが！」

その攻撃さえも、あの狂的な域にある回避能力の前に避けられません。

ドゴツ！

影内さんが何度目かの急加速を仕掛けた瞬間、私の視界から消えました。

ほとんど反射と言える反応のままに、私は《スターライトMk—III》を目の前に簡易の楯代わりに構えます。

ザギインツ！

ですが、それは無意味な事でした。見事な膝蹴りと、その膝部分についた刃によって《スターライトMk—III》は切り裂かれるだけに止まらず貫通しました。

そのまま押し出されるように、私自身へと膝が突き刺さってきてきます。その勢いは馬鹿馬鹿しいものがあり、私は呆気も無く地面へと叩き付けられました。

「俺の勝ちだ、オルコツト」

そうして地面へと大の字になって寝転がっている私の首元へと、未だ立ったままの影内さんの大剣が突き付けられます。それは、どのようなもなく私へと敗北の実感を植え付けていきました。

「……ええ。そして、私の敗北ですわね」

自然と、敗北を認める台詞が口をついて出てきました。

ですが、そこに暗い感情はありません。

（何時ぶりでしょうね……ここまで、負けて清々しい気分になったのは）

立場もしがらみも主義主張も何も無く、ただ全身全霊で試合へと臨んだ。結果としては負けてしまい悔しい思いは尽きませんが、それは

これからの私の原動力となって新しい場所へと導いてくれることでしょうか。

故に、今すべきは勝者への惜しみない賛辞です。

「貴方と今ここで戦えたこと……誇りに思います」

ですが、思っていた以上に疲労の色が濃い今では碌な言葉を紡げませんでした。

「……それは、俺もだ」

短く、だけど今の私にとっては最大級の賛辞とも言える台詞に、胸が震える思いでした。

影内さんが剣を収めたのを確認してから、震える足を叱責しつつ立ち上がり、正面から見据えます。

「何時か……何時か、貴方に勝ちます」

「ああ。待っている」

待っている。根拠も何もない期待ではなく、ただ何時かはそうなるかと疑い無く信じているということなのでしょう。

「そして……貴方と、肩を並べられるような搭乗者になって御覧にいきますわ」

「……そう、か。」

俺に対しては過分に過ぎる評価だが……其の目を、楽しみに待っている」

楽しみに待っていて下さるのはとても嬉しいですが、いまだにご自身の事を特に評価しようとしなないその態度にほんの少しの苛立ちと、悪戯心が湧いてきました。

「私と戦ったことを誇りに思っして下さいのであれば、どうか貴方自身を誇ってくださいまし。」

それこそが、最大の称賛ですわ」

「そうは言われてもな……」

「歩みを止めなければよいだけでしよう。」

それとも、私はそのくらいの価値さえないほどの手合いでしたか？

「そういう事では無いが……だからと言って、な……」

割と本気で困っているような様子の影内さんに、不思議と笑みが誘われました。

「冗談ですわ。ですが、過ぎた謙遜は相手に対する侮辱も同様であること、覚えておいてくださいまし。」

貴方の場合は目指す高みが遥かな場所であることも原因の一つなのでしようが」

そこまで言うのと、互いに向き合い直して右手を差し出し合いました。

「改めて、今日はありがとうございました。影内さん」
「此方こそ」

そして、未だ少し震える手で握手を交わしました。

これが、この試合の幕引きでした。

第五章（8）：疑惑

S i d e 一夏

「どんな状況なんだ……」

今現在、俺達は帰りの飛行機の機内にいた。面々は機竜側から来て頂いた人たちに、此方側の協力者である更識会長たち、そしてIS学園でよく一緒にいる面々。出発時は一緒に居なかつた最後の面々は更識会長が許可したために乗れることになったらしい。元々、この面々は民間の航空機で帰ることになっていたので割と喜んでいたりするのだが。

「……では、このような場面では……」

「……いや、そうであるならばむしろ……それに、射撃があれば……」

「ですがそれでは……」

「そうならば……その時はドリルで反撃を……」

「なぜドリルに限定したのですの……?」

そんな機内の中で頭を抱えることになった原因その一。

リーシャ様とオルコットが盛んに誘導装備とそれをを用いた戦術について話し合っていた。互いの機体特性に似通ったものがありつつも多くの相違点も持っている両者の話し合いは盛り上がっているようだ、近接防御の話し合いに入った途端にリーシャ様がドリルを押ししているらしかった。

（自重してください……）

心の中でそんな事を思いつつ、別な場所へと目を移す。

「……ですので、下半身の筋力を鍛えたい時は……」

「むう……そのような方法が……」

「ええ。他にもですね……」

機内で頭を抱えることになった原因その二。

あちらでは剣崎と凰がセリスティア先輩からトレーニング方法について色々と聞いているらしい。それはいい。それはいいのだが――

「待ってください。その方法ではすぐに限界が……」

「はい。ですので、最初から全力では行わずにまずは無理のない範囲から……」

「いえ、それだと最低ラインを超えたあたりで限界が来ますよね……！」

「為せば成ります」

「……!!」

——二人のトレーニングの基準が何かおかしなことになりそうな気がしないでもない。

(……オーバーワークにならないように少し注意しておくか)

今後の鍛錬に少しの不安が募ったが、今はどうすることもできない。

「師匠、頭を抱えてどうしたのだ？」

「何でもない……それよりも、その任を了承した覚えはないと何度言えば……」

「あら、師匠だなんて。」

「何があつたのかしら、一夏？」

ボーデヴィツヒが相変わらざる呼び方で呼んできたことに、目聡く反応したのはクルルシファーさんだった。

「特に何かあつたわけではありません。」

「どうか、お気になさらず」

「私はこの人に弟子入りしたのだ」

「その任を承認した事実は存在しません」

自身の師へと自分が弟子入り志願されましたなどという気にはなれなかったために今の今まで報告していなかったが、其れもついにここにきて知られることになってしまった。

しかも、相手はあのクルルシファーさんである。

「そう……ついに一夏も弟子から師匠へとステップアップしたのね。」

「大変喜ばしい事だわ」

「揶揄わないで下さい。」

何度も言いますが、俺はその任を承認した覚えはありません。それに、俺の実力がそこまで行っていない事は師匠達こそよく知るところ

ろでしょう」

務めて平静を装いつつ返事をしたが、内心ではこの常用を切り抜けるだけの光明は見いだせていなかった。そのことに、奇妙な焦燥感を覚え始めていた。

「別に良いではありませんか、一夏。

私達としても、弟子の成長を実感できて喜ばしいものですよ」

「全く成長していないとは言いませんが弟子を取れるほどではありませんよ……」

さらに状況の悪化を促す夜架さんの参戦に、さらに頭を悩ませるところになった。

「いや、私は師匠から教わりたいことが山ほど……」

「教えられることが無いと言っているだろうが……」

「いつそ、本当に弟子をとつてもいいんじゃない？」

存外、新しい発見があるかもしれないわよ」

「メルまでそんな事を……」

さらにメルまでもが加わり、一層此方の戦況が悪くなってきた。

「影内君、どつちか飲む？」

「すまないな、簪。

麦茶の方を頼む」

そんな中、気遣ってくれたのか簪がペットボトル入りの飲料を持ってきてくれた。

が、片方が明らかに自然界にはない透明度の高い鮮やかな緑色の、言い換えるのであれば液体洗剤にでもありそうなエメラルド色のキユウリ味を謳っている炭酸であったため必然的に普通の麦茶の方を取る事になった。というか、なぜロシア代表用の航空機の室内にそんなものが有るのだ。

「このお菓子、美味しいね……♪」

「こつちのお菓子もおいしいですよ……」

「うん……頂くね」

「召し上がれ……♪」

唯一、安心して見ていられる場所などファイルフィさんのほほんさ

んが相席している場所だけだった。傍らにうず高く積みまれた甘味の空箱は気にしない。

(果たして俺は無事に日本にたどり着けるのだろうか……)

Side ルクス

色々と手の付けようがない状況になってきた機内を見渡しながら、シートに深く腰を掛けていた。

一夏には少し悪いけど、今この場をどうにかすることは僕には出来ない。彼の知恵と幸運に期待するでしょう。

「どうしましたか?」

「アイリ」

そうして少し休んでいたところに来たのは、アイリだった。

「うん……今回の事件について、ちよつと考え事しててね。」

それより、一夏の側に居なくていいの?」

「兄さん同様の女癖の悪さを直すには、今の状況もいい薬でしょうか。」

で、何を考えていたんですか?」

「アイリ……」

アイリからの容赦ない一言に地味なダメージを受けつつ、気を取り直して考えていたことを話すことにした。

「考えてた事っていうか、気になったのはあの蟻型について。」

明らかに今までの幻神獣^{アピピ}から逸脱しすぎているからね」

「今までの幻神獣の中でも、自身の種を含んだ複数の種を増殖させる能力をも持った幻神獣などいませんでしたしね。それこそ、終焉神獣^{ラグナレク}ですら」

「その役割を担って来ていたのは、基本的に遺跡^{ルイン}だった。

けれど、それも今は封印されている筈……」

「にも拘らず、未だに幻神獣^{アピピ}は現れ、あまつさえ新種が発見される始末……」

「それに、今回は機竜も幻神獣を操っているのではないかと思われるような人物も確認できなかった……」

「流出した機竜とは別なのか……あるいは、放置していても問題がなかったのでしょうか……」

アイリと確認されたことを整理しているだけでも、頭を悩ませる多数の事実には疲れたような感覚を覚えていた。

「いずれにしても、後で国元での調査や更識さん達からの情報も合わせて考えないといけませんね」

「そうなるかな……」

アイリ、更識さん達への対応は任せてもいいかな？ 今のところ、

一夏とアイリが一番信頼が厚いと思うからさ」

「まあ、別にいいですよ。」

不甲斐無い兄を^{身内}手伝うのも、妹の仕事ですしね」

いつも通りの表情で嫌味を言おうとしたアイリだけど、その表情がわずかに緩んでいることを隠しきれていなかった。

「それに、今後も連絡役になれば一夏と長期間の離れ離れは回避できるだろうしね」

「んなッ!?／＼／ 私がいっそんなことを言いましたか!?／＼／」

咄嗟に否定したアイリだけど、その顔は熟したリングゴのように赤い。普段は散々揶揄われたり嫌味を言われたりしているだけに、この反応は新鮮だった。

「そう隠さなくてもいいよ。」

一夏の事は僕も信頼してるしね。全面的に応援する気だけど」

「だ、だから……／＼／」

と言うか、いい加減に其方も諸々の関係をハッキリさせたらどうなんでしょうか？」

「アイリはそれが一つなんだし、僕よりはハッキリさせやすいんじゃないかな？」

「言うに事欠いてこの人は……／＼／」

この後、皆が来るまでの暫くの間、こんな具合の会話を楽しんでいた。

S i d e シャルロット

「皆、行っちゃったか……」

もうすでに飛行機雲を従えながら高高度を飛んでいる飛行機を見つつ、物思いに耽っていた。

作戦も既に終わり、各国からの参加者は既にそれぞれに帰って行っている。最後発となった影内君や更識会長たちが乗った飛行機も、飛び立ってからしばらくたっていた。

彼や彼女たちには今作戦の事も含め、多大な恩がある。私達としても、欧州での活動はできる限り協力する方向で話が進んでいる。

「シャルロット」

そうこうと考えていたら、後ろから母さんに声を掛けられた。父さんの座る車椅子を押している。

「もうそろそろ時間よ。」

家に帰りましょう」

「分かったよ、母さん」

続けて言われた言葉に、短い返事と頷きを返して素直に従った。

こうして三人一緒になって歩くのも、随分と久しぶりだった。

「……すまないな。」

友達と居たかっただろうに、無理なことを言って」

「気にしないで。」

本音を言おうと、僕も乗ってみたくて仕方が無かったんだ」

「まったく、この子は……」

父さんから遠慮がちに放たれた言葉を自信満々に否定したところ、母さんが若干呆れ気味になっていた。解せぬ。

「まあでも、そこまで言うからにはテストパイロットとしてしっかりと仕上げて見せなさいね。」

アナタにも、もう一踏ん張りしてもらおうよ?」

「ハハ……お手柔らかに頼むよ」

母さんからの手厳しい言葉に苦笑している父さんですけど、その顔は活気とやる気に満ちています。

「うん。やってみせるよ。」

デユノア社製第三世代IS 《イクス・ラファール》。今はまだ僕の《ラファール・リヴァイブ・カスタムII》を部分的に改修する形になるけど、僕はそれを待ち望んでいたんだから！」

S i d e ラウラ

(……皆、無事か)

ある程度騒ぎ疲れたのか、はたまた議論の区切りがいい所に来たのか。それぞれがそれぞれに休み始めていた。特に、作戦後に師匠と対峙したセシリアに至っては今は熟睡している。

(……二年前の様にならなくて、良かった)

二年前、同じように化け物を相手したと言う時の話を思い返して、素直にそう思った。

(しかし、二年前は当時の黒^{シユバルツェ・ハレゼ}兎隊と織斑教官、当時は副代表だった山田氏の全員が集中砲火してようやく一体を倒したものを、単機で実に数十体以上……種別によってその能力に差はあるのだろうか、そんなものが誤差に思えてしまうほどの大記録だな)

今作戦が終わった折、副官であるクラリツサ——今は名字と階級ではなく名前で呼んでいる——から話を聞き、その後、正式な閲覧許可を得た上で確認した当時の記録を思い起こしていた。

(二年前……織斑教官の弟である織斑一夏氏の誘拐現場に突如として出現した、黒い体表に羽をもつ獣人のような怪物と、その交戦結果。

当時は部隊の再建にばかり目が行っていたが……)

改めて、当時、しっかりと記録に目を通しておかなかったことを後悔した。

(当時、参加した黒兎隊のISが搭載していた試作型大口徑レールカノンと、参加した日本副代表である山田氏の持っていた大口徑ライフ

ルの集中砲火による着弾時の衝撃を以て動きを拘束し、織斑教官が当時使用していたIS《暮桜》に搭載されていた《雪片》を純粹なレーザーブレードとして使用、最大出力で稼働させ続けることで強引に溶断、か……)

記録を頭の中だけで思い起こしながら、その時の事が今の私へも繋がっていることを実感していた。同時に、当時から今に至るまで解けていない謎である、死体の発見されなかった織斑一夏氏の事も思い起こしていた。

(織斑教官の駆る《暮桜》はその時の過剰な消耗が原因でコアが事実上の凍結状態……再起動は絶望的。それ以外にも当時の黒兎隊へと痛撃、か……)

それに、織斑一夏は何処に行ったのだ……。死体どころか碌な血痕すら残っていないかつたとは)

当時の黒兎隊が受けた壊滅的な被害の報告を思い出しながら、その後にあつた部隊再編を始めとした種々の苦労も思い出してほんの僅かに苦笑いを浮かべてしまった。

(しかし……)

だからこそ、余計に思ってしまう。

(……明らかに戦い慣れている搭乗者に、国家の開発した最新鋭機を凌駕する戦闘力を持つ機体群。男性である影内師匠でも乗れる。そして、八機という数……)

八機、その数字に不思議な縁と強い疑惑があつた。

(その機数……ドイツが所持する全てのISが配備されている黒兎シユバルツェ・ハーゼ隊と同じ数……)

一国家と同様の機数に、単機では明らかに勝ち目のないほどの高性能。

師匠の事を信頼してはいるが、それでも疑問はどうしても残ってしまった。

(……師匠、貴方達はいったい何者なのだ?)

S i d e 楯無

(さて……今回の作戦は無事に終了したわけだけど……)

報告書を見つめながら、色々と考え込んでいた。

今は増援で来てくれた人たちはその人たちで固まっているし、他に乗せた子も疲れているのか寝ている。少しばかり手持ち無沙汰になった時間を使つての、考え事だった。

(……八機、か)

「お嬢様、どうなさいましたか？」

そんな時に来たのは、虚ちゃんだった。

「いや、ちよつとね……」

「今回、増援に来て頂いた人たちの事ですネ」

スパンと言ってくるあたり、流星は虚ちゃんである。

「ええ。」

八機、この数字が気になるのよね」

「小規模な国家であればこれだけで所持する全てのI Sか、それ以上ですものね。」

疑惑を持つな、という方が無理な話です」

私の持った疑問をほぼ正確に読むあたり、やはり頼りになる。

「そうね。」

今は戦力的な問題が大きすぎるから頼らざるを得ないし、今回来てもらった人たちは総じて信用できそうな人たちばかりだからまだいいにしても、彼らの所属している組織がどういったものなのかが未だに分からない。

信頼したいのは山々だけど、そのためには不足しているものもあるのよねえ……」

頭を悩ませながら、今後の事を考えていた。

確実に彼らとの協力関係は続けるし、そうせざるを得ない部分がある。けれど、その先に何が待っているかによっては今の内から用意しておかないといけないのも事実だった。

「本当に、何処から八機も……一機だけでも手に入れるのなんて絶望

的なほど難しいというのに……」

「そうよね。」

しかも、性能は折紙付きなんてものじゃない。異常としか言えない域にさえある」

そこまで行ったところで、一回言葉を切った。

「虚ちゃんは、どう考えてる？」

私の質問に、虚ちゃんは少し考え込んでからその答えを言った。

「そうですね……。」

ISコアの調達と、国家の最新鋭機すら凌駕する高性能の機体。その二点から考えるのであれば……篠ノ之博士が、関わっているのではないかと……」

「確かに、それも可能性の一つね」

半ば生返事となった私の返答に、虚ちゃんは腑に落ちないとも言いたげな表情のまま私へと質問を返してきた。

「……お嬢様は、どのようにお考えなのですか？」

「そうね……。」

虚ちゃん。虚ちゃんの答えは、影内君たちが使用している機体がISである事を前提にしているでしょう？」

「それは、当然……お嬢様、まさか!？」

虚ちゃんが私の言わんとすることに気付いたらしい。その表情を驚愕に歪めながら、鸚鵡返しのように聞き返してきた。

「異常なまでの高性能、多すぎる機体数、男性でも使える、起動しない絶対防御、既存の機体とはかけ離れた機体構造。」

これら全てに、すぐに答えられる事があるとすれば、それは恐らく……そもそも、ISという区分の外側にある何か、という事……」

「で、ですが……今となつては、ISはISでしか倒せないというのは周知の事実です。」

それを一体……」

若干慌てたような虚ちゃんの反論も、普通に考えれば当然の事だと思ふ。

でも、その答えは大事な事実を一つ忘れてる。

「普通に考えればそうね。」

でもね、虚ちゃん。忘れたの？ ISが初めて世に出た時、ほぼ全ての人たちはそれまでの『常識』の外側にあるソレを一笑に付した。けれど、それはある事件を期に一変して、最強の兵器として君臨した。それまでの常識は、ISの前には通用しなかったの」

私自身の御家の襲名を早める一因となった事件なだけに、忘れようにも忘れられない事件。

IS関連のノウハウが蓄積されてきた今では自作自演説が濃厚となってきた事件だけど、同時にあの事件で世界的に軍事兵器としてのISが知られるようになったのも事実。

そして、それまでの常識を一変させた事件。

「……影内さん達の機体は、『第二の白騎士』になり得ると考えているのですか？」

「物の例えで言っただけよ。」

けれど、完全に在り得ないか、と聞かれるとねえ……」

そこまで言ったところで、虚ちゃんの表情が緊張しだした。

「……いづれにしても、今はまだ大丈夫だし影内君たちも特に怪しい動きは見せていない。」

でも、情報だけは集めておきましょう。」

彼らを直接、敵に回す。

そんな事態など避けたいが、事と次第によつてはそうも言ってもらえない。

(……文字通りの命がけで戦ってくれている。生半可でそんなことはできない以上はそうそうと大変なことをするとは思わないけど。

備えを欠かすわけには行かないのも、辛い所ね……)

S i d e 千冬

「……」

「……」

東のラボの一室で、共にとある映像の検証を行っていた。

「……ちーちゃん、どう思う?」

「馬鹿と冗談に狂気を混ぜたらあんな機体になるんじゃないか?」

若干投げやり気味に答えていた。それほどに、性能面では圧倒的な機体がそろっている。しかも、うち幾人かは腕前も常軌を逸するものがあると確信できたほど。

「機体の方は?」

「同じのを再現しろって言われたら『現物が無いと無理』と言える程度には無茶苦茶かな」

「……現物があればできるのか」

「半分はプライドで、もう半分は意地だけどね」

「……………そうか」

東にしては珍しいまでの返答に、溜息を吐いた。

「そういうちーちゃんは、何か具体的には?」

「……………そうだな。」

一夏も含めて総じて腕利きばかりだったが、中でもあの漆黒の機体と紅白の機体は突出していたな」

改めて映像を思い返しながらか、確認するように話していく。

「ん………搭乗者の技能的な意味ではあの黒い四つ足も負けてなかったと思うけど?」

「たしかにあの機体も驚異的だったが、あの機体は一度も飛んでいない。」

飛べるのであれば飛んでいるはずだ。制空権が取れるというのはそれだけで大きな意味がある、わざわざ飛ばない道理はない。現に、飛んでいれば明らかに飛んでいる場面があったにもかかわらず、あの機体は味方の機体に空輸してもらうまで待っていた。

となれば、飛べないと考えるのが道理だろう。そして、飛べないのであれば最悪として空中からの射撃武器で一方的に叩くという手が取れる。いかに搭乗者が優れていようと、有効な反撃が無いのであれば勝ちは無いら」

あの巨大な女王蟻によって蟻塚が崩落した時の映像を思い返しな

がら、そう答えた。確かに搭乗者の腕前も良く、機体の性能も十分以上の尾物に思われる。だからこそ、飛べるのにあえて飛ばないというのは考えにくかったのだ。

「そっか〜……じゃ、突出してたっていう他の二機については？」

「まず目についたのは、漆黒の機体だな。」

腕前の高さについては言うまでもないだろうが……それ以上に、格闘戦型にしては珍しい戦い方をしている」

「珍しい戦い方？」

「ああ。」

あそこまでカウンターに特化した戦い方など、そうそうお目に掛かれるものではない」

あの漆黒の機体の戦い方を思い起こしながら、其れだけ答えた。

「カウンター？ そんなに反撃してたっけ？」

「カウンターそのものはそこまでしていないが……。」

あの蟻塚の内部に突入する前に、空の化け物共相手に戦っただろう。あの時、最初は自分から攻撃していたが、其の後は相手の攻撃に対応する形で攻撃を突き刺していた。

最初の方の攻撃は、恐らく一夏からの支援を受けた上での攻撃だろう。以前、一夏の駆るあの白い機体はオルコットの《ブルー・テイアーズ》のビットに触れた際にその攻撃力を強化したことがあった。恐らく、あの機体は特定の条件を満たした時に味方に《零落白夜》のような能力を付与できるのだろうな。故に、漆黒の機体は最初の攻防の際はその攻撃力の強化によって厄介な敵を優先して倒し、其の後に反撃を以て数を武器に攻撃してきた連中を一網打尽にしたのだろう」

私の説明に、束は一通り唸ると異常な速度でメモを取りながら何かを考え込んでいた。

だが、それも僅かな間の事。

「じゃあ、紅白の機体の方は？」

「変形機構など見たことが無かったが……そう言えば、なぜ変形するんだ？」

「あ、それは私の方で推測できるけど」

私が呟いただけの疑問に、東が間髪入れずに答えていた。

その内容に興味をひかれた私は、特に躊躇いも無くその真意を聞くことにした。

「ほう、何故だと考える？」

私の問いかけに、東はいつもの通りに無駄に自慢げになりながら話し出した。

「多分、陸戦と空戦の双方に特化した形態を用意したんじゃない？」

具体的な設計図を見てないから何とも言えないけど、多分、空戦の時は飛行に割いている分のエネルギーを陸戦形態の時は装甲か攻撃にでも回してんじゃない？ それと、空戦のために必要な推進器を陸戦のときに失う事を避ける目的もあるのかもね。

陸戦の時は跳躍で十分みたいだし、飛行に必要な分のエネルギーを別に配分することで最適化、それによって戦闘能力を引き延ばす目的じゃないかな。半面、空戦の時は移動の自由度が各段に上がるから回避を優先すれば装甲はある程度薄くしても大丈夫なんだろうし」

東の説明に、ある程度の納得は覚えた。

だが、そこで東は其のことについて考える暇を与えずにすかさず私へと質問してきた。

「今度は私が聞くけど、ちーちゃんは何か気づいた？」

「こう言い方も癪だが……あの紅白の機体に乗っていた餓鬼。非常に癪だが……戦闘における素養で言えば、確実に天才と言える領域だろうな。最低でも私と同等程度の才能は有る」

「おお、ちーちゃんにしては珍しく買っているね〜。」

で、攻略法的な何かはある？」

東からの再度の問いかけに、僅かに思考してから答える。あの手の手合いも、別に試合相手の中に居なかつたわけでもない。

尤も、試合で相対した相手とは桁違いではあるが。

「有るとすれば……奇策だろうな。」

具体的に言えば、武装の用途外使用などによって相手の予想を上回る事。あの手合いは普通に技術合戦をしても天賦の才というもので対応してくることも多いが、此方から意図的に相手の読みを崩させて

やれば、存外崩せる。

後は、それをどうやるか、だが……」

そこまで言つて、言い淀んだ。正直に言えば、すぐには思いつかない。

「東、そういうお前は何か他に気付いたことはないのか？」

「ん〜……あの漆黒の機体と、紅白の機体。それと、朱色の機体に金色の機体。あの四機の単一使用能力ワンオフ・アビリティというか、それに相当するようなものの中身はある程度の見当がついたかな。

まあ、确实だと思えるのが一機だけしかないけどさ」

「なんだと？」

意外といえど意外なほどの返答だが、聞かない手はない。

直ぐに内容を問いただそうとしたが、東も別段隠す気は無かつたようで私が何かを言う前に話し始めた。

「まず、确实なのは紅白の機体。中身は十中八九、一定の条件下における温度というか熱量というか……その類を自由に操れる能力、かな？」

自機の装備の過熱に、機体形状じゃ説明できない空中での空力能力。他にも色々。これらの現象全てに関わっている要素と言えば、温度だからね。だから、多分これは确实」

ここまでは流暢に語つてみせた東だが、この後を話す前に一回、溜息のような動作を挟んだ。東にしては余りにも珍しい動作を前に、思わず身構えてしまいそうになる。

「で、ここからは推測の要素が大きくなるから确实とは言えないんだけど。

まず、朱色の機体。能力は多分だけど、指定範囲内に下向きの加速を与える擬似重力の発生、かな。そう考えれば、いっくんの乗っているあの機体への加速も、それ以外の場面で敵が押しつぶされるような状態になったのも説明がつく。

次は、漆黒の機体。で、今現在考えているのは速度への干渉かな。この能力だと仮定すれば、相手の攻撃を遅延させたり自身の攻撃を早めたりするのが説明出来る。

で、最後は金色の機体。仮定の中ではこれが一番信じられない能力

「だけど……瞬間移動。それ以外に考えられる可能性が極端に少ない」
「……いくらなんでも、荒唐無稽に過ぎないか？」

最後の機体に想定された能力。束の口から語られた能力の内容が余りにも現実離れしていたために聞き返したが、束は困り顔で首を振った。

「困ったことに、そうとも言えないんだよ。」

確認された映像から推測した範囲では、だけどね」

「全く……大方、他の機体も何かしら隠し持っているだろうに。」

判明しただけでもこれか……」

「いつそ驚きや驚愕、恐れと言った感情を通り越して、呆れてさえしまおう。」

「だが、それだけで終わるわけにも行かない。今回確認された連中に対する考察を更に進めつつ、同時に対策も練っていった。」

第五章（9）：新たな風、潜む暴威

S i d e 一夏

「もうそろそろ始まりますね」

フランスでの『巢^{ネスト}』攻略戦から一週間、何時もの面々で揃ってテレビを見ていた。場所は生徒会室、更識会長が提供してくれた。なお、こちらが頼んだのではなく本人も興味のあったために誘われたというのが経緯であることをつけ足しておく。さらに追加するのであれば、簪には剣崎経由で伝えたことも追記しておく。

「どんな機体なんだろうね」

「さて……それは見てのお楽しみだな」

「楽しみだね」

「一度は次世代機^{イグニッション・プラン}開発計画から外された国家の作り上げた機体か……我がドイツの機体とどちらが優れているか」

「フツ……いくら進化したフランス製ISと云えど、私の偏光射撃^{フレキシブル}の前ではひとたまりも……」

「セシリア、それ以上はやめなさい」

「さてさて……拝見させてもらいましょう」

それぞれが口々に言いあいながら、テレビを見ていた。やがて、その画面が大きく移り変わる。

『それでは、只今より新型発表式典を開催します。司会進行は病氣療養中のレイヴィング・デュノア社長に代わり、私、シルヴァーナ・デュノアが務めさせていただきます。』

まずは、上空をご覧ください』

壇上へと立っているデュノア夫人がマイクを通して全体へと聞こえるようにアナウンスし、カメラマンを含めた其の場の全員が視線を上へと向けた。カメラマンはカメラを上に向けている。

——ヒイイイイイイ！

空気を切り裂いているような音が響き、何かが下りてくる。

その正体は考えるまでもない、フランスの新型IS——。

『ご覧ください。』

これが、我が社が自信をもってお送りする最新鋭量産型第三世代 I
S、《イクス・ラファール》です！」

Side シャルロット

始めは比較的ゆっくりと、存在感を誇示するように大きな音を立てながら降りていく。

『ご覧ください。』

これが、我が社が自信をもってお送りする最新鋭量産型第三世代 I
S、《イクス・ラファール》です！」

母さんが会場に向けて宣言すると同時に、一気に加速。急降下して
いく。

間もなく、空中に擬似標的が現れる。数は二。

「このくらいなら……！」

ラファールから据え置きされた連装ショットガン『レイン・オブ・
サタデイ』を両手に呼び出し、銃撃。二つとも撃ち抜く。

続けて至近距離に現れた標的に対しては、高速切替で《レイン・オ
ブ・サタデイ》の片方を《ブレット・スライサー》へと切り替えて切
り裂き対応。

「余裕……！」

眩きながら、さらに降下していく。

その矢先に表れた標的は、左右に一つずつ。僕を挟むように両隣に
配置されている。

ガシャ！

両腕の装甲に直接装備された新装備《ヴェントII》を起動。三角形
の頂点それぞれに55口径突撃銃《ヴェント》の砲身を設置したよ
うなそれは、そのまま三連装の《ヴェント》と言える装備となってい
る。

片方ずつ片手で狙いをつけ、そのまま銃撃。速度を緩めることなく
無問題で降下を続けていく。

「……ハハッ」

思わず笑い声が零れる。それほどに、滑らかに、思い通りに動いていた。

次の標的は四つ。私から見て後ろ側に二つ。降下していく方向に大形の物が一つ。遠方に複合装甲式の物が一つ。

ガシヤン！

背部の可動式ウェポンラックに接続された装備をそれぞれ起動。内約は重機関砲《デザート・フォックス》二挺、ガトリング砲《フアランスⅡ》一挺、試作長射程複合ライフル《オクスタン・ランチャー》をそれぞれ用意。背後の標的二つは《デザート・フォックス》は背部ウェポンラックを直接動かすことによつて狙いをつけ、降下方向の標的も同様にして《フアランスⅡ》を試用。遠方の標的は両手に握つた《オクスタン・ランチャー》を用いて狙撃。

ドドドドン！

狙い通りに全ての標的をほぼ減速無しで破壊し、さらに降下していく。

ガガガガン！

さらに前方に表れた巨大標的から弾丸が放たれる。けれど、この程度の弾丸では問題にもならない。

両肩の非固定浮遊部位アンロックユニットの外面向前に向け、内蔵された装備のうち一つ《ガーデン・カーテンⅡ》を起動。前方から襲い来る弾丸を全て防ぎきる。

ギキキキイン！

そのまま広げるようにして内側をむけ、内蔵されていたもう一つの装備を使用。名前は《スクエア・クレイモア》、チタン合金製のベアリング弾を至近距離から一斉発射するための装備。撃ち放った多量の弾丸は、標的を目的通りの蜂の巣どころか粉々にしていた。

更に後ろからもう一つ出てきた巨大標的にも、同じように非固定浮遊部位の先端を向けていく。その動作は、《ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ》のころから慣れ親しんだもの。

「バンカーー！」

非固定浮遊部位に内蔵された《グレー・スケール灰色の鱗殻》を突き立てる。

ドゴツ!

口径は変わっていないけれど根元の炸薬部分が大型化した影響でリボルバー機構が非固定浮遊部位の内側から見えるほどに大型化してしまった影響で取り回しが幾分悪くなったけれど、それを補って余りある破壊力という名のリターンを実感しながら標的を破壊する。

最後、着地のために機体を反転させながら軽く減速、柔らかく着地してみせる。

最初のデモンストレーションは、大成功だった。

Side 一夏

テレビの向こうから見せられていくその姿に、素直に感心していた。

「いい動きをする」

降下しながらも的確に攻撃していき、最後には軟着地の披露。

滑らかなに行われた一連の動きは、相手がただの標的であったことを考慮してもなお性能の高さと搭乗者の腕前を実感させるものだった。

「フフ……確かに、自信作と言って何も恥じる事が無いわね」

会長が満足げな笑みを見せつつ口元を『お見事』と達筆な字が書かれた扇子を広げていた。どこから出しているんだろうか、あれ。

「全くその通りですね。」

如月さんが何時に無くやる気になっていたのも頷ける……」

剣崎が感心したように、だがどこか疲れたような声音で呟いていた。

「……如月さん、何かあったの?」

簪が恐る恐るといった具合に剣崎に聞いていた。一方、聞かれた剣崎は溜息を一つ吐いた後に何かを諦めたような感じで――

「……どうもこの新型が積んでいる第三世代兵装の中身をどうやってか一足先に知ったらしくてな。」

機体も込みで、是が非でも研究したいといっていたな。ついでに、今までエネルギー周りの問題で放置されていた幾つかの試作品も改めて開発するとか何とかで……」

——ここまで言い切った。

この言葉に何とも言えない雰囲気になった周囲の様子を確認し、切り替えるために一つ咳払いをした剣崎が改めて言葉を紡ぎ始めた。「まあ、使えそうなものがあれば今度大規模改修される予定の《陽炎》にも搭載されるらしい。

良さそうなものがあることを今は祈るだけだよ」

多分な諦めの中にほんの僅かな期待を混ぜた台詞をその話題の締めとして、剣崎はそれ以上にその話題については話さなかった。

一方、テレビからは先程派手な登場を果たしたシャルロットの駆る《イクス・ラファール》の搭載する第三世代兵装についての説明をデュノア夫人が話し始めている。

『この《イクス・ラファール》に搭載されているのは、世界初となる量産型の第三世代兵装、《砂漠の呼び水》アモサージュ・デ・デザートです。

その内約は、イメージ・インターフェイスを用いて供給量と供給対象をフレキシブルに調整する、大容量エネルギーコンデンサー。この装備最大の特徴は、使用負荷の低さです。従来の高性能高負荷であった第三世代兵装とは一線を画し、低負荷、高エネルギー効率を追求しています。

直接的な攻撃能力こそありませんが、使用に特別な技能や能力を必要とせず、従来の第三世代機共通の欠点であった連続稼働時間の短さをほぼ払拭した第三世代兵装です』

その説明に、一緒に見ていたIS搭乗者たちが思わずといった具合に感心していた。

「あえて直接的な戦闘性能を追求せず、それらを支える基礎的な性能や稼働時間の追及……《ラファール・リヴァイブ》の時点で各種武装が揃っていたデュノア社ならではの、と言ったところでしょうか」

「なるほどな……あくまで《ラファール・リヴァイブ》の後継機、つまりは量産機として求められているものを追求した、ということか」

「その武装の運用能力にしたところで、簡易のサブアームにもなるウエポンラックが搭載されたために大きく向上している。直接戦闘でもそれなり以上の脅威だろうな」

「しかも、あの装備……接続形式次第だと、他の第三世代兵装とも同時搭載とかもできそうだね……エネルギー問題が付きまどっていた第三世代機にとっては、もしかしたら光明になるのかな」

口々に《イクス・ラファール》への興味を隠そうともしない様子で盛んに議論し合う様子に、俺はと言えば場違いにもどこか達成感にも似た感情を抱いていた。

(……フランスでの『^{ネスト}巣』攻略戦。)

此方も此方の思惑があつてやったことではあるが……存外、やった甲斐はあつたな)

この世界で行われた先日の大規模作戦の事を思いだし、どれだけの影響があつたのかを改めて思い知る。

(……なるべく早く、^{アビス}幻神兽の脅威の排除や^{ドラグライド}装甲機竜を使っているだろう連中をどうにかするしかないか)

心の中で任務に対する気持ちを新たにしつつ、発表式典の中継を見守っていた。

S i d e ウェイル

「新型ねえ……うん、中々いいじゃないか」

大量の培養ポッドの置かれた研究室の一角で、テレビから中継されているその映像を見ていた。

「うんうん、量産機としては必要不可欠な癖のなさど万能性。その二つを追求して行きついた形だねえ。」

いや、実に面白い」

中継を終え、下らない、世俗的な番組を垂れ流し始めたテレビを消し、それまで座っていた席を立った。

「やはり、明瞭な一つの目的に沿って最適化されたコンセプトに基づ

いた作品は良い。いや、素晴らしい！」

知らず知らずのうちに上機嫌になり、歩調も軽くなっていく。「やはり技術を、知識を、未知を求めるなら。そう、やはり一途でなければなあ！」

上機嫌にいま目をかけているとある培養ポッドの様子を見ようと脚を進めていく。

今現在は協力関係である亡国企業ファントム・タスクの資金をふんだんに使って作りあげたこの地下研究所の使い心地は中々のもので、研究へとついつい没頭してしまっていた。

「しかし、その意味で言えばそもそもISであるのが、となってしまうか。

何より、あれはとて一途ではない」

そうして上機嫌で歩いている最中、ふと有る事実気付いてしまった。

ついで数か月前までは研究していた対象ではあるが、あの謎への回答が分かってからは急速に興味を失ってしまったものでもある。

自分で自分の上機嫌に水を差してしまった事に僅かな苛立ちが募り、思わず舌打ちしかけたが思いとどまる。

「……いや、大元が大元とは言え、だ。

あの機体を作りあげたものは純粹に作品を仕上げていったのだから。それを無視するのも良くないなあ」

最近、最も手間暇をかけてある一つの巨大な水槽の様にさえ見える培養ポッドの上まで来ると、その中身を見下ろした。

「そうだ。

彼らの作品がどこまでの物か、試してみるとしようじゃないか。ついでに、私の作品も試させてもらおうとしよう。何処まで再現できたのか、仕上がりが気になる事だしねえ……！」

鳥賊型幻神獣アビリス《クラーケン》をひたすらに巨大にしたような体躯の巨獣が入った巨大培養ポッドの上で、抑えきれない笑みが零れる。

「ああ、楽しみだ。楽しみだなあ。

ク……ククツ………ククツハハハハハハハ!!」

楽しみで愉しみでたのしみでタノシミで、待ち遠しくて待ち遠しくて恋焦がれてさえしまおう。一日千秋の思い、というこの世界の日本という国の諺は、まさしく正しく今の私の気持ちを明確かつ的確に表している。

「ああ……早く、見たいなあ……♪」

その時を待ち焦がれながらも、私は培養ポッドの中身の存在の完成度を上げるために手を加えていった。

Side

???

「新型ねえ……」。

ま、こつちも別な意味での新型があつからいいけどよ」

暇つぶしの意味もかねてフランスの新型発表式典をテレビ越しに見ていたが、今は大して興味も抱けないでいた。

無論、其のうち事を交えることになるかも知れない以上はその戦力を把握しておくことが重要であることは理解しちやいる。だが、それでも今の此方の戦力に敵う物とは思えないでいた。

「油断大敵、という言葉もあります。それに、物は使いよう、という言葉も。

そのようでは、足元を掬われかねませんよ？」

真後ろから丁寧な口調と礼儀正しい言葉遣いで、だからこそその異常性を強く感じさせる人間が声をかけてきた。だが、その態度はこの場所に限ってはある種の異常性を際立たせていた。そもそも、こんなところに真つ当な人間は来ない。

最近入ったばかりだが、こいつの異常性は二重の意味で際立っている。今見せた人間性でも、そして仕事における戦闘技能でも。

俺自身も今迄に異常な人間やその所業を見てきたことは多々あるが、それでも際立っていると云えた。

マッドサイエンティスト

最近協力関係になった狂科学者といい、コイツが率いている六人組といい、最近の組織はそういった人間がずいぶん増えたように感じ

る。

「ま、いいけどよ。」

しくじつてくれるなよ、後始末が面倒なんだから」

適当に軽く返したところ、それまでも浮かべていた笑い顔をより深めながら返答のために口を開いた。

「ご心配無く。」

なんだでしたら貴女達の仕事もして差し上げますよ。失敗した時の後始末が面倒な事ですしね」

笑顔の中に悪意を極限まで詰め込みながら、歪なまでに柔らかい口調で言い放った。

その不安定さと極端なまでに歪んだ人間性に、薄ら寒いものを感じながらもやはり軽口を返しておく。そうでもしないと、どうにかなりそうだった。

「言ってくれませ。」

——『棘刑』のセルラさんよ」

第六章：終焉ヨブ神ノ獣 第六章（1）：買い物

S i d e 一夏

「臨海学校での水着？」

「うん……」

《イクス・ラファール》の発表式典から数日後。その日の授業と日課となった放課後の特訓を終え、一息ついた後の自室。

部屋割りはそれまでと同じように、簪との同室となっていた。理由は明白、以前と同じように自然な形で連絡をしあうためである。

その簪から、寝る前に意外と言えば意外な事を相談されていた。

「明日、土曜日だし買いに行こうと思ったんだけど……」

「それはいいが……なぜ男の俺を誘う？」

「言っておくが、俺はその手はさっぱりだぞ」

至極当然ともいえる疑問を口にしたところ、簪は何処か気まずそうだったが答えてはくれた。

「えっと……簪はいろいろあってもそもそも水着を着る気が無くて、本音は明日倉持の方に箒と一緒に用事があるって。で、鈴とオルコットさんは本国から送られてきたパツケージの確認作業があつて、デユノアさんはこの前の発表式典後の対応その他諸々の疲れが抜けてないから寝てるって言つてたし、ボーデヴィツヒさんは何か部下らしい人と会話していたんだけど……誘えるような雰囲気じゃなくて……」

「……その……すまない」

聞いてしまった事に若干ながら罪悪感を覚えたために謝つたところ、簪は少し困つたような顔で「気にしないで」とだけ答えてから話の続きを促してきた。

「それで……明日、大丈夫かな？」

勿論、どうしても嫌だつたり先約があつたりするんらいいけど……」

「そこまで言う事は無いが……」

分かった、俺で良かったら付き合うよ」
ひとまず一緒に買い物に行くという事には同意しておいた。特別、拒否するような理由もない。

(ま、一人で行くのが嫌だったか、或いは普段のお礼程度か。
気にするほどの事でもない、な)

これがルクスさんとその他の師匠達だったりしたらそ^{デー}ういう目的のお誘いなのだろうか、俺相手にそれは無いだろうし。

S i d e 簞

(エへへ……やった♪)

翌日に一緒に買い物に行く約束が成功した事に、内心かなり嬉しかった。

(少しでも影内君の事を知りたいし、それに……)

以前の『^{ネスト}巢』攻略戦後のパーティにおいて、アイリさんから聞いた話。さらに、以前に簞と鈴から聞いた話も加味して考えれば、彼が自分に価値を感じているとは思えないし、この世界に対し良い思いを抱いているとも思えない。あるいは、抱いていたとしても簞や鈴と言ったこの世界で彼を支え続けた人たちだけ。

(やっぱり……少しでも、いい思い出っというのがあってほしいよね)
一度、影内君の想いを聞いている以上はおいそれと簞と鈴に言う事はできない。

だけど、せめてこの世界で影内君にとって友人だった簞や鈴とは、いい思い出を作ってほしかった。これから先どれだけ此方にいるかは分からないけれど、それでも全くないというのはあまりにも悲しいように思えた。

(本当は、鈴や簞に伝えた方がいいのかもしれないけど……)

簞や鈴が「織斑一夏」と呼ばれた人についてどう思っているかは以前に聞いたことがあるから知っていた。

けれど、影内君自身はそれを望んでいない。影内一夏として戦いの

意味を自覚して、死ぬかもしれないというところまで考えて、結論を出している。それは多分、ちよつとやそつとの事を変えられるような決意じゃない。

(でも、それでも……)

出来るのであれば、何時かは本当の意味で互いに再会してほしいと思う。箒と鈴の今の友人としても、影内君にお世話になっている身としても。

今はまだ難しいというのはよく分かっている。でも、影内君がちやんと生き残ってくれるのであれば、そして彼自身が歩んできたものを持ちやんと認められるようになるのであれば、最後の最後は再会を望んでくれるのではないか。そんな、淡い希望を抱いていた。

でも、そんな希望を持っていたとしても、私が知っているのはあくまで周囲の人から聞いた話。彼自身がどう思っていたのかまでは、まだ深くは知らない。

(それに……お姉ちゃんには悪いけど、私は影内君を信じたい。

そのためにも、信じれるだけの何か、が有るのかも調べたいし……) お姉ちゃんが色々なことを警戒しているのは知っているし、影内君たちとの協力関係を維持しつつも同時にその背後関係を調べているのも知っている。

対暗部用暗部更識家としてはそれで正しいのは私も分かっている。だけど、それでも信じたかった。

(だから、ごめんなさい。

これは、私の我儘。影内君たちを信じたいがための、我儘)

自分の我儘という事は十分に理解しつつも、この気持ちを変えることができなかった私は結局、明日のお出かけに対して淡い期待と希望を抱いてしまっていた。

S i d e 一夏

明くる日。土曜日という事もあってか学園から出ていく人もそれ

なり以上に見かけるが、そこまで混雑しているという印象は受けなかった。あるいは、ただ単にこの学園の設備の許容人数が多いのかもしれないが。

「お待たせー」

そうして壁の花になりながら少々待っていたところ、昨日誘ってきた簪が小走りに此方にやってた。

用意してから行くというので、俺の方は朝の鍛錬を終えてから更衣室で簡易のシャワーだけ済ませてそのまま直行してきていた。そのため、今日は彼女と顔を合わせるのには起きた時以来となる。

「待つてはいない。

モノレールの時間も迫っているし、もうそろそろ行きたいところだが……」

「だ、大丈夫だよ」

少し息が上がっているために聞いたが、本人は大丈夫だと言っているし、モノレールに乗ってしまえばそれなりに休める目途もつく。

そういった事も加味し、早々にモノレールへと歩いて行った。

「で、今日は何処に行くつもりだ？」

「とりあえず、水着を買おうかなってというのは決めてたんだけど……それ以外は、色々見て回りたいかな」

「分かった」

簡単に今日の予定について聞いておき、返事を返した。

別段、今日の予定と言えば精々鍛錬でもしようか程度にしかなかったので一日潰れるのは構わない。特に連絡の予定が入っているという事もないので、気にすることもない。

そんなことを考えてたところ、モノレールの切符を買い終え、ホームまで着く。まだ少しばかり時間が残っているため、適当に座って待つことにした。幸い、待合席も十分に空いている。

そのままモノレールが来るまでの間、適当な雑談を交わして待っていた。

「そういえば、簪」

「ん？ 何？」

「その服、似合っている。

見違えた」

女性に対して服飾の話題が重要であることは王立士官学校アカデミーにいるときに散々学んだために、自然とそういう所にも目に行くようになった。

その経験自体はこの世界でも通用するらしい。簪が目に見えて笑みが深くなっていた。

（最低限の気遣いくらいはしないとな……。

まあ、お世辞を抜きにして良い意味で似合っているのは本心だが）
事実、今日の彼女はいつもの制服姿や寝間着姿とはずいぶんと異なった印象に見えた。元々、専用機や髪色の事もあり空色や薄い蒼とといった印象を持ちがちではあったが、今日の出で立ちは薄い紅色のワンピースのような服の上にほんの少し赤みがかかった上着を羽織っている。普段とは大きく印象が違うが、全体的に落ち着いた色調であり同時に可愛いとって差し支えないものだった。

そうしたそんなこんなはありつつ、モノレールに暫く揺られて行く。その後、予定時刻と同時に到着。問題なく降りていく。

その後暫く歩き、目的地に着いた。時節はちょうど夏に入ったところで天気は快晴、歩く分にはむしろ丁度良かった。

来た場所は駅前の大型ショッピングモール「レゾナンス」。大衆生活の必需品と大概の娯楽用品はここで揃うと言われるほどの大型ショッピングモール。今日はここで買い物するらしい。

（懐かしいな……記憶の中の姿とは大分と変わってはいるが）

少しばかり感じた懐かしさを表に出さないように、少し気を付ける事にする。機竜側に行く以前、鈴と五反田一家と数馬と一緒に繰り出したのを今でも鮮明に覚えていた。

（存外、未練なものだな）

そんな風に関心の中だけで自嘲しながら、簪の少し後ろを歩いていく。機竜側での公的な場や遺跡レイシではアイリさんの護衛として行動を

共にすることも多かったためか、自然と一步後ろを歩く癖が出来上がっていた。

「とりあえず、水着を売っているお店に行こう。」

本音がいいお店があるって紹介してくれたんだ」

「分かった」

こちら側に振り返った簪へと短く返事をし、そのまま付いて行く。

だが、簪は少しばかり不満だったらしく、僅かに頬を膨らませると同時に赤らめつつ、無言で手を引っ張られた。

「な、何を……」

「隣を歩いて」

「……分かった」

彼女にしては珍しい強めの口調で言われ、そのまま頷く。強く拒否する理由も無かったのでそのまま隣に並んだが、その時から目に見えて機嫌がよくなっているように感じた。

(そんなに特別な事か?)

機竜側に居た時もアイリさんに似たようなことを言われたときは何度かあったが、その度に疑問には思っていた。ルクスさんと他の師匠達だったらともかく。

そんな一幕がありつつ、目的の店に着いた。誘われるままに中に入ったが、目に飛び込んできたのは女性用の水着だけだった。男性用の売り場は全体の二割を切っているかもしれない。

(元々買う気も無かったから別に構わないが)

元より学校指定の物で済むものなので、特に何かを買おうとは思っていない。そんなふうと考えていたところ、簪が此方を振り向いて聞いてきた。

「影内君は買わないの?」

「元より学校指定の物で済ませるつもりだしな」

考えていたことをそのまま伝えた所、微妙な顔をさされてしまった。

「折角来たんだし、何か買おうよ」

「とは言われてもな……」

何も考えていなかった手前、急に言われても直ぐには答えられない

い。

「こういう時くらいは、羽目を外してもいいんじゃない？」

結局、強い勧めに此方が折れる形になり、その足でそのまま男性用水着売り場へと向かった。

とはいっても、特にこれと言ったこだわりもない。サイズだけ確認した後はそのまま会計へと行こうとした。

が、ここである意味予想外の邪魔者が現れることになるとは思っていなかった。

ガシャン！

「ん？」

少し離れた水着売り場から、何かが倒れたような音が聞こえた。

反射的にそちらの方を見ると、言い争っている女性二人組が見える。何かのトラブルか何かだろうが、勢いあまって店のディスプレイを倒してしまっただけだった。

「ちよつと、そのアンター！」

が、そこで言い争っていたうちの片方が唐突に此方の方を向くとなぜか因縁を付けてきた。此方側に俺以外の人間がいない事から、必然的に俺相手の台詞だろうことがわかる。

が、付き合う義理もない。そのまま無視して立ち去ろうと考えたが

「待ってって言うてるでしょー！」

——意外なほどの脚力で片方が近づいてくると、そのまま胸倉を掴もうとしてきた。

そのまま掴まれる義理もないので軽く身を捻って避け、そのまま逃走しようとはする。だが、意外なことに、此方が身を捻った先にはディスプレイの類が数多く、逃走するにも苦勞しそうだった。

(……誘導された?)

まさか、と言いたいところではあるが幾分不利な状況であるのには変わらない。しかも、掴もうとしてきた相手の、掴むために突き出してきた手とは別な方に鈍く光る何かの突起が僅かに突き出されているようにも見えた。

(厄介な……！)

ここでまさかコレ以上に派手な騒ぎを起こすわけにも行かず、ひとまずは回避に徹する。だが、考えていた以上に厄介な相手であることがわかった。

(二つ一つの動きが鋭い……しかも、身のこなしも……本職か!?)

割と本気で機攻ソードデバイス殻剣に手を伸ばそうとしたが、ここで予想外の展開になった。

「いい加減におとなしくしなさいよ！」

もう一人が掴もうと此方に近づいてきたが、此方は完全に素人であることが丸わかりの動き方だった。

(利用させてもらうか)

適当に避けてデイスプレイの方へと紛れ込んでいく。

そして、何も考えずに更に掴もうとして動いたために、しっかりと脚を取られて転倒。しかも、デイスプレイも巻き込んでいたために中々派手になっている。

「ちよつと、何て事してんのよ!!」

勝手に転んだ女が何か言っているが、反面、もう一人は早々に其の場を立ち去っていた。あるいは、集中しだした周囲の目を嫌ったためかもしれない。

「いえ、すみませんね。」

「いかんせん、言われも無いとばつちりを受けそうだったものですか
ら」

「フン……これだから男は使えないわね！」

「慰謝料くらいは」

「慰謝料?」

失礼、先程も言った通りこちらは何もしていませんが?」

セリフに先回りをして適当にあしらおうかと思ったが、予想以上に凝り固まった頭を持った相手のようだった。

「アンタ馬鹿なの!？」

今時、ISを使える女性に男性が慰謝料を払うなんて当たり前でしよー!」

(……旧帝国の貴族でもあるまいに)

彼女の台詞に、旧帝国系の反乱軍と戦った時の事を思いだしていた。性別が逆転しても、正直あまり変わらなない。しかも、この世界でもこの思想に苦い思い出があるだけに、余計に苛立った。

更に言うのであれば、彼女の場合は使った事さえないという意味で余計に質が悪い。

「使った事もない奴が偉そうに。」

「どうか、アンタの言っている『ISを使える女性』の知り合いが何人かいるが、お前のような奴を毛嫌いしているのが大半以上だが？」

「ハア!？」

「そんな訳ないじゃ……」

「ありますよ」

横から聞こえてきた声は、普段から聞き慣れた簪の声だった。尤も、かなりしつかりとした口調であり、普段の気弱さは感じられないものだったが。

「アンタ誰よ!？」

「私ですか?」

「ISの日本代表候補生を務める者ですが」

それだけ言うと、簪は何かのバッジ——後で教えてもらったが、代表候補生に支給される証明バッジらしい——を見せた。ついでに、IS学園の生徒手帳も見せている。

それを見た瞬間、一気に相手の女性の顔色がアルカリ性の液体を垂らしたりトマス試験紙のように青くなった。

「そ……そんな立場があるのに、使えない男なんて庇うの!？」

喚くように言っているが、対する簪は静かだった。その瞳の奥には、明確な怒りの炎が見て取れる。

「少なくとも、自分の失敗を他人に全て押し付けるような人よりは出来た人だと確信しますが」

その一言を受けて思わずといった具合に怯んだが、すぐに気を取り直すと再び噛みついてきた。

「だ……だったたら、少し位賤しておきなさいよ！」

優れた女性に対してこんな態度をとるような……」

「へえ……貴方の言う『優れた女性』というのは、他人に自分の行動の責任を全て押し付けるような人の事を言うのですか。」

今まで会った代表候補生達は全員、そのような行動は取っていないので知りませんでした。大変勉強になりましたので、今後の参考にでもさせていただきますね」

あえて周囲にも聞こえるように言っておき、さらに周囲の視線を集める。

「お兄。私、ああいう人が同性であるのが恥ずかしいんだけど」

「ああ、全くだな。」

小学生だつてもう少し礼儀が出来てるぜ」

「だよねだよね！」

さらに、別な場所からもう一つの声が聞こえ始めた。しかも、それに同調するように其処彼処から似たような内容の声が聞こえ始める。

(今の声……まさか……)

聞き覚えがある声が、少しだけ気になった。

一方、因縁を付けてきた女性は顔を真っ赤にするとそのまま逃走しました。其の場で崩れたディスプレイを放置して、である。

しかし、警備員が出てくると先程遠くから声を張り上げて周囲の雰囲気を決定的なものにした赤毛の二人組から事情を聞き、すぐに追いかけて行ったようだった。俺と簪の方にも来たが、其方は粗方の事情を把握していたため比較的手短に済んでいた。

「あの……有り難うございました」

「いえ。ああいった人は私も嫌いでしたから。」

「でしょ、お兄？」

「ああ、そうだな。俺も嫌いだ」

そうして騒ぎが収まりかけたころ、赤毛の二人組へと簪が挨拶していた。

(そうか……お前たちか)

懐かしさに突き動かされるように、俺も少し歩み出るとそのまま挨拶

拶することにした。尤も、あくまで今の名前でだが。

「いえ、本当に助かりましたよ。」

厚くお礼申し上げます」

「いえ、本当に大丈夫……一夏さん!」

「お前……一夏、なのか!?!」

反射的に少し歯を食いしばって、衝動を堪えた。

(お前たちも……覚えててくれたんだな。弾、蘭)

胸中で溢れそうになった嬉しさと名乗らない申し訳なさを覆い隠すように、薄く笑みを浮かべながら続きを話していく。

更に、口調も意識して丁寧なものにした。初対面を装うのであれば、此方の方が都合がいいと思ったから。

「その反応は、二度目ですね」

「え……?」

「確かに一夏ではありませんが、多分、ご想像の人物とは違いますよ。」

自分は影内一夏と申します」

兄妹揃って一瞬呆けたような顔になると、すぐに少し慌てながら謝ってきた。

「す、すいませんでした!」

「に、似ていたので……」

「大丈夫です、気にしていませんよ」

実際問題、謝らなければならないのは本来は此方の方である。今の事にしても、嘗ての事にしても。

(すまない、二人とも……)

嘗ての親友であり恩人でもある二人への罪悪感も覚えたが、それを晒すわけにはいかない。

其の後は互いに軽い挨拶を交わして別れた。

(意外と言えば意外な収穫があった、か……)

嘗ての親友の元気な姿が見れた、それだけでもよかったと。

素直に、そう思えた。

S i d e セルラ

「ちよつとアンタ！」

どうしてくれるのよ！」

這う這うの体で逃げてきた、先程まで喧嘩のフリをしていた相手役が噛みついてきましたが、至極どうでもいいです。

(新王国の機竜使い……名前は影内一夏)

これは中々、難物そうですね。まあ、それでも別に構いません……いえ、違いますね。殺し甲斐がある分、楽しみです)

今日、別な仕事の下見のために散策していたところ、偶然にも組織の目標に指定されているのがいたために少しばかりのちよつかいをかけ、様子を見てみた。結果は上々、中々に殺し甲斐のありそうな相手に、今すぐにでも殺しに行きたい気持ち募っていきます。

(まあ、今はできないんですけどね)

そうして私が報告内容とともに、今後の楽しみについても思案していたところに、無粋にも水を差す声が聞こえてきます。

「ちよつと！」

聞いてんの!? 大損した分、どうしてくれるのよ!？」

「ああ……そうですねえ……」

人が来にくく、さらに声が届きにくい裏路地の奥側に来たためか、未だに相手役を務めてもらった女性が喚き散らしています。

とは言っても、目標を見つけた後に適当なところでそれらしいのを引っかけ、「入った店のディスプレイを意図的に倒し、適当な男性に因縁をつけて全部奢らせる」という話を鵜呑みにして付いてきただけの名前も知らない女ですので、別段、罪悪感も何もないですけど。ですが、このままこの事を誰かに話されたりしたら面倒です。

「いい方法がありますよ」

「フン……今度は大丈夫なんでしょうね？」

相も変わらず無意味に威張り散らしていますが、まあいいでしょう。どうせ、処分するのですしね。

「——来たれ、根源に至る幻想の竜。幾重にも瞬いて姿を為せ、へエク

ス・ドレイク」

「……えっ？」

私の機竜を両手のみ召喚し、すぐさま接続コネクト。その手に愛用の装備を握り、慣れた手順を踏んでいきます。

「《竜髭棘槍》ニードル」

成人男性を超えるほどの長さのわりに、最大の直径が女性の小指ほどもない特殊武装《竜髭棘槍》。行ってしまえば。極大の針ともいえるものでしょう。尤も、実際にはこれだけが《竜髭棘槍》の全てでもないのですが。

（やはり、痛みは鋭く、深く……そう、鋭利でないといけませんよね）私の理想ともいえるこの装備を使うには少々どころではなく力不足な相手ですが、まあ、せめてもの労いという物です。

ドツ

軽く腕を突き出し、心臓の上を正確に貫きます。ついでに、空いていた口の中に《機竜爪刃》ダガを投擲して声帯も切り捨てておきます。これで、叫び声をあげられる心配ありません。

「死ねば、お金も必要なくなるでしょう？」

「……！！」

ドサツ

何か言おうとしたみたいですけど、何も言えずに事切れたみたいですね。

（興味も何もないので別にどうでもいいですけど）

《エクス・ドレイク》の機能の一部を起動し、迷彩を使用。隠れつつ《機竜爪牙》を回収、それからしばらくの間《竜髭棘槍》を刺したままにしておいてある程度血流が落ち着くまで待ちます。派手な出血は見つかりやすくなってしまうから。

「飛行ユニット、起動」

そのまま適度に落ち着いてきたところに、機竜由来ではない方の機能を起動。迷彩を用いたまま、飛び立ちます。ちょうど、先程の店の警備員もこの場所を嗅ぎつけてきたみたいですし、頃合いでしょう。

（さて、戻って報告と行きますか）

事務的な事を考えつつも、耐え難い渇きにも似た感情に胸中は占められていた。

(……多少は良かったけど、やっぱり全然足りない。

やっぱり、もっともっと、殺し甲斐のある相手じゃないと……)

殺した時特有の、あの、黒く、昏い悦びが薄い。

最初のころは別に今のような相手でもそれなりの悦びを味わえたけど、今はそれなりの相手じゃないと満足できない。

(嗚呼……早く、殺したい……)

だからこそ、あの新王国の機竜使いを手にかける瞬間が待ち遠しくて仕方が無かった。

S i d e ラウラ

「……それは、本当か？」

『はい、隊長……』

信じがたい事ですが、確かな記録です』

副官であるクラリツサから軍用の秘匿回線を介して告げられた内容に、思わず眉根を顰めそうになった。

「しかし、よりによってその線で繋がってしまうか……」

『私も同意です。』

しかし、どうしようもありません』

「私も軍人だ、分かっている……」

しかし、監視するにしても師匠相手となると一筋縄ではいかないだろうがな」

伝えられた内容とそれに伴う任務に付きまとうだろう苦勞と苦惱を思い、苦々しい思いで胸中が支配された。

『はい。ですが、私達も情報が不足しているのが現状です。だからこそ、少しでも得られる可能性のある場所から得なければいけません。』

——旧『VTシステム』研究所職員の中で、今現在では唯一その足跡が掴めていない人物。「ウェイル・アーカディア」について』

副官でもあるクラリツサからの進言に、ため息が漏れそうになったのを何とかこらえた。部下の手前、そのような姿を見せたくはない。「師匠の後援者と思われる人達の中には、同じ姓の人間がいたからな。もしかしたら関わり合いが、という事か」

『そうなりますね。』

それと、隊長。もう一つなのですが……』

「なんだ？」

今以上の悪い報告は聞きたくなかったが、聞かないわけにも行かない。どのような報告で有れ、それを知らない事には隊長職など務まるはずもないのだから。

『ウェイルなる人物についてなのですが……二つ、お伝えしておかなければならない事があるかと』

「二つ？」

『はい。』

一つ目は、当該人物の経緯を洗った結果、我が軍の所持している資料にある経緯はほぼ虚偽であることが確定しました。名前のほうは確定であろうことが推測されますが……』

頭の痛い報告に、胃薬が欲しくなる気分になった。が、当然そんな泣き言を言っている暇はないので続きを促す。何より、それに対してどうするかを考える事こそが私の職務の一つなのだから。

「もう一つは？」

『それが……私達「黒 兎 隊」へと《ヴォーダン・オージエ越界の瞳》を移植した科学者の中にも、その名前がありました。』

つまり……』

「……私達の足元も、盤石ではないという事か」

最悪の先手を打たれている可能性を示す報告に、先程までのような苦悩とはまた違った意味で緊張が走った。

「話は分かった。

此方は此方でしかるべき対応をしておく。お前たちは引き続き、留守を頼む」

『ハッ！』

威勢のいい返事を最後の会話として、私達は通信を終えた。

《越界の瞳》を移植した張本人の一人。

つまり、それは……私達の体に、ナノマシンを注入した張本人の一人という事であり、その際にナノマシンを通して何か細工をした可能性も否定できないということ……)

体内への気付かない内の細工という最悪の先手。それを打たれた可能性を否定できない現状に、背中に氷のナイフでも突きつけられているような錯覚を覚えてしまった。

S i d e 楯無

「虚ちゃん、その情報は確かなのね？」

「はい。」

混乱を避けるため、今は公表されていませんが……国際ISS委員会を中心としたドイツへの合同調査の結果、不自然に足取りの掴めていない元『VTシステム』研究所職員が一人特定されました。

ですが、其の人の名前が……」

『ウエイル・アーカディア』、ね……」

捜査線路上に出てきた名前に、頭を抱えた。

それは、今現在、私達が協力関係を結んでいる人達と同じ苗字だったから。しかも、その苗字の人は兄妹で参加している。ここから推測を多分に交えるのであれば、兄妹以外の親族が参加している可能性も考えられた。

「今迄の事が全部、自作自演、何てことは無いと思いたいけれど……」
冗談めかして呟いては見たけど、わりと笑えない。何より、影内君が実は末端で上の方でそういう方向でやっている、なんて事も無いとは言いい切れないからだ。

「影内さんに、この事は……」

「……知らせない方向で行きましょう。」

今はまだ、ね」

まだ、の部分に僅かながらの希望を乗せつつ、その後の対応を思案していく。

「では、今後も影内さん達の身辺調査は」

「続けるしかないでしょう。」

とにかく、今は早く彼らの情報を集めないといけない。下手すると、白騎士事件じゃきかなくなるかも知れないんだから」

先手を打っていない事に歯がゆさを覚えつつ、同時に強く感じる焦燥感に責め立てられるような感覚を抑えるのに必死になっている私
がいた。

(一体……何が起こってるっていうの!?)

第六章（2）：海へ

Side 一夏

「海い！ 見えたあ！」

「イヤッホオオオオオオ！」

「嗚呼……潮が香る……♪」

バスに揺られて暫く、出発当初からテンションの高かったIS学園一年一組の面々だったが、海が実際に見えてくるとさらにハイテンションになっていた。

かく言う俺も、目的在りとはいえ海水浴の時間がとられている今回の旅に楽しみを感じていない訳ではない。

「いっちょもやっぱり楽しみなの〜？」

そんな様子を察してか、後ろの方で一緒に座っていた本音が興味を隠す気も無い様子で聞いてきた。

「全くそんなことは無いと言えば嘘になるが……どちらかと言えば、大分前に師匠達を始めとした人たちと言った時の事を思い出していた、な」

特に嘘を吐く理由も無いために、そのまま考えていたことを率直に告げた。

「む……師匠は師匠の師匠達とも海へと言った事があるのか？」

前の席から乗り出しながら後ろを向いて質問してきたのはラウラだった。

「危ないから座っていたほうがいい」

「心得た、師匠」

「それと、その任を了承した覚えは無いと何度言えば……」

相変らずの呼び方に何度目かもわからない返しをしたが、それでも帰ってくるのは変わらず同じ呼び方だった。

「そ……それよりもさー！」

影内君は、影内君の師匠ともいった事があるんだよね？ 何時頃行ったの？」

場の雰囲気を変えるためか、デュノアが半ば無理やりに話題の変更

を敢行してきた。此方もそれに乗っからせてもらおう事にする。

「ああ……確か、二年ほど前だな。」

もつとも、あの時は大半の時間を荷物持ちで過ごしたが……」

機竜側へと行ってまだ間もないころ、リエス島への強化合宿（及び第三遺跡・方舟の捜索）である事態が懸念されたために連れて行って貰った時の事を思い返していた。

（……あの時、ルクスさんとクルルシファーさんと一緒に晩御飯作ってたっけ）

ある事態、つまりルクスさん以外誰も料理ができないという事態を懸念したレイイさんによって連れていかれる事になったのを思い返していた。

レイイさん自身、思い出作りという意味を含めて自分たちで作ろうと画策していたみたいだが、流石に最後の保険くらいは掛けていたらしかった。俺自身としても調理場の手伝いという「雑用」を何度か熟していたことがあったため、レイイさんも知っていたらしい。

「荷物持ち？」

「ちよつと状況が特殊だったんでな……まあ、最終的には別な人が番をしている間に多少は遊べたが」

尤も、あれは番をしていたというよりはセリスティアさんの『軽い運動』によって体力を使い果たした一部の生徒が休むついでに交代してくれた、といった方が正しいのだが。

「そうなのか……でも、今となってはいい思い出なんじゃないか？」

「それについては全面肯定だな。」

其の後に色々あったが……」

剣崎からの言葉を前半は強く肯定したが、後半は方舟での事を思いだして少し疲れた気持ちになっていた。

「何か嫌な事があったのですか？」

「ああ……まあ、そうだな。」

無かったとは言えないが……」

さすがに遺跡でのことをいう訳にはいかなかったので誤魔化した。俺個人としても、あの時の事は後半、特に終焉神獣《ユグドラシル》が

出てきた後の事は色々な意味で記憶に焼き付いているだけに、思いだしたくないことまで思いだしそうになる。

(だがまあ……あの時に、《アステイグ》とも出会ったわけだしな。その意味では、僥倖とも言えるか)

そうして過去の思い出に至っている間に、どうやら大分バスは進んだらしい。

「もうそろそろ宿泊予定の旅館に着くぞ。

降車準備を済ませておけよ！」

「忘れ物の無いようにお願いしますね〜」

「「はいっ〜」」

最初に織斑教諭が、その次に山田教諭が一組全員へと声をかける。それに対する威勢のいい返事とともに、それぞれが準備を始めた。

Side 篇

それぞれが降車準備を進めていく中、少しばかり暗鬱な気分を抱いていた。

(……誕生日、か)

考えすぎだとは思いたい、何も無いとは思えなかった。

何より、ここに来る前に受けた電話が不吉すぎた。

(あの時の迂闊な自分を殴り倒したい……)

企業代表になってからは非通知の電話なんてよく受けていただけに、さして警戒を抱かないまま受けてしまった。その一秒後に受け取ってしまった事を後悔したが。

(本当に、なんで……受け取ってしまったんだ……!)

そんな後悔を抱きながら、昨晚の出来事を思い返していた。

『やつほく、皆のアイドルで大天才の束さんだよ〜♪』
プツ

受け取って二秒後に電話を切るのは初体験だった。

プルルルル プルルルル

再びかかってきた電話に、暫くは無視した。が、そのまま鳴り続けること数分。

場所は自室。今は本音がないが、いずれ帰って来るだろう。

(……本音が返ってくる前に、終わらせるか)

諦めにも近い心境で再度携帯を開く。

『酷いよ、箒ちゃん!』

せっかく、束さんが忙しい合間を縫って連絡したってのにさー!』

「忙しいのですか。」

実の所、私も忙しい合間の数少ない憩いの時間ですので、お互いもう少し時間が取れるときにでもしましょう。それでは、さようなら……」

『ちよおおおつとまつたあああああー!』

適当な事を言って電話を切ろうとしたが、謎の勢いと言うか技術によって阻止されてしまった。

『箒ちゃん、もうすぐ誕生日だよね!』

「……で、それがどうしましたか?」

名前を変えても、アレだけはそのままにしていた。

誕生日の日、一夏から送られたリボン。バスジャックの時も奇跡的に——多少焦げて短くなっただが——残ってくれていた。

(一夏との、数少ない思い出なんだ……我儘だが、変えたくなかったんだよな……)

そんなことを知ってか知らずか、一応は血縁上の姉である人物——戸籍上は篠ノ之籍から離縁しているのだから——は随分と気楽な口調で何とも無責任なことを言っただけだった。

『よくぞ聞いてくれたよ!』

箒ちゃん宛てのプレゼントを用意しているんだ! 楽しみにしててね、束さんが念には念を入れて入れ過ぎた最新最強のIS! 本当

はいつくんの《白式》と対になるはずだったんだけど……」

「……念のため、確認の意味で聞きます。」

誰に、何を、何の目的で送る気ですか？」

『箒ちゃんに、私が作ったISを、誕生日プレゼントで送るよ』

その一言に、携帯電話を耳に宛てながら天を仰いだ。仰いでしまった。

『それじゃあ、箒ちゃんの誕生日を楽しみにしててね！』

じゃー！』

「ちよ、まつー！」

プツ

私がおかを言う前に、というか確認の言葉を発した直後くらいに一方的に別れを告げるとそのまま切ってしまった。

「切れてしまった、か……」

愚策とは分かりつつも、再度、同じ番号へと電話をかけてはみた。だが、その全ては徒労に終わることになる。

「……よりにもよって、なぜ今になって！」

思わず腰かけていたベッドへとそのまま仰向けに倒れ込み、そのまま呻くように大声が出た。そのまま歯軋りしつつ、携帯を持ったままの右手で目の部分を横に覆った。

(最悪、不参加に……いや、その場合は恐らく場所が学園の自室になるだけか。)

なら、倉持技研は……結局同じか)

無意味だと知りながら、何か対策は無いかと思案してしまう。その度に私自身の不出来と無力を再認識し、意識せずに体に力が入っている。右手の携帯がミシミシと言っている気がするが、気にしている余裕が無い。左手の掌に少し生暖かいような液体の感触がするが、気にする必要もない。

(……もう、いっそ……いっその事……！)

思考が憎しみに染まっていき、同時に余りにも無謀に過ぎる、恩人たちへの裏切りにも等しい行為が頭をよぎる。

「……ほーちゃん、何があったの？」

「……本音、か」

そんな私の醜態を見た恩人でもあり同居人でもある本音は、心配そうな顔で私の顔を覗き込んでいた。おそらく、私が思案に耽っている間に飲み物を買って帰って来たのだろう。

「……いや、何でもない。」

気にしないでくれ」

無理やり顔の力を抜いてから、少しだけ右手をどけてその顔を見据えた。ここで笑顔の一つでも作れば安心させられるのだろうが、今の私にそれは出来そうになかった。

「……嘘つき」

本音がそれだけポツリと眩くと、そのまま私の顔を自身の膝の上に乗せた。

「ほ、本音……？」

「無理、しなくていいんだよ」

「……無理、など」

していない、とは言えなかった。言う前に、本音が左手を優しく取ると、握りしめた拳を開いてしまったから。

血の付いた掌を、私に見せるように。

「……こんなになるまで、握り締めて、耐えているのに……何も無いはず、ないでしょ。」

無理なんて、しなくていいの。私も、かんちゃんも、無理をさせるためにほーちゃんを迎えたわけじゃないんだから。頼ってもいいの。

頼りすぎるのも、問題だけど……でも、私もね。全く頼ってもらえないのは、悲しいな」

本音はそう言いつつ、何処からか出した救急箱から必要なものを出すと手際よく手当てしていった。

言い聞かせるように話しているが、同時に普段通りにゆっくりとした口調が、今は心地よかった。

「……すまない。」

また、頼ってもいいか？」

「うん」

短く、だが明瞭に本音は肯定してくれた。

(……改めて思い返すと、不出来にもほどがあるな)

昨晩の出来事だけに鮮明に覚えているが、改めて思いだすとその情けなさに乾いた笑い声を挙げそうになった。さすがに何の前触れも無くそんなことをすれば完全に不審な挙動でしかないので、其処はさすがに抑えたが。

「箒さん、どうかしましたの?」

そんな風に考えてつつ外の景色へと視線を移したところ、隣の席に座っているオルコットから声を掛けられた。その顔には、どこか不思議そうな表情を浮かべている。

「いや、オルコットの気にすることじゃない。

これは私自身の事なんだ」

「まあ……何か問題でも起こったのですの?」

オルコットが不安そうな表情で聞いてくる。心配してくれているんだと分かると、何処か嬉しい部分もあった。

(それだけでも、活力になってしまいか……私も、現金だな)

「問題と言えば問題、かな……」

だが、もう手は打ってある。気にしないでくれ」

「そうでしたか……」

ほっとした顔で表情を緩めたセシリアだったが、直ぐに表情を引き締めると此方を真っ直ぐに見据えながら続く言葉を紡いだ。

「箒さん」

「なんだ?」

「……もし、何かありましたらお声掛けをしてくださいまし。

微力ながら、お力添えますわ」

セシリアの言葉に、一瞬だけ面食らった。だが、意味を理解するにつれて自然と此方も笑みが零れてきた。

「そう、か……」

すまないな、世話になる」

「お気になさらず」

微笑さえ伴いながら、セシリアも再度返してくれた。

(……本当に、私は友人に恵まれたな)

自分には過ぎたほどの心強い友人の存在を再認識して、私も幾分心が軽くなったような気がしていた。

Side 一夏

「此処が、お世話になる旅館の『花月荘』だ。

毎年IS学園の臨海学校の際に宿泊施設を提供してくださっている。従業員さんの負担を増やさないよう、そして後輩たちの迷惑にならないように注意しろよ!」

「はいっー!」

織斑教諭が全体へと声をかけ、生徒たちが声を揃えて返事した。

それを確認した後、織斑教諭の隣に一人の女性が立った。着物姿で、外見から推測される年齢は三十代半ばほどだろう。だが、絶えず浮かべる人受けの良さそうな笑みが幾分年若く見せていた。

「女将の清洲景子きよすけいこと言います。

皆さん、三日間よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひしますー!」

女将さんの挨拶に、再度、全員が揃って返事した。

「あら、此方が事前に話されていた方ですか?」

そのなか、俺の方を見るとそのまま織斑教諭の方へと尋ねていた。

「ええ、まあ。

今年はコイツがいるために浴槽分けが面倒になっちゃってしまい、申し訳ありません」

「いえいえ、しっかりしていそうな、良い子ではありませんか」

「そう見えるだけですよ。

はら、挨拶をしろ」

何気に貶されているが、そこは軽く流しておく。目上の人間には基本的に謙った表現を使うべきであることくらいは理解しているし、それを抜きにしてもここで騒ぎを起す利点は無い。

「影内一夏と申します。」

この度は種々のご苦労をおかけすることになるかと思いますが、何卒、よろしくお願い申し上げます」

「あらあら、ご丁寧にどうも。此方こそ、よろしく申し上げますね」

相も変らぬ柔和な笑みを浮かべつつ、此方の挨拶にもきちんと返してくれていた。

「それでは皆さん、お部屋へとご案内致します。」

海に行かれる方は別館の方にて着替えられるようになっていきますので、其方をご利用下さい。場所が分からない場合は、何時でも従業員にお声を掛けて下さい」

女将さんが再度、全員へと声をかける。対して一組の面々も声を揃えて返事してから、それぞれの荷物を持って中へと入っていった。

一方、俺の方は織斑教諭に呼び止められていた。

「ところで、影内。お前の部屋割りだが……」

「そう言えば、しおりには記載されていませんでしたね。」

「どこに？」

ある意味で今後の行動に深くかわかることが確定しているために、早々に確認しておくことにした。だが、そこで予想外の声が割って入ってくる。

徐に声をかけてきたのは、本音だった。

「いっちょのお部屋はこつちだよ」

「そういう事で、此方で案内しておきます」

その声に続く形で、剣崎も同じように合流してくる。そして、この面々がそろった時点で薄々とは察せた。

「生徒会関係者で一室取ったのか？」

「そういう事になるな」

「室名の方には、『生徒会』としか書かれていないからね」

そう言う事か、と合点が行きつつも同時に一つ疑問に思ったことも

あった。

「……その割には、伝えられたのが今なのだが」

「部屋割りの話しあいの時に、織斑教諭がかなり強硬な姿勢をとったらしくてな。」

確定したのも昨日の事らしい」

「先生達も、普段の態度からすれば珍しいって言ってたね」

今更同室になって何をするつもりだったかも分からないが、阻止してくれたであろう更識会長やその手伝いをしていただろう虚さんに、後でしつかりとお礼を言っておくことをこの時決めた。

「一部の生徒は推測で来るかもしれないが、その時は向かいの先生方の部屋に気付かれるだろうしな。」

迂闊には近づけまいよ」

「それと、隣の部屋はセツシとく、リンリンとく、シャルルンとく、ラウランだよ」

「……何処かで見たとような面子だな」

完全にフランスでの『^{ネスト}巣』攻略戦の時にIS学園から参加した面々である。

(いざという時に動きやすいように、か)

薄々どこの部屋割りの真意を察したが、それについてはどうという事も無い。むしろ、この采配に感謝したいほどだった。

(何事も起こらないのが一番ではあるが……)

臨海学校が平穩無事に終わることを心の中で祈りつつ、俺も部屋へと入っていった。

S i d e セシリア

(なるほど……これが、日本の『旅館』という物ですか)

少しではすまない楽しみな気持ちを抱きながら、その扉をくぐりました。

中の設備は中々の物。最新設備を揃えているみたいですが、それぞ

れがこの国特有の歴史ある趣と調和するように装飾されています

そうして部屋へと入っていきましたが、中に居たのはある意味で見慣れた人たちでした。

「ようやく来たか」

「少しゆっくりと来ましたから。」

日本のこう言った旅館は、何分初めてなもので」

「安心なさい。」

日本で過ごしたことがある私も、こういったのは初めてだから」

「でも、僕はこの落ち着いた感じ、結構好きかな」

ボーデヴィツヒさん、鈴さん、シャルロットさんの三人。IS学園に入学してから御馴染みとなった何時もの皆さんです。

「ところで、皆さん海にはいきませんの？」

「生憎、荷物を運び終わってそんなに経ってないのよ。」

それに、今行っても更衣室代わりの所は途轍もなく混んでいるだろうしね」

鈴さんの返答に、私も納得しました。確かに、ここに来るまでの間に女生徒の集団が固まって更衣室へ行こうと言っていた覚えがあります。それも、結構な数が。

「そういう事で、一休みしているってわけ」

「長時間の移動で体も硬くなっているしな。」

私としてはこの程度は平気だが、だからと言って焦ることも無い「そんなこと言って、本当は水着になるのが恥ずかしいだけとか無いよね」

「そ、そんなことは無い……」

ラウラさんの意外な一面を見た気がしますが、微笑ましかつたので良しとしましょう。

それに、実際はフランスでの『^{ネスト}巣』攻略戦時の疲労である事は私にも分かります。

(なんせ、私も抜けきっておりませんしね)

加えて言えば、シャルロットさんに限ってはその後の『イクス・ラファール』に関する諸々の疲労もあることでしょうしね。

「ま、適当に休んだら行きましょ」

鈴さんが締めと言った一言に、私を含めた三人全員が頷きました。

Side 一夏

ひとまず泊まる部屋に荷物を置き、其の後に合流した簪と一緒に更衣室へと向かっていた。とは言っても、俺は当然別室での着替えであるため途中で分かれて一人歩いていく。

その道中で、奇妙な物体があった。

(機械で作られた兎の耳、か……)

触らぬ神に祟り無し。別に神というわけではないが、厄介事の種になりそうではあるのでそのまま全力でスルーする。

そのまま別館の更衣室へと歩を進めていく。意図的にある程度の遠回りをしておいて女子たちの近くを通るのは避けた。

早々に着替えを終え、海の方へと脚をむける。体の方には古傷の類が少々目立つが、それも気にするほどではないと判断して歩は進め続けた。

「影内君だ!」

「わ、私の水着変じやないよね?」

「すっごい腹筋……」

「全身の筋肉と傷跡……ハアハア……」

海に出たら出たで此方の姿を認めた他の女生徒からわりと色々な声が上がった。学園の制度が制度であるために男性が物珍しいのだろうか、それにしても一部から変な声が聞こえてきている気がする。

「影内、此方に来ていたか」

「剣崎?」

そんな中、後ろから来たのは剣崎だった。この年頃の、というかこの場の中の女生徒の中ではかえって珍しい、露出の少ないスクール水着を見ている。

「あちらでビーチバレーをやるみたいだが、一緒にどうだ?」

「お邪魔させてもらうよ」

そのまま、其方の方へと歩いていく。さらに、道中では見知った面々もいた。

「影内君」

「ん……簪か」

最初に会ったのは、簪。此方はこの前の買い物のときに買った水着を着ていた。

「ど、どうかな……？」

それだけ言うと、僅かに頬を赤らめながら反応を待っていた。その姿は素直に可愛いと思っただが、顔の赤さに体調が心配になった
「似合っている。」

「可愛いよ」

「か、かわ!?!」

一気に赤くなったため、さらに体調の方が心配になってくる。尤も、それも本音が「お〜い」とゆっくりとした口調で呼びかけたと同じ時に顔色が元通りに戻っていった。

「こつちでビーチバレーやってるって〜!

いっしょにやろ〜!」

「分かったから!・ ちよつと待ってて!」

本音の呼びかけに簪も大声で返答すると、此方の手を取ってきた。心なしか、先程より機嫌がいいようにも見えた。

「影内君と箒も、一緒に!」

「ああ」

簪の呼びかけに剣崎も短く返答していた、元より誘われていた身だが、断ることも無かったのだろう。

だが、現場に着いたら付いたでまた異様な面々が現れる。

「影内君」

「デュノア、と……そっちの布の塊は何だ?」

片方はオレンジが基調となっている水着に身を包んだデュノアだった。そちらはいい。

だが、問題はデュノアが連れてきたもう一人(?)だった。

「ほら、ラウラ！」

「だ、大丈夫……だ……」

「いや……なにがどう大丈夫なんだ？」

思わず突っ込んでしまったが、思いの他、反応は大きかった。

「くっ……ええい、ままよー！」

そのまま、若干、苦戦しつつも布の塊と化していたラウラはその体を覆っていたバスタオルを全て脱ぎ終えていた。

「くっ……このようなヒラヒラ、似合わないに決まっている……！」

顔を本格的に恥ずかしさで真っ赤に染めつつ、ラウラはその恥ずかしさを誤魔化そうとするかのように頬を膨らませながらそっぽを向いてしまっていた。

「いや、そんな事は無いと思うが……」

「だよね！」

僕は絶対に大丈夫だって言っているのに、ラウラったら全く信じてくれなくて

「そうだな。いい意味で似合っている」

「……くっッ！」

その一言に、ついに限界に達したらしいラウラの顔が耳まで真っ赤に染まっていた。ボンッ、という音とともに湯気でも見えてきそうな感じでもある。

「相変らずの騒ぎね」

「嵐に、オルコットもか。」

「お前もビーチバレーに？」

そんな状況で後ろから声をかけてきたのは嵐だった。その横には、オルコットもいる。

「ええ、つい先ほど誘われましたね。」

サンオイルも塗ってもらったところでしたし、ちょうどよいかと思いでいます」

「体を動かすのは好きだしね」

二人からそれぞれに反応を貰い、「そうか」と返しておく。だが、この後に俺と剣崎、簪も参加する旨を言うと、途端に嵐が不気味な笑い

声をあげ始めた。

「フツフツフ……今度こそ勝ってやるわ、影内！」

「いや、ここでまでヤル気を出すなよ……」

異様なヤル気を見せだしてきた凰に、思わず突っ込んでしまった。

「ビーチバレーか。」

童心に帰るな」

そんな喧騒の中、不意に大人びた声が聞えてきた。

「ですね。学生時代以来やったこと無いですし」

続いて、もう一つの声が聞えてくる。

声の主は、前者は織斑教諭、後者が山田教諭。二人とも今は水着に身を包んでいた。

「織斑先生も山田先生も綺麗〜！」

「二人ともモデルさんみたい……」

「……巨乳なんて、巨乳なんて……パルパルパル……」

「教官……お美しい……」

二人の登場に其の場——生徒の一部の反応がおかしいのは努めて気にしない——が沸き立つ。

だが、俺はその輪の中には入らないでいた。

（本当に関心が無くなってきているな……）

どことなく自分がおかしくなっているのは自覚しつつも、この雰囲気の中では騒ぎを起こす気にはならないので努めて平静を装った。

その後は極普通にビーチバレーが始まったが、久々の楽しい時間だったためだろうか、大分力が入ってしまったらしい。途中でボールが二度ほど破れる事態になっていた。

ボールを持参した生徒には後でしっかりと誠心誠意の謝罪をさせてもらった事は言うまでもない。

第六章（3）：死線への序曲

S i d e 一夏

「まさか、夕飯に刺身の盛り合わせが出るとは……」

時刻は既に十九時を数え、夕食の時間。海の幸を中心とした豪華としか言えない夕食が開放された大広間の卓に所狭しと並べられていた。

そして、それは食事を見つめてはしゃいでいるIS学園の一年全員に言えた。『お食事中は浴衣着用』という決まりがあるらしく、全員が浴衣を着ている。

だが、完全に和で固められた食事内容とは違いテーブル席まで完備されているあたり、この学校が留学生もいる国際色豊かな学校であることを思い出させる。

「羽振りがいいものだな」

関心半分、呆れ半分といった具合で呟いたのは剣崎だった。だが、しっかりと夕餉に舌鼓を打っている。

「ん〜ん……♪」

そして、それは剣崎に限った話ではなかった。ほど近い席では既に箸の使い方と正座をマスターしたデュノアが頬を緩めつつ食べている。

「な、生身の魚がここまで美味だったとは……!」

一方、今は学園でもデュノアと相室となっているボーデヴィツヒも用意された食事に満足している様子だった。もつとも、方向性が少しおかしい気がしないでもない。

「……ま、こういうのもいいわね♪」

ちらりと近くの二組の様子を見れば、凰も若干、頬を緩めながら夕食を食べている。

「これが和食……良いものですわね」

一方、テーブル席で品よく食を進めているのはオルコット。こういう所で育ちの良さを出すことには特に思う事は無いが、頬の緩みは他の面々と同じく抑えられていない。

「……おいし〜」

一方、四組のほうでは簪が級友たちと談笑しつつ舌鼓を打っていた。なんとも幸せそうに頬が緩んでいる。

(……平和なものだ)

このまま平穏無事に終わってくれることを心の中で願いつつ、俺も箸を進めていった。

Side ???

「さてさて皆さん。楽しい楽しい襲撃お仕事の時間ですよ」

場違いなほど明るく楽しそうな声で、『刺刑』のセルラが号令をかけた。

最近『亡国企業』へと加入してきたこの女と一緒に、とある米軍艦と自衛隊防衛艦の一团を望遠鏡を使って観測していた。

理由は単純。今からこの場にいる四人で襲撃を仕掛けるからだ。

「まったく、浮かれてくれてるわね」

呆れた声を意図的に出しつつも、強い緊張が滲んでいるのがわかる声。出しているのは、深い付き合いのあるスコール。

もう一人、亡国に入ってから以来の付き合いとなる実動部隊員のM。此方は完全に不信感と警戒心を隠そうとする気さえないらしい。

だが、私も含めた三人揃ってこの女を含めた六人組の仲介をしたあの変人科学者から新装備を受け取った以上、下手な事も出来なかった。

「ま、なんでもいいからよ。」

早く行こうぜ。どうせ、手筈も整っているんだしよ」

適当な事を言っただけ席を立つ。本当に、此奴は色々な意味で気味が悪かった。

「さてさて、それでは少しばかりお相手になってもらいませうか。」

《銀の福音》、殺し甲斐があるといいのですけどね……♪」

恐怖も何もなく、まるで遠足に出かける子供のように、いつそ浮か

れてさえいる。

(シリアルキラー
快樂殺人者が……)

その姿に、内心で唾棄するほどの嫌悪感が湧いた。

確かに、俺自身も殺しなんて数えるのも億劫になる程度には熟してきた。だが、それでもここまで楽しんで襲撃に挑むようなことは無い。

(……まあ、その矛先が俺たちに向かなければいいけどよ)

内心でそんな事を思いつつ、俺も仕事をこなすために席を立った。

S i d e 一夏

明くる日。

「二日目の今日はISの起動実験及び野外での実習だ。

各員、特にパッケージを送られてきた専用機持ち達は各自インストール後、速やかに試験を始めるように。送られていない者は送られてきた者を手伝うように」

臨海学校二日目は、この課外授業最大の目的である野外でのISの起動実験、及び野外実習となっている。一般生徒もISスーツを着てすでに山田教諭を始めとした教員の方々の指導の元、それぞれに実習を始めていた。

一方、専用気持ちは各国から送られて来たパッケージのインストールから始めることになる。それが終わった後に実戦データの収集となるが、それが無い人間——この場には二人いる——は手伝いをしなければいけないらしい。

「……で、デユノアと俺が手伝いか」

「そうなるね。」

本当は僕もデユノア社製の追加パッケージがあったはずなんだけど、《イクス・ラファール》の増産の方が優先されることになって、そっちに人手が割かれてね。

僕も自分の会社が賑わっているのは嬉しいからいいんだけどさ」

そんなこんなで、デュノアと二人でオルコット、凰、ボーデヴィツヒ、簪の四人の手伝いをする事になった。

なお、諸般の事情で剣崎はここにはいない。別な場所で受け取る事になっている。

(上手くやっているといいが……)

友人の武運を祈りつつ、手伝いを始める。とはいっても、インストールの段階ではあまりやる事が無いので少々手持ち無沙汰になるため、その間はもう一人であるデュノアと雑談でもしていることにした。無論、手伝う事があればそちらが最優先だが。

「そう言えば、開発される筈だったパッケージってどんなものだったんだ？」

興味本位で聞いてみた所、意外とデュノアはノリノリで答え始めた。

「えつと……名前は『サザーランド・J』って言って、《イクス・ラファール》を挟み込むようにして角ばった大形兵装ユニットを取り付ける感じかな。で、前面にも追加装甲を付けるね。

武装の内約は、ミサイルポッド、ワイヤーで接続された円錐形の投擲槍を複数、下部にリニアライフル、《ガーデン・カーテン》と同様の原理の防衛装備をほぼ全面に、だったと思う」

「なんだその空飛ぶ武器庫は……」

ノリノリで応えた内容が割と本気で途轍もないものだった。敵に回したくない。というか何故そんなものを作ろうとしたデュノア社。

(……いや、身近に似たようなことをする人ならいるか。)

主にドリル関連で)

某新王国の王女のドリル好きを思いだし、一気に人の事を言えない気がしてきた。

「フランスは新型機があるからいいでしょう……尤も、イギリスも負けてはいませんがね」

そんなことを話していたところ、声をかけてきたのはオルコットだった。

「そっちはどうなの？」

デユノアが若干の対抗意識を燃やしながらオルコットに問いかけた。対するオルコットはどこか得意げに、だが同時に少し不満げにも答え始める。

「本来だったら二つだったのですが……技術的な問題から片方の開発が断念してしまったので、一つですわね。名前は『ストライク・ガンナー』。高機動用パッケージですわ」

今現在の装備は高機動用のそれらしい。それはそれで興味が引かれるが、其の内約自体は「見てのお楽しみ」と言われてしまい、そこまでとなつた。

「高機動か……そう言えば、もう一つは何だったんだ？」

「重砲撃用パッケージで、名前は『ローズセラヴィ・オブ・ムーン』。

ビットを特殊なものに変えて周辺の雷雲などからエネルギーをチャージし、スカートアーマーと背部ユニットに分割していた砲撃用ユニットを合体させ大出力の砲撃装備を形成、一気に敵を焼き払うというコンセプトのパッケージですわ」

興味本位で聞いてみた装備の内容が単純明快かつ分かり易い脅威となりうる物だったのだが、同時にあまりにも分かり易い弱点の予想がついた。

「浪漫に溢れた装備だな……チャージさえ出来れば強力そうだが」

「実際にその通りですわ。」

ですが、その……チャージしたエネルギーの回収と、チャージ時間そのものが長すぎたという欠点が解消できず、頓挫した次第ですわ」

中々に途轍もないものを開発しようとしていたイギリスだが、この分だと他の次世代機開発計画参加国も大変なものを作り出しそうな気がしてならない。

「すまない、師匠。少しいいか？」

「だから、その任を了承した覚えは無いと……。」

で、なんだ？」

そうこうしていたところ、ボーデヴィツヒからお呼び出しがかかった。

(さて、優先はこちらだな)

今やるべきことをこなすため、俺も席を立った。

Side 箒

「さて、ここいらのはずだが……」

ガサガサと茂みの中をかき分ける事、すでに一時間近く。旅館からさして遠くへは来ていないはずだが、それでもそこそこ運動した気持ちになつていた。

「箒君、こつちこつち！」

そうして愚痴が出始めたところに、如月さんの声が聞こえ始めた。相変わらず、胡散臭そうな口調をしている。

「如月さん、お世話になります」

「いゝのいゝの！」

さして、今週の新装備は「つと」

何処かの毎週日曜夜6時30分から放映している某国民的アニメの次回予告とよく似た口調で如月さんが掛け声をかけると、後ろに控えていたトラックのコンテナがゴゴゴ……という音を出しながら動き始めた。

積荷の内容は、新造の脚部パーツと腕部パーツに、新しくなったアンロックユニット、非固定浮遊部位、背面用と思われる追加ブースター。さらに細かい装甲類と、なにやら妙な形状のマシンガン。一目見ただけで分かるのはここまで位である。

「なぜなにISの時間だよ」

そう言いながらコンソールを操作し、どこからか指示棒を出している。なお、この時にコンテナに備え付けられたスピーカーから「手古摺つてるようだな、手を貸そう」と聞こえた気がするが努めて気にしない事にした。と言うか、いい加減に慣れた。一々この程度の事で狼狽えていてはこの人の相手は務まらない。

「最初は地味な方から行こうか。」

まず、新造の脚部ユニット。基本的に装甲削って機動性を上げた感

じだから、そこはまあつまらないけど許してね」

「いえ、最低限の装甲のみで後は機動性、運動性重視はむしろ私好みなのでいいのですけど」

私の言葉に、如月さんは「それは良かった」と言いつつも不敵な笑みで此方を向いた。

その不敵な笑みに、猛烈な不安を掻き立てられる。

「でも安心してほしい。」

しっかりと大出力ショックブースタを搭載しておいたから！」

「……何を基にしたんですか？」

字面だけを見れば特に何も間違っていない気がするが、それでも疑問は残った。

(この人の事だ。

なにか……何かあるはずだ……！)

「うん？」

別に、普通の背面用か肩の非固定浮遊部位用のブースタを改造して単発仕様にしたただけだけ」

「それ、ちゃんと出力は調整しましたよね？」

基本的に、背面、或いは肩の非固定浮遊部位用のブースタという物は大出力大型のものが多く、其れに見合った性能がある——極一部の例外は気にしないとして——のが常だが、それと同時に十分な固定を施すなどしなければ使い物にならないという事も少なくない。簡単に言えば、使いどころの問題という事でもある。

だが、足などと言う自由度が高い代わりに単純に体積が小さい、つまり場所が狭いのでは何らかの工夫が無いと十分な固定ができない。ましてや、軽量化に主眼をおいて装甲を減らすなどしている今回のケースでは尚更だった。普通に考えるのであれば、腰にも既に追加のスラスターがあることを考えれば、出力を落とすしつつ単発化して固定に必要な強度を落とすほうが定石とも言える。

「勿論！

ちゃんと元にしたブースタの性能を損なうことなく最大出力で吹かせられるようにしっかりと取り付けておいたから！」

だが、そこはやはり如月クオリティと言うべきか。私の想像の斜め上に行く代物であつたらしい。

(……私に扱えるだろうか?)

至極単純な疑問が上がるが、そこは戦術と腕だと思い直して無いも言わない事にした。

「さて、次も地味と言うかお決まりな品だけど。

背面用の追加ブースター。大型大出力で瞬発力最重視だからそこは安心してね」

「最高速度の方は？」

「標準的な物よりは速いよ」

決してズバ抜けているわけではないという意味も含まれているのだろうが、そこは良しとした。加速力が高い方が実はありがたかったりするし。

「さてさて、それじゃあ地味な物シリーズの最後を飾ろうか。

で、これは各部の追加装甲と交換部品。全部、実体剣としても使えるか実体剣その物を内蔵しているから、これで一部が破壊されても攻撃できるね」

追加の装甲と一部の交換部品の正体は、近接用ブレードを内蔵した装甲と、ブレード兼装甲と呼べる代物だった。中々に使えそうな代物だけに、期待が持てる。

(身近に似たような特性の装備を使っている人間もいるしな。

後でコツでも教われたらありがたいが)

後で影内あたりに相談しようかなどと考えつつ、その他の追加装備の説明を聞いていく。

「さて、さてさて！ 持ってきました！ 私が！ 如月が！ 私の自信作シリーズを！」

まずはこの五連装マシンガン《フィンガー》。見た目のとおり、五発同時発射するマシンガン！ 集弾性は悪いけど元々密着撃ちするためのものだし、牽制とかに使ったら超短時間で弾切れするけどそんなの使わなければいいだけだよね！」

確かに私の射撃技能では中距離以遠の攻撃は絶望的だし牽制より

も接近行動を優先してしまう事は少なくない。だが、それでも最初からその選択肢をそぎ落とすのは如何な物かと思わずにはいられなかった。

「お次はこの新造腕部ユニット！ 袖の内側、つまりは掌の側に熱粒子放射銃《日輪》^{ニチリン}を仕込んでいるんだ！

これで派手に戦おうじゃねえか！ これから毎日敵を焼こうぜ！」
「如月さん、後半はマズイですよ！」

熱粒子放射銃。高エネルギー化させたビーム粒子を収束させずに直に吹き付けて攻撃する熱攻撃用装備。攻撃時の様子は完全に火炎放射器であるこの装備には、覚えがあった。大分前の事だが、如月さんが例のごとく試作した装備に似たようなものがあったからだ。

尤も、あの時は形状は銃と言うか現実の火炎放射器と似通っていたし、性能面も至近距離まで構えながら近づかないといけない事を考えると今一つと言わざるを得ないものだった。

だが、今回は腕部の内臓。隠し武器としても期待できるので、使い道はあるかもしれない。

だが、それでも後半の台詞はいただけない。何と言うか、KもしくはVの文字の書かれた黄色いスーツを来てヘルメットを被った男の子が持ったギリシャ文字の最初の文字とほぼ同じ名前の光線銃に一撃でやられそうな気がしてしまう。

「そしてそして、最後まで最後！ トリもオオトリ！」

新造された肩の非固定浮遊部位に内蔵されたというか装備された特殊装備《アリエス》！ 凄まじい連射速度の三連装ビームショットガンだよ。これに直撃でもすれば、その瞬間にSEを凄まじい勢いで消し飛ばせるね……フフフフ……♪」

これも知っている。以前、手持ち式の似たようなものの試験を担当したことがあった。

(だけど、あの時は……)

「もう分かっているとと思うけどこれも以前テストした装備の改良版だね。」

ほら、あの時は武装用のエネルギーゲインを怖ろしい速度で食い荒

らして使って使い物にならないって話だったでしょ？」

「要約すれば確かにそうですね」

この武装の原型をテストした当時の事を思いだしていた。

確かに、撃つて数秒するともう武装用エネルギーゲインが枯渇していた。余りの速さに、そして攻撃手段としてのピーキーさに絶句したのは言うまでも無い。

はたして、あの欠点はどうなったのか。

「だが、安心してほしい。

《イクス・ラファール》のアモサージュー・デ・デザート《砂漠の呼び水》を改造した専用エネルギーパックを一機に付き一個搭載しといたから！」

省エネルギー化ではなくエネルギーその物の大容量化で対応する当たり、この人らしいと思った。

「つまり、《アリエス》一機に付き事実上、通常のIS一機の80%に及ぶエネルギーが割り当てられているという事ですか……」

だが、その意味する事を悟った瞬間に一気に呆れ返る。少なくとも真つ当なやり方ではない。

(この人らしいと言えば、そうだが……)

そんな私の心を知ってか知らずか、如月さんは最後の蛇足とばかりに説明を付け加えた。

「あ、それと機体全体の稼働時間延長のために通常の《砂漠の呼び水》も搭載してあるから」

言われて追加される品々を見れば、確かに《陽炎》に合わせたカラーリングに変更された《砂漠の逃げ水》もその中にあることが見てとれる。

(と言うか、それは物のついで扱いするような物でもないでしょうに……)

冷静に考えれば色々と言言が可笑しい気がするが、もう今更だと思つて気にしない事にした。

「しかし、贅沢な機体ですね。」

私用にこんなに使っていいんですか？」

「いいんじゃない？」

君好みのものを揃えたつもりだけど」

確かに中々に私好み——使用経験の無さすぎる一部の装備は割愛——だが、そういう問題でもない気がする。

(ま、そこは戦術と腕でどうにかするか)

現状どちらも伴っていないので厳しいが、そこは今後、鍛錬を積んでいくとしよう。

そんなことを考えつつ、もう一つ、テストしなければいけないものを受け取ろうとした時だった。

ヒュルルル……

風を切るような音と共に、上空からこちらへと向けて何かが落ちてきている。

「《陽炎》、来い！」

直ぐに《陽炎》を纏い、飛翔。通常の飛行と瞬時加速^{イグニッション・ブースト}、瞬時旋回^{イグニッション・ターン}の三種を使い分け、真横へと肉薄。

人参色のコンテナにも似た落下物へと向けて、《叢》^{ムラクモ}を構える。

「どうせ、これで壊れるほど軟ではないんだろう……?」

その中身に心当たりのある身としては遠慮する気も無く、瞬時旋回を用いて一気に《叢》を振り抜く。

ゴガンツッ!

思い金属塊同士を打ち付けたような音が響き、コンテナのようなものがその落下先を変える。

ズドンツッ!

圧倒的な質量が地面へと落下する音が響き、同時に派手な土煙が上がる。

そして、間もなく——人参コンテナの正面が開くと、中から些か奇妙な、例えるのであれば「不思議の国のアリス」に出てくるようなエプロンドレスのような服を纏った誰かが出てくるのがわかった。

其の人が誰であるのかに心当たりがあるだけに、溜息を抑えられなかった。

「もうー!

いきなり叩くなんて酷いじゃないかあ、箒ちゃん！」

「あんなもので空から降ってくるとは思っていなかったの、足元の安全確保のために逸らそうかと思っただ次第です。」

「ですので、悪しからず」

出てきた誰か、つまりは篠ノ之東博士が出てくるなり文句を言ってきた。

だが、そもそも色々な物をすっ飛ばしたり無視したりされていただけに此方も皮肉や嫌味の類にあたる言葉しか出て来ない。

(二重の意味で、砂浜の方での受け取りでなくてよかつた)

万一、砂浜で同じようなことになろうものなら、他の生徒達への直撃コースなどもあり得たかもしれない。そう思うとゾッとする。

しかも、それを逃れたところで私の素性がばれる可能性は低くない。正直に言っただけに、この場所にしてくれた楯無さんと応じてくれた如月さんには頭が上がらない思いだった。

「でねでね、箒ちゃん！」

「箒ちゃん専用が開発したISなんだけどね……」

「私用の専用機でしたら、既に存在しています。」

それに、私の一存で機体の変更などできません。ですので、どうか担当者に通してください」

わりと普通の事を言っただけだったが、どうやら癪に障ったらしい。

「むう〜！」

「なんでさなんですか！ 折角箒ちゃんように作ったのに、受け取ってくれないの!?!」

「ですから、私一人では決められないと言っています。」

「私も、今は倉持技研の人間ですから」

「じゃあ何！ 倉持の人間黙らせれば受け取ってくれるの!?!」
「黙らせないでください。」

取りあえず、倉持の方に送ってください。其の後、諸々の手続なりなんなりをした後ならもしかしたら私の方に来るかもしれませんね」

「んもう〜!」

そんな面倒で時間かかることしなくても、今受け取って後で言えばいいじゃん! 束さん製だよ! それとも何!? こんなやつが作ったISの方がいいっていうの!!?」

癩癩を起こした子供のように、あるいは駄々をこねるように次々と言葉を発していく。内容がまるで暴論なだけに、終わりが見えない。そう思った、その時だった。

「こんなやつとは御挨拶だね。」

これでも一応、僕は箒君の専用機の開発者としては誰よりも優れているけれど」

何の気なしに、其れこそ何も気負わずに発された言葉。それは、如月さんから発された言葉だった。

「……言ってくれるじゃん。」

有象無象風情が。私より優れているなんてさ」

私の恩人に対して一気に食って掛かったが、噛みつかれた如月さんは何処吹く風とでも言いたげに涼しい顔のままだった。

そもそも、この変態如月さんに対してこの手の威嚇は意味を為さない。

「いやいや、別に僕は君より優れた人間だって言っただつてもりは無いよ」「ハア? 何言ってるの?」

「僕が君より優れているのは、ただの一点。」

箒君の専用機の開発者としてさ」

如月さんが飄々とした、相も変らぬ態度で篠ノ之束博士の台詞と威嚇をいなす。どころか、さらに食って掛かっていく。

「この束さんよりも、箒ちゃん用のISの開発者として優れているって。」

ふざけてるの? 野良犬が。調子に乗って殺されたいの?」

さらに濃密な怒気が篠ノ之束博士から発されていくが、如月さんは何処吹く風とも言いたげな様子でさらに言葉を重ねていく。

「だって当然でしょ?」

君は、箒君と直接会話して機体に関する話をしたことがどれだけあるのかな?」

「……は？」

如月さんの発言に、篠ノ之東博士が素っ頓狂な声を上げた。

「いや、不可欠な事でしょう？」

試験機だったらともかく、完全に個人用に調整するんだったら何よりもその人自身が何を欲しているか、どんな機体が使いやさうと思えるのか。

それは決して、全ての性能を追求していく事とイコールじゃない。その人の特性に合わせて突き詰めていくことであって、全く似合わない形の高性能を追求してもしょうがないからね」

この台詞に、篠ノ之東博士は再び不敵な笑みを浮かべた。まるで、自身の圧勝を疑っていないかのように。

「フフン♪ だったら、私の圧勝じゃん！」

何てだったって、この《紅椿》^{アカツバキ}は箒ちゃん専用に私が開発した近接特化形に近い万能機なんだから♪」

その言葉に、如月さんはむしろニンマリと笑った。悪い事を考えていることが私からでもわかるような笑顔だったが、生憎、他所への関心が極端に薄い篠ノ之東博士は気付いていないようだった。

「OK。じゃあ、こうしよう」

「ふん、もうお前の話しなんてどうでも……」

「評価してもらおうじゃないか。」

普段から、僕もお世話になっているそのテスト搭乗者にさ」

この言葉を聞いた直後、篠ノ之東博士の態度が変わった。

満面の笑みで何かを取り出すと、それを私の方へと突き付けてくる。よく見れば、それは雑に纏められた紙束だった。内容を見るに、《紅椿》というISの諸性能を纏めた物であることが見て取れる。

「だったら、箒ちゃんにしっかりと見てもらう事にするよ。」

私の《紅椿》がどれだけ優れているのかを、ね♪」

そのまま、その紙束を私の方へとさらに突き出してくる。

（事前にこうなるように誘導すると言うのは話し合っていたが、

いざその時になると、こうも気が重いものなのだな）

心の中で少し気合いを入れ直し、スペック表を受けとる。見た目に

反さず中身も決して正規のまとめ方ではない乱雑なそれを、何とか読み取ろうと努力していく。

「正直に言えば、確かにカタログスペックは素晴らしいの一言に尽きます」

「でしよでしよ！」

なんてったって、この東さんが丹精込めたISなんだからさよ♪」

しばらくして、まず私の口から出てきた言葉はこれだった。

たったこれだけで上機嫌になったのは能天気と言わざるを得ない。

あるいは、単に今までのテスト操縦者などという物と無縁なだけだったのかもしれないが、少なくとも私の戦い方を考慮するのであればカタログスペックは素晴らしいという評価に行きつかざるを得ない。

そして、それは決して誉め言葉ではない。

「——ですが、実運用には大きな不安が残りますね」

「——え？」

私の言葉に、篠ノ之束博士は一瞬凍り付くと、そのまま私の方へ振り向いて凄い勢いでまくし立ててきた。

「ちよちよちよ！」

「いったい何を言ってるのさ!?!」

「最大の理由は、第四世代の象徴である《展開装甲》そのものですね。

あまりにも多くの機能を集約し過ぎているように感じます」

「その何が問題なの!?!」

篠ノ之束博士が噛みついてくるが、努めて冷静に、いつもの評価試験の時と同じような気持ちで言葉を紡いでいく。

そこに私的な感情を入れてはいけない。それでは、適正な評価にならない。

(あくまで、感じた事、予想できることを並べる。

それが、企業代表と言う名のテスト搭乗者のやることだ)

あくまで普段通りに、言葉を述べていく。

「基本的に、私は、と言うか近接系の搭乗者はある程度当たることを前提に行動します。無論、最大限避けようと行動しますが、普通の人間が搭乗するのであれば、全て避け切るなどは机上の空論もいところ

なんです。それが出来るのは、それこそ『特別な人』だけと断言していいでしょう。どこぞの世界最強ブリュンヒルデみたいな、ね。

そして、私は言うまでも無く『普通の人間』の側です。避ける方向で行動しますが、同時に当たる瞬間の事も頭に入れておかないといけません。

そして、この機体は被弾に対して極端に弱いことが予想されます。複数の機能を装甲に内蔵したそれを全身に配している以上、それは避け得ないでしょう」

実際問題、第四世代が机上の空論とされている理由の一つが機械的な脆弱性——複合装備の常——を未だに越えられていないというのがある。

そもそも、複合装備自体が本来、無茶な類の装備なのだ。分かり易い例を挙げるのであれば、銃剣の類だろう。格闘戦で剣としての機能を使った後、その時に受けた衝撃などで銃身部分が破損したり歪んだりすれば、よくて使用不能、悪ければ即時の暴発なども考えられる。

ISの場合、IS自体が持っている自己修復機能などを使って多少無茶な形でそれを実現している例は少なくないし、それ以外にも組み合わせ次第では無茶にならない事もある。

だが、その中にブースタやスラストなどの機動系が入った時点で私人人としては期待はできなくなる。万一、『展開装甲』が被弾して破壊されることがあれば必然的に独立していない機動系にまで被害が及び、機動力が落ちることが容易に予想できる。私のような「動き回ること」が前提になる搭乗者に取って、これは致命的過ぎる。

「そんな事、箒ちゃんがこの《紅椿》に慣れれば何の問題にもならないよー！」

「過大評価ですね。」

生憎、私は『普通の人間』の域を出ていないので」

もう私も素人と呼べる時期は過ぎたと自負している。だからこそ、ある程度は今の自分に出来る事と出来ない事の分別も付けている。無論、出来ないことを出来るようにするための訓練も欠かすことは無いが、実を結ばない事も多かった。

「それに、この高性能を支えるために消費しているエネルギー量が無視できないレベルです。特に、スラスタと《展開装甲》の装甲にあたるEシールドの同時使用なんてしたらそれだけで馬鹿食いと言えますし。」

試合だったら運用次第とも言えますが、実戦でこの可動時間の短さは素直に怖いです」

「一気に決着付けちゃえば問題ないよ！　それが出来るだけの性能はちやんとあるんだし！」

それにそれに、単一使用能力ワンオフ・アビリティが使えたらそんな事問題にさえならないよー！」

言われて、もう少し詳しく詳しく雑なスペック表を何とか読み取っていい。だが、それらしい記述が見当たらない。

「……すいません。」

その根拠が見当たらないのですが」

「そ・れ・は♪」

使つてからののお楽しみという事に——」

「出来るわけがないでしょう」

呆れた言葉が出てきたが、到底容認できることではない。何より、あの化け物共がいつ出てくるか分からないのであれば、性能を把握しきれない、或いは把握できる範囲で考えれば致命的な難点を孕んでいる機体は正直言つて乗るのが怖いとさえ思えてしまった。

「なにさー。そんなに《紅椿》を使いたくないの!？」

そんなに東さんの事が信頼できないの!？」

「……信頼、ですか」

その言葉に、一瞬で色んな想いが溢れそうになる。だけど、その想いは全て噛みしめるだけに止めた。そして、評価はいつたんここでやめることにする。そうでもしないと、真つ当な評価にはならないと確信出来た。

それに加え、どのみち、感情論をぶつけるだけで聞き入れるような人とも思っていない。

「篠ノ之博士、そもそも貴女は信頼とは何だと思つていますか？」

「そんなの、この私と箒ちゃんの間にある揺るぎ無い……」

「私は……あくまで私個人の考えですが。信頼とはどれだけ相手の事を理解しようとしたか、どれだけ相手に理解してもらおうとしたか、そしてどれだけ相手と一緒にあろうとしたか。そういったものをひつくるめた、相手に対する誠意。」

そういうものだど、私は思っています」

意図的に、平坦に、静かに、話していく。そうでもしなど、胸の内
に押し込んだものが溢れそうだった。

「貴方は、そういつた事をどれだけしてきましたか？」

「そんな事必要なくらいの物が私と箒ちゃんの間には——」

「生憎ですが、私は感じていません」

そこまで言ったところで、いったん言葉を切った。意図的に気を落ち着けながら、出来るだけ憎しみだけを吐き出さないようにしながら、今までであった事を短く言葉に直していく。

「第一、今までも散々、七光りだの依怙臆胆だの言われてきた身ですのでね。もういい加減、言われ飽きました。」

今以上には、不公平な要素を増やす気もありませんから」

私の言葉に、篠ノ之束博士は不満そうに頬を膨らませた後、さらに言葉を重ねようと口を開いていく。

「そもそも、人類史が始まって以来、公平だった日なんて一日もないよ。」

なのに、そんな馬鹿馬鹿しい事に拘るの？」

「それは、言い訳です。最初は平等であろうとした人が言うのならとにかく、最初から不平等を助長するような行動を取っている人が言うのでは、言い訳でしかない」

私が発した言葉に続けるように、さらに如月さんが言葉を重ねた。

「それに。今、君のI Sが使って貰えない事もある意味で不公平とも言えるしね。信頼と責任に端を発する不公平。」

ほら、君が肯定した不公平がここにある」

如月さんのトドメとも思える一言に、篠ノ之束博士は顔を真っ赤にした。そのまま、人參コンテナとは別にあつた人參口ケツトに乗りつ

つ、此方を振り向いた。

「……後悔しても知らないんだからね!!」

捨て台詞のようにそれだけ残すと、そのまま乗り込んでいく。

「……ただ、この時、最後に篠ノ之東博士が発した言葉を私も如月さんも聞き取れていなかった。」

「——だったら、使いたいような状況にしちやえばいいんだよね……」

♪

第六章（4）：そして戦場へ

S i d e シャルロット

「すまない。大分、遅れてしまったみたいだな」

臨海学校二日目のI S起動実習の時間、箒だけは色々な都合が重なって暫くの間別行動だったみたいだけど、其れも終わったみたい。今、ようやく合流できた。

同時に、それはこれからもう一仕事が始まることを告げていた。

「で、手筈通りに頼めるか」

「ああ、俺は構わない」

「僕も大丈夫だよ」

箒の号令に、二つ返事で返す。この場の誰も、それに反対する気のある人は居なかった。

「それでは織斑教諭。」

事前に話していたと思いますが、これから剣崎の荷物運びのために少々I Sを使いますので」

「ああ、それに関しては事前に聞いているからいい。」

だが、くれぐれも余計な事はするなよ」

「心得ています」

影内君が織斑先生に断りを入れた——心なしか、影内君の口調が何時もより僅かに刺々しい——後に、三人そろって例の荷物が置いてある場所まで飛んでいく。

「それにしても……I SをI Sで運ぶのなんて、初めてだよ」

「すまないな。」

だが、運んだあとが本番になることをわすれないでくれ」

「分かってるよ。でしょ？ 影内君」

「同意する。とはいっても、やることは普段と同じような模擬戦だし、問題も無いが」

そう、これからやる事はI Sの入ったコンテナの輸送。インストール中の機体をほぼそのまま入れているコンテナをI S三機がかりで輸送しようという算段だった。

その後は、影内君と僕とで箒が今纏っているISと模擬戦を交代交代で行い、その間に休んでいる人間がインストール作業を進めていくことになっている。

「それにしても……」

「うん？ どうかしたか？」

「なんていうかさ……今まで、箒の機体っていうと《陽炎》のイメージしかなかったから、《打鉄》を使っているのが何だか新鮮に見えるちゃつて……」

箒が今使っているISは、とあるテストのために用意、調整された《打鉄》。と言っても、外見で変更点があるのは腰の付近に一振りの近接ブレードがさしてあることくらい。ちょうど、日本のサムライを思い起こさせる感じになっている。

ちなみに、影内君も例の白い機体《アスデীগ》ではなく、普段通りの《ユナイテッド・ワイバーン》を纏っている。

「昔はこの機体に世話になったんだがな……それに、《陽炎》も一応は《打鉄》の改修機だぞ」

「さっきの追加ユニットも込みにするともう外見上の面影がほとんど残ってないよ……」

これは掛け値なしの本音だった。本当に面影と呼べるものがほとんどない。それだけ、箒の専用機として特化していったという事なんだろうけど。

「にしても、本当に《打鉄》に積んだんだな、ソレ……」

「《雪片式型》か？」

「言い出しつぺはある意味でお前だろうに」

「いや、こんなに速く実物になるとは思っていなかったから、つい、な……」

影内君が若干、呆れたような声を出していました。

なんでも以前に色々あったらしく、あまりいい思い出のない装備とのこと。詳しくは僕も聞いてないから何とも言えないけど、言い出しつぺと言う言葉にはそういう意味もあるんだろうなとも思った。

「三人それぞれに色々あるみたいだけど。」

今は、やることやっちゃおうよ」

「そうだな」

「委細心得た」

色々と思う事はあるけれど、今やるべきことは変わらない。

そう思つて、二人にも声をかけた。

Side 一夏

「で、最初は俺からか」

「ああ。普段通りに頼む」

場所を移し、再び海岸へと来ていた。

目の前には、今回のテスト専用に変更を施された《打鉄》を纏った剣崎が構えている。その手には、普段握っている《叢》ムラクモとは比べるべくも無く細い一太刀の刀が握られている。無論、《叢》が刀としては破格の大きさを誇っているだけで、此方が標準的なそれであることは重々承知だが。

「装備のテストとは言え、手は抜かないぞ？」

「無論だ。それでこそ、意味がある」

互いに叩いた軽口はこれで終わり。俺も剣崎も互いを見据えながら、静かに構えをとる。剣崎は正眼の構えに近い形を。俺は剣道の二刀流における中段の構えと呼ばれる形に近いものを、とは言つても持っている得物は大剣の二刀だったが。

接近のタイミングを計るが、やはりと言うか隙が見つからない。やがて俺も剣崎も焦れてしまい、そのまま示し合わせたかのように全力でぶつかり合った。

「フッ！」

息を吐きながら二振りの《機竜牙剣》を重ねて振るう。

「ハアッ！」

対し、剣崎は俺が振り抜いた方向と同じ方向に回りしつつ、事前に構えた今回のテスト装備《雪片式型》を使って受け流してくる。僅か

な間、火花が散った。

次の瞬間には、劍崎が動いている。受け流した動きそのままに瞬時旋回イグニッション・ターンを使って一回転すると、その動きのままに袈裟懸けに振り抜いてくる。

こちらも当然ただで受けるはずも無く、二振りの《機竜牙劍》の内片方クイックドロウを神速制御で振りあげて対応。今度はこちらが受け流す。

劍崎は攻め手を緩めずにさらに踏み込んでくる。袈裟懸けの一撃が外れたと見るや、返す刀で再び此方へと切り掛かってくる。

「相変らずの腕前……だな！」

返す刀の一閃を、二振り目の《機竜牙劍》で受流す。そのまま蹴りに移行するが、劍崎はわずかに後ろに下がって避けると《雪片式型》を構えたまま一瞬固まった。

直後、《雪片式型》の刀身が青白く発光する。と言うよりは、実体劍の上にエネルギー刃が重ねられた感じだった。

(確か……エネルギーブレイド形態もあつたんだつたな)

随分と前に読んだスペック表を思い出しながら、その正体を掴む。同時に、防御か回避を重視しなければならなくなった事に思い当たり、そちらへと戦い方を切り替える。

再び劍崎が瞬時加速イグニッション・ブーストで突っ込んでくる。恐るべき加速だが、別段対応できない事は無い。再度、神速制御を用いて撃ち合い、互いの刃が僅かに離れた直後に後ろへと移動して間合いの外へと逃れる。

一方、劍崎はさらに攻めてくる。どこか、攻め急いでいる印象だった。

(さて……例の機能は使っているのかいないのか)

此方も多少攻めあぐねるが、だからと言って反撃出来ない訳でもない。

反撃の機会を窺いつつ、適度に回避と防御を織り交ぜてそのまま摸擬戦を続けていった。

(ええい、馬鹿食い過ぎるぞ！)

ただでさえエネルギーゲインが武装用、装甲用、機動用の三本全てが一緒くたになっていて気を使うというのに、《零落白夜》の馬鹿食いが拍車をかけていた。

(これだったら、無理言つてでも《砂漠の呼び水》アモサージュ・デ・デザートの搭載を検討してもらえばよかった！)

通常、攻撃は装備の選択や攻撃方法との兼ね合いである程度は能動的に管理できるし、機動系も同様。装甲にあたるSEは当てられれば減るため能動的とは言えないが、それでもそれ単体に回せる残量が把握できた。

だが、この三つが全て一緒になっているとなると話が違ってくる。攻撃行動を最小限に済ませて回避と接近行動に必要な移動用のエネルギーを確保しつつ、さらに前者二つを充分にこなすためには被弾を強力減らさなければいけない。

畳の上の水練、絵に描いた餅、机上の空論とはこの事だ。少なくとも、この攻撃方法でまともに戦闘をこなせるのはこれ専門に修練を積むか世界最強レベルの「特別な人」位な物であろう。そして、私はこの二つの両方に入っていない。

無意識に、攻め手に急いでいく。

(……やはり、相手が影内ともなるとそう易々とは行かないか！) だが、一向にこの剣が届く気配が無い。

やむを得ずに僅かに距離を開け、《雪片式型》のレーザーブレードを取りうる限りの最短の時間で停止させ、通常のブレードに戻す。

(……一撃当てれば逆転できる、とは言いが。 格上どころか、同格相手でもこれは難しいぞ。やはり、二機以上いない事には……)

完全に初見の相手ならとにかく、影内は諸般の事情である程度はこの剣の事を知っている。となれば、対策も取れよう物。そもそも、それを抜きにしても影内自身が相当以上の使い手、そう容易い相手じゃない。

そんな中で、エネルギー管理がしにくいのは致命的だった。長時間のブーストもしにくく、被弾すればするだけジリ貧となる。加えて、攻撃の要とせざるを得ない《零落白夜》も馬鹿食いと至近距離の格闘戦を避け得ない攻撃レンジの関係上、使用できるタイミングは極端に限られる。

単純に二機以上いる状況ならもう一機にフォーローなりなんなりを頼み込む形で可能性を広げることができるとは期待するが、今は一対一。期待するべくもない。

(それに……深く踏み込むのも、それはそれで気が引けるしな)

そして、装備自体の特性。《零落白夜》がエネルギーを対消滅させる、つまりSEを文字通り消滅させる装備である以上、下手に出力を上げすぎれば文字通り人体切断の重大故を引き起こすことになる。回避にも防御にも攻撃にも気を遣う、気難しい装備だった。

(これで、どうやれと……!)

何とかして模擬戦を続けていくが、そう長く持ち堪えられるものではない。間もなく、私のSEは《零落白夜》の使いすぎと影内からの的確な反撃によって底を付いた。

S i d e 簪

「……何時もより攻め急いでた、のかな?」

簪の戦い方を見ていて、自然とそんな事を口にしてしまっていた。と言うのも、普段の簪なら回避したり仕切り直したりするような場面でも攻勢に出ていたような印象があったためです。

「確かにな。」

攻撃に対して積極的だったという程度の話ではない」

「後半からは特に顕著でしたわね。」

動きに精彩を欠いていた印象でしたわ」

「ぶっちゃけ、《陽炎》の方がいい動きしているわね。」

あれ、そんなに使い辛いのかしら?」

一緒に見ていた他の専用気持ち達も似たような感想を抱いたように口々に似たような感想を言っている。言っていないのと言え、次の対戦相手のデュノアさん位だった。

「……フウ……」

そうこう言い合っていたら、当の二人が下りてきた。

「お疲れ様」

「どうだった？」

ひとまず、私は冷えたスポーツドリンク二本を、本音がタオル二枚を持って二人へと近づきつつ、軽く感想を聞いてみることにする。

「……何と言うか。」

「気難しい、な」

最初に出てきた一言に、少し不思議な感じがした。少なくとも、見ている限りでは大分辛い辛そうだったけど

「確かに、対ISの攻撃能力と言う一点では素晴らしいものがある。《打鉄》の標準的な近接ブレードに形状が近いのが僅かなりと扱いやすさの手助けになっている。剣術の心得があれば振れはする程度には、な」

「と言うか、救いがそれしか無くない？」

割とグツサリ来る一言を鈴が直球で言い放ったけれど、箒は苦笑いしただけでした。

其の後は、どれから言うべきか迷っているような感じでした。ふが、やがて意を決したように其の後に来るものに移っていった。

「だが、その……やはり燃費だな。エネルギーゲイン三本統一でこの馬鹿食いだから、正直に言って時間が経てば経つほど焦る。しかも、手段もこれ一本だから牽制や他の手段と言うのも選択できないというのがな。蹴りか何か使えればまだましだろうが、それでも近接攻撃の域を出ない以上はやはり戦術そのものの幅が狭い。しかも、これ以外に武器を積めない以上は余計にな」

「私の《ブルー・ティアーズ》より極端ですわね……と言うか、箒さんでさえ持て余す近接装備とは」

特化型と言う意味では似通った部分のあるオルコットさんが溜息

を吐きながら言いました。箒も「単純に腕前の問題もある」とだけ返答しましたが、答える際に困ったような表情を浮かべていました。

「僚機がいる状況で連携が出来たりすれば援護や……条件さえ満たせばある程度の補給も可能だから、基本は二機以上だろう。これを単機で運用できるのは素直に『特別な人』と呼べる領域の達人か、よほどの酔狂、あるいはそれ以外の選択肢が無いからいだろうな。」

まあ、私の場合は《陽炎》の《叢》ムラクモに慣れ過ぎて感覚的におかしくなっている部分もあるのかも知れないから、一概には言い切れない部分もあるかもしれないが

「連携をとるにしても、中距離以遠の苦手な距離のカバーから近接戦での連携……やることが多いな。一点特化型の機体と組めばそれだけである程度戦略が読まれる可能性もある。」

対して、相手方からすれば対策自体は容易。しかも教官が一度大々的に使用した能力である以上は欠点も知られている可能性もある、か……。なるほど、気難しいというわけだ」

そこまで言い切ると、スポーツドリンクを一口飲んで一息ついていました。でも、飲み終わった後の顔は試合に挑む前にいつも見せている、鋭ささえ伴った真剣そのものと言える顔だった。

「……何か、気になる事でもあったの？」
本音がその顔を下から覗き込むようにして、箒に聞いていた。私も同じ事を思ったけれど、ここですぐに聞ける当たり本音は凄いなと思う。

「ああ、いや……例の機体の事で、ちょっとな」

この一言に私と本音は顔を見合わせると、そのまま少し顔を近づけて声を潜めながら話し始めました。

「何か思い当たることが？」

「機能と言うか、能力の方でな……。」

ついさっきだが、エネルギー消費の激しさを指摘したらそれは問題にならないという発言があった。しかも、電話の時には《白式》の対になるといった旨の発言も……」

そこまで言ったところで、私も箒の言わんとすることに気が付い

た。

「もしかして、篠ノ之束博士が渡そうとしたISの能力って……」

「十中八九、エネルギーの供給に特化した能力だろうな……」

まさか無制限のエネルギー供給なんて言うインチキ臭い能力などではなからうが、それでもどれだけのエネルギーを詰め込んだことやら……」

若干の呆れを含んだ感想を漏らした箒だったけれど、その眼から零れた光は真剣を思わせるほどに酷く鋭利だった。

「……競技としてのIS戦闘も、今は始まってそんなに経っていないからルールも曖昧な部分が多いけれど。」

もし、そういうものがあるって広く認識されたら規制掛かりそうだね」

「同意だな。既にして《イクス・ラファール》の《砂漠の呼び水》があるが、あれとは違って入手する手段が極端に少ない事が拍車をかけかねん。」

だからこそ、活躍できるとすれば実戦となるのだろうか……」

そこから先は言い淀んだ箒でしたが、それから先は私にもわかりません。恐らくは、同じように聞いている本音にも。

(まるで……実戦をしてほしいかのようだよ)

内心で不安感を抱いた私でしたが、一緒に聞いていたもう一人は違ったみたいでした。

「でも、私はちよつと安心したかな」

「……? どういう事だ?」

「ほーちゃんが、ちゃんとそういうことを話してくれた事。」

前みたいにも、一人だけで思い詰めたりして無いんだなうって、さ」相変らずゆっくりとした口調で、にへらっつという音が聞こえてき

そうな笑い顔で応えていました。

でも、それは私も同じ気持ちです。

「確かにそうだね。」

一人で思い詰めなくなったのは、私も素直に嬉しいよ。それだけ信頼されているっていう事だとも思えるしね」

率直に想いを述べた所、箒は一気に顔を赤くして俯いてしまいました。

「べ、別に……信じていないとは言っていないだろう……」

その一言に本音と一瞬向き合った後、二人揃って笑顔になっていました。それを見て、箒はますます顔を赤くしていきます。

「さてー」

ついに箒は赤くなった顔を誤魔化すように立ち上がると、そのまま次の試験に行こうとします。

「もうそろそろデュノアとの模擬戦の時間だ。

行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

二人揃って送りだしたら、箒は今度はわずかに嬉しそうな表情で応えてくれました。

S i d e シャルロット

「さてつと、次は僕だね」

「そうだな、よろしく頼む」

短い挨拶を交わして、互いに睨みあった。箒とは一度ペアを組んだこともあって動き方などはある程度知っているけれど、今はその時とは互いに機体が違うという事もあってどこか緊張感もあった。

ゴツ ドツ

互いにブーストを吹かす。僕は距離を取ろうと、箒は距離を詰めよう。

箒の獲物は剣であるのに対し、僕は基本は銃。距離を取ろうとするのは必然だった。そのまま両腕に備えられた三連装55口径アサルトライフル突撃銃《ヴェントII》と、両手に備えたアサルトカノン《ガラム》の一斉射で迎え撃つ僕と、回避しつつ距離を詰めようとする箒と言う構図になっていく。

(だけど……いつもより、少し前のめりな感じになっているのかな?)
そんなやり取りの中で感じた違和感。その正体に思い当たるのに
そう時間はかからなかった。

やっぱり、使いなれない装備と言うのは手強いらしい。

(けど、容赦しないよ!)

そのまま出来る限り一定の距離を維持するように立ち回りつつ、銃
撃を中心に攻撃していく。接近されれば即座に手の武器を《ブレッ
ド・スライサー》に持ち替えて反撃、場合によっては肩の複合防盾に
内蔵されている69口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》グレー・スケールか《スクエア・
クレイモア》も用いて凌いでいく。

だけど、箒もやられるばかりじゃない。

「ハアッ!」

裂帛の気合とともに横一文字の一閃が放たれる。その鋭さは箒自
身の剣技の熟練を示すかのようなだったけれど、それ自体は後ろ向きに
進むことで回避できる。そのまま高速切替ラピッドスイッチを用いて至近距離で連装
ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》に手の武装を変更、そのま
ま銃撃。

だけど、放った弾丸が箒に着弾することは無かった。箒は
イグニッション・ターン瞬時旋回を使って回避すると、停止直後に僕に向けて踏み込みなが
ら切ってくる。

(やっぱり、いい腕してるな……でも!)

僕も適度に距離を保ちながら、時折近接戦を混ぜていく。

箒も箒で強いけれど、それでもこの場に限ってはほぼ同等かそれ以
上の機動力を持つ僕の《イクス・ラファール》に分がある。

間もなく、箒を何とか削り切って勝利を収めることができた。

S i d e 一夏

それぞれのインストール作業がもうそろそろ終わろうかという時
間。剣崎の試験も終わり、無事に新しい姿となった《陽炎》の最終

チエツクを済ませていた時だった。

「……？」

例の腕時計型通信機への着信。それだけで、何が起こったかは察せ
た。

「簪、少しいいか？」

「何？」

簪に声をかけ、簡単に用件を伝える。

これが鳴った以上は、最悪の事態に備えて少しでも時間が欲しかっ
た。

「少し席を外す。悪いが、先生方に何か聞かれたら伝えておいてくれ
ないか？」

「いいけど……要件は？」

「本社からの呼び出しだ」

この一言で、簪はほぼ全て察したらしかった。一瞬だけ目付きを鋭
くすると、そのままいつも通りに戻って一つ頷いた。

「分かった。伝えておくね」

「恩に着る」

俺も一言だけ返事を返し、そのまま手ごろな周辺の森の中へと入っ
ていく。

「ご用件は？」

『今すぐに指定した自衛隊駐屯地に飛んでちょうだい』

この言葉を聞いた時にはすでに《ユニテッド・ワイバーン》を準
備し終え、迷彩を起動し、例の仮面と体型を隠せるローブを着用済み
であり、すぐに行動できる状態だった。そのため、直ぐに移動を開始
する。

諸々の事情は、移動中にでも聞けばいい。

『指定座標には仮面に表示されるガイド通りに行けば付くわ。けれ
ど、途中で一旦降りるように指示されるから、その時に機体を切り替
えて』

「委細了解しました。」

それで、何が起こったのでしょうか？」

道中、指定される方向に飛びながら更識会長に詳しい事を聞いておく。やはり、事前の情報は出来る限り詳細なものが欲しかった。

『指定した地点の自衛隊駐屯地に、例の化け物が出現したの。』

画像データからの推測になるけど、以前の「巣」^{ネスト}の巨大蟻塚付近の空中で直衛みたいになつてた鳥人型ね。それが六体。

今はその基地に所属していたIS部隊を中心とした迎撃戦が展開されているけれど、厳しいみたいね』

齎された情報に、焦燥感が募った。

(以前の『巣』の直衛となると、ガーゴイルか……！)

さすがに本職の自衛隊ともなればとも思ったが、以前のフランス軍の一件があつた手前、出し得る限りの速度を持って飛翔し続ける。

(間に合えよ……！)

細かい情報や状況を出来る限り聞きつつ、ただひたすらに飛んでいった。

Side 簪

「お、織斑先生く……!!」

私が皆の元に帰つて来た時、一般生徒の指導を担当していたはずの山田先生が急に織斑先生の元へと駆け寄ってきていた。

その様子から、ただならない事態が起こつたことが容易に分かる。

「山田先生、一体何が起こつたんだ?」

「そ、それが……!」

山田先生は息を切らしながら織斑先生の方にタブレット型の情報端末を渡しました、それに表示されていた内容を読み取った織斑先生も、見る見るうちに目の色と表情を変えていきました。

「……全員、課外授業を一旦中止! たった今、学園から非常事態宣言が通達された! 一般生徒は全員旅館で別命あるまで待機している!」

それと、専用機持ち全員は即刻、指定した部屋に来い! 詳細はそ

ここで話す、いいな!？」

そう間を置かずに織斑先生がその場の全員に聞こえるように素早く指示を出し、全体を動かしていく。私達専用機持ちはもとより、一般生徒も織斑先生の発した言葉からすぐに事態の緊急性を察して行動していく。

其の後は早く、一般生徒も五分もする頃にはそれぞれに割り当てられた部屋へと戻り終わり、私達も指定された部屋へと来ていた。通された部屋自体は大部屋だったけれど、運び込まれた機材の類に完全に様変わりしていて、即席の作戦指令室と化している。

「まず初めに言っておく。これから話す内容は、その全てが最重要軍事機密事項に該当する。

決して口外するなよ。情報の漏洩が発覚した場合、査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付く。覚悟の無い者は今すぐに退室しろ」

その一言を聞いて、誰も動こうとしない。そのことを確認した織斑先生が、比較的ゆつくりとした口調で続きを話していきます。

「今から二時間前、アメリカとイスラエルが共同開発した第三世代型軍用IS《銀の福音》シルバリオ・ゴスベルが試験稼働中だったところを、正体不明機の襲撃を皮切りに暴走を開始。其の場でしばらく戦闘した後、現場を離脱。

その逃走ルートは、現在——東京の方を向いている」

ここまで言ったところで、織斑先生は一回言葉を切りました。其の後、私達の方を見据えながら、続く言葉を言い放ちました。

「諸君に《銀の福音》——以後は《福音》と呼称するが——これの迎撃を行って貰いたい」

——これが、長い一夜の始まりでした。

第六章（5）：迫る悪意

S i d e 一夏

俺がその報告を聞いたのは、ちょうど幻神獣アピスが出現した地点への道中の中間地点と言える辺りだった。

「……東京に暴走したISが向かっている?!」
『ええ。』

色々予想外の事態になってしまったけれど、やることは変わらないわ。とにかく自衛隊のISを動けるようにして。其の後は消耗の具合を見て決めましょう』

更識会長からの返答に、歯噛みした。

（よりによつて、こんなタイミングで！）

現場に居られないもどかしさが募るが、更識会長の言っている事が現時点で取り得る最善の選択であると俺も理解している。故に、行動に支障をきたすようなことは決してしない。

『……ねえ、影内君』

「なんででしょうか?」

ここまで話したところで、更識会長が唐突に話を振ってきた。

どのみち、情報が欲しいのでそのまま俺も答えてゆく。

『……タイミングが、良すぎると思わない?』

「……認めたくないですが、同意します。」

偶然にしては出来過ぎです」

俺の返事に、更識会長が溜息を吐いたような声が聞えた。尤も、俺もその気持ちはよく分かるので何も言わない。

『やっぱりかあ……。』

……こつちもこつちで裏に何か無いか探ってみるわ』

「お願いします」

返した返事に、更識会長が最初は調子よく、だが直ぐにその勢いをなくしながら更に応えてくれた。

『任せて、と言いたいところだけど……流石にこの時間中には厳しいわね。』

時間が無さすぎるわ』

普段は中々に自信満々な更識会長がこの台詞である。

(どうやら、嘘偽りなく厳しいみたいだな。

確かに、時間的猶予は無い……今回の事態に対する情報は、今後の課題か)

俺も俺で勤めて冷静を保ちつつ、今回の事態に対して思考している。

『……影内君、もうそろそろ機体の切り替えポイントよ。

準備して』

「委細了解しました」

そんな最中、更識会長からの指示に従って機体を下げていく。

(これ以上、何も起こってくれないなよ)

心の中だけで願いながら、すぐさま指示通りに動いて行った。

Side 簪

「諸君に《銀の福音》——以後は《福音》と呼称するが——これの迎撃を行って貰いたい」

この言葉を聞いた全員に、驚きはありませんでした。

そもそも、ここに専用気持ちの面々が集められた時点である程度予想できていたからです。

「……そうか。諸君らの協力に感謝する。

では、これから作戦会議とする。意見のある者は遠慮なく述べるように」

そこまで言ったところで、織斑先生が不意に影内君がいない事について言及してきました。

元々、伝言を預かっていた身としてはここで答えない訳にも行きません。そのまま、伝言の内容を伝えておきます。

「……ところで、影内の奴はどうした？」

来ていないようだ……」

「本社からの緊急の呼び出しがあったとのこと、急遽、帰りました」
「ええい、こんな時に……！」

なぜ肝心の時に居ないのだ、アイツは！」
悪態をついた織斑先生ですが、それも仕方のない事だと思って割り切りました。

と言うより、私の言葉だけで今回の作戦に参加することになった面々は大体何があったかを察したようだった。示し合わせたかのようになり一度、それぞれの顔を見合うとそのまま《福音》迎撃作戦に関する質問へと移っていく。

(……ここにいるのは以前、一度は『巢』^{ネスト}攻略戦で影内君の本当の機体^{アスデイルグ}の事を知っている人ばかりだもんね)

そんな今は全くではないけれどあまり関係の無い事を考えるのはいったん止め、目の前の事態への対処を優先して動いていきます。

「織斑先生、今は目の前の事態への対処を優先すべきです。」

目標 I S の詳細な性能^{スペック}データの閲覧許可を求めますわ」

まず真つ先に言ったのはオルコットさんだった。その内容は至って現実的なもので、おそらくオルコットさんが言わなくても誰かしら行っただろうことが予想される内容でもある。そして、その情報の重要性など此処で言わなくても誰しも分かっている。

「いいだろう。」

だが、これも本来は軍事機密だ。そのことを忘れるなよ」

それは当然のことだけど織斑先生も例外でなく、簡単な注意だけを挟むとすぐに情報を開示してくれました。

「……」

食らいつくように全員がデータに見入る。

だけど、その情報の内容を見た瞬間、全員が覚えたのは戸惑いでした。

「ねえ、この I S って……？」

「ああ、間違いないな」

デュノアさんとボーデヴィツヒさんが二人で言い合っていますが、恐らくこの場の五人全員が同じ感想を持っていたと思います。

(間違いない……『巢』^{ネスト} 攻略戦の時に一緒に戦った人だ！)

あの時、影内君の《アステイグ》の持つ《消滅毒》^{アナイアレイト・ヴェノム}の支援を受けつつ目下の敵への一人爆撃を行った姿は今も覚えています。

「……？ 二人とも、知っているISか？」

そうして言い合っていた二人に対し、織斑先生が若干、不信感を見せながら問いかけました。

「はい。」

以前、本国の方で少し

「申し訳ありませんが、軍機密に抵触しますのでいかに教官といえど詳細は……」

「いや、さすがにそれはいい。」

だが、知っている相手なのだろうか？ 役に立ちそうな情報はありますか？

二人とも少し考えると、まずボーデヴィツヒさんから話し始めました。

「まず、お見せいただいたスペック表にもある《銀の鐘》^{シルバー・ベル}による広域攻撃能力と高い機動性能が目につきます。暴走状態とのことですが、あの広域に対する火力と機動性は純粹に脅威と呼べるのではないかと」

「ですが、その分エネルギー消費が激しく、また砲身の冷却にも時間がかかるため一斉射などをした場合は次射までに幾許か時間があります。」

ですので、機動力のある機体で攪乱し、一斉射を誘発、次射までに包囲し順次攻撃を仕掛けるのが現実的かと思われれます」

「ふむ……手持ちの戦力だとそうなるな」

織斑先生がボーデヴィツヒさんの出した作戦案に賛成し、話がある方向に進み始めます。

ですが、そこでボーデヴィツヒさんがさらに追加の質問を発します。

「教官、作戦立案にあたり日本の自衛隊の動きを知りたいのですが、可能でしょうか？」

ボーデヴィツヒさんが聞いたところで、織斑先生は少し忌々しそうに告げました。

「どういうわけかまでは話されていないが、今は動けないらしい。増援は期待しない方がいいだろうな。」

……つたく、肝心なところで役立たずな連中め」

悪態をつきながらも告げられた内容は重要なものでした。
(そうなるよ、ここにいる学生だけでどうにかしなきゃいけないって
いこと……)

改めて考えると事態が悪い方向に転がって行っていることをより一層認識してしまいます。ですが、それでも何とかしなければいけない、そのことはよく分かっています。

「……そうなるよ、どうやって追いつき、突破するかだな。」

聞きたいのだが、ここにいる人間のISで追いつける可能性のあるのは?」

参加者全員に問いかけたのは筈でした。

「私の《ブルー・ティアーズ》でしたら、問題ありませんわ。」

本国から送られてきた高機動パッケージ《ストライク・ガンナー》なら、十分追いつけますわ」

「長距離高速飛行の訓練は?」

「20時間ほど」

「なら十分か……」

オルコットさんの申し出に、織斑先生が確認するように聞きました。ですが、それに対する答えは十分に織斑先生を満足させるものだったようです。

「僕の《イクス・ラファール》も追いつけるよ。」

元々、素の状態だと移動性と火力の両立が主眼に置かれているからね。ただ、理想を言わせてもらえらるなら《ラファール・リヴァイブ》の追加ブースターがあると盤石だね」

「わ、私の《打鉄式式》も追いつけるよ。」

機動性には余裕があるから!」

「お前たちの長距離飛行訓練時間は?」

「僕は18時間ほど」

「わ、私は20時間ほどです」

デュノアさんと私の答えに、織斑先生は頷いて納得していました。ですが、織斑先生が本当に注意しないと分からない位に私の方を睨んでいるような気がします。

(多分、《白式》のことだろうけど……)

今は気にしても仕方がない、そう思い目の前の事態への対処に集中していきます。

「劍崎、お前は？」

「私の《陽炎》も、長距離高速飛行はできません。私自身も30時間程度の訓練は積んでいるから、一応、先行できるかと」

私とデュノアさんが答えてからそう間を置かずに、織斑先生がささず箒にも聞いていました。

「そうになると、高速飛行可能なISは四機か……」

凰、ボーデヴィツヒ。お前たちのISはどうなっている？」

「私の《甲龍》は追加パッケージの《崩山》ほうざんが攻撃力重視なので、機動性は大きく変わっていないか低下しています。ですので、そのままでは追いつくのは不可能です」

「私の《シュヴァルツィア・レーゲン》も、火力と装甲を重視した追加パッケージでしたので長距離高速飛行は不可能ですね」

二人の言葉に、私を含むその場の全員が一瞬、考え込みました。(今の戦力で火力重視が抜けるのは……でも、そうすると二人を何とかして連れて行かないといけない……)

現在この場にいる面々で十分な火力を出すには、おそらく全員が必要。だけど、そのためには二人を何とかして連れて行かないといけない。

(……影内君だったら、なんて言ってたんだらう?)

ふと、そんなことを考えてしまいました。

そして、そこから連想するように、ある記憶がよみがえります。

(そういえば……影内君とデュノアさんは箒のISを……)

そこまで考えたところで、一気に作戦案が思い浮かびました。これ

だったら速度の問題も解決できます。

「あの……」

「ちよおおおと待ったあああああー！！」

作戦案を言おうとしたとき、突如、作戦会議していた部屋の襖が勢いよく開けられました。

それは、ある意味でとても予想外な来訪者の登場でもありました。

Side 一夏

暫く飛んで、ようやく目的地が見えてきた。接続している機竜は既に《アスデীগ》へと切り替え、全力戦闘の準備は済ませている。

「あれ、ですか」

『ええ、そうよ。』

速やかにお願いね』

「委細了解しました」

最後となる通信を切り、戦闘に集中していく。

「《機竜光翼》」

フォトンウイング

すぐさま特種武装《機竜光翼》を使用し、背面からエネルギーを大量に吹かせて一気に加速。標的である《ガーゴイル》五体への距離を一息に詰める。

「……正体不明機が接近！ 全機警戒!!」

IS部隊の隊長らしき人物がこちらを捕捉し、全機に警戒するように促している。だが、こちらに弾が飛んでこない限りはそれに取り合わず、向かうは最も手近なガーゴイル。

「《竜毒牙剣》、アックスモード」

タスクブレード

今現在、すぐに出せる中では高威力の形態へと《竜毒牙剣》の形態を変更。そのまま《機竜光翼》を準備。

フォトンウイング

「《旋墜斬》」

せんついざん

《機竜光翼》と通常の推進器を同時に吹かし、一気に加速する。同時に《竜毒牙剣》を一太刀のみ構える。次いで、神速制御を《アスデীগ

クイックドロウ

グ」が最高速に達する瞬間を合わせていく。

ザギンツ

「ギエアアアアア！」

速度任せの一撃を叩き込み、まずガーゴイル一体の上半身と下半身を強制的にさよならさせる。

「……味方!？」

「気を緩めないで！でも、標的は例の化け物を最優先！」

隊員らしき人物が発した言葉に、間髪を入れずに隊長と思しき人物が指示を入れる。

(だが、こちらには都合がいいか)

最優先は化け物、つまり此方は後回しになるということである。それだけ狙われる危険性が低くなるというのは、動きやすさへと繋がってくる。

(今のうちに、決着をつけるべきか……!)

次ぐ一太刀を別なガーゴイルに叩き込みながら、この後の行動を思考していく。

——この後に待ち受ける敵を、俺はまだ知らない。

S i d e 簪

「……何をしに来た、束」

呆れと怒りを半々に混ぜたような口調で一番先に来訪者へと口を開いたのは、織斑先生でした。

その言葉に、この場の全員がその正体を察します。

「まさか……篠ノ之博士!？」

一番最初に反応したのはオルコットさんでした。ですが、当の篠ノ之博士はどこ吹く風と言わんばかりに無視するとそのまま織斑先生と会話をしていきます。

「フン、いいことを聞いてくれたねーちゃん！」

今回の作戦なんだけど……断ツ然！ 《紅椿》の出番なんだよ！」
「《紅椿》？」

聞きなれない機体の名前に、鸚鵡返しのように聞き返していたのはデユノアさんでした。

ですが、やはり篠ノ之博士はデユノアさんの言葉には反応せずそのまま箒と織斑教諭の方だけ見ていました。

「どういうことだ？」

「な、な、なんと！ 《紅椿》のスペックなら、パッケージなしでも超音速機動が可能なんだよ！」

《紅椿》の展開装甲を調整すれば、その福音を凌駕する速度だつて出せるんだよ！」

今までの話をまるで無視するかの如く、篠ノ之博士は一方的にそう前置くと話し始めました。

「……仮に、それを投入しようとするとしてだ。

調整にはどれくらいかかる？」

「ん〜、ざつと10分つてとこかな。」

箒ちゃんがどれだけ協力的かによるけどね」

其の一言に、皆の目が一斉に箒の方を向きました。

「箒さん、が？ これは一体……？」

オルコットさんがまるで訳が分からないとでも言いたげな表情になりましたが、ほかのだれかが何かを口にするよりも早く、篠ノ之博士が答えていました。

「うん？ 箒ちゃんが私の妹だからだよ。」

私は大事な大事な箒ちゃん用に《紅椿》を作ったんだからさよ」

この発言に、場に一斉に動揺が広がります。

ですが、そうではない人もいて――

「箒、アンタ乗り換える気あんの？」

篠ノ之博士の発言直後、ほぼノータイムで箒に聞いたのは鈴でした。

「……慣れている、という意味であれば《陽炎》のほうがいい。

それに、一気にそんなに性能を上げられても戸惑う上、一人だけ突

出して勝てる相手とも思えない、な」

一方、箒は頭を抱えながら、それでも何とか状況の打破を考えている様子でした。

(でも……箒には、《陽炎》の方がいい気がするんだよね)

これは個人の経験と考えですが、箒は一機を乗りこなすのにも相応な時間を使っていました。決して箒の学習能力が低いわけではありません。ですが、ズバ抜けて高いわけでもない。

言ってしまうえば、数多の搭乗者と大きく変わるわけではない。けれど、足りないと感じたものを徹底的に努力して何とか埋めようとする、そういう人が箒だった。

だからこそ、失敗できない状況で使ったことのない機体というのは怖かった。

「剣崎、冷静になれ。」

今は少しでも性能の高い機体が欲しいはずだ。後のことは後にするとして、今は《紅椿》の方を受領した方がいいのではないか？」

ですが、織斑先生の考えは違ったみたいでした。

確かに織斑先生の高性能なISを使うべきであるという考え方にも一理あるとは思いますが。でも、箒のISを変更しただけで勝てる相手とは思えません。

「織斑先生、恐縮ですが成功確率についてはあまり変わり映えしないかと。」

付け加えれば、むしろ調整にかける7分間を移動に費やし、作戦行動に充てるべきですわ」

「教官、お言葉ですが調整を要するISがこの作戦に相当であるとは思えません。」

現シチュエーションにおける理想論として、必要なISは、すぐさま動け、そして操作ミスなどで致命的な事態に陥ることのない機体です。

この点を踏まえて考えれば、むしろ《陽炎》の方が適切ではないかと」

そして、この点について素早く反論したのはオルコットさんと、少

し意外でしたがボーデヴィツヒさんでした。

驚いたように二人を見る箒と、そちらを向いて微笑で答える二人がそこにいました。

「箒ちゃんが、私が箒ちゃんように調整したISに乗ってそんなISに……」

「いえ、今回は《陽炎》で行きます。おそらく、今の私が最も戦力になるのは《陽炎》とともにあるときでしょうから。

それに、《陽炎》ならここにいる面々も性能を把握しています。多少は連携も取りやすくなるでしょう」

箒の言葉に、織斑先生は一応、頷いていました。そのまま「よし、いだろう」とだけ言い、作戦会議の続きを促します。

ですが、篠ノ之博士は思いつきり渋面になると何か言おうとします。それも、最終的には織斑先生に一睨みされて黙ることになりましたが。

「簪、さつきは何を言いかけたの？」

「あ、えつと……作戦案の事なんだけど……」

さらに篠ノ之博士が何かを言う前にデュノアさんが問いかけてきました。私の言おうとした話を促す内容に、一瞬だけ驚きながらも再度、簡潔にその内容を説明していきます。

「どういった作戦案？」

さらに続きを促してきたのは、鈴でした。不敵な笑みを浮かべながら、私の方を見据えています。

「う、うん……」

まず、今いる六人を二人づつに分けようと思う」

「内容は？」

織斑先生が促してきますが、内容の準備はできています。

「箒と鈴、私とデュノアさん、最後にオルコットさんとボーデヴィツヒさんの三組です」

「更識、その組み合わせの理由は？」

間髪を入れずにより深く内容を追求してきた織斑先生ですが、ここで答えられないほど考えなしでこんなことを言ったわけではありません

せん。

「まず、私とデユノアさんが中距離遊撃を担当します。一番最初に《福音》に近づいて先制攻撃、その後は一時的に避けるに徹する。その次に、箒と鈴に前衛を担当してもらって揺動を担当。二人とも威力の高い格闘装備を持っているから、何回か交戦すれば《銀の福音》を無視できなくなる……と思います。その間に、私たちは高威力の装備で攻撃。最後に、オルコットさんとボーデヴィツヒさんが後衛、定点からの長距離攻撃で《福音》のSEをとにかく削る、といった内容です」

「二人組の意味は？」

「作戦上の順番です。私とデユノアさんはともに高速移動が可能ですので、追いついての先制攻撃ができます。箒と鈴、オルコットさんとボーデヴィツヒさんのペアはそこまで速度性能での違いは出ないと思います。互いに片方が長距離高速移動が不可能である以上、運搬役として高速機と組むのが適切かと」

いくらかの問答の後、織斑先生はわずかに考え込みながら頷きました。相変わらず篠ノ之博士が不貞腐れています。今はどうしようもありません。

「……骨子はそれでいいだろう。」

では、煮詰めるか」

そこからさらに、より具体的な作戦が寝られていきます。

ですが、私自身、影内君がいない今の状況に、内心である不安を抱いていました。

——不安が敵中することを、この時の私は知りません。

S i d e セルラ

(中々以上……さすが、エクスクラス特級階層というだけありますね)

特装機竜の迷彩を使用しそのまま監視していましたが、やはり新王国の機竜ドラグライダー使い、名前を「影内一夏」の腕前は、素晴らしいものがありました。

(攻撃と回避に特化している分、装甲自体は薄く扱っても中々に面倒そうな神装機竜を、よくもまああそこまで手足のように操るものですね。

これは、どうやって刺し殺そうか悩んでしまいますよ)

頭の中で昏い愉悦交じりに思考し、その予感に震えます。

(でも、今回は最後までできない……というか、下手すると堪能する前に死んじゃうかもしれないのが惜しいですねえ。

かといって、今手を出してもなんとなく避けられそうな気がしますし)

異様としか言えない回避技能を思い出し楽しみな気持ちも出てきましたが、今回の任務内容を思い出し、ややげんなりとした気持ちになっ*て*いきます。

(まあ、いいでしょう。

その時はそれまでの手合いだった、というだけです)

心の中で何とか納得しようと努力しつつ、観察を続けていきます。

『おい、きよくけい棘刑。

いい加減に撤収しろ、もうそろそろ時間だ』

オイタム そんな風に色々と考え込んでいる中、無粋にも通信してきたのは『秋』とかいう同僚でした。

「はい、ただいま移動しますね」

軽く返事を返し、離脱していきます。

「私にも、その剣を堪能させてくださいよ。

影内一夏さん♪」

聞こえない一言を呟きながら、私はその時を楽しみに待ちました。

Side 簪

「全員、準備はできたな」

織斑先生の号令に、全員が頷きます。先ほど立て、その後さらに細かくして行った作戦が全員の頭の中に叩き込まれています。装備

も、調整できる範囲で最適化されました。

準備は、思いつく限りでできる限りの事はしました。

「それでは、出撃—」

それを確かめた織斑先生は、その厳しい顔のまま号令を下しました。

——長い一夜の悪夢が、足音を立てて近づいてきていることに、まだ誰も気づいていませんでした。

S i d e 一夏

「これで……」

アナイアレイト・ヴェノム

《消滅毒》も使用し、《竜毒牙剣》をパワードモードに変更。

「終いだ—」

間合いに入ってきたガーゴイルへと、クイックドロウ神速制御の一閃。幻神獣の核まで一気に消滅させる。これで自衛隊駐屯地に出てきた幻神獣はすべて倒したことになる。

(さて……早々に立ち去らせてもらうとするか)

役目を終えた以上、ここに留まり続ける気もない。騒ぎが大きくなり過ぎないうちに、というかこちらの正体が割れる前に立ち去るべきだろう。

そう考え、背翼の推進器を起動——

「その白いIS、少しいいかしら？」

——した直後に、IS部隊の隊長と思しき人物から声をかけられた。

ISではなく機竜だが、そこは気にしても無意味なことだと判断し続きを聞いていく。

「まずは、助力を感謝します。

ですが、所属不明機をそのままにはできません。所属と階級を言っ
てください。不可能ならご同行をお願いします」

言っていることは至極まともだが、此方も急いでいる。そのうえ、

正体をそうあからさまにするわけにはいかない。

「それは出来ない」

此方が拒否の意を示すと、IS部隊が一斉に銃火器を向けてくる。素晴らしい反応だが、此方も急いでいることに変わりはない。

「それよりも、いいのか？」

「何が……！」

IS部隊の隊長がまくし立てるように言葉を発そうとするが、その前に更識会長へと通信を入れる。

「更識会長、シルバリオ・ゴスベル《銀の福音》について教えても？」

「ええ、いいわよ。」

ただし、あくまで暴走したISが首都東京の方へと向かうのを来る途中に見た、位にしておいてくれないかしら？」

「委細了解しました」

通信で更識会長に連絡を取り、伝えてもいいかどうかを確認する。無論、この間はマスクの発声機能を止めておいた。

「ここに来る途中だが、ISが一機、東京の方へと向かうのを見た。」

こんなところで油を売っている場合か？ 東京が火の海になっても俺は責任を取れないが」

意図して慇懃な口調にしておき、多少の挑発を入れておく。

そして、俺の一言に一気にIS部隊が浮足立った。

「ぼ、暴走したIS、ですって……!?!」

「落ち着きなさい！ 司令部、確認を」

浮足立った隊員たちの中でも、やはり隊長格と思しき人物の落ち着きようは見事としか言いようがなかった。

そして、隊長がとった確認によって此方の理想の流れが形作られることとなる。

『……確認、終了！』

現在、アメリカとイスラエルが共同で開発していた軍事用ISシルバリオ・ゴスベル《銀の福音》が暴走状態。東京方面へと進行中！」

「な……あ……！」

どうやって通信を此方にまで回しているのかまではわからないが、

それでも概ね目論見通りだった。

さらに、この場限りの幸運が続く。

『総司令部より入電！』

目の前の機体は必要最低限の監視のみ付けたうえで《銀の福音》の迎撃を最優先せよ、とのことですよ！』

『必要最低限って言ったって……！』

「ISなんてそう何機もあるわけじゃ……！」

総司令部からの入電により、此方へのマークよりも暴走したIS《銀の福音》が優先されたことが知れた。

となれば、彼女たち自衛隊IS部隊の行動を妨げる要因はもはや俺のみ。取るべき行動の特定は容易かった。

「更識会長、この場から離脱しても？」

『ええ、そうして頂戴。』

道中でポイント指示するから、そこでもう一度切り替えて』

「委細了解しました」

更識会長へと簡単に確認を取り、了承を得る。

ここまですぐさま躊躇する気はない。すぐさま、《機竜光翼》と通常の推進器を起動する。

「それでは、な。」

「さようならだ」

それだけ言い残し、すぐさまその場を離脱。自衛隊のIS部隊も僅かな間をおいてから周囲を確認したのち、すぐにその場から飛んで行った。

——おそらくは、暴走した《銀の福音》の方向へと。

第六章（6）：導かれた終焉

S i d e 簪

「衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認……」

高速飛行しつつ、目標との距離を確認。

「デュノアさん。接敵まで、後5分」

『了解。』

接触し次第先制攻撃、だね?』

確認した時点で今作戦でペアを組んでいるデュノアさんとも情報を共有しておく。

「うん。」

「ここで、できるだけ削っておきたいけど」

「深追いは禁物、だね」

デュノアさんと互いに頷き合い、この場における鉄則を確認する。

今この場において、確認している敵は《福音》だけ。けれど、そもそもとしてISの暴走という前代未聞の事態の原因さえもはつきりとしなないこの状況では、慎重にならざるを得なかった。

それを抜きにしても、《福音》自体が私たちにとって圧倒的に荷が重すぎる相手である以上は深追いなんて出来るはずなかった。

『こちらでも、標的を確認しましたわ』

『間も無く待機ポイントに着く。』

作戦開始タイミミングはそちらに任せるぞ』

「了解」

二人揃ってボーデヴィツヒさんに返事を返して、そのまま作戦を続けていきます。

『こちら剣崎。』

目標へと接近中だが、後6分30秒ほどかかる』

「了解しました」

『了解だ』

箒と鈴の現在位置も確認。確かに、私たちよりも遅れている。このまま行けば、作戦通りに私たちが先行して当たることになる。

「接敵まで後1分」

カウントが否応なく進む。まだ始まってもいないのに、手に汗を握っていた。

「目標、目視で確認」

間も無く、射程内。

「作戦開始！」

射程内に入った直後、宣言してからトリガーを引く。

私とデュノアさん二人での同時攻撃が、《銀の福音》シルバリオ・ゴスベルへと向かっていった。

Side 一夏

自衛隊基地から半ば無理やり飛び去り、離脱していく。

『影内君、もうそろそろ機体の切り替えポイントよ』

更識会長からの指示に、機竜を《ユナイテッド・ワイバーン》から《アステイグ》に切り替えるポイントに差し掛かろうとしていた。

「そんなところに何か用か？」

影内一夏

そんなところに現れたのは、黒髪を短く切り揃えた、外見から推測される年齢では俺とそこまで変わらないISを纏っている少女。纏っているISは背面に蝶の羽に見えなくもないユニットを接続しているが、色合いは《ブルー・ティアーズ》のそれよりも暗く深い青であり、全体的にはオルコットの《ブルー・ティアーズ》の意匠を踏襲しているようにも見える。

『……何処の誰だ』

言葉は少なにも、だが警戒は一切解かずに問いかける。答えが返ってくると思っていなかったが、意外なことに相手は答えた。

「答える義理はない。そして、お前にはここで死んでもらう。」

その言葉に、即座に戦闘態勢を整える。

ビシユシユシユン！

即座に切り離されたオルコットのそれとは随分と形状の違うビツトから、ビーム弾が放たれる。

背翼の推進器と《機竜光翼》フオートンウイングを起動、回避へと移っていく。

「《竜毒牙剣》、ライフルモード」

さらに、同時進行で《竜毒牙剣》のライフルモードを起動。牽制射撃を織り交ぜつつ、回避していく。

(……ビームを曲げた、か。

確か、偏光射撃、だったな)

だが、回避した先に追いつくように曲がってくるビーム弾を見て軌道を変える。同時に、その技術を使える時点でそれなりかそれ以上の手練れであることが窺える。

(ええい、何がどうなっている!?)

かなりの実力者に襲われた上、向こうは既に此方のことを知っている。

「更識会長、少々宜しいでしょうか？」

迷うことなく更識会長へと連絡。

「敵の正体？」

「お願いします」

『分かったわ』

此方が要件を言う前に、すでに更識会長はその内容を予想しているみたいだった。

そして、二つ返事で承諾してくれる当たりやはりこの世界での情報戦では頼りになると感じた。

「ショットモード」

ライフルモードにしていた《竜毒牙剣》の内片方をショットモードへと切り替え、斬撃を飛ばす。暗い青色のISはそのまま回避に移るが、その射撃は一切衰えることを知らない。変わらず、偏光射撃の嵐が襲ってきている。

(……とは言え、避けられないわけでもないか)

初見であったオルコットの時はとにかく、二度目ともなればある程度は冷静にもなれる。数そのものは多いが、その隙間を縫うよう

に、あるいは一瞬だけ《竜毒牙剣》をパワーモードに切り替えて防いでいく。

(とは言え、時間をかけている場合でもない。

早々に踏み込ませてもらう！)

背翼の《機竜光翼》フォトンウイングを準備しつつ、速度を上げて行く。さらに、その中にも緩急をつけて狙いを出来る限り絞らせないように距離を詰めていく。

「……さすがに、専用機とは言えISで神装機竜の相手は厳しいか」
ただの確認のように、特に感慨も抱かずに自身のISの力不足を言い切っていた。

だが、不思議とそこに焦りや恐怖といった感情は見受けられない。

ドラッグナイト
ストラトス システム
「D・S・S、起動」

深い青のISを駆る少女が聞きなれない単語を口にした直後、そのISの右腕部分が溶け始めた。さながら、VTシステムを起動させた時の《シュヴァルツエア・レーゲン》を彷彿とさせるように。

その直後、溶け始めた右腕の裾から出てきたのは——豪華な宝飾に彩られた鞘に収められた、一振りの剣だった。

ISの装備としてはあまりにも不似合いなそれに、しかしこの一連の流れと現象と握りしめられた剣にはあまりにも心当たりがあった。

「——天へ舞上がれ、守り人たる多頭の魔竜。かの怨敵を滅せよ、
〈ラードウーン〉」

さらに放たれた言葉は、それ以外などありえない。

パスコード
神装機竜の詠唱譜だった。

Side 簪

ドシユドシユドシユドシユドシユドシユ!

私が放った《打鉄式式》の主装備《山嵐》の多連装ミサイルが《福音》へと向かっていく。

ドンツ！ ガキユウウウ！

同じように、デユノアさんが《イクス・ラファール》になつてから追加された装備《オクスタン・ランチャー》を用いて先制攻撃を仕掛けていきます。実弾とビーム、2種類の弾丸が《福音》へと迫つていきます。

『La』

ですが、《山嵐》のミサイルは《銀の鐘》^{シルバー・ベル}による多連装エネルギー砲で撃ち落としかかっています。デユノアさんのライフルの弾丸も、そのまま回避軌道に移つてよけようとしていました。

「その、程度で……！」

ですが、そう易々と回避させるつもりなんてありません。

今回の追加装備と同時に、《マルチロックオン・システム》も本来のそれが搭載されているからです。

(コース修正……再入力……当たらないように、当てる！)

《銀の鐘》による多連装ビームの嵐の中、僅かに空いた隙間の中を擦り抜けるようにコースを修正して再入力。《山嵐》のミサイルはそれの通りにビームを避けるような動き方をしながら《銀の福音》へと変わらずに殺到していきます。

さらに、デユノアさんも《オクスタン・ランチャー》が外れたとみるや否や背面へと再マウント、直後に一瞬でアサルトカノン《ガラム》を両手に呼び出すと即座に銃撃へと移つていきます。

ドドドドドドンッ！

そのまま先制攻撃が着弾していく。

『La——lalalalalalal!』

ですが、《福音》もこの程度では小手調べにもならない様子でした。大した損傷も見受けられず、そのまま私たちの方へと向かってきます。

その翼には、再度の攻撃をするためのエネルギーが蓄えられています。ようでした。ビームの発射部分にエネルギー反応が見られます。

「回避——」

『了解——』

とつさにデユノアさんにも回避を促し、私もスラスターを吹かせて

いきます。

ですが、それでもすべては回避できません。そこで、私は防御用追加パッケージの《不動岩山》の防壁を展開、避け切れない物のみ防御していきます。デユノアさんも同様に、肩部の非固定浮遊部位アンロックユニットに内蔵されている《ガーデン・カーテンⅡ》を使用して防いでいるみたいです。

(このまま、攻撃を重ねて……！)

攻撃が止んだその瞬間に、連射型過電粒子砲《春雷》を撃ちまくります。組んでいるデユノアさんも両腕の装甲に直接接続されている三連装55口径突撃銃アサルトライフル《ヴェントⅡ》と両手に持った連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》の二挺による一斉射撃を仕掛けていきます。

キオオキオオキオオキオオ！ ガガガガガガ！ ドツ！

それぞれの攻撃が撃ち込まれていきますが、それでも《福音》には目立ったダメージが見受けられません。

「固い……！」

「私達だけで倒す必要は無い！ 今はとにかく引き付けて！」

「分かってるー！」

デユノアさんの言葉に思わず反射的に怒鳴るように言ってしまったけれど、デユノアさんも分かっているのかそれ以上は何も言わずにひたすらに陽動に徹していました。そのまま、十分前後は戦っていたと思えます。感覚的には一時間にも感じられましたが。

ですが、それでも限界があり、徐々に押され始めています。このままでは、そう長くは持たない。

——そう、私達だけなら。

「ハアアアアアアアアア!!」

圧倒的な加速で接近してきた、紅色の機影。余りにも見覚えのありすぎるそれに、体の奥底から活力が湧いてくるような気持ちになりました。

結果的にはそのISの攻撃は回避されてしまいましたが、その時には既に次の一手が打たれています。

「アタシもいるわよ！」

さらに、赤い炎を纏った弾丸が乱射されます。その射手は、これまた馴染みの深い人でした。

「箒、鈴！」

「待たせたな」

「前衛に入るから、中衛は任せたわよ！」

二人から勇ましい一言を貰いつつ、さらに作戦を続けていく。

今からは私たちが攻撃の主力を担いつつ、二人に陽動の役割を任せて遅滞戦闘に入っていく。本格的な攻撃は後衛の二人の準備が整ってからだけど、それでもできる限りの攻撃は続けていく。

（後は、オルコットさんとボーデヴィツヒさんの二人の準備が整うのを待つだけ……）

まず、私から《山嵐》のミサイルの一斉射を放ちます。それ自体は《マルチロックオン・システム》も用いて出来る限り当てて行きますが、それでもさすがにすべてを当てきれるものではありませんでした。

ですが、攻撃はそれだけに終わりません、今度はデユノアさんが私が《山嵐》で作った時間を利用して背後へと回り込むと、そのまま背面のウェポンラックに接続された25mm6連砲身ガトリング砲《フアランクスII》で攻撃していきます。さすがに第二世代で圧倒的な弾幕性能を誇っていた《クアッド・フアランクス》に搭載されていたそれを簡略化したとは言っても、攻撃能力は十分過ぎる物があります。

ガガガガガガガガガガガ!!

大量のマズルフラッシュと共に吐き出された弾丸の雨が《福音》へと襲い掛かっていきます。

『La♪』

ですが、《福音》相手にはこれだけでは大した損傷になっていません。

「ハアアアアアア！」

ですが、その弾幕の中を箒がイグニッション・フースト瞬時加速とイグニッション・ターン瞬時旋回を用いて接

近すると、そのまま加速を殺さないまま《叢》ムラクモを振り抜いて攻撃していきます。

ですが、それも掠ったのみ。それ自体はダメージ源にあまりなっていません。

「これでも食らいなさい！」

さらに、鈴が続いて攻撃していきます。拡散衝撃砲で一気に攻めたてつつ、青龍刀《双天牙月》を柄の部分で繋げ、ブーメランのように投げつける。

各衝撃砲での足止めこそ出来ましたが、ブーメランはどう見ても搭乗者を無視していると思えない軌道で避けるのみでした。

「ああもう！ デタラメしてんじゃないわよー！」

思わず文句が零れた鈴ですけど、それも仕方のないことです。

試験機の意味合いもある私達の競技用ISとは違い、純粹に実践を想定して製作されたISである《福音》は純粹戦闘における性能においては私達のISを大きく上回っていると見ていいでしょう。

故に、今の展開もそう驚くものではありません。

(それに——次の一手は、もう準備出来ている！)

通信から聞こえてきた声に、その瞬間を待ちます。

ドゴツ！ ビシユウウウン！

唐突に、《福音》へと大口径の砲弾と一条の光弾が突き刺さりました。

『遅れてすまない。』

準備が整った、これより長距離砲撃による敵機への攻撃を開始する』

『私も、長距離狙撃による援護を開始しますわ』

後衛のボーデヴィツヒさんとオルコットさんの準備が整ったらしく、二人も攻撃に参加し始めました。

明らかに遠い場所からの攻撃に、定量的なシステム上の判断しかできない状態にある《福音》は判断に迷っている様子でした。

しかし、それも僅かな間の事。

『La』

すぐさま、《銀の鐘》の照準を後衛の二人の方へと向きます。ですが、そんなことはさせません。

「忘れてもらっては」
「困るのよー」

前衛の二人がすぐさま再接近し、攻撃を仕掛けます。有効打になつたかどうかはとにかく、足止めとしては非常に有効でした。それでも放たれたビーム弾は私とデュノアさんの二人でそれぞれの防御用装備を駆使して防いでいきます。

さらに、ここで嬉しい誤算が発生しました。

ゴガンツ！

明らかに後衛二人とは別な方向から放たれた弾丸。

『IS学園の生徒の皆さん、これまでの奮戦感謝します。』

ここからは、私達も参戦させて頂きます』

それは、今聞こえてきた通信の主、つまりは自衛隊IS部隊から放たれたものでした。

Side 一夏

「――天へ舞上がれ、守り人たる多頭の魔竜。かの怨敵を滅せよ、
〈ラードゥーン〉」

その詠唱譜によって召喚された機竜は、深い青を基調に所々が白、白に近い淡い水色に光るラインが入った外觀をしており、ティアマトと同程度の大きさの体躯を持っていた。ただし、その中に推進器と思われる装備は無く、足には陸戦機竜に特有の車輪ドライヴが見て取れることから、陸戦型神装機竜であることが推測できる。

だが、本来は装甲が無いはずの部分に装甲が存在し、それがあまりに機竜を接続する前までに使用していたISを踏襲していたことからもう一つ、あることも推測できた。

ビシユウウウン！

そうして姿を現した直後に放たれた、一筋の光弾。向こうの機竜――

——《ラードウーン》という名前らしい——が手に持っていた機竜
牙剣とライフルの相の子のような装備から放たれていた。察するに、
《ラードウーン》の特殊武装なのだろう。

『……VTシステムの黒幕は貴様等か』

「ああ、そうらしいな。私は直接関与していないから知らんが。

それよりも、存外余裕だな」

確かに向こうが接続した瞬間に撃ってきたために《機竜光翼》を用
いて急旋回と急速離脱して避けたが、それ自体は大したことではな
い。

むしろ、問題は向こうが陸戦型機竜であるにも関わらずに飛行し続
けている事。恐らくは以前の《VTシステム》の時と同様、ISとし
ての機能を維持したまま機竜を纏っているために出来た芸当だろう。

(装甲と駆動出力に優れた陸戦型が空を飛ぶか……厄介な)

さらに、向こうは以前にあったボーデヴィツヒの《シユヴァルツイ
ア・レーゲン》に搭載された《VTシステム》の一件への関与をあつ
さり認められた。

(よほどの間抜けか、はたまた問題ないほどの背後関係があるのか
……)

これまでの行動から見ると、後者だろう事は容易に推測できる。そ
うなると、問題はその組織がいかなる組織か、と言う事である。

(とはいえ、こちらの世界の調査はやはり更識会長に頼る他無いか)

早々に思考を切り上げ、戦闘へと集中していく。

向こうは今度は背翼にあたる部分を展開してきた。だが、それは飛
翔型機竜のそれとは違い、片翼につき三挺の《機竜息砲》が接続され
たような形状になっている。そこから、合計六発の光弾が放たれた。
一発一発が高威力であるうえ、両手に握られた特殊装備と背翼の形状
をとっている特殊装備からの一斉者は単純に物量という意味でも脅
威だった。

だが、だからと言って回避できないわけでもない。適度に回避しつ
つ、接近のタイミングを計っていく。

「フ……このままでは埒が明かん。

「まあいい、もう十分だしな」

そんな中、不意に聞こえてきたセリフ。それと同時に、目の前の機竜は牽制としか思えない散発的な攻撃を押しかけながら撤退した。

『逃がすか……!』

「いいのか?」

今頃、向こうには結構な戦力が向かっているぞ?」

その一言に、《銀の福音》のほうを思い出した。

(まさか……!)

気づかれずにVTシステムを仕込めるような連中なのだし、暴走させる術を持っているのかもしれない。そう考えれば、今回の事態のタイミングの悪さにも説明がつく。

『……なんですって!?!』

影内君、その敵との戦闘が片付き次第《銀の福音》の方へ向かって!』

「更識会長、一体何が!?!」

『所属不明機が現れたわ。しかも、特徴が《ヴィーヴル》と酷似しているの!』

「……なんですって!?!」

その内容に、衝撃が走った。

(つまり、ここでの戦闘は足止めか……!)

同時に、自分がまんまと敵の策略に乗っていたことを痛感して歯噛みする。

けれど、今すべきはそんな事じゃない。

「そういう事だ。」

生憎、私はこれ以上関与する気は無いのでな。行くといい」

それだけ言い残すと、目の前の敵は早々に去っていった。

「……行くしかないか」

決断までに時間は必要無かった。すぐさま《福音》の方へと進路を向ける。その後は、焦る気持ちを押し殺しつつ、ひたすらに飛んで行った。

「これで……終わりです！」

最後、自衛隊の I S 部隊と一緒に協力しながら総攻撃を仕掛け続け、ついに無力化できました。ですが、さすがに最新鋭機というだけあって参加者全員の疲労が酷い事になっています。

「……目標の残存 S E、0。無力化を確認しました。」

これより《銀の福音》および搭乗者を回収し帰投します」

自衛隊 I S 部隊の隊長らしき人が基地へと通信していました。

「教官、任務完了しました。」

これより帰還します」

『よくやった。』

最後まで気を抜かずに帰ってこい』

同じように、ボーデヴィツヒさんも現場責任者である織斑先生へと報告していました。

「おや、まだ来ていないのですか？」

M も存外やるものですね」

そんな中、不意に聞こえてきた声。

発生源を見ると、いつの間にか四つ足が特徴的な機体が異様に細い槍のような装備をもって佇んでいました。余りにも異様な姿ですが、その姿には僅かながらの既視感を覚えました。

「まあ、いいですけどね。」

ひとまず、主演が来るまでは私の相手をして貰いますか」

異様に丁寧な口調ですが、その口調には致命的に人間らしい抑揚が感じられない、一種異様なものにすら感じられます。

それが、目の前の人間の不気味さをより引き立てていました。

「特殊武装、《竜髭棘槍》」

それだけ眩いた直後、目の前の機体の槍の先端が僅かに発光しました。

直後、目の前の I S は一瞬消え——此方が捕捉するより前に、自衛隊の I S の内一機へと距離を詰めていました。そのまま、その槍を突き出しています。

ですが、自衛隊の I S 登場者もやられるばかりではなく、回避に移ります。

キーンツ！

金属同士がこすれる音が響き、自衛隊 I S の方の非固定浮遊部位が貫かれ、爆散しました。

(ただ刺されただけなのに、爆散……?)

その光景に、少しばかりの違和感を覚えました。

確かに非固定浮遊部位には液体燃料なども搭載されている場合がありますが、今、自衛隊が使用している I S は《打鉄》です。その推進器はエネルギー式で、機能停止することはあっても爆散することは考えにくい方式でした。

それが、すぐに爆散。あの槍には何かあると直感しました。

「ああ、言い忘れてましたが。この《竜髭棘槍》、刺されると刺した物体の内側にエネルギーを噴射するんですよ。さらに追加で言っておきますが、絶対防御とやらも貫通できますので」

私の抱いた疑問に対する答えだけならまだしも、さらに追加された内容は普通の I S 乗りにとって致命的で——

「内側から焼かれたくないのでしたら、是非、必死になって避けてみて下さいな♪」

——いつそ薄ら寒いほど、楽しそうに告げられた内容は背筋を凍らせました。

S i d e 一夏

全速力をもって現場へと向かった俺を待っていたのは、異様な装備を搭載した特装型強化汎用機竜《エクス・ドレイク》を駆る敵と、それを迎え撃とうとしている I S 学園と自衛隊の面々だった。

「《機竜光翼》、《竜毒牙剣》ショットモード」

すぐさまさらに加速し、同時に注意を此方に向けさせるためにある程度の攻撃を挟んでいく。

攻撃行動を中断された機竜使いドラグナイトの女も直ぐに此方を認め——不意に、口元を三日月の形にゆがめた。

「——さて、それでは新王国の機竜使いさんも来て役者が揃ったところで、主メインディッシュ菜と行きましょう。もう少し楽しみたかったのも、まあ本音ですが。

私、『亡国六刑士』の『棘刑』からの贈り物です」

直後、『棘刑』と名乗った女は、その手に持った異様に細い槍を——真下に、放った。

その意味不明の行動に、だが一度その一種異様ともいえる戦闘能力を見せつけられているだけに、全員が警戒する。

だが、その時間は長く続かなかつた。

……ボコボコボコボコ

余りにも規模の大きい泡が水面に現れ、次いで何か巨大な影が見え始める。

ザバアアアアアアアアアア!

それを認識してから間を置かず、何か巨大な、牙が無数についた吸盤を所狭しと張り付けた触手のようなものが海面を文字通り力任せに割りながら自衛隊所属のISの一機が締め上げられた。

「が……はっ!」

「チィッ!」

咄嗟に握っていた《竜毒牙剣》の内一本をロングモードへと変更、さらに《消滅毒》も付与してから触手の近くまで接近し、神速制御クイックドロウを用いて切り裂く。

(この触手は……)

同時に、この現象を見て凄まじく嫌な思い出が蘇ってきた。

(まさか……)

あまりにも嫌な予感に、冷や汗が流れ落ちる。

「さてさて、それでは《新王国の機竜使いさん》を始めとした皆様方に

は此方を相手して貰いましょう。

行きなさいな、《イミテイト・ポセイドン》♪」

——その後、嘗てルクスさんに、その後にローザ卿とソフィス卿が復活した個体を倒した終焉神獣《ポセイドン》と外見上はほぼ同一の幻神獣^{アピス}がその姿を現した。

第六章（7）：全力

S i d e 一夏

数えるのも馬鹿らしいほどの触手が眼前から迫りくる中、俺を含めた全員が回避へと移行する。先ほど為すすべなく捕らえられた前例がある以上、一度でも捕まれば終わりではないかという認識があったためだ。

「ク……!!」

「何なのよ、この化け物……!?!」

だが、それでもこの数を全て避け切るのは無理がある。何人かが徐々に当たりはじめ、その何人かのフォロワーによってさらに他の面々にも被害が、という事態になりつつあった。

幸い、あのポセイドン擬きは海中にいるにも拘らず余り動いていない。しかも主な攻撃手段として使用している触手も、いくら長いと言えど限界はある。距離さえ取ってしまえばよけやすくもなった。

（だが、そうなつてくると今度はあの触手の壁を抜けて有効打を撃たなければならない……。そうなれば必要となるのは、長射程からの一撃必殺か高い火力による絶え間ない集中砲火か……。

現状、俺を含んだ此方側の戦力でそれを行うのは難しい、か）

現在、こちら側についているISはIS学園側から《打鉄式式》、《陽炎》、《ブルー・ティアーズ》、《甲龍》、《イクス・ラファール》、《シユヴァルツィア・レーゲン》、自衛隊から《打鉄》が一個小隊となっている。

IS学園側の機体は性能試験機なども含まれるが総じて量産機よりは高性能である機体が多く、反対に自衛隊側はその練度の高さが見える操縦を見せている。

確かに高い戦力と言えるが、それでも今この場における敵との相性だけは最悪と言ってよかった。

まず、《陽炎》と《甲龍》では無理だ。二機とも近接戦前提である以上はどうしたところで接近する必要があるが、模造とは言え終焉神獣^{ラグナレク}。迂闊な接近はできない。あのセリスティアさんでさえも

一度は窮地に追い込んだ相手ということを忘れてはいけない。

では、中距離から火力を叩き込めるデュノアの《イクス・ラファール》や、簪の《打鉄式》、そして自衛隊の《打鉄》では通じるのかと聞かれれば、答えは否。距離を離せば触手の壁と本体の分厚い壁が、そして先ほどの《消滅毒》の攻撃を現在進行形で帳消しにしている再生能力。この守りをこの場の機体だけで削りきるのには厳しい。

では、長射程攻撃を可能としている《ブルー・ティアーズ》と《シユヴァルツィア・レーゲン》ではというと、こちらも攻撃面においては通じないだろう。確かに単射の威力や恒常的な攻撃能力の高さは高いものがあるが、そもそもダメージが蓄積する前に自前の再生能力で対処されてしまうためにそこまでの効果は望めない。

そして、俺自身はと言えば。

(……再生能力と《消滅毒》の効果がほぼ拮抗している。時間が経てば此方の能力は効力を失う以上、勝負をつけるには切れ目のない連撃か、一撃でポセイドン擬きの核まで叩き壊せる一撃を叩き込むか。

永久連環エンドアクションを使えない俺では連撃によって倒せないし、核まで一気に届かせる一撃はソレ以上に持ち合わせがない……打破、するとすれば……)

ひたすらに、ただひたすらにこの状況を好転させうる一手を模索していた。

だが、それが思いつかない。ポセイドン擬きだけならば、或いは何らかの手段で集中砲火ができたかもしれないが――

「フッフ……上手く避けないと綺麗な穴が開きますよ?」

「お気遣いどうも。」

だが……そこまで気遣いができるなら、その物騒な槍を仕舞って欲しいものだな!」

――生憎、この場にいる敵はポセイドン擬きだけではない。

現在、済し崩し的に俺の方でポセイドン擬きを引き受ける形になっているが、それも何時まで持つか分からない。加えて、本格的な戦闘では全くの初見になる敵である『亡国六刑士』の『棘刑』と名乗った《竜髭棘槍》ニードルと言う特殊装備を持つ《イクス・ドレイク》を駆る女。

そちらはIS学園と自衛隊のIS部隊で抑えてくれている。が、道中で出会った手合いのことを考えれば敵側の増援の可能性を否定できない。自衛隊のISも行動不能になった《銀の福音》シルバリオ・ゴスベルを抱えている一機がいる以上はその一機をフォローしなければいけない状況も出てくる。これらの事情を鑑みれば、できる限り早いうちにこのどちらかの内片方を何とかしたかった。

(しかし、どちらに対しても決定打が打てない……)

だが、此方側は手詰まりともいえる状況に陥りつつあった。

しかし、その間にも刻一刻と時間は過ぎてゆく。それは双方に時間を与える結果になるが、手詰まりになっている此方に比べて敵側は余裕さえ見える今の状況では、ジリ貧になっていると言わざるを得ない。

「やだなあ、《竜髭棘槍》ニードルを仕舞ってしまおうと刺せないじゃないですか」

「早くそうしろっつってんのよー！」

嵐が威勢良く食って掛かるが、それもどこ吹く風。

「つれないですね。」

もう少し、殺し合いましよ。愉しいでしょう?」

「生憎、殺し合いを愉しむような趣味は無いよー！」

デュノアに自身の発言を全否定されても、特に応えてもいない。

「そうですか、残念ですね……」

心底残念だとも言うように、表情を曇らせる『棘刑』。だが、次の瞬間には再び満面の笑みに戻っていた。

「まあ、いいです。」

でしたらこちらはこちらで愉しむだけですから」

それだけ言うと、手にそれまでの《竜髭棘槍》とは別の、機竜息銃プレスガンに似た装備を手にした。

だが、こちらで確認できたのはそこまで。

——ヴアアアアアアアアアアアアアア!!!

ポセイドン擬きが、叫びとも威嚇ともとれる唸り声を上げながら数多の触手を此方へと向けてくる。

(本格的な攻勢に移ってきたか!)

内心で毒づきながらも、《機竜光翼》フオトンウイングと通常の推進器の二種を併用して回避行動を取る。どうしても避け切れない場合のみ、《機竜刃鱗》ブレードアーマーか《竜毒牙剣》タスクブレイドのどちらかに《消滅毒》アナイレイト・ヴェノムを付与して切断、迎撃していく。

(どうかして、踏み込めれば……あるいは……！)

幸いなことに、今までの体感ではあるが《消滅毒》で拮抗させる形で一時的にポセイドン擬きの再生能力を押し止めることができる。

だが、そもそもとして《消滅毒》の有効射程内に入れることが難しく、しかも基本的に水中にいるために攻撃も届きにくい。そして、仮に踏み込んだとしても通常の連撃では倒せるかどうか怪しかった。

「っ、のっ……！」

半ば無理やりに距離を縮めていくが、それも徒労に終わる。

ザボオ……

唐突に触手で攻撃を中断すると、すぐさま潜水していくポセイドン擬き。当然のことながら神装機竜とは言え飛翔型機竜である《アスデイグ》は水中戦闘になど対応していないため、手を出せなくなる。そのまま、ポセイドン擬きは少しの間だけ水中を移動したらしく——次の一手で、此方を強襲してきた。

「ッ!!」

本能が叫ぶまま咄嗟に機体を翻し、直後に《機竜光翼》を使用。無理やりな加速に体が軋みを上げたが、回避する直前まで居た場所を途轍もない速度で通過したポセイドン擬きの触手に、体の痛みも忘れて冷や汗が流れるのを感じた。

さらに本能に従い、《アスデイグ》を駆る。ただひたすら迫りくる触手から距離をとって回避。

(距離を詰めれば水中へ、か……)

回避に徹すればある程度どうにか凌げるが、それ以上には至らない。

(一息に距離を詰め、一回の連撃か大出力の一撃で仕留めるしかない……だが……)

実のところ、それに類することが出来る可能性が全くないというわ

けではない、だが、下手をすれば倒す前に自壊する危険性が付き纏う技でもある。

つまり、もしそれで押し切れなければ俺自身の確実な死と、いまだ余裕のない様子であるIS部隊、ひいては後方の旅館や都心へとポセイドン擬きを進軍させることを意味している。

(それだけは、やらせる訳に行かない……だが……!)

決意とは裏腹に、状況は好転の兆しを見せない。

そのような状況の中、余りにも意外なところで、予想外の事態が勃発していた。

——それは、さらなる状況の悪化を意味していた。

Side 簪

「まあ、いいです。

でしたらこちらはこちらで愉しむだけですから」

それだけ告げると、ハンドガンにも似た装備——影内君の《ユナイテッド・ワイバーン》が搭載していた物とほぼ同型——を構えるのと、躊躇もなく引き金を引いていた。完全な抜き打ちの形でもあり、同時にそれまで使っていた装備がほぼ槍一本だったということも手伝って対処が僅かに遅れた。

——それは、致命的な事態を招くことになる。

「こ、今度は……一体……?」

『棘刑』と名乗った謎のIS搭乗者が放った、一発の弾丸。

それが、機能停止していた《銀の福音》シルバリオ・ゴスベルへと着弾した。

……ヴウン

ほんの僅かに、ハイパーセンサーがなければ潮来の波の音の中にまぎれて聞こえなくなってしまうようなほど小さな電子音。だけど、確かに発されていた。

——いまだ自衛隊所属のISが抱えている、《銀の福音》から。

直後、《福音》が再起動し、自衛隊のISを突き飛ばす。さらに青白

い光の繭のようなものを展開、わずかにその状態のまま停止する。

その後、殻も繭とも言えない青白い光をまき散らしながら、それまでとは明らかに変化を見せていた。《銀の鐘》シルバー・ベルがあつたはずの背面から、今は八枚四対の光の翼を靡かせている。

「二次移行……!?!」セカンド・シフト

あまりにも異常だけど、それ以外に思い当たる現象もない。それでも信じられなかった。

通常、二次移行というものは同じ搭乗者が長期間、コアと関わり続けることで発言する。だけど、開発されたばかりの機体にテストパイロット、そして明らかに性急すぎる変化。加えて、直前に放たれた一発の弾丸。

(強制的にI Sのコアに介入して、二次移行させたって言うの……!?!)

経った今思いついただけの推測に、寒気を感じた。もしこれが当たっているとすれば、今相対している敵はI Sコアに対して国家機関以上の造詣を持っている人がいるかもしれないことになる。

(一体、私たちは今、何を、誰を相手に戦っているの!?!)

得体の知れない恐怖に飲まれかけた思考を現実に戻したのは、二次移行してなお暴走状態のままの《福音》だった。

新しく発生した八枚の光翼から、大出力のエネルギー砲撃が放たれる。

「ッー」

私を含めた射線上にいた全員が、とつさに避ける。けれど、そこで敵の攻撃は止まない。

「私の相手も忘れないでくださいな」

さらに、別方向から『棘刑』が来る。なんとか回避したけれど、右肩の非固定浮遊部位アンロックユニットに当たった。幸い誘爆とかはしていないけれど、破損によって内蔵された連装ミサイル《山嵐》の一部が使用できなくなる。

「……のっー」

それでも、至近距離で《山嵐》のトリガーを引く。右肩の破損した方も、無事な数だけ撃った。

私自身へのダメージも免れないけれど、それでも防御か回避を強要させることで一時的に動きを制限できた。

「箒いー！」

「任せろー！」

瞬間、箒が^{イグニッション・ブースト}瞬時加速で私と『棘刑』の間に割り込んでくる。そのまま、^{イグニッション・ターン}瞬時旋回で旋回しながら《叢》を振り抜く。

けれど、『棘刑』もやられるままではなく、あの異様に細い槍でさばいてくる。あの大量すらも武器にする《叢》さえもあの細い槍でいなすその腕前は素直に驚異的だけど、箒もただ為されるだけには終わらない。

「さて、お披露目と行くかー！」

瞬間、両手で《叢》を振り抜いた後の姿勢のまま、右手だけを離すと何も持たないまま突きつける。

「^{ニチリン}《日輪》ー！」

直後、その掌側の裾部分から火炎放射と見まごうばかりの収束していない熱粒子攻撃が放たれる。

「^{ハウリング・ロア}奇妙な装備を……《機竜咆哮》ー！」

ですが、『棘刑』は何か衝撃波のようなものを用いて一時的に《日輪》の攻撃を散らすと、そのままその場を離脱しようとします。

「まだまだー！」

「いえ、ここまでです。」

なにせ、今は私だけではないのですよ？」

瞬間、エネルギー弾の雨が私達へと降り注いだ。

撃ったのは、暴走させられた《福音》。

「おとなしくしててよー！」

すぐに、デユノアさんがフォローに入り、ガトリングガン《ファラックスII》による斉射攻撃、さらにバンカーによる一撃を入れようと近づいていく。

「アンタもアンタで逃げてんじゃないわよー！」

この一連の動きの中で離脱しようとした『棘刑』の動きを目敏く察知した鈴が、攻撃力の増した《甲龍》の猛攻が仕掛けられる。増加パツ

ケージに搭載されていた拡散衝撃砲やスパイクアーマーを用いて、ひたすら手数優先で攻撃を加えていく。

「あら、元気ですね」

しかし、それでも『棘刑』は揺るがない。

「つこのおー」

しかも、デユノアさんのバンカーも迎撃をもらったために外れてしまった。

でも、これで終わりじゃない。

「行つて！」

まず、私の方から《山嵐》の連想ミサイルを発射。《福音》の動きを止めに入る。

やはり迎撃されたり回避されたりするけれど、一時的に動きを制限するくらいの効果は出た。

「オルコットさん、ボーデヴィツヒさん！」

『任せてくださいまし』

『任せろ！』

後衛の二人に呼びかけたけれど、二人はもうすでに動いていたみたいだった。このタイミングを逃す気はないみたい。

キュガア！ ドゴンツ！

レーザーライフルと長射程レールカノンの二撃が、《福音》へと突き刺さる。

戦局の変化に『棘刑』が目敏く反応してきますが、それにも手を打つてくれる人たちがいました。

「各機、攻撃！」

「了解！」

自衛隊のIS部隊が、《打鉄》に搭載できる中では高火力の装備である大口径ライフルやミサイルランチャーを持ち出し、攻撃し始めている。そして、離脱しようとして僅かに距離が離れていた『棘刑』はまさしく格好の的だった。

「いい攻撃ですね。ですが……！」

ですが、やはり『棘刑』も異常な能力を見せてきました。

あの細い槍を振るうと、まず先行してきたライフルの弾丸を串刺しにしました。もはや人間なのかどうか疑わしいレベルです。

さらに、遅れて来たミサイルも適度にハンドガンのような装備で撃ち落としつつ、あの衝撃波で爆発の衝撃を中和していきます。あろうことか、それでも迎撃できなかつたミサイルに関しては推進器にあたる部分のみを正確に突き刺し、爆発すらさせていない。もはや気が狂っていると思えない芸当だった。

(これだけ撃つても、足りない……)

状況が好転しない中、その変化はあまりにも突然に訪れた。

Side 一夏

(マズい……)

状況は徐々に追い詰められていっており、悪化の一途を辿っている。外部からの介入によつて強制的に再起動させられ暴走している《福音》も加わり、元から居た『棘刑』の駆る《エクス・ドレイク》の《竜髭棘槍》も絶対防御さえ貫通するほどの極端な攻撃能力を持っている以上、迂闊に手を出せば返り討ちに会いかねない。そして、目の前には終焉神獣《ポセイドン》を模したと思われる巨大な幻神獣。

(ああ……そうか)

こんなどうしようもない状況下であるにも関わらず、不思議と冷静だった。

(もし、この化け物を討とうとするのであれば……いや、そこまで行かなくても、退けようとするのであれば……)

そう。

ルックスさん
師匠のような、圧倒的な経験の積み重ねと操作技能があるわけでもない。

リーシャ様
師匠のような、オーバーユニット超過装甲を生み出すほどの機竜に関する深い造詣があるわけでもない。

クルシフアーさん
師匠のような、フルコネク完全結合を可能とするほどの適性があるわけで

もない。

セリステイアさん

師匠のような、長く積み重ねた鍛錬と戦術眼があるわけでもな

い。

フィルフィさん

師匠のような、圧倒的といえる身体能力と覚悟があるわけでもな

い。

夜架さん

師匠のような、戦闘に対する先天的、後天的な適正があるわけでもない。

凡て、紛い物。

凡て、二番煎じ。

凡て、下位互換。

(所詮は影打……己自身と言う真作にさえ成れない、か……)

弱い自分を忘れないように、一夏、の名を残した。弱い自分でさえ大事にしてくれた人がいたことを忘れたくなくて、残した。

嘗て、誰かにとつての理想の自分、という真作に成れなかったから。そして、教わって変わった先の、自分自身の何かができるまでは贋作でしかないのだから。

それ故の新しい名前、その意味を忘れた事は無い——はずだった。

(気づかないうちに、強くなった気で……舞い上がっていたか……)

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

ただ、勘違いしていただけ。

——強くなったつもりに、なっていただけ。

(師匠達なら、或いは退けるくらいはできたかもしれない……。ルクスさんなら、倒せすらしただろうな)

あの人達のように、強くなりたかった。

いつかは、そうなれると信じたかった。

だけど、今もその望みは叶っていない。

「更識会長、聞こえますか？」

不思議なほど、感情の起伏がないままに判断が下せた。

『聞こえるわよ。』

今、何とか増援を呼べないかやっているから……』

「その増援、アイリさん経由で師匠にも要請できませんか？」

「更識会長の言葉を途中で切っていった此方の要請に、それでも応じてくれていた。」

そのことに感謝の念を抱きつつも、視線と思考はポセイドン擬きから外す事は無い。

『可能よ。通信機は生きてるしね。』

……そこまでの、相手なの？』

更識会長があくまで冷静を装いながら聞いてくる。だが、その声に宿った緊張を隠しきれてはいなかった。

「それと、アイリさんに伝えておいてください。」

『使用禁止の言を破って申し訳ありません』と」

その一言だけを告げ、《アステイグ》の操作に集中していく。

まず最初の準備として、肉体操作による全力の行動を自身の精神操作によって抑える。《強制超過リコイルパースト》の準備。

「調律、開始」

さらに、《戦陣》の応用で《アステイグ》内部の出力を《強制超過》の状態のまま固定していく。

《超過起動パーストドライブ》、開始」

——それは、使用禁止を言い渡された、一步間違えれば俺自身の即死を招く技の名前だった。

Side 簪

その変化は、あまりにも唐突だった。

(影内君の様子が……変わった?)

『棘刑』と名乗った謎のISと、そのISによって暴走させられ、あまつさえ強制的に二次移行させられた《福音》。そして、あの巨大な化け物。

箒の奮戦や鈴の猛攻、そして後衛のオルコットさんとボーデヴィツヒさんが見せた正確無比な援護、デュノアさんの後先考えない弾幕攻撃とそれに加わった自衛隊の攻撃。これだけ重ねて、ようやく『棘刑』

と《福音》と互角に戦っていた。だけど、そのために私たちが使った弾薬や消費したエネルギーは決して少なくなく、《ユナイテッド・ワイバーン》にも似た機体を駆る『棘刑』と暴走させられた《福音》、さらにあの烏賊型の巨獣を相手取るには色々な物が不足している。

絶望的ともいえる戦況に、私たちの心が折れかけていた、その時。状況を確認したくて見た影内君と《アスディーク》が動きを止めていました。

(いけない！)

思わず叫んで援護しようとした、その時——

キユドオ！

——響いたのは、空気を突き破って何かが飛翔する、音。

直後に見えたのは、禍々しいばかりに白く白く発光する、一筋の斬線。

影内君が、あまりにも巨大な形状となった剣を超速で振るったのだと理解するのに、僅かな時間を要した。

(確か、ロングモード……違う、それにしても巨大すぎる……!?)

三度、空気を突き破る音が鳴る。同時に、禍々しい白を纏った飛行機雲のようにも見えるそれも、影内君の《アスディーク》から吐き出されたそれなのだとうやく理解できた。

けれど、余りにも異常に過ぎる。影内君から以前聞いた《アスディーク》の性能を考えると、違和感を感じていた。

(確か、通常の推進器だとあんな感じにはならないはず……《機竜光翼》だったら光が出るけど、白くなるのは消耗が激しい《消滅毒》と併用した時だけのはず……。でも、今の状態でそれをやる理由は……)

どうしようもない違和感を抱きながら、それでも異常なまでの強化と言えるその姿に光明を抱いている自分がいたのも事実です。

——それが、どれだけ危険なことなのかも知らないままに。

なる。常に、武装か神装の使用を強制される、という状況になるのだ。それは戦術その物の狭窄化を招き、読み合いにおいて不利になりやすい。特にルクスさんを相手にしたりしたらこの弱点は致命的だった。

二点目。機体へと掛かる負担が尋常ではない。《アステイグ》が耐えられるギリギリかそれに近い範囲で常に稼働し続けるこの状態においては、ただの一動作にかかる負荷でも機体の崩壊や予想外の挙動に繋がりがねず、今現在の状態で言えば最悪、推進器の破損などによって海面に超速で突っ込みかねない。

そして、最後。性能の半ば無理矢理な強化、特に速度系の性能強化に対して身体保護の強化が追い付いていない。単純な性能の強化という意味ではそれなりに有効だが、限界突破オーバーリミットのように真つ当な手段とは言い難いこの手段では当然最適化された出力バランスなど設定されていない。強制超過のように一撃で済むわけではなくある程度の連続使用を前提にするこれでは、ただ動くだけでも相当な負担が俺自身の体にもかかっている。現在進行形でミシミシという音が聞こえてきているような気さえしていた。

(だが――)

嘗てこの敵に抗い得た、或いは討ち取って見せた人は、俺よりも遙かに強かった。その中には、俺が師匠と呼んだ人だっていた。

だからこそ、よく知っている。その人たちと自分の機竜ドラグナイト使いとしての実力の差くらいは、特に。

だが――その人たちは、今ここには居ない。

(それでも！)

故に、俺が今この場を切り抜けるか、最低でもこの場で押し止めなければならぬ。

足りない実力を、足らせなければいけない。

圧倒的な経験の積み重ねに、オーバーユニット超過装甲を生み出すほどの機竜に関する深い造詣に、フルコネクト完全結合を可能とするほどの適性に、長く積み重ねた鍛錬と戦術眼に、圧倒的といえる身体能力と覚悟に、戦闘に対する先天的、後天的な適正に。

紛い物でも、二番煎じでも、下位互換でも。

(「ならば……！」)

足りない何かでないもので、足らせなければいけない。生きるべき人がいる、それはこの《アステイグ》を預けられたあの世界でなくても変わらない。

足りない実力で、それでも為さなければならぬ。

——それこそ、自身の命を賭ける事になったとしても。

Side 簪

目の前の光景が、あまりにも非常識に過ぎていた。

影内君の駆る《アステイグ》が何かをするたびに禍々しいほどに白い光の毒が巻き散らかされ、あの烏賊の化け物とも言える巨獣の足の一部が切り刻まれていく。

だけど、状況は一進一退。それ以前の状況に比べれば改善こそしているけれど、だからと言って此方から攻勢に出られるほどじゃない。嫌な予感と強い焦燥感を覚えずにはいられなかった。

「簪ー」

「!!」

かく言う私はと言えば《福音》の大出力ビームから避けつつ、《山嵐》のミサイル攻撃を仕掛けていく。けれど、これもビームの弾幕に迎撃されてしまう。

この一連の動作も、箒からの呼びかけが間に合わなかったら危なかった。けれど、それだけに終わってくれない。

ヒュオ!!

真横で何かが高速で突き出されたような音。

咄嗟に身を捻って躲したそれは、あの《竜鬚棘槍》という異様に細い槍でした。

「上手く避けますねえ……」

これは、中々に殺し甲斐がありそうですねえ……♪」

避けられたと言うのに全く動じずに、むしろ嬉々とした様子でごく

当たり前のように感想さえ述べてくる。そのある種の異常性に、やはり寒気を覚えます。

「だが、後ろがお留守だな！」

直後、いつの間にか後ろへと来ていた箒が手に持った武器の引き金を引きました。その引き金が引かれると同時に、私もその場から離脱します。

ガガガガガガガガガガガ!!

けたたましい音と共に、大量の弾丸が一気に吐き出される。

五連想マシンガン《フィンガー》。束ねられた五つの銃身がそれぞれにマズルフラッシュの光と共に弾丸が放たれ、『棘刑』の機体へと牙を向けた。

「ツチー！」

だけれど、『棘刑』もやられるままじゃない。身を捻って回避しつつ、その槍を突き出そうとする。

ガガガガガガガガガ!

「させないよー！」

けれど、その攻撃行動はデユノアさんが放った《ファランクスⅡ》の多量の弾丸によって阻止された。

『Laa♪』

そのデユノアさんへと、福音が翼を向ける。そのままエネルギーを前面に収束し、放とうとして――

『オルコット、《福音》へ攻撃!』

『了解ですわ!』

『各機、《福音》へと攻撃!』

自衛隊のISと後衛を務めてくれるボーデヴィツヒさん、オルコットさんの二人から福音へと攻撃が再開される。発射体制に入っていた福音は反応が僅かに遅れ、結果的に全断被弾した。

『――し、簪。聞こえるか?』

聞こえてきたのは、影内君の声。

「かげ」

『やってほしいことが、ある……!』

どこか苦しげな声で紡がれたその言葉に、息を？んだ。けれど、そうしてばかりもいられないから。

「――、分かった」

内容だけ確認し、二つ返事で頷く。決して、不可能なことじゃなかった。

「ハアアアアアアアア！」

そのまま、全力で《福音》への距離を詰めていく。右手に握るのは、対複合装甲用超振動薙刀《夢現》。

ガギイイイイン！

その刃自体は、福音が両手で強引に受けてしまった。けれど、その時には既に――背面に収納されている連射型荷電粒子砲《春雷》に、途轍もない高速機動で此方まで来た影内君が触れている。

《消滅毒》を適用しながら。

ガギユウガギユウガギユウガギユウガギユウガギユウ！！

ひたすら、《福音》がそのSEを枯らせるまで鏝迫り合いつつ《春雷》を打ち込んでいく。

けれど、《福音》もされるがままではなく、その背翼でエネルギーを収束し、こちらへ撃とうとする。

『――すまんな。』

利用させてもらう！』

瞬間。影内君が《福音》へと肉薄する。そのまま福音へと組みつく。と、私から一旦引き？がしました。そのまま正面へと移動します。ですが、その直後に《福音》は大出力化されたエネルギー砲を撃ち放ちました。

無論、そのまま食らう影内君ではなく、むしろ回避しつつ前に出ました。そのまま再度組み付くと、そのエネルギー弾の弾道を自前の大推力を用いて無理やり変えていきます。同時に、そのエネルギー弾の内部へと《アステイグ》の腕部を突っ込みました。

その直後に、《福音》の放ったエネルギー弾の色が白く変わりました。そして、無理矢理修正させられた弾道の先には――あの、烏賊のような巨獣が、今にも影内君を倒さんとその大量の触腕を向けてい

ました。

「——ヴウウエエエアアアアアア!!」

ですが、その触腕は白く変色した《福音》のエネルギー弾によって悉く消滅させられていきます。

(これで、あの巨獣を倒せれば……!)

影内君が教えてくれた策。それは、現在は敵である《福音》の大出力エネルギー砲を利用してあの巨獣を倒す、というもの。その時に《消滅毒》も利用することを視野に入れ、十分に引き付けてから撃たせるという事だった。

結果としては上手く行った。あの巨獣の触腕の大半以上を吹き飛ばし、本体と言うか大本へと届きそうかどうかというところまでなっている。

「おっと、そこまですよ」

すかさず、『棘刑』が邪魔をしにきました。ですが、それは後衛の二機や自衛隊のIS部隊からの攻撃に阻まれます。

『……足りない、か……?!』

だけど、それでも足りない。たしかに触腕の大部分を吹き飛ばせたけど、それでも本体へと到達するころには威力を大幅に減衰させられていた。

「うつとうしいですね。」

まあ、それ位のほうが相手のし甲斐がありますか」

「だが、ここままでにしてもらうぞ?」

さらに邪魔しようとする『棘刑』でしたが、その前に箒が立ちはだかりました。イグニッション・ブースト 瞬時加速とイグニッション・ターン 瞬時旋回の加速を両方とも乗せた《叢》の一撃を見舞っています。

さすがにあの細い槍で受けることはせず、障壁で受け止めています。

「《アリエス》、行け!」

ですが、箒はむしろこの展開を待っていたようでした。そのまま、アンロック・ユニット 両肩の非固定浮遊部位に内蔵された特殊連装拡散ビームガン《アリエス》を起動しました。

そのまま、異様に細い三連装の銃身それぞれからビームがばらまかれます。それが二機分。もはやそれだけで簡単な弾幕になっていました。最も、射程距離に至っては近接用の槍とかと比較するようなレベルでした。

しかし、今回に至っては——放たれたビーム弾全ての色が、白くなっていました。影内君が、私へと適用する前に筈の方にも手を回していたのです。

「この距離……串刺しにしてあげますよ」

「んな事させるわけないでしょ！」

至近距離での攻防になりかけていたところに、第三者からの声。鈴が衝撃砲であの槍を持った手を打ち抜きながら、『双天牙月』で切りかかりました。

やむを得ず回避しようとした『棘刑』でしたが、筈がそれを許しません。そのまま鈴によってあの槍が打ち払われます。

そして、『消滅毒』によって変質した『アリエス』の弾丸が『棘刑』へと殺到しました。

「……ここまで、とは！」

最終的に多量の弾丸を食らった『棘刑』は、なぜかその顔に妙に艶のある笑みを浮かべつつ撤退していきます。

一方、『福音』も既にエネルギー砲の放出が終わり、影内君によって抑え込まれています、すぐにその場へと向かうと、残っていた『消滅毒』で変質した『春雷』を用いて再度絶対防御を引き出し、強制的に停止させます。

残った敵は——あの、巨獣だけ。

Side
???

「……」

緊急の要請に、だけど本当にただの偶然で対応できた。『全竜戦』の下見という名目で現地であるアティスマータに入っていたら、この要

請があつた。

現在の一応の本国であるトルキメス連邦にも話をつける算段はあつたのでそのまま来た。

何 よ り、 自分を救つてくれた友達 か ら
自分にやや近い側面を持つた友達夏の救援、それも内容が内容なだけに手出しできるレベルの機竜使いが七竜騎聖かそれに近いレベルの実力ある機竜ドラッグナイト使いでなければ手出しすら難しいという状況。となれば拒否する理由は無かつた。

「……あれは」

そうしてできる限りの速度で飛行しているところに見かけた、三体の《ガーゴイル》の影。

「《風の威光》」

《ヴリトラ》の神装を起動し、一気に近づく。その勢いのまま手に持った《機竜牙剣》を振り抜き一閃。まず一体を仕留める。

さらに追撃。迫ってきた二体の内一体の行動を《風の威光》を用いて止め、その隙にもう一体の背後に回り込む。

ガーゴイルも反転して攻撃しようとしてきたけど、もう遅い。

「……さよなら」

《機竜息砲》を構え、振り向いた直後のガーゴイルの頭部へと向けて接射。これで二体目を倒した。

最後の一体も、《風の威光》を此方へと加速するように変える。そのまま、その勢いを全く殺さずに《機竜牙剣》で切り捨てる。

「……早く、支援に行かないと……ん？」

足止めにもなっていないような幻神獣の襲撃から気持ちを切り替えて支援へと急ごうとしたその時だった。

私が、あの光景を目撃したのは。

S i d e 真耶

「織斑先生！」

通信が雑音だらけになって《福音》迎撃に向かった面々の様子がない、そんな中でその事態は起こった。

「ちーちゃん!」

「織斑先生!」

旅館に待機している生徒から、例の化け物が接近しているとの情報
が!」

「ツ!!」

最悪と言える情報に、さしもの織斑先生も張り詰めた表情になりました。

ですが、すぐに何かを決断したようでした。

「束、アレは!?!」

「飛行系の機能が未調整! それと、装甲も未完成部分がある!」

「使えればいい!」

《打鉄》よりはマシだ!」

「OK! 《舞桜》、出すよ!」

それだけのやり取りの後、篠ノ之博士がどこからかISコアを取り
出しました。

織斑先生は躊躇う事無くそのコアをふんだくる様に掴むと、そのま
ま外に向かつて走り出しました。

「山田先生、《福音》撃墜の指揮を頼む!」

「織斑先生、何を!?!」

いくら迎撃しないといけない敵が来たとは言っても、現場責任者が
直接戦闘に加わるのは当然、問題がありません。

さすがに止めようとはしましたが――

「すぐに済ませる!」

――そう一方的に言い捨てると、全力で旅館の外へと走って行っ
てしまいました。

圧倒的だった三騎の敵、内一騎であった《福音》を再度の行動不能に、もう一騎であったあの『棘刑』もなんとか撤退まで追い込み、残るはあの——巨獣、ただ一騎だけだった。

「影内君……」

『全員、あの白いISSを援護しろ！』

どのみち、今のままだとあの化け物だけは撤退させることも出来ない！』

「各機、あの白いISSを援護！」

なんでもいい、とにかく当てなさい！」

ボーデヴィツヒがすぐさまISS学園から出撃していた面々に指示を出し、一斉に各々の攻撃が再開される。同時に、自衛隊のISS部隊も攻撃が再開される。

ドドドドドドン！

だが、これだけの砲火でも碌な牽制になっていない。そのほぼ全てがあの手腕に防がれる始末だった。しかも、大本の触腕の数が異常に多いため、それだけ使わせて尚、影内への攻撃の手もさほど緩まっていない。

（影内があれだけの攻撃を叩き込んで尚、これほどの力を残しているのか……！）

ドンッ！

そんなことを考えた直後、影内が駆る《アスデীগ》が上空へと逃れた。だが、あの化け物も逃がす気がないのか触腕を伸ばし、捕らえようとする。

『……裂光覇』

呟くようにその言葉が紡がれた直後、二振りの《タスクブレード竜毒牙剣》を迫りくる触腕の大群へと向ける。

向けられた《竜毒牙剣》の切っ先から放たれたのは、無数の光波と光弾。雨霰と降り注ぐ光の刃と弾丸は、白く輝くその光を以ってあの触腕を食い荒らしていく。

やがて、あの触腕が届かない高度まで上昇すると、《竜毒牙剣》を一刀仕舞う。

『落鋼刃』

そのまま、光刃がさらに巨大化した《竜毒牙剣》を真下へと向ける。直後——背面の推進器を全力で吹かせたのか、狂気的なまでの加速を得て真下へと向かう。

その切っ先を、あの化け物の大本へと向けながら。

「——!! 各機、全力で援護!」

その意図を読み取ったらしいボーデヴィツヒが、声を張り上げた。言われずとも、各々がすでに得物を取って少しでも援護しようと砲撃していた。自衛隊IS部隊に至ってはもはや何も言わずにただ真剣な目で黙々と砲撃支援を開始している。

だが、それでも影内の刃が届くかどうかは賭けだった。それほどに分厚い防御を持っており、同時に水中へと逃げられでもすればその時点でどうしようもなくなる。

(届いてくれ……!)

半ば祈るような気持ちで、それでもデユノアから借りた重火器で支援攻撃を続けていく。

だが、その場にいる人間の気持ちをあざ笑うかのように、あの巨獣は潜水しようとして——

『《風の威光》』

——出来なかつた。声のような何かが響くと同時に、あの巨獣が縫い付けられたようにその場で動きを止める。

『……動きを止める。あなたは、切り裂いて。』

——私の、友達』

『——委細、了解しました』

影内と、新たに出てきた鬱金色の機体が交わしたやり取りはそれだけ。だが、それだけでも十分だったのだろう。

もはや白い流星と化した影内駆る《アスディーク》が、その手に持っている剣の切っ先をあの大巨獣へとまっすぐに向けている。

その進むべき道にいる触腕は、あの鬱金色の機体が放つ光弾が的確に逸らしていく。

ザガジユウウウウウ!!

異常に大きな音を立てて、あの刃が巨獣の切り裂いて沈んでいく。巨獣の醜悪にも聞こえる叫びが辺り一面に木霊する。

——ヴウウアアアアアア……

その叫びも徐々に小さくなって行き、巨獣の目から活力が失われていく。

それを確認した影内は、光刃を消し、あの異様な状態となっていた《アスデীগ》も通常の状態にまで戻してから、《竜毒牙剣》を引き抜いた。

だが、そこから動く気配がない。むしろ、力が抜けており

ゴツ

そんな状況下で、一番最初に動いたのはあの鬱金色の機体だった。すぐに影内の元までたどり着くとその体を機体ごと持ち上げ、そのまま影内とともに離脱していく。

『この子は、私が連れて行くから』

一方的に言い捨てると、そのままの姿勢ではありえない速度を出しながら離脱していく。私を含めた何人かが追おうとしたけれど、後の祭りだった。

『……こつち側の協力者さん、聞こえる?』

「……!?」

ですが、離脱されたと思った直後にあの鬱金色の機体に乗っていた褐色肌の人物と思しき声が聞こえてきた。

『聞こえているなら、早く医療施設を手配して。』

早くしないと、手遅れになる——!』

その一言に、私と、簪はそろって動悸が激しくなっていた。

「ど、どういう……」

『あの状態は、身体への負荷を無視しているから実現できる。今の影内は、その負荷が全部跳ね返ってきている。内蔵とか、骨とか、多分無事じゃない。』

死なせたくないなら、早く医療機関を手配して』

その言葉に、私達の背中中は凍り付いた。

S i d e 千冬

「《舞桜》、起動！」

それだけ言い捨て、未完成のISを起動する。確かに言っていた通り、装甲が所々張られておらずに内部が剥き出しになっており、飛行系の機能も使用しようとするエラーが表示されていた。

(だが、まあ……やれないことは、無い)

現状使える得物を確認し、覚悟を決める。

ドツ！

飛行はできないが、PIC等々の移動に関する機能自体は十分に動いている、故に、地上に限定すれば踏み込み等の動作を十分に強化してくれる。

「《雪片参型》！」

右手に現状唯一の獲物呼び出し、居合の構えをとる。狙うは最速の一閃。

ギイイイイン！

「チイッ！」

だが、さすがにただの斬撃では大した傷にならない。無傷とは言わないが、有効打とは言い難かった。

「束！」

「オツケーだよ、ちーちゃん！」

《白姫》、起動！」

束が用意していたもう一機のIS、私の《舞桜》と対を成す支援特化機体——

「《白套》！」

——《白姫》。その展開装甲《白套》が内蔵された砲口を向け、多量のエネルギー弾を吐き出す。

ガガガガギユギユギユウウウ！

とは言っても、完成していないその機体では限界があった。故に、早々に次の一手を打つ。同時に、それで終わらせにかかる。

「《無明》、《極光》、射出！」

ガガシユン　ヒュツ！　ヒュオ！

《白姫》最大の特徴にして大本命と言える二種のビットが射出される。

内一種、《無明》。円形の一部が切り取られた、視力検査で見るとな形をしたそれは待機状態ではISの二の腕の二倍ほどの直径を持つている。それが超速で飛んで行き、例の化け物の腕をその円の内部へと捉える。

もう一種のビット、《極光》。これは、私の《舞桜》のリアスカートに当たる部分に接続された。

そして――

「起動！」

――あの化け物の腕を捕らえている《無明》の内部が歪む。同時に、私の《舞桜》と《極光》のエネルギーバイパスが接続された。

《無明》、その機能は内向きの疑似重力の発生。円形の中心方向へとPIC等にも使われている慣性制御を応用して発生させるその目的は、それ単体での攻撃ではなく敵の拘束。腕をその内部へと捕らえられたあの化け物は、そこから抜け出せなくなっていた。

「《絢爛舞踏・神無月》、行くよ！」

さらに、束が《白姫》の単一使用能力ワンオフ・アビリティ《絢爛舞踏・神無月》を起動した。瞬間、束の《白姫》が白く発光する粒子に包まれる。

そして、その輝くは《極光》を通して私の《舞桜》にも届いていた。同時に、エネルギーゲインが全快まで回復する。

《白姫》の単一使用能力《絢爛舞踏・神無月》は、本来は箒へと渡される予定だった《紅椿》の単一使用能力をさらに一段階引き上げたような能力で、エネルギーの増幅能力の他に、本来ならIS同士が直接接触しなければ行えないはずのエネルギーの譲渡を、ビットなどの遠隔操作型子機を介しても行えるように改良されている。

その多量のエネルギーの支援を受け、私も《舞桜》の単一使用能力を起動する。

「《零落白夜・羅刹》！」

——《零落白夜・羅刹》。通常の《零落白夜》は対エネルギー消滅能力であったのに対し、この《零落白夜。羅刹》は対エネルギー、対物理能力としても使える。厳密には、《零落白夜》の能力に加えて、そのエネルギー全てを転用して超高熱の光刃としての使用を可能とする。その光刃で、あの化け物を思いっきり切りつける。

「ツアアアアアア！」

そのまま、刃を徐々に徐々にあの黒い体躯へと沈めて行く——。

S i d e 簪

余りにも大きすぎる、だけどそんな中にも不幸中の幸いと言えるだけの傷跡を引きづりながら、私たちは帰還した。

途中から別れざるを得ない事態となった影内君と、その立場上の上官に当たるといふ褐色の肌の人——本人は友人だと言っていた——が既にハイパーセンサーを使っても確認できない距離まで離れてから、少し。

最初は既に終わったと思っていたけど、ある意味で終わっていないかった。

帰還した旅館には、例の有翼で硬質な体の黒い化け物の死体が一つ、横たわっていました。

その近くには、未完成と思われるISを纏った織斑先生と、同じく未完成と思われるISを纏った篠ノ之博士、そして山田先生の三人。現場責任者とその補佐、そして重要人物だけ一応は部外者。そういう三人。

——その三人が、多くの生徒と、帰還した教師部隊に囲まれて賞賛されていた。

(……何なんだろう)

普通に考えれば喜ばしい事の筈だった。

条件は厳しいけど、影内君と言う戦力に依存しないで私達の知るISであるの化け物を倒せる、それは本来喜ばしいことの筈。

——なのに、全く良い感情が湧いてこない。

(……詳しいことはまだ分からないから、それが原因かな)

内容が分からないのであれば、何も言う事は出来ない。理性の上ではそう結論付けていた。

(……影内君)

そして、同時に思ってしまった。

多くの人に称賛され、陽の光の当たる場所に立つ姉。陽の光の当たらない場所で、己の信じた人のために、或いは守るべき人のために戦う弟。

(……どっちが、正しいんだろう)

どうしても称賛できなかった、感情の上での理由。

それは多分、今回の戦闘における最大の功労者にして最も大きな傷を負ったある人の存在を知っているから。

(どうか……無事でいて……)

正体を隠しているが故にこの場に現れる事の無い一人の存在。

その人の安否が、私達の心に深い影を落としていた。

第六章（9）：光と陰と（前編）

Side 楯無

箒ちゃんから貰った連絡は、私の背筋を凍りつかせるには十分だった。

「影内君が、重症……!?!」

報告された内容は衝撃的であり、あまりにも重大な意味を含んでいた。

けれど、それを噛みしめているような余裕なんてない。

「虚ちゃん、すぐに即時対応可能な病院をリストアップ、その中から最大限の設備と人材を揃えた病院を選定して連絡して!」

「もう始めています!」

箒ちゃんや箒ちゃんたちは現在旅館。迂闊に派手な行動がとれない以上、それは裏方を引き受けた私たちの仕事になる。

けれど、さすがに事が事なだけに大変なことになっていた。

「お嬢様、連絡取れました!」

「影内さんの搬送始めます!」

「お願い! それと、家に連絡して警備も固めて!」

「はい!」

とにかく指示を出しつつ、私も必要に応じてやることやっていく。

（影内君がやられた……一体、何と戦ったっていうの!）

その中で引つかかっていた疑問。

そのの正体と、この後にもたらされるある二機の情報は、状況がいかに悪いかを物語るには十分過ぎていた。

Side 簪

「……教官、帰還しました!」

ボーデヴィツヒさんが僅かに目を伏せながら、織斑先生と篠ノ之博士、山田先生を取り巻いている生徒達をかき分けるようにして前に出

ます。

さすがにここまですればある程度は察したのか、生徒達も道や場所を空けてくれます。ですが、その顔には未だに覚めない興奮が宿っているようでした。

(……結局、何だったのかな)

今の今までやってきた戦闘などここにはまるで無い。そんな錯覚さえ覚えそうになって、歯を食い縛って耐えた。

賞賛が欲しかったわけじゃない。必要だった、だからやった。ただ、それだけの筈だと、自分に言い聞かせて。

「お前たち、無事だったか！」

それさえ把握していなかったのか。怒鳴りそうになって慌てて自制した。

「……とりあえず、臨時指令室の方で報告したいのですが、宜しいでしょうか？」

「ああ、無論だ。」

よくやってくれたな」

私たちの帰還に対してなのか、はたまた自分自身の手で討伐したという事実に対してなのか、その両方なのか。織斑先生は満足気な笑みを浮かべながら私たちを先導しました。

「皆さん、お疲れ様でした」

その場にいた山田先生も同じように先導してくれます。此方を振り向いたうえで労いの言葉をかけてくれたその人の顔には、どこか私たちの帰還とは違う事への喜色が見られるような気さえしてしまいました。

「ですが、これからは皆さんに頼らなければいけないような事態も減っていくことでしょう。」

ようやく、私達でもあの化け物に対抗できるかもしれないですし、それだけの能力があれば皆さんに暴走ISの相手なんてしてもらおうような事態にだって……」

山田先生に、悪意なんてないことはよくわかっている。私達に戦わせた責任を感じてのセリフであることも想像するくらいはできる。

けれど、どうしても我慢できなくなりそうになった。

「……簪」

思わず叫び声を上げそうになった私の握りしめた手を、そっと包み込むように握ってくれた人がいた。

簪だった。

「……耐えろ。」

今は、まだ駄目だ……」

「……………ッ！」

大歓声とまでは言わないにしろ、多くの生徒が何かしら騒いでいる中でそんな事をすればどうなるか。少なくとも今回の一軒に関する妙な噂が飛び交うだろうし、そうでなくても影内君を含めた面々の今後に厄介事が増えかねない。

だから、今は黙って付いていく。

まだ、その時じゃないから。

「では、報告させていただきます」

臨時作戦室でボーデヴィツヒさんが話し始めました。

「まず、我々は作戦通り《福音》と接敵、交戦に入りました。

その後、暫くの間は横槍もなく作戦通りに状況は推移、さらに自衛隊所属のIS部隊も増援に駆けつけてくれたことも手伝い、一度は《福音》の無力化に成功しました」

たったここまでしか話していないのに、織斑先生と山田先生、篠ノ之博士は浮足立った様子を見せた。と言うか、先生方はとにかく篠ノ之博士は色んな意味で居ていいんだろうかと素で考えてしまう。

そんな考えを一旦止めて横を見れば、ボーデヴィツヒさんと同じように報告のために座って待機している一緒に出撃した専用気持ちの友人たちが目に入った。全員、気持ち程度に俯き加減になっている。

「その後、任務完了の報告をして一度は帰還しようと思いました」

「ああ、そこまでは私たちの方でも確認している。」

その後、通信不能になったが……何があった？」

織斑先生が私達を見据えながら、普段と変わらない様子で問うてきた。

ボーデヴィツヒさんも、それまでと同じ様子で答えていく。

「はい。その時に、所属不明機が現れました。」

此方が何かをする前に攻撃を仕掛けてきており、敵意をもったの襲撃であったことは明確です」

淡々と答えられた、その内容。それに、その場が浮足立つ。特に山田先生の驚き様は凄かった。

「あ、新しい敵ですか!？」

「はい。」

その者は『亡国六刑士フアントム・サーヴァンツの棘刑きよくけい』と名乗っています。機体の特徴としては四つ足とロボットアームのような形式で動く腕部、そして異様に細い槍が特徴のISです」

IS、という単語にその場が凍り付いた。

「IS……ですって……!？」

「強奪か、どっかの差し金か……どこの馬鹿だよ……!？」

「……待て。」

そのISの特徴は、まるで……」

織斑先生が何かに気付いたような表情になりましたが、その先を言う前にボーデヴィツヒさんが続きの報告をしていました。

ある意味で追加の敵よりも問題となる敵のことについて。

「さらに、その『棘刑』がその後、不可解な行動を取りました」

「その行動の内容は？」

織斑先生はそれまで問おうとしていた質問を飲み込んだようで、ボーデヴィツヒさんの報告の詳細を求めていました。

「はい。自身の所持していた槍を真下へと向けて投擲、海中へと投げ入れました。」

その後、例の化け物の上位種と思われる巨大な個体が出現しています」

「……上位種、だと？」

「……ど、どうして上位種だと思っただんですか？」

織斑先生と山田先生がそれぞれに聞いてくる。

二人とも信じがたいというか、そうであって欲しくないと言う願望のようなものが見え隠れしていたと思う。

「はい。まず、これまでに出現した個体よりも種々の能力が圧倒的に高かったです。筋力等の生物としての能力だけで触腕の射程内に捉えた自衛隊のISを拘束、締め上げることで気絶寸前にまで追い込んでいます。」

また、あの『白い機体』の攻撃の直撃を受けても数分としないうちにほぼ再生していたことから、自己治癒能力も常軌を逸するものがあると推測されます」
淡々としながら放たれた報告に、しかし食いつく所が違う人がいた。

織斑先生である。

「待て。あの白い機体がいたのか？」

「はい。途中からですが、先ほど述べた『棘刑』と化け物と戦っており、此方にも手を貸してくれた形になります。」

最終的には、この機体への増援と思われる未確認機体と共に離脱しています」

そこで、織斑先生がやや渋面になりながらボーデヴィツヒさんに問いかけました。

「……追えなかったのか？」

「残念ながら。その時の私達と自衛隊機は既にエネルギーが枯渇寸前であり、弾薬もそれ以前の戦闘ですでに尽きかけていましたので、断念せざるを得ませんでした」

それまでと大きく表情は変えていませんが、心なしか僅かな苛立ちを感じます。

「そうか。」

……待て、だったら増援として出てきたと思われる機体の特徴は？」

そこで一旦、影内君の《アスディーク》に関する話は終わったかに

思われましたが、織斑先生はなおもそこを気にしているようでした。「鬱金色の機体で、形状は装甲等の違いによりあまり似ていませんが特徴は先の白い機体と酷似していました」「そうか。分かった」

そこまで言うのと、ボーデヴィツヒさんは言葉を切りました。織斑先生もさすがにそこで《アステイীগ》に関する話は終わりにしたみたいです。

「では、話を戻させていただきます。」

先の鬱金色の機体よりも先行して到着していた白い機体が事実上、例の化け物の上位種と思われる巨獣を相手していました。我々はその間、『棘刑』と名乗った正体不明のIS乗りと戦闘していました。その間に『棘刑』が停止していた《銀の福音》へと『何か』を銃弾として打ち込みました」

「何か、とは何だ？」

織斑先生が訝しみながらもその詳細を求めてきましたが、あの現象は何が何だか分からないため報告のしようがありません。

それはボーデヴィツヒさんも同じだったようで、困惑しながらも結局は『何が起こったか』だけを報告することにしたようでした。

「正体は現時点では不明です。」

ですが、《銀の福音》はそれを撃ち込まれた瞬間に再度起動し、そのまま暴走状態に陥っています」

「……再起動し、直後に暴走したのか？」

「はい。」

最終的には再度、SEを削り切って再停止させるまで暴走し続けています」

そこまで聞いた段階で、織斑先生は完全に頭を抱えています。

「……つまり、正体不明の敵は何らかの外的な手段を用いてISに干渉できるという事か。」

それも、再起動と暴走と言う正規の手段でもどうやればいいのか分からないようなことを」

織斑先生は頭を抱えたまま、簡潔に内容を纏めていた。その顔には

苦悩が見てとれたけど、今回ばかりはその苦悩に対してなにも思えない。

「内容はわかった。」

今はお前たちも疲れているだろう。各々の部屋で、ゆっくりとくつろいでくれ」

最後の最後、取ってつけたような感じでそれだけ言うやや疲れた表情で頭を抱え始めた。

私達としては、全くそんな気にならなかった。

S i d e ラウラ

師匠が相打ちに近い形に倒れた。これは私にとって衝撃以外のなんでもなかった。

(……あの巨獣。

私達だけではやられていた。しかも、師匠ですら死力を尽くしてお互角。最後の鬱金色の機体の援護がなければ逃がしていた可能性もあることを考えれば、とても楽観視は出来ないな……)

後でこれらの事実を本国にも伝えるべきか。箝口令が敷かれているが、それでも事が事だけに軍人としては報告しなければいけないのではないか、という考えが抜けなかった。

ヴー

「ん？」

そうして悩んでいる直後に、秘匿回線のコールが鳴った。

『隊長、今お時間宜しいでしょうか?』

通信の相手は『黒^{シユヴァアルツェ・ハーゼ}兔^{ツェ}隊』の副官でもあるクラリツサだった。

「ああ、問題無い。」

しかし、秘匿回線を使うという事は何か緊急の事態か?」

定期報告の時間でもない以上、無闇にこの回線を使うというのは考えにくい。故に、何か緊急の事態か早急にしなければいけない報告の二択ではないかというのは簡単に思い当たることだった。

『ハ！ 例の人物に関して、追加の調査報告があります』

「例の……分かった。」

少し待ってくれ、場所を変えたい」

『了解しました』

クラリツサに断りを入れ、人影の無い場所を探していく。

ほどなくして、旅館の一室で物置代わりに使われている場所にこっそりと入ることができた。入る前に周囲に人影がないことを確認し、また、監視カメラなども位置を全て調べた後で報告を受け取った。

「それで、内容は？」

『例の、ウェイルと言う人物と、VTシステムに関することです』

その一言で、体に緊張が走ったことが実感できた。

『まず、最初に申し上げますが……。』

これから話すことは、あまり現実味が無いことになります』

「何？」

言われた内容があまりにも突拍子もなく、聞き返した。

それに対する回答はこれからの回答で順を追って語るとのことです、私は報告を静かに聞くことにした。

『まず、隊長の《シュヴァルツェア・レーゲン》の記録ログを徹底的に洗い直した結果、VTシステムを搭載されていた時にコピーを取られた形跡が発見されました』

「……そうか」

この報告に私自身も大きな衝撃を受けたが、同時にそうでもなければ状況の説明がつかない。故に、ここまでは素直に受け取ることができた。

だが、現実味が無い、の言葉の意味を私が理解するのはこの後だった。

『ですが、その……妙なんです。』

もし、その時にコピーが取られていたと仮定した場合、そのための機材にも同時刻にそれが行われたという記録が残るはずです。ですが、旧研究所でそれを行える機材の記録にはそれが残っていないからです』

「……どういう事だ」

『つまり……ウエイルという人物は、機材を使っていないか、携行できるレベルの機材でVTシステムのコピー作業を行った、ということになります』

「そんな事が可能なのか？」

もしこれを行える場合、ウエイルと言う人物は突出した技術力を持つ個人と言うことになる。そうであって欲しくないという思いも、少なからず存在していた。

『現在の我が軍の技術ではおそらく不可能です。時間的な問題を鑑みても、状況的なものを鑑みても可能性はありません。』

さらに、もっと不可思議なことがあります』

「まだ、何かあるのか？」

これ以上にまだ何かあるのか。さらなる最悪がもたらされる予感に、努めて平静を装った。

『その……当時の《シユヴァルツェア・レーゲン》の検査記録なのですが、奇妙なのです。』

当時、VTシステムがコピーされていた場合、《シユヴァルツェア・レーゲン》の検査記録にもそれに類する記録が残っているはずですが、それに関連した資料には何一つ残っていませんでした。しかも、これはVTシステムのデータ破棄の際に監視・監査を担当した当時の国連の資料でも同様でした』

「……ありえるのか、そんな事が」

確かに、今までの報告が全て真実なら最初に言われた通り現実味に欠けている。

だが、それでも現実にそういう結果が出てしまっているのでは受け入れるしかない。

(どうなっているんだ……?)

それでも、私の心の中には拭い難い不安が巣食っていた。

「なにコレ……ふざけてるの?」

送られてきたとある二機のISのスペック表を見て、頭を抱えた。確かに、上げた戦果は目覚ましいものがある。だが、そのための条件が余りにも厳しい。事実上、実戦での運用には向いていない試作機と言わざるを得ない。しかも、この方向性では今後の発展も望めないレベルで厳しい。

「完全に設計余剰と電子処理機能を使い尽くした設計……発展性はやはや《無段階移行》に完全に依存、って……」

頭が痛くなってくる仕様だった。

拡張領域^{バスターレット}を全て使用しているので後付装備^{イコライザー}が一切付けられないとかそんな領域じゃない。もはや人為的な改修の一切を許さないほど設計に全くと言って余剰が無いという意味なのだ。たとえるなら、これまでの既存のISは外縁しかないパズルだろうか。内部はこれから作っていくから、いくらでも変えられる。半面、この二機は最初からパズルのすべてのピースが埋まっている。もはや変えようが無い。そして、操作性については最悪の一言。《舞桜》に至っては《白式》よりも悪化しているかもしれない。

それが何を意味するか、考えたくない。

「……短期間での発展性は皆無。その上で操作性は最悪の一言。」

仮に同仕様の機体を生産したとしても、扱える人が居ない……」

「……虚ちゃん、悲しくなるから言わないで……」

私の言葉に、今度こそ虚ちゃんは私の方をまっすぐに向いた。

「その悲しさは、どんな意味ですか?」

その目を見て、逃れられないな、と思った。

でも、虚ちゃんて良かったとも思う。虚ちゃん以外にこんな弱音言えない。

「……今までのことが、裏目に出過ぎてのことよ。」

バックアップ諸々やるって言って取引した手前、この体たらくとはね……」

正直、世界にそれまで碌に存在していなかった第四世代IS――

《白式》と籌ちゃんからの報告にあった《紅椿》は事実上稼働時間が0のために除く——が存在しているという事実は、普通に考えればそれだけでも各国が喉から手が出るほど欲しい物。故に、形式的にはあるけれどこの学園に所属することになったらしい。良くも悪くも、この学園は中立地帯を謳っているから。

これだけでも否応無しに注目を集める要因になる上に、特に篠ノ之博士は色々な意味で狙われている都合上この学園に様々な篠ノ之博士個人への報復行為が来る危険性も跳ね上がる。何より、ISと篠ノ之博士をセットで嫌っている人も少なくはないのでISもさほど抑止力足りえない。この学園の危機管理体制も近年の事件でようやくまともになってきたくらいで、銃火器の入手が民間レベルでは厳しい日本以外から来る手段が乏しいために何とかなってきた側面が無い訳でもないのだし。

「今後は学園が狙われることも増えるだろうし、警備もさらに嚴重にしないとイケませんね……」

「それだけで済めばマシよ。」

さっきの対バケモノ定例会議の時、どんな言葉が出てきたと思う？」

影内君も関わってくる対バケモノに置いても頭の痛い問題が出てくる。これまでは録に対抗できる戦力が無かったがために全員で共同して時間稼ぎなどをして避難誘導などを迅速に行うという方向だったから、影内君が到着するまでの時間を稼げた。加えて言えば、本格的な戦闘はその後になるが、それは人的被害を抑えることに繋がっている側面もあった。

「存じ上げております。」

織斑先生と篠ノ之博士に丸投げしようと言う意見ですよね？」

「当たらずとも遠からず、かしら……」

けれど、これからはそうも行かない。人的被害と設備被害を最小限に抑えるためにも織斑先生と篠ノ之博士のISで速攻で殲滅しようという意見が出てきている。

正直、フランスでの一件やこれまで出現した際の個体数、そしてあ

の二機の撃墜率を見るととても現実的な手段には思えない。

「……これまでの戦闘データから考えれば、今後も影内さん達を頼らざるを得ないと考えますが……」

「それも、今回の一件で分からなくなってる。」

影内くんの負傷もそうだけど、何より彼らがあの二機をどう見るかがわからない」

この二機は共同でなければその性能を生かしきれない。と言うより、単機での運用は性能の半分も引き出せない構成になっている。そんな二機で、しかも機能を削る形でしか追加機能を実装できないのは実用性の一点に関してだけ見ればあまりにも不合理に過ぎる代物だった。

勿論、この二機しか手段がないのならそれを最大限に生かしつつ被害を最小限に抑える手段を考えるだろうし、その理屈は私だって理解できる。だから、あの二機に一定の役割を持たせること自体は良い。

問題は、明らかに手段が最適化されていないこと。つまり、あの二機に過剰な期待を持っている人があまりにも多い。

そして、織斑^{世界最強}先生と篠^天ノ之博士^炎の二名が、万が一にも負けるような事態があれば。その後起こる惨劇は、想像したくなかった。

——— だけど、この場における最大の問題はおそらくこの一点。

「……今更、影内さんが《アスデীগ》の搭乗者だと言ったところで、大きな効果は」

「無いわね。」

最悪、逆効果になりかねないわ」

そう、この点。

私達は影内君たちの活動を隠蔽してきたけれど、このタイミングでのこれは今後の彼らの活動の妨げにもなりかねないうえ、仮に公表したところで先日のフランスでの一件のことが露呈してしまえば大混乱では済まなくなる可能性もある。

さらに言えば、それを抜きにしたところで影内君の表向きの立場は一生徒。現状ではある程度裁量を利かせたところで良くて教師部隊の指揮下に入るのが関の山で、今までのように制約がある代わりに

フットワークの軽い動きは望めなくなる。けれど、初動対応が遅れたために致命的な事態になったという事例は古今東西、珍しい物でも無い。

——つまり、被害の拡大が起こる可能性が高い。

しかも、今回影内君は致命的な負傷を負った。

「もし、あの二機と今回の影内君の怪我を理由に彼らが手を引くと言ったら……」

「……何としてでも、引き留めるわよ。」

今はまだ、私達だけであの化け物をどうこう出来る実力は私達には無い」

頭を抱えながら、それだけは宣言しておく。

正直、此方の立場はハッキリ言って弱い。戦力的優位は彼らにある上、バックアップ云々に関しても今回の一件での不備——でつち上げ同然の物であったとしても——を指摘される可能性は非常に高く、しかも機体情報の流出に関したところでもさほど高い成果が出ていない。というか後回しにしてしまっている。

——彼らが手を引く理由は、実のところ十分に存在している。

「何だって、ここう……!」

悪いほうに悪いほうに進むのよ……!!」

頭を抱えて、呻くような言葉を零すしか今の私にはできなかった。

第六章（10）：光と陰と（後編）

S i d e アイリ

「一夏！」

更識さんから連絡を受け、一夏が搬送されたという病院へとすぐに向かいました。時刻は深夜もいいところでしたが、そんなことはどうでもいいです。

ピー ピー

私たちの世界では見たことも無い機械から伸びた管のようなものとその先についた口当て、その内側が僅かばかりですが規則的に曇ることから、息をしているという事だけはわかりました。

未だ意識が戻っていない状態であるため、油断はできません。

「二応、一命は取り留めたわ。でも、絶対安静よ。」

今は容態が安定しているけど、何時急変するかも分からない位、酷い状態だつて……」

音もなく近づき、私に一夏の容態を説明してくれたのは更識さんだった。傍らには、従者の虚さんが控えていた。

「……アレを使ったと聞いた時から、一夏の容態については覚悟は出来ています。」

ですが、医療機関関係のことは」

「勿論、私達の方で手配させてもらうわ。」

彼を失うのは私達としても避けなければいけないしね」

更識さんの言葉に、とりあえず一安心しました。こちらの世界の医療機関どころか医療制度さえほぼ知らない私たちでは、最悪、無理をしても私たちの世界で発掘された遺跡（レイン）の宝物の中にあつた医療ポッドに頼る以外の方法がなくなりますから。

ですが、これだけで安心できないのも事実です。

「……医療機関の手配、感謝します。」

ですが、もう一つ。要望を通させてもらってもいいでしょうか？」

「内容によるわ」

更識さんの即答に、私も気を引き締めます。ここで対応を間違えれ

ば、收拾がつかなくなりかねないと思ったためです。

「此方から、彼がある程度動けるようになるまで護衛をつけても構わないですね?」

「……言っておくけど、私たちの方からも人は出すわよ?」

「此方の言葉で言うのと、念には念を、です」

何とか平静を装いつつ、それだけ答えます。一方、更識さんたちも頷くと「分かったわ」とだけ答えます。

「そうね……そのことと、今後のことについて。」

後で一回、話し合いの場を設けてくれないかしら。もちろん、それまでの影内君の身の安全については今この場で決めたことを含んでもらっても構わないわよ」

更識さんがいつも通りを装っていますが、その顔には本当に僅かながら緊張の様子が見て取れます。

(……もしかしたら、向こうにとっても今回の事態は痛手なのかもしれませんね)

終焉神獣ラグナレックのことを向こうは知らないのだと思いますが、それでもあの時に現れた敵を脅威として認識している、と言う事でしょうか。

正直なところ、幻神獣を倒しうるISの存在と言うものが確認された以上は私達との契約自体がお払い箱になるかもしれないと考えていた手前、これは嬉しい誤算です。

(上手くやれば、一夏の治療も思っていた以上に良い条件を付けてもらえるかもしれませんね……)

ここは、申し訳ありませんが全力で交渉に当たらせてもらいましうか)

この世界での活動基盤が皆無である私たちにとって、彼女らの協力は現状不可欠なものです。ましてや、一夏を医療機関に任せざるを得ない状況では尚更でした。

「……暫くは私がいるから。」

戦闘関係のことは、私に言って。できる限り対応する」

一夏の支援に入り、そしてこの施設まで運んでくれたソフィスさんが不意に言ってくれました。今この場でのこの発言はありがたいで

す。

「……分かったわ。

宜しくお願いね」

更識さんは短く、ソフィスさんのほうを見ながら言いました。

そのあと、ソフィスさんはそのまま一夏の護衛兼この世界での仮実働要員としてこの場で待機、私も看病のためしばらく残ることにしました。更識さんたちは手配などのためこの場を後にしました。

Side ウェイル

資料として撮っておいた映像を確認していく最中、私はずっと上機嫌だった。

「さてさて、中々な結果になったね〜♪」

資料の中に映っていたのは、《イミテイト・ポセイドン》とあの新王国の機竜使いの戦闘映像。中々の戦闘力に加えて、再生能力もあの白い神装機竜《アステイグ》の神装《消滅毒》アナイアレイト・ヴェノムの効力をほぼ帳消しにできているなど、初の実戦投入作品としては中々の出来と言ってもいいだろう。

しかし、不満点が無い訳でもない。

「ふうむ……しかし、まだまだ改良点はありそうだなあ」

今回は海と言う緊急回避エリアがあったために何度も攻撃を受けない状況へと持っていき、その間に体勢を立て直せた。

だが、最後。あの《七竜騎聖》によって動きを止められた《イミテイト・ポセイドン》は、そのまま《アステイグ》の一刀に破られることになった。確かに、内部に《グラン・フォース》などを持つておらず、正式な培養過程などの資料は殆ど手に入らなかったために、ラグナレク終焉神獣《ポセイドン》の能力を正確に再現できたとは言い難い。だが、それでもああも簡単にやられてしまうようでは満足な出来とは言えない。

相対した《アステイグ》の機竜使いも途中、ドラグナイト異常な使い方をして

いたために通常では考えられない能力を発揮していた。それは紛れもない事実。だが、それでももう少し抗いえなければ。

「ふうむ……。そうになると、なあ……………」

巨大培養ポッドの中にいる、同じように育てている残り三体の《イミテイト・ポセイドン》を見つめながら、物思いにふける。何らかの改良は必要だろうし、この子たちの出番はまだまだ先になりそうだ。

あるいは、《グラン・フォース》の代わりに埋め込んだ、制御装置も兼ねているアレ。気乗りはしないが、そつちを改良することも考えておかねばならないだろうか。

「オイ」

そうこうと改良案を考えていると、後ろからあの蜘蛛女が話しかけてきた。

「ふむ、何用かね？」

さしたる興味もなかったが、これも一時の付き合いだ。付き合いとうしよう。

「お前の作ったアレ、今度実戦投入するってよ。

調整の方は問題ねえんだろうな」

「ああ……………《IS》か。

一応、オリジナルのISコアと形態移行や自己意識、自己進化一部の機械らしくない機能を抜けば同等には動くよ。それでは不満かい？」

とつくのとうに伝えるべきことは伝えていたはずだし、出来るならば至高にして至福の思索の時間を邪魔されたくはない。

「不満を見つげるための試運転だからな。

だがまあ、一応確認しとけとのことだよ」

私の態度に対して、舌打ちしながら実に面倒くさそうな態度を隠そうともせずに話し続ける。だが、それくらいのほうが此方も遠慮する必要が無いというものだ。

「それはそれは、ご苦労なことだ。

では、実働データや映像記録だけは確実に入手できるようにしておいておくれよ。私から言う事はそれ以外にはもう無いさ」

「分かったよ」

面倒そうに返事を返し、そのまま踵を返して去っていく。

「しかし、もう『I・S』も実戦投入かあ……」

イミテイト・ストラトス

「いやはや、時間が経つのは早いねえ」

有限たる時間を有効かつ有意義に使うため、私は再び思考の海へと埋没して行く。

(さてさて、どうすればあの『生命』を再現できるのか……)

私を知りうる限り単一の命としては最強たる形、幻神獣。その最上種、ラグナレク終焉神獣。

早く、その秘術の総てを知りたくて仕方なかった。

そして、行く行くは――。

(アレを解析し、まだ見ぬ土地へ――)

Side 簪

臨海学校での、三日目のことはもうほとんど頭にありませんでした。

ただ、何もせずに過ごして、ただ終わった。それだけです。前日の戦闘を考慮して訓練等はありませんでしたが、部屋に集まった七人、私、本音、箒、鈴、オルコツトさん、デユノアさん、ボーデヴィツヒさんの顔は、揃って沈んでいました。

理由なんて、考えるまでもありません。

影内君が一命を取り留めつつも、決して軽くは無いか怪我を負ったことが知らされたからです。

(影内君、大丈夫かな……)

一晩明け、体力もある程度回復したからこそかえってそんな事ばかり考えてしまう。本音経由でお姉ちゃんから伝えられた話では、一命は取り留めていて容態も今は安定しているみたいだけど、余談を許さないとも言われている。

「……………」

誰も、何も言わない。体力的な問題ではなく、精神的な重苦しさに

よるもの。

「……ひとまず、帰ったら見舞いに行くか」

その中、最初に言葉を発したのはボーデヴィツヒさんだった。さすがに現役軍人、気持ちの切り替えも早かった。

それでも、その目が普段よりも少し赤み掛かっていたのは見間違いないと思う。

「……そうね、そうしましょうか。」

本音、影内が入院している病院が何処だかわかる？」

その次に、未だに表情は回復しきっていないけれど鈴が言います。どちらかと言えば、無理にでも場の雰囲気を変えようとしているようでした。

「……確か、面会はできるかどうかかわかんないかな。」

確認はとつてみるけれど……」

本音も本音で、いつもほどの元気は無いけれど、それでも何とかいつも通りに振舞おうとしています。

(……そう、だよね)

沈んでなんていられない、なんて強気な言葉を言う事はできないけれど。

それでも、せめて沈んでばかりはやめよう。

今度は私が戦えるくらい、強くなるために――。

S i d e アイリ

一夏がひとまず、即死を避けて一命を取り留めたと言うことが確認できただけでも収穫だった。

(とは言え、それでも許しませんけど)

彼が三つ目の約束を破った事には変わらない。さらに言えば、二つ目の約束もギリギリのところだった。だから、暫くの間は許してあげないことにしておきます。

(そうでもしないと、また無茶を重ねそうですね)

心の中だけでそんなことを確認しつつ、一時滞在となったソフィス卿の滞在期間中に代替人員を確保しなければなりません。

幸い、兄さんも既にこのことを知っており、リーシャ様も協力してくれることになっているみたいです。そこまでの心配はしなくてもいいでしょう。

(ですが、それ以降のこと……一夏の今後や、此方のことをどうするかなど。

更識さんとの協議のためにも決めておかないといけませんね)

一夏が事前調査目的としてこの世界に派遣されましたが、その中で事態が悪い方向に進んでいることが確認されている。神装機竜の流出と、終焉神獣^{ラグナレク}の出現と言う事態が、まさしくそれであると言えるでしょう。

「……あ、あの」

「簪さん？」

私が頭の中で今後のことやそれに対する対応などを整理している中で、不意に声をかけられました。

声が出た方に顔を向けると、簪さんが一人で来ているのがわかります。臨海学校から帰って来るや否やこちらに向かったと聞いていましたが、思っていた以上に早い到着でした。一夏と親しい此方側の方々も何名か来るとのことですが、それでも早いです。

「どうしましたか？」

何処か不安げな、でもどこか強い意志を感じさせる表情をしているのを見て、何かあったのかとも思いました。

ですが、その口から放たれたのは意外な一言でした。

「この前の、戦闘の時……影内君が、約束を破って申し訳ありませんって、言っていました。」

以前も、何度か約束について影内君が言っていた時がありました」

この前置きで、次の言葉が薄々予測できます。

「……もし、差し支えなければ。」

約束の内容を、教えてもらってもいいですか？」

そう問うた彼女の顔には、ハッキリとした不安が張り付いています

た。これから聞こうとしている内容が内容なだけに、それも無理からぬことです。

ですが、これまでに彼女に話した内容を鑑み、知っておいて貰った方がいいかもしれないとも考えました。特に、今回のような事態が起こったなら尚更です。

「……私の一夏は、合計で三つ、約束を交わしました。

一夏がそのどれのことを言ったのかまではわかりませんが……」

それだけ前置きして、その内容を一つ一つ思い出しながら、私は話し始めました。

いずれも、掛け替えの無いと同時に苦い思い出を伴うものばかりですが、それでも話すと決めた以上は話します。

「二つ目は……私の肉親を助けてほしいと、言いました」

「肉親……？」

どこか懐かしく、けれど同時にどうしようもない後悔とやるせなさを感じましたが、それを表に出すわけにはいきません。努めて、平静を装います。

「唯一の、肉親です。

本人の前では言いませんが、私にとってはずっと私を守り続けてくれた人です。ですが、私はその人の大した助けにはなれなくて……色々あって、まだ会ってそう長くはなかった一夏に、その役目を頼んだ……いえ、違いますね。その役目を、当時気付いていなかったとは言え精神的に問題の残っている一夏に押し付けた、と言ったほうが適切かもしれません」

その時の私は多分、隠そうとはしていましたが自嘲のような笑顔を浮かべていたかもしれません。

今にして振り返ってみれば、あの選択はもはや間違いとしか言えないのですから。

「内容が内容なので、二つ目より先に三つ目を言ってしまうのですが……。三つめは、先の戦いで使用していた《バーストドライブ超過起動》を、今後使用しないというものです。ですが、それももう既に何度か破られてしまいました……」

簪さんが、言葉を話さなくなるほどに緊張しているのが見て取れました。アレの危険性を目の前で見せられ、また、一夏に少なからず好意を抱いている事から、強く意識しているのでしょうか。

(私も、人のことは言えませんが……)

約束呪いをかけたを結んだ張本人である私が言えた義理でもないのかもしれないかもしれませんが、それでもその気持ちはよくわかります。

最近では恋愛関係で鈍感な部類に入る兄にさえ指摘されるくらいですすね。

「そして、二つ目ですが……。」

必ず生きて帰ってくる。ただそれだけです」

「……………え？」

私の答えに、簪さんが呆気に取られました。ですが、それも無理のないことです。

そもそも、普通であればこんな約束を結ぶ必要すら無い。基本的に、人とは自分の命を守ることをある程度前提として行動するのですから。

「ど、どうして……」

簪さんが驚きに満ちた表情でそれだけ絞り出すように聞いてきました。

以前、ある程度の事情を話したこともあり、特に大きな問題はないでしょう。

「……………以前、一夏の精神的な問題に関して話したことはありませんね」

「は、はい」

短く確認しつつ、その時の内容を簪さんに思い起こしてもらいながらこの後の話を聞いてもらう事にします。

そちらのほうは、まだ理解しやすいと考えたためです。

「彼は自分自身に価値を感じていない。私達も気づくのが遅れたために、気付くまで時間が掛かってしまった。気づいたのは致命的な事態が起こった時で、一夏が初めて実戦で《バーストドライブ超過起動》を使用したのもその時でした。そこまでの事態になって、私たちは彼の異常性によって気付けたんです」

そう、あの時。一夏が《銀閃》デイルウィ・フロイアス卿の成れの果て、《幻魔人》と戦った時の事。あの時のそれはただ暴走状態に陥った機竜を、それ以前からリーシャ様の手伝いで身につけた調律で無理矢理出力を全体的に下げることでもギリギリ扱えるようにしただけ、とも言えますが。

「彼には才能がありました。磨けば磨いただけ光るだろう、宝石のような才能の原石が。でも、それ以前のことから彼は自身の才能というものを信じなくなっていた。しかも自分でもそれに気づいていないためか、指摘しても治らなかつた」

あの時、何もできずにその場に立ち尽くした私と、その目の前で自分の命をさも当然のように使い潰す勢いで超高負荷の戦闘を続けていた彼。

結局、決着は兄さんとグライファーさんが《幻魔人》を討伐することで収束しましたが、一夏があの時、結果的には時間稼ぎとなった戦闘をしなければ、今私はここにいなかったかもしれない。

ですが、それでもあの後に一夏が三日近く寝込んだのは確かです。

「……本当は、こんな約束しなくても自分の命を大事にできるようになつてもらわうべきだった。

けれど、私達にはそれができなかつた。だから結んだ、そのはずだったんですけどね……」

今回の一件で、一夏はまたしても危うく命を落としかける事態となった。結局、口約束以上のことができな私自身の無力さ加減を再認識する事態になつただけに、

（あの時、あんなことさえ思わなければ、或いは……）

私は、一夏が羨ましかつた。

私にはどうしようもなく無かつた、戦いに関する非凡としか言えない才能の原石を持つ彼が、どうしようもなく羨ましかつた。

私は、どうしようもなく戦闘には向かなかつたから。

けれど、あの時。私が、ただの一度だけやった、機竜の操作訓練の時。私を背負って医務室まで連れて行ってもらった時。

（まさか、羨ましいと言われるとは思いませんでしたね）

屈託ない笑顔で、羨ましいと言われた。それが当然と言わんばかりの口調で。純粹に互いを想い合える、ただそれだけのことが羨ましいと言われた。

だから、私は勘違いしてしまったのだと思う。

彼なら、分かってくれるんじゃないかと。

私が見さんに対して抱いている劣等感も、過去のことを踏まえれば十全にはいかなくてもある程度は理解してくれるんじゃないかと。

その上で、もしかしたらと期待してしまった。何処か似ていて、けれど絶対的に違って、そして私や見さんを信じて近くにくれた彼なら、或いは見さんの助けになってくれるかもしれない。

(詰まる所、精神的に弱ってたところで甘えてしまったと言う事なのでしようけどね。

それでも、あれは自分でも愚かとしか言えないのですが……)

それで招いた結果が、今現在の精神的に致命的な問題を抱えた一夏である。

(……せめて、責任を取りませんか)

今の一夏を歪めた直接の原因が私なら、せめてそれだけでも責任を取らないといけない。

それだけは、もうずっと前から心に決めたことなのだから。

S i d e セルラ

「いやはや、やられてしまいましたね」

宛がわれた個室のベットに寝っ転がりながら、深く息をつく。でも、その後にもうしてもこぼれてくる笑みが抑えきれない。

「へえ、よかったじゃない」

そうして私が事後の余韻に浸っていたところに、無粋にも声をかけてきた女がいました。

ですが、邪険にする相手でもないので一応は対応しておきます。

「そつちは不満そうですね、『衝刑』」

「不満も不満よ。だって、全然戦い甲斐が無いんだもの」
「つてか、お前だけ相手がいいんだよ」

さらにもう一人、男が来ます。いえ、実際にはさらにその奥にもう一人の男の影が見えたことからこの場には四人がいることになりま
すね。

『噛刑』に『轢刑』、貴方達も来ていたのですか」
「まあな」

返事をしたのは『噛刑』だけで、『轢刑』は相も変わらず黙ったまま
です。ですが、いつも通りなことなので別に構う事ありません。

「そういえば、『爆刑』と『糸刑』はどうしましたか？」

『爆刑』は例の無人機の付き添い、『糸刑』は部屋でなんかやってる」
「そうですか」

それだけ言葉を交わし、あとは適当に互いに話題を選んでは雑談を
交わしていく。例えば、今まで殺し合ってきた中で手応えのあった敵
とか。

(さてさて、近々どうなることでしょうか……)

その中、私は今後の戦いに対する抑えきれない喜悦が湧き上がって
くるのを感じていた。

設定資料：4

オリジナルIS設定

名称：イクス・ラファール（シャルロット仕様）

搭乗者：シャルロット・デユノア

世代：第三代（試作一号機のみ第2・5世代機）

待機形態：ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡと同一

武装

- ・ 肩部複合防盾×2
- ・ 69口径パイルバンカー『グレー・スケール灰色の鱗殻』
- ・ 小型特殊防御用ユニット『ガーデン・カーテンⅡ』
- ・ 特種多弾頭兵装『スクエア・クレイモア』
- ・ 近接ブレード『ブレットド・スライサー』
- ・ 腕部三連装55口径突撃銃『アサルトライフルヴェントⅡ』×2
- ・ 連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』×2
- ・ アサルトカノン『ガルム』×2
- ・ 背部ウエポンラック×2
- ・ 重機関銃『デザート・フォックス』
- ・ 25mm6連砲身ガトリング砲『フランクスⅡ』
- ・ 試作長射程複合ライフル『オクスタン・ランチャー』
- ・ 頭部ブレードアンテナ
- ・ その他後付け装備

武装解説

・ 肩部複合防盾：『グレー・スケールエクス・ラファール』の肩の非固定浮遊部位。
『グレー・スケール灰色の鱗殻』、『ガーデン・カーテンⅡ』、『スクエア・クレイモア』を内蔵している。なお、まだ試作段階の装備であるため制式量産型には搭載されない可能性も高い。

・ ガーデン・カーテンⅡ：『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』の防御パッケージ『ガーデン・カーテン』の改修版。基本装備として内蔵できるほど小型化したのが、代わりに防御範囲が減少している。

・ スクエア・クレイモア：両肩に装備した弾幕兵器。チタン合金製

のベアリング弾を至近距離から一斉発射するための装備。対応射程が非常に短い、直撃した時の被害は計り知れない。

・ヴェントII：55口径突撃銃『ヴェント』を元にした腕部装甲に直接取り付ける装備。単純に『ヴェント』を三つ束ねたような性能をしている。

・背部ウエポンラック：機体に直接武装をマウントするためのラック。手持ち火器のウエポンラックとしての機能も備えるが、機体に接続したままマウント部分を稼働させることによつて手を使わずに接続されている武装を使用することも可能であり、その気になれば両手の手持ち火器とマウントされている重火器による一斉射も可能となっている。

・フアランクスII：25mm6連砲身ガトリング砲。《ラファール・リヴァイヴ》用の追加装備『クアッド・フアランクス』を基に、砲身を一門に、付属する弾倉などを整理して手持ち装備にまで改良した装備。

・オクスタン・ランチャー：ビーム砲と実弾砲を一門ずつ、一つの砲身に束ねた長砲身のハイブリットランチャー。実弾とビーム弾を一点に当てる事で複合装甲や特殊防壁を貫通させることを目的としたが、取り回しが《スターライトMk-III》よりも劣悪であるため取り扱いには高い技能が必要。

第三世代兵装

・《砂漠の呼び水》アモサージュ・デ・デザート：イクス・ラファールに標準装備されている、初の量産型第三世代兵装。

機体に外付けされている（イクス・ラファールの初期状態では腰部後ろ）専用ユニット内部に予備のエネルギーを蓄え、各部へエネルギーを供給する装備。イメージ・インターフェイスを用いて供給対象と供給量を調整する。従来の第三世代兵装と違い、使用負荷が非常に低い事とエネルギー問題の緩和に力が注がれているのが特徴。ユニットそのもののサイズに比して内蔵されている総エネルギー量は多く、量産型IS一機分のエネルギー総量の八割に及ぶ。

ただし、機体に外付けされているユニット内に予備エネルギーが蓄

えられているため、それが破壊されると一気に予備がなくなるという運用上の弱点がある。

解説：デュノア社が社の命運とフランスの威信をかけて開発したフランスの起死回生への主軸を担う第三世代機。

様々な事情により開発が一時中断されていたが、最重要部分の開発は元々ほぼ完了していたという事と、試作一号機（シャルロットに渡された機体）に限り機体の大部分を既存の《ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ》から流用したことにより異例の早さで完成した。尚、このような開発経緯のため試作一号機のみ第2・5世代機に分類される。

同じデュノア社開発の《ラファール・リヴァイブ》と比べ、機体性能は機動性を中心に改善。汎用性も失っておらず、総合的に《ラファール・リヴァイブ》の上位互換とも言える機体となっている。ただし、防御能力は『ガーデン・カーテンⅡ』によって補っているため強化範囲が限定されている。

発表式典において、社長の娘であることを正式に発表したシャルロット・デュノアが派手な演出とともに乗って登場し、十分以上の性能と同時期における第三世代機よりもはるかに高い信頼性をアピールしたことにより大成功をおさめ、経営回復成功の悲願を達成している。

名称：陽炎改

搭乗者：剣崎箒

世代：第2・5世代

待機形態：陽炎と同一

武装

- ・近接専用日本刀型大型ブレード『叢』×2
- ・小型シールド兼腕部『叢』マウント用追加装甲×2
- ・短刀型ブレード『風神』×2

- ・五連装特殊マシンガン『フィンガー』×2
- ・腕部内蔵熱粒子放射銃『日輪』×2
- ・肩部特殊連装拡散ビームガン『アリエス』×2
- ・腰部可動式追加スラスタター×2
- ・背部大型ブースター×2
- ・脚部大型ブースター×2
- ・各部内蔵ブレード（もしくは装甲兼ブレード）
- ・その他後付け装備

武装解説

・アリエス：《陽炎改》の肩の非固定浮遊部位アンロック・ユニットに内蔵されている特殊装備。片方に付き細長い三連装のビームショットガンが付いている。至近距離で全弾命中させると凄まじい勢いでSEを削り取っていくが、通常の武装用エネルギーゲインでは消費エネルギーを支えきれないため専用のエネルギーパックが搭載されている。

・フィンガー：特殊マシンガン。砲身が五連装となっている、五発同時発射式のマシンガン。集弾性が悪いため適正戦闘距離が短く、五発同時発射の弊害として弾切れが非常に早い。が、その分瞬間的な火力は他のマシンガンと比較して群を抜いている。近距離短期決戦で、決して牽制には使えない。

・日輪ニチリン：《陽炎改》の手の内側に内蔵されている、熱粒子放射銃。高エネルギー化させたビーム粒子を収束させずに直に吹き付けて攻撃する熱攻撃用装備。攻撃時の様子は完全に火炎放射器である。

第三世代兵装

・《砂漠の呼び水》アモサイジュ・デ・デザート：イクス・ラファールに取り付けられているものと同一。

解説：箒の専用ISである《陽炎》の一部装甲と武装を強化改修したIS。

装甲が全体的に細く流線型の形状になっており軽量化されている。また、背部と脚部の両方に大型ブースターを追加したことにより加速力が大幅に強化され、瞬間的な加速能力は他の追従を許さないレベルとなっている。ただし、最高速度は標準的な高速機よりも一回りほど

速い程度。

高い運動性と箒自身の瞬時旋回による旋回能力、至近距離での短期決戦において高い能力を発揮する武装類と合わせ、高速近接型のISとしては圧倒的な能力を持つに至っている。

第七章：機竜舞う空の下 第七章（1）：動き出す者達

S i d e アイリ

「それでは、まずお互いの認識を一致させたいのだけれど。

確認してもいいかしら？」

「ええ、問題ありません。

よろしくお願いします」

以前と同じ、更識さんに用意してもらった部屋。そこで私は、顔なじみでもある三和音の三人、そして今現在此方での有事の際の対応に当たってもらっているソフィスさんと一緒に交渉に当たっていました。更識さんたちの側からはご本人である更識さんと、その従者である虚さん、妹さんである簪さんとその友人の箒さんがいます。

（……なんだか、随分と緊張しているように見えますね）

更識さん本人はいつも通りの微笑のように見えますが、時折、顔の筋肉に緊張が見えます。それは虚さんも同じ、簪さんと箒さんに至っては無表情で取り繕うことで緊張を見せないようにしていることが見て取れます。

（……私も、あまり人のことは言えませんがね。

ですが、うまくやらせてもらうとしましょう）

以前から感じていた事ではありますが、彼女らが緊張しているという事はまだ此方との関係を切るようなことはしたくないという事。ここで何か荒事を起こすか、あるいは此方との関係を切ろうとしている可能性も考えられなくはないですが、此方の戦力の一端を見せた際の反応から荒事の可能性は低いですし、関係を切ろうとしている可能性については低いでしょう。もし関係を切ろうとしているのなら、わざわざ治療中の一夏の護衛にあれほどの人数を割くことはしないでしょうから。

（24時間交代制で常に周囲が見張られていて、しかも有事とあれば更識さん本人か簪さん、箒さんの三名のうち誰かが行くこともできる

体制でしたからね……)

お家の仕事として従っている人たちはとにかく、彼女たちの基準で考えれば貴重過ぎる戦力であるISを、半ば自前とはいえ三機常に動かせる体制。ある程度は重要視してもらっていると見ていいでしょう。

交渉に関してはこちらが不利だと思っていた手前、やはりありがたい。とは言え、それに甘えて無理難題を吹っかけてはいけない。

(未だ詳細は分かりませんが、向こうには既に幻神獣を倒し得るISが存在している。)

あまり大きくは出ないようにしつつ、不安要素を取り除けるくらいには譲歩を引き出さないといけない……)

状況は幾分此方にとって良くなっていますが、気を抜くことなどできるはずもない。

私は、緊張を表に出さないようにしながら更識さんの言葉を待ちました。

「まず、私達としては、今後もあの化け物の脅威や敵側に流出していると思われる貴女達の機体と類似した機体の相手に対して、今後も貴方達の協力を得たいと考えているわ」

更識さんは簡潔に、けれど私たちにとってはとても重要な部分をそのまま単刀直入に言ってきました。

以前でしたらここから私たちが更識さんたちから欲しい物を言い、それらに対する認識を一致させ、それらに対価とすることを確約したうえで交渉を終えてきました。

ですが、今回はそれも言ってもらえません。「分かりました。」

ですが、貴女達には既にかの化け物を倒せる機体を手に行っている筈です」

ここでいったん言葉を切り、相手の反応を見ます。

「あの二機は……色々と問題があつてね。見た目ほどいい物ではないの。」

心苦しい話だけど、私達としては貴女達の協力は依然、不可欠なも

のと考えているわ」

あの二機に関する具体的な内容の明言こそ避けましたが、その表情には少なくない苦惱が見て取れます。表面的には隠そうとしていますが、所々に顔の強張りが見て取れます。そうでなくても、無表情の中に隠して奥歯を噛みしめている虚さんの表情などで、彼女たちがこの状況に苦々しい思いを抱えていることが読み取れました。

「そう、ですか……」

しかし、私達としては今回の一件で発生した、今後の活動に対する懸念を払拭出来るだけの材料がありません。一夏の治療に関しては十分なものを行って頂いていると考えますが、情報収集等に関してはどのようなになっているのか。お聞きしても宜しいでしょうか……？」

さすがに、今回の事態で発覚した事実は重い。いくら彼女らが私達との協力関係の継続を望んだとしても、これらに対する明確な回答が無ければこちらとしても対応を考えざるを得ません。

ですが、彼女らとの協力関係が不可欠なのはこちらも同じ。むしろ、相対的な重要度で言えば彼女たちよりも上かもしれない。

だから、この後の更識さんたちの答えが私たちにとってはものすごく重要だった。

「……一応、ある程度の調べはついているわ」

そうして私が更識さんの反応に対して、見せないようにしつつも身構えていた最中で発されたセリフはかなり重々しく、けれど、一定の期待を抱かせるものでした。

「まず、あの機体を運用していた組織だけだ。

私たちが方で、ファントム・タスク亡国企業と呼ばれる組織であることがわかってるわ」

「亡国企業、ですか？」

わかっている範囲でいいので、どういった組織か教えて頂いても？」

私の追及に対して、更識さんは意外なほど呆気無くその情報の一端を開示してくれました。

「簡潔に言えば、裏社会の国際的なテロ組織よ。」

一応、傭兵業を語っているけれど……近年の活動は過激になりすぎていて、傭兵組織以前にテロ組織として有名と言ったところね」

更識さんの言葉に、少し考えます。此方の方でも似たような組織があつた記憶があつたためです。

（……竜匪賊のようなものでしょうか？

しかし、それと知れただけでも収穫でしょう）

頭の中で思案し、それに対する情報をできる限り集めることにします。敵のことが何もわからないのとある程度でもわかるのでは、対策のしやすさも段違いになるからです。

「分かりました。」

それ以外に何か、わかることはありませんか？」

ですが、これに対してはさほどの駆け引きも必要ないでしょう。そのままの流れで追加の情報を聞いていきます。

「……実は、少し前までISの強奪を行っていたことがわかっているわ。分かっているだけでも、三機のISが強奪されている。内訳は、アメリカから二機、イギリスから一機よ。」

でもどういうわけか、ここ最近殆どそれに類する行動を行っていないわ」

「では、最近は何を？」

ここで、更識さんはやや表情を苦いものに変えました。

あるいは、それが理解しがたいのかもしれない。

「……主だったものは二つ。」

一つは、小規模武装勢力への襲撃。これに関しては、徹底的にやっているみたいね。生き残りがいる事例自体が少ないわ。しかも、その生き残りの証言もよほど錯乱しているのか、中々信じがたい物なのよね……。

もう一つは、IS搭乗者への襲撃。これに関しては被害国と関係各所が徹底的に隠蔽しているおかげで殆ど不明。でも、例外なく襲われたISが撃破されている事は確実ね」

近年の活動として聞いたものですが、確かにその内容はやや理解し

がたい側面があったのも事実です。ですが、更識さんがどう認識しているのかによつては思い違いが生まれるかもしれません。

だから、更識さんがどうして苦々しい表情になったのかも、確認しておくことにしました。

「……中々、理解しがたいですね。」

更識さんの見解を聞いても宜しいでしょうか？ 私では、その組織に対する情報が不足していますので……」

困った風を装い、更識さんの話の続きを促していきます。ですが、更識さんも私が何を思つて聞いたのかわかつているのでしよう。同じように困つたような笑顔を浮かべながら、それでも答えてくれました。

「それは……憶測にすぎないけれど、新兵器のテスト、かしら？」

小規模武装勢力の襲撃の際に、生き残つた人たちが揃つて類似した兵器を見たことが無いと証言しているしね。それに、IS搭乗者への襲撃に関しても、必要になる物量の関係から既存の兵器で完全に隠蔽ができるなんてことは無いでしょうから」

中々重要な話も出てきましたが、後から更識さんが言つた証言に関する情報も加えて考えればおそらく私も同じ見解です。

そして、最初の段階では全て開示せず、後から追加で情報を持ってきた更識さん。やはり、侮れない人です。

ですが、同時に二つ、確信できました。

（更識さんたちとしては、私達とは恐らく、この話の新兵器絡みのことも含めて今はまだ関係を継続したい方針なのでしょうね。）

そして、その新兵器が或いは機竜でないかとも疑っている、と……
新兵器その物の内容にこそ深く触れませんでした。彼女がこれに対して強い警戒を抱いていることは考えなくても明白と言えます。

その中での、私達との関係。彼女たちは既に此方の方で私たちがISとして通している機竜の性能もある程度は知っているうえ、彼女たちからしたら私たちは詳細不明かつ一定以上の戦力を保有する相手。（機竜か、あるいはそれに類する技術がその新兵器に使われており、それに対する対策……或いは、手元にある繋がりを残しておきたかつた

のでしょうか……?)

新兵器の話はまだ確信できる領域の話ではありませんが、或いは更識さんは既に確信するに足るだけの何かを掴んでいる。そうでないとしても、私たちの保有する機竜関連ではないかとも睨んでおり、それが私達に繋がっている可能性を否定しきれないため、最低でも自身の目の届くところに繋がりが欲しいのか。

(何れにしても、私達との関係を切ろうとしている可能性は低い……：ならば、やりようはありますね)

ここで下手な事を言って更識さんたちの不信を買うような事態は避けたいですが、それでも譲れない部分と言うのはあります。

少し考えてから、次の言葉を言う事にしました。

「分かりました。」

では、もしその新兵器の話が本当だった場合、私たちが相手したほうがいいでしょうか？」

私の言葉に、更識さんは常の通りの笑顔で答えます。ですが、その中に僅かな安堵の色が混じったように見えたのは気のせいではないでしょう。

「可能性としてはまだまだ低いけどね。」

でも、もしそんなものと戦うような事態になったら手を借りたいのが本音ね」

更識さんの言葉に、少しばかり思案を重ねます。

(……向こうの事情もある程度見えてきましたし、思っていたよりも重要な情報が手に入りましたね。

この辺が、落としどころでしょうか)

十分とは言えませんが、変に欲を出し過ぎて関係を拗らせてしまうのも避けなければなりません。

当初に考えていたよりも情報も手に入ったことですし、この辺で切り上げるべきでしょう。

「そう、ですか……。」

しかし、今回の一件でも分かる様に、私達にも対処能力の限界は当然あります。特に学園や市街地などで相手することになれば甚大な

被害を出しかねません。

そのような時の手配などはお任せしても？」

「それについては勿論。」

元々、そういう契約だしね」

元々の契約の時点で確約されていた事項を引き合いに出し、それについての確認をとる。

更識さんが確実に、かつ抵抗なく頷くと考えられる内容です。

「分かりました。」

では、今後ともよろしくお願ひします」

最後、軽く席から立ち一礼を返します。

「ええ。」

今後とも、よろしくお願ひね」

更識さんも同じように立ち上がると、そのまま一礼を返してくれました。

Side 楯無

アイリさんを見送り、その姿が完全に見えなくなったところで深く溜息をついた。

(なんとか、首の皮は繋がったわね……)

息が詰まるかと何度も思った交渉を終え、深呼吸を一つ。

随分緊張していたのか、今になって精神的な疲労を感じた。

「お嬢様、お疲れ様です」

虚ちゃんも疲れたような表情になっていた。それでもねぎらしいの言葉をかけてくれる当たり、律儀な性格だと思う。

「虚ちゃん、お茶淹れてもらってもいいかしら？」

「畏まりました」

そのまま、持参していたティーセットで紅茶を入れ始める虚ちゃん。ここからの移動は一息入れてからになりそうだった。

「……何もしゃべってないはずなのだが、な」

「なんでこんなに……」

後ろでは、簪ちゃんやと箒ちゃんが緊張が解けた様子でへたりこんでいる。

虚ちゃんも二人にもリラックス効果があるお茶を淹れてくれたみたい。いつものことながら、気の利くことだった。

(とはいえ、まだまだ気の抜ける状況じゃないのよね……)

今回、アーカディアさんが情報の入手経緯を聞いてこなかったのは不幸中の幸いだった。

(さすがに、ウエイル・アーカディアを辿って行ったら出ましたなんて言えないわよ)

流石に、これは予想外過ぎる上にこの事実自体彼女らに言えたものではない。

事の発端はウエイル・アーカディアの足跡を辿っている最中。ドイツ軍を去った後に不審人物と接触しており、そこからさらに辿って行って亡国企業にたどり着いた。

しかも、ウエイル・アーカディアが合流したと思われる時期から僅か一年程度のずれであるのアーカディアさんたちの機体と酷似した機体の目撃証言に、詳細不明の機体の証言。

ここまで来れば、もう疑いようもなかった。

そして、この情報が手に入ったのがこの交渉の一週間前。さすがにギリギリ過ぎる。

(思っていた以上に前から事態が動いている……しかも、向こうは確実に此方の何枚か上手を言っていると来ている、か……)

この状況で、アーカディアさんたちの協力を切るのはあまりにも分の悪い賭けだったと言えるだろう。単純な戦力的な意味でもそうだし、もしアーカディアさんたちがウエイル・アーカディアに繋がるにした所でその繋がりが私たちの目の届く範囲にあるのであればむしろ情報を収集できる可能性も増えていく。

しかも、仮に彼女らとの関係を切ったとして。現状、私達にある戦力での化け物を確実に倒せる能力をもつ物が織斑先生と篠ノ之博士のIS位しか存在しない。そして、あの二機は運用についての致命

的な欠陥をいくつも含んでいる。技術的な意味は大きいかもしれないけれど、今必要とされている物としてみればあまりにも力不足にすぎた。

(でも、今のままですると続けるわけにも行かない……)

今回、此方にとつても重要すぎる話だったけれど、それとは別に分かったことが一つ。

(あちらも、私たちが思っている以上にこの関係を重要視している……)

アーカディアさんたちは思っていた以上に私達との関係を重要視しているように見受けられた。

言動の節々こそ私から情報を引き出そうとする節は見えたけれど、もともと私たちは情報を提供することになっていたのでからそこまではない。それでも、ああも自然に情報を要求されまくると思わなかったけれど。

けれど、それでも致命的な追及は無かった。せいぜいが彼らが当初から要求していた内容かその派生。

どういった意図があつたのかまでは不明だけれど、彼女たちとしても私達との関係をすぐには切りたくないだろうことがわかっただけでも収穫だった。

(……何れにしても、彼女たちとの関係は続けつつ、裏取りね。

早く、彼らの正体を割らないことにはこれ以上の情報提供も迂闊にはできなくなることだし)

今後のことを頭の中で整理しながら、一息入れる。

この紅茶だけが、今の私の心をほぐしてくれた。

Side ???

ドオオオオオオオオン！ ドオオオオオオオオン！ ドオオオオオオオオン！
ドオオオオオオン！

爆音はもはや絶えず私の耳を揺さぶり、発生した爆炎は視界を奪い

去っていく。

足を挽がれたバツタカイナゴにも似た、赤い何かが無数に降ってきた。着弾しただけで多分百は超えている。それが、まだまだワラワラという。

周囲には破壊されつくした戦車や装甲車の残骸。友軍だった戦闘機の編隊の反応も今は一つも残っていない。

私のISはもはや半壊状態。SEも残り少なく、すでに満身創痕と言える状態だった。

「な、んなのよ……アンタたちは……!?!」

私のISを半壊状態にした人間、それはやたらと体格のいい大男だった。全身筋肉と言った風貌で、顔も悪くないのだが、その醜悪な喜びに彩られた笑顔がすべてを台無しにしていた。

その男が纏っているのは、見たこともないようなISのような何か。

(……コアの反応がないって、いったいどういう事よ)

厳密にはあるのだが、コアネットワーク経由でのアクセスが不可能になっているうえにそもそもその反応が不安定。しかも、それが外付けのブースターユニットみたいなものにしか接続されていないのは、どうしようもなかった。

心の中だけで文句を言いながら、目の前の男を見据える。

「おう、どうでもいいだろ。んなことは、よお。」

どうせ、強いやつが好き勝手出来んだからよ」

いやに癪に障る口調だが、もはやどうしようもない。コアだけを狙う戦術をとることなどでなんとかこの男だけでも、と思っただけでそれすらできない。

さらに、周囲には明らかに人型ではないISのような何か。見ただけでIS関係の技術が使われているし、此方はコアの反応も見られる。けれど、四方に広がる様にして配置された四脚に、人の手が入っているとはとても思えないほどの細く、そして長すぎる両腕。メイン装備は背面の長射程レールキャノンらしいが、連射性を犠牲にしたらしいその威力と射程は侮れない物があった。

「全く……貴様らには誇りもないのか？」

力が全てとはな」

「へッ、面白いことを言うなあ……」

他でもないI Sが否定した事を主張するのがI S乗りさんとはね」
「何……？」

面白くもなさそうに、ただただ当たり前前のことのようにその男は言った。

「I Sが強いからお前らが得意顔でいられんだろ。」

強いやつが好き勝手出来るってお前らが証明してんじやねえか」

女尊男卑のことを言っているのだと、すぐに分かった。

「違う！ 私は……」

「否定してねえんじや肯定してんのと同じだろ。」

まあいいや。あばよ」

大した興味も無さそうに、それまで肩に担いでいた戦槌をロボットアームのような両腕で振り上げる。カシャ、と戦槌の先端が少しだけ伸びた。

咄嗟に、頭では無意味だとわかっているにも関わらず盾を構えた。構えてしまった。

「《竜爆戦槌》！」
バスターハンマー

ドゴッ！

男の戦槌を受けた盾がへこむ。瞬間、もう一度、カシャ、と言う音が鳴った。

キュゴオオオオオオオオン！

瞬間の、巨大な爆発、それが既に歪んでいた私の盾を粉々にする。刹那、その爆発は私も巻き込んで――。

Side 簪

誰もいない時間を見て、影内君のいる病室に入った。

今は誰もいないし、病室の警護の人もよほど大きな声を上げない限

り声の聞こえない範囲にしかいないことを確認している。と言つても、その時間は十分も無いから手早く済ませないといけない。

本当はじっくりと話したい内容だったけれど、こればかりは仕方ない。

(それに、下手したら物理的に私の命がないかもしれないし)

相手するのが怪我人とはいえ、あの影内君なんだから油断なんてできない。

対応を間違えたら本当にそうなりかねないだけに、緊張もひとしおだった。今の時点で口の中がカラカラに乾いているのが自覚できる。

「影内君、起きてる?」

手土産を携えたまま、スライド式のドアから少しだけ顔を覗かせる。もし寝ていたら起こしてしまうのも悪いと思つて、まずは小さな声で確認だけとつてみる。

「……? 簪か?」

起きているから、入ってきてもいいが……」

目的の人は、病院の白いベットの上で上半身だけ起こしていました。目も覚めているようです。

「その……調子はどう?」

どこか痛かったりとかは無い?」

まずは当り障りのない話題から始めていく。流石に、最初から本題を言う勇氣はなかった。

「ああ、まだ本調子とは言えないが、だいぶ良くなっている。

態々すまないな」

軽く腕を動かしながら、そう説明してくれました。

軽くしか動かしていませんが、その動きに危うさは見られません。

これも、普段の非常識な領域に達している訓練の賜物なのでしょうか。

「ところで、簪。どうして、態々こんな時間に来たんだ?」

時計を針を確認した影内君が発した一言。

影内君にしたら何気なく発しただろう台詞。

「……それを話す前に、まずはこれを受け取ってくれないかな?」

そう言いながら、持ってきた手土産を渡す。

それを確認した影内君は、意外そうな様子で驚いていました。

「……《ユナイテッド・ワイバーン》の機……待機形態に、《アスディイグ》も？」

一通り三振りの剣を改めた影内君が、私の方を向きながら言います。

「どういうつもりだ？」

その声には、何時も聞いているよりも微かに険がありました。

「多分、私はあなたに嫌われるようなことを言うと思う」

最初に、これだけ前置きしておいた。口の中の水分がカラカラに乾いているような感覚がしたままだったからうまく喋れたか不安だったけれど、どうにかなっているみたい。

「藪から棒に。

一体、何を……」

元々鍛えていたためか、はたまた以前に似たような状況になったことでもるのでしょうか。影内君はすでにある程度動けるようになっていきます。

見てわかるほどに痩せ細ったというわけでもなく、すでにあの剣型の待機形態をとる《アスディイグ》と《ユナイテッド・ワイバーン》をある程度触れる程度には回復しているみたいです。

現に今も、《アスディイグ》の剣をすぐにも抜けるようにしています。

「どうしても、聞きたいことがあるの」

ゆっくりと話しながら、体が咄嗟に動かないように意識して押さえつけておく。

「……やっぱり、箒や鈴に帰ってきたことは言わないの？」

影内君……ううん、元・織斑一夏さん？」

その瞬間、私の首に《アスディイグ》の待機形態の剣が目にも止まらない速さで突きつけられた。

第七章（2）：覚悟の形

S i d e 一夏

「一応聞いておく。」

その様子だと何かしらの確信を持っていると考えていいんだな？」
簪に突きつけた機攻ソード・デバイス核剣はそのままに、問いかける。どの道このま
まと言うわけにもいかないが、かと言って情報源を聞き出さないわけ
にもいかない。あるいは彼女以外にも知られている可能性も考慮し
なくてはいけないからだ。

（最悪を考えるのであれば、更識会長たちにも知られている可能性も
考慮すべきか……？）

だが、今の治療の状況を考えるとその可能性は低い……いや、それ
も一種の策略か……？）

もし俺が織斑一夏という過去の日本が見捨てた一人であると知れ
れば、その隠蔽のためにこの治療が上手く行かなかつたつとでも言っ
て闇に葬ることくらいはしかねないだろう。だが、上手く行っている
この現状もそれを知られていないという誤った認識を与えるための
策略とも捉えられなくもない。

（いや……どっちにしたところで、今このタイミングで機巧核剣を渡
したうえでその情報を流す意味がない……なら、なぜ……？）

冷静に考えれば、そもそも俺自身の自衛戦力となる機巧核剣を渡す
意味がない。気づかれない位置から狙撃などと言う手もあるのだろ
うが、それにしたところで確実な一手を狙うのであれば渡さない方を
とるだろう。

しかも、眼前には簪がいる。姉妹仲はそこまで良くないと聞いている
が、更識会長としてはむしろ歩み寄りたいとすら思っていた以上は
そもそもこんな役を任せるとは思えない。それすらも計算の内、とい
う嫌な考えがよぎるが、どのみち今の俺が持っている情報では判断の
決定打となる情報がない。

「確信は、持っている」

簪はそんな俺の様子を少し見てから、控えめに、だがはつきりと言

い放った。

務めて表情に出さないように細心の注意を払っていたつもりだが、もしかしたらそれ以外の何らかの変化で考えを読み取られたのかもしれない。

「でも、安心して」

次に言い放った一言は、先の言葉の下に滑り込ませるように重ねてきていた。

「お姉ちゃんには伝えてないし、他の人にも言っていない。」

今知っているのは、私だけ」

さらに続けざま、不可解と言えば不可解なことを言ってくる。

怪訝な顔をしてしまったのだろうか、今度は若干の苦笑を混ぜながらだった。

「さすがに影内君の正体をお姉ちゃん……と言うか更識家本家に伝えるわけには行かなかったからね。」

影内君たちとの協力関係を切るわけにはいかなかったし、何より……私自身、影内君にとって不利になるようなことをしたくなかったし」

その一言に、さらに疑いが深くなる。

この行動の目的が不可解過ぎた。

「……何処で知った？」

「一番最初は、廊下で影内君が織斑先生と話していた時」

その一言に、舌打ちしかけた。が、さすがにここですべきことではないと思いきや、思考を切り替えようと努める。

(こんな形で邪魔になるか！)

だがそれでも、思わぬ形で邪魔になった元姉に対し、今考えるべきではないと分かりながらも憤りを感じる。

「……それだけか？」

仮に俺がその織斑一夏であったとして、帰ろうとはしなかった以上は根拠に弱いと思うが？」

「織斑先生のもとに帰らないのは、箒と鈴からある程度聞いた。」

二人のもとに帰らないのは、貴方から直接聞いた」

そこで、簪はいったん言葉を区切った。

僅かな間、静寂が流れる。簪の首には相変わらず、俺が構える《アスディーク》の機巧核剣が突きつけられている。

「別に、今すぐ誰かに言う気なんてない。

でも……」

そこで、簪は少しだけ言い淀んだ。あるいは、言葉を選んでいるのかもしれない。

「でも、もし影内君が今回みたいな状況になってしまったとしたら、私は多分言ってしまうと思う。」

箒と鈴の、二人だけには言ってしまうかもしれない」

僅かな間を挟んで放たれたその言葉に、思わず顔をしかめた。

俺自身、明示こそしなかったものの以前にしたかつての親友が誰であるかは今現在の会話からして簪も察しているだろう。

にも関わらず、彼女は名前まで出して『言うかもしれない』といった。

「それは……是非とも止めて欲しいのだがな」

頭の中だけでこの状況を如何にして打破するかを思考しながら、それだけを考える。

正直、此方が切れる手札が無き過ぎて光明が見えないのが辛いところだった。

「だったら……二つ、要求したいことがあります」

簪はここでも一回言葉を切っていた。少しだけ緊張している様子にも見えたが、不利なのが此方であることに変わりない以上余り救いにならないかった。

「まず、一つ目。」

必ず生きて。そして、少しは貴方自身に優しくしてあげて」

この言葉を言った時の簪の口調は、いつものそれに比べて強く感じられ、それこそ怒っているかのように聞こえた。

「……別に、自分から死のうとしたわけではないのだが」

先日、『バーストドラッグ超過起動』の一件を言っているのかと思ひ、その言葉だけを紡ぐ。最も、あの時の一件に限らず自分から死のうとした覚えなど

ない。結果として危険な事態になることは多々あるが、自分が戦う立場にあり後ろに守るべき人がいるのではある程度仕方ない物もある。「相手を倒すよりも自分の生き残りを考えてほしいっていう事。」

あの時も、増援自体は呼んでいたんだよね？」

「アイリさんと更識会長経由でな」

そこまで言ったところで、簪の目つきがやや鋭くなったように見えた。

「呼んではいたけれど、その人が来る前にアレ使ったんだよね」

「俺の腕であの化け物を相手取ろうとするとアレ以外の手段が思いつかない。それに、危険性を排除するのなら、早めに倒すに越した事は無かったからな」

大真面目に言ったつもりだが、簪の目つきがやや鋭くなった。

「その結果、危うく死にかける事態になったことはちゃんと考慮しているの？」

「戦っている以上はいつだって死にかけるどころか殺される可能性だってある。」

ましてや、あの時は敵が敵だったんだ。こればかりは今の俺ではどうしようもない」

師匠達ほどの腕前を持っていれば、あるいはもう少しマシな選択肢もあつたかもしれない。が、最低限として押し止めることだけ考えて行動したとして、はたして『超過起動』を使わなくて済んだのか。自信は持てない。

「それでも、貴方に生きてほしいと思っている人がいる事。それだけは、忘れないで」

簪は、今も剣が突きつけられていることなど気にしていないかのようには強い口調とハッキリと分かるほど強くなった目つきで告げた。

「……随分と、気にしているみたいだな。」

そこまでの義理もないだろうに」

簪の様子からして此方のことを真剣に考えてのことと言うのは容易に想像がつく。

それはそれで嬉しいものがある。だが、最初に告げられた内容が内

容であるためにそれに浸る訳にもいかなかった。

「だって、あなたが自分のことをそういう風に考えているっていう事実そのものがあの二人を軽視していることになってしまっているんだもの。」

……二人が、どうしてI S操縦者になろうとしてか。知っている？」

「……いや」

箒と鈴について俺自身が知っていることと言えば、俺が機竜側に行く前までのことだ。その時は世話になっているばかりであったために、特にいい印象を残せるような事は無いと思っている。

だが、今までの話の内容と簪の口ぶりでは、まるで俺にもその原因の一端があるように思えてならなかった。

「……箒はね、貴方の苦しみを知って、後悔して、貴方が居なくなつて、信じていたものが崩れて、一度は自殺を考えるようになるまで追い詰められたの。」

でも、そのあとに色々あつて……今は、誰かを恨むだけじゃなく、一緒にいてよかつたつて言ってもらえるような人間になるんだつて、そういつていた。

その中には、貴方だつて含まれてるはずだよ」

「……」

そんなことを考えていたのか、とはさすがに言わなかった。

一度は自殺を考えるようになるまで追い詰められた、その部分を知らずに今まで接していたことに後悔が募る。ましてや、簪の言っていることが本当ならその原因の少なくとも一部分に俺も関わっている。

(所詮……俺も、その程度の俗物か！)

余りにも遅すぎる後悔だが、今更どうしようもなかった。

だが、簪の話はこれだけに終わらない。

「鈴は、織斑一夏の親友だつて声を上げるんだつていつていた。」

それまで無視され続けた嘗ての貴方自身が……織斑一夏が決して無価値じゃないつて、証明するつて。この力は、そのためにつて」

「……ッ！」

思わず口から出そうになった言葉を、半ば無理やりに飲み込む。

(親友だと、そう思っていてくれるだけで十分だったのだが……)

鈴自身の人生なのだから、彼女のためか、あるいは今生きている人たちのことを考えて生きてほしかった。そういう思いがあることも本当だ。

だが、現金なもので、それだけ自分のことを考えてもらえていたということに嬉しさも感じる。それを表に出すわけにもいかないから、喉から出そうになる声を飲み込んだ。

「だから、私は貴方が貴方自身を粗末にすることを許したくないの。

あの二人と、そして貴方の、今の友人として」

そんな俺の心中を知ってか知らずか、簪は一つ目の条件に対してこう締めくくった。

その後、少しの間を置いてから次なる言葉を紡ぎ始める。

「そして、二つ目。

貴方達の事を、教えてほしい」

その言葉にそれまでの感情を押さえつけながら束の間、思考する。

「……俺たちの、事を？」

確かに、向こうには此方に関する情報の多くを秘匿している。

だが、このタイミングで言われては警戒せざるを得なかった。

「私個人としては、影内君やアーカディアさんを信頼できる人たちだっと思ってている。

けれど、それはあくまで私個人の所感に過ぎない。だから、明確なものが欲しい。そう思っただけ」

ここまで一気に言ったところで簪は少し言葉を切り、呼吸を整えた。その直後、それまで強張り気味だった表情を緩める。

まるで、俺に安心を促すように。

「別に、今すぐどうこうっていう事じゃない。

ただ、私は貴方達を信じたいから、教えてほしいってだけなんだ」
「信じたい、か。」

その割には、俺の正体を伝えない代わりに要求にも聞こえるが？」
新王国で見てきた腹に一物抱えている笑みではなさそうだと思う

が、だからといって安心していい訳でもない。ましてや、最悪を想定するのであればむしろ警戒しなければならなかった。

「分かってるよ。」

だから、貴方にその剣を渡したのだし」

「な、に……？」

言われて思考し、そしてようやく剣を渡してからこの話題を始めた理由に行きあたった。

「対等になる様に、自分がある程度不利にするために……？」

「やっぱり、影内君は凄いね。」

その通りだよ」

「これで正解だったかはわからないけど」と最後に悪戯っぽく付け加えた簪に、いよいよ呆れかえってきた。

(だからと言って、自分の命を賭けるか……？)

考えようによっては効果がありすぎてそのことを言った瞬間に斬られかねないような内容である。

確かに信用を得ることは難しいが、だからと言ってあまりにも乱暴に過ぎる手段だった。

「いくら何でも、無謀すぎやしないか？」

「だって、影内君のことだから最初から切るつもりにしたところで可能であれば情報を得てからにしようとするでしょ？」

だったら、そこで私も何かを言う事ができる」

「賭けもいいところの手段を、よくぞ使ったものだな……」

こうは言ったが、冷静になれば簪の取った手段も強ち間違ってもいいことがわかる。

そもそもとして、此方としては簪を含む更識会長たちとの協力関係を継続したい方針である。だが、ここで仮に簪に致命的な手出しをしてしまえばどうなるか。

(まず間違いなく協力関係が破局を迎える……最悪としては更識会長たちと全面衝突か)

暗い未来しか見えない。

(とはいえ、簪なりの方法ではあるが一応、此方にも配慮はしていると

……)

そこまでは分かった。だが、どうしたところで二つ目の要求には俺が答えていい訳がなかった。

(二つ目は俺自身の問題だ。それはいい……。

だが、二つ目。機竜側の情報となるとおいそれと返事を返すわけにも、な……)

俺自身の失態による事態であるのが辛いところではあるが、どうしようもない。

ここでの返事は保留し、新王国に報告してから対応できないかと考え——

「その話、私の方で預からせてもらってもいいですか？」

——ドアから現れたアイリさんが開口一番に放った言葉によって、思考が一瞬停止した。

S i d e アイリ

一夏の様子を見に來ただけのつもりでしたが、そこではあまりにも予想外かつ厄介な事態が起こっていました。

「もう一度聞きます。」

その話、私の方で預からせてもらってもいいですか？」

務めて冷静に、そこまで言う。そして、一夏が構えている得物を見

機巧核剣

て、ひとまずそれだけは下ろしてもらおうと考えました。

「一夏、いい加減に剣を下ろしなさい。」

気持ちにはわかりませんが、何かの間違いがあつては遅いですから」

「……委細、了解しました」

互いにとつて不幸な事故はあつてほしくないという考えを読んでくれたのか、一夏も一瞬の逡巡の後に《アスディーグ》の機巧核剣を下ろしてくれました。

「それで、簪さん。」

私達のことに関しては、実のところ今この場にいる面々だけで答え

ることはできません。そんなことをすれば最悪、私達の首が飛びかねませんので」

口調はいつもよりも強めに、けれど内心強気で言っておきます。正直なところ、完全に本当のこととは言えないけれど強ち嘘とも言えない内容なだけにはつきりとさせておかないといけません。

「……分かりました。」

もともと、そこまで強要する気はありませんでしたので。貴女方の判断にお任せします」

簪さんも少し考えてから、意外なほどアツサリと納得してくれました。

もともと強要するつもりは無いみたいでしたし、こうも配慮してもらえるとというのは有難いものがあります。

S i d e 簪

自分で自分の命すら粗末にしてしまう人に、正攻法でどうにかできるなんて思えなかった。

なにより、私よりも遥かに付き合いの長いアイリさんや影内君の師匠といっていた人たちでもどうにかできなかつたのだから、会ってまだ数か月の私ではもうどうしようもないとしか思えなかつた。

だから、最初はゆっくりやっつけていこうと思った。ゆっくりと、少しずつ自分の価値っていうものを認めていってほしかった。

(でも……それだと遅すぎる……)

今回の一件で、改めて『敵』と言うものの脅威を認識できた。全てとは言えないけれど、あの一回だけでもそれまでの私が知っていたどんな敵よりも強力であることがわかる。

しかも、それがあの一体しかいないという確証は無い。むしろ、バックの組織が強大である可能性が高い以上はクローニングの可能性も否定できない。

(影内君でも、死にかけるほどの事態にまでなってしまった……)

無意識に、大丈夫という思い込みがあったのかもしれない。影内君なら、どんな敵が来ても倒せるんじゃないかって。

とんでもない、致命的すぎる勘違いをしていたのかもしれない。

(そして何より、私たちは彼らのことを知らなさ過ぎるくせに甘えてしまっている……)

戦力的にはどうしても影内君たちに頼りがちになっているのに、その彼らのことをろくに知らない。その正体がわからないことには迂闊なことはできないけれど、状況的に考えれば今後の体制構築のために彼らのことを知れたかった。

(なにより……影内君たちのことを信じたかった、それもあるしね……)

希望的観測とも取れる話だけれど、影内君たちの性格的にたとえ一枚岩ではないにしろ、その物がテロ組織としか言えないような組織に属するとは思えなかった。

(何れにしても、今回はあくまで私個人として言っている。

仮にお姉ちゃんたちに迷惑かけるような事態になったとしても、最
小限で済むはず……)

リスクはないとは言えないけれど、多分これが今の私にできる精一杯。

だから、まずは信じてみる。そのうえで、頼り過ぎないように立ち
回れるように鍛える。

箒や鈴の思いも、私の知る範囲でだけれどある程度は伝えた。キツ
カケにしかならないかもしれないけれど、それでもキツカケさえない
よりは良いと思った。

(……できる限りのことはやっては見た。後は、結果が出るのを待つ
だけ。

願わくば、それが私達にとっても影内君たちにとってもいい物であ
りますように……)

S i d e アイリ

病室の廊下で、一人になった時になって初めてため息をつきました。

先の会話の内容、いろいろと衝撃的な内容があったため今となってはやや気が重く感じます。

(どうして中々……どちらかと言えば気弱な方だと思っていたのですが)

先の簪さんの行動を考えると、多くの認識を改めなければいけないなどという思いが湧いて出てきました。賭けになりかねない要素が強かったとはいえ、それでも全くの無謀無策と言うほどでもない。アレが天然だとしたら、相当な才能でしょう。計算だとしても大した手腕です。

「にしても……私達のこと、ですか」

独り言のように呟きながら、歩を進める。一番、気の重い内容でした。

(まあ……私や一夏の独断で決めていい内容ではありませんね)

私達の立場的にも、そして実態としても私や一夏だけで決められることではないのは明白。そもそも住む世界自体が違うという関係上、何が起るかわからないのですから。

(最低でも、新王国に帰って兄さんたちに相談ですな……ですが、しかし……)

今回の発端、つまりは織斑先生に正体が割れ、それが派生する形で簪さんにも正体が割れた。

(……こうなっていると、改めて彼の正体を隠す手段を考えなければいけないのかもしれないですね。

いえ、むしろ今回の簪さんの要求を逆手に取ることも考えるべきでしょうか……?)

私達の正体、つまりはこのISが飛ぶ世界とは全く別の世界の人間であるという事。

正直、秘匿しておかないと色々と良くない未来が見える内容です。

(……此方の世界に来て改めて実感しましたが、社会情勢や科学技術

の発達具合があまりにも違いすぎますからね。

このまま情報が拡散するような事態になれば、それこそ大混乱は必須。そうでなくても、万が一何かを間違つて全面戦争すれば私達の敗北が見えていますしね)

此方側の情勢や科学水準を見て、総体的に判断すれば此方の分が悪いことは明白だった。

そもそも、科学水準が違い過ぎる。こちらの方でも毒ガスなどが使われたことはありましたが、此方の世界ではそれを進んだ科学技術を使って大量に生産することができます。こちら側の条約によって今でこそ使われる事は無いみたいですが、相手が異世界となればどうなるかなど、自信は持てなかった。しかも、それらに加えて意図的にウィルスなるものを使って病魔をばらまくこともできるみたいですので、そういった面で見れば惨敗しか見えない。

それらを抜いた直接戦力にしたところで、機竜の戦力的優位こそ私達にありますが、それ以外では全面的に負けているとみていいでしょう。戦車に携行火器に戦闘機、その他もろもろ。これらをすべて機竜ひとつで相手取ろうとすれば機竜ドラグナイトの負担はいかほどになるうものか。

(……直接の敗北をしないにしても、持久戦にでももつれ込まれば根本的な兵站の生産力の差から私達が負ける。手段を択ばないという前提があれば勝ちの目が無いとみていい。

攻めればしても、はたして状況を覆せるかどうか……)

最初は様子見兼牽制として、暗黙の内に調査が進むまでは此方の世界に対する干渉を国内外問わずにしないという状況が生み出されていた。

だが、その結果。あまりにも私達の世界とは違い過ぎて、そして発展した世界。ISと言うものによってかなりの歪を抱えるにまで至ってしまったようですが、脅威であることに変わりはありません……。

(むしろ、それらによって倫理的な物が徐々に壊れ始めてしまったという面が散見される以上はより脅威であると考えてもいいのかもしれない)

ませんね……)

仮に私達の正体を明かすにした所で、それを拡散させずに、かつ今までと同程度には互いにとって利のある関係が欲しい。

それが、おそらくは今回の要求に対する最適解……なのかもしれないせん。

(何れにしたところで、今すぐ答えを出す必要もないですね……)

頭の痛い問題ですが、成るべき早急に、しかし焦りすぎない程度には考えて答えを見つけませんと……)

出口の見えない問題に、それでも立ち向かわなければいけない。

ただでさえ今の一夏は怪我人なのですから、それくらいはしないと
いけない。

(それが、今の私が一夏に対してできる精一杯なのかもしれない
……)

第七章（3）：波乱の序曲

S i d e 一夏

先日の簪の要求から、早一週間。

ひとまず俺の方は退院することができた。IS世界側の医療技術が高いこともそうだが、医者からは「治りが早い。今までもこんな怪我をしたことでもあるのか？」と言う旨のことを言われた。

（心当たりがある分、否定できないな……）

以前の『パーストドライブ超過起動』の一件を始め、機竜の世界で少くない回数 of 怪我を負ってきた身としては強く否定できることもない。

（まあ、生きているし、それはいいか）

そんな風に思ったが、意識の回復と同時に真相を知っている一部の面々からは凄い形相で心配されていたのに意外な思いを抱いていた。特に箒や鈴なんかは回復が知れるや否や半ば泣きつくような感じにすらなつて見舞いに来てくれた。

あの二人には俺自身の素性を隠していることもあり、罪悪感に近い物を覚えてもいたのでむしろ申し訳なさを強く感じてしまっていたのでよく覚えている。

（今後は、こんな事態になつても対応できるように一層の鍛錬が必要か）

そんなことを考えて、ふと別な事にも思考が行きつく。簪のことだった。

（それもだが、簪の要求もだな。どう判断されるか……）

現状、新王国からの指示は特に何も無い。今現在は現状維持となっている。

だが、内容が内容なだけに気にもなる。しかも、簪も簪で本当に更識会長に言っていないのか、寮では未だに同室なだけに気まずい物がある。

（急かすような発言も今はないが、何時出てくるか……）

内心では微妙な緊張感を持ちつつ、目下に迫つたある意味で面倒なイベントをこなすために教本を読み広げる。

——そう、期末試験と言う地獄イーストを。

S i d e 箒

残り数日と迫った期末試験のために、主に一般科目の勉強を進めていた。

と言うのも、実のところ代表候補性や企業代表の面々はその手に必要な勉強をすでに終えている場合がほとんどだったりするからだ。そもそも、その立場を手に入れるための必要最低限なのだから。

故に、必然として割合として、一般科目の勉強の比重が高くなっていく。特に、元より頭の出来が特別良い方ではない私にとっては（そう言えば……）

ふと、友人のことを思いだす。一応は企業代表ともなっており、さらにあまりにも高すぎる、けれど精神的に問題を抱えた友人。

（あれほどの腕前を持っている上、二機を任されている割にはIS関連の知識には疎かったな……）

悪口を言うわけではないが、意外な思いを抱いたのは確かだ。

（性格的には勉学に手を抜きそうに見えないが……人間、何処かには苦手があるものか）

そんなどうでもいいような内容を考えながら一般科目の勉強を進めていく。

「あ、ほーちゃんその問題の解答違うよ」

「ん？」

本音に言われ、確認する。結果、やってはいけないレベルの凡ミスが発覚した。

「違う問題の解答を書いている、だと……」

「場所さえ違えば正解なのにね……」

これには一緒に勉強していた本音も苦笑い。

そんなこんなで私達の試験勉強は進んでいく。

——おそらく、私の人生一の波乱となったあの夏休みに向けて。

S i d e 簪

期末試験真つ最中の I S 学園。

私は I S 関連の勉強については代表候補性になるときに勉強したので、ある程度は教えられるくらいだったから一般科目を中心に試験勉強を進めていくことにしました。

ですが、それと同時に同室の影内君にも I S 関連のことを教えたりもしました。《アステイグ》という余りにも強力過ぎる機体を任されているにも関わらず少しアンバランスにも思えましたが、今はそれを気にしても仕方が無いと思いい口には出しませんでした。

(あるいは、特異な操縦系だけに特化した訓練を受けたのかな……?)
影内君の機体が特殊であることは見た目からして分かりきっていることですが、操縦系も謎の代物と言っているいい物です。常に待機形態の剣をもって操作していますし、他と全く同じと言う事は無いでしょう。

それにのみ特化した操縦知識を学び訓練を積んだと考えれば、このアンバランスさも納得できはします。

(でも、何か違う気がするんだよね……)

自分で考えて一応の納得は得ましたが、何処かに感じる違和感を払拭できません。何かを見落としているような、そんな気さえます。

「簪、すまないが此処と此処は……」

「あ、その問題はその参考書の……」

そんな今考えても仕方のない、今やっている試験勉強には全く関係のないことを考えていたところ、やや決まり悪そうな影内君からの質問が来しました。

どのみち、今の私ではこの違和感に対する回答を出せるほどの情報を持っていません。彼らに投げかけた私個人としての要求も私としては急かす気はありません。

(すぐに答えが出るとも思っていないし、そこだけはゆっくりとかな。

それに、一応は私個人としての欲求として出しておいたし、今まで隠していたってことは影内君の素性に関してでも知られたくないっていう事……。

となれば、すぐに知らされるっていう事も無いと思うし)

今まで関わってみた感じから、影内君たちの一味がある意味でものすごく優秀であることはよくわかります。だからこそ、差し迫っていない状況で一か八かの策に出るといえるのは考えにくかったというのもあります。

とはいえ、それも向こうの出方次第。私にできることは待つことだけ。

(後の心配事と言えば、最近活発になってきたっていう『IS狩り』かな。

更識の情報網どころか、倉持での噂話でも聞こえてくるくらいには活発になっているみたいだし)

此方も詳細は分かりませんが、かなり危険な内容であるという事だけはわかります。そもそも詳細が各国によつて隠蔽されている状況でも噂話程度ではあるけれど聞こえてくる、という方が異常なので、危険ではないはずがありません。

以前、お姉ちゃんがアイリさんに話したIS搭乗者への襲撃が、より激しさを増して噂話になってしまったと言えるでしょう。

(それが私達のところに来ないとも言えないわけだし、警戒はしないとね)

この件の恐ろしいところは、攻撃対象にされる条件が不明な点と、ほぼ確実にISが撃破されている点。代表候補生も撃破されていると言う話もあるのだから、私達だって安心できる話ではない。

しかも、ISを狙っているという点だけに限ってみれば、IS学園だつて狙われないとは言いきれない。

(いずれにしても、今は情報が少なすぎるし保留するしかないのかな。

お姉ちゃんも『ウェイル』っていう人の件と合わせて調べているみたいだしね)

更識の方でも調べてはいるみたいですが、私自身はもともと家の仕

事からやや離れてしまっている面もあって、どちらかと言えば情報をお姉ちゃんやお父さんたちが持っている形になっています。

(それ自体は今となつては仕方のないことだし、できるところから始めていくしかないかな)

今更な思いを抱きますが、それでできることが増えるわけでもありません。

今後のことに対する心配をしつつも、今すべきことをしていきました。

S i d e ラウラ

一度は勉強したがそれでも難しい日本語を重点的に復習しながら、試験勉強と言うものを進めていく。大真面目な話として、これができないことにはそもそも試験問題を読むことも難しくなってくる。

「ラウラ、その問題多分読み間違えてるよ」

「む……そう、だな」

一緒に勉強しているシャルロットからの指摘を受け、解いていた問題を見直す。確かに、日本語の意味を間違えていたようだ。

改めて読みなおし、解きなおし、解答を書きなおす。今度は当たっていた。

「教授、感謝する」

「大袈裟だよ」

シャルロットに礼を言ったが、微笑を伴って軽く流される。彼女にとっては本当に大したことではないのだろう。

とはいえ、自分のことのみならず相手の状態や作業内容にまで気を配れるその能力は素直に賞賛に値するものだ。私も見習っていくでしょう。

「……そう言えば、や」

「なんだ」

今までとは幾分か真剣な口調で放たれた言葉に、私も身構えた。試

験勉強の内容を教え合っていた時の口調とは明らかに異なっている。

「最近噂になっっている、『IS狩り』は知っっている?」

「ああ。」

我が軍でも事実関係を調査中だな」

シャルロットが振ってきた話題は、最近になって方々から聞こえるようになってきたものだった。

とはいっても、シャルロットに言った事もすべて本当と言うわけはない

「そっか……。」

デュノア社のほうでも、実は結構大きな話になっていき。《イクス・ラファール》を卸した先でも何度かそういう事があつたって話もあるんだよ」

「最新鋭機を配備した先でも、か……。」

そうになると、IS学園も安全とは言い切れんな」

基本的に最先端の技術が寄せ集められて作られているIS学園だが、何も万能の施設と言うわけではない。運用する人間もそれは同じ。

いつ、どこで、どのような形で追いつめられるか分かったものではないのだ。

(しかも、狙いがISだとするとこの施設はむしろ格好の的になってしまうのが辛いところだな)

ここは声に出さなかったが、そういう認識を持っている人間もいないわけではないだろう。だが、多数派かどうかは怪しい物だった。と言うより、少数派で確定だろう。

なにせ、ISに関わって数年としない人間が圧倒的に多数なうえ、その中で実働戦力として動ける人間は少数。しかも、その中ですら試合ではない戦いを想定している人間がどれだけいる事か。

(……大事にならなければ、いいな)

『ウェイル・アーカディア』なる人物の一件や、最近になって活発化している『IS狩り』を含め、拭いきれない不安が心の中に広がっていくのを感じていた。

「……」

配布された試験結果を見てため息をつく。特別悪いものではなかったが、上位と言えるほどでもない。真ん中よりは上と言った結果に終わった。

（赤い点数ではなかっただけマシと見るか……いや、もう少し遅れた分を挽回することを考えるべきだったか……？）

あの《ポセイドン》擬きと戦った後、暫くは入院したためにやや勉強が遅れ気味になってしまっていた。

一応の退院後から簪はじめ幾人かの友人たちから授業内容を聞いたりしたのはものの、やはり最後の詰めが甘かったのだろうか。

（そればかりは、次の試験までに十全にしておくしかないか……）

そもそもあの一軒も自身の未熟から来たものなのだから、今更いたところで仕方がない。今後は、入院で休養していた分を取り戻すためにもより一層、鍛錬と勉強に力を入れよう。

（……まあ、その前にもう一つ、ある意味で試験なんかよりも大事な用事があるが。

そのためにも、今はひとまず鍛錬の方を優先するか）

IS世界では夏休みに当たる期間、機竜側では全竜戦がある。可能であれば出場してほしいとのことだったし、出れるように色々を整えておこう。

（その間の任務のことも、まだ決まってないしな。

ひとまず、そのあたりのことはルクスさんかリーシャ様、あるいはセリスさんか……）

今後のことをいくらか考えつつ、試験結果の印刷された紙を仕舞う。

周囲の面々はその結果に一喜一憂しているみたいだが、事情が事情だったため今回に限り元より悪いこと前提で行動している身として

はそこまで気にすることも無かった。

何の気無しに周りを見れば、いつも通りの緩い笑顔を浮かべているのほんさんに、やや渋い顔をしている箒、笑顔を浮かべているオルコットにシャルロット、いつも通りの硬い表情のボーデヴィツヒの三名が見える。

そんな風に過ごしていると、授業終了の時間となる。

「影内、少しいいか?」

この時間になればある程度は自由時間として扱えるため、いつもはこの後に鍛錬時間が挟まれる。だが、その移動に入る前に箒から声がかけられた。

「……? なんだ?」

「えつとね、かいちよくが来てほしいって」

一緒に現れたのほんさんから一言で、この後の鍛錬が遅れることが決定した。だが、一応は生徒会に属している身としては無視するわけにもいかない。

「わかった。すぐにか?」

「そうだね……」

急で申し訳ないわねって、言っただけどど」

そもそも今までも緊急の事態や突然の呼び出しなどはよくあることだったので、それ自体は特に何も問題ないし、俺としても文句の一つもない。二つ返事で返して、そのまま行くことにした。

二人も一緒に行くとのことだったため、三人そろって生徒会室の方へと歩いていく。さらに、道中で簪とも合流し、合計四人で歩いていく。

「そういえば、影内。」

「さつき、何か考え事でもしてたのか?」

「ん? ……ああ、そうだな。」

近々、本社の方で少し用事があつてな。参加可能ならしてほしいと言われているから、そっちに行くことになるかもしれない。その時の調整とかをどうしようかと思つてな」

機竜側に関する詳細な情報を入れない限りは話したとしても問題

ではないし、ある程度そのまま本当のことを話しておく。
そうすると、

「近々って、何時頃になりそうなの？」

そう聞いてきたのは簪だった。心なしか、不満そうな、或いは不安
そうな表情を浮かべている。

あの《ポセイドン》擬きが出てからまだそう経っていないし、不安
に思うのも仕方がない。だが、不満そうな部分が見受けられたのは理
由がわからなかった。

「多分、夏休みの初めごろになるな。」

期間がどれくらいになるかはわからないが……」

「そうか……。」

そうになると、その間は私達だけでどうにかするしかないか……」

「いや、さすがにそこまで言う気はないぞ？」

一応その間のことは今後の相談次第になるとしても、此方のことを
完全に放り出すというのは考えていない。さすがに誰か交代人員を
手配してもらうつもりだった。

「そうか……。」

しかし、こうもそちら側の都合一つでガタガタになるとい
うのは……」

「仕方ないだろう。」

それに、俺たちとしても蔑ろにするつもりは無いから、安心して
くれ」

「でも、やっぱり頼りすぎな気がするよ」

剣崎の愚痴じみた一言に対して言った言葉に、さらに重ねたのは簪
だった。

（やはり、先日の一件を気にしているのか……？）

確かに小さくは無い怪我を負ったが、こうして復帰できているので
そこまで俺自身としては気にしていない。それでも

「ま、いずれにしても今は呼び出しの内容だな」

やや強引かもしれないが、これ以上の言及は無関係な一般生徒にも
聞かれる可能性があるものでこれ以上は好ましくない。そう思い、会話

をいったん切った。

それは三人にも伝わったようで、そのまま別な話題が展開されていく。

(さて、実際のところは何の要件なのか……)

心の中だけでそのことを気にしつつ、俺自身も歩を進めていった。

「急で悪いわね〜」

「お気になさらず」

相も変わらぬようにも見える更識会長が待つ生徒会室に到着して早々、

だが、その様子は普段よりは緊張しているようにも見える。

「さて、今日は早急に聞きたいことがあつてね。

よかつたら聞かせてもらえないかしら？」

「内容によります」

だが、次に発せられた言葉の声音がそれが冗談でも何でもないことを告げていた。

此方も構えなおし、その後が続く問いかけに備える。内容によっては答えられないこともあるだけに、

「聞きづらいと言えば聞きづらいんだけどね……」

先日、影内君が戦ったつていう烏賊の化け物のような相手のこととか、その時に出てきた『棘刑』きよくけいとかいう人の機体について。貴方の見解を聞いてもいいかしら？」

確かに大けがの元凶となった一件ではあるが、だからと言って言いづらいというほどでもない。二つ返事で了承した後、わかる範囲でおかつ当たり障りのないことだけを話すことにした。

「まず、巨獣のことですが……」

実のところ、我々としては以前、あの巨獣と類似した敵との戦闘経験があります。それ等との関連性は詳しくは分かりませんが、その時の敵と同様に常軌を逸した再生能力を持っており、また、水中に対し

て高い適性があるように思われますね」

「……以前、戦ったことがあったの？」

更識会長が目つきを鋭くしつつ聞いてきたが、その質問には語弊がある。そして、それは回答するべきものだった。

「俺自身は直接の戦闘経験はないです。」

以前の時は、師匠達が討伐してくれましたから」

「ああ……あの人達ね」

どこか遠い目をした更識会長が変な方向で納得してしまつたような感じだったが、フランスでの一件でしか実際の戦いぶりを見ていないのでは仕方ないと思つた。それに、態々それを正して際どい部分の説明をする必要もないので、そのままにしておくにとにした。

「でも、そうなる……そうね。」

影内君、もし仮に貴方達が何らかの理由で即応不可能な場合、私達だけで倒せると思う？」

「……正直に申し上げて、現実的ではないと思います。」

先日の臨海学校の時に俺が倒せたのも、ある意味で奇跡の親戚みたいなものでしたし」

辛辣なようではあるが、こればかりはそのまま正直に言うしかない。下手に対抗策を考えて空振りなどしてしまえば、それこそ取り返しのつかない事態になりかねないのだし。

その考えは更識会長もわかってくれたのか、或いはこの質問をした時点で予測済みだったのか、特に大きな落胆もなかった様子を見せただけだった。

「やっぱりかあ……。」

でも、さすがにその人たちレベルの人に常駐してほしいってのは……。」

「……一応、言うだけ言ってみることはできますが、あの人達は文字通りの意味で誇張無しの此方の最高戦力です。さすがに無理があるかと」

更識会長もただの確認程度だったのか、これまた落胆した様子もなくさらに困った顔になっただけだった。

だが、こればかりはさすがに仕方がない。七竜騎聖かその補佐官レベルの機竜ドラグナイト使いを友好国でもない他国に長期間滞在させるなど、そうホイホイできる事でもない。むしろ不可能と言って差し支えない。「それもやっぱりかあ……」

今すぐどうこうつてのは無理そうだし、これは追々やっていくしかないかしら」

「あの一体だけであれば、楽だったのですが。」

そうとも限らない以上は、何かしらの対策は必要でしょうしね……」

現状、即時実行可能な対抗策はない。少なくとも、この場にいる人間には思いつかなかった。

重い空気が場を支配しかけるが、その中で一人、別なことに気を向けた人間もいた。

「楽っていうほど楽でもなかっただろうに……」

剣崎だった。心なしか。やや半目気味になっている気がする。

「ま、確かにね」

「一歩間違えばどうなっていたかわからない状態だった、と当時の担当医からも話がありましたし、楽と言える相手ではないですね」

意図は不明だが、更識会長と虚さんも同意していた。しかも、虚さんに至っては手にした手帳をめくりながら担当医だった人からの証言すら引用している。

「一応、今後の対応にのみ絞ったつもりだったのですが……」

さすがに旗色が良くないうえに、このままよくない流れを維持するのは好ましくない。

一応の反論を混ぜつつ、適当なタイミングで『全竜戦』のための帰還のための話題でも出そうかとした時だった。

「そう言えば、影内君」

この一言で、場の空気が一気に変わる。その声の主は、簪だった。

「あの事は言わなくていいの?」

「あの事……ああ、確かにそうだな」

簪が何を言いたいのか薄々察しが付き、自身の言いたかった話題で

もあるのでそれに感謝しながら続きと要件を言う事にする。

「ん？ あの事って？」

「ええ、実は……復帰したばかりで申し訳ないのですが、近々本社の方の用事で可能なら戻ってくるように言われていまして」

「え……」

更識会長の表情が、おそらくは素で固まった。

「可能でしたら、交代人員等のことについて相談するために本社の方に行きますが……」

「そうして頂戴。」

さすがにこの状況で貴方達の助力が無いのは辛すぎるわ……」

あからさまな安堵の表情を見せた更識会長に、内心で胸を撫で下ろす。これで変に話がこじれることも無いだろう。

(後は、新王国の方でどういった判断が下るかだけか)

目下に迫った最大の不安要素を顔に出さないように努めつつ、更識会長と詰められるところを詰めていった。

S i d e 簪

影内君が帰還のための相談に赴くことになって、もう数日が経過しました。この機に諸々の報告もすることになったとのことだったので数日かかってしまっているみたいです。

交代人員として今は一時的にバルトシフトさんが来てくれていて、更識家私の家を仮の拠点として待機してくれています。

「お疲れさまでした」

「はい、お疲れ様。」

今日はここまでで大丈夫だから、帰ってもいいよ」

そして、私は《打鉄式式》の点検と必要であれば整備も行うために倉持技研まで来ています。

例のごとく如月さんが異様な手際の良さで仕事を終わらせ、ついでに予定外のチューンを空いた時間でやってもらい、今に至っていま

す。

そのままお礼だけ言い、帰らせてもらいました。もう遅い時間と言う事もあり、周囲は暗いです。

そのまま電車に乗り、今度はちゃんと終点まで乗れました。そのまま駅のホームを出て、迎えの車に乗り込む。人通りも少ない場所で遅い時間と言う事もあったて家の人が来てくれていた。

——イイイイイ……

そうして車に乗ろうとした瞬間に、微かにだけけど聞こえた耳障りなほど甲高い音。

そして、視界に僅かに映った月明かりに光る細い何か。

「逃げてー!」

咄嗟に叫んで、その場から飛びのいた。

リイイイイイイイイ!

音は一瞬だけ大きくなり、運転手として来ていた人も飛びのいた。伊達や酔狂に家で訓練を受けているわけではない。

ギャリイイイイイイン!!

一際大きな音が一瞬だけ聞こえた直後、乗ろうとしていた車が十八分割されてしまっていた。

さすがに悪寒を感じ、直ぐにISを展開する。

「下がって!!」

同時に、運転手さんにも下がる様に伝えた。運転手さんも一も二もなく頷き、直ぐに下がってくれる。

ヒュオ!

運転手さんに警告した直後、今度はダガーのような短剣が飛んできた。

ガギャン!

「……誰?」

間一髪のところ私のIS《打鉄式式》の展開が成功し、短剣を弾き何とか事無きを得ます。

「一応は《亡国六刑士》。『糸刑』のセイカ。

……気に食わないけど」

襲撃してきたのは、敵だと分かっている一瞬目を見張ってしまったほどの綺麗な人でした。月明かりに照らされたその姿は、着ている服が服なら大和撫子と言う言葉が似合う容姿に伸ばしてあげればさぞ見事だっただろう綺麗な濡羽色の髪を雑に短く切り揃えていました。

そして何より、異様な執念の輝きを宿した髪と同じ色の瞳が目を引きました。

「やっし」

《ユナイテッド・ワイバーン》や以前襲ってきた『棘刑』と名乗った人物の機体とよく似ている、四つ足のISにも見えるそれに忍者刀のような短い直刀をロボットアームのような手に握り、逆に西洋的で装飾が成された短刀を彼女自身の手に握り、幽鬼のように立っているその人は、一種の悲壮な覚悟すら感じさせる居住まいでした。

構えその物は自然体で、両手をダラリと下げ何処にも力を入れていないようにも見えます。ですが反面、周囲への警戒は怠っておらずぐには隙が見えません。体からも無駄な力が抜けて、自然体にも見えるそれはその後の動きが読みにくく、同時に素早く動けるのだろうかとは想像に難くありませんでした。

「貴女に恨みはありませんが、まあ仕方ありません。

死んでください」

それは、余りにも分かりやすすぎる脅威との戦いの合図でした。

第七章（4）：限りなく遠く、限りなく近い空

Side 簪

ヒュオ!

夜闇の中に隠される糸を、月明かりと音だけで掻い潜る。見た目にはハイパーセンサーを使っても補足し続けるという事は厳しい物があります。故にこそ、一瞬だけ月明かりに光る瞬間か、振るう時に鳴る空気を切り裂く音を頼りに掻い潜るしかない。

（それでも、かなりギリギリだ……どこかで、状況を変えないと……！）

それでも、警戒しているにも関わらず不意を突かれかけたりする。視認は愚か、半ば勘に頼って避けざるを得ないこの状況は、思っていた以上に状況を悪くしていた。

（まるで、詰め将棋みたいだ……一手一手、私の手が潰されて行っている……！）

まず、根本的に避けにくくそれなり以上に強力な糸の存在があるうえに、それ自体が実弾兵器を切断する特殊な方法ではあるけれど簡易的な防御手段にもなっている。その癖、『糸刑のセイカ』と名乗った彼女自身の近接技能も高く、彼女の短刀をリーチの差があるにも関わらず私の薙刀では抑えきれない。しかも、あの機体自体が光学迷彩に似た機能も搭載しているらしく、時折、此方の視界から完全に消える始末だった。各種センサー類をフルに活用すれば見つけられない事は無いけれど、戦術戦の最中にそんなことをする余裕は私にはまだ無い。

「思ったよりは粘りますね。」

それとも、経験、と言うものですか？」

平坦な口調で、けれど不可思議なことを言ってくる。

「伊達に、代表候補生なんてやってないよ！」

けれど、内心を悟らせるのも結果的には不利につながってしまう。敵の腕前がいいのが確定しているこの状況でさらなる状況の悪化は避けたかった。

「そういう意味ではないのですがね……。」

……もしや、アレがドラグライド装甲機竜であることを知らない？」

だけど、『糸刑』はやや呆れを含んだような声で私の言葉に反応した後、誰に言うでもないかのような雰囲気、私の知らない単語を口にしていた。

「ドラグ、ライド……？」

「ああ、その様子だと知らないみたいです。」

まあいいです。その方が私も殺りやすくなりますから」

だけれど、私の疑問を置き去りに、『糸刑』の攻撃が苛烈さを増していく。派手な一撃と言うものがない代わりに、避けるにいく、そのくせ下手すれば致命打になる一撃を放ってくる彼女は強者と言うより曲者か間者と言う印象を持つ。

(戦いづらい……)

本来なら私はそういう相手をどうにかしなければいけない立場なのだけど、私自身の腕前の問題もあってそこまで上手く相手できていない。むしろ、押されてすらいる。

「インパルスワイヤー竜振斬線」

再び、あの糸が迫りくる。周囲に敷設され過ぎて避けるにいくことこの上ない装備は、確かな威力をもって私に襲い来る。

(これ、ただの鋼線に見えるけれど……多分、超音波メスに近い……)

ただの鋼線ならいくらでも防ぎようがあるけれど、これは……。初めて見るタイプの装備に、中々対抗策が思い浮かばない。とにかく避けながら避けながら、牽制目的に連射型荷電粒子砲《春雷》を撃ち続ける。

けれど、さすがに使い過ぎたのかももうエネルギーが半分を切り始めている。しかも、『糸刑』はさほど苦にしてはいないようで、余計に焦りが募っていく。

「《山嵐》！」

周囲の状況を確認し、すでに人気のないところまで出てくれたことを確認。その後、半ば抜き撃ちのような感覚で《山嵐》を一斉射する。

リイイイーン！

再び、あの甲高い嫌な音が響く。瞬間、私が撃った《山嵐》の弾頭が全部切断された。直後、その全てが爆発する。

(あの糸で《山嵐》のミサイルを全部切った……!?)

信じられないですが、目の前で起きた現象の説明をするにはそれ以外に考えられませんでした。

(とにかく、あの糸をどうにかしないことには……)

縦横無尽に、或いは変幻自在に攻め立ててくるワイヤー。時には直接的に振り抜かれて、或いは木々に絡められたその先端が気付かないうちに迫りくる。

ヒュ ヒュヒュン

その合間合間に来る、あの忍者刀のような剣。基本的には普通に振られることが多いけれど、時折、五、六本ほど一気に取り出してはそれを投擲してくる。それ自体の威力はさほど高くなく、防ぐのにも苦労はしない。けれど、その防ぐ、或いは回避する一瞬がその後の一手に僅かだけ致命的な遅れを生んでしまっていた。

ガキユガキユ ヒュン

そして、ワイヤーアクションじみた方法で行われる回避行動。周囲の適当な物に引っ掛けたそれを急速に巻き取ることによって不規則な軌道を描く糸刑は、

少し戦えば分かることで、彼女の戦術はその中心にあのワイヤーの存在がある。それさえ封じられればこの状況を覆せるかもしれない。(でも、そのためにはどうすれば……)

打開策が見つからないまま、とにかく牽制を目的に《春雷》をばらまく。既に近接戦では根本的な技量の差で話にならないことがわかっていたから、近寄らせ過ぎないことを意図して牽制。それでも近寄って来た時だけ薙刀のリーチ差をもって踏み込ませ過ぎないように足止めし、すぐさま離脱。それをただひたすらに繰り返しながら、どうにか打開策を模索する。

「……そろそろ、潮時ですか。」

全く、連中も面倒な事を押し付けてくれる……」

『糸刑』はそれだけを呟くと、そのまま短刀を持っている方とは別の

腕部に何かを取り出しました。

(……………?)

紅い……クリスタル……?)

見た目だけで言えば、四角錐を底面同士で結合したような形状の、紅いクリスタル。ISコアをそのまま紅色にしたようにも見えるそれは、この場に余りにも不釣り合いなようにさえ見えました。

「展開、開始」

咄嗟に《山嵐》を展開して発射し、同時に飛び退こうとします。ですが、そこでも『糸刑』は私の上を走りました。

ギリリ……

何かに引つかかったような擬音。直感で最悪の事態を察し、直後にそれを理性で理解する。いつの間にか、足にあのワイヤーが絡みついていた。

「しまっ」

「《転 移 球》、稼働開始。」

……さようなら、IS乗りさん」

『糸刑』が無感情に、告げてくる。その瞬間に、突き出された紅いクリスタルに異変が起きた。

ギャルルルル！

百足にも似た、平べったい多関節の金属板の側面から僅かに節の着いた金属製の丸棒が突き出た何か。

それが何本も物凄い勢いで量子変換され実体化していく。さながら虚空から金属の百足が突き出てくるようだった。しかも、私を包み囲むように動いている。

「……………ッ！」

思わず反射的に背面に這い上がってきた嫌悪感に、咄嗟に《春雷》のトリガーを引いて乱射する。この至近距離でこれだけ視界を覆うかのように展開されているので、狙いなんてつけなくても大雑把に向きを合わせるだけで当てられる。同時に、《夢現》を可能な限り振るう。とにかく、この百足のような機械を壊すことだけを考えた。

ギャギギギギン！

だが、私の一連の連撃は全く破壊になど至っておらず、それどころか傷一つない。なにより、その原因と思われる、不可視の装甲板のような何か。

それとよく似た現象と、これまで見た機能。それに、見覚えのあるものが重なりました。

「絶対、防御……？」

「それを模した機能、ですよ。

……まあ、この世界から消え行くあなたには関係ないことなのかも
しれません」

完全に私が覆いつくされる前に放たれた、一言。その意味をよく考
える間もないままに、私は私を覆いつくしたその百足のような機械か
ら放たれた、眩し過ぎて目を開けていられないほどの光に包まれて――

Side 楯無

簪ちゃんを迎えに行った運転手から緊急の連絡を受けて来てみれば、その事態はあまりにも異常に過ぎた。

ISのハイパーセンサーを最大望遠にして辛うじて確認できるほどの距離が開いている状況で、それは起きた。簪ちゃんと交戦していた敵が突然突き出した、紅い何か。それから出てきた何かの機械が、簪ちゃんを包み込んだ。

交戦していた敵と思しき女性が何か言っていたが、さすがにこの距離だと分からない。

焦りだけが募っていき、とにかく《ミステリアス・レイディ》を加速させていく。バルトソフトさんが使っている《ワイバーン》の方が単純な速度は上みたいだったから、先行して様子を見に行ってもらう。とにかく、簪ちゃんの安否が心配だった。

けれど、その感情は無情にも水泡に帰すことになる。

簪ちゃんを包み込んだ機械。それが急速にその姿を消していく。

まるで、ISの量子化を用いた格納機能を見ているかのようだった。そして、簪ちゃんを包み込んだその機械が完全に消えた時———そこには、何も、無かった。

誰も、居なかった。

「……ッ！」

簪ちゃんああああああん！」

思わず絶叫し、イクニッション・ブースト瞬時加速まで吹かせて一気に距離を詰める。とにかく、事の詳細を割り出したうえで簪ちゃんがどうなったのかを知りたかった。

先行したバルトシフトさんが既に切り結び始めているけれど、やや劣勢みたい。決してバルトシフトさんの腕が悪い訳ではなく、相手の動きが見ただけで分かるくらいに良いのだ。

「……行って！」

射程距離に入るや否や、《蒼流旋》に内蔵されたガトリングを展開。牽制がてらに撃ち放ち、動きを何とか止めようとする。

バルトシフトさんもその動きを察知したみたいで、すぐに離脱してくれる。けれど、それは相手も同じだったようでほとんど避けられてしまった。僅かに直撃コースをとった水弾も、何か高音が鳴り響くと次々と分割され、霧散してしまった。

「があああああああ!!」

半ば自棄になっていることを理解しつつも、止められない。そのまま可能な限り鋭く素早く槍を振るい、無力化を試みる。

けれど、できなかつた。

「増援、ですか？」

新王国の機竜ドラッグナイト使いと言い、此方の暗部と言い、早い対応ですね」

私の槍を軽くないなし、後ろに跳躍。バルトシフトさんの追撃も避けられた。

そのまま、あの機体は再度跳躍し、そのまま何かを量子化を解除して取り出したみたいだった。腰回りに明らかに他の部分とは意匠の違うユニットが出現する。

(……あ、れ?)

どこかで見たことがあるそのちぐはぐさに、一瞬、意識が奪われる。それは、致命的な遅れになってしまった。

「それでは、これにて。
さようなら」

瞬間、その機体が地面に細長い何か——多分、鋼線ワイヤーの様な物——を地面に叩き付けた。瞬間、その周囲から盛大に土埃が舞い上がる。ISなら本来全く問題にしない程度のもものだけけど、いかんせん状況が悪かった。元々、精神的に動揺していたところだったために判断が遅れる結果になった。

気が付いた時には後の祭り。既に敵の姿が見えなくなっていた。

S i d e シヤリス

一夏君の生まれたISの世界に来てから数日。余りにも大きな事態が起こってしまった。

「……簪ちゃん」

半ば茫然自失とした様子を見せているのは、隣でIS《ミステリアス・レイディ》を纏っている更識さん。こちら側の協力者と言う私達にとつては重要人物であるが、今は迂闊に声をかけられそうにない。ただでさえ、目の前で妹さんが消えた上に目の前にいた敵からはほぼ何も情報が得られていない。

(……そう言えば)

先程の機竜使い。流すように軽くではあるが、私のことを明確に『新王国の機竜使い』と言っていた。

(……明確に、此方の事情にも精通しているというのか?)

だが、だとしたら……)

情報において完全に負けている可能性を否定できない。更識さんを頼ろうにも、戦力を提供しなければいけないはずの場面において、完全に後手に回り、あまつさえ協力者の家族を犠牲にする始末。

(一体、どうなるんだ……)

異様な状況に、どうしようもない不安を覚えるしかなかった。

S i d e 一夏

「突然の、《球体》^{スライア}の発生ですか？」

「ええ。」

今は特に何か変化があるわけではないです。

ですが、内容が内容なので、確認に行かなければいけないのですけども……」

セリスさんはその話をしながら、若干困った顔になっていた。

理由もわかる。これから軍議、しかも今の新王国内の貴族も多数集う大規模なものが控えている状況でのこの事態だった。内容が内容なだけに向かわせられる人員が限られ、しかも何が起きているかわからない以上は戦闘力を含めた対応力も求められる。

人員の選定も本来なら慎重に行うところだが、いかんせん突発的な事態と言う事で準備なんてろくにできていない。

さらに悪いことに――

「しかも、既に『誰か』がいることが確定していると」

「ええ。最初に発見した見回りの部隊の《ドレイク》が、《球体》周辺に突然現れた人の反応を確認しています。

ただ、それ以上に――」

ここで、セリスさんは少し躊躇うような様子を見せていた。何か、碌でもない事態が起こっている予感がする。

「――そこに向かっている別な人の反応もありました。

しかも、機竜の反応もあります」

「……新王国、ではないですよね？」

無いだろうとは思いつつも、僅かな希望にかけてみて言いはしてみた。

「いえ、無いですね。」

あつたとしても、確実にこの案件について何も知らない人間でしょ

う」

何かを諦めたかのような溜息を吐き出しながら、そう言った。

「軍議を疎かにはできませんし、良ければ俺の方で行きましょうか？」

一応、この案件にも首を突っ込んでいる身であり、形式上ではあるけれどルクスさんの部下でもあり、騎士団シヴァレスの一員でもある。このまま黙って見ている気などなかった

「……戻って来たばかりなのに、すみせん」

セリスさんもそのつもりだったのか、安堵と申し訳なきがなймаぜになったような顔になっていた。

「いえ、問題ないです。ですが……」

「アイリの護衛なら任せてください。あなたが承諾してくれたらノクトとテイルファーが当たってくれるように手配しています」

言わんとしたことを先に言われ、しかも万全を期せるように体制を整えてくれている。

(やっぱり……頼りになるな)

短い間、しかもその気になれば支援を期待できる体制だったとは言え基本的に機竜側の事情を知る人間としては単独で動くことも多かった。

それだけに、個人的な事まで含めて動いてくれる人がいる、というこの状況に自分がどれだけ甘えているかもよく理解できる。

「二夏」

そうして僅かな間、思考に沈んだ俺を再び現実に戻してくれたのは聞き慣れた声だった。

「アイリさん」

「聞きましたよ。」

行くのですか？」

いつの間に来ていたのか、テイルファーさんとノクトさんの二人と一緒にアイリさんが来ていた。

既に、俺がどう返答するかも予想しているのだろう。その声は半ば確認の響きを帯びていた。

「はっ」

下手な装飾は入れずに、ただ一言だけで答える。

「そうですか……。」

一夏

アイリさんは少し言葉を選ぶように間を空けた。

「いつも、言っていることですが。」

必ず、帰って来てください」

「はい」

けれど、紡がれた言葉は同じ。それに対する返答も、変わることもない。

「行ってらっしゃい」

何の気無しに 放った言葉だったのだろう。けれど、その言葉を聞くとびにどうしようもなく頑張れてしまいそうな自分がいた。

(家を出るたびに一人だった時もあつたからなあ……)

あの世界に行つて帰つて来たためだろうか、そんなことも考えてしまふ。

けれど、そのまま黙っているわけにもいかない。何より、この言葉には返さないといけない言葉がある。

「行ってきます」

それだけ答え、機竜の発着ができる場所に足を向ける。

時間的猶予は多くは無いけれど、このやり取りが溜まらなく嬉しかった。

S i d e 簪

「……ん、んう」

何か強烈な光に包まれた後、体を無理やり何度も何方向からも突き飛ばされたような衝撃を感じ、そのうちに気を失ってしまったみたいだった。

《打鉄式式》にもダメージこそあるみたいだけれどそこまで致命的な物ではなく、十分に活動できる。むしろ、戦闘で受けたダメージの

ほうが大きいみたいだった。

(でも……)

ISを纏っている状態であれだけの衝撃だったのだから、どれだけ大きな衝撃だったかも分からない。それに、確認してみればそれなりにSEも減っていたので、実際にはとんでもない衝撃だったことがうかがい知れる。

(戦闘中じゃなかったら危なかったな)

戦闘中でなければISを纏っていない状態でアレを使われる事になつていた。生身でISのSEを削り取れるほどの衝撃を受けるなんて考えたくなかった。

「……それにしても」

不意に、周りを見渡してみても気づく。

「ここ、何処？」

全く見覚えのない森の中。さっきまで居たはずの場所とは人工物の有無から明らかに違う場所とみられるばかりか、人の手が入った跡もほとんど見られない。

けれど、それどころではない事態になろうとしていることを起動したままの《打鉄式》が教えてくれた。

ビシユウウン！

「ッ！」

咄嗟にスラスターを吹かせ、緊急上昇。直後、私がさっきまでいた場所に光弾が刺さった。

(思っていたより消耗している……でも、それ以上に)

周囲の様子と自分の状態を素早く再確認し、次の一手に備える。今度は、先程の光弾に比べて威力自体は低めの光弾。けれど、正確に私のところまで飛んできている。

「……チッ！」

あの見たことない神装機竜使い、中々避けるねえ」

「焦るなよ。」

機竜もだが、乗り手も上玉だ。上手くやればどっちも高値が付くだろうよ」

「違いねえ……」

居たのは、数基のISと思われるパワードスーツを使っている一団。機体の意匠が影内君たちの使っていた機体にも似ていたことから、もしかしたら関連があるのかもしれない。

「……な、なんで男性が使えているの？」

一番驚いたのは、そこ。いきなり撃ってきた集団の構成員の大半以上が、明らかに男性と思われる人物であることだった。

ここまで来れば国の怠慢とかそういうレベルじゃないけれど、今はそんなことを考えている場合じゃないことを思い出した。

(……撃つてくる！)

ほとんどの機体は接地したまま、それぞれ手にした得物を撃ち放ってきている。私も避けながら応戦しようと、《打鉄式式》の生きている武装を展開しようとして――

「……隙あり！」

――真後ろから飛んできた何かに、斬られかけた。ギリギリで何とか反応できたけれど、それで体勢を崩してしまう。

それは、晒してはならない隙だった。

「どんな手練れでも、撃ち合いの時はそつちに意識が向きやすいからなあ……」

あばよ！」

後ろから切りかかってきた男性が、そのパワードスーツの両腕に握りしめた剣を再度振りかぶってくる。避けようがない、その一閃は

ギイイイイン！

――突然の乱入者に、弾かれた。

その乱入者は、白い機体を纏っていた。禍々しいほどの白に、暗く光る青を携えている。見間違えるはずもない、その機体^{アステイグ}。

乗っている人を、私はよく知っている。

「影内、君？」

そこには、数日前に帰還したはずの影内君が、居ました。

「……で、この化け物は一体何なんだ？ 束」

「ちーちゃん。それ、私が聞きたいんだけど……」

例の、臨海学校の一件。束がISコアネットワークをハッキングして手に入れたそれを、たった今二人で確認していた。

結果は散々の一言。現在、対抗機として束が製作した《舞桜》と《白姫》では完全に攻撃力が足りていない。

「……対抗可能なのか？」

「ちーちゃん的には？」

質問に質問で返されたが、これはもうただの確認に近かった。同時に、束がこのような形で返答を返したという事実には先の質問の答えが薄々予想できる。

「一夏が使っていた機体、アレと同等の機体の用意さえあればな……」

「やっぱり、そうなっちゃあ……」

「用意できそうか？」

「正直、厳しいね。何がどうなってあんな性能を叩き出しているのかわからないし。」

でも、その分興味もあるんだけどねえ」

予想こそできたことだが、それでもため息が出てくるのを止められない。半面、束の奴は分からない悔しさと未知への興味がなймаぜになつた、一種の妖艶さと無邪気さを同居させた凄絶な笑みを浮かべていた。

気楽な奴だとは思いつつ、こいつの技術抜きでは現状、あの化け物や一夏の師匠を名乗っている連中の機体に対抗することはできない。それは重々承知でもあるので、声には出さないでおく。

「まあ、前にも言ったと思うけど、現物が無いと何ともね。もしくは設計仕様書。」

それさえあれば後は何とかしてみせるよ」

束がそう締めくくろうとした、その時だった。

『いやいや、随分愉快的な会話をしていることだね』

私達が会話している最中に突如として聞こえた、第三者の声。見れば、通信用だというモニターに口元までしか映っていない男性の姿が見える。

『ああ、失礼。自己紹介がまだでしたね。』

私はウエイル・アーカディアと申します』

悪びれもせずに、あくまで相手は全くと言っていいほど調子を崩さずに話し始める。まるで私達のことなど気にしていないかのようなそぶりは、正直に言えばで会ったばかりの頃の束を思い起こさせるものがある。

「……私のラボに勝手にハッキングしておいて、態々自己紹介？

随分余裕だね」

束からしてみれば、それまで一度も破られる事の無かったセキュリティを破った相手。興味も持っただろうが、わずかな苛立ちも見られなかった。今は話の内容が内容なだけに敵愾心もあるのかもしれない。

『ま、実際問題として大したセキュリティじゃなかったしね。』

システムハックくらいは軽い軽い』

なんてことないように、ただただ飄々とウエイルと名乗った人物は答えている。

「愉快的な会話とはな。

全く、会話の中身も知りもせずによく言う」

この手の人物相手にどうせ無意味なのは経験上のことからよく知っているが、何も言わないというのも癪なので一応程度に言い返しておく。

対して、相手は映っている口元を三日月に歪めながら口を開いた。

『いゝやいや、中身を知っているから言っているのさ。』

第一、ついさつきまで君たちが見ていたその化け物の培養をしているのは僕だよ？』

さも当然であるかのように、信じがたいことを口にする。束すらも一瞬表情を歪めた。

同時に、余りにも軽い口調に本当なのかと言う思いも鎌首をもたげ

てくる。

「当事者、か……。」

敵情視察か何かのつもりか？」

油断しないように努めつつ、

『敵？ 君達二人が？』

私の言葉を聞いたウエイルとかいう男が、確認のように呟いた。その声は意外そうな響きに満ちていたが——

『……ク、ツハハハハッハハハハハ！

クイヒヒヒハハハハハッハハハッハハハッハ！ フィーヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ!!』

——ある瞬間から突然、笑い出した。その勢いは止まることを知らず、拳句の果てには座っている椅子から転げ落ちながら腹を抱えて笑っているほどだった。しかも、器用に口元より上は見せないようにしているのが腹立たしい。

『いやはや、冗談もここまで極まるとわかってても愉快なものがあるね！

転げ落ちるほどに笑わせてもらったのなんて随分と久しぶりだよ!!』

早口気味に、まくしたてるように、それだけの内容を言われる。そのあとは会話を続けることもできずに、ただひたすら笑い続けるウエイルと言う男の様子を見るしかなかった。

「……まるで眼中にもないみたいなき草だね」

東の苛立ち交じりの視線を受けつつ威圧的に言われたセリフにも動じるどころか、哄笑を止める様子すらない。

『実際、今回の通信もただの暇潰しのつもりでね。』

予想外に楽しませてもらえたよ』

「……へえ」

東の声が底冷えするかのような冷気を纏い始める。だが、このウエイルとか言う男にそれが効いた様子はない。いくらかは収まってきたようだが、それでも相変らず嗤いながら話している。

『第一そもそも、たった二人と無人機多数程度の戦力でどうにかなる

とでも思っているのかい？ 正直、実働規模が小さ過ぎてお話にならないよ。

しかも、片方は白騎士事件の主犯であるのが暗黙の了解になっている人間、もう片方は自分が白騎士だったという事を隠蔽している世界最強と嘯く以外の能が無い人間。これでどうする気なんだい？』

私達にとってはあまりにもその内容にそぐわない気軽さで言われたことに、内心で動揺する。しかし、それを表に出す訳には行かないので平静を装いながら対応していく。

「ふうーん？」

ハツタリにしては中々だね」

さすがに事が事だけに、束も警戒心を見せているように思える。だが、その目はまだ半信半疑である部分も見られていた。

『いやいや、ハツタリではないさ。』

こんなの、ISを解析できれば誰でも分かるでしょ？』

しかし、そんな束のことも半ば冷めた目で見ながらウエイルはいけしやあしやあと言つてのける。変わらず、此方をまるでどうとも思っていないかのようにだった。

『まあ、そういう事で。』

中々いい暇つぶしになったよ。お礼に私の作品をあげよう』

「束様！」

ウエイルが暇潰しと言い放った直後、束の子飼いだであるクロエという少女が血相を変えて飛び込んできた。明らかに動揺し、焦っている。

普段は中々に冷静な様子しか見せない彼女の慌てように、否応なく悪い予感がした。

「て、敵です！ この研究所に百近い正体不明の飛来物が飛んできています！」

し、しかも……」

ここで、クロエは少しい淀んだが、それもつかの間の事。すぐに、衝撃的な内容の報告を行った。

「その飛来物すべてにISコアと思われる反応があります！」

「……!?!」

私だけでなく束までも驚愕した内容。だが、その場で唯一、なんら動揺しなかった存在がいた。

画面越しに此方の様子を観察していた、ウエイルと言う男だった。

『まあ、精々生き残ってくれたまえよ。』

君達が生きていてくれた方が、あの新王国の機竜使い……影内一夏君だったかな？ アレの邪魔にもなってくるし、なかなか面白いことになりそうだしねえ』

「貴様……私の弟にまで手を出す気か!?!」

聞き捨てならない台詞に、思わず声を荒げた。

『私の弟?』

……へえ』

私のことを聞いた途端、歪に唇を歪めた。

『だったら、今を生き残って私の研究室にでも辿り着いてごらんよ。』

……君の弟を誑かした一味を打倒できる「力」があるかもねえ?』

不気味な笑みでその一言を言われた直後、束の研究室の天井が派手に爆炎を上げた。

第七章（5）：機竜の舞う空の下

S i d e 一夏

セリスさんから話を聞き、直ぐに飛び立ってから数分。件の場所はすぐに見つかった。

と言うのも、その場所に見知った、そしてこの機竜の世界には居ないはずの人物の姿を見たためだった。

「……打鉄、式式？」

それは、一機のIS。この、機竜が飛び交う世界には本来在り得るはずのない機械。そして、それが誰に預けられたISなのかもよく知っていた。

それだけでも一大事ではあるのだが、厄介なことに、セリスさんの話にもあった賊と思われる一団が思いつきり接近している最中だった。

《《アステイグ》で来ていて正解だったな……全く、厄介な……》

内心で愚痴を零しつつ、さらに加速。重力の助けも借り、出し得る最速で俺自身の距離まで詰めていく。

ビシユウウン！

賊の一人が機竜息砲キャノンを撃つたらしく、爆音と閃光がまき散らかされる。簪自身が気付いて回避してくれたが、最早、一刻の猶予も無い状況だった。

「《機竜光翼》」
フォトシウイング

機竜光翼を起動してエネルギーを翼から盛大に吐き出し、急加速。余裕があるとは言いやい難い距離ではあるが、ギリギリで届く距離だった。

一息に距離を詰め、抜剣。《《竜毒牙剣》タスクブレイド》を両腕に持つ。

ギイイイイン！

派手な擦過音をまき散らしつつ、間一髪のところまで後ろから簪に切りかかろうとしていた《《ワイバーン》》の機竜牙剣を弾き返す。不意打ち気味に切りかかったみたいだが、元々そこまで駆動出力の高くない飛翔型機竜同士。減速中だったとはいえ、それでも速度が乗ってい

る此方の剣が勝るのは明白だった。

「影内、君？」

簪が驚いたような、あるいは虚を突かれたような顔で此方を見ている。

（まあ、そうもなるか）

簪からすれば、俺は本来、本社に帰ったのでしばらく会えないことになっている人物の筈だ。それが、今この場にこうして居る。それだけでも衝撃はそれなりに大きい事は想像するに難くない。

（それに……）

目の前に広がる賊の一団。何処の誰かまでは判断しかねるが、どのみち倒すべき相手には変わりない。

とりあえず、先ほど簪に切りかかろうとして弾いた《ワイバーン》を追撃。またもや切りかかろうとしてきたが、再度弾きもう一刀の剣で《ワイバーン》の手首に当たる部分を叩き切る。

「神速制御」

返す刀の神速制御で《ワイバーン》の両肩を叩く。さすがに障壁が張られはしたが衝撃は伝わったみたいで、フォース・コア幻創機核の機能停止には成功した。

これで、残りは砲撃を加えていた《ワイアーム》と《ドレイク》が数機。

（まあ、この程度なら特に問題も無いか）

もう飽きるほど何度も繰り返してきた。今更だった。

再度の攻撃を仕掛けようとしていた賊の一団に対し、先んじて動く。

「《機竜光翼》」

通常の推進器と同時に吹かせ、一気に距離を詰める。ある程度照準を付けていた賊の一団は、突然の移動に一瞬だけ狙いを見失っている。

それは、この瞬間において致命的な出遅れに繋がっている。

「《竜毒牙剣》、タスクブレードアックスモード」

神装抜きなら竜毒牙剣で最大の攻撃力を持つ形態を起動し、まずは

最も近かった《ワイアーム》の両腕を切断。《ワイアーム》の肩の付け根から断ち切ったため、幻創機核との接続を直接断ち切っている。そのまま行動不能に追い込めた。

さらに背翼の推進器を使い、回り込むようにして賊の《ドレイク》の背後をとる。ライフルを持ったまま振り返ったその反応は素直に素早いと言えるものだったが、それでも問題はない。

「《機竜刃鱗》」

回り込んだ時の半回転の勢いを殺さないまま、爪先の《機竜刃鱗》で賊の《ドレイク》の機巧核剣を叩き切る。これでさらに一体、行動不能。

横目でちらりと見れば、簪の無事も確認できた。既に賊の目が俺の方に向いている以上は狙われる危険も少なくはなっているだろう。

(とは言え、長引かせる訳にも行かないしな。

早々に終わらせるか)

簪もどうしてここにいるか分からない以上、可能ならばその事情を聴いたうえで対応しなければならぬ。

加えて言えば、個人的には良くしてもらっている相手でもある。確かに知られたくはなかった事が知られてしまっている相手でもあるが、それでもこの場で見捨てる理由にはならなかった。

「調子に乗るんじゃないぞ！」

背面から車輪ドライブを唸らせて近づく《ワイアーム》が一気に近づく。その手には戦槌シマが握られ、今にもその力の限り叩き付けんとしている。が、余りにもお粗末な練度だった。

再度、《機竜光翼》を吹かせ今度は縦方向に半回転。《ワイアーム》の戦槌の範囲から離脱。直後に通常の推進器を全力で吹かせる。

「——落鋼刃」

パワーモードに切り替えた《竜毒牙剣》の切っ先を真下に向け、急降下、狙いは戦槌を叩き込もうとしてきた《ワイアーム》。その機竜の肩関節。

ザギンツ！

金属同士が擦れ合う嫌な音が響き、問題なく片方の肩を切断する。

「――翔炎斬しょうえんざん」

さらに、可能な範囲で再装填した《機竜光翼》を吹かせながら、《戦陣・劫火センジン コウカ》も用いてエネルギーを集中。今度は飛び上がりながら、もう片方の肩関節を切断。これで二機目の《ワイアーム》も両肩の幻創機核との接続を強制的に絶ち、行動不能にする。

（残りは……二機か）

軽く息を整えながら確認すれば、残った《ワイアーム》と《ドレイク》が一機ずつ。今まで戦った手合いはいづれも高く無い練度な上に連携も取れていないと、少なくともここまでの戦いでは脅威と言える相手ではなかった。

（無論、それを理由に油断することはないが……）

相手を見据えつつ、再度構える。

一方、相手は既に真つ当な勝利を諦めたらしい。その照準を俺にはすでに向けておらず、簪の方に向けていた。

「《山嵐》！」

だが、簪も代表候補生として訓練を受けた身。既に体制を整えており、即座に《山嵐》を撃ち放っていた。

ドガアアア！

多数のミサイルが連鎖的に爆発を発生させる。派手な爆発はその威力と衝撃で残っていた《ワイアーム》と《ドレイク》自体を破壊することこそ叶わなかった物の、二機を駆っている機竜ドラッグナイト使い二名の意識を刈り取るには十分みいだった。

「……終わったか」

気絶した賊の状態を軽く確認し、大事になっていないことだけは確かめられた。本来ならそもそも情をかける相手でもないが、こいつらが末端であり組織的に行動しているか、或いは誰かに雇われでもしていればその背後関係を調べる必要もある。そういう意味において、可能な限り生かして捕らえたかった。

「……やっ」

背後で状況を飲み込めないまま立っている簪の方に顔を向ける。

一回冷静になったからかもしれないが、その顔には疑問と困惑が色

濃く表れていた。

(無理もないか)

いきなり異世界に飛ばされれば誰でも困惑と疑問、場合によっては絶望だって湧いてもおかしい話ではない。その意味では、取り乱さずにいるだけ大した胆力だった。

ひとまず、操縦不能になっている機竜ごと賊を後方の部隊に預け、捕縛を任せる。これ以上のことは、元より俺の担当外だった。

「簪、少しいいか？」

そして、ようやく、状況がある程度は落ち着いてきたころ。

簪の方に向き直り、ある意味で目下最大の難問に取り掛かることにした。

S i d e 簪

いきなり始まった未知の勢力との戦闘を終え、一息ついていました。

確かに予想外過ぎる事が重なりましたが、それでも頼れる人が現れてくれたことも手伝って幾分落ち着いていられます。

(……現実逃避したいって気持ちも、あるにはあるけどさ)

そんな下らないことを考えていたら、影内君がこっちに來てくれた。

色々と疑問に思う事は多いけれど、ひとまず話せそうな人がいるというのはそれだけで安心できます。今は後続の人たちと合流して、先ほど戦闘不能に追い込んだ一団を預けているみたいでした。

(それにしても……)

後から合流した人たちの服装とかを見ていると、どうにも時代がかった印象を拭えませんでした。何というのでしょうか、西洋の中世の軍服でも見ている気持ちです。

「簪、少しいいか？」

少しして、全ての必要な引継ぎ作業などを終えた影内君の方から話

しかけてくれました。

「あ……うん、うん」

状況が状況なため、私も少し声が固くなっていました。影内君はそれに気づいた様子でしたが、そこに言及する事は無く話を進めてくれます。

「数日ぶりのところすまないが、

まず、どうやってここまで来たか聞いてもいいか？」

心なしか、困ったような表情で影内君は私に聞いてきました。

その質問に対して答えて困るような内容も無かったため、素直に答えることにします。『死刑』と名乗った敵の事、その敵が繰り出してきた紅いクリスタルのような物と、それが展開した謎の機械によって形成された球形内部に拘束され、強い光と衝撃を感じ、気が付いたらここにいて先ほどの集団に絡まれ、最終的に影内君が来てくれた事。

事の経緯を一通り話し終えてから影内君を見てみれば、その顔にはつきりと困惑とも警戒心ともとれる感情を露わにしています。

「……ひとまず、粗方の事情は理解した。」

しかし、これは……この場でどうこうとできる内容でもないな。

色々な意味で」

色々な感情を長い溜息で吐き出しながら、影内君はそれだけ言いしました。

「簪、とりあえず少し待ってもらっていいか？」

「あ……うん。いいよ」

頭を抱えつつ、影内君はそう聞いてきました。

私にも否と言う理由もなく、簡単に返事を返します。

「分かった。それじゃ、少し待っていてくれ」

それだけ言うと、影内君は今度は《ユナイテッド・ワイバーン》を展開して何処かに通信をかけているみたいです。

——これが、私が思っている以上に大きな事態に発展しているのだ、この時の私は想像もついていませんでした。

S i d e アイリ

「……はい。わかりました。」

Yes. 伝えます」

臨時の護衛についてくれているノクトに一夏からの連絡があったらしく、その内容を聞いています。ですが、その内容を聞き進めていくにつれて、徐々に顔が曇ってきていました。

「アイリ、緊急事態です」

そして、通信を終えたノクトは緊張した面持ちで私の方に向き直りました。

「先ほど、セリス先輩の話にあった『誰か』が誰であるか確認できたそうです。聞き取った話からも、ほぼ確実であるとのことだ」

報告内容のわりに顔色が優れないように見えたが、その疑問も直ぐに氷解することになりました。

「んー？」

でも、それなら相手の確認できたし成果としてはまずまずじゃないの？」

ノクトと同様に私の護衛についてもらっていたティルファーが疑問の声を上げます。ですが、その疑問は私も同じように抱いたもので特に口を挟むことはしません。

「No. 問題なのは、確認された人物で……。」

更識簪さん、だそうです」

ためらいがちに放たれた名前に、私もティルファーも納得を覚えていました。その人がある意味で特別な意味を持っている人であるのは私もこの場にいる彼女たちも知っていることです。

同時に、だからこそ対応が難しくも間違えられない人であることも直ぐに理解できます。

（これは、対応と根回しが大変なことになりそうですね。）

……兄さんにも参加している軍議が終わり次第、報告して相談しましょうか）

心の中でそんなことを考えながら、私も彼女を迎え入れる準備を進

めることにしました。

S i d e 簪

影内君がどこかへと通信をしていましたが、それが一段落したのか私の方に向き直りました。

「簪、すまないが暫くは同行してくれ」

諦めを多分に含めた口調ですが、やはり、

「えっと……分かったよ。」

その……なんか、大変なことになっちゃってるみたいでごめんね」

その様子から、少なくとも心労をかけてしまったことが見て取れたのもあって、ひとまず謝りました。経緯がどうであれ、私が原因であることは容易に想像できたからです。

「いや……気にしないでくれ。簪の方も不本意だったことくらいは分かるしな。」

ひとまず、諸々の事情から今後の詳しいことはまだ話せないが、身の安全くらいなら何とかかなりそうだ」

相変らず困り顔のままですが、ひとまず、身の安全は保障してもらえたいです。

そのことに今更な安堵を覚えつつ、迎えが来るとのことですそれをつことにします。

「……馬車？」

およそ私の知る限り一部地域以外では一般的とは言えない乗り物が、しばらくして着きました。

困惑する私を他所に影内君の方はと言えば慣れた様子で御者を務める人と話した後、そのまま中までエスコートしてくれました。何処か場違いな気持ちを抱きつつも、連れられるまま乗り込みます。

「……影内君」

「なんだ？」

しばらくそのまま流れに身を任せて揺られていましたが、意を決し

て口を開くことにします。

「えつと……どうして、馬車なの……？」

明らかに今の自分とは不釣り合いと言うか、乗ることになるとは思っていないかった乗り物に乗っていることにどうにも言いようのない場違いな感じが拭いきれずに聞いてみることにしました。

ですが、

「……向こうみたいに自動車がある訳でもないからな」

それだけ言うと、後は「もう少し待ってくれ」とだけ言って答えてくれませんでした。

答えられない理由でもあるのかなと思い、そのままさらに揺られることにします。

「……もうそろそろか。」

少し、外を見てみてくれないか」

言われるまま馬車に取り付けられたいかにも古風な窓の外に目を向ければ、そこから見える景色に言葉を失いました。

「ようこそ」

その窓から見えた街並みは、およそ現代に残っていたとしても大抵は観光地などになっていて有名になっているはずの、中世の趣の生きる街並みでした。

困惑が深まるばかりの私の耳に、影内君の声が響きます。

「俺たちの国。アティスマータ新王国へ」

Side アイリ

一夏から報告を受けて合流場所まで来てみましたが、報告内容に嘘など一つもなかった事をその時確信しました。

迎えの馬車が止まり、中から一夏にエスコートされつつ降りてきたのは簪さんでした。過ごしてきた世界が違うからでしょう、馬車に慣れていないその足取りは所々危なげなものがあり、一夏のエスコートがあつてようやく危なげない物になっています。

「あ……アイリ、さん？」

完全に馬車から降りた後の簪さんが私のことをその瞳に収めると、困惑気味に私に話しかけてきました。

分かっていたことですが、そうした様子を実際に自分の目で見て改めて、本当に此方に来てしまったんだな、と思いました。

「はい、お久しぶりです……と言うほど長い間顔を合わせていたわけでもありませんが。」

ひとまずは、ようこそ。暫くの間は私が一夏が案内役を務めます」
ひとまず、挨拶と必要最低限の連絡事項だけ伝えました。簪さんも直ぐに納得してくれたみたいで、「分かりました。よろしくお願いします」と返事を返してくれています。

「さて。」
ひとまず、色々あったみたいですが此処が何処なのかを説明しましょうか」

私の言葉に、簪さんも頷きました。やはり、気になっているみたいです。

「まず、此処は……この国の名前は、アティスマータ新王国。」

7年前、諸々の騒動を経て生まれた、まだ新しい国ですよ」

私が一番最初に行った説明に、簪さんの顔に目に見えて驚愕と困惑が広がりました。

(まあ、そうなりますよね)

私にとっては二度目の経験と言う事も手伝って、妙に落ち着きながら話すことができます。

半面、簪さんは何かに気付いたようでした。

「な、7年前って……そんな話、聞いたこと無い……つまさか!？」

どうやら、気付いたみたいです。

「ええ。恐らくは想像した通りでしょうが……。」

ここは、貴女にとっては異世界とでも呼ぶべき場所なのでしょうね」

二年前にも言ったような言葉に少しばかりの懐かしさを覚えて感慨を抱いてしまった私とは対照的に、簪さんは顔を急速に青くしてい

ました。

ひとまず合流した場所で全ての事情を話すのは色々問題がありますので、私達の家に来てもらう運びになりました。

さらに馬車に乗り、少し。少し前に改装された私達の家を見たとき、簪さんが暫く固まりました。

「……現実に使われているこういう家を見る機会が来るなんて思ってませんでした」

「私としては、ISやIS学園なる所に行く機会が出てくるという方が驚きだったのですけどね」

文字通りの意味で異世界、私達の世界よりも遥かに色々発展した世界。まさか空想ではなく現実に自分の目で見ることになるなどとは思いませんでした。

(国の革命に、古代人との戦いに、世界の改変に、裏切りにと……並大抵のことでは驚かない自信もあつたんですね。

変に自信を持つのも考え物でしょうか)

さすがに今回の一件は重すぎる。初めての時は驚きも少なくなかった。

「さて」

そうして僅かな間、物思いに耽っていると一夏が前に出ました。

「おかえりなさいませ、アイリ様。」

そして、アーカディア家へようこそ。簪様」

私はもう何度も見てきましたが、一夏が扉を開けつつ迎えてくれます。

(一時は本気で従者になろうとしていましたしね……)

兄さんと一緒に説得したのも今となってはいい思い出です)

物思いにふけた私とは違い、簪さんはブーツとした様子でした。簪さんの顔が少し赤くなっていたのは、見なかつたことにしてあげましょう。

「お決まりのようなものですよ。」

「さあ、中へどうぞ」

ひとまず、少し顔を赤くした簪さんを家の中へ上げつつ、私も我が家の扉をくぐります。少し前に——主にリーシャ様主導で——だいぶ豪華になった我が家ですが、その分部屋には余裕もあります。彼女の秘匿性を考えても、そして彼女の知り合いである私達がいるという点で見ても、我が家に泊まってもらう事にしましょう。

玄関を抜け、そのままダイニングを通し、人影が周囲にないのを確認して、ようやく本題に入ることができる状況になりました。

「さて、簪さん。」

まず、先ほど言った言葉の意味を含めて私達の現状をかいつまんで説明させてもらいますね」

「あ……はい。」

……あ、でもそれって結果的には」

「以前、貴女が問いかけてきた内容の一端にも触れることになりましたが……まあ、仕方がないでしょう。こうなってしまった以上は」

簪さんも気づいたらしいですが、私としてもこんな形になるなど予想外もいところですよ。しかし、ここにきてしまった以上、そして彼女の立場を考慮すれば、自然とこういう対応になります。

「ひとまず、今いるこの国と……そうですね。」

ドラグライド 装甲機竜と、アピス 幻獣のことについて話しましょうか」

「装甲機竜……そういうえば、襲撃してきたセイカって人も言っていた……」

「この言葉は、聞き逃せませんでした。」

「セイカ……あなたがここに来るきっかけになった襲撃犯ですよね？」

その人が、確かに、そういつていたんですか？」

「は、はい……それに、臨海学校の時の襲撃してきた『棘刑』と名乗った人物も、新王国と口にしていた……と思います」

「……なるほど」

少し話がそれましたが、重要な証言が聞けました。これだけでも、今回の苦勞が報われるというものです。

「話がそれてしまいました。説明に戻らせてもらいますね。」

まず、この国はアティスマータ新王国。まだ成立してそう間もない国ですよ」

話の方向を修正しつつ、私は説明に戻ります。一夏も一夏で、不測の事態に備えていてくれています。

「はい……でも、新しい国が生まれるほどの事って……」

簪さんが、恐らくは誰でも持つだろう疑問を覚えていました。

私としてはそう軽々に答えたくない内容ですし、今この場ではそう重要な内容でもありません。ある程度簡潔に説明するにとどめることにします。

「……厳密に言えば、それ以前の国が革命によって倒れた、と言うべきでしょうね」

「革命……」

簪さんが僅かに驚いたような顔になっていますが、今はそのまま説明を進めていきます。

「そして、私達が使っているISとして説明している兵器。アレは装甲機竜と言う、古代兵器ですよ」

「……えっ？、こゝ、古代、兵器？」

簪さんが素っ頓狂な声を出して、今度は派手に驚いた様子を見せています。ですが、もうどうしようもないのでそのまま進めます。

「装甲機竜と言うのは、ですね……」

第七章（6）：新王国のとある夜

S i d e アイリ

「……古代のとある科学者が作り上げた兵器、装甲機竜ドラッグライダーと、それを扱う機竜ドラッグナイト使い。そして、装甲機竜は剣型の端末である機巧核剣ソード・デバイスによって召喚され、中でも世界に一機しか確認されていない神装機竜と言うのは特殊能力と高い性能を持っている、と……。」

そういうこと、ですか……？」

「大まかにまとめれば、そうなりますね」

私達にとっては周知の事実でも、それは私達の世界での話です。やはり、そもそも別な世界の住人である簪さんからは私達の世界の科学水準と装甲機竜の存在がチグハグに見えるのでしょうか。

「そして、その装甲機竜が産出される……と言うよりはその物の生産施設でもある遺跡ルインと言う古代文明の遺産があつて、今はその全てが停止しているはず、と……。」

「そうなりますね。」

そして、ここからが簪さんたちにとっては一番重要な点になるのでしょうか……」

そこで一旦言葉を切り、様子を見ます。簪さんもわかっているのでしょうか、真剣な様子で頷き、続く言葉を控えめな声で話し始めます。

「あの、化け物……幻神獣アビスのこと、ですね」

「はい。」

あれらも、本来なら出現するはずがないのですがね……」

苦々しい表情になった簪さんですが、私も多分、似たような表情だったと思います。

「確か、装甲機竜と同じように遺跡からしか出現しないはずで、今はその遺跡全ての幻神獣を発生させる機能自体を封じている状態のため、本来なら出現しないはず、と……。」

所々で詰まりながらも、先ほどの説明の要点をまとめながら話す簪さん。呑み込みの早さと情報の処理能力はやはり一級品の物があるみたいです。

だからこそ、気付いたのでしょ。

「……これって、敵の側に機竜とIS双方に詳しい人が確実にいて、その人がこれまでに私達の世界で起きた幻神獣関連の事件や機竜の流通に関して何かしら関わっているってことですよね？」

「その可能性が高いと考えています。だからこそ、先遣隊として一夏が派遣されました。」

そして、そこから齎された情報をもとに対策を練っていく予定だったのですが……」

そこまで言って、簪さんも苦い表情になっていました。

「短期間でいろんなことが起きすぎて、対策の内容が膨大になりすぎた上に迂闊に手を出せるような世界でもなかった、ですか？」

「端的に言えばそうなりますね。挙句、終焉神獣^{ラグナレク}まで出てくる始末でしたし……」

私が愚痴のように呟いた一言に、簪さんが怪訝な表情になりました。

そのまま、抱いたのであろう疑問を投げかけてきます。

「あの……終焉神獣、とは？」

「……そういえばまだ説明していませんでしたね。」

では、簪さん。貴方達が行った臨海学校で見た、あの巨大な幻神獣の事を覚えていますか？」

私の一言に、簪さんは神妙な顔になって頷きました。

「はい。」

影内君も、その……あんな事になってしまっていましたし。記憶に焼き付いています」

「ならば、話は早いですね。」

……あの時に現れた、巨大な幻神獣。アレが、終焉神獣と呼ばれる存在……なのかもしれません」

簪さんの表情に一気に真剣みが増しましたが、同時に疑問を持つていることも読み取れました。

内容は想像に難くありません。

「あの……なのかもしれない、と言うのは、いったいどういう事ですか

？」

その疑問は、おそらく隠す意味も無いか、あるいは確認の必要性を感じたのでしょうか。さほど間を置かずに放たれた疑問は、私の予想と内容としては全く同じでした。

「……まず、簡潔に終焉神獣が生み出された目的から話します。

そこから話さないと言明が難しくなりますので。いいですか？」

「はい、お願いします」

真剣な顔で真っ直ぐに渡すを見ながら、簪さんは頷きました。出会ったばかりの頃の気弱な面影もやや見受けられますが、同時に立ち向かおうとする強さも身に着け始めているように見えます。

(短期間で、本当に強くなりましたね。

……考えてみれば色々あったせいかもしれません)

思考があらぬ方向にそれ始めたことに気が付き、一回、気持ちを切り替えます。

「まず、遺跡については話しましたよね？」

終焉神獣とは、その遺跡一か所につき一体存在していた、文字通りの意味での最強格の幻神獣です。それぞれが特異な能力を備えている、特別に強い幻神獣でした」

私の説明に、簪さんが少し考えるそぶりを見せてから口を開きました。

「……存在していた、というのは？」

私の説明が全体的に過去形だったことに気が付いての事でしょう。目敏さに感心しつつ、そのことについても説明していきます。

どの道、彼女が此方側に来た時点で説明自体は必須のものとなってしまっています。隠したてることもありません。

「過去、大きな戦いがありました……その時に、全ての遺跡に存在していた終焉神獣は討伐されているんです。

その後にも、出てきていないわけではありませんが……何れにしても、その物を生み出す施設である遺跡のすべてが停止している以上は本来生まれるはずが無いんです」

私の説明に、簪さんは再度考え込み始めました。私達も急かすこと

はせず、次の言葉を待ちます。

「……私達の世界に、クローンという技術があるんです」

「クローン、ですか？」

聞きなれない言葉に、今度は私が疑問符を浮かべる番でした。簪さんは真剣な顔で

「クローン、と言うのは、生物の細胞を人工的に増殖させることで作り出される人工生命のことです。」

私の知る限り、羊などで既に成功事例のある技術です。人間でも、この技術を応用して壊死してしまった体の一部を入れ替えて再生させる再生医療と呼ばれる技術があります」

この説明を聞いて、すぐに簪さんが何を懸念しているのかが分かりました。あるいは、彼女からしてみれば遺跡よりもこの技術の方が馴染みがあるのかもしれませんが。

「……もし仮にですが、先ほど私が話した終焉神獣の細胞が何らかの経緯で回収されていたとして。その細胞を用いクローンという形で生み出されている可能性はありますか？」

「私も、その道の専門家と言うわけではないので確実なことは言えません。」

ですが、もし本来既に生み出されるはずの無いその……終焉神獣、というのと同じか近い存在がいる現状、懸念はすべきかと思えます」
簪さんが真剣に、私に話しています。私も、彼女の言葉に頷きました。

(……やはり、此方とは科学技術が大きく違いますね。)

まさか、遺跡に依らない終焉神獣の複製などと、私達の世界の人ではどのくらいの人が思いつくのでしょうか)

私達と彼女たちの世界の違いを実感し、同時に彼女たちとのつながりを作れた偶然に感謝します。私達だけでは、根本的な文明水準の差から「クローン」などと言うものを知ることなどなかったでしょうから。

「アイリさん、簪。少しいいですか？」

そうこうと話し込んでいたら、一夏が何か確認すると私達の方に話

しかけてきます。

私も簪さんもつられて一夏の方に顔を向けました。

「ルクスさんが戻られました。」

簪と今から面会したいとのことですが」

「ええ、分かりました。」

簪さん、いいですか？」

一夏からの報告に、私はすぐに頷きました。元々そうするつもりでしたし、むしろ手間が省けた分良いでしょう。連絡は私達が話し込んでいる間にセリスさん経由で一夏がしてくれたみたいでしたし。

「は、はい。私は問題ありません」

若干、噛みかけていたことから緊張が見て取れた簪さんですが、それでも了承してくれました。

「では、此方にルクスさんを案内します」

そこまで言うと、一夏はいったん玄関まで出迎えに行きました。

S i d e 一夏

ルクスさんが軍議を終え、帰ってきたことを確認する。もともと、簪が来てしまったことについてはセリスさんを経由して伝えてあるはずだし、この家にいることも同様に伝えている。

だからか、特に問題なく本題に入れる。

「ようこそ、簪さん。」

改めまして、僕はルクス・アカディア。先日の作戦ぶりだね」

ルクスさんが挨拶を交わし、そのまま席に着く。

「では、私も。」

お久しぶりです、簪さん。セリスティア・ラルグリス、この新王国では軍の教官とルクスの補佐官をしています」

セリスさんも同じように簡単な自己紹介をし、ルクスさんの隣の席に着く。

「後でリーシャ様……以前の作戦に参加した人の一人で、朱色の機竜

を操っていた人だけど、その人も聞き取りに来ることになってるんだ。

だからまず、僕らで答えられることがあれば答えるよ。何か聞きたいこととかはある？」

その言葉を聞き、簪は少し考えてから口を開いた。

「……えっと、あの。」

まず、私は今後どういった処遇になるのかを確認させてもらってもいいですか？」

やや言葉選びに難儀したのかもしれないが、出てきた質問自体はごく自然な物。ルクスさんも一つ頷くと真剣な表情になりつつも答えます。

「まず、基本的にはアイリか一夏が案内役を務めることになるね。」

場合によっては僕も対応するから、分からないことがあったらその都度遠慮なく聞いて」

その台詞に簪は頷き、ルクスさんもその反応を確認して次のセリフに繋げていきます。

「次に、ISは緊急の事態、つまりは幻神獣やドラッグナイト機竜使いに襲われた時以外は使用しないでほしい。」

勿論、緊急事態になったとしたら最大限、出来る限りの抵抗をしてくれていいからね」

やはり大事な部分なので、それこそ言い聞かせるような優しい口調で、だがはつきりと言っていた。

「最後に、此処から帰るまでの話になるけれど。」

ひとまず、諸々の話を付ければ帰れるけれど、そのために日数は少しもらう事になると思う。けれど、帰れない、という事は現状ではないから安心してほしい」

簪はその台詞に少し驚いたような表情になり、そのまま恐らくは勢いで次に繋がる台詞を叫んでいた。

「か、帰れるんですか!？」

ルクスさんもその勢いに若干驚くが、すぐに落ち着くと説明に入り始めた。

「うん。」

実のところ、僕たちが君たちの世界を認識する切欠になった物があつてね。今現在での話になるけれど、ソレを通つてもらえれば帰れると思うよ」

あまり深くは言及していないが、それでも『球体』^{スライア}の存在まで含めた台詞だった。最も、簪がその存在にまで気付いたかどうかは分からないが。

簪もルクスさんの話を聞き安堵したようで、体から緊張が一気に抜けている。

「分かりました……。有難う御座います」

緊張が抜けたためか、簪も幾分柔らかい表情になっている。

(まあ、無駄に緊張されてもお互いにやりづらくなるだけか)

頭の中だけでそう結論付け、後の成り行きを見守る。元々、ルクスさんとしても簪を邪険に扱う気はないのだし、それ以前に彼女自身が本人の自覚あるなしに重要人物でもある。そう軽々には扱える人でもない。

これ以降は更なる説明や簪の質問にルクスさんが答える展開が続く、場合によつてはセリスさんも答えるといった展開が続いた。

S i d e ルクス

最初にセリス先輩経由で報告を受け取った時は驚きもしたけれど、簪さん自身が協力的なこともあつて何とかかなりそうな形に収まりつつあつた。

(簪さんも納得してくれたみたいだし、後はこつちで手続きとかになるのかな)

一応、立場も立場なのである程度の融通をきかせることはできる。いろいろと反対意見もあるかもしれないけれど、今の彼女たちとの関係性を考えれば彼女をここに留まらせるということ自体が、危ない橋を渡ることと同義と言える。敵の詳細も分からないままの現状なの

に、向こうの世界でほぼ唯一と言つていい情報源である彼女達との関係を険悪にするのは悪手としか言えない。

「あの……」

そんなことを話しつつ考えていたら、話が途切れたタイミングで簪さんが話しかけてきた。

「なにかな？」

できる限り威圧的にならないように注意しながら、僕もその言葉に答える。彼女も身一つでここにきてしまったんだし、不安に思う部分があつてもおかしくはない。

「その……ISや緊急事態のことはさつき聞かせてもらいましたけれど、それ以外でもやっぱり行動制限とかが付くのでしょうか？」

後、数日かかるこのことでしたけれど、寝泊まりに関してはどうすれば……」

その言葉に、少し考える。

前者に関しては正直なところ、制限した方がいいのかもしれないけれど、下手に制限しすぎると却つて何かあると怪しまれかねない部分があることも否めない。

(……彼女自身も聡明さも併せて考えると、いくつかの注意事項さえ守つてもらえれば特に厳しい行動制限は付けなくても問題ないかな) 少しだけセリス先輩の方も見ると、彼女も領いてくれていた。

「ルクス、私としては私達の内誰かが一緒にいるときに限り、行動制限はむしろ足枷になると思つています。」

それに、彼女にとつても私達の現状を知つてもらうのは悪いことではないと思います」

そこまで言うで一呼吸置いて――

「それに、もう隠し通すことが半ば不可能になってしまいましたしね」――と、諦めに近い表情を一瞬見せた後そう付け加えていた。

身も蓋もない言い方にはなるけれど、確かに隠し通すことが事実上不可能になった以上はむしろ最大限信用してもらおうための努力をするべきなのかもしれない。

「僕としても、彼女の行動に着けるべき制限は僕らの内誰かと一緒に

いる、というだけでも十分かと思えます」

僕もセリス先輩と主だった制限に関しては同じ意見だったし、そのまま伝える。これで確定というわけではないけれど、言った以上は反故にする気はない。

簪さんも僕らの言葉を聞いていくばかりか安心してたのか、少し力が抜けたのが見て取れました。

「……主に同行するのは私か一夏あたりですか？ 兄さん」

既に察しているとかわんばかりの表情でアイリが聞いてくるけど、こればかりは仕方がない。

またアイリに無理を言ってしまう事になるけれど、ここは頼ませてもらうしかない。

「できればお願いしたい……かな。」

簪さんの事情に関しては二人が一番詳しいと思うし、そういった面でもフォローが効くと思うからさ」

「予想できた内容ですし、別に良いですよ。」

兄さんが私に頼み事をしたり無理を言うなんてそれこそ今更ですしね」

アイリに呆れた表情で言われた一言には少し凹むけれど、さすがに言われるだけのことをしている自覚はあったからそこは何も言わない。

「ごめん、ありがとうアイリ。」

「……後で一夏と二人きりになれるようにはするから、今回は」

「だからなんでそういう話になるんですか!?!」

簪さんに聞こえないようにコソッと伝えたら、顔を赤くして小声で怒鳴られた。けれど、アイリが一夏に対して抱いている感情も知っているから、その顔の赤さがどういう意味かはすぐに分かった。

それに、二人になれる時間を結果的に奪ってしまう分の埋め合わせをしておきたいのも本音だった。アイリを預ける相手としてもかれこれ数年来になる一夏なら十分信用できる。

（今までアイリには散々無理を言ってきたからね……。）

政治とかそんなことを抜きに、せめて一生を一緒にする人くらいは

アイリ自身が好きになった人と結ばれてほしいからね)

今までも散々無理を通してきたのだから、この上政略結婚なんてしてほしくはない。相手に大きな問題があるならば当然止めに入るけれど、その相手が一夏ならば信頼できるし安心もできる。

——だから、少しの寂しさは感じるけれど、アイリのこの恋は応援しよう。せめてアイリが幸せになれるように。

Side 簪

今の自分が事実上ほぼ身一つで異世界なんて言う場所に来てしまふという、考えようによっては絶望的とも言える状況に私自身が置かれているにも関わらず、それとはまったく関係の無い思いが頭の中をよぎっていた。

「……」

目の前の光景を、少し羨ましく思っていた。

(本当に、仲がいいんだ……)

事務的な話でもあるはずなのに、目の前にいる兄妹の会話は温かみさえ感じさせてくれていた。

昔々の、本当にただの子供だった時なら私とお姉ちゃんもそうだったのかもしれないけれど、今となっては遠い思いですらあります。

(いつか、もう一度こういう風に話し合えたらいいなあ……)

心の中で思ったことは間違っても表に出さないように細心の注意を払いながら、今後のことに意識を向けなおします。

(……ひとまず、ルクスさんの言葉を全て信じるならあんまりこつちの方でのことを心配する必要はない……のかな。

戻れるようにするまで数日かかるってことだけど、さすがに全く知らない国の制度や手続きなんてわからないし……)

総じて、ルクスさんや影内君たちに頼らざるを得ない状況。そもそも根本的に社会制度そのものが分からないこの国で私が能動的にできることはほぼ皆無と言つていいかもしれない。

(これから、どうなつちやうんだらうなあ……)

頭を抱えても抱えきれないこの状況に、諦めにも近い気持ちで流れに身を任せることにしました。

(でも……)

切り替えたつもりでも、頭の片隅で考えてしまっていること。

(……帰ったら、今度こそ、お姉ちゃんとちゃんと話そう。

もし、今回みたいなことが起こっても、後悔しないように……)

S i d e 一夏

一通りの説明が終わり、ひとまずの今後の方針も現時点の物にはなるが決まり、一息付ける段階となった。

食事には少し早い時間と言う事もあり、僅かながら空き時間ができていた。

「さて、一夏。

簪さんへの説明も終わりましたし、客間に案内しましょう。少しですが時間も空いてますしね」

「委細心得ました」

夕食にはまだ少し早い時間だったことも手伝い、まず簪を彼女が泊まってもらう事になる部屋まで案内することになった。

この後にやることもあるが、気にするほど時間が圧迫されるという事もなさそうなので二つ返事で領いて歩みを進めていく。この時はアイリさんも一緒に行くことになった。

「もう少しすれば夕食になりますし、そこまでに新しく疑問に思ったことなどがあつたら私が一夏に聞いてください。

それ以外の時でも、気軽に声をかけてくださって構いませんから」
アイリさんの言葉に「はい、ありがとうございます」と返事して領いた簪だったが、そこから何かに気付いたらしく少し表情を曇らせた。

「あ……でも、普段からずっと一緒っていうわけにもいきませんし、お

二人の部屋を教えてもらってもいいですか？」

簪の言葉にアイリさんは少し考えこむと、何かを決心したらしく俺の方に顔を向けてから話し始めた。

「そう、ですね……。」

一夏、少しの間だけ部屋替えをお願いしてもいいですか？」

簪の警備も込みにしての事なんだろう。問われた言葉の意味はすぐに分かったので、二つ返事で頷く。

「はい、問題ありません」

俺の返事を聞き、アイリさんも微笑を浮かべて頷く。

その後、簪の方に再度、顔を向けると――
「という事なので、私が一夏が隣の部屋にいます。」

なれない家屋で迷ってしまっても仕方ありませんしね」

――若干の冗談も交えつつ簪の質問に返していた。

俺としてもその意見に反対はない。

「あ……なんだか、無理に変えてもらったようになってしまったってすいません」

一方、簪はと言えば自分の言ったことが結果的に部屋替えを要求する形になってしまったことに申し訳なさを感じているのか、ややきまりが悪そうにしている。

「いえ、何も問題ありませんよ。それに、ある意味で事故のようなものなのですから気にし過ぎないでください。」

一夏、そういえば夕食の準備は大丈夫ですか？」

話題を変える意味もあるのだろう。アイリさんが振り向き、訊ねてくる。

「え？　影内君が料理してるの？」

簪は完全に思案の外のことだったのか、意外そうな感情を隠しもせず聞いてくる。

確かにルクスさんの立場などを考えれば召使の類がいても可笑しい話でもない、というより彼女たちがイメージする此方の文化レベルを考えればいない方がおかしいのかもしれない。そう考えれば意外と言うほどの疑問でもなかった。

「ええ、今の我が家のコック長は一夏でしてね。

腕には期待してもいいと思いますよ。身内鼻負も入ってしまったかもしれませんが、下手なお店で食べるより一夏に作ってもらった方が美味しいです」

何故だか少し得意気になってアイリさんが説明したが、実際に作るものの味はとにかく今現在のアーカディア家の炊事は俺が取り仕切っていた。

(前の世界でも多少やっていたし、ルクスさんとアイリさんは立場的な意味で時間が削られまくるし、夜架さんはそもそもできないし)

他の人が一緒に夕食をとっている姿も珍しくないが、この家で夕食をとることの多い四人の内で俺が炊事に一番時間をとりやすかった、というのが多分一番大きな理由だとは思う。

「そう、ですね……」

それでは、夕食の準備に行っています」

簪を部屋に案内して少しの相談をして、気付けばちょうどいらいの時間になっている。

断りを入れて一旦席を外し、厨房に向かった。

(……さて)

厨房の前に立ち、いつも通りの手順で料理を進めていく。

(いつもより一人分、量は多めか)

どういふ訳かいつもよりもやる気になっている自分を感じながら。

第七章（7）：小さな決意

S i d e アイリ

簪さんが来てから初の夕食。我が家に一人の来客が来たこともあり、普段より少しだけ多い夕食が用意される、そのはずでした。

『全竜戦』の関係で皆さんが来ていることは知っていました。知っていましたか……」

そう、来客は一人。それ以外にいるのは私と兄さん、一夏、従者と
言う事になっている夜架さんの四人のはずでした。

そう、つまりは本来この食卓には5人のはずだったのですが——
「ルクス、今後の事なのだが夕食後にさっそく話し合いをしてもいいか?」

「あ、はい。僕は構いませんよ」

「あら、もちろんその話し合いは私達も参加でいいのよね?」

……独り占めはさせないわよリーシャ」

「わ、私は不埒な考えがあつて言っている訳では無いからな!」

「リ、リーシャ様落ち着いてください」

「ルクス、その話し合いは私も参加でいいですか?」

「あ、はいお願いしますセリス先輩」

「……これは今夜にもお世継ぎができるかもしれませぬね。」

大変良い傾向です」

「とか何とか言つてこの前ルクスのベッドに夜這い仕掛けた従者は何処のどいつだこのエロ娘!」

「あら、お情けを頂けるのでしたら頂きますわよ? 私だって主様の御子を身籠りたいですもの」

「来客の前で何言ってるの夜架!?!」

「ルーちゃん、今夜の夕食作つたのつて一夏君?」

「そうだよ、フィーちゃん。よくわかったね」

「ん、やつぱり……」

ルーちゃんの味じゃなくて一夏君の味だったから」

——なぜか他に四人ほど来られた方がいたために合計九人、一夏の

負担もほぼ倍に増えました。

さすがに配膳くらいは夜架さんも手伝ったみたいですが、それにしては賑やかです。我が家のテーブル席が全て埋まっています。これ以上の人数になったら最早立食しかありません。

「なんで皆さんこの家に来ているんですか……」

今までも無かったとは言えないことですが、やはりまだ当分慣れそうにはありません。

（そう、慣れないだけです。嫌っているなどでは決してありません。

ただ、慣れないだけなのです）

安眠できる日が減った気がしますが、そこはまあ、目を瞑っておくことにします。

「ん？」

私としてはただ単に今後のことを早いうちに話しておきたかっただけだが」

「……いつもそれ以外の話し合いに派生していきますよね」

リーシャ様は少しキョトンとした様子で言っていますが、いつも何かしらの話し合いに来てはしばらく真面目に話し合った後、主に私が夜寝辛くなる類の話し合いに派生したりすることが最近珍しくなくなってきました。

「宿に泊まったもどうせアルテリーゼしかないのだもの。メルはこっちに来るまでまだ日数掛かるし。」

だったら、ルクス君との仲を進展させた方がいいでしょう？ アルテリーゼも応援してくれてるし、折角だからお邪魔させてもらおうと思ってるね」

「ついに建前すら言わなくなってきましたか……」

今までは私に対して、まだ何かしらの建前を言っていた気がしますが、最近はついにそれすらなくなってきました。しかも、彼女のご実家関係も全面的に応援する方向とのことなので歯止めも期待できません。

「わ、私はルクスの補佐官として今後の話し合いを……」

「せめて最後まで言い淀まずに言ってください」

普段は、というか公的な場面ではとても頼りになるセリス先輩ですが、こと兄さん関係の事となると途端にポンコツになるのは相変わらずです。今回も後半以後はあらぬ妄想でもしたのか、言い淀んでいます。ムツツリです。もうどうしようもありません。

「久しぶりにお泊まりできる時間が取れたから泊まってきたさいつて、おねーちゃんが……」

「……そうですか」

「後、夜になったら押し倒しちやえって……」

「止めてください、切実に」

おそらくは無駄でしょうが、一応は言っておきます。最も、あの戦いが終わって以来この手のことを止めた例がありません。そもそも、お姉さんでもある学園長が全面的に応援しているのもありますが、本人も内心では多分、乗り気なのでしょうから止まる訳も無いというのは想像に難くないことなのですが。

「私はただ単に隙あらば主様の御情けを頂きたいだけですわ」

「もはや隠す気すらない……」

「というか、お客さんのいる状況で何を言っているんですか」

「偽らざる本音ですわ」

そしてもはや何を言っても無駄だと言わんばかりの返答を返すのが兄さんの従者兼護衛を務める夜架さん。兄さんの寢床に突撃する常習犯であるのは簪さんを除いたこの場にいる全員の共通認識なので、もう何を言っても聞かないことは分かっています。

相も変わらぬ喧騒に包まれる我が家の夕食の卓ですが、慣れたものでもあるので私から言う事は今となってはもうありません。

「……」

ですが、絶句している人もいました。簪さんです。

(まあ、驚きますすよね)

仮にも貴族位の人もいるのですが、余りにも自由な食事風景です。コース料理みたいに一品一品出てくるわけではなく最初から料理が並んでいる時点で格式も形式も無いのですから、今は気楽な食事です。そもそも一応は貴族位と言うだけで今現在はほぼプライベート、

無駄に肩ひじ張る必要ありません。

向こうでは貴族という制度自体が過去の物となっていているみたいですし、抱いていたイメージとかけ離れてでもいたのでしょうか。ですが、この食事を通して少しでも打ち解けてくれれば、とも思います。(……まあ、単に目の前の食事風景が持っているイメージとかけ離れすぎていて、軽いカルチャーショックを受けて驚いているだけの可能性もありますね)

とはいえ、簪さん自身の食事の手が止まったきりと言うわけでもないですし、あまり余計な心配をする必要はないでしょう。私自身もお腹が空いていたのでしばらくは黙って食事の手を進めます。

(後は、そうですね……)

明日以降のことでも頭の中で考えながら、今は食事に専念することになりました。

Side 簪

用意されたおかずをナイフで切り分けてからフォークにさし、一口食べてみる。

色々とおつて予想外な展開が多かったからか緊張も少なからず感じていたけれど、食べた瞬間に出たのは一言だけでした。

「……美味しい」

「あちらの料理に比べれば見劣りするのが情けないところだが。そう言ってもらえるのは嬉しいよ」

「そんなことないよ……本当にお世辞抜きで美味しい」

メインディッシュには私達の世界で言う、キッシュというおかずケーキに似た料理が出されていました。主に葉物とキノコを中心にした野菜と塩味の利いたベーコンを軽く炒めたものにクリームと卵を混ぜたものをパイ生地の中に入れて焼き上げた料理みたいで、野菜のおいしさとベーコンの旨味、塩味がクリームと卵のおかげで臭みや味の角も無く調和し、パイ生地のサクサク食感も食べていて幸せにな

れます。

それ以外にもスープやパンと言った料理が並べられていますが、そのどれもが美味しいです。

「……そう言えばさ」

「何だ」

一日と言う短い時間の中で色々な事が起きて、もはや今更になって気づいたことを特に深く考えずに口に出そうとして影内君に声をかけました。

嫌味一つ言わずに応じてくれた影内君に、そのまま続く内容を口にしていけます。

「えっと……ルクスさんって、男性なんだよね？」

「それは、当然……ああ、そういえば会ったのは何時ぞやのフランス戦の時だけだったな。」

あの時は性別誤魔化してたっけ……」

私の言いたいことが分かった影内君がその続きを言ってくれていました。

あの時は先入観も手伝って性別を間違えていましたが、今見れば男性だと当たり前のように理解できます。

「うん。色々あって気が動転してたから、なんか今更な話になっちゃったけど……」

「まあ、確かに色々あったからな。」

むしろ、ここまで落ち着いて食事していられるくらいには冷静になったという事だろう？」

影内君は私の事情や心情に配慮しつつ、相槌を返してくれました。「正直なところ、今すぐにはできることは限られているので落ち着いていただけると此方としても助かります」

そうして影内君と会話していると、今度はアイリさんが来ました。心なしか、少し疲れているようにも見えます。

「アイリさん？ 大丈夫……ですか？」

「心配ありませんよ。」

ただ、そう……お客様がいるのいつもの調子過ぎる皆さんに少し

「疲れただけです」

どこか遠いところを見つめながら話すその様子に、私はこれ以上この件をつつき回すのは止めようと思いました。誰にだって聞かれたくないことの二つや三つがあるのは実体験や友人の体験談です。嫌と言うほど知っているとこの方もあります。

「まあ、向こうの方だと色々強引なことをして機竜をISとして通している都合上、こちらから増援を送ろうとするとしてもそういう事を通す必要もあるんだ」

「下手に大きな騒ぎにすることはできませんけれど、だからと機竜使いとして腕のいい人を女性限定で探すとなると人員が限られてしまっね……」

影内君の言わんとすることもわかります。私達の世界からしてみても、異世界の存在やISを凌駕しうる装甲機竜の存在は、最悪を考えば白騎士事件以上の事態に発展しうる可能性も秘めています。異世界と言う私達の世界から見れば完全に未開の地であり、しかも価値観にも相違がある可能性があり、そして一般人にも分かりやすく脅威になりうるものが存在する。むしろ、本格的な衝突までどれくらいか猶予があるかの問題とも言えるかもしれません。

ですが、現実的に私達との協力関係が続けるとしても問題が山積み、と言う事はアイリさんが言っています。私がこの世界に来て出会い頭にあったあの襲撃者たちにしても男性でしたし、割合としては男性の方が多いか、大部分を占めるかといった状況なのかと思います。その中で女性の機竜使いで、なおかつ腕が立つとなればそれは希少な方たちであるのは想像に難くありません。

「その結果が、あの時の黒ローブなんです」

「そういう事になりますね。」

「終始性別を誤魔化したのも同じ理由です」

「無理を押し通すだけの理由はある、と言う事だ」

アイリさんと影内君の返事に、私は納得を覚えました。

ですが、同時に疑問に思う事もあります。

「……………」

ですが、そもそも出入口が限定されているなら最悪、その周辺を徹底的に警備すればある程度は防げるのではないのでしょうか？」

ふと、今までの説明に疑問を覚えました。今現在の状況から考えてそうする気が無いのはわかりますが、同時にそうしない理由もわかりません。ありがたいのは確かですが、国家単位で動いている以上は単純に善意だけで動いている、と言う事も無いでしょう。なにより、それだけでは納得しない人がいるのは多分、私達の世界でもこの世界でも変わらないと思っただけというのがあります。

「簡単に言いますと、そもそもその出入り口の発生条件が分かっている状況でしてね。」

警備を固めようにも、知らぬ間に出入口が増えている、なんて事態もあり得ないとは言えないのですよ」

「だから、知らぬ間にあちらの世界で幻神獣が大量増殖して、こちらの世界に把握していない出入口から大群になって押し寄せてくる、なんて事態だけは避けたいといけなくなってるな」

二人の説明に、少し考えました。

二人が嘘の説明をしているとは思っていませんが、だからこそ疑問に思う事も出てきます。

「……でも、私をこの世界に送った敵は」

「分かっています。人為的に、貴女を送り込んだかもしれないのですよね？」

私の言葉を、アイリさんが引き継いでくれました。今まさに言わんとした内容であったために、そのまま領いて言葉の続きを待ちます。

「簪を向こうの世界に送り返した後、更識会長にそれとなく調査を急ぐように進言してみますか？」

「そう……ですね。」

この話がどう判断されるかにもよりますが、いずれにせよ調査に関しては更識会長を頼るほかない現状ですしね」

今後の対応について二人で話し合っているみたいですが、私の関心は少し別なところにありました。

(……お姉ちゃんも、影内君やアイリさんのことを調べている。

でも、状況的にもう、『日本』がどうこう、と言う領域でもなくなつてきているかもしれない訳で……)

今現在、アイリさんたちの側を調べるのに具体的にどの程度の人員が割かれているのかななどを私は知りませんが、調べを進めているのは事実です。

(正直、明らかに調べるべきは『ウエイル・アーカディア』、そしてその人が所属していると思われる『亡国機業』について、のはず……) 私も頭の中で僅かばかりの情報を整理してまとめながら考えていきますが、その中で絶対的に情報が不足している部分があることに気づきました。

ですが、彼女の口ぶりにこの世界に関する何かを知っていることは確定的であるのは確信できることです。だから、少しでも

「あ、あの……影内君」

「……ん？ どうした？」

アイリさんと話し込みつつ用意した夕食を食べていた影内君は少し訝しみつつ、私の方を向いて聞き返してくれます。それはアイリさんも同様でした。

「その……『亡国六刑士』フアントム・サーヴァンツ、っていう名前には何か心当たりはある？」

私の質問に、影内君は少し苦い顔をしながら答えてくれました。

「……昔、といっても数年ほど前の事なんだが。」

この世界に存在する国家の一つであるハイブルグ共和国と云うところが擁していた、向こうの世界の言葉でわかりやすく言えば特殊部隊みたいな立ち位置だった奴らの名前が『六刑士』サーヴァンツだった」

「おそらくですが、あの国が改革しているドサクサに紛れてあちら側に渡った可能性が高いですね。あるいは、それ以前の事か……」

彼女たちの返答に、やっぱりこの世界の関係者だったのかな、と思いつつある確信も深めました。

(……うん、まず彼女たちしか握っていない情報があつて、それは私達も同じになっている。

でも、敵の事を考えると……)

——この時、彼女は決意した。彼女にとってはとてもとても小さな

勇気のいる事を。

S i d e ルクス

「そう言えば、ルクス。」

もし全竜戦と彼女の滞在の日程が被ったらどうする?」

切欠は些細なことで、リーシャ様が何の気無しに言ったのだろう一言だった。

「……そうですね。」

今現在は僕かアイリと一緒にいてもらう方向で行こうかなと思っ
ています」

そこまで深く考えていたわけではないけれど、当初の方針では二人のうちどちらかと同行することになっていた。全竜戦の時はアイリは学園在学にはなるけれど試合に参加することはまずないし、その気になればどうこうすることもできなくはなかった。

一夏は参加するから、アイリと同行できない時は僕の方で預かるつもりだった。

「……ルクス。」

ないとは思いますが、万が一、各国の重鎮にでも話しかけられた時はどうしますか?」

ないとは思いますが、の部分に妙な実感が籠っていた当たり、セリス先輩も同じ顔を思い浮かべていそうな気がした。

(……シングレン卿は来そうだなあ)

その光景がありありと想像でき過ぎて妙な笑いが出てきそうになったけれど、現実的な問題として簪さんがシングレン卿に目を付けられてしまうような事態は避けたかった。

(……向こうの世界の事はこの前の七竜騎聖の会議があったから知っているにしても、どんな口実で向こうの世界とどんな関係を築こうとしているのかがまだ分からないからなあ……)

嘗ての大戦では色々あったけれど、今でもあの人は機竜使いの力

が作り上げる世界を諦めてはいない。今でこそ一時期よりは落ち着いてはいるけれど、簪さんの負担を考えるとそれでも不安は残った。

「……私かメル、アルテリーゼの誰かと一緒にいてもそこは変わらないさそうね。」

何処かで来るかもしれないけれど、その可能性を先送りにできそうなのと一緒にいるのが現状でできる最善策かしら?」

「可能なら、その人もある程度の立場ある人であることが望ましいですわね」

全竜戦の時に簪さんに立場ある誰かと居てもらった方がいいのではないかと言う方向に話が進みだしたとき、意外と言えば意外な人が意見を出していた。

「……お姉ちゃんは?」

その言葉を口にしたのはフィーちゃんだった。

「……お姉ちゃんなら、此処にいる人全員とも接点があるし、何かの理由で会いに行ってもそこまでおかしくないと思う。」

それに、私か誰かがずっと護衛につくことになっているから……」
言われた内容を、ひとまずこの場だけで吟味する。

(……確かに、利は多いかな。)

それに、シンダレン卿も貴賓席に来ることはあっても一応は相手国の総責任者のところに直接来ることは……ないとは言いついてはいいけれど、直接の所属じゃなくなった僕らよりは低いかな)

この際、簪さんに全竜戦やそれを通しての機竜の情報のある程度の漏洩は致し方ない部分があるにせよ、今日みたいなところで悪印象を持たれるのは避けられたかった。

「……ルクス、私はいいい案だと思うのですが?」

最初に意見を言ったのはセリス先輩だった。

「私としても賛成だ。」

貴賓席で貴族連中の挨拶攻めにされるのも面倒だろう」

ついで同意の意を示したのはリーシャ様だった。後半は立場的に問題かもしれない発言があったけれど、そこはこの場限りと言う事で聞かなかったことにしておく。

「うん……じゃあ、フィーちゃん。」

出来るだけ早いうちに」

「うん、分かった。」

明日は空いているって聞いてるから、朝一に行ってくるね」

フィーちゃんはすぐに頷いてくれると、朝一で行ってくれることを了承してくれた。

「簪さん」

となれば、後は本人に了承をとるだけ。

「私は、基本的にそちらの指示に従います。」

分からないことの方が多すぎますので……」

簪さんも内容を聞いていたのか、特に深く聞かずに頷いてくれた。

となれば、後は僕らで進めることを進めるだけだ。

S i d e 一夏

後日、本来なら通う事になっていたはずの王立士官学校に簪、アイリさんと共に足を運んでいた。

「ここが、王立士官学校ですよ」

「あちらみたいに各国の合同で設立している訳では無く、アティスマータ新王国の教育機関、という違いがあるがな。」

それと、あちらは防衛を教師部隊が担っていたけれど、こっちは一般的な事情で騎士団シヴァレスについていう学生の中でも腕が認められた人で構成された部隊も担っているってことか」

久方ぶりに来てみると、思っていたより懐かしい気持ちも強かった。

（まだ1年も経っていないんだけどな……）

最後に来たのはISの世界に赴く数日前だから、まだ半年も経っていないはずである。だが、妙な懐かしさも感じていた。

「騎士団、って？」

「先ほども言った通り、教師陣が何らかの理由で即応できない時にそ

の初動対応やそのほかの一般生徒の防衛、場合によっては有事の際の戦力として召集されることもある人たちですよ。

学生の中でも特に腕の秀でた人たちで構成されています。時には神装機竜を持つ人が所属していることもあります。訓練場の都合などを多少優遇してくれたり一般生徒より機竜の使用に関する権限が認められていたりしますが、その分、危険性も跳ね上がりますね」

俺の方でした簡単な説明の中で出た単語に興味を引かれたのか、簪が追加で質問していた。特に答えて困るような内容でもなかったために、アイリさんもその質問に答えている。

「まずはレリイさんに挨拶ですよ？」

一応、最初は学園長でもあるレリイさんに挨拶することになっているので、その確認だけしておくことにした。

アイリさんもそのことを分かっているので特にとがめられることも無く、少し考えながら答えてくれた。

「ですね。一夏、簪さんの案内をよろしくお願いしますね。

妙な絡み方をしてくるような人はさすがにいないと思いますが、何かトラブルがあつてからでは遅いですから」

「委細了解しました」

元々言われていたことであるが、改めてこの場で言われると気が引き締まる思いがした。そのまま先導しつつ、正門を開けていく。

休日の昼頃に来たこともあつて、人影はまばらであり多くない。が、そのような人たちはほぼ例外なくこちらを見つめていた。

(今の騎士団の人たちか)

そのような態度から、見慣れない服装で入ってくる簪の存在を若干ではあるが警戒したのだろう。過去、この学園の内部に他国のスパイが入っていたことを体験談として知っている身としては、そのような警戒をしている人たちがいることはむしろ喜ばしくすら思えた。その対象が簪であるという事実には少しばかり思うところはあがるが、そこは騎士団や学院側の立場もわかるので何も言わない。

「あ……あの……」

人目が途切れたあたりで簪が、少し声を小さくしつつ遠慮がちに話

しかけてきた。

「どうしましたか？」

アイリさんが簪の方を向きながらそう言葉を返す。簪もどう言おうかと少し口ごもっていたが、意を決したのか

「その……気のせいかもしれないんですけど、少し視線が気になっ
てしまいました……」

簪も視線にはどうやら気付いていたようで、少し居心地悪そうにしていた。

「すいません。」

以前スパイ騒ぎがあったので、見慣れない服装の人には少し警戒心を持つている人も少なくないんです。ですが、私か一夏が同行していれば大きな問題にはならないと思うので、基本的に私達と一緒にいてください」

「そ、そうですか……」

そうこうと話をしつつ歩を進めていくと、学園長室が見えてくる。

「二人とも、もうすぐ学園長室につきます」

アイリさんには今更言うまでもないが、簪は考えるまでもなく初めてここに来るので一応声をかけておく。心構えの準備にでもなればと思つての事だ。

「ええ、分かっていますよ」

アイリさんも分かっているのか、落ち着いた様子で返事してくれていた。

「わ、分かりました！」

肝心の簪は緊張のためか、声が固く上ずっている。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だ」

「ええ。」

学園長のレイイさんには急ではありませんでしたが一応話は通してあるはずですし、私達もいますから」

流星に過度の緊張が見られたため、学園長室の扉をくぐる前に少しばかりの会話を挟んで緊張を可能な限りほぐしておくことにした。アイリさんも話しかけており、少しばかり簪も落ち着いてきたように

見える。

その様子を見計らって、学園長室の扉に手をかけた。

S i d e アイリ

王立士官学校についてからまず真つ先に向かった学園長室、その扉を一夏に開けてもらってからくぐるとある意味で見慣れた人が座っていました。

「さて、久しぶりね二人とも。」

それと、ようこそ。更識簪さん、で合っていたわよね？」

「は、はい。」

更識簪です、よろしく願います」

「はい。よろしく願いますね」

まずは私達の方を見て軽く挨拶し、そのまま簪さんの方を向きしました。

朝一でフィルフィさんが事情を伝えていたこともあり、レイイさんは落ち着きながら話しています。半面、簪さんは先ほどよりはよくなっています、それでもまだ緊張が見られました。

「そう緊張しなくてもいいわよ。」

もう言われていると思うけど、私が学園長のレイイ・アイングラムよ。全竜戦の時はよろしくね」

にこやかに挨拶したレイイさんと、私と一夏が付き添っている緊張した面持ちのままの簪さん。

これが、二人の初対面でした。